那谷金比羅山古墳
那谷金比羅山窯跡群

1989

石川県立埋蔵文化財センター

那谷金比羅山古墳
那谷金比羅山窯跡群

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は那谷金比羅山(なたこんぴらやま) 古墳・那谷金比羅山窯跡群の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は小松市那谷町地内である。

3　調査要因は、石川県農林水産部が所管する県営公害防除特別土地改良事業で、同部耕地整備課が石川県立埋蔵文化財センターに発掘調査を依頼したものである。

4　調査に係る費用は、石川県農林水産部耕地整備課が負担した。

5　現地調査に係る期間・面積・担当は下記のとおりである。

第1次調査

期　間　昭和57年(1982)7月１日～同年10月31日

面　積　2,500㎡

担　当　石川県立埋蔵文化財センター主事 浜野伸雄

補助員　杉野洋一郎

第2次調査

期　間　昭和58年(1983)4月25日～同年9月6日

面　積　2,000㎡

担　当　石川県立埋蔵文化財センター主事 浜野伸雄

補助員　田中孝典・松山和彦

第3次調査

期　間　昭和59年(1984)5月1日～同年12月20日

面　積　4,500㎡

担　当　石川県立埋蔵文化財センター主事 福島正実・山本直人

補助員　石田和彦・浜崎悟司・本田秀生

6　本書の執筆分担は次の通りである。

第1章・第2章　三浦純夫

第3章　伊藤雅文

第4章　第1節　三浦、第2節　川畑　誠

7　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 方位は座標北であり、座標は建設省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

(2) 水平基準は海抜高であり、T.P.(東京湾平均海面標高) による。

(3) 遺物番号は挿図・観察表・写真に符合する。

目　　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4

第３章　那谷金比羅山古墳 …… 7

第１節　立地と墳丘 …… 7
第２節　埋葬施設 …… 10
第３節　出土遺物 …… 16
第４節　小結 …… 18

第４章　那谷金比羅山窯跡群 …… 19

第１節　遺構 …… 19
1. 概要 …… 19
2. 須恵器窯 …… 19
3. 竪穴状遺構 …… 23
第２節　出土遺物 …… 69
1. 概要 …… 69
2. 4号窯 …… 69
3. 1号窯 …… 81
4. 6号窯 …… 87
5. 11号窯 …… 93
6. 7-1号窯 …… 101
7. 7-1・2号窯灰原 …… 105
8. 7-2号窯 …… 109
9. 8号窯 …… 116
10. 5号窯 …… 120
11. 10号窯 …… 123
12. 5・10号窯灰原 …… 125
13. 2号窯 …… 131
14. その他の遺構 …… 140
15. 包含層、陶棺、円面硯、土馬等 …… 142
16. 小結 …… 152

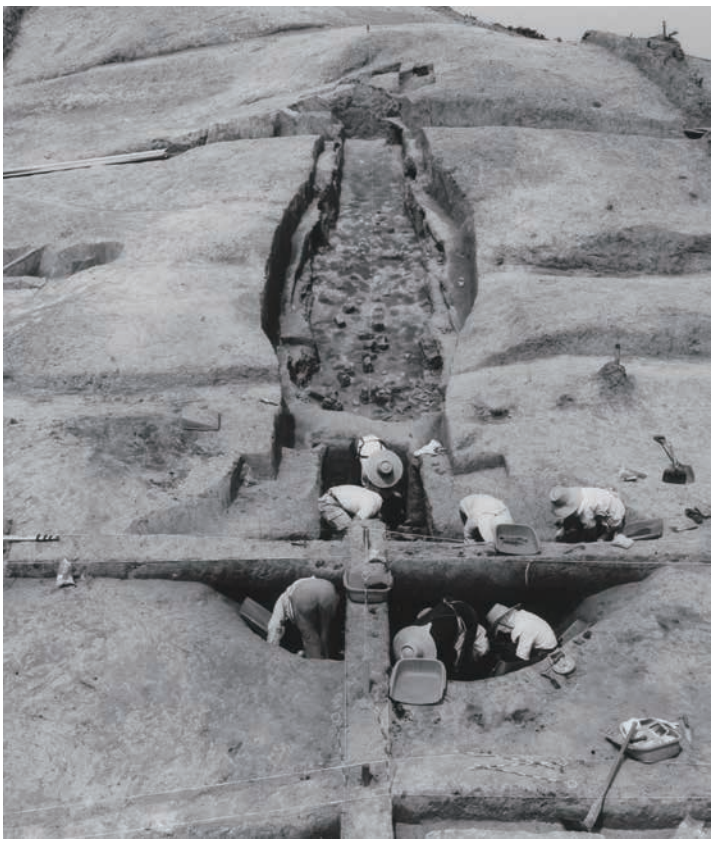
第１章　調査の経緯と経過

本遺跡の発掘調査は県営公害防除特別土地改良事業（梯川流域地区）に使用する客土用土砂の採取に係るものである。この事業は、小松市尾小屋町に存在した尾小屋鉱山の排出水に含まれていたカドミウムが梯川流域の農用地を汚染したため、客土をして土地改良することを目的とするものである。発掘調査を行った小松市那谷地域は客土採取地に選定され、那谷丘陵に存在する遺跡が影響を受けることになったのである。

工事に先立ち、石川県農林水産部耕地整備課長は昭和57年5日4日付けで石川県立埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）に対し、小松市那谷町地内における埋蔵文化財の分布調査および発掘調査を依頼した。内容は、約30,000㎡の分布調査と存在が予測される複数の窯跡の発掘調査である。埋蔵文化財センターは、同年5月15日～6月30日に分布調査を実施し、事業地内に10 基前後の須恵器窯跡が存在することを確認し、耕地整備課長あて回答した。その結果、工事の影響が及ぶ範囲について発掘調査を実施することとなり、埋蔵文化財センターが担当することとなった。なお、昭和57年9月9日付けで、追加の客土採取予定地約13,000㎡について分布調査依頼を受け、同年9月27日から29日まで実施したが、この範囲には埋蔵文化財は確認されなかった。発掘調査は例言の通り、昭和58年・59年にも実施した。

金比羅山遠景（東から）

第1次調査は、1号窯～3号窯を対象とした。１号窯は金比羅山西側斜面の中腹に築かれた須恵器窯で、全長15mを超える大型の窖窯である。2号窯は金比羅山の北西斜面に築かれており、全長は約9m



4号窯調査風景

である。焚口付近から焼成不良の須恵器が大量に出たほか、前庭部から陶馬も出土している。3号窯は山裾で検出したもので、操業の形跡が認められず遺物は確認できなかった。

第2次調査は、前年度の分布調査にもとづき金比羅山の南西地区を発掘対象とした。4号窯および那谷金比羅山古墳の調査である。4号窯は、１号窯同様西斜面に築かれている。遺存状態は良く、煙出しや燃焼部の天井も残っている。

那谷金比羅山古墳は径10mに満たない小型円墳で、横口式石槨を内蔵する終末期古墳である。墳丘は流出しており石槨のみ遺存していた。周溝は背後にのみ確認できる。石槨からの遺物はないが、前庭付近から須恵器杯蓋の小片が出ている。この横口式石槨は、第2次調査終了後石川県立埋蔵文化財センターへ搬入し、復元・展示を行っている。

第3次調査は、第1・2次調査箇所の中間区域である金比羅山の南斜面を対象に、5・6・7-1・7-2・8・9・10・11号窯の8基を発掘した。また、6・7号窯間の狭い平坦面では竪穴状遺構を検出した。

以上、3次に及ぶ発掘調査で確認したのは、1基の古墳と12基の須恵器窯、１基の竪穴状遺構である。12基の窯のうち2基は操業に到っていない。

なお、第3次調査で8号窯周辺から「与野評」ではじまり6行に及ぶ文字を刻んだ須恵器平瓶が出土した。7世紀後半の製作とみられるもので、加賀における「評」制の施行を明らかにし、「江沼郡」以前に「与野評」が存在したことを示す重要な資料であることから、昭和59年8月6日に記者発表を行った。

本遺跡の発掘調査に関して次の概要報告を刊行している。

浜野伸雄1983「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『拓影第13号』石川県立埋蔵文化財センター。福島正実1984「那谷金比羅山窯跡群第3次調査と銘文須恵器」『拓影 第16号』石川県立埋蔵文化財センター。福島正実1985「那谷金比羅山窯跡群」『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』石川県立埋蔵文化財センター。

出土遺物の整理は、社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託して下記の通り実施した。

昭和57年度　洗浄（第1次調査分）
昭和58年度　洗浄（第2次調査分）
昭和59年度　洗浄（第3次調査分）
昭和60年度　記名・分類・接合・復元・実測・トレース
昭和61年度　記名・分類・接合・復元・実測・トレース

第１図　金比羅山地形図と工事範囲（S＝1/2,000）
（アミかけ部分が工事範囲）

第２章　遺跡の位置と環境

那谷金比羅山古墳・那谷金比羅山窯跡群は小松市那谷町9部1・2・3、通称金比羅山に所在する。那谷金比羅山古墳は古墳時代終末期の古墳、那谷金比羅山窯跡群は古墳時代後期の須恵器窯跡群である。

小松市は石川県の南西部に位置しており、北に手取川、南に今江・木場・柴山潟の加賀三湖、東に能美・江沼丘陵、西には小松砂丘・日本海がある。本遺跡が立地する小松市南東部の丘陵は、標高40mから100mの低丘陵で、小松市戸津町・林町から加賀市松山町にかけての那谷丘陵には南加賀窯跡群と呼ばれる石川県内最大規模の窯業地帯が存在する。ここでは須恵器・土師器・埴輪・陶器などが生産されており、古代から中世にかけて江沼・能美両郡に製品を供給してきた。

南加賀窯跡群は須恵器生産を主体とするが、土師器、埴輪、瓦も生産されている。操業が始まるのは6世紀で、二ツ梨殿様池窯跡、同豆岡山窯跡群があげられる。二ツ梨殿様池窯跡では須恵器とともに埴輪が焼成されており、矢田野エジリ古墳をはじめとする三湖台古墳群に供給されている。6世紀後半になると動橋川流域で操業が始まり、本窯や那谷桃の木山窯跡、分校窯跡群などがこの地区に含まれる。7世紀に入ると林窯跡群、戸津六字ヶ丘窯跡群が出現する。8世紀に入ると、戸津オオダニ地区、二ツ梨オオダニ地区で生産が始まり、9世紀には馬場川流域で生産が始まる。南加賀窯跡群の須恵器生産は10世紀中頃に戸津オオダニ地区で終焉を迎える。

窯跡群とともに石川県内において最大規模で分布するのが南加賀製鉄遺跡群である。南は加賀市箱宮町、北は小松市東山町まで広がっており、小松市戸津町・二ツ梨町では須恵器窯の分布と重複している。生産が始まるのは7世紀後半で、12世紀前半まで続いている。窯の形態は、木炭窯、箱型炉、竪型炉である。

集落遺跡を見ると、動橋川流域に勅使遺跡・分校Ａ遺跡・分校Ｂ遺跡が存在するが、様相は明らかではない。

東部丘陵の南西端では古墳時代前期から後期まで古墳が造営されている。前期古墳では、北側の沖積地に面して分校カン山古墳群、分校チャカ山古墳群が営まれる。前者では前方後円墳、円墳、方墳が築造されている。群中最も大きいのは前方後円墳の分校カン山１号墳で、全長37mを測る。発掘調査が行われ、方格規矩鏡四神鏡一面のほか鉄斧・管玉などが確認された。4世紀前半の築造と推定され、南加賀最古の前方後円墳に位置付けられている。中期では松山古墳群が営まれ、後期になると法皇山横穴墓群、栄谷丸山横穴墓群が出現する。法皇山横穴墓群は、凝灰岩からなる丘陵に築かれたもので、6世紀後半に始まり7世紀後半まで続いている。総数は全山で100基以上に及ぶと見られる。被葬者は村長層とその家族とみられ、累世的に営まれた家族墓の様相を見ることができる。終末期になると本書で報告する那谷金比羅山古墳が出現する。8世紀初めに築かれた円墳で、北陸で唯一の横口式石槨を内蔵しており、畿内の横口式石槨内蔵古墳との関連が想起される。

参考文献

加賀市教育委員会　1975 『法皇山横穴古墳群』

石川考古学研究会　1978 『石川考古学研究会々誌 第21号』

小松市教育委員会　1979 『南加賀古窯跡群詳細分布調査事業報告書』

浜野伸雄　1983 「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『拓影 第13号』 石川県立埋蔵文化財センター

第２図　遺跡分布図（S＝1/25,000）

第１表　遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	内容
1	那谷金比羅山古墳・那谷金比羅山窯跡群	小松市那谷町	古墳・窯跡	古墳	古墳１基、須恵器窯 12 基
2	那谷桃の木山窯跡	小松市那谷町	窯跡	奈良	須恵器窯１基、土師器窯１基
3	箱宮窯跡群	加賀市箱宮町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯８基
4	矢田野長尾山遺跡	小松市矢田野町	窯跡･製鉄跡	古代・中世	
5	二ツ谷釜谷窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯３基
6	矢田野向山窯跡	小松市矢田野町	窯跡	奈良	須恵器窯１基
7	二ツ梨脇釜窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良	須恵器窯１基
8	二ツ梨東山窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・奈良	須恵器窯
9	二ツ梨横川窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良	須恵器窯
10	二ツ梨カセイデ窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯２基
11	二ツ梨丸山窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳	須恵器窯
12	二ツ梨峠山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・奈良	須恵器窯６基
13	二ツ梨サンマイダニ窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	平安	須恵器窯５基
14	上荒屋窯跡群	小松市上荒屋町	窯跡	奈良	須恵器窯２基
15	二ツ梨殿様池窯跡	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・平安	須恵器・埴輪兼業窯、土師器窯
16	二ツ梨豆岡山向山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯５基。瓦・硯も焼成
17	二ツ梨豆岡山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	古墳・平安	須恵器窯４基
18	二ツ梨一貫山窯跡群	小松市二ツ梨町	窯跡	奈良・平安	須恵器窯・土師器窯 10 基以上
19	那谷横穴墓群	小松市那谷町	横穴墓	古墳	横穴墓６基
20	矢田野横穴群	小松市矢田野町	横穴墓	古墳	横穴墓２基
21	分校カン山古墳群	加賀市分校町	古墳	古墳	古墳 19 基
22	分校チャカ山古墳群	加賀市分校町	古墳	古墳	古墳 18 基
23	松山古墳群	加賀市松山町	古墳	古墳	古墳５基
24	松山東古墳群	加賀市松山町	古墳	古墳	古墳４基
25	分校古墳群	加賀市分校町	古墳	古墳	古墳７基
26	栄谷丸山横穴墓群	加賀市栄谷町	横穴墓	古墳	横穴墓 12 基
27	法皇山横穴墓群	加賀市勅使町	横穴墓	古墳	横穴墓 76 基
28	分校窯跡群	加賀市分校町	窯跡	古墳	須恵器窯５基
29	松山窯跡群	加賀市松山町	窯跡	古墳	須恵器窯３基
30	勅使遺跡	加賀市勅使町	集落跡	古代・中世	
31	分校Ａ遺跡	加賀市分校町	散布地	古墳	
32	分校Ｂ遺跡	加賀市分校町	散布地	平安	
33	分校高山古墳	加賀市分校町	古墳	古墳	前方後円墳

第３章　那谷金比羅山古墳

第１節　立地と墳丘

那谷金比羅山古墳は終末期古墳に特有な、いわゆる「山よせ」に作られている。古墳と那谷金比羅山窯跡群が作られた丘陵には東西の二つの高まりが存在し、窯跡の多くが東側の高まりの西側斜面に展開するのに対し、古墳は西側の高まりの南斜面に作られている。水田面標高が15m前後、西側の丘陵頂部が約40mであるので、標高22mから25mの位置にある古墳は丘陵の下位に位置していることになる。したがって、現前に広がる動橋川支流の那谷川がつくりだす狭長な平野への眺望は期待できないとともに、平野からの視認も期待できない。

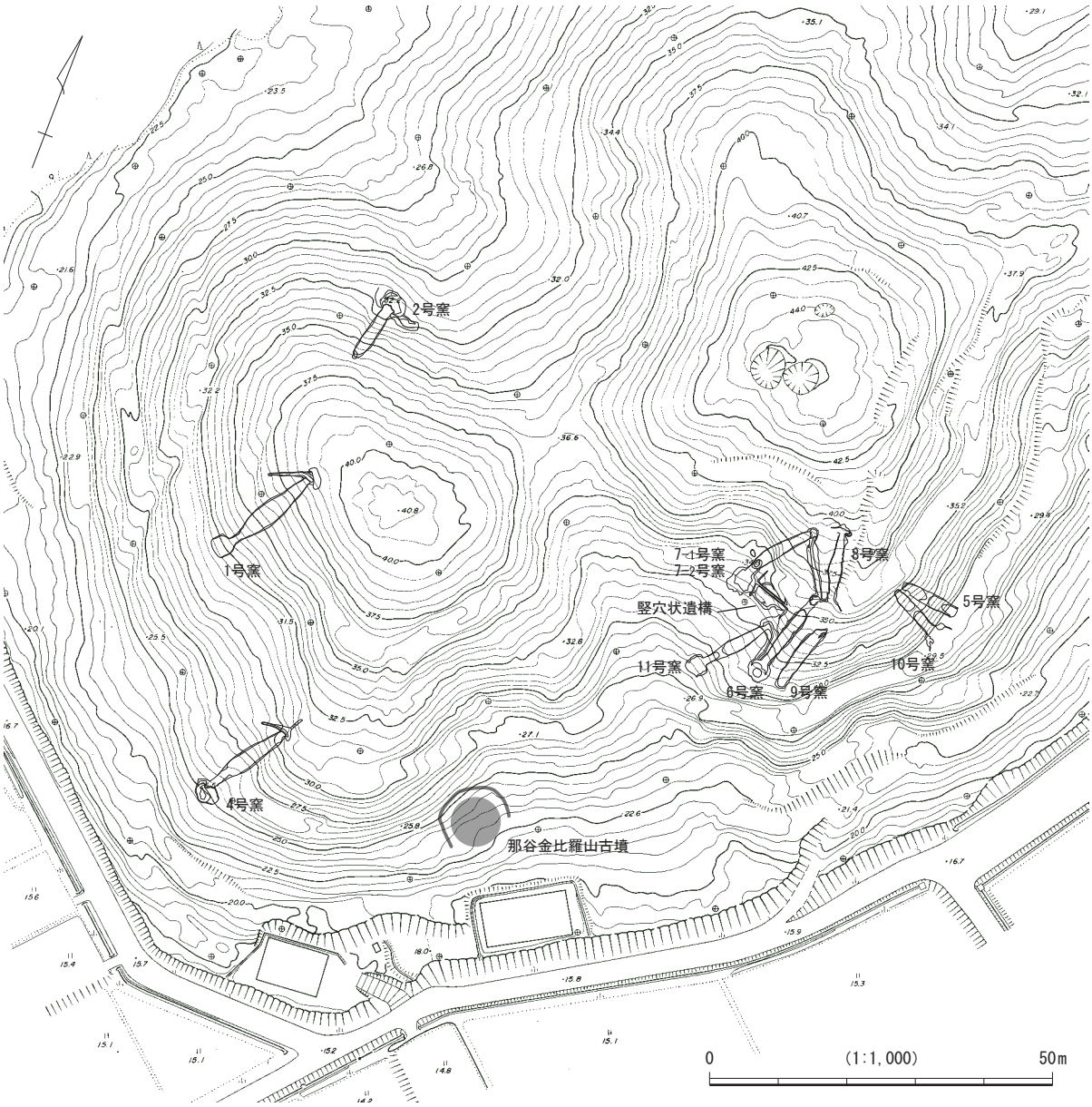
丘陵西の高まりから南南西方向に延びる尾根筋があり、丘陵の南西コーナーを作っている。東西の高まりの鞍部を頂点とする谷は浅く、南南西に延びる尾根筋との間にさらに小さな尾根を作っているが、墳丘が構築されている標高22～24mの高さでは尾根筋が不明確となって緩斜面となっている。丘陵の東の高まりから南に延びる尾根筋がこの緩斜面を遮るように延びている。このような地形的特徴から、この東の尾根筋に6～9、11号窯跡が作られているわけだが、古墳から見た場合、この尾根が古墳の墓域東限として意識されていたと思われる。一方の西については明確な境界を示す地形的な特徴は見出し難く、強いてあげれば南南西に延びる尾根筋がそれに該当しよう。

墳丘背後の斜面は標高25～30mで傾斜が緩やかになっており、東西約40m、南北30m弱の範囲で緩斜面の平場のような観を呈しており狭い。このような空間の西北隅に接するように墳丘が位置している。後述するが、墳丘の南半分が盛土によって構築されている可能性が考えられ、この盛土が墳丘のみならず平場全体に施工されていると考えることもできよう。つまり、古墳祭祀に必要な範囲が墓域として意識され、盛土が施されたのである。

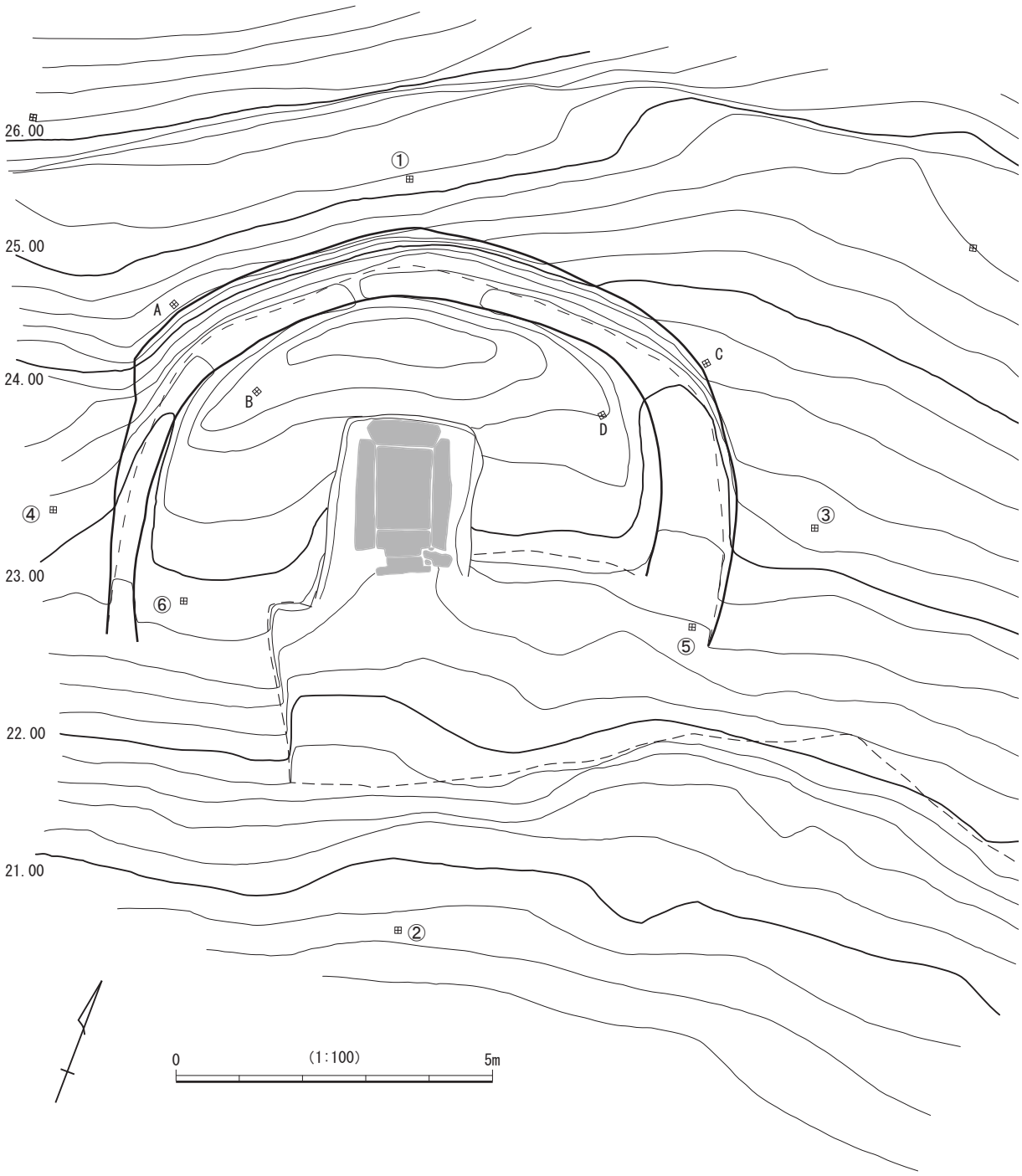
調査当初、墳丘としての高まりは認識されておらず、重機による表土除去によって円弧を描く周溝と「コ」字にみえる石槨が検出されるにおよび古墳と判明した。丘陵での調査ということもあって、基盤層である地山まで下げる意識があったと思われ、古墳の南半分の土層が撹乱と認識されていた。そのために撹乱と認識された土が除去された状態で調査完了時の墳丘測量図を作成している。この撹乱と認識された土質の記録は残っていない。調査時の写真には石槨玄門から「ハ」字にひらく三石からなる石列があり、それが石槨床面と連続するように観察されるので、一体的な構築物と考えることもできる。このように解釈すれば、撹乱と認識された土は古墳構築に伴う整地土の可能性が高くなる。本報告では撹乱かどうか判断できない。

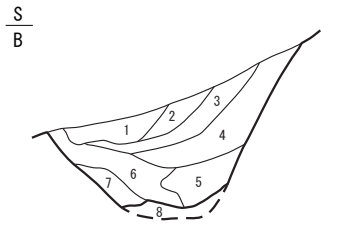
調査では墳丘の盛土は確認できなかったし、その認識もなかった。直径約8mの円墳に、山側に最大幅2mの周溝がめぐる。山側の周溝底の標高が23.28mで、山側の検出位置からすれば1.5mほどの深さとなる。周溝土層断面から見れば墳丘との接点の造作があまく、墳丘裾が明確に作られていない。調査後の墳丘裾平面形が直線的な部分を含む円弧を呈しており、平面形だけ見れば多角形のように見える。しかし、以下の点で、円墳と判断した。

周溝には、石槨背後を中心に西に1本、東に2本の土層観察アゼが設定されており、掘削に合わせてアゼが外されていった。石槨背後のアゼを境に次のアゼまで直線的な墳丘ラインを見せており、掘削者の無意識の手の動きが直線を志向していたものと考えられる。仮に直線を志向した墳丘形を作るためには裾を明確に、すなわち周溝と墳丘の区別を明らかにする意識が必要であり、不明確な墳丘裾状

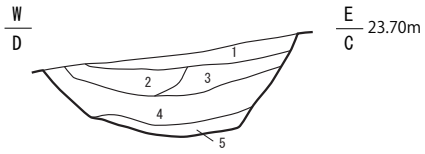


第3図　墳丘位置図（S=1/1000）と検出時の古墳





1 暗黒色粘質土（炭化物含む）
2 濁灰色粘質土
3 黄灰色粘質土
4 黄褐色粘質土
5 赤褐色粘質土（層のしまり悪くばらつく）
6 黄灰色混砂粘質土（若干炭化物含む）
7 赤褐色粘質土
8 地山土（黄色砂質土）



1 茶色粘質土
2 暗黒色粘質土（炭化物含む）
3 濁灰色粘質土
4 黄褐色粘性土
5 黄色粘性土

0 (1:50) 2m

第4図　墳丘図（S=1/100）・周溝断面図（S=1/50）

況にあっては多角形をつくることは難しい。

現状で確認された周溝底の最高所は石槨背後になり周溝の東西で22.80ｍまで遺存している。おおむね墳丘の中ほどにあたり、約4ｍで60㎝の高さが減じるように、緩やかな傾斜である。検出された周溝はどこの部位でも石槨床面より周溝底が低くなることはないようで、おそらくすでに失われた南の墳丘裾の位置で高低差が解消されるものと想定できよう。

石槨背後の周溝は墳丘からの土砂の流入は見られず。山側からの緩慢な堆積状況が見て取れる。それは、周溝底から約50㎝の厚みで暗灰褐色粘質土があり、土壌化が進んでいることから容易に理解できる。西45度のアゼでは墳丘からの流土である赤褐色粘質土がわずかにみられ、同系土と思われる土層が約20㎝の厚みで見られる。東45度のアゼでも溝底から20㎝の厚みで土壌化した層が見られ、安定した堆積である。この堆積後に墳丘の破壊が及んだようで、石槨背後アゼの4層（黄褐色混砂粘性土）が削平された墳丘の上に覆っていることからわかる。これより上部の土層は炭化物を多く含むものが見られるなど、地形の高い方から流入する土砂によって漸次埋積したものである。したがって、石槨背後の周溝内の埋土には墳丘側からの土砂の流入はなく、そのためにこの周辺からの遺物の出土はわずかに№18の須恵器堤瓶小片のみである。

周溝からの遺物は、石槨背後の東西45度付近から小破片となった土器が多数出土している。いずれも周溝底からかなり浮いた状態で出土しており、古墳に直接伴う遺物であるかどうか明確な根拠はないが、同時代の窯の操業がないことから古墳に伴う遺物である蓋然性が高い。西45度では№19～21が須恵器壺の体部片で、より具体的な器種は不明、東45度では№15が須恵器壺体部片、№16が須恵器甕体部片と片口状の鉢口縁片、№17が須恵器杯身片2個体分と壺体部片とかなりの小破片となって出土している。また、東側周溝の南端には石槨材小片が0.5×1ｍの範囲で広がっており、その破壊に伴うものであろう。須恵器の器種が杯・堤瓶・壺・甕と多様で極めて小破片であること、および石槨破片を含まないことからすれば、これらの遺物が石槨内にあった可能性は低い。

第２節　埋葬施設

南に開口する横口式石槨である。石槨主軸は、磁北から22度西に傾いており、真北からでは29度西に振れていることになり、南に指向する方向性は認められるものの、西日本各地の横口式石槨に比べて、真南北への厳密性は認められない。なお、石槨の左右は奥壁から見た場合である。

調査時の認識では、撹乱等による石槨の破壊によって横口式石槨の玄室部のみ築造当初の姿を残している、であった。石槨入口から約45度の角度で開く3石からなる石列が東側に存在する。この位置は調査時に石槨破壊時ないしはそれ以降に手が加えられた撹乱と認識された土層中にある。すなわちこれと同一層と認識した三つの石列は築造当初にないものと判断された。しかし、以下にあげる根拠から築造時の姿、すなわち「ハ」字に広がる前庭部を構成する構造を示唆する可能性も考えられる。

①三石の石材が切石のような形状を呈する

②三石の面がほぼそろっている

③三石のうち中央石材が南の石材に荷重がかかるように組まれている

④三石下面標高の記録はないが、隣接する土器№4が22.595ｍで床面標高22.597ｍと同じである

⑤石槨玄室掘り形がその相似形を呈しており、玄門付近から西側の掘り形が広がる

玄室部のみ遺存し、奥壁1石、左右の側壁各1石からなり、床石がこれら石材の内側にある。すなわち床石の上に奥・側壁がのらない構造である。床石は現状で3石からなり、奥側が最も大きく、玄門部周辺が2石である。玄門部には失われた部材があり「門柱石」と仮称する。したがって、門柱石まで

周溝西側

周溝東側

No.18

No.19

No.20

No.21

No.17

No.16

No.15

No.14

No.13

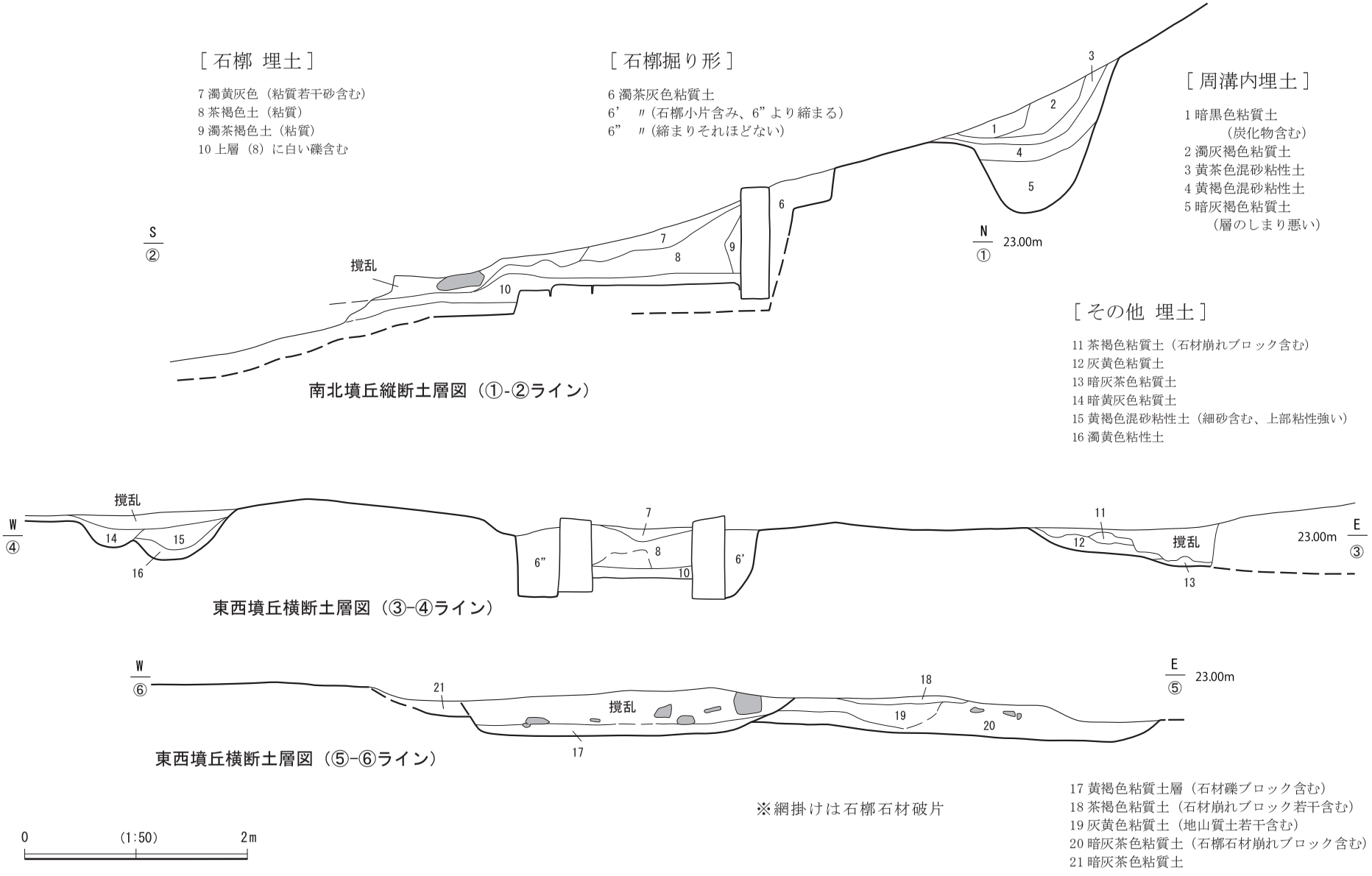
0 (1:40) 1m

石槨破片

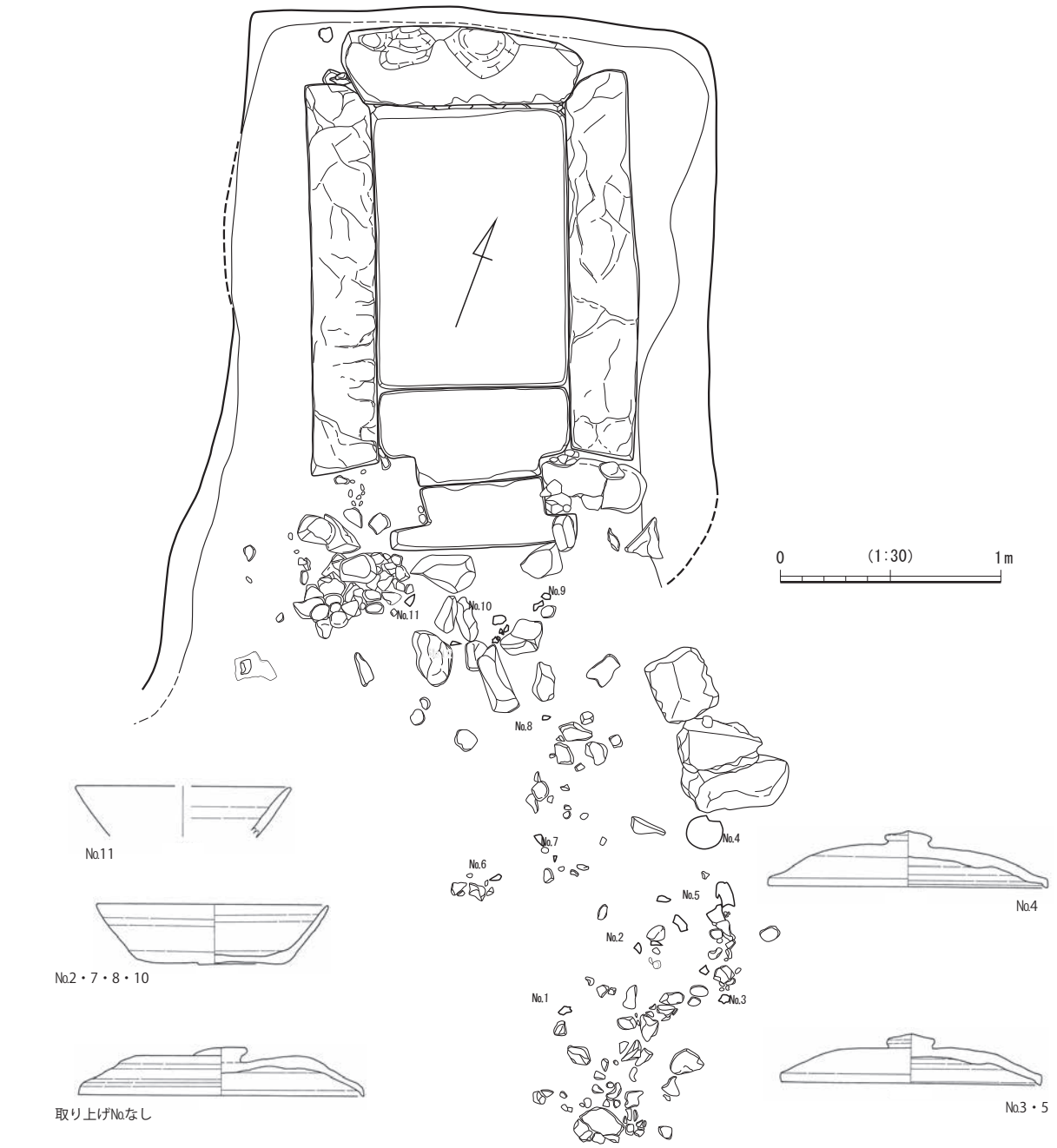
No.19 ～ 21 出土状況写真

No.15 ～ 17 出土状況写真

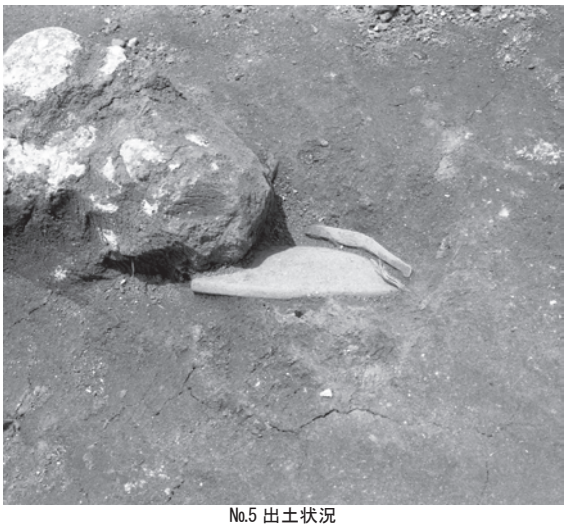
第5図　周溝遺物出土状況図（S=1/40）



第6図 墳丘断面図（S=1/50）



No.4 出土状況



No.5 出土状況

第7図　石槨と遺物・石材出土状況（S=1/30）

を「玄室」とし、門柱石部を「玄門」それよりも開口部側を「前庭」という語を用いて記述する。

石槨は地山に掘り形を掘って構築されている。玄室掘り形は平面「コ」字状で、奥壁部分は段掘りとなっている。掘り形西壁は直に掘り込まれているのに対し北・東壁は擂鉢状となっている。石材外縁が壁の傾斜の下端に合致しており、北と東側壁がまず設置され、次に床石、西側壁という順序で置かれたと想定でき、構築作業が西側からおこなわれたことがわかる。掘り形埋土は濁茶褐色粘質土で、石槨石材破片を混入する部分がある。土を叩きしめた痕跡はなく、一気に埋め戻したようである。

石材は白色の強い凝灰岩で、きめが細かいものの、1～2㎝の気泡所の空隙が無数にあいており、きわめて軽くてやわらかい石材である。左側壁材に顕著だが、数センチから十数センチの角礫が混入しているほか、材木状軽石が見られる。おそらく近隣で採取したものと考えられるが、河田山12号墳などの終末期横穴式石室の石材とは異なり(1)、また能美地域横穴式石室で多用された凝灰岩とも異なる。

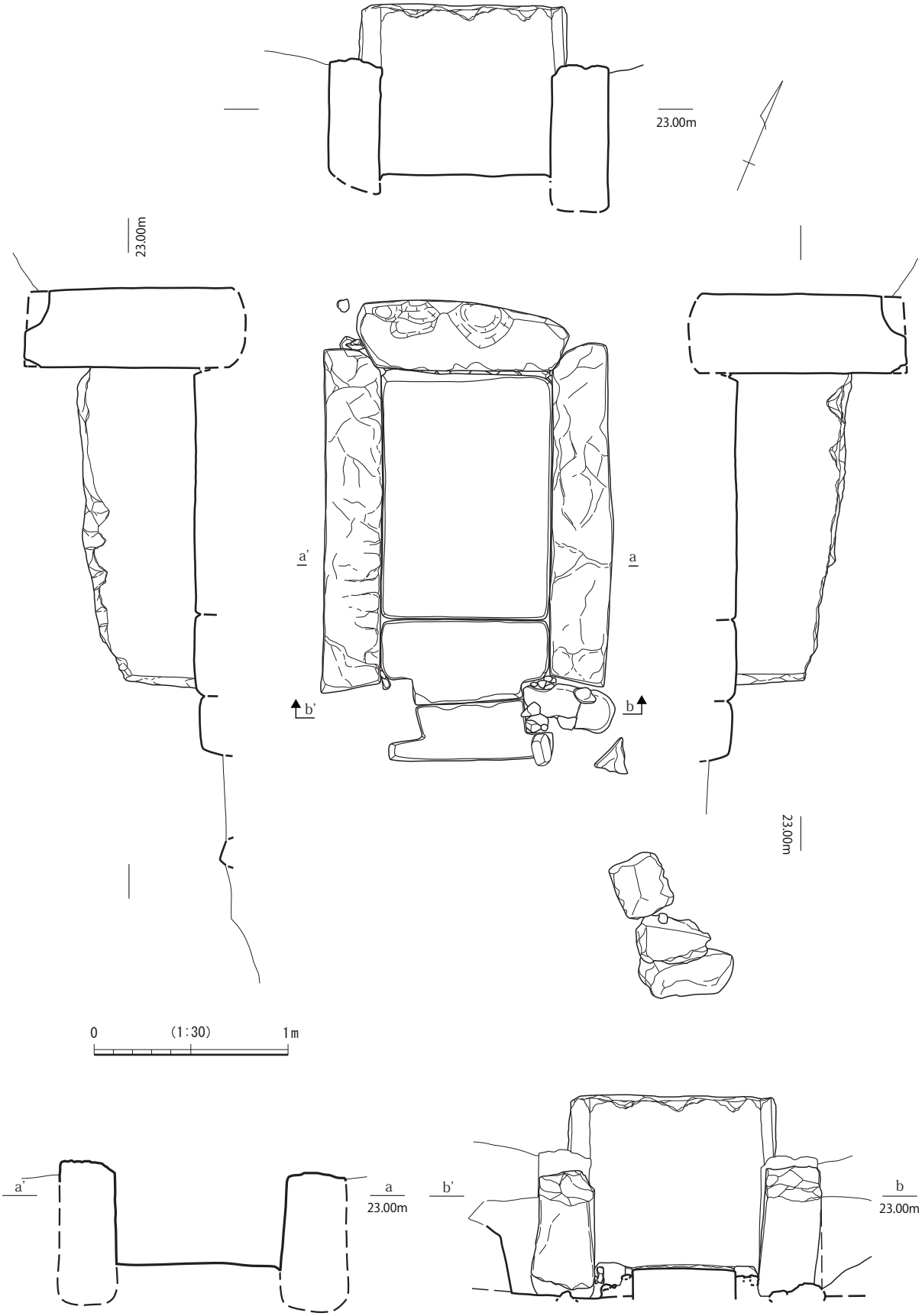
このような石材であるので加工痕跡は明瞭に残っていない。奥壁と側壁の接する部位の加工には幅5～6㎝、長さ7～8㎝のチョウナ痕があり、また側壁には奥壁に向かって連続する同種の痕跡が認められる。全体的な加工度が低いのは、稚拙な技術レベルを示すのか、それとも軟質な石材ゆえの摩耗具合を示すのかわからない。

奥壁の外寸は縦115㎝、横110㎝、厚さ40㎝を測る。上部の一部が欠損しているが、面をなすことから天井石をのせることを意図している。奥壁は床石側面に接しておかれているが、段などの特別な加工をしていない。奥壁と側壁が接する部分は、石材の隅を斜めに長さ18～23㎝にわたってカットしており、側壁の方でも同じような細工をすることによって合わせている。南加賀の石室石材の組み合わせは切組することを常としており、このような方法は稀有な例である。奥壁の石槨内寸は、縦88㎝、横89㎝のほぼ正方形である。

左右の側壁はともに同じ大きさと形状を呈しており、床石と接する部分には加工がないのは奥壁と同じである。右側壁外寸は長さ165㎝、高さ70㎝(現存値)、厚さ30㎝を測る。上面はなだらかに開口部に向って下がるように削平を受けている。奥壁と接する部分は幅14～15㎝にわたって斜めにカットされており、奥壁と接する。開口部側は石材小口面全体が約12度の角度で斜めになっており、想定される門柱石に接する。左側壁は長さ162㎝、高さ75㎝(現存値)、厚さ30㎝を測る。右測壁同様に、上面はなだらかに開口部に向って下がるように削平を受け、奥壁と接する部分は幅15～18㎝にわたって斜めにカットされ、開口部側は石材小口面全体が約15度の角度で斜めになっており、想定される門柱石に接することとなる。右側壁と異なるところは、小口のカットの方向が逆となっている。すなわち側壁全体としてみれば、「ハ」字に小口がカットされている。石槨内寸長は右側で160～162㎝、左側で157㎝と多少の違いがある。

床石は三石で構成されている。玄門部は凸形をした二石が凸部を合わせるように組まれており、その形状から左右に門柱石がかつて存在していたとことがわかる。床石のすべての隅角が丸い仕上がりとなっており、隙間が生じている。奥1石目は長さ128㎝、幅89㎝を測る。厚さの記録は残っていない。床石と奥壁との接する部分には空隙が生じており、隙間から小石が見える。2石目の凸部を3石目のそれと合わせて一体としている。凸部の幅は55㎝で、木棺幅を反映するものであろう。この凸部を子細に観察すると、凸部が作り出す南北の空間が石槨主軸と微妙に斜交し、その度合いが左右側壁で異なり、右側の方の斜交の度合いが強い。その一方で、床石の南端は石槨主軸に対して直交している。以上より、門柱石までの玄室空間長は、左側壁156㎝、右側壁160㎝で幅88～89㎝である。

門柱石は東側の基底のみかろうじて残っていた。上方から潰されたかのように不正形である。しかし輪郭をたどると、おおむね床石と側石で区画された横長方形の空間にはまり込んでいると思われ



第8図　石槨図（S=1/30）

る。この門柱石が3石目側面まで続く「L」字状になっているかどうか不明である。石槨に対して「ハ」字に広がる位置にある3石からなる石列の延長が3石目の凸形のコーナーにあたることからすれば、門柱石から石組による前庭部が存在した可能性も考えられる。

また、この位置に床石があるということから、3石目の凸形石に閉塞石がはめ込まれたものと考えられるが、それをのせるための加工痕跡は見られない。

なお、石槨幅が89㎝、奥壁高88㎝であることからすれば、唐小尺の3尺にほぼ相当する。

第３節　出土遺物

図化したものは、石槨前庭部から原位置を動いた状態で出土したものである。1354～1357は須恵器杯蓋で、1357のみ鈕を欠く小破片である。1354～1356の口径が16～17㎝にまとまっているのに対し1357の図上口径が一回り大きいのは、3㎝程度の小破片のための計測ミスである。胎土はすべて同じで、黒い粒子とともに長石などがはいり、ザラッとした触感である。1354の口縁端部は三角形状に屈曲する。器高の立ち上がりはそれほどなく、頂部は平坦面を持つ。鈕を除く器高は2.2㎝。外面に灰が被り一部自然釉となっている。1355の口縁端部は小さく垂下しなだらかに天井部にいたる。灰被りはない。鈕のある頂部の平坦面は少なく、鈕を除く器高は2.4㎝。1356は1355よりもさらに垂下する口縁端部で、器高の高い大きな天井となっている。鈕を除く器高は3.0㎝。灰の被りはない。1357の口縁端部は1536に類似する。

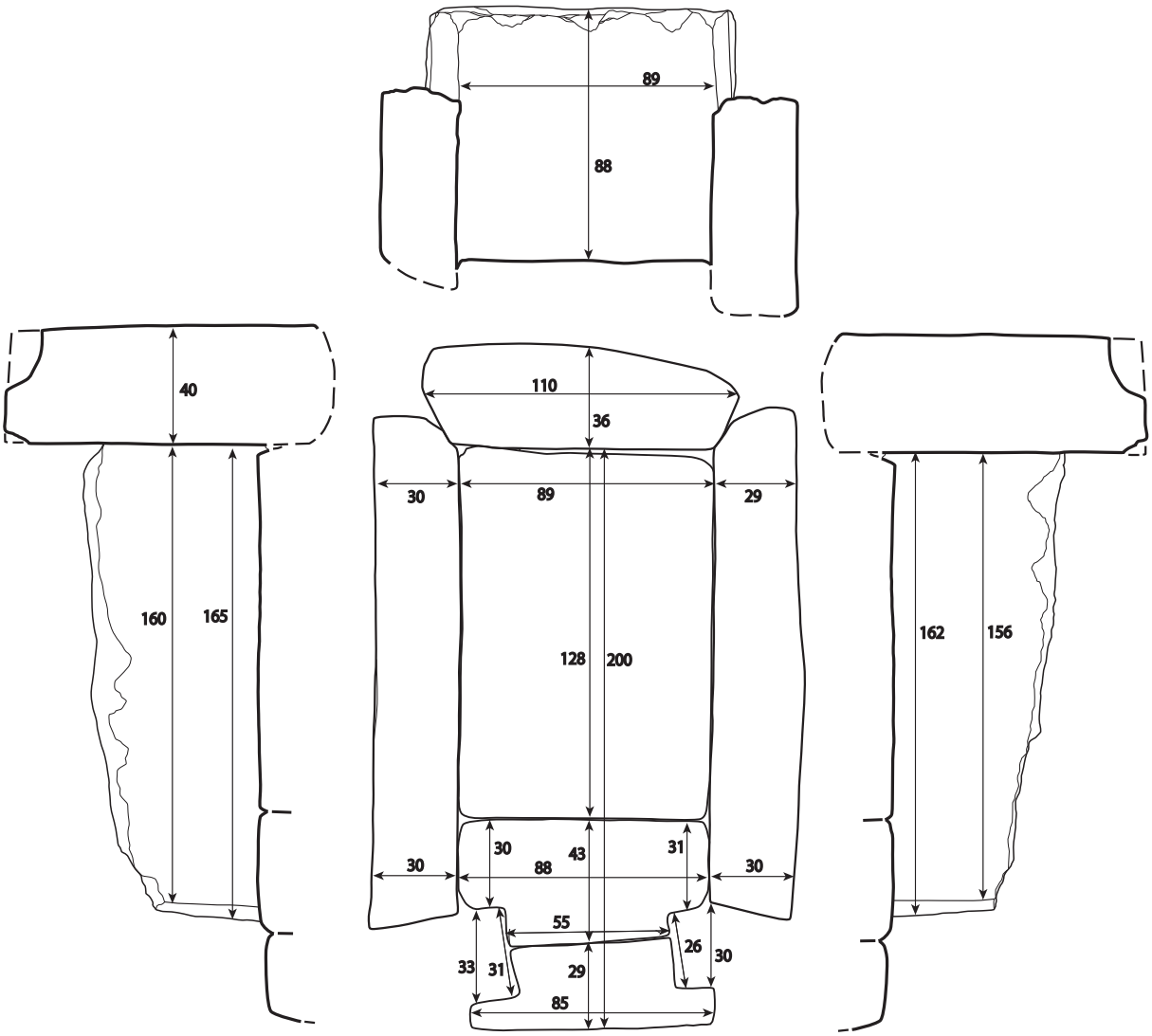
1358～1360は須恵器杯身である。底部を欠損する1359・1360はおそらく器形の傾きから高台をもたず、すべて杯Aであろう。1358・1359の口径は13～14㎝であるのに対し、1360の図上の口径が15.6㎝であるのは、計測誤差であるので、遺物観察表の口径数値が正しい。1358は微妙に内湾しながら口縁端部に続き、底部はほぼ平らである。ヘラ切り痕跡を明瞭に残し、反時計回りのロクロ回転である。内面全体に灰が被り、外面は重ね焼きによる焼きムラが見える。0.5～2㎜大の黒色粒子(噴出物のよう)がある。1359は直線的な体部で、現状の下端が底部にかかる部位のために曲がり始めている。白色の粒子(長石)を含む。器壁が滑らかで、1358・1360とは異質である。1360は口縁端部が成形時の指圧によって若干出ている。現状の下端が少し丸みを帯びていることから、底部近くと思われるものの、この状態では丸く底部に続くこととなる。胎土や焼成は1358と同じである。1361は杯蓋口縁部のようだが、3㎝程度の小破片で不確実。口縁端部を水平にすると立ち上がることから、焼き歪みによるものであろうか。1362は壺口縁部である。口縁端部は小さく外反し、直線的な口縁である。内外面に灰が被り、

第2表　那谷金比羅山古墳出土土器観察表

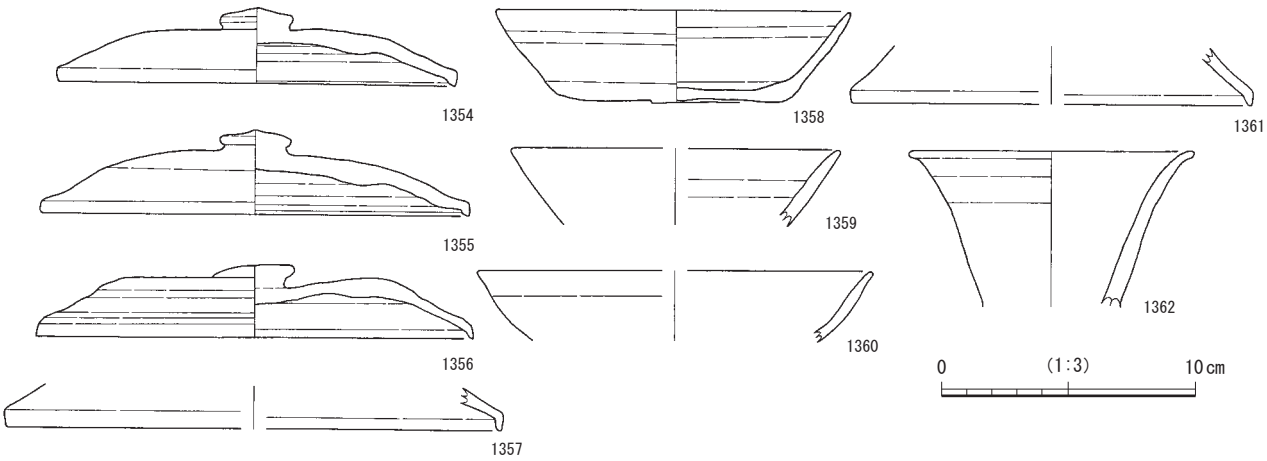
挿図番号	番号	出土位置	器　種	法量 () は現寸、cm	胎　土	焼成	色　調	調　整	ロクロ回転	備　考	実測番号
9	1354	石槨南攪乱№2・5	杯蓋	口径15.8、器高3.1、鈕径15.8	長石、黒色粒子含む	良好	外：明灰色 内：明灰色	外：降灰により不明 内：ロクロナデ	右回り	ほぼ完形、外面降灰、自然釉	85314
9	1355	石槨南攪乱№4	杯蓋	口径16.8、器高3.3、鈕径2.8	長石および黒色粒子多く含む	良好	外：暗灰色 内：明灰色	外：ヘラケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ	右回り	完形	86209
9	1356	石槨南攪乱	杯蓋	口径17.0、器高3.9、鈕径3.2	長石、黒色粒子含む	良好	外：灰色 内：明灰色	外：ヘラケズリ、ロクロナデ 内：ロクロナデ、頂部回転ヘラケズリ	右回り		85313
9	1357	石槨南攪乱	杯蓋	口径19.0、器高(1.7)	長石、黒色粒子含む	良好	外：灰色 内：灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	2㎝程度の小破片、口径計測不可	86565
9	1358	石槨南攪乱№2・7・8・9・10	杯A	口径13.9、底径8.8、器高3.6	長石、黒色粒子(噴出状態も)含む	良好	外：明灰色 内：灰色	外：ロクロナデ、ヘラ切り 内：降灰により不明	左回り		85311
9	1359	石槨南攪乱№11	杯身	口径13.0、器高(4.0)	微細な長石粒含む	良好	外：明灰色 内：明灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	杯Aか、4㎝程度の小破片、他の土器と質感異なる	86563
9	1360	石槨南攪乱	杯身	口径13.9、器高(2.8)	長石、黒色粒子(噴出状態も)含む	良好	外：明灰色 内：明灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	右回り	杯Aか	86564
9	1361	石槨南攪乱	杯蓋?	口径16.0、器高(2.2)	長石、黒色粒子含む	良好	外：灰色 内：灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	焼き歪か?	86550
9	1362	不明	壺	口径11.0、器高(6.1)	長石、黒色粒子含む	良好	外：黄灰色 内：黄灰色	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	不明	瓶類か、降灰により自然釉	85312

第3表　那谷金比羅山古墳出土石器・鉄器属性表

挿図番号	番号	出土位置	器　種	法　量	観察事項	備　考	実測番号
－	石鏃A	E80gr.	磨製石鏃	長さ29.5㎜、幅19㎜、厚さ3㎜、重さ2.1ｇ	平基式、緑色凝灰岩?、側縁の一部欠損は調査時によるもの。全面研磨痕残す	写真のみで報告	－
－	石鏃B	不明	打製石鏃	長さ25㎜、幅17㎜、厚さ5㎜、重さ1.5ｇ	凹基式、凝灰岩、明灰色、先端を欠損する、浅い基部の刳りこみ	写真のみで報告	－
－	石鏃C	不明	打製石鏃	長さ23㎜、幅19㎜、厚さ3㎜、重さ1.0ｇ	凹基式、頁岩、側縁が鋸歯状、深い基部の刳りこみ	写真のみで報告	－
－	鉄A	不明	鉄製鎹?	長さ17㎜、幅7.5㎜、厚さ1.5㎜	短側縁が欠損する。	写真のみで報告	－



※数値はセンチメートル



第9図　石槨各部計測値（S=1/25）、出土遺物（S=1/3）

外面一部に厚い自然釉として付着する。胎土は1354などと同じである。

出土した須恵器は、おおむね飛鳥Ⅴ期である(2)。なお、土砂のフルイがけをした。

未実測遺物を報告する。専門家による石材の同定はしていない。石鏃Aは凝灰岩製磨製石鏃で、茎部のない三角形を呈し、基部が直線状をなす平基式である。中央には明瞭な鎬を作り出し、根挟み部分は比較的小さい。石鏃Bは安山岩製打製石鏃で、凹基式の基部を持つ。基部は大きく刳りこまれ、刃部は打割によって鋸歯状となっている。石鏃Cは凝灰岩製打製石鏃で、凹基式の基部を持つ。刃先は欠損し、基部の刳りこみは浅い。鉄Aは幅約7㎜の細長い小鉄板で、両短辺が欠損しているので、細長いものである。1.5㎜と薄く、刃部等の加工はない。一方の短辺が曲がりかけているように観察され、そうすると鋤のような可能性も考えられるものの、製品を特定することはできない。鉄Bは周りを欠損した小鉄板で、一方面に木質が残っている。鉄Cは鍛造品特有の薄く剥離した鉄板である。錆化による砂等の付着がないので、より大きな鉄製品の剥離した一部と思われる。刀であろうか。なお、厚みのある磨製石器の小破片が出土しているが、器種は不明である。

第４節　小結

那谷金比羅山古墳は、東西の直径約8mを測る円墳で、南半分が失われている。墳丘中央より北に位置して凝灰岩切石による横口式石槨を内蔵している。墳丘背後は直線的だが周溝掘削による調査時の誤差の可能性が高く、円墳と判断した。横口式石槨部は、通例のような奥壁や側石が床石の上にのる構造ではない。門柱石も想定される。それより開口部の構造は破壊されており不明である。石槨石組構造は床石までと考えられるが、さらに側石が延びて羨道部あるいは前庭部となる可能性もあり、また、「ハ」字に開く石列に続いて前庭部を構成する可能性もある。さらに絞り込むための調査所見はない。

石槨幅が89㎝と唐小尺の3尺(1尺≒29.7㎝）で作られているようである。この観点からすれば、玄室高3尺、門柱石までの玄室長が5.5尺、門柱石幅1尺と規格されたものであろう。側石幅が約1尺であるので、切り出された石材もまた、1尺を目安に切られたものであろう。その一方で、玄門幅が約1.8尺となり整数となっていない。玄門幅が棺幅に規定されたものであろう。そうすれば、石槨構築に唐尺とともに従来からの慣用尺も使われたことになる。

石槨が墳丘と一体となって構築されたと考えるのが一般的であり、石槨と同じ唐尺で作られていると考えられる。それは、玄室奥と墳丘規定との距離が2.4mで8尺となり、墳丘との一体性は明らかである。現状の墳丘幅は26尺とすると約7.8mとなり、切りのいい数値ではない。墳丘が切りのいい数字であるとすると、そして石槨主軸と床石南端交点を設計基準とすると、そこから西4.5m(15尺）で墳丘裾となる。それを東に反転させると直径9m(30尺）となるが、実際に検出された墳丘裾が約2尺西である。調査所見とは異なるが、これが設計時の思惟を表すと考えられる。

最後に、調査時における土層の認識が撹乱土であるという解釈によって、墳丘南側の考古学的情報が失われたことは確実である。

註

(1)　小松市教育委員会 樫田誠氏のご教示による。

(2)　奈良国立文化財研究所　1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ

第４章　那谷金比羅山窯跡群

第１節　遺構（須恵器窯 ・竪穴状遺構）

1. 概要

金比羅山は那谷丘陵の南西部に位置している。那谷川の右岸にある低丘で、長さは東西約250m、南北約150mである。頂部には二つの高まりがあり、西の高まり（以下、西丘）は標高41m、東の高まり（以下、東丘）は45mを測る。第1図に示した通り、ほぼ全域が土砂採取の対象となった。

金比羅山全体で発掘した遺構は、須恵器窯が12基、竪穴状遺構が１基、古墳が１基である。古墳は第3章で報告しており、本章では窯と竪穴状遺構について報告する。

窯の分布を見ると、東端に3号窯が単独で存在する。東丘の南斜面には5号・6号・7-1号・7-2号・8号・9号・11号の7基の窯が近接して築造されている。なお、7-2号窯は7-1窯廃絶後に同じ場所で築造されたものである。これらの30m西には那谷金比羅山古墳が築かれている。西丘の西南斜面には1号窯、4号窯が距離をおいて存在する。北斜面には2号窯が窯尻を北に向けて存在する。これらの窯のうち3号窯、9号窯は築造途次で放棄されたものである。なお、第2図で見られる等高線の乱れは、分布調査でトレンチを設定したことに起因するものである。このほか竪穴状遺構が7号窯と11号窯の間につくられており、その位置からみて窯に関わる遺構と考えられる。

窯の形態はいずれも地下式の窖窯である。平面形をみると、排煙口に溝が連結する形態と、溝が見られない形態に大別できる。

前者は、1号・4号・7-1号・8号・11号窯である。窯体の平面形は、7-1号窯のみ寸胴形で、他は胴張形である。煙道は、7-1号窯のみ直立し、他は緩い傾斜で立ち上がる。燃焼部は、いずれも焼成部と明瞭に区画をもっている。後者は2号・5号・6号・7-2号・10号窯である。窯体平面形はいずれも寸胴形である。煙道は、7-2号窯で明確に確認できなかったが、他は直立している。燃焼部と焼成部の境は、2号・6号・10号窯が不明瞭、5号・7-2号窯は明瞭である。

2. 須恵器窯

現地調査で付した窯番号順に報告する。窯の主な計測箇所および部位名称は第12図に示した通りである。

窯体長とは、傾斜に沿って計測した燃焼部と焼成部の長さの合算値である。窯体の水平距離も示した。幅は、焼成部・燃焼部では基底の幅で、前庭部では上端の寸法を示す。図示した箇所以外では、煙道では高さ、傾斜角を示した。また、排煙口が残るものについても記録した。主軸は、座標北に対する角度である。

(1)　1号窯

西丘の西斜面に位置する。標高は31～38mである。窯体の平面形は胴張形を呈する。窯尻から鋭角をもって溝が連結している。焚口と排煙部は絞り込まれている。天井部はすべて崩落しており、焼成部は200cmに及ぶ崩落土や流土で埋まっている。

焚口の幅は120cm、燃焼部は長さ140cmを測る。燃焼部と前庭部の主軸は焼成部より東に振っており、N59°Eとなっている。

焼成部の実長は1520cm、水平長は1270cmである。燃焼部と焼成部を合わせた水平長は1410cmである。

最大幅は中央部にあり、E-F断面の幅(基底部幅: 以下、窯体の幅はすべて基底部幅) 305cmを測る。このほか、G-H断面で304cm、C-D断面で198cm、I-J断面は150cm、K-L断面は112cmである。傾斜角は31°、主軸はN48°Eである。奥壁(窯尻) の幅は96cmである。

前庭部は長さ284cm、幅304cm、深さ36cmを測る。覆屋の存在を示すピットは検出していない。

窯尻に連結する溝は、焼成部主軸に対して39°の鋭角で西に延びている。長さは646cm、O-P断面で幅44cm、深さ44cm、Q-R断面で幅30cm、深さ18cmである。A-B断面で深さ60cmを測る。

床面の補修は2回以上行われている。

(2) 2号窯

本窯跡群で唯一北斜面に築かれた窯である。標高は31～37mを測る。窯体平面は寸胴形を呈し、燃焼部と焼成部の境は明確ではない。焚口の幅は178cmを測る。燃焼部と焼成部を合わせた実長は920cm、水平長は808cmである。焼成部では中央に遺物が集中している。傾斜角は24°、主軸はN33.5°Eである。A-B断面は幅166cm、C-D断面は180cmで最大幅である。

奥壁・煙道は高さ160cm、76°の急角度で立ち上がり、上部で広がりを見せる。排煙口は82×64cmを測る。奥壁幅は114cmである。

前庭部は、幅800cm、長さ590cmの平坦面をつくり、その中に幅400cm、長さ288cm、深さ54cmの土坑をつくっている。前庭部の西では、北に向かって溝が延びており、幅38cm、長さ230cmを測る。排水を目的としたものと考えたい。また、複数のピットは覆屋の柱穴になる可能性がある。

床面の補修は１回である。

(3) 3号窯

金比羅山の東端で検出された窯で、構築途中で放棄され操業に到っていない。標高は23～25mである。窯体の平面形は胴張形を呈する。水平の全長は1420cmを測る。縦断面を見ると、焚口から432cm入った場所に段を作っており、ここまでを燃焼部として構築したものであろう。窯尻と焚口は絞られている。主軸はN75°Wである。焼成部は約400cmの長さをほぼ平らにつくる。窯体の最大幅は250cm、C-D断面で228cm、窯尻A-B断面は幅126cm、燃焼部E-F断面は幅102cmを測る。

(4) 4号窯

金比羅山の西端に構築されており、標高は22～30mを測る。窯体は胴張形であるが、張りは大きくない。焚口、奥壁を絞っており、窯尻から鋭角で溝が連結している。

焚口は幅110cmである。燃焼部と焼成部は明確に区分していない。窯体の実長は1420cm、平面長は1330cmである。主軸はN52°Eで、傾斜角は32°である。床面の補修は2回確認でき、2回目の床面は縮小している。E-F断面で2時期の壁面を窺うことが可能で、１次の基部幅は256cm、2次の基部幅は210cmである。このほかC-D断面では幅188cm、G-H断面では200cm、I-J断面は燃焼部で120cm、G-H断面は200cmである。いずれも基部幅である。2次床面の焼成部では下半に遺物が集中している。奥壁は幅90cm、奥壁・煙道の高さは140cmで、煙道の傾斜角は64°である。

前庭部は、2段に掘られており、上端の幅426cm、長さ302cm、深さ74cmである。付設された溝は窯体主軸と内角50°をもって西に延びており、先が細くなっている。長さ450cm、K-L断面で幅42cm、深さ80cm、M-N断面で幅30cm、深さ16cmを測る。また、窯体主軸と同じ方向に溝が210cm延びている。幅32cmで、深さは窯尻近くで10cmである。灰原では、前庭部の南に馬蹄形に遺物が分布している。

４号窯北土坑　4号窯近くに存在する不整楕円形の土坑である。長さ500cm、幅186cm、深さ44cmを測る。覆土から少量の須恵器が出ている。立地から見て4号窯との関わりが考えられるが、機能につ

いては明らかにできない。

(5)　5号窯

南斜面の群中にあり、最も東に位置する。10号窯を切って築かれており、標高29～35ｍに位置を占めている。窯体は寸胴形で、燃焼部と窯尻をわずかに細くする。

焚口は幅162cm、燃焼部と焼成部の境はわずかに区分する。燃焼部は平面長270cmで、I-J断面で深さ40cmの凹みをつくっている。焼成部の長さは670cmで、窯体の平面長は850cmとなる。実長は900cmである。主軸はN63°W、焼成部は傾斜角26°である。基底幅は、G-H断面が最も広く、200cmある。E-F断面では196cm、天井部が遺存しており、高さ124cmを測る。A-B断面の基底幅は176cm、C-D断面では190cmである。また、第48図C-D断面では10号窯との切り合いを確認でき、基底幅164cmで床面が東に傾斜していることがわかる。床面の補修は１回確認できる。

奥壁は内傾しており、幅104cm、高さ50cmを測る。煙道は高さ80cmで、傾斜角92°とほぼ直角に立ち上がっている。

灰原は南に広がり、10号窯の灰原と重なっている。

(6)　6号窯

南斜面の群中にあり、9号窯と11号窯の間に築かれている。標高は30～36ｍである。窯体は寸胴形である。奥壁近くの天井部が遺存している。

焚口の幅は110cm、窯体は実長で1500cm、水平長で1210cmである。主軸はN37°Eである。焼成部との境は明瞭ではないが、燃焼部の水平長は約280cmと推定でき、焼成部長は930cmを測る。燃焼部G-H断面で、幅は86cm、I-J断面の幅は104cmである。焼成部の最大幅はE-F断面にあり、154cmを測る。このほか、A-B断面では144cm。C-D断面で見る窯体は外開きである。傾斜角は27°である。奥壁・煙道は直立しており、高さ50cmを測る。

排煙口は幅130cmである。前庭部は、上端で長さ306cm、幅336cm、深さ108cmを測る。焚口の両側に見られるピットは覆屋を構成する柱穴になる可能性がある。

床面の補修は3回確認できる。

(7)　7-1号窯

南斜面の群中にあり、標高32～36ｍを測る。窯体平面は寸胴形であるが、中央部でわずかに膨らみを見せる。前庭部・燃焼部と焼成部の主軸が異なっている。窯尻に溝が連結し、南に延びている。本窯廃絶後に同じ場所に7-2号窯が規模を縮小して構築されている。

焚口の幅は100cm、燃焼部の長さは204cm、焼成部は886cmである。窯体の平面長は1090cmで、実長は1200cmを測る。燃焼部から焼成部にかけて「舟底状ピット」が存在する。長さ162cm、幅110cm、深さ23cmである。

窯体の主軸はN62°Eであるが、舟底状ピットから前庭部にかけてはN44°Eとなり、西に振れている。燃焼部の傾斜角は26°である。基底幅は、C-D断面が最大で192cm、E-F断面では146cm、A-B断面では140cmである。前庭部は長さ384cm、幅392cm、深さ126cmを測る。

窯尻に凹みをつくっており、奥壁は幅116cm。奥壁・煙道の高さは116cm、煙道の基底は主軸方向に96cmのテラスをつくっている。煙道の傾斜角は85°である。

床面の補修は２回確認できる。

溝は主軸を南北方向にとり、焼成部主軸に対して内角71°で南に延びる。奥壁との連結部は強く酸化している。長さは1000cmで、先細りとなる。断面逆台形の深い溝である。幅はK-L断面で最大で150cmである。深さ166cm、底面は平坦で幅34cmを測る。M-N断面では幅76cm、深さ36cmである。

(8)　7-2号窯

7-1号窯の内側に、時間を隔てて築かれた窯で、標高は33～36ｍに位置を占める。燃焼部と焼成部の境は明瞭につくる。窯体平面は寸胴形である。焼成部下半で膨らみを見せるが大きなものではない。

焚口の幅は124㎝、燃焼部の長さは134㎝、焼成部の長さ556㎝で、窯体水平長は690㎝となる。実長は734㎝である。主軸はN61°E、焼成部の傾斜角は28°である。焼成部の中央部に甕をはじめとする遺物が集まっている。焼成部の最大幅はA-B断面で156㎝、奥壁幅は120㎝である。前庭部は長さ336㎝、幅440㎝、深さ40㎝で、南に開口している。複数見られるピットは覆屋の柱穴になる可能性がある。

床面の補修は１回確認できる。

(9)　8号窯

南斜面の群中に築かれた窯で、7号窯の東に位置しており、標高は34～39mである。窯体は胴張形で窯尻から溝が延びている。

焚口は幅90㎝、燃焼部は長さ130㎝、最大幅はG-H断面で100㎝である。G-H断面での高さは90㎝に復元できる。焼成部は、下半4ｍはほぼ水平につくるが、上半は31°の傾斜角をもつ。平面長890㎝、実長1054㎝で燃焼部を含む窯体は平面長1020㎝、実長1166㎝である。窯体の最大幅はE-F断面にあり、206㎝である。C-D断面では116㎝、A-B断面で80㎝である。窯体の主軸はN95°Eである。奥壁は幅66㎝、煙道は高さ90㎝、傾斜角50°である。前庭部は開いている。

窯尻からL字形の溝が連結しており、窯体主軸に対し72°の内角をもって西に736㎝延びている。底面の傾斜角は25°で、西に下っている。そこからいったん高くなって内角99°で折れ、南に520㎝延び、先端は細くなっている。O-P断面で幅100㎝、深さ46㎝である。また、窯尻から東へも100㎝突出している。このようにＬ字形の溝が付く窯は本窯跡群では他に見られないが、福井県武生市王子保窯跡群2号窯で近似例を確認できる。同窯は7世紀後半に比定されている(武生市教育委員会 1986『王子保窯跡群 第１次発掘調査概要報告』)。

床面は1回の補修が確認できる。

(10)　9号窯

南斜面で、6号窯の東に並行して位置する窯である。築造途中で放棄されて操業に到っていない。標高は30～34ｍである。窯体は寸胴形である。焚口幅158㎝、窯体の平面長は1120㎝、実長1160㎝を測る。主軸はN35°Eである。燃焼部の最大幅はA-B断面で200㎝ある。C-D断面では196㎝、E-F断面では160㎝を測る。窯体下半は傾斜角6°と少ないが、上半では33°を測る。窯体の覆土に、流れ込んだ須恵器が数点含まれている。

(11)　10号窯

南斜面の群中にあり、隣接する5号窯に切られている。寸胴形の窯体で、窯尻を細くつくっている。天井部が一部遺存している。焚口幅はG-H断面で130㎝、燃焼部と焼成部の境は明瞭ではない。窯体の平面長は814㎝、実長は870㎝である。主軸はN41°Wにとる。幅は、E-F断面が最大で164㎝、この部分の天井が残っており、106㎝の高さを確認できる。C-D断面では150㎝、A-B断面は128㎝、G-H断面は130㎝の幅をもつ。横断面の形状は、C-D断面で蒲鉾形であるが、A-B断面、C-D断面で箱形を呈し、側壁は傾斜角95°でやや外開きに立ち上がる。

窯尻は絞られており、その長さは66㎝である。奥壁幅は80㎝を測る。奥壁は「く」字形に内傾しており、高さ80㎝を測る。煙道の傾斜角は103°で高さ126㎝を測る。

床面には甕の胴部を転用した焼台が見られ、この下部に排水施設が確認できた。窯体基底に沿って溝を設け、奥壁寄り264㎝は須恵器片で溝を覆っている。長さ680㎝、溝の幅14～16㎝、深さ3～5㎝を

測る。前庭部は外開きで、平坦である。長さ210㎝、幅444㎝を測る。

床面の補修は3回確認できる。

(12)　11号窯

南斜面の西端に位置する。6号窯の西に隣接しており、標高は27～33ｍである。窯体は胴張形で、溝が東に接する6号窯の窯体を切って南に延びている。焼成部下半部で天井部が遺存している。

焚口幅106㎝、燃焼部は長さ130㎝、幅はO-P断面で98㎝である。焼成部の平面長が930㎝で、窯体の平面長は1060㎝となる。実長は1092㎝である。焼成部の基底幅はI-J断面が最大幅で、170㎝、M-N断面では128㎝、K-L断面では146㎝、E-F断面では114㎝である。M-N断面では天井部が残っており、90㎝の高さを確認できる。

床の補修状況はI-J断面で明瞭に窺うことができる。窯体の主軸はN59°Eである。奥壁・煙道傾斜角45°で緩い。奥壁幅は60㎝、奥壁と煙道を合わせた高さは172㎝である。

溝は基部から2条に分かれており、1条は南東へ延び6号窯の窯体に入っている。もう1条は南西に延び、6号窯の窯体西側を抉っている。この溝は窯体主軸に対し28°の内角で屈曲している。現長560㎝、幅はG-H断面で112㎝、深さ100㎝を測る。

前庭部は長さ280㎝、幅312㎝、深さ70㎝で底部は丸い。壁に沿って見られるピットは覆屋の柱穴となる可能性がある。覆土の大半は黒灰色の灰混じり土層である。

床面の補修は4回以上行われている。

(13)　窯のまとめ

窯の平面形は、排煙口に溝が連結する形態と、溝が見られない形態に大別できる。前者は、1号・4号・7-1号・8号・11号窯で、後者は2号・5号・6号・7-2号・10号窯である。

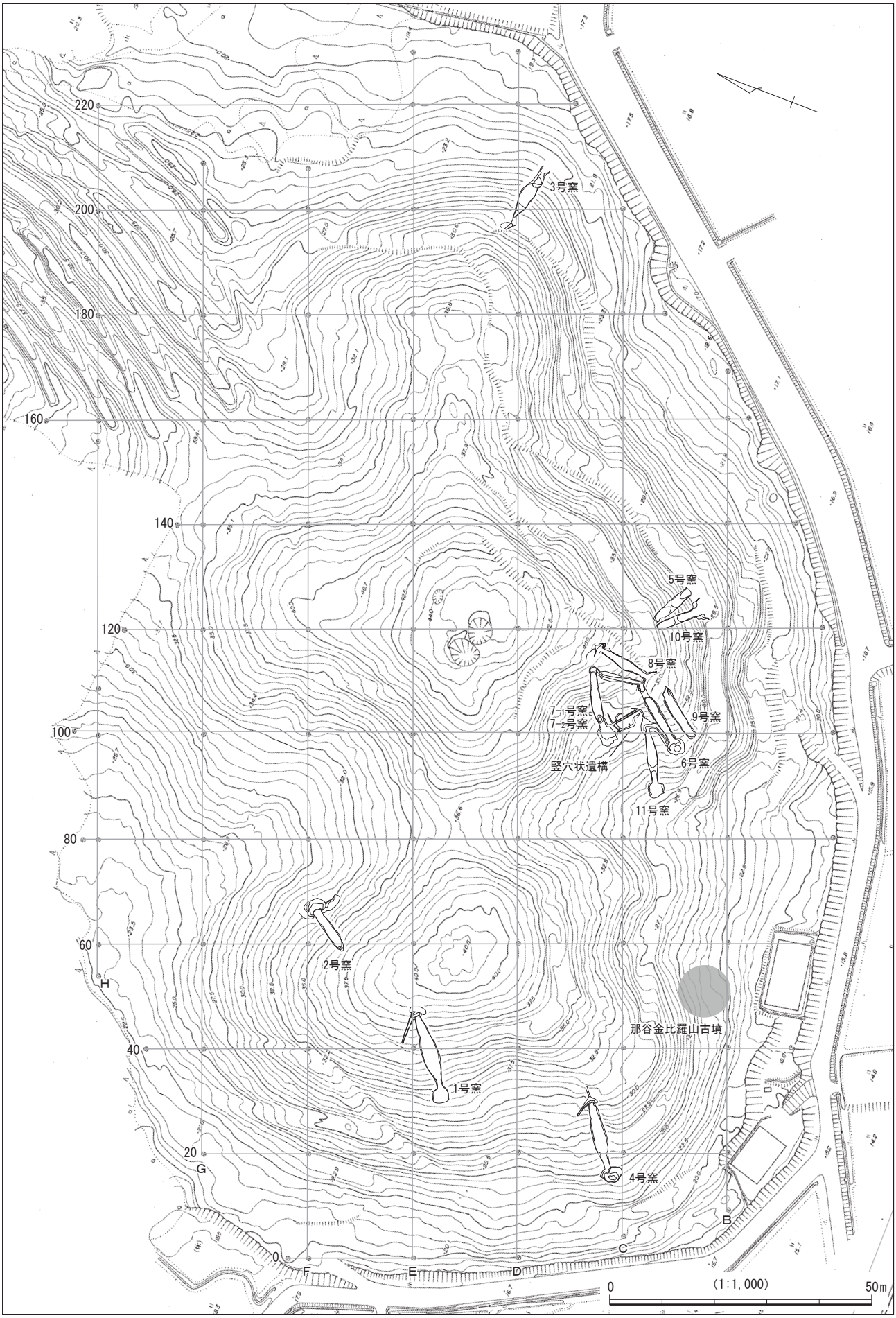
溝が連結する形態の特徴をみよう。窯体の平面形は、7-1号窯のみ寸胴形で、他は胴張形である。煙道は、7-1号窯のみ直立し、他は緩傾斜で立ち上がる。燃焼部は、いずれも焼成部と明瞭に区画をもっている。床面の傾斜は、7-1号が26°であるが、他は30°から32°である。煙道の傾斜は、7-1号が85°ときついが、他は緩い傾斜である。

溝が見られない形態では、窯体平面形はいずれも寸胴形である。煙道は、7-2号窯で明確に確認できなかったが、他は直立している。燃焼部と焼成部の境は、2号・6号・10号窯が不明瞭、5号・7-2号窯は明瞭である。床面の傾斜は、最も緩いものが20°で、最も急な7-2号でも28°と溝をもつ形態に比べて緩い。

3. 竪穴状遺構

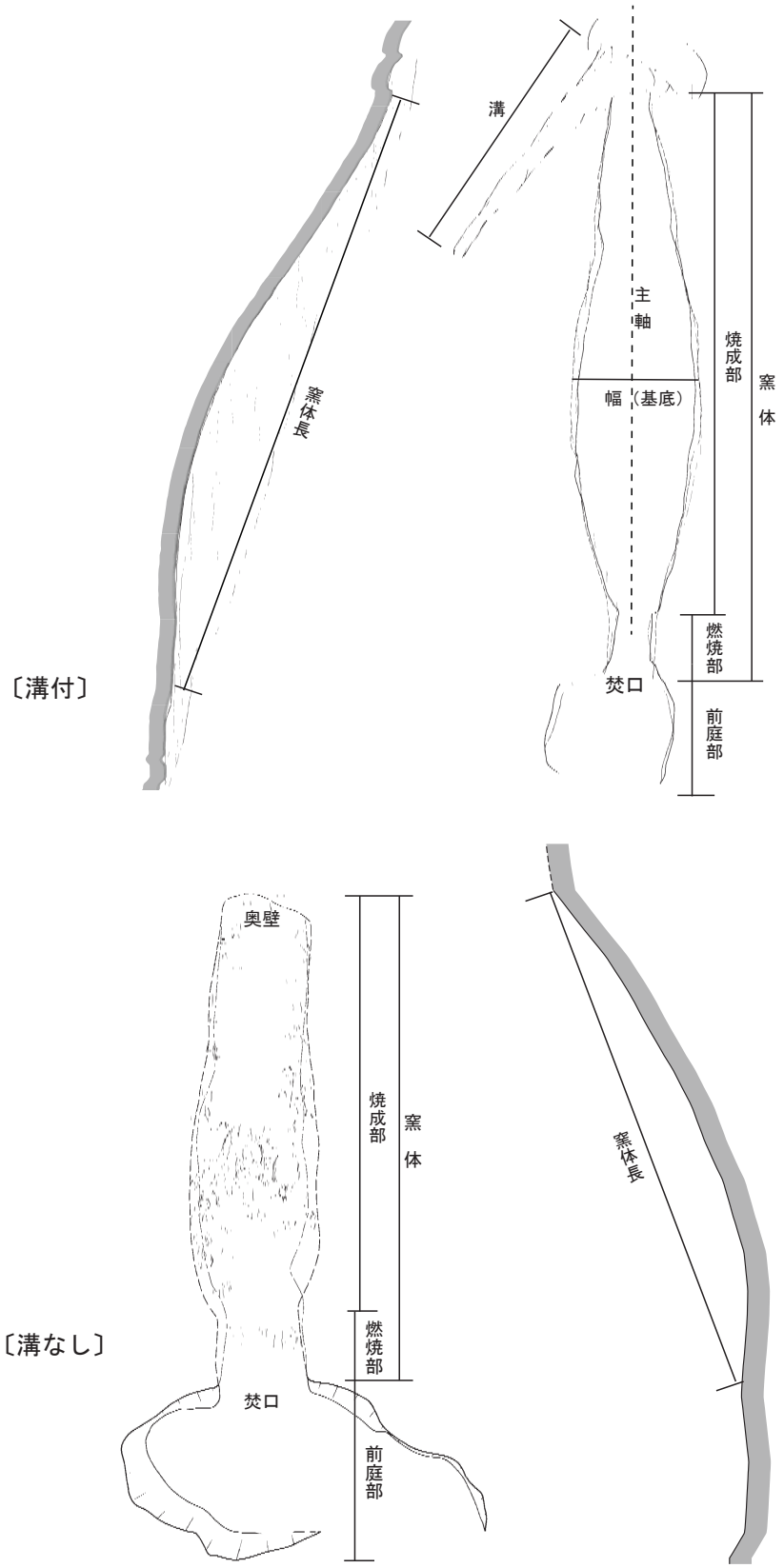
南斜面にあり、7号窯の前庭部と11号窯の煙道の間に造られている。東西長6ｍ、南北長5.2ｍ、深さ132㎝。北側、高いほうは2段に造る。7号窯の前庭部に接していることから、この窯に関わる可能性があり、作業用の土坑と考えられる。

遺物は、覆土から須恵器の杯、蓋、甕、提瓶、横瓶などが少量出ている。

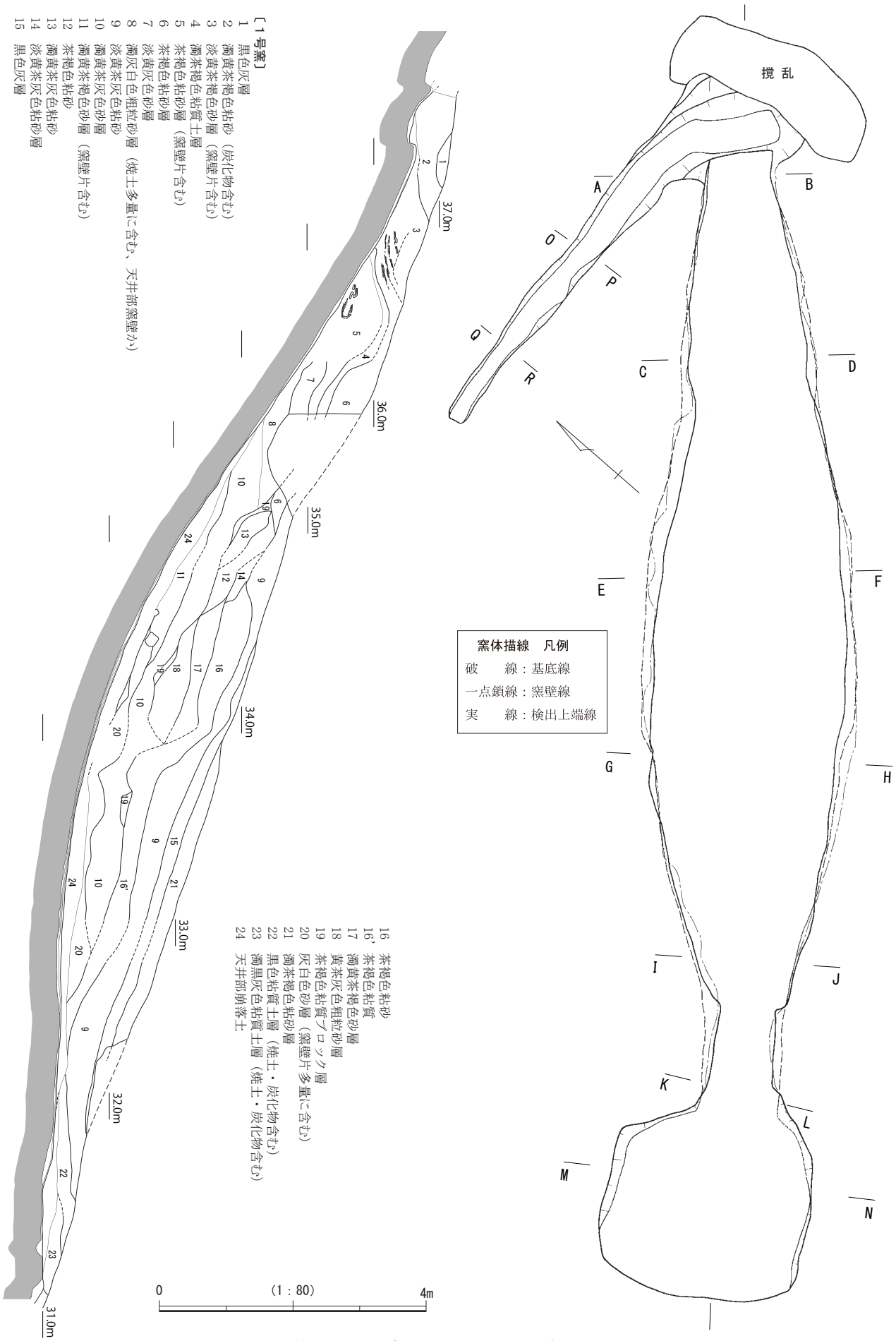


第 10 図　遺構配置図（S＝1/1,000）

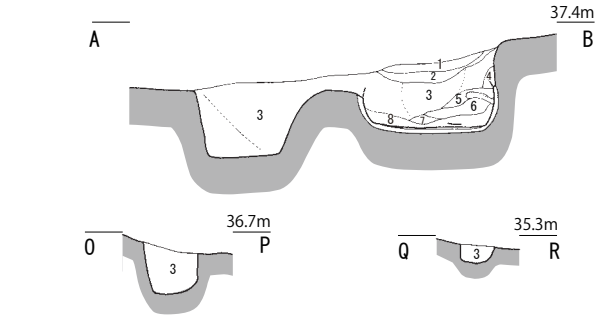
第11図　5～11号窯・竪穴状遺構配置図（S=1/200）



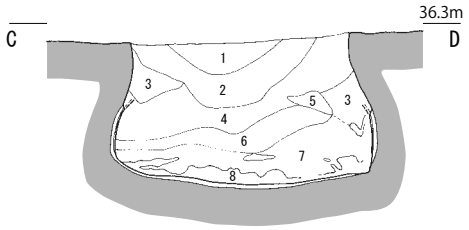
第12図　窯の主要部位名称と計測箇所



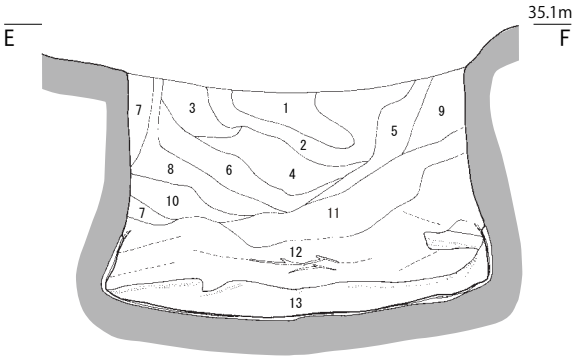
第 13 図　1 号窯平面図・断面図（S=1/80）



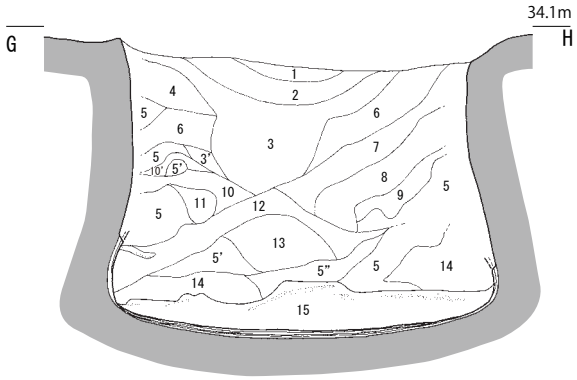
〔A-B〕〔O-P〕〔Q-R〕
1 黒色灰層
2 暗茶灰色粘砂層
3 濁黄茶褐色粘砂層（炭化物含む）
4 黄茶褐色粘砂層（淡黄白色砂ブロック含む）
5 淡橙茶褐色粘砂層（窯壁含む）
6 暗黄茶褐色粘砂層（炭化物含む）
7 淡黄茶色粘砂層（ブロック）
8 淡黄茶褐色砂層（粘質層・窯壁含む）



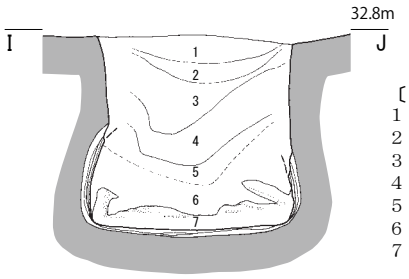
〔C-D〕
1 茶褐色粘砂層
2 濁茶褐色粘砂層
3 淡茶褐色粘砂層（灰白色砂ブロック含む）
4 茶褐色粘砂層（黄灰色砂ブロック含む）
5 灰白色砂層
6 淡黄灰色砂層
7 濁灰白色粗粒砂層（焼土・窯壁多量堆積）
8 天井部崩落土



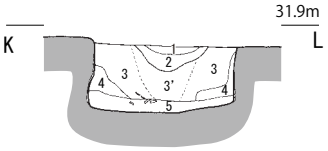
〔E-F〕
1 淡黄白色粘砂層
2 淡黄茶灰色粘砂層
3 濁茶褐色粘質土層
4 茶褐色粘質土層（粗粒砂含む）
5 茶褐色粘質土層
6 濁黄茶褐色粘砂層
7 暗黄茶褐色粘砂層
8 濁黄茶灰色粘砂層
9 明黄茶褐色粘砂層
10 濁茶灰色砂層
11 濁黄茶灰色砂層
12 濁黄茶褐色砂層（窯壁堆積）
13 天井部崩落土



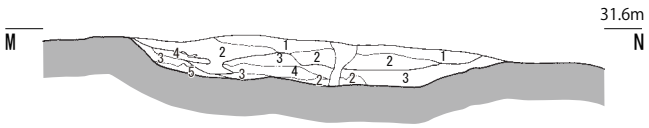
〔G-H〕
1 濁茶褐色粘砂層
2 黒色灰層
3 淡黄茶灰色粘砂層
3’ 淡黄茶灰色粘砂層
4 明茶褐色粘砂層
5 濁黄茶灰色砂層
5’ 濁茶灰色砂層
5” 濁黄灰褐色砂層
6 明茶褐色粘砂層
7 茶褐色粘砂層
8 濁黄茶褐色粘砂層（粗粒砂多量に含む）
9 濁黄茶灰色砂層（砂質強い）
10 灰茶褐色粘砂層
10’ 明灰茶褐色粘砂層
11 黄茶褐色粘砂層
12 茶褐色粘砂層
13 淡黄茶褐色粘砂層
14 濁黄灰色砂層（窯壁含む）
15 天井部崩落土



〔I-J〕
1 濁茶褐色粘砂層
2 黒色灰層
3 淡黄茶灰色粘砂層
4 茶褐色粘質（炭化物含む）
5 明茶褐色粘砂層
6 淡黄茶灰色粘砂層（窯壁堆積）
7 天井部崩落土



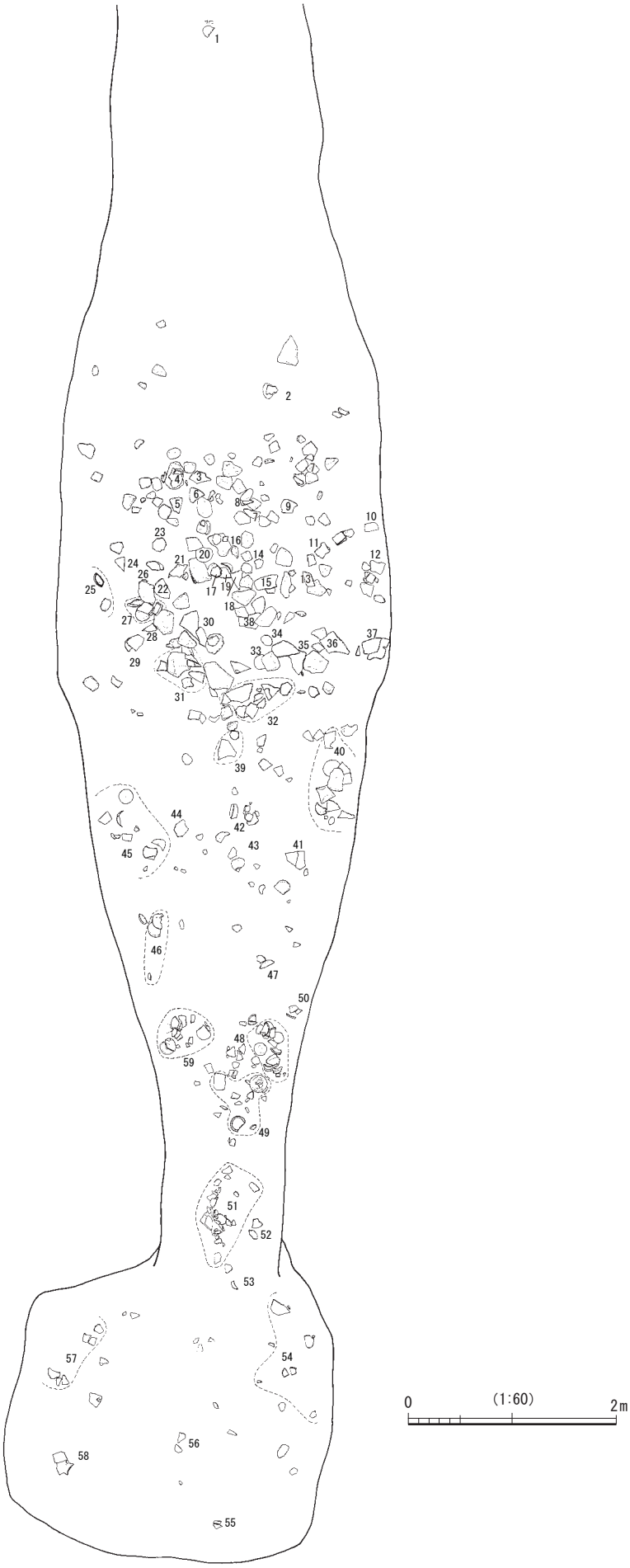
〔K-L〕
1 黒色灰層
2 濁茶褐色粘砂層
3 淡黄茶褐色粘砂層（土器含む）
3’ 淡黄茶灰色粘砂層
4 橙茶褐色焼土層
5 黒色炭化物層（土器含む）



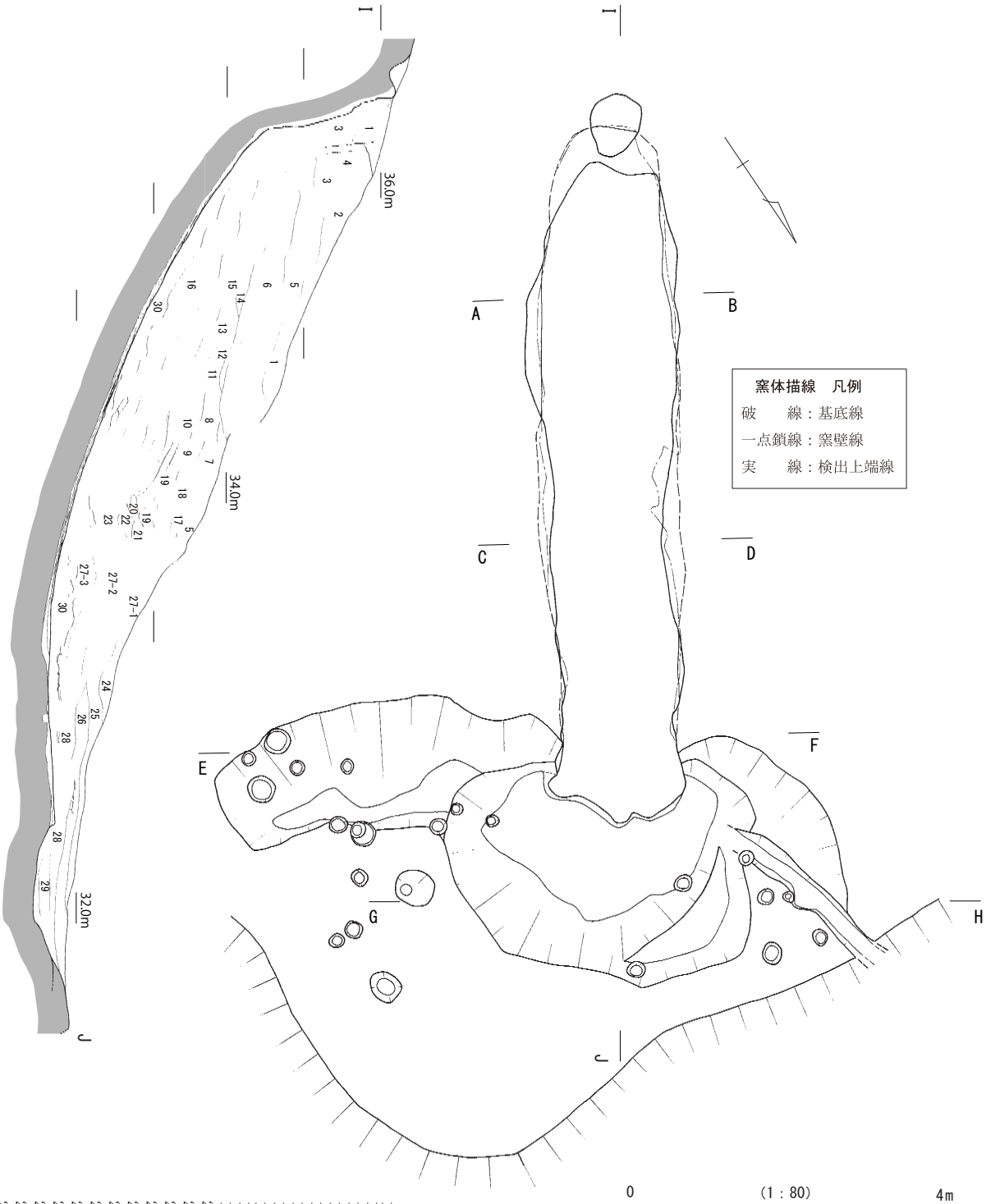
〔M-N〕
1 暗茶褐色粘砂層（炭化物・焼土含む）
2 黒色炭化物層（焼土・土器含む）
3 暗黄茶褐色粘砂層（炭化物・焼土含む）
4 濁黄褐色粘砂層（焼土多量に含む）
5 濁黄茶褐色土層（地山質土層）

0 (1:60) 2m

第 14 図　1 号窯断面図（S=1/60）

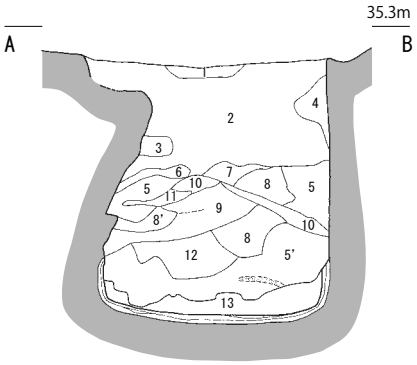


第 15 図　1 号窯遺物出土状況（S=1/60）

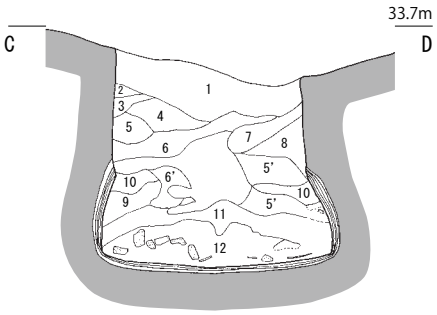


1 黒灰色灰層（炭化物・遺物含む）
2 濁黄茶灰色粘砂層
3 濁黄茶褐色粘砂層
4 明黄茶褐粘砂層
5 濁灰茶褐色粘砂層
6 淡紅茶褐色粘砂層
7 明茶褐色粘砂層
8 茶褐色粘砂層（黄茶褐色粘砂層含む）
9 淡黄灰色砂層
10 茶褐色粘砂層
11 濁茶褐色粘質（炭化物含む）
12 明黄茶褐色砂層
13 濁茶褐色粘質土層
14 明黄茶褐色砂層
15 黄茶褐色粘砂層
16 淡黄灰色砂層（地山崩落土）
17 明茶褐色粘砂層
18 明茶褐色粘砂層
19 淡黄灰色砂層（地山崩落土）
20 濁茶褐色粘質土層
21 淡黄灰色砂層
22 濁黄茶褐色粘砂層
23 淡黄灰色粘砂層
24 濁茶褐色粘砂層
25 暗茶褐色粘砂層（黒色灰層・炭化物含む）
26 黒色灰層（焼土含む）
27-1 濁灰茶褐色粘砂層
27-2 茶褐色粘砂層
27-3 淡黄灰色粘砂層
28 濁黄茶褐色粘砂層（遺物・焼土・炭化物含む）
29 暗黄茶褐色粘砂層（炭化物・土器含む）
30 天井部崩落土

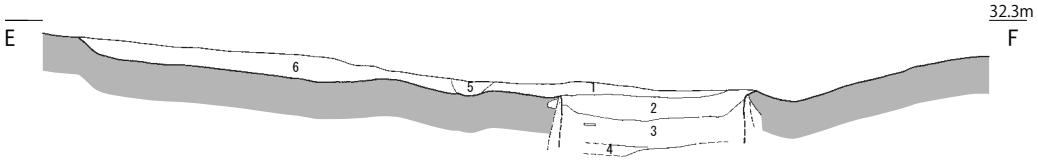
第16図　2号窯平面図・断面図（S=1/80）



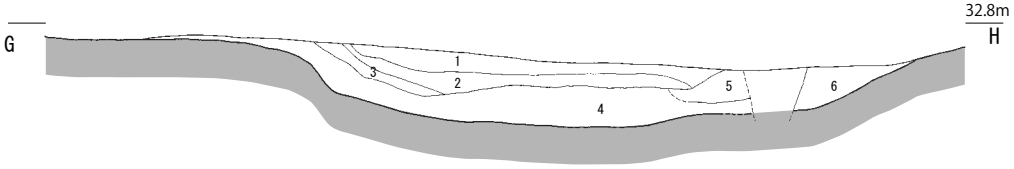
〔A-B〕
1 黒灰色砂層(炭化物・土器含む)
2 濁灰茶褐色粘砂層
3 淡黄茶褐色粘砂層
4 茶褐色粘砂層
5 淡黄灰色砂層(地山崩落土、天井部崩落焼土含む)
5’淡黄茶褐色粘砂層(天井部崩落焼土含む)
6 淡黄茶褐色粘砂層
7 黄茶褐色粘砂層
8 明黄茶褐色砂層
8’明黄茶褐色粘砂層
9 淡黄灰茶褐色砂層
10 淡茶灰色粘質土層
11 淡茶褐色粘砂層
12 濁黄茶灰色砂層
13 天井部崩落土

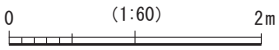


〔C-D〕
1 淡茶褐色粘砂層
2 淡黄灰色砂層
3 茶褐色粘砂層
4 明茶褐色粘砂層(地山質)
5 淡黄灰色砂層(地山崩落土)
5’淡黄灰色砂ブロック
6 濁茶褐色粘砂層
6’濁茶褐色粘砂層(焼土ブロック若干含む)
7 濁茶褐色粘砂層(炭化物若干含む)
8 明茶褐色粘砂層(濁茶褐色粘質土含む)
9 茶褐色粘砂層
10 濁茶褐色粘質土層
11 濁茶褐色粘質土層(淡黄茶褐色砂ブロック・焼土含む)
12 淡黄灰色砂層(地山崩落土、天井焼土壁・炭化物・土器含む)



〔E-F〕
1 暗黄茶褐色粘砂層
2 黒色灰層(炭化物・焼土含む)
3 暗茶灰色粘砂層
4 濁黄茶褐色粘砂層(炭化物・焼土・土器含む)
5 暗茶褐色粘砂層(炭化物・焼土・土器含む)
6 濁黄茶褐色粘砂層(地山質)

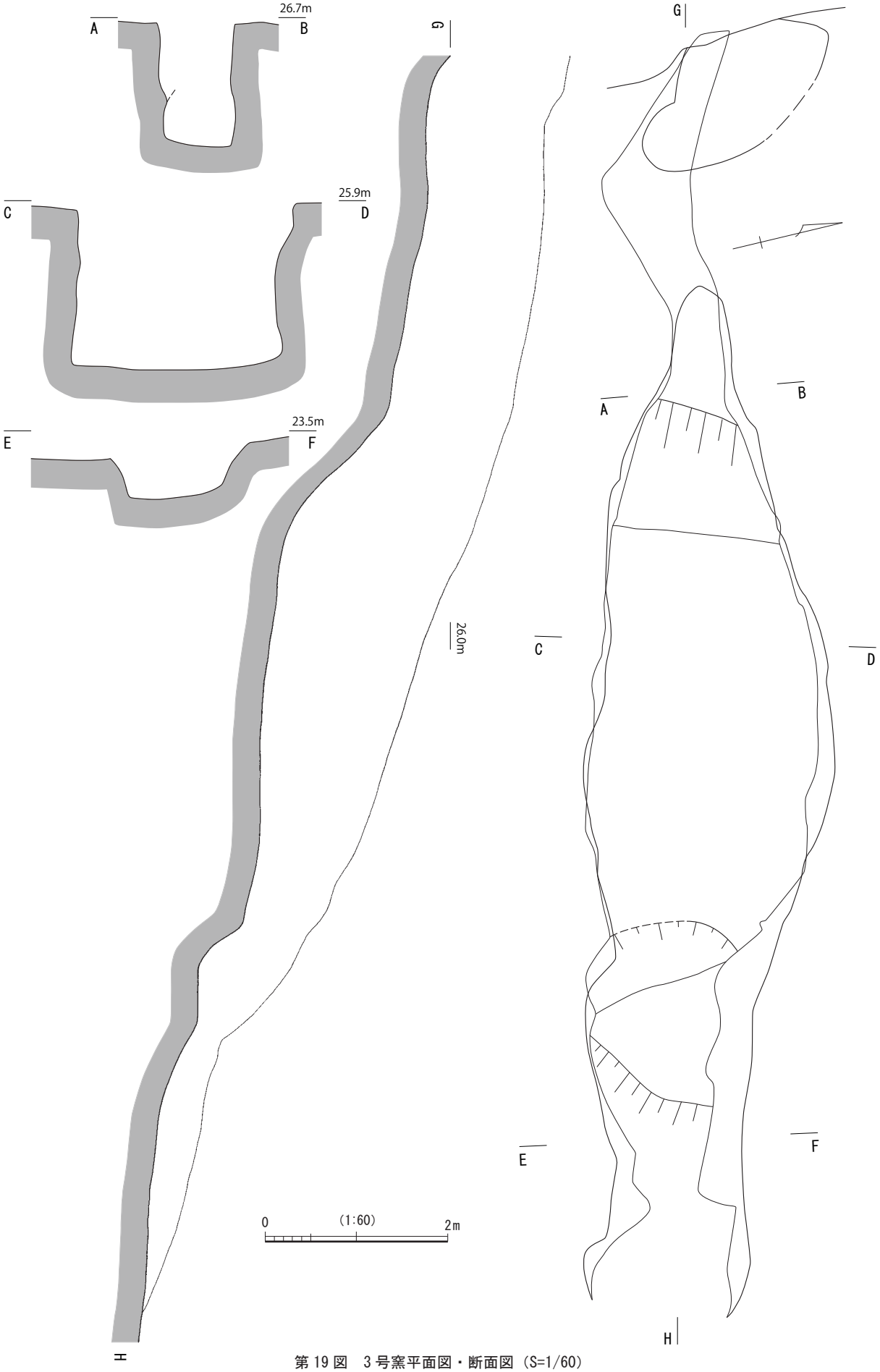




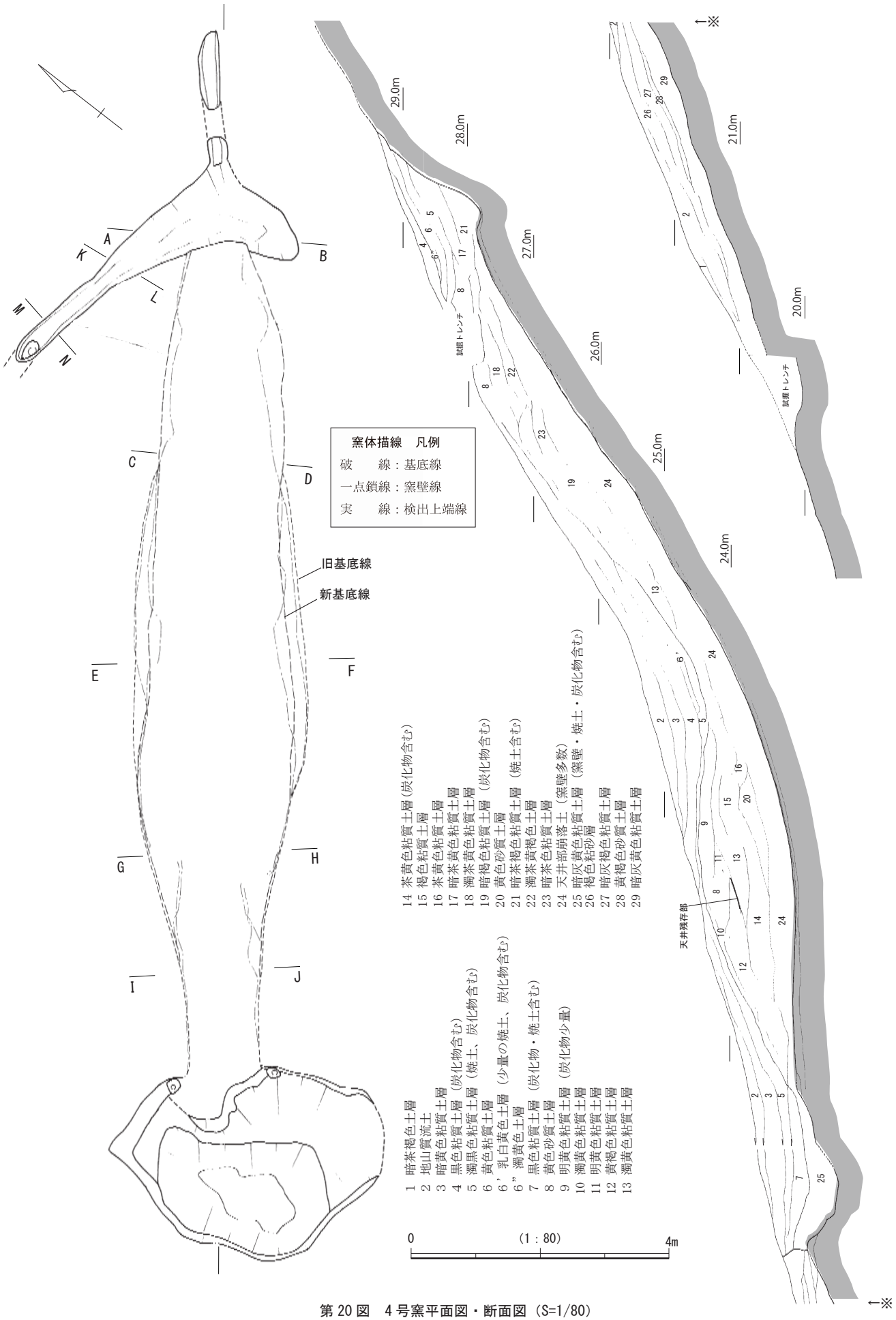
〔G-H〕
1 暗黄茶褐色粘砂層
2 黒色灰層(炭化物・焼土含む)
3 暗茶褐色粘砂層(炭化物・焼土・土器含む)
4 黒色炭化物層
5 濁茶褐色粘砂層
6 濁黄茶褐色粘砂層(地山質)

第 17 図　2 号窯断面図 (S=1/60)

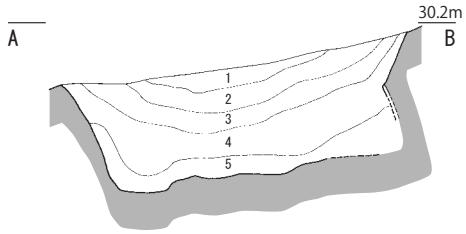
第 18 図　2 号窯遺物出土状況（S=1/60）



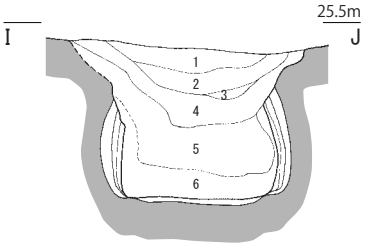
第 19 図　3 号窯平面図・断面図（S=1/60）



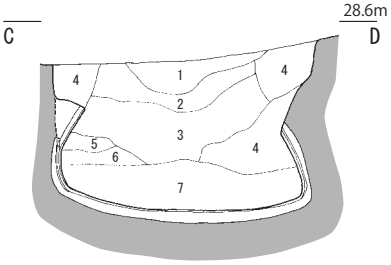
第 20 図　4 号窯平面図・断面図（S=1/80）



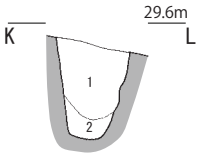
〔A-B〕
1 黒色粘質土層
2 黄色粘質土層
3 濁黒色粘質土層
4 暗茶褐色粘質土層
5 暗茶褐色粘質土層



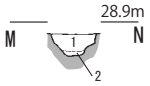
〔I-J〕
1 濁暗黄色粘質土層
2 濁暗黒色粘質土層
3 濁黄白色土層
4 黄褐色粘質土層
5 茶黄色粘質土層
6 天井部崩落土



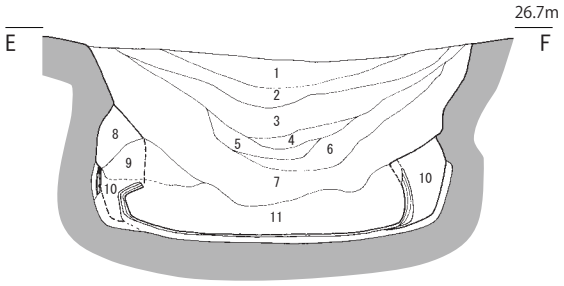
〔C-D〕
1 黒色粘質土層
2 暗褐色粘質土層
3 暗茶色粘質土層
4 黄色砂質土層
5 黒黄色粘質土層
6 黒黄色粘質土層
7 天井部崩落土



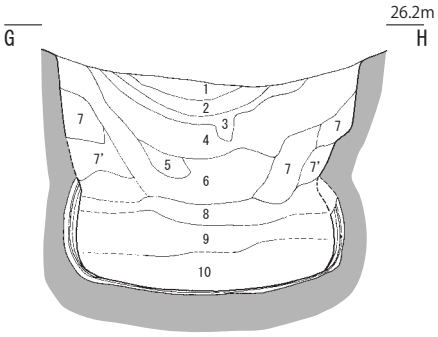
〔K-L〕
1 黄茶色粘質土層
2 赤褐色粘質土層



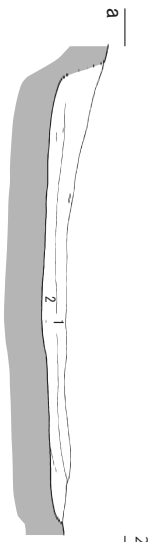
〔M-N〕
1 黄茶色粘質土層
2 黄色砂質土層（地山崩落土）

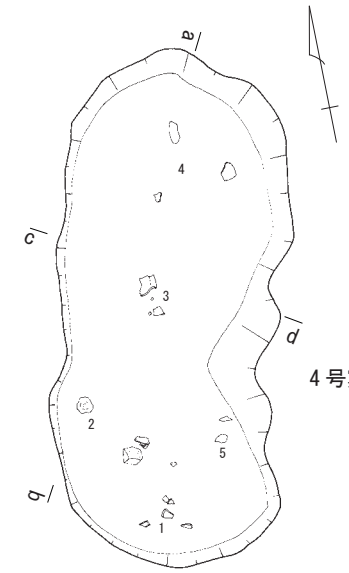


〔E-F〕
1 地山流土
2 暗黄色粘質土層
3 黒色粘質土層
4 乳白黄色土層
5 濁黒色粘質土層
6 白黄色土層
7 濁黄色粘質土層
8 黄褐色粘質土層
9 茶褐色粘質土層
10 茶色粘質土層
11 天井部崩落土

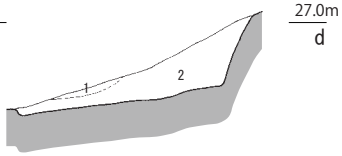


〔G-H〕
1 地山流土
2 黒色粘質土層
3 濁黒色粘質土層
4 明黄色粘質土層
5 濁褐黄色粘質土層
6 濁黄色粘質土層
7 黄色砂質土層
7’ 黄色砂質土層（地山質土）
8 褐色粘質土層
9 黄色砂質土層
10 天井部崩落土

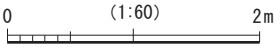




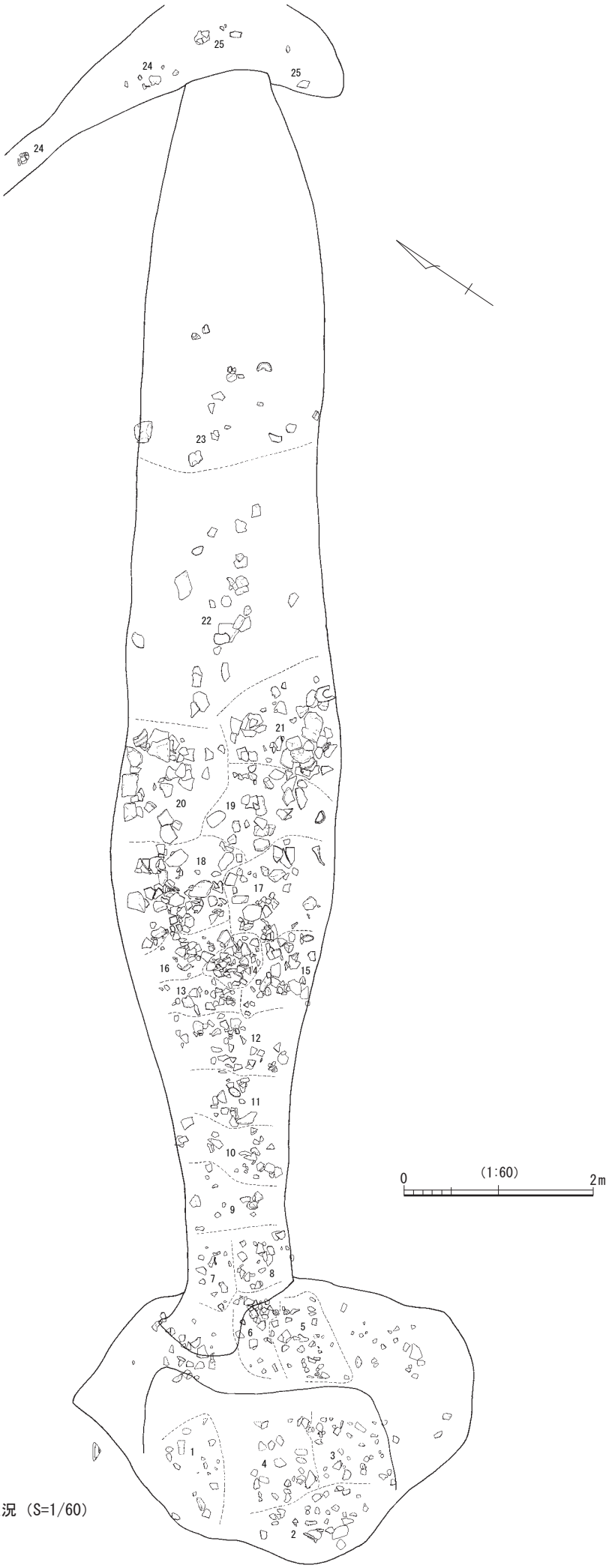
4号窯北土坑



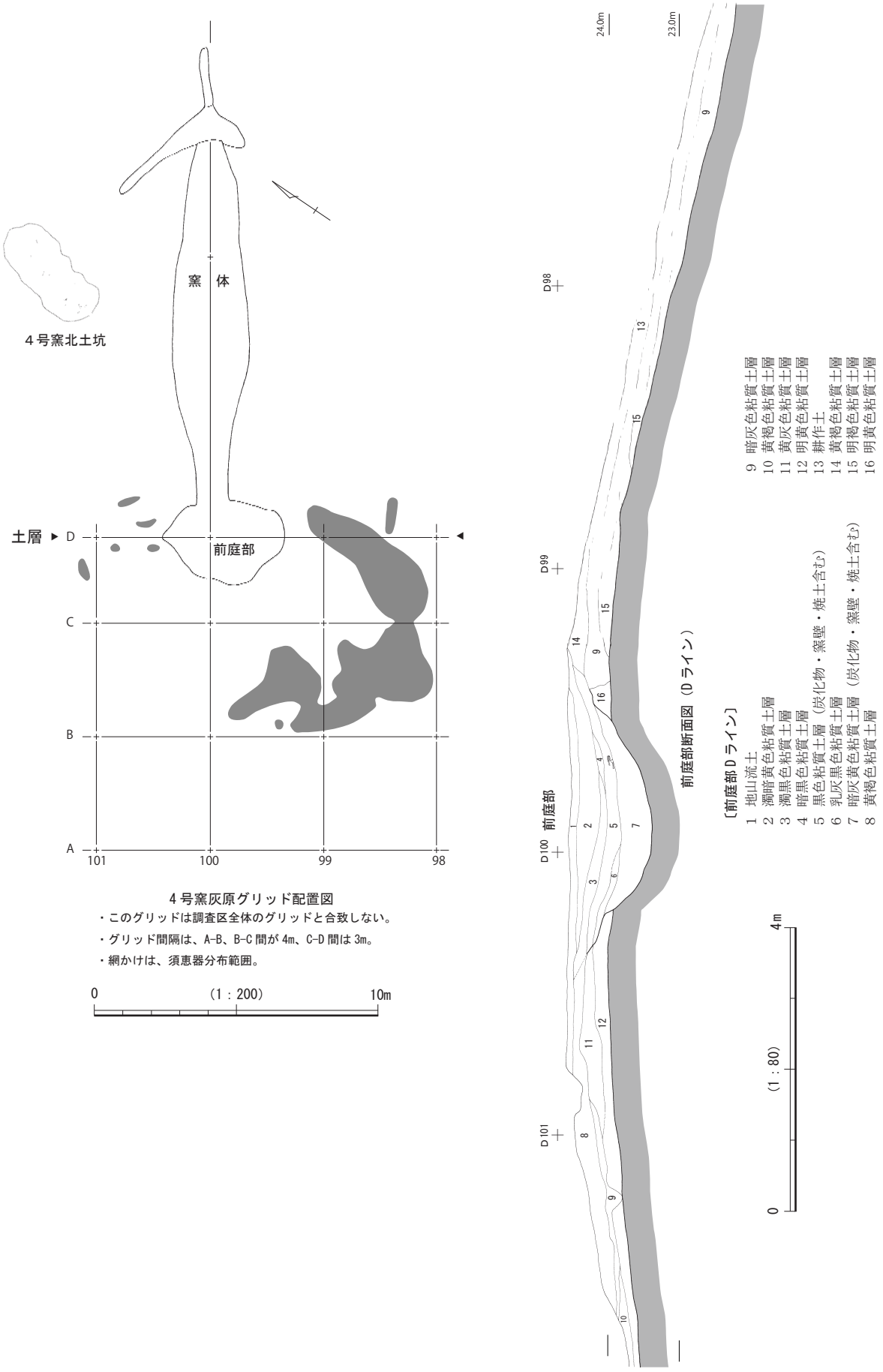
〔4号窯北土坑〕
1 暗灰色土層（炭化物・焼土少量含む）
2 暗褐色土層（細砂・焼土少量含む）
3 地山流土



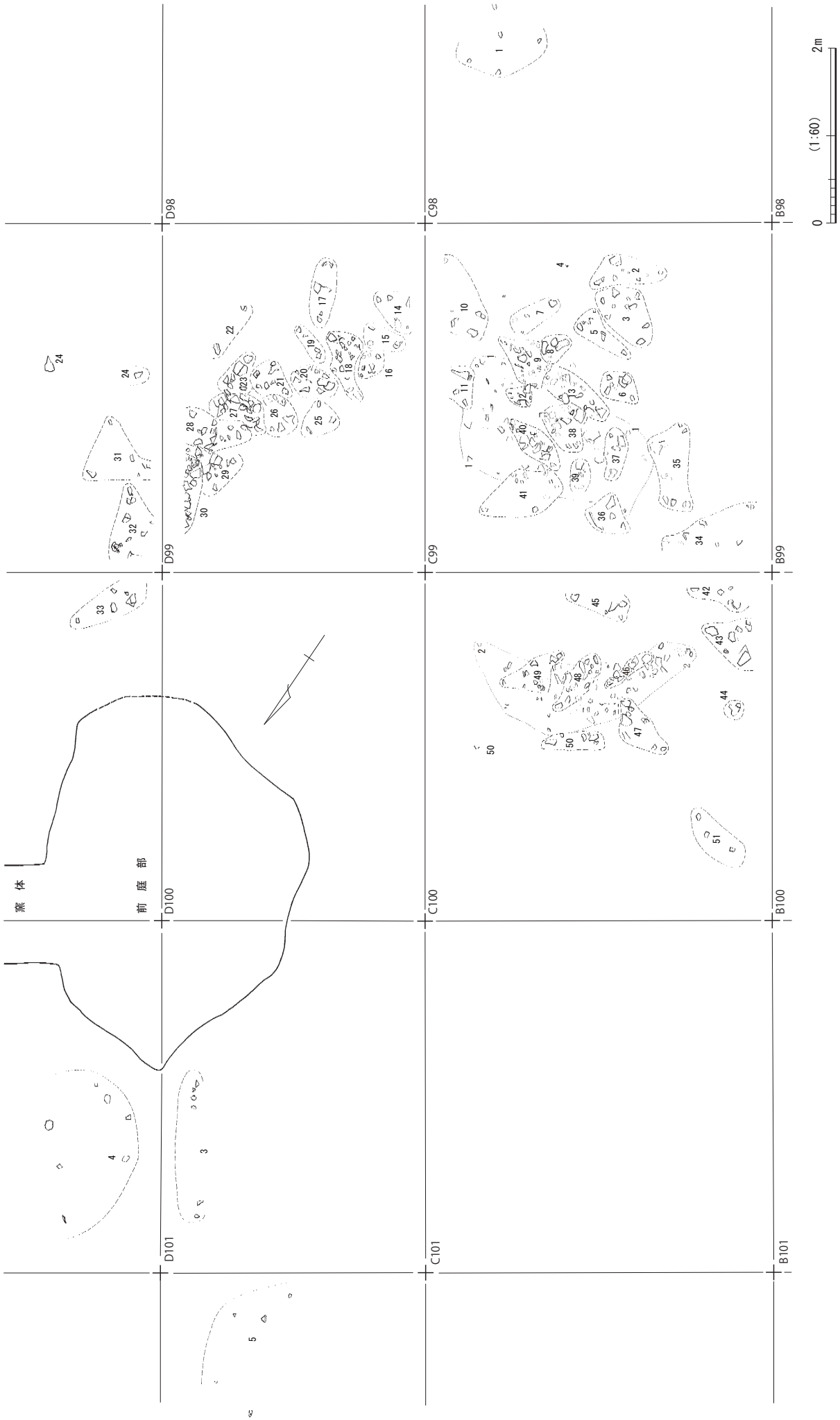
第21図　4号窯断面図・4号窯北土坑実測図（S=1/60）



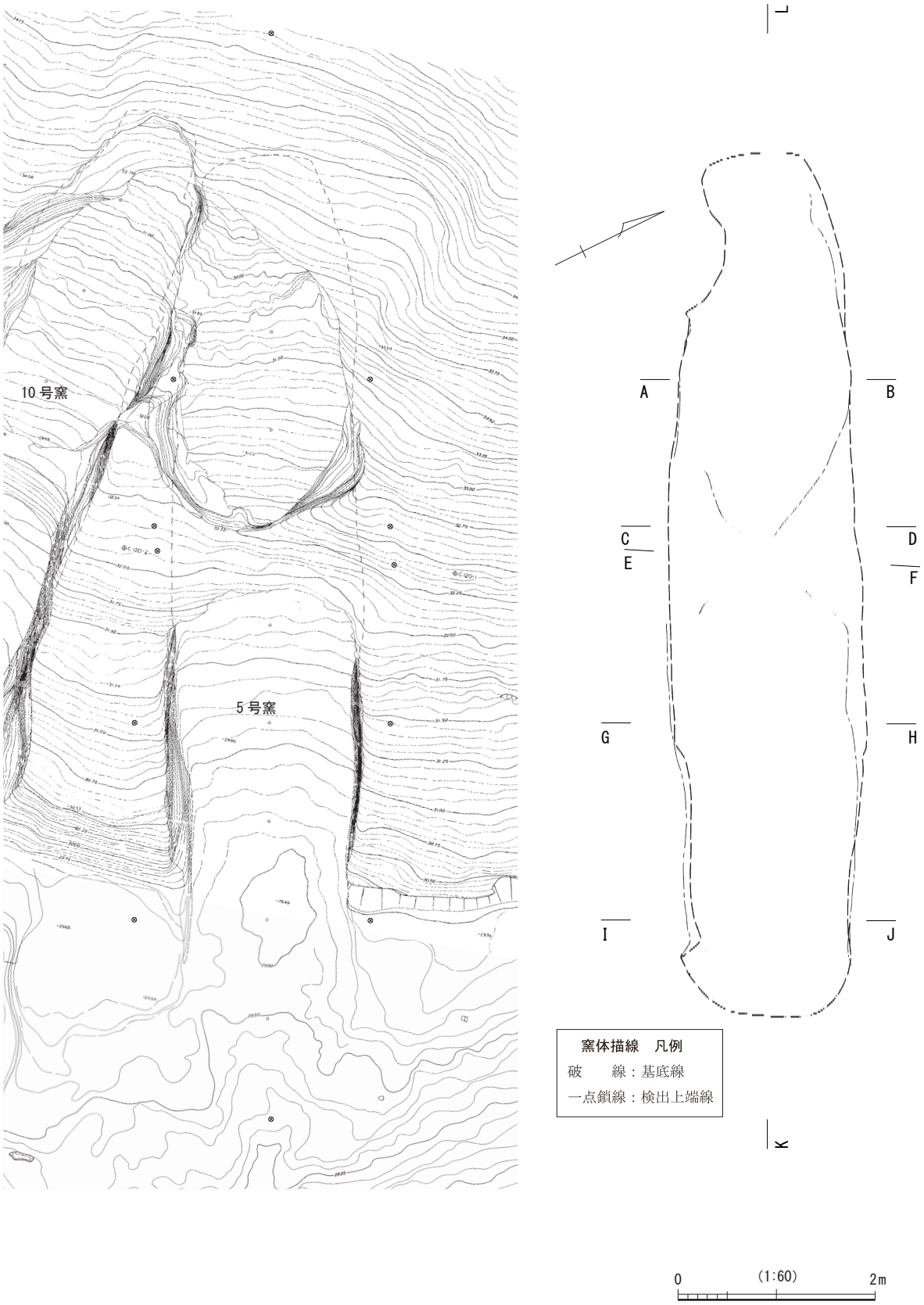
第 22 図　4 号窯遺物出土状況（S=1/60）



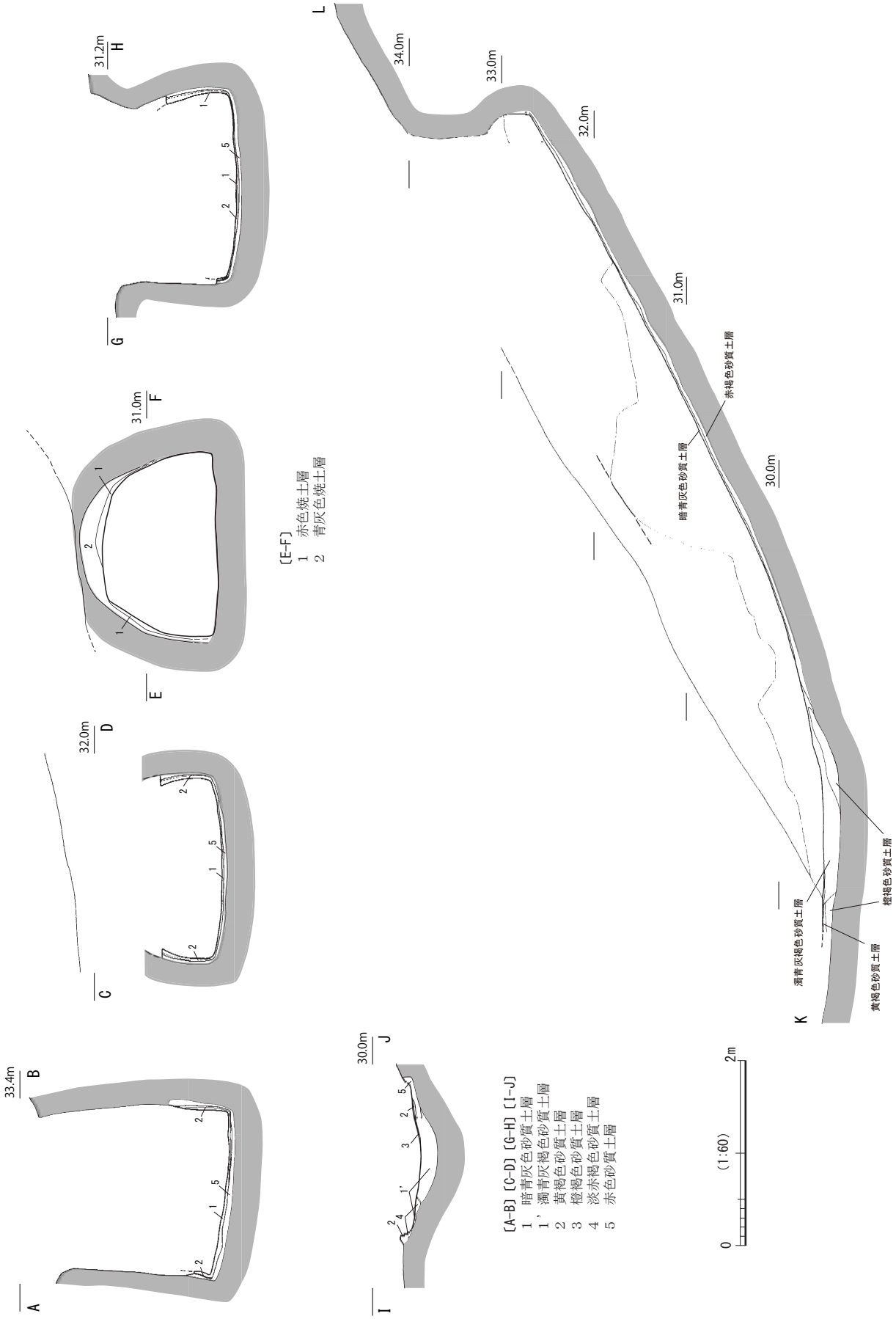
第 23 図　4号窯前庭部断面図・灰原グリッド配置図 (S=1/80・1/200)



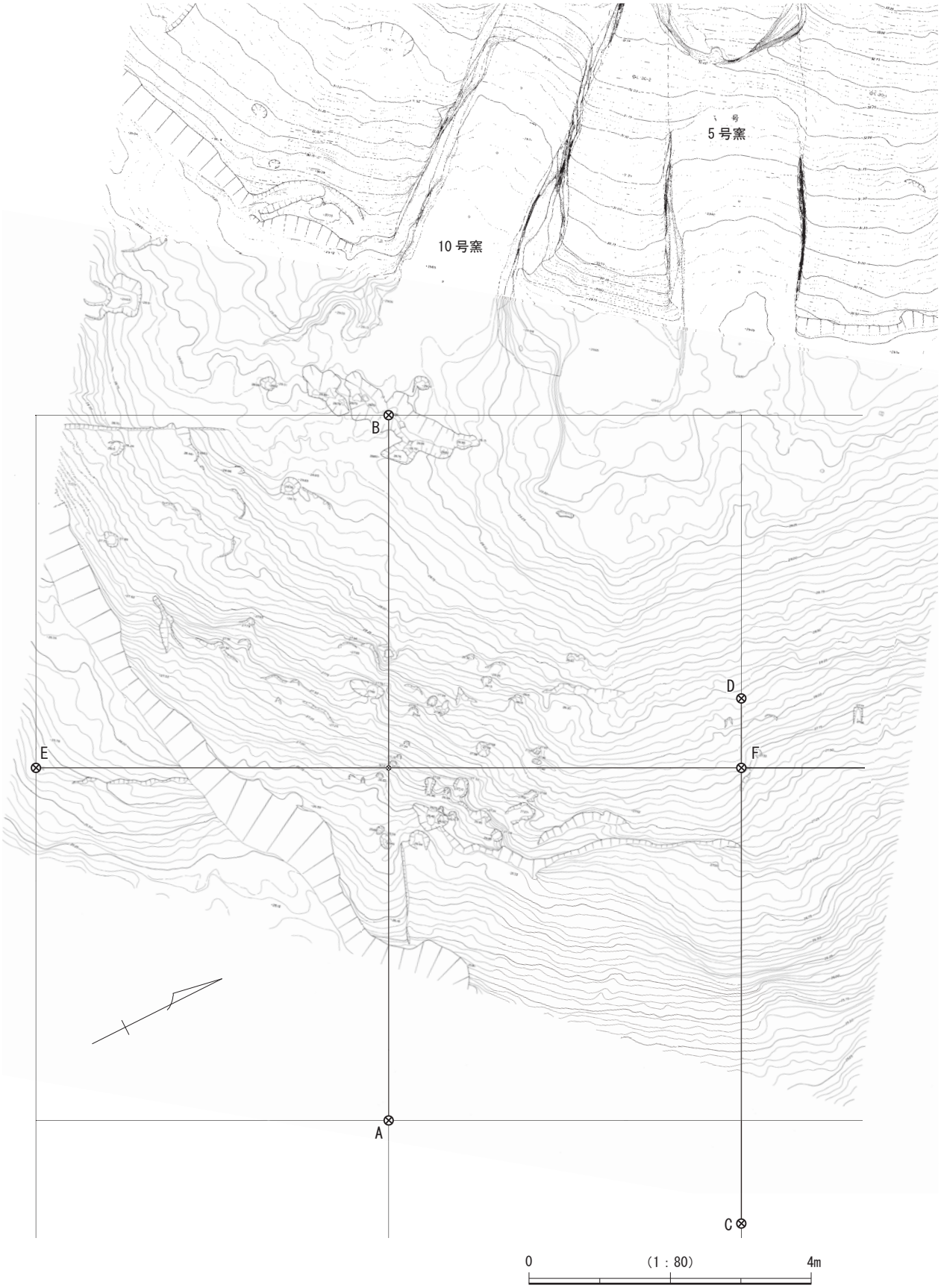
第 24 図　4 号窯灰原遺物出土状況（S=1/60）



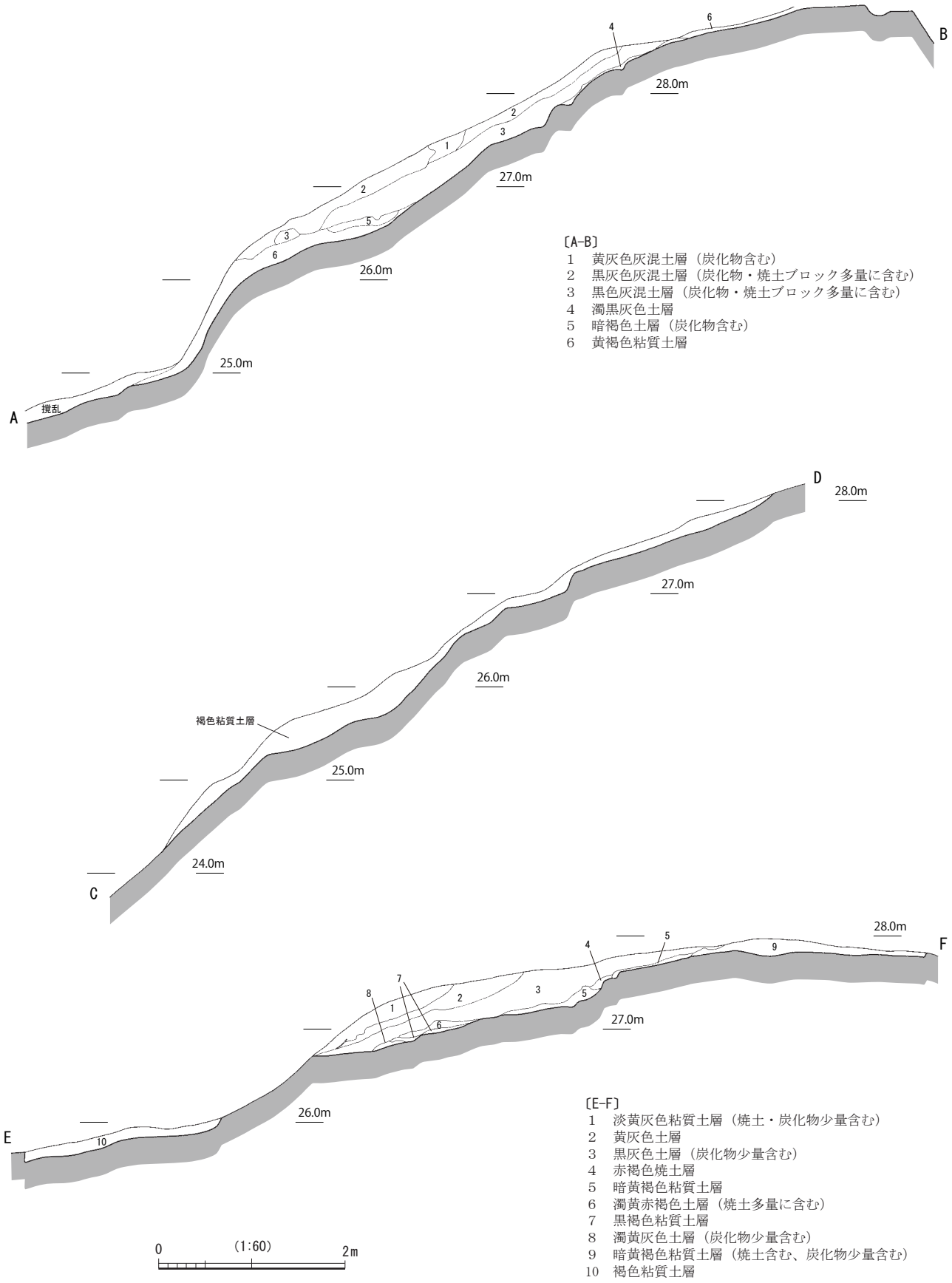
第25図　5号窯平面図（S=1/60）



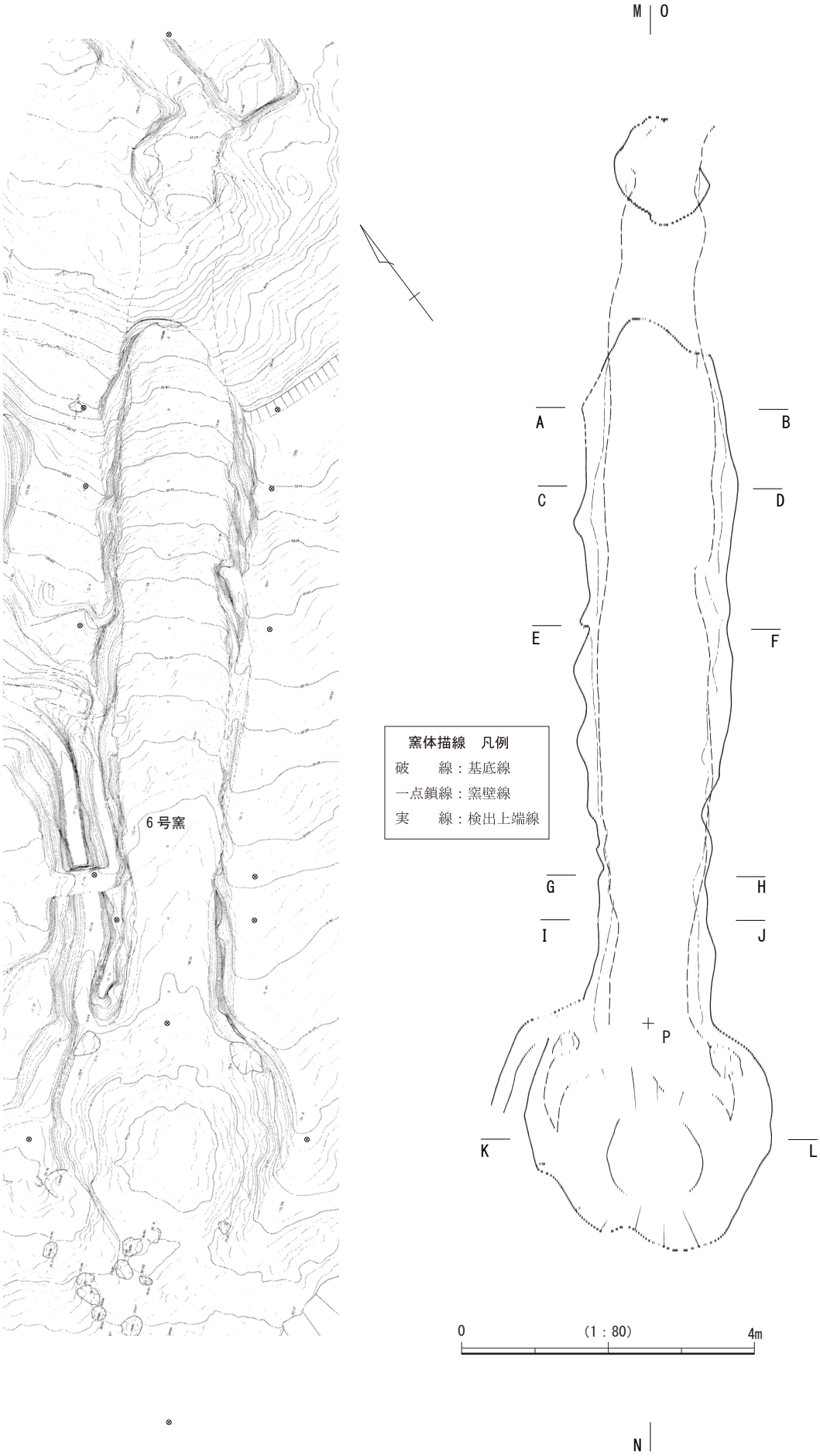
第 26 図　5 号窯断面図（S=1/60）



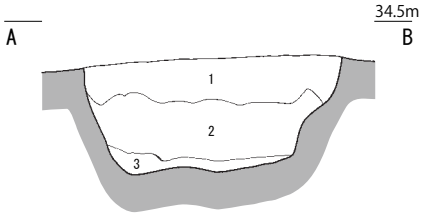
第27図　5号窯・10号窯灰原平面図（S=1/80）



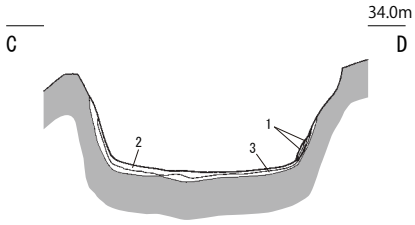
第 28 図　5 号窯・10 号窯灰原断面図（S=1/60）



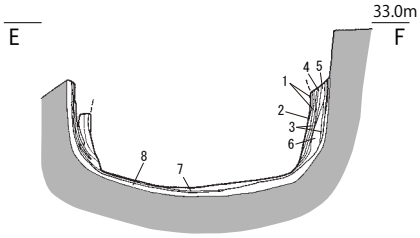
第29図　6号窯平面図 (S=1/80)



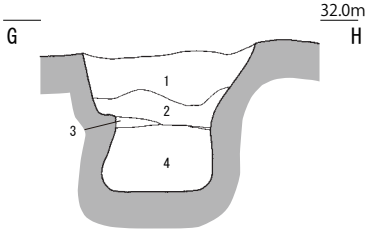
〔A-B〕
1　茶褐色粘質土層
2　天井崩落土
3　青灰色砂質土層（床面）



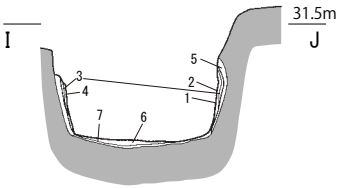
〔C-D〕
1　暗灰色砂質土層
2　青白色砂質土層
3　赤色砂質土層



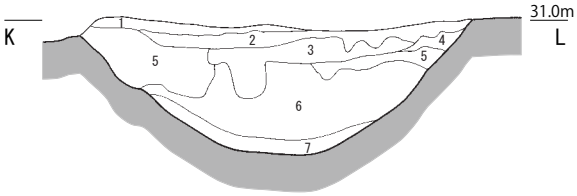
〔E-F〕
1　暗青灰色砂質土層
2　青白色砂質土層
3　青灰色砂質土層
4　黄褐色砂質土層
5　橙褐色砂質土層
6　暗褐色粘質土層
7　黄褐色砂質土層
8　赤色砂質土層



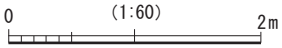
〔G-H〕
1　茶褐色粘質土層
2　橙色粘土層
3　白色粘土層
4　天井崩落土（赤色焼土＋青灰色焼土）



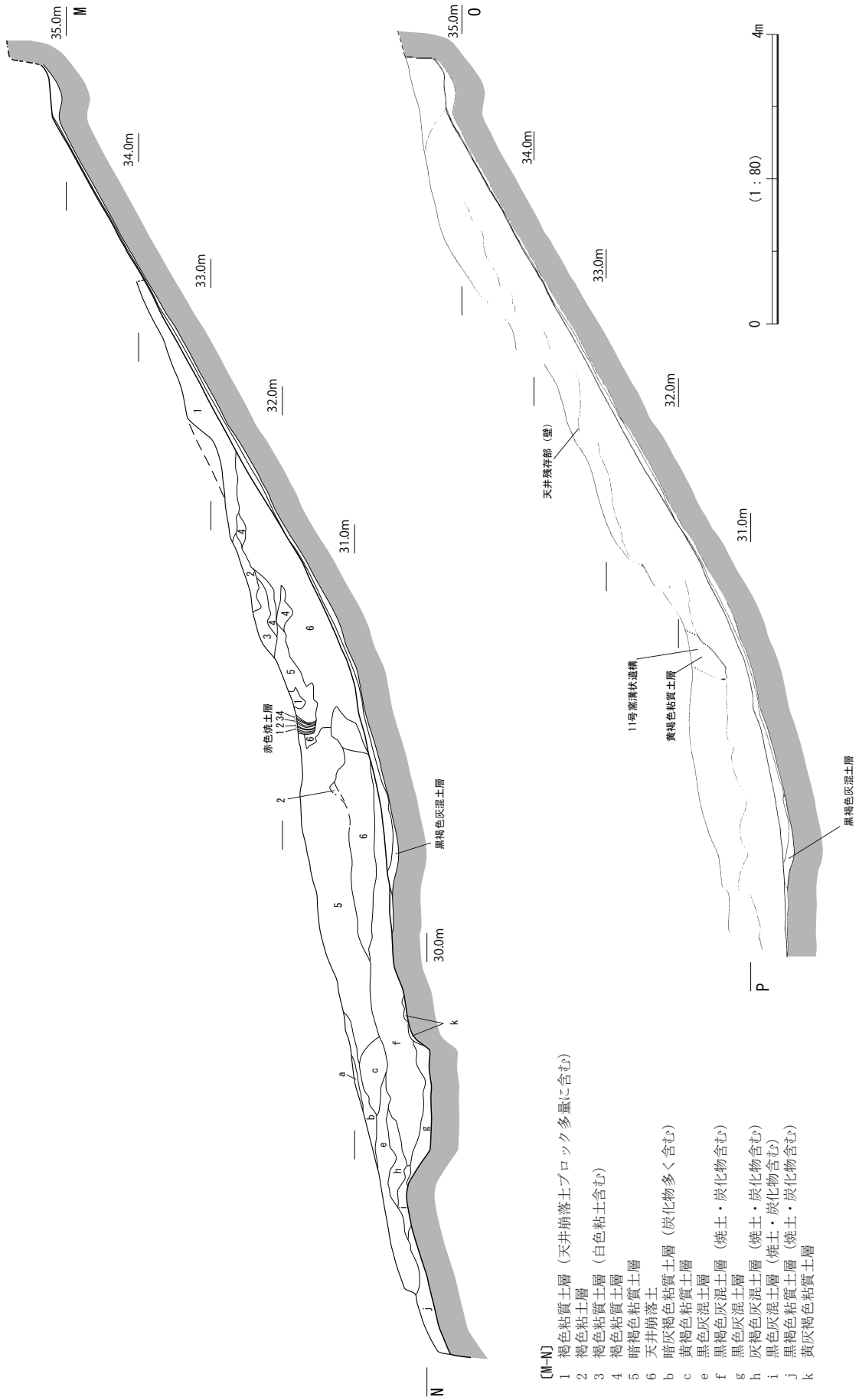
〔I-J〕
1　暗青灰色砂質土層
2　青灰色砂質土層
3　青白色砂質土層
4　黄褐色砂質土層
5　赤色砂質土層
6　暗橙褐色砂質土層
7　黒褐色粘質土層



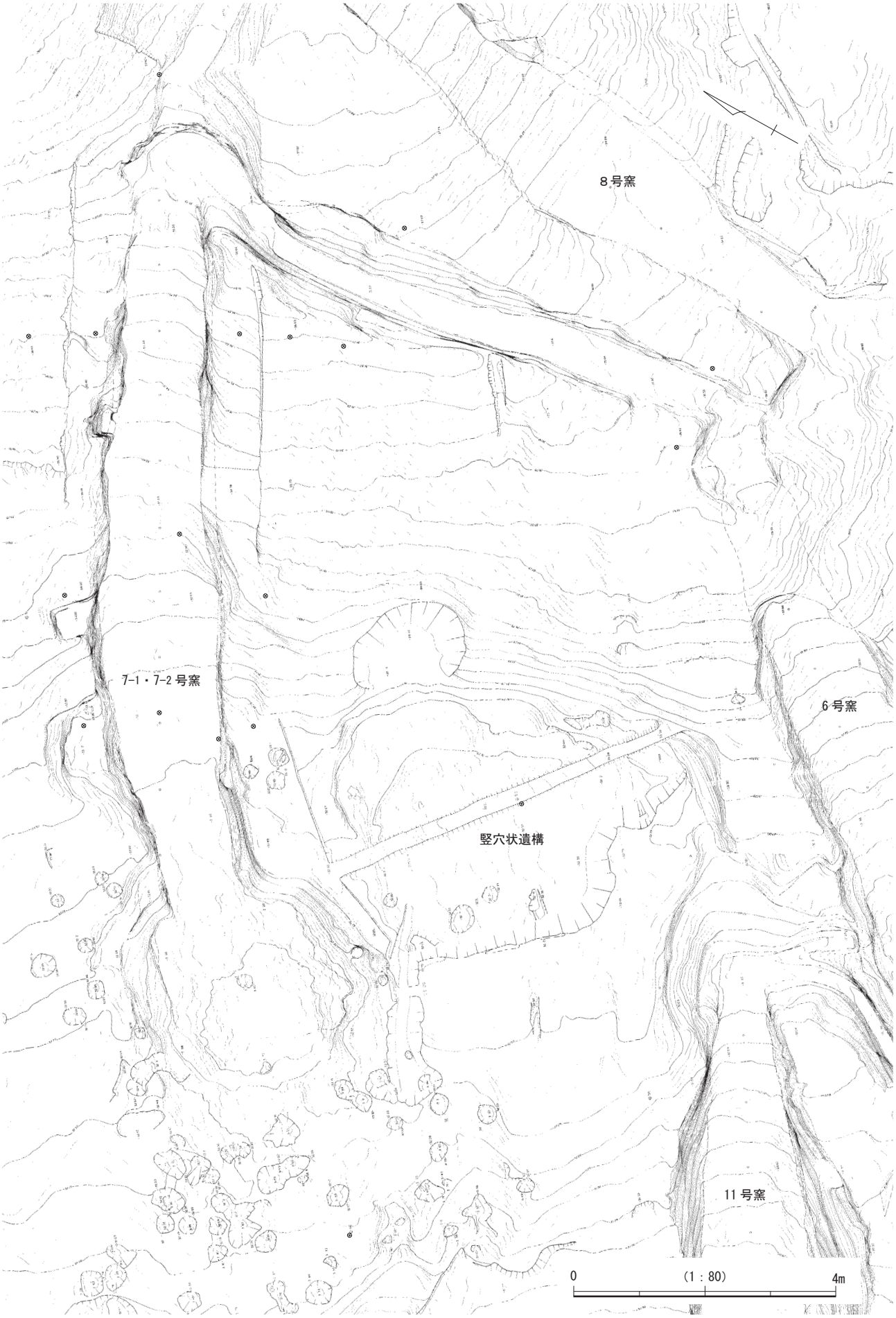
〔K-L〕
1　灰褐色粘質土層（炭化物少量含む）
2　暗灰褐色粘質土層（炭化物多く含む）
3　黄褐色粘質土層
4　黒灰褐色粘質土層
5　黒色灰混土層（炭化物多量に含む）
6　黒褐色灰混土層（赤色焼土、炭化物多量に含む）
7　黒色灰混土層



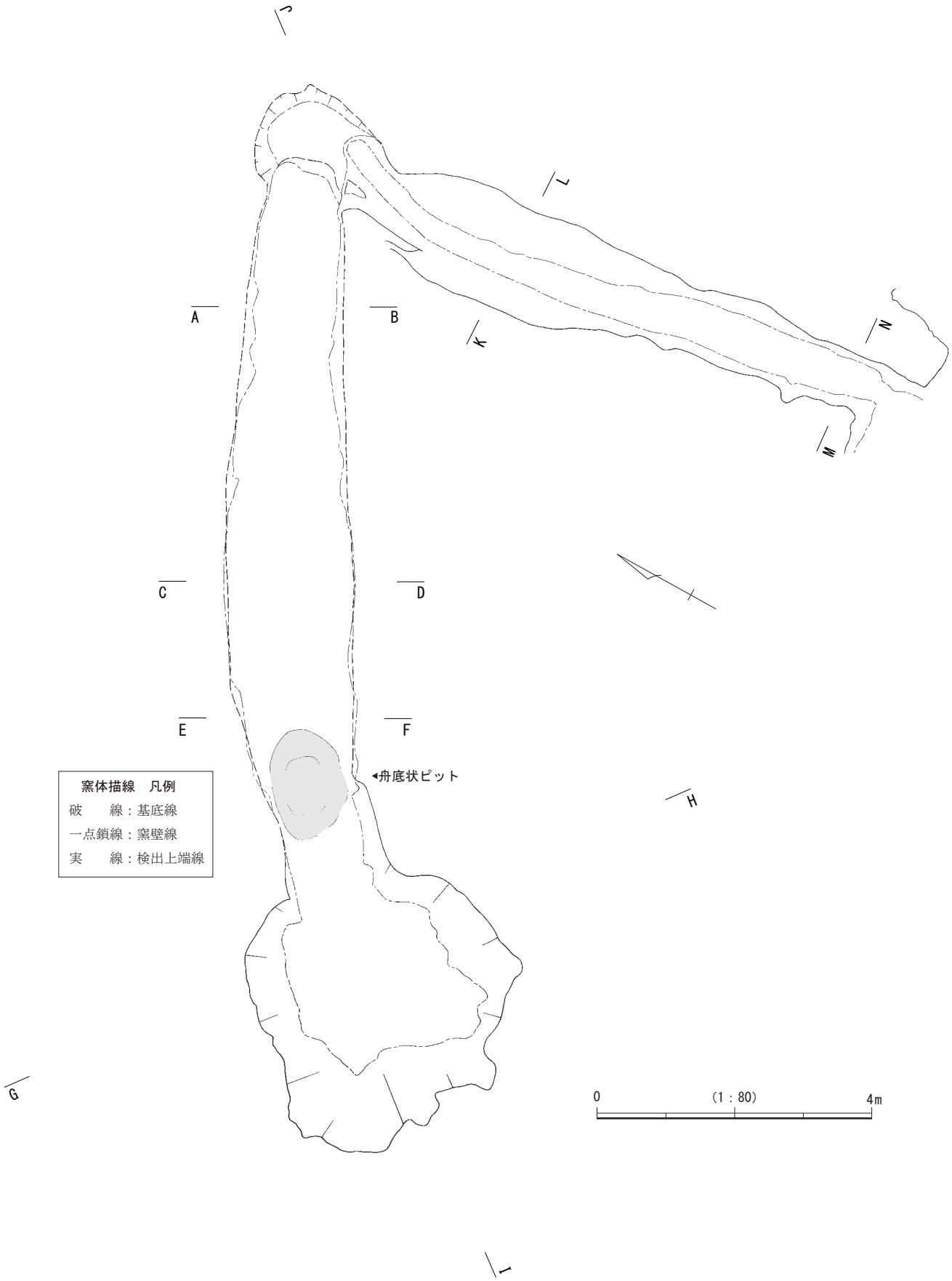
第 30 図　6 号窯断面図 1（S=1/60）



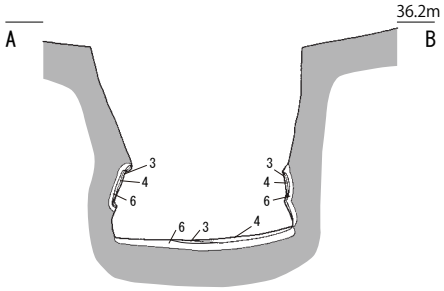
第 31 図　6 号窯断面図 2（S=1/80）

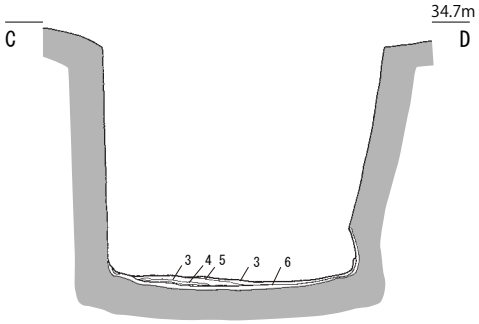


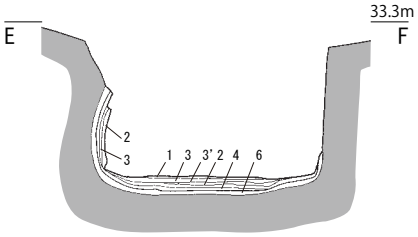
第32図　7-1・7-2号窯平面図（S=1/80）



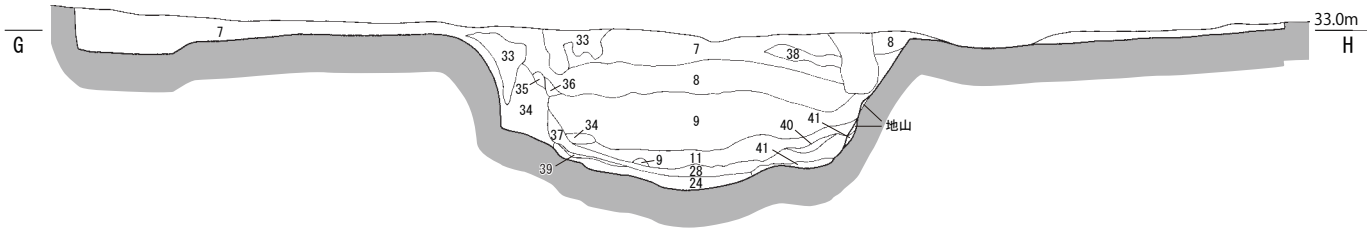
第 33 図　7-1 号窯平面図（S=1/80）



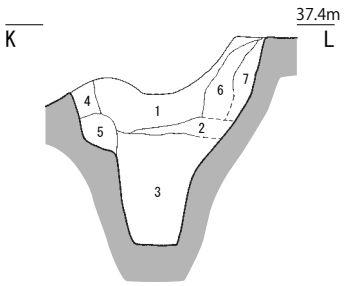


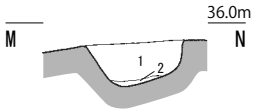


〔A-B〕〔C-D〕〔E-F〕
1　暗青灰色砂質土層
2　青灰色砂質土層
3　青白色砂質土層
3'　淡青白色砂質土層
4　黄褐色砂質土層
5　橙褐色砂質土層
6　赤色砂質土層



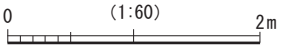
〔G-H〕
7　I-J 断面第 7 層に同じ
8　I-J 断面第 8 層に同じ
9　I-J 断面第 9 層に同じ
11　I-J 断面第 11 層に同じ
24　I-J 断面第 24 層に同じ
28　I-J 断面第 28 層に同じ
33　淡黒褐色砂質土層（焼土・炭化物含む）
34　褐色粘質土層（焼土量含む）
35　明黄褐色粘質土層
36　暗黄褐色粘質土層
37　暗褐色粘質土層（炭化物含む）
38　黄褐色粘質土層
39　黄色粘質土層
40　黄灰色粘土層
41　灰色粘土層



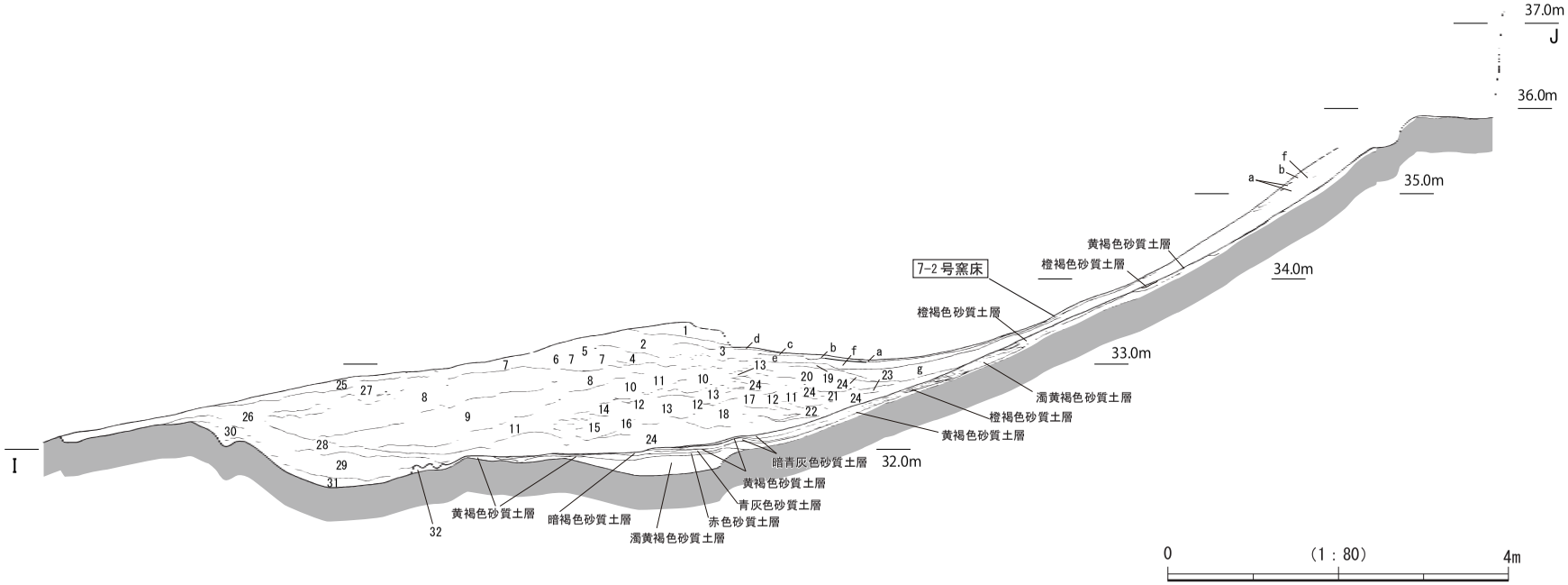


〔M-N〕
1　黄褐色粘質土層
2　黄褐色粘質土層（焼土ブロック含む）

〔K-L〕
1　褐色粘質土層
2　暗灰褐色粘質土層
3　暗褐色粘質土層
4　黄灰褐色粘質土層
5　黄褐色粘質土層
6　暗黄褐色粘質土層
7　灰褐色粘質土層



第 34 図　7-1 号窯断面図（S=1/60）



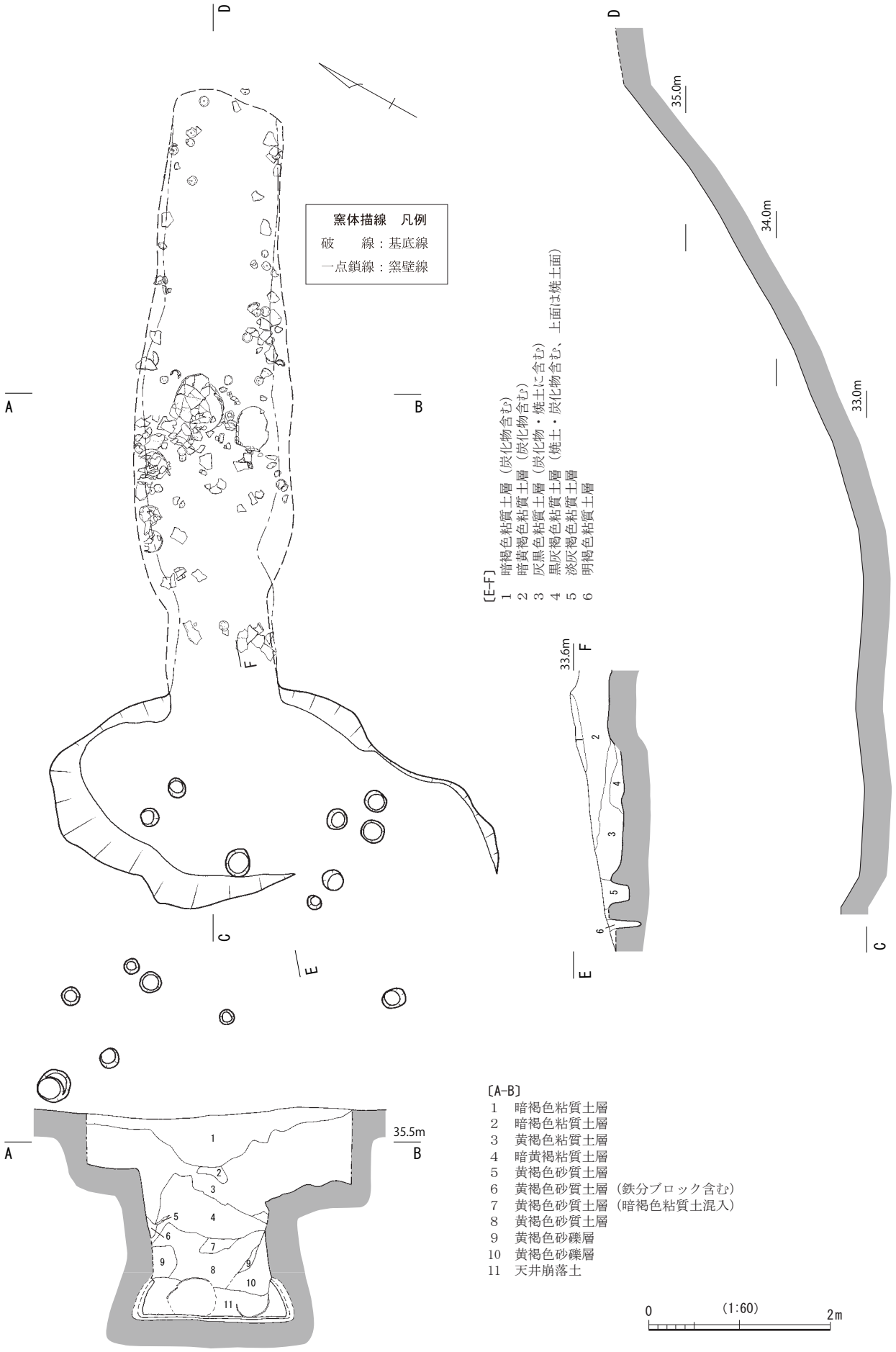
〔I-J〕

1　暗黄褐色粘質土層（炭化物・焼土含む）
2　黒灰色土層（炭化物多量に含む）
3　黒灰褐色粘質土層（炭化物多量に含む）
4　暗灰褐色粘質土層（炭化物多量に含む）
5　黒色土層（炭化物多量に含む）
6　黒色土層（炭化物多量に含む）
7　茶褐色粘質土層
8　明黄褐色粘質土層
9　濁褐色粘質土層
10　淡灰褐色粘質土層
11　褐色粘質土層
12　黄褐色粘質土層
13　黄灰褐色粘質土層
14　暗褐色粘質土層
15　濁黄褐色粘質土層
16　黄灰褐色粘質土層
17　明褐色粘質土層
18　黄灰褐色粘質土層
19　茶褐色粘質土層
20　濁黄灰褐色粘質土層
21　灰色粘質土層
22　褐色粘質土層
23　暗灰褐色粘質土層
24　天井崩落土層
25　濁褐色粘質土層
26　黒色土層（炭化物多量に含む）
27　黒灰褐色粘質土層（炭化物・焼土含む）
28　黒色土層（炭化物多量に含む）
29　濁暗黄褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
30　黒色土層（炭化物含む）
31　黒褐色土層（炭化物含む）
32　黄褐色砂質土層（地山）

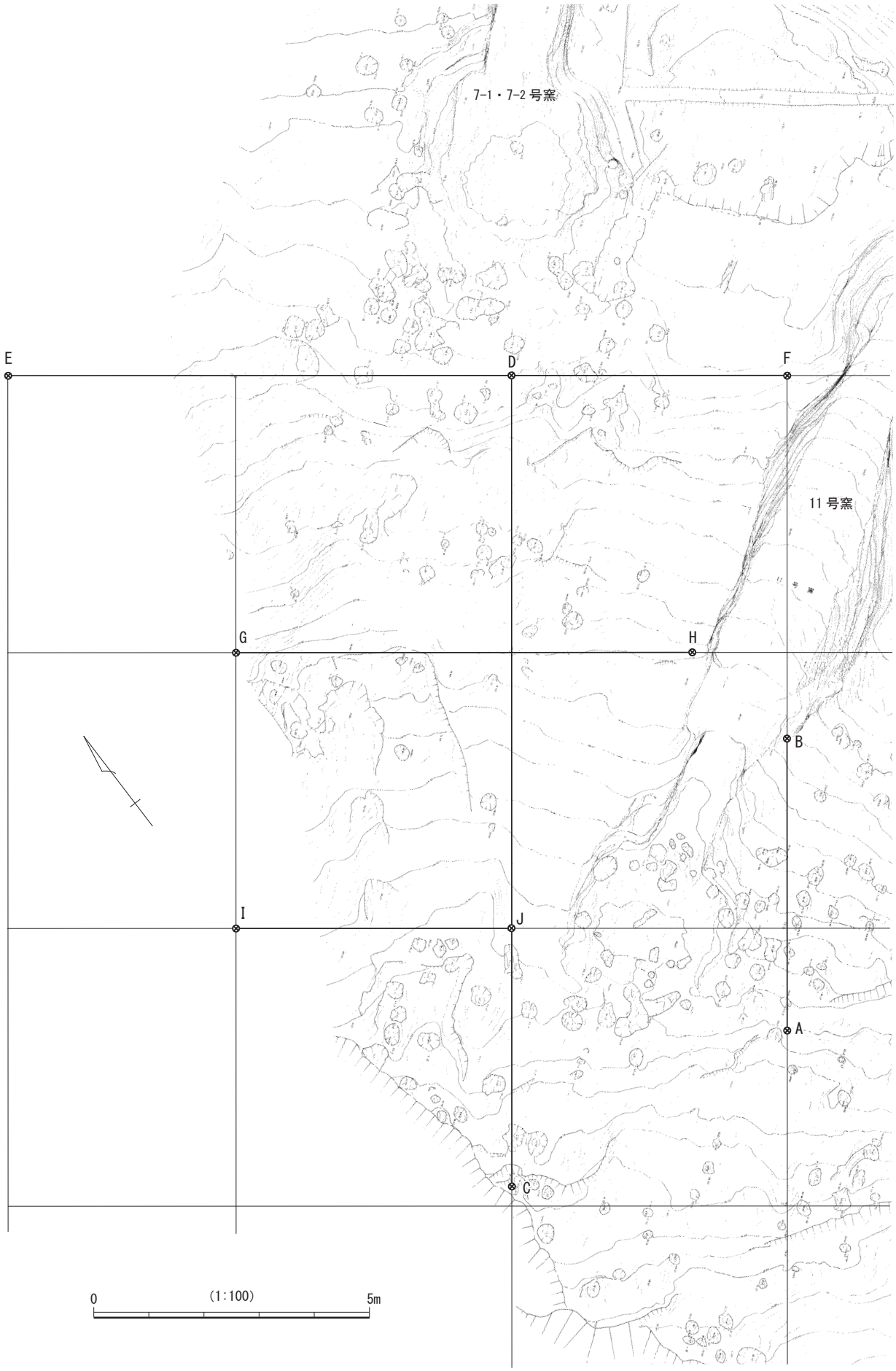
a　青灰色還元床
b　赤褐色焼土層
c　明黄色土層
d　黒灰色灰混土層
e　赤色焼土層
f　濁赤褐色焼土層
g　黄褐色粘質土層（焼土含む）

※1～32：7-1 号窯土層
a～f：7-2 号窯土層

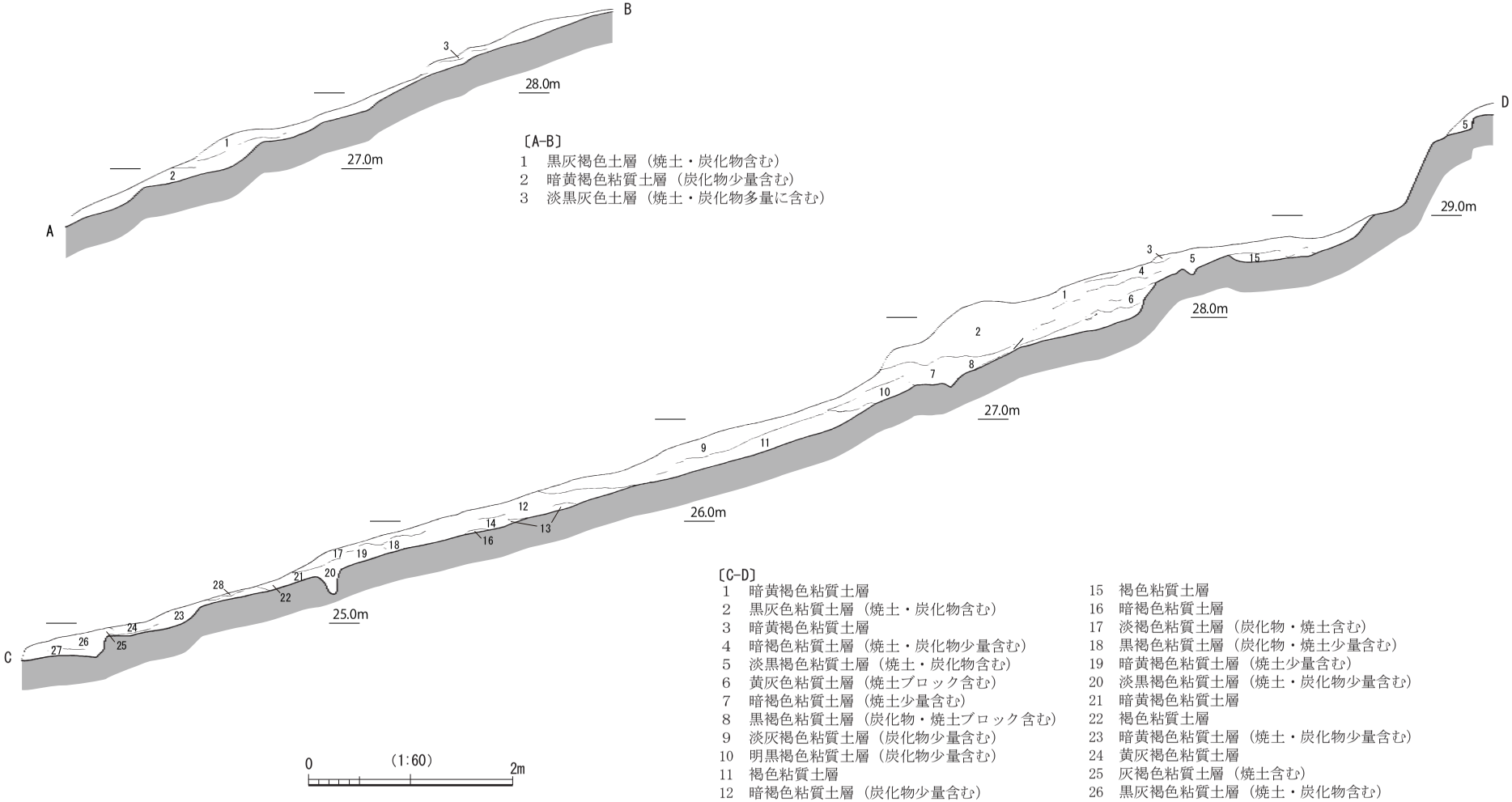
第 35 図　7-1 号・7-2 号窯断面図（S=1/80）



第 36 図　7-2 号窯平面図・断面図（S=1/60）



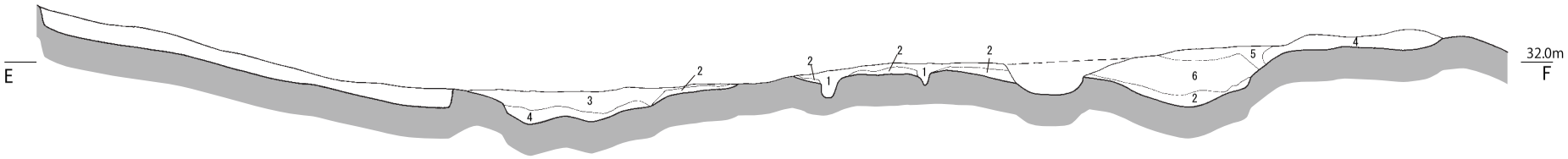
第 37 図　7-1・7-2 号窯灰原平面図（S=1/100）



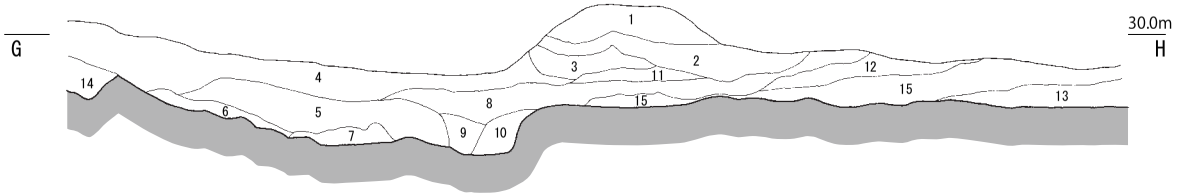
〔A-B〕
1　黒灰褐色土層（焼土・炭化物含む）
2　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
3　淡黒灰色土層（焼土・炭化物多量に含む）

〔C-D〕
1　暗黄褐色粘質土層
2　黒灰色粘質土層（焼土・炭化物含む）
3　暗黄褐色粘質土層
4　暗褐色粘質土層（焼土・炭化物少量含む）
5　淡黒褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
6　黄灰色粘質土層（焼土ブロック含む）
7　暗褐色粘質土層（焼土少量含む）
8　黒褐色粘質土層（炭化物・焼土ブロック含む）
9　淡灰褐色粘質土層（炭化物少量含む）
10　明黒褐色粘質土層（炭化物少量含む）
11　褐色粘質土層
12　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
13　褐色粘質土層
14　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
15　褐色粘質土層
16　暗褐色粘質土層
17　淡褐色粘質土層（炭化物・焼土含む）
18　黒褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
19　暗黄褐色粘質土層（焼土少量含む）
20　淡黒褐色粘質土層（焼土・炭化物少量含む）
21　暗黄褐色粘質土層
22　褐色粘質土層
23　暗黄褐色粘質土層（焼土・炭化物少量含む）
24　黄灰褐色粘質土層
25　灰褐色粘質土層（焼土含む）
26　黒灰褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
27　灰褐色粘質土層（焼土含む）

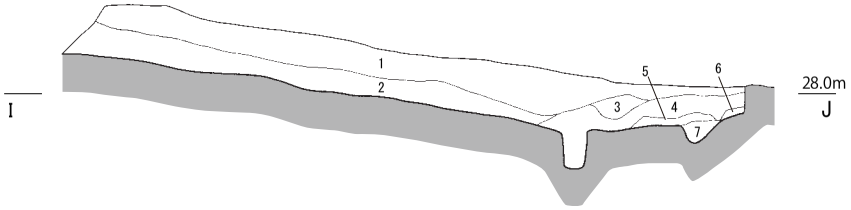
第 38 図　7-1・7-2 号窯灰原断面図 1（S=1/60）



〔E-F〕
1　淡黒灰色灰混土層（炭化物少量含む）
2　濁黄灰褐色粘質土層
3　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
4　褐色粘質土層
5　暗灰褐色粘質土層
6　黒灰色土層（炭化物多量含む）



〔G-H〕
1　黄褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
2　黒灰色粘質土層（炭化物・焼土含む）
3　灰白色砂質土層（炭化物少量含む）
4　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
5　褐色粘質土層（焼土含む）
6　暗黄褐色粘質土層
7　暗黄灰褐色粘質土層（炭化物多量、焼土少量含む）
8　黒褐色粘質土層（炭化物・焼土ブロック含む）
9　淡黒灰色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
10　褐色粘質土層
11　淡灰褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）
12　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
13　暗黄褐色粘質土層
14　褐色粘質土層
15　褐色粘質土層

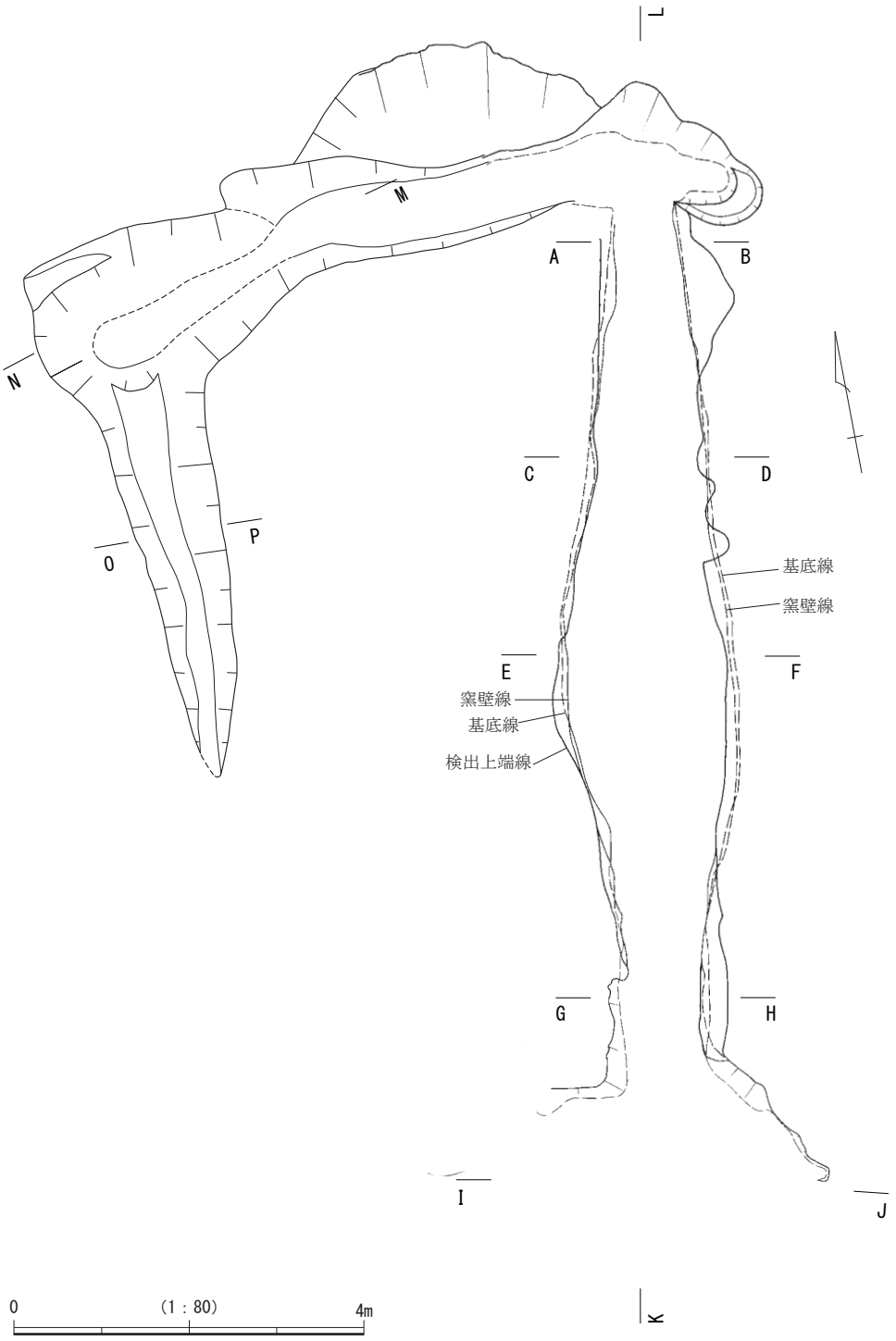


〔I-J〕
1　黄褐色粘質土層
2　暗褐色粘質土層（炭化物少量含む）
3　淡黒褐色粘質土（炭化物少量含む）
4　黒褐色粘質土（炭化物・焼土含む）
5　淡褐色粘質土層（焼土少量含む）
6　淡黄褐色粘質土層
7　暗褐色粘質土層（炭化物・焼土少量含む）

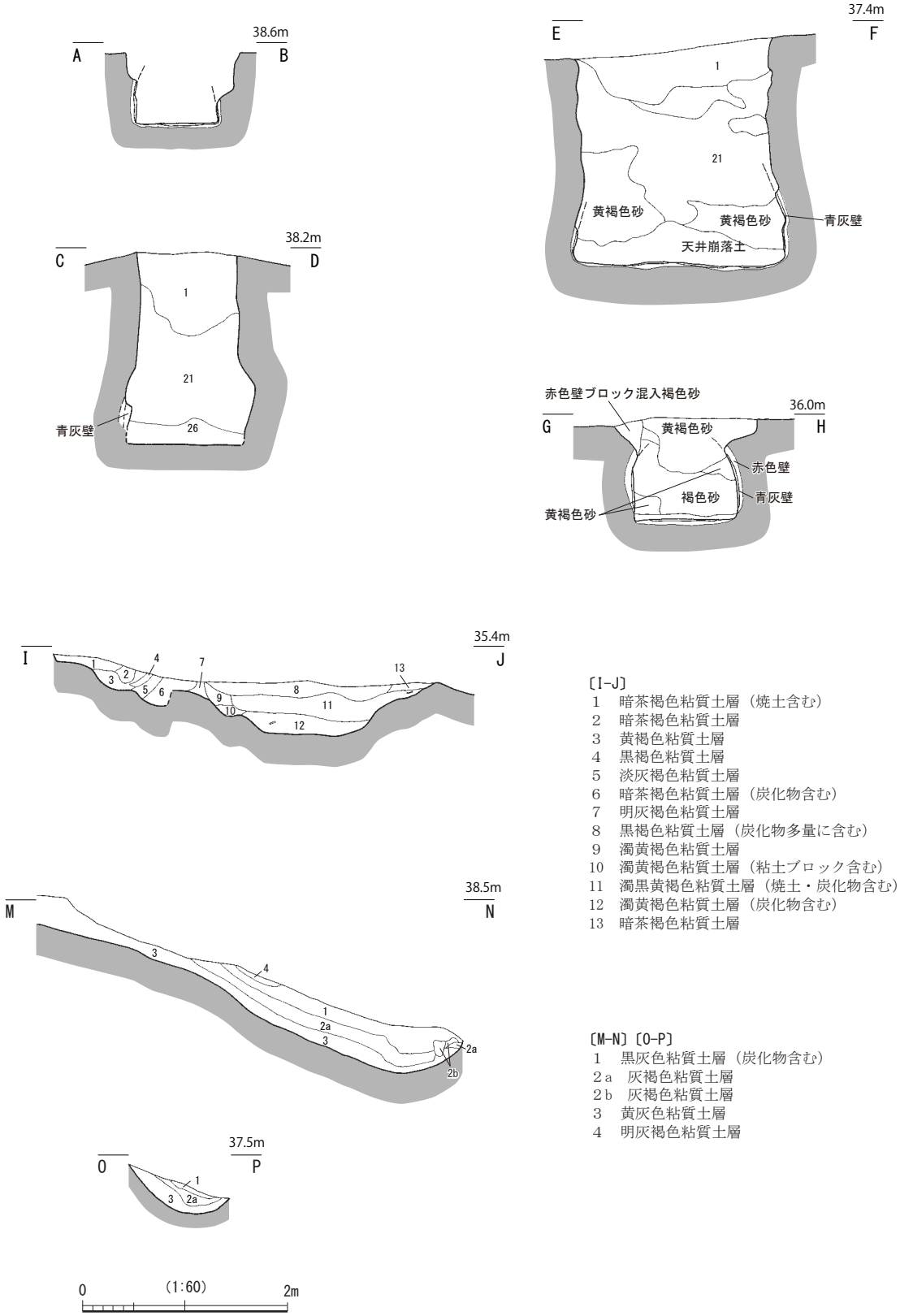
第39図　7-1・7-2号灰原断面図2（S=1/60）

0 (1：80) 4m

第 40 図　8 号窯平面図 1（S=1/80）



第 41 図　8 号窯平面図 2（S=1/80）

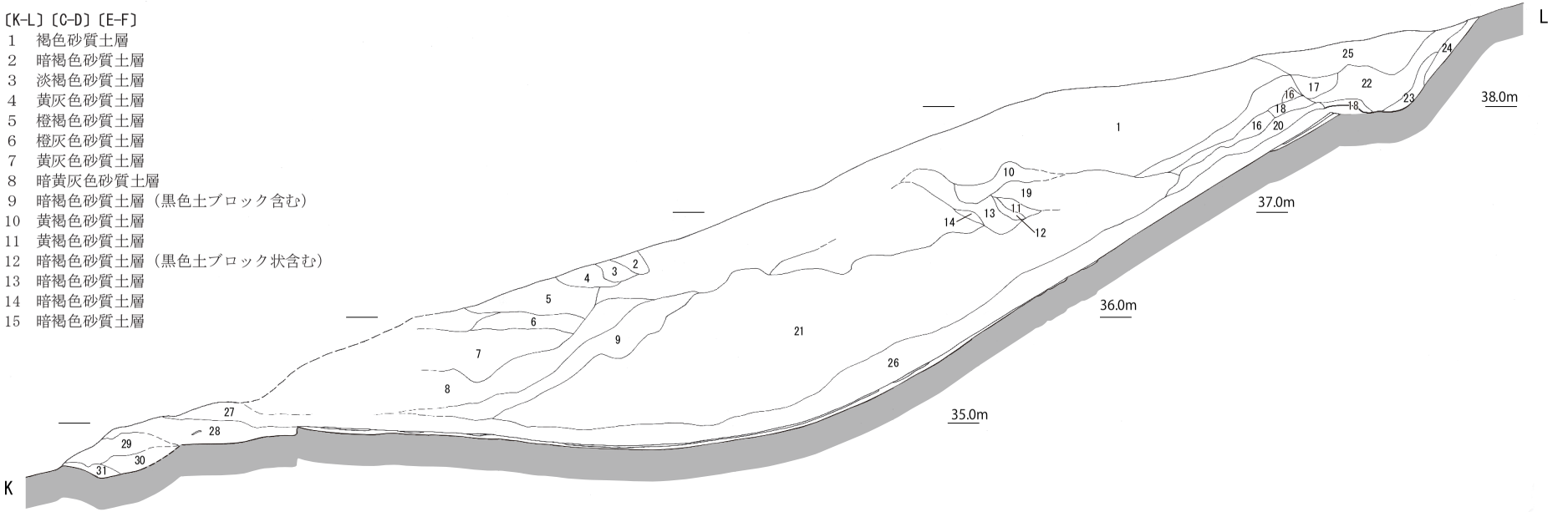


〔I-J〕
1　暗茶褐色粘質土層（焼土含む）
2　暗茶褐色粘質土層
3　黄褐色粘質土層
4　黒褐色粘質土層
5　淡灰褐色粘質土層
6　暗茶褐色粘質土層（炭化物含む）
7　明灰褐色粘質土層
8　黒褐色粘質土層（炭化物多量に含む）
9　濁黄褐色粘質土層
10　濁黄褐色粘質土層（粘土ブロック含む）
11　濁黒黄褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
12　濁黄褐色粘質土層（炭化物含む）
13　暗茶褐色粘質土層

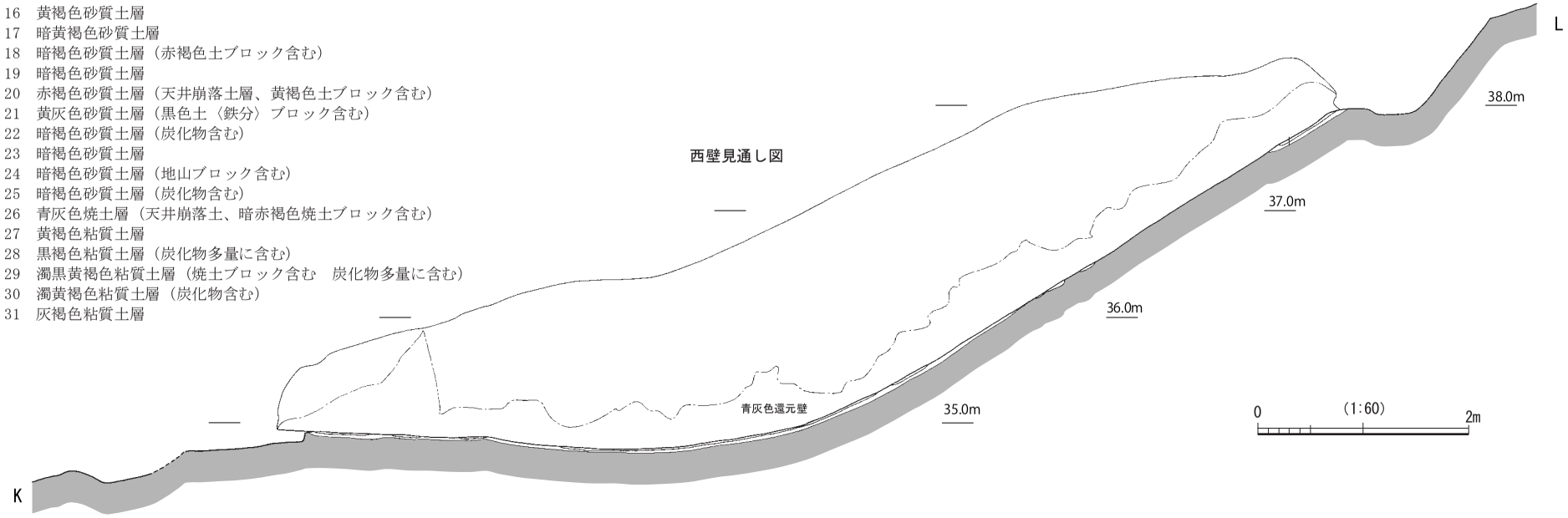
〔M-N〕〔O-P〕
1　黒灰色粘質土層（炭化物含む）
2a　灰褐色粘質土層
2b　灰褐色粘質土層
3　黄灰色粘質土層
4　明灰褐色粘質土層

第 42 図　8 号窯断面図 1（S=1/60）

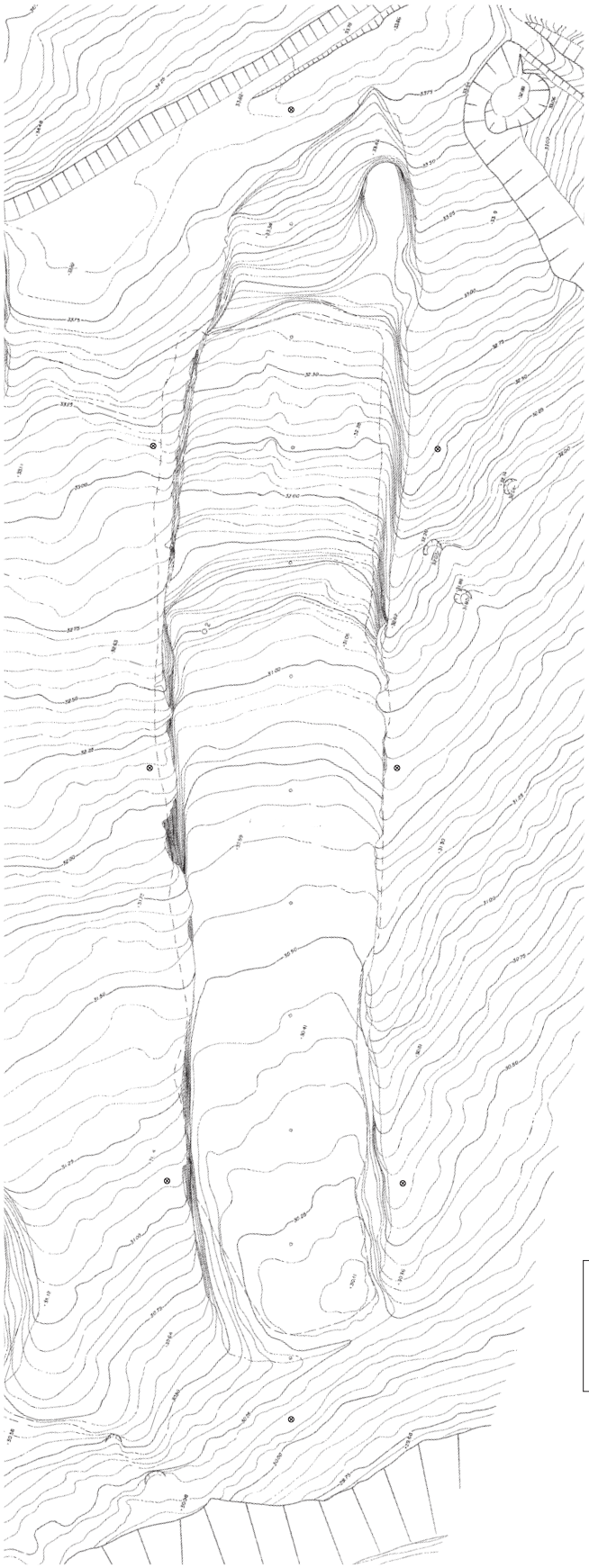
〔K-L〕〔C-D〕〔E-F〕
1　褐色砂質土層
2　暗褐色砂質土層
3　淡褐色砂質土層
4　黄灰色砂質土層
5　橙褐色砂質土層
6　橙灰色砂質土層
7　黄灰色砂質土層
8　暗黄灰色砂質土層
9　暗褐色砂質土層（黒色土ブロック含む）
10　黄褐色砂質土層
11　黄褐色砂質土層
12　暗褐色砂質土層（黒色土ブロック状含む）
13　暗褐色砂質土層
14　暗褐色砂質土層
15　暗褐色砂質土層

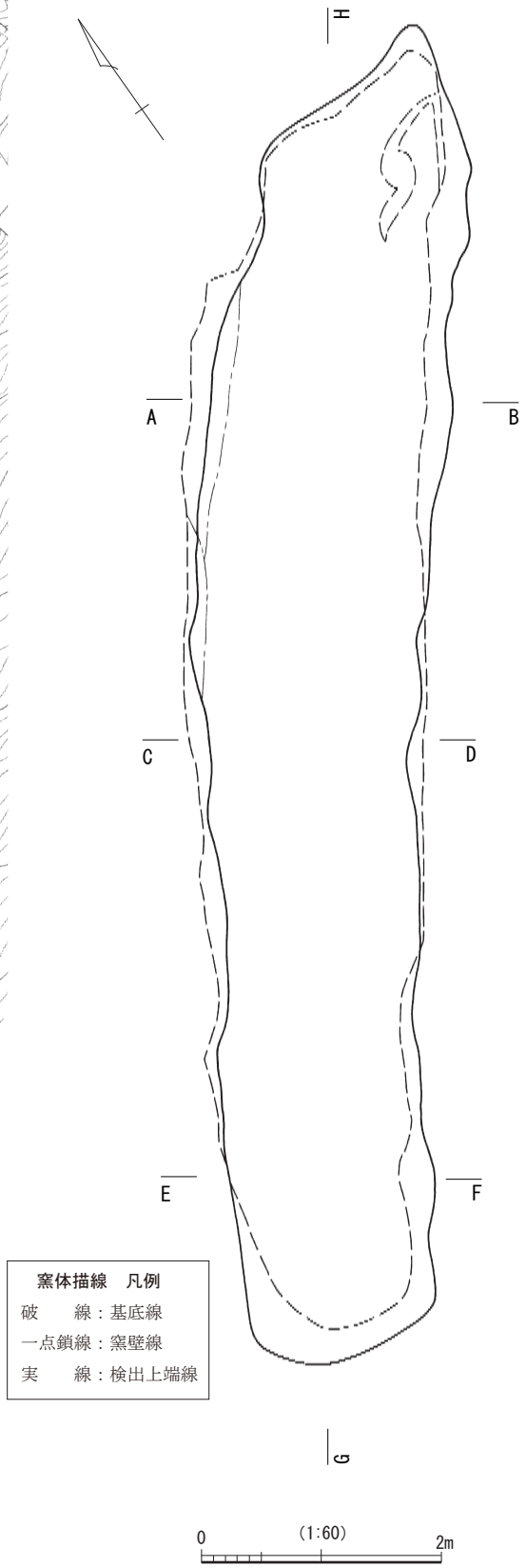


16　黄褐色砂質土層
17　暗黄褐色砂質土層
18　暗褐色砂質土層（赤褐色土ブロック含む）
19　暗褐色砂質土層
20　赤褐色砂質土層（天井崩落土層、黄褐色土ブロック含む）
21　黄灰色砂質土層（黒色土〈鉄分〉ブロック含む）
22　暗褐色砂質土層（炭化物含む）
23　暗褐色砂質土層
24　暗褐色砂質土層（地山ブロック含む）
25　暗褐色砂質土層（炭化物含む）
26　青灰色焼土層（天井崩落土、暗赤褐色焼土ブロック含む）
27　黄褐色粘質土層
28　黒褐色粘質土層（炭化物多量に含む）
29　濁黒黄褐色粘質土層（焼土ブロック含む　炭化物多量に含む）
30　濁黄褐色粘質土層（炭化物含む）
31　灰褐色粘質土層

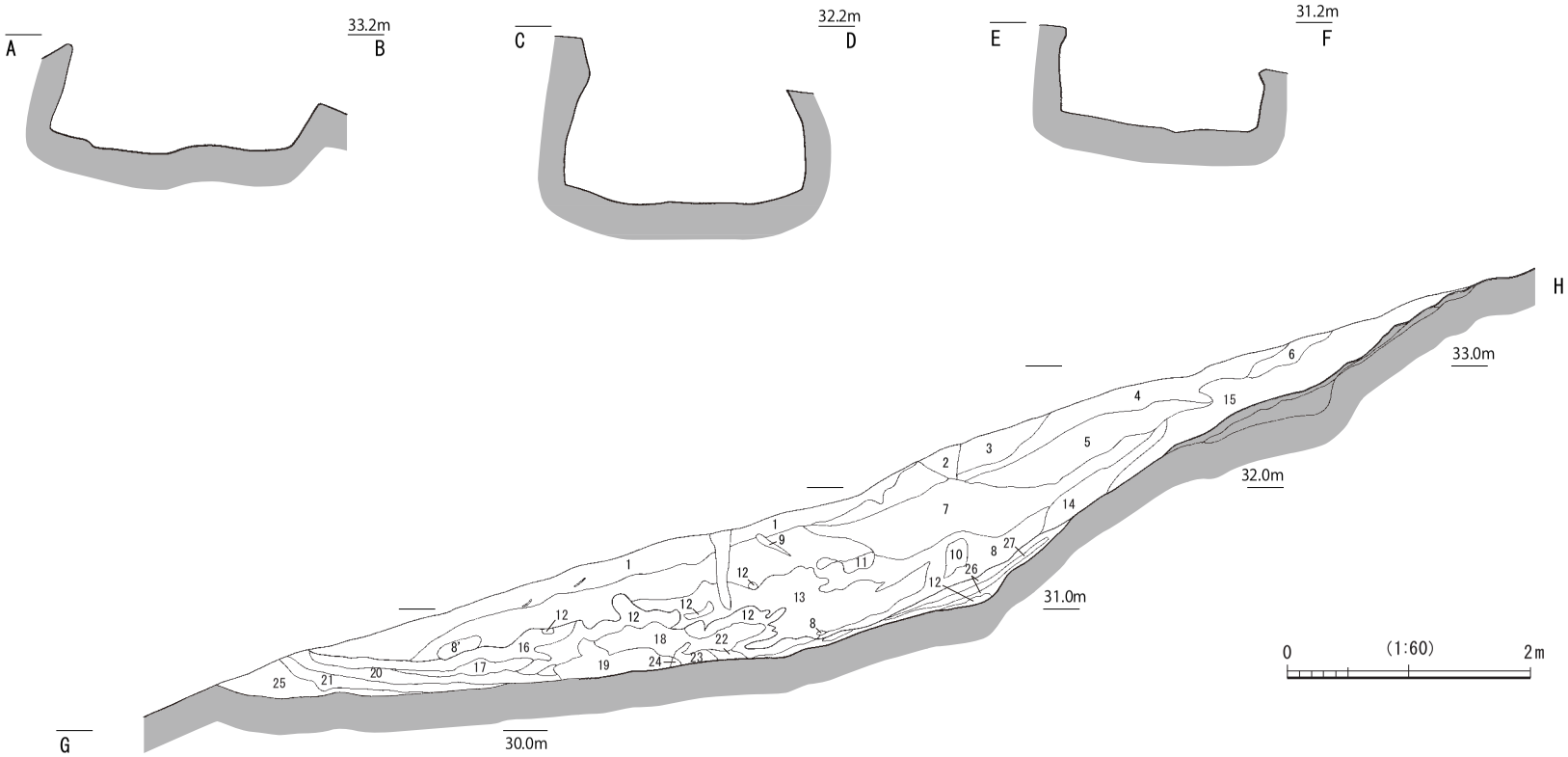


第43図　8号窯断面図2（S=1/60）





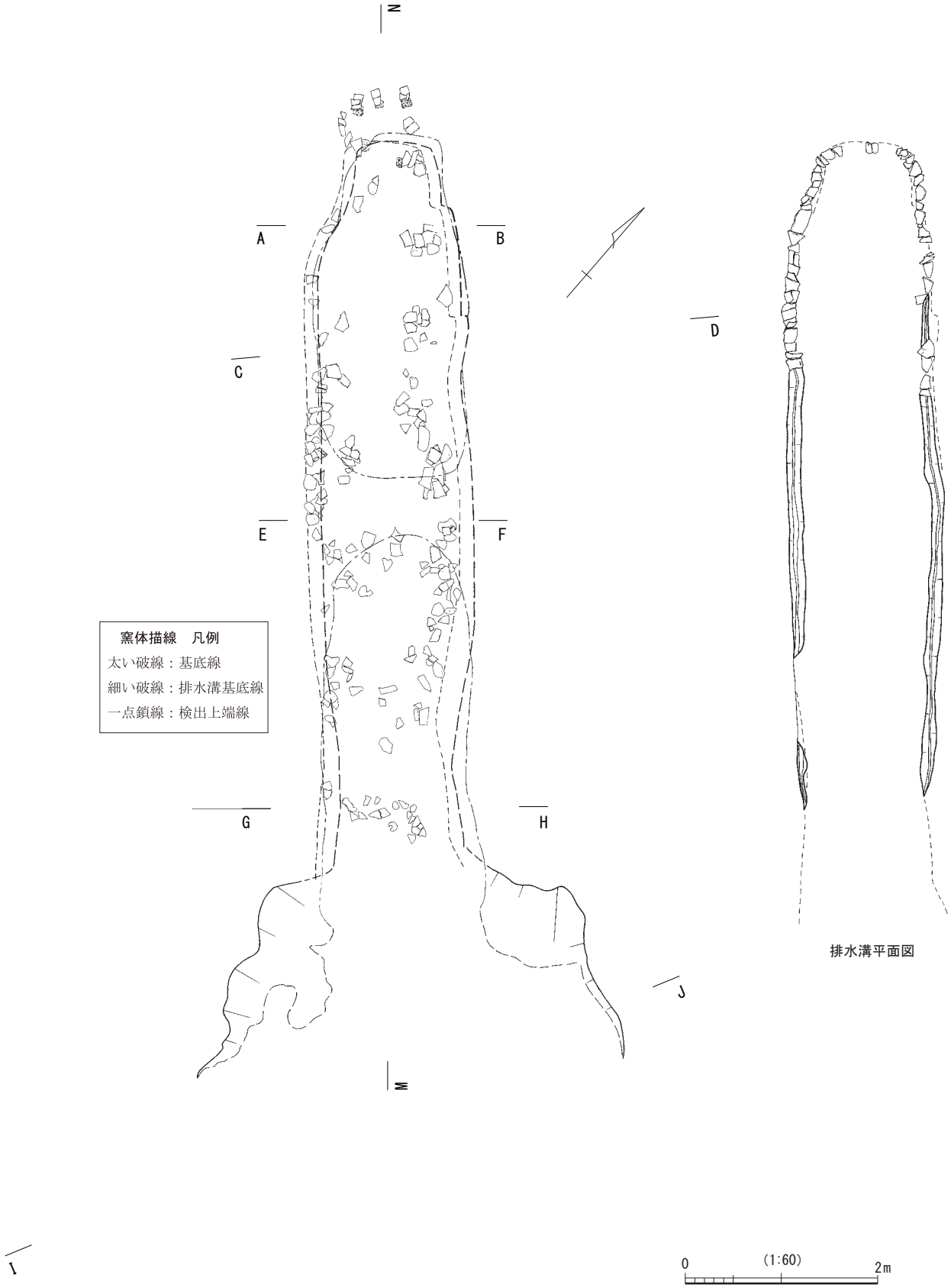
第 44 図　9 号窯平面図（S=1/60）



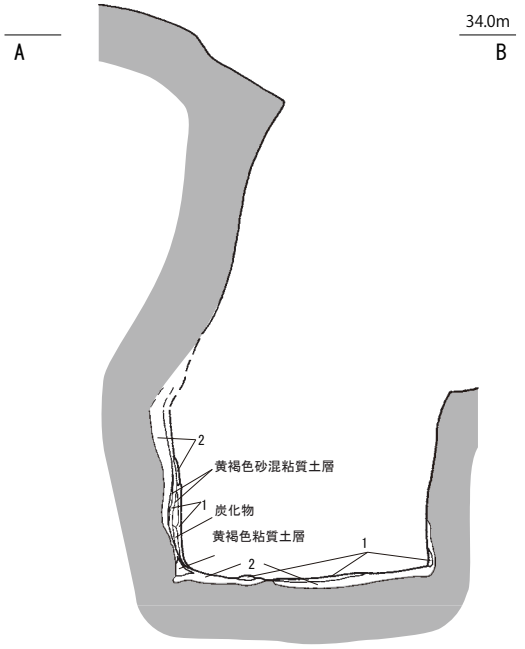
第45図　9号窯断面図（S=1/60）

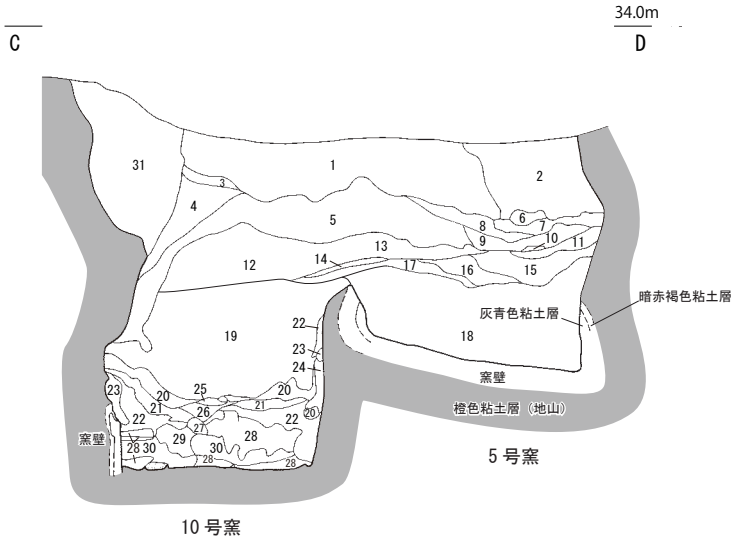
〔G-H〕
1　褐色砂質土層
2　淡灰褐色砂質土層
3　黄褐色粘質土層
4　黄褐色粘質土層（礫含む）
5　黄褐色粘質土層（窯壁ブロック含む）
6　黄褐色粘質土層窯壁ブロック含む）
7　褐色粘質土層（炭化物、窯壁ブロック含む）
8　褐色粘質土層（焼土ブロック含む）
8’褐色粘質土層（多量の炭含む）
9　黄褐色粘質土層
10　黄褐色粘質土層
11　灰褐色粘質土層
12　黄褐色粘質土層
13　灰白色砂質土層
14　褐色粘質土層
15　褐色粘質土層（礫多く含む）
16　暗茶褐色粘質土層
17　黄褐色砂質粘質土層（炭化物含む）
18　明赤褐色粘質土層
19　白色粘土層
20　暗黄褐色土層
21　暗黄褐色土層（粘土ブロック含む）
22　暗灰茶色砂質粘土層
23　白色粘土層
24　淡灰褐色粘質土層（炭化物含む）
25　灰褐色土層
26　灰白色砂質土層
27　明赤褐色粘土層

第 46 図　10 号窯平面図 1（S=1/60）



第 47 図　10 号窯平面図 2（S=1/60）





0 (1:40) 1m

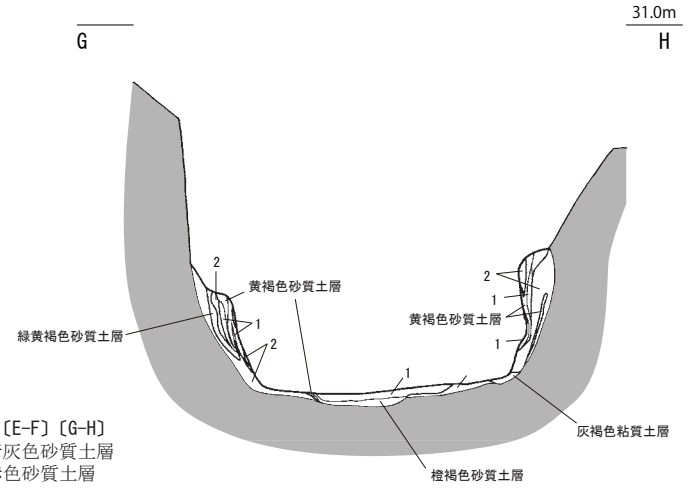
〔A-B〕〔E-F〕〔G-H〕

0 (1:60) 2m

〔C-D〕〔I-J〕

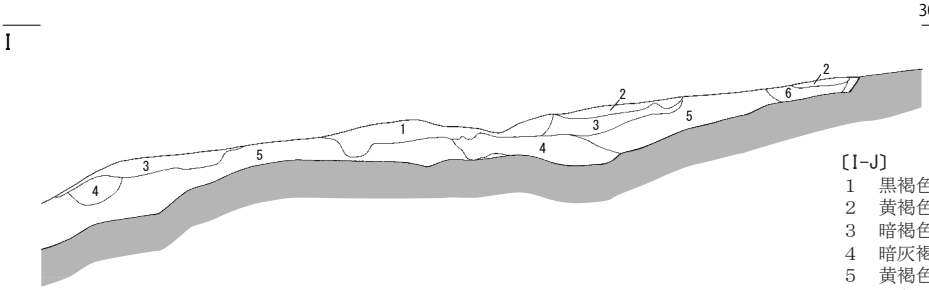
〔C-D〕

1 褐色粘質土層
2 黄灰褐色粘質土層
3 灰褐色粘質土層
4 淡黄灰色粘質土層
5 黄灰色粘質土層
6 橙褐色粘質土層
7 暗褐色粘質土層
8 暗黄灰褐色粘質土層
9 暗灰褐色粘質土層
10 橙褐色粘質土層
11 暗灰褐色粘質土層
12 灰褐色粘質土層
13 暗灰褐色粘質土層
14 暗灰褐色粘質土層
15 暗灰褐色粘質土層
16 暗黄灰褐色粘質土層
17 黄赤褐色砂質土層
18 天井崩落土
19 黄灰褐色砂質土層
20 黄褐色粘土層
21 橙褐色強粘質土層
22 白黄褐色強粘質土層
23 暗黄灰褐色粘質土層
24 白灰褐色粘土層
25 炭化物層
26 暗赤褐色粘土層
27 赤褐色粘土層
28 天井崩落土
29 茶褐色粘質土層（崩落土粒含む）
30 黄褐色粘質土層
31 黄灰褐色砂質土層



〔A-B〕〔E-F〕〔G-H〕

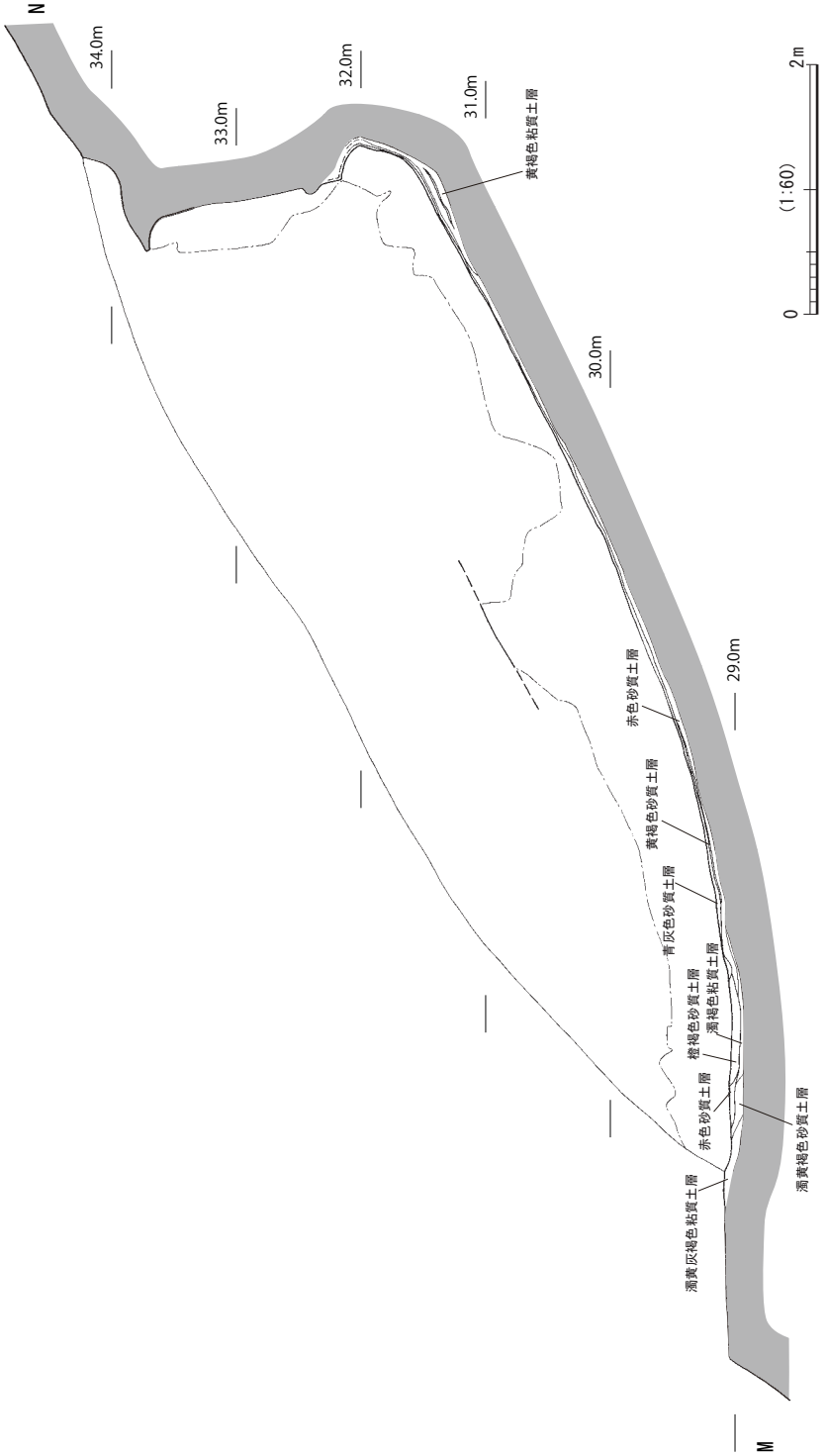
1 青灰色砂質土層
2 赤色砂質土層



〔I-J〕

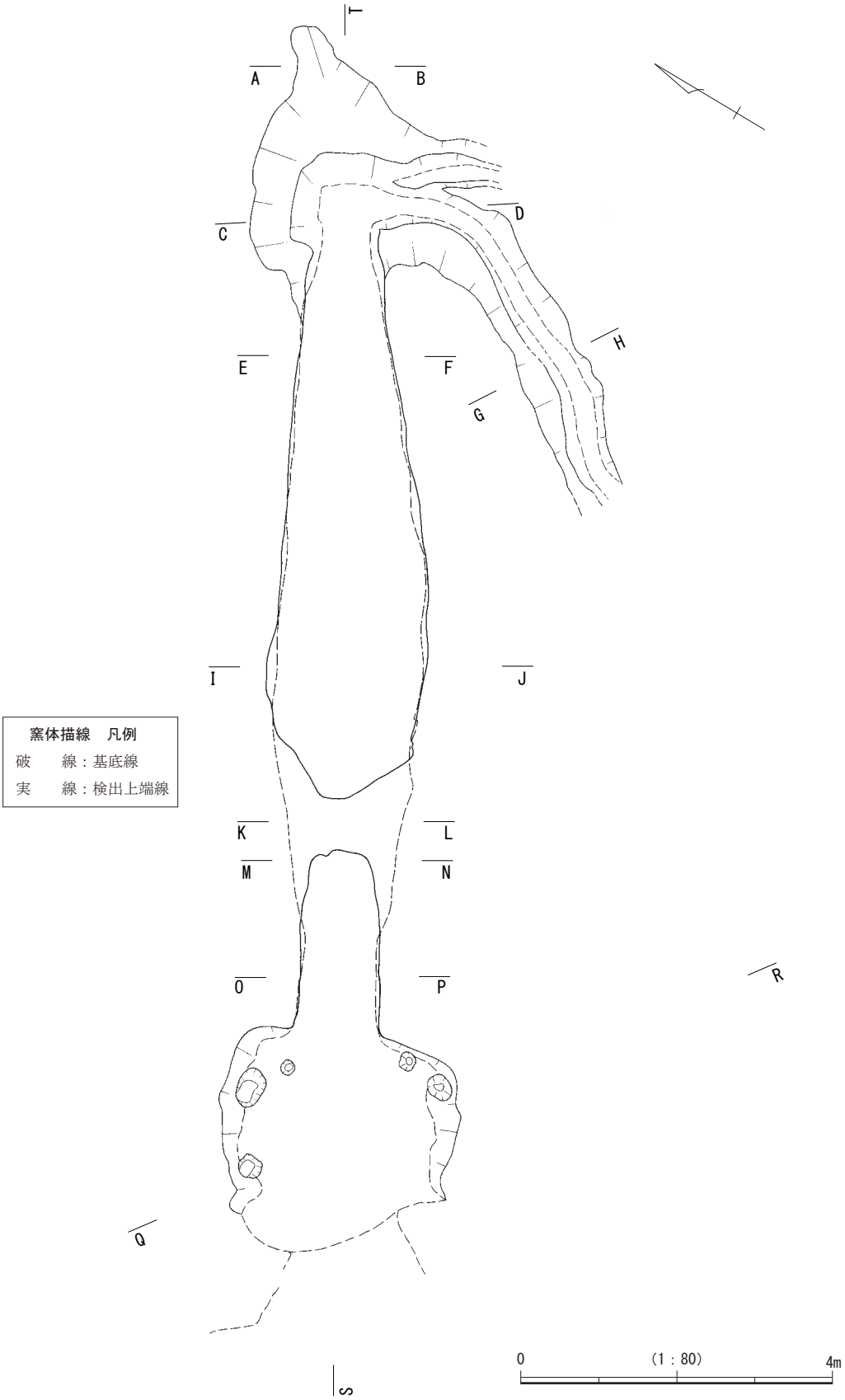
1 黒褐色灰混土層（赤色焼土・炭化物含む）
2 黄褐色粘質土層
3 暗褐色粘質土層（炭化物含む）
4 暗灰褐色粘質土層（赤色焼土・炭化物含む）
5 黄褐色粘質土層
6 褐色粘質土層（炭化物含む）

第48図　10号窯断面図1（S=1/40・1/60）

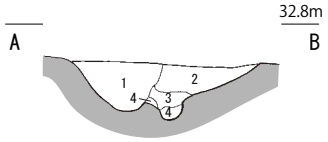


第 49 図　10 号窯断面図 2（S=1/60）

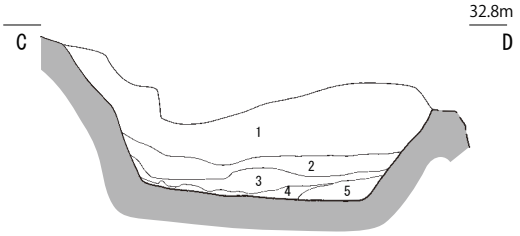
第50図　11号窯平面図1（S=1/80）



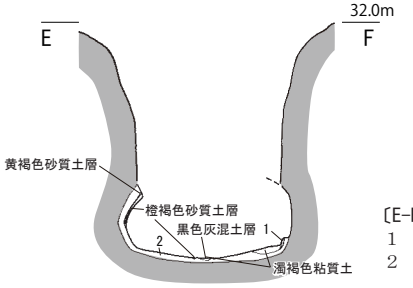
第51図　11号窯平面図2(S=1/80)



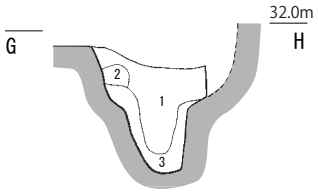
〔A-B〕
1　暗褐色粘質土層
2　褐色粘質土層
3　黄褐色粘質土層
4　暗灰褐色粘質土層



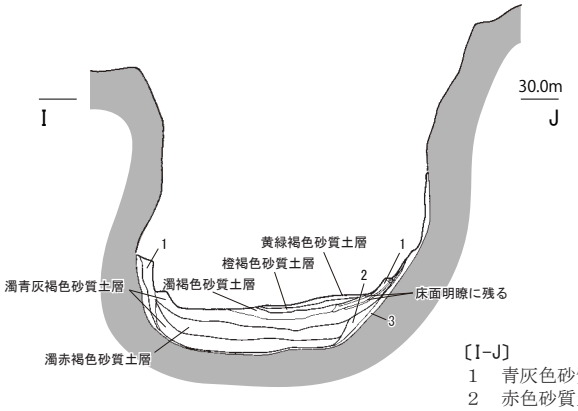
〔C-D〕
1　暗褐色粘質土層
2　黄褐色粘質土層
3　灰褐色粘質土層
4　焼土層
5　灰白色粘土層



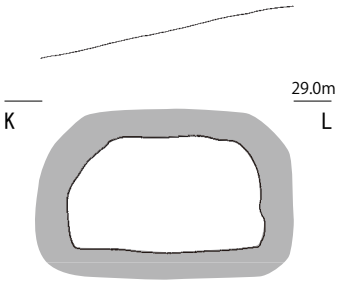
〔E-F〕
1　青灰色砂質土層
2　赤色砂質土層

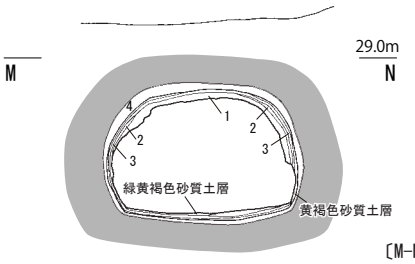


〔G-H〕
1　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
2　濁黄灰色粘質土層
3　灰褐色粘土層

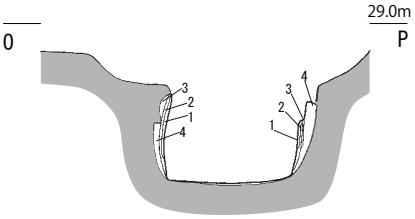


〔I-J〕
1　青灰色砂質土層
2　赤色砂質土層
3　濁暗褐色砂質土層





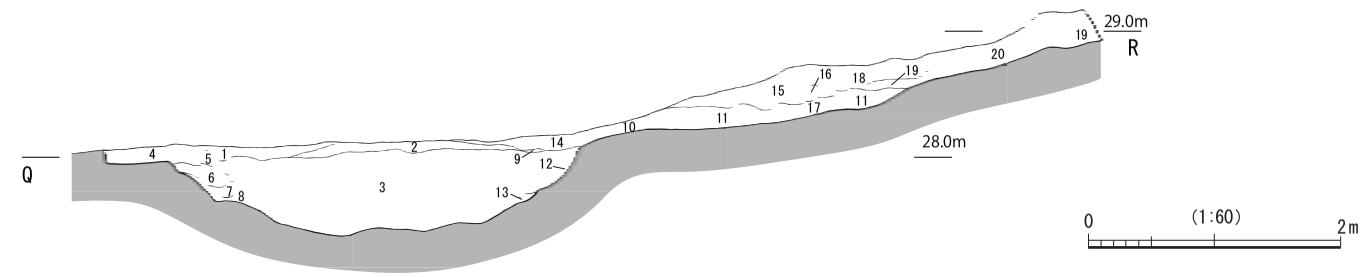
〔M-N〕
1　暗青灰色砂質土層
2　青灰色砂質土層
3　青白色砂質土層
4　赤色砂質土層



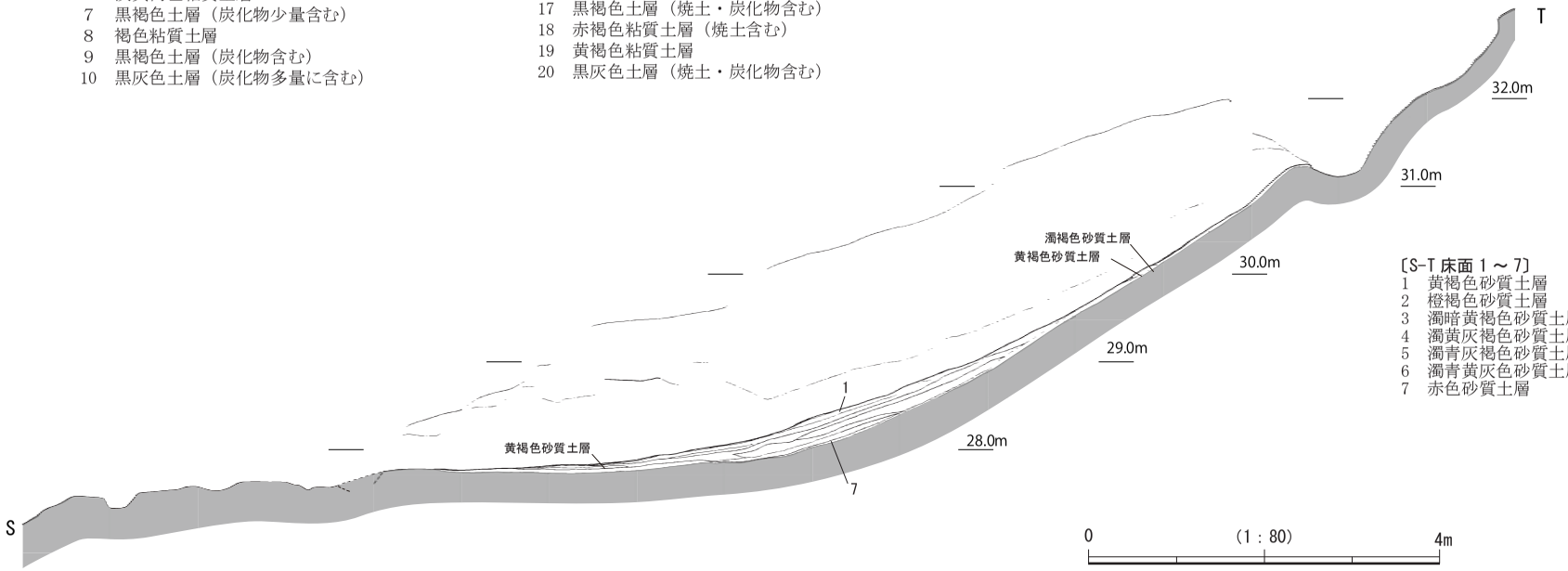
〔O-P〕
1　青灰色砂質土層
2　黄褐色砂質土層
3　橙褐色砂質土層
4　赤色砂質土層

0　(1:60)　2m

第 52 図　11 号窯断面図 1（S=1/60）

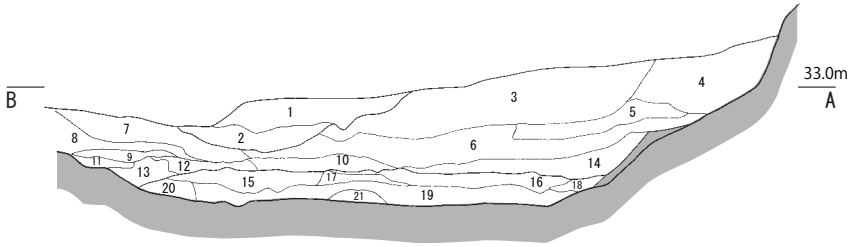


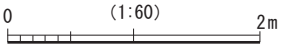
〔Q-R〕
1　黒褐色灰混土層（焼土・炭化物少量含む）
2　暗褐色粘質土層
3　黒灰色土層（焼土・炭化物多量に含む）
4　黄褐色粘質土層（焼土・炭化物少量含む）
5　黒褐色土層（焼土・灰少量含む）
6　淡黄褐色粘質土層
7　黒褐色土層（炭化物少量含む）
8　褐色粘質土層
9　黒褐色土層（炭化物含む）
10　黒灰色土層（炭化物多量に含む）
11　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
12　黒褐色土層（炭化物少量含む）
13　黄褐色粘質土層
14　暗黄褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
15　黒灰褐色土層（焼土・炭化物含む）
16　褐色粘質土層（焼土少量含む）
17　黒褐色土層（焼土・炭化物含む）
18　赤褐色粘質土層（焼土含む）
19　黄褐色粘質土層
20　黒灰色土層（焼土・炭化物含む）



〔S-T 床面 1 ～ 7〕
1　黄褐色砂質土層
2　橙褐色砂質土層
3　濁暗黄褐色砂質土層
4　濁黄灰褐色砂質土層
5　濁青灰褐色砂質土層
6　濁青黄灰色砂質土層
7　赤色砂質土層

第 53 図　11 号窯断面図 2（S=1/60・80）





〔A-B〕
1　濁暗黄灰褐色粘質土層（焼土・炭化物含む）
2　濁淡黒灰褐色土層（灰混り、焼土ブロック・炭化物多量に含む）
3　暗黄褐色粘質土層（炭化物少量含む）
4　濁褐色粘質土層（焼土含む）
5　黄褐色粘質土層（ブロック状に粘土含む）
6　濁黄褐色粘質土層（ブロック状に粘土含む、炭化物・焼土少量含む）
7　濁黄褐色粘質土層（焼土ブロック多量、炭化物少量含む）
8　褐色粘質土層
9　濁暗黄褐色粘質土層
10　濁黄灰褐色粘質土層（粘土ブロック含む、焼土・炭化物少量含む）
11　褐色粘質土層
12　濁黄灰色粘質土層（焼土含む）
13　濁褐色粘質土層（焼土ブロック含む）
14　褐色粘質土層
15　濁暗黄灰褐色粘質土層
16　濁暗黄灰褐色粘質土層（粘土ブロック・焼土含む）
17　淡褐色粘質土層
18　濁黄灰褐色粘質土層
20　濁灰褐色粘質土層粘土ブロック・炭化物少量含む）
21　濁褐色粘質土層（粘土ブロック含む）

第 54 図　竪穴状遺構平面図・断面図（S=1/60）

第２節　出土遺物

1．概　要

第1～3次調査で出土した遺物は、ほとんどが須恵器生産関連遺物であり、整理箱(LⅡ型コンテナパッド)で115箱程度を数える。うち、約90箱が本窯跡群で焼成された須恵器であり、他に土師器甕、瓦器、石鏃や奈良時代の須恵器坏・盤等が出土した。また、焼き台(置き台)に使用した自然石や、サンプルとして切り取った窯壁片等が約25箱を数える。

以下、第1節の窯番号順ではなく、調査・整理担当者が作成した、おおむね遺物の様相が古い窯番号の順に、出土状況、器種組成、坏類、高坏、壷・瓶類、甕等の主要器種ごとに説明を加え、複数の地点から出土した陶棺、円面硯、土馬等については第15項で説明をおこなう。また、個々の遺物の詳細に関しては、観察表(第30～53表)に記載している。なお、須恵器の焼成が行われなかった3号窯は出土遺物がなく、同じく未焼成の9号窯は窯体への流込土から遺物が出土した。

2．4号窯　(第55～63・108・113図、第4・5・30～33・52・53表)

出土状況等　4号窯の床面は、1回以上の補修が認められる。出土遺物は、他窯から離れて立地する位置関係から、意図的に持ち込まれた焼成品以外の混入は比較的少ないと考えられる。第22図で示した出土状況のとおり、生焼け品を含めて窯体内からの出土遺物は多く、第55図1～第57図47、第113図1301・02・05・06が窯体内(主に焼成部床面)から、第57図48～第59図87、第108図1266、第113図1299・1304が前庭部から、第59図88～第63図176、第113図1300・03・07が灰原から、第63図177が煙道部から、それぞれ出土した。また、灰原出土品は、窯体内焼成品と類似する焼成具合・色調を示すa群(焼成は良好、淡灰～灰色)と、器面に小さな焼き膨れが目立ち、黒色の小さなゴマ状の噴き出しをもつ灰白色を呈したｂ群の2群に大別でき、ｂ群は焼成時に鮮やかな緑灰色の自然釉が熔着して焼き歪んだ個体が多い。4号窯の焼成順でいえば、ｂ群からa群、そして窯体内出土の生焼けの群に推移したと考えられる。窯体内の出土点数が限られること等から、以下では器種ごとに説明を行う。なお、1号窯北側の土坑から第63図178の坏H身、同図179の非ロクロ成形の球胴形を呈する土師器甕が出土した。

器種構成　出土遺物は、灰原を含めて整理箱で23箱(破片数4,603点)を数える(第4表)。確認した器種は、坏H、高坏A(有蓋長脚、脚部3方2段透かし)、高坏B(無蓋長脚、脚部3方2段透かし)、高坏C(無蓋短脚)、壷類3種(壷G含む)、瓶類5種、鉢類3種、甕4法量であり、器形を含めて比較的斉一性を保持した器種組成といえる。量比は、口縁部計測法[1]でみれば、坏Hが約38%、高坏A・Bが約22%、瓶類が約19%、甕9%、鉢類が約8%、壷類が約4%の比率を示し、食膳具が全体の約60%を占める他、鉢類の比率が比較的高い。また、破片数計測法でみれば、甕が約61%、坏H・高坏が各約12%、瓶類が約10%、壷類が約4%、鉢類が約2%の比率を示し、灰原から出土した多量の高坏脚部片と甕胴部片(定量の焼き台転用破片を含む)を反映した数値となる。

坏H　窯体内出土の1～27、前庭部出土の49～54、灰原出土の88～104を図化し、基本的に1法量である(第5表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向である。成形方法は、体部下半～周縁部外面に指で目安をつけた後に、斜め方向にヘラ状工具を差し込んで回転ヘラ切りで余分な粘土を削りとり、その後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行い、結果として底部(蓋は天井部)が比較的狭く、器形は丸く仕上

がる。指をあてた凹線状のくぼみ痕は蓋6・16・97、身22・99等で、また斜め方向のヘラ状工具の差し込み痕は回転ケズリ痕を図化した個体(蓋17、身26等)で特に明瞭に残る。底部外面の仕上げは、中心に残るヘラ切り痕(盛り上がった粘土残)をそのまま残し、周縁を雑になで消す程度で未調整に近い印象を受ける。雑なナデ調整の後に施したクシ状工具痕[2]を残す個体も定量存在する。底部(蓋は天井部)内面は、回転ヘラ切り作業に伴う中央付近の突出を修正するため、1方向の軽いナデ調整を行う。また、灰原出土の蓋90の天井部内面中央に、高坏Aで認められる技法である同心円叩き痕が確認できる。焼成状況は、大半の個体で焼き歪みが目立ち、窯体内で生焼けの個体が半数程度(蓋実測個体18点中9点、身同9点中5点)ある一方、焼き台(置き台)に転用された個体は第55図蓋2が確認できる程度である。灰原出土遺物が、a・b群の2つの群に分かれるのは前述のとおりである。また、重ね焼きは、1対の蓋と身を使用する形でセットし、正位で焼成することを基本としており、身27のような倒位焼成は比較的少ない。

蓋は、比較的狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁基部で明瞭に屈曲、先細る口縁端部を丸く仕上げた個体が多く、10・89・92のような平坦な天井部から直線的に口縁基部に至る器形も客体的に存在する。口縁基部の形態に若干の差異が認められ、口縁基部で明瞭に屈曲して口縁端部が直下におりる形態(5・10・92等)、口縁基部で明瞭に屈曲して先細る口縁端部が小さく外反する形態(7・93等)、口縁基部の屈曲が弱い形態(11・90・96等)があり、数量では前2者の形態が主体を占める。焼成良好品の法量は口径13.6～14.6cm、器高3.7～5.3cm(4cm弱と5cm弱が中心か)に、生焼け品は口径14.0～15.2cm、器高4.2～5.0cmにそれぞれ分布し(第5表)、焼成時の粘土縮小率の差を反映して、口径で約1cmの分布域のずれが生じている。

身は、蓋と同様に、比較的狭い底部から丸みをもちながら立ち上がり、内傾する口縁部が反り立つ個体が主体を占め、体部が直線的に外傾しながら立ち上がる53・98・102等の器形は客体的である。また、受け部の形態に若干の差異が認められ、受け部直下の強い回転ナデ調整により受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態(19・53・101等)と、口縁基部と受け部の境を明瞭にするための強い回転ナデ調整により受け部が短く横または斜め上方向にのびる形態(26・103等)があり、前者の形態が主体となる。焼成良好品の法量は口径12.2～13.0cm、器高3.6～4.2cmに、生焼け品は口径13.2～14.2cm、器高4.1～4.5cmにそれぞれ分布し、蓋に比して焼成時の粘土縮小率の差は顕在化しない。

高坏　窯体内出土の28～33、前庭部出土の55～68、灰原出土の105～125を図化した。高坏A(有蓋長脚、3方2段透かし)と、高坏B(無蓋長脚、3方2段透かし)は、口縁部計測法で約2対1の比率を示し、高坏C(無蓋短脚)は灰原出土の1点(125)のみである。また、焼成は、高坏Aが蓋・身をセットとした倒位焼成、蓋のない高坏Bが正位焼成を厳格に保持し、高坏A蓋外面には径約13cmの他個体との重ね焼き痕が残る。

高坏A・Bは、胎土・焼成具合からa群に属し、緑灰色の自然釉や淡黄灰色の降灰が厚く熔着した個体が多い。高坏A蓋は、偏平な鈕を付け、天井部外面に丁寧な回転ケズリ調整、内面中央に明瞭な複数の同心円叩き痕を残す。肩部の稜は、面取りのにぶい稜(106・107)、簡略な段状の稜(28・55等)、稜をつくらないもの(56)があり、簡略な段状の稜をつくる個体が主体をなす。また、灰原出土品より窯体内出土品で簡略化が進む傾向を示す。口径は、大きく焼き歪んだ106・107が16.5cm強、その他が16cm弱を測る。

高坏A身は、脚端径14.2～17.8cmを、全形の分かる113で口径13.0cm、器高18.0cm、脚端径14.2cmをそれぞれ測る。2条1単位の沈線と透かしで加飾する脚は、上段の透かしが全て内面に貫通しておらず、蓋でみられた稜の表現とともに、後述する1号窯より簡略化した加飾となる。また、下段の沈線と脚端部の間はロクロひだが目立つ。高坏Bは、口径13cm前後、脚端径12cm前後を測る。坏部下半を2段の面取りの鋭い稜で加飾する。灰原出土の高坏C(125)は脚端径10.8cmを測り、脚端部を平坦に仕上げる。他に類似個体片がないことや、焼成具合・胎土が高坏A・Bと異なり、他窯からの混入品の可能性を多分に残す。

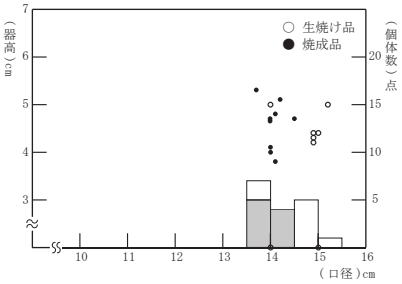
第４表　４号窯出土遺物計測表

	計	坏Ｈ		高坏Ａ		高坏Ｂ	高坏Ｃ・不明	壺　類			瓶　類						鉢　類			甕			その他・不明
		蓋	身	蓋	身			壺Ａ	壺Ｇ	その他・不明	瓶		提瓶	平瓶	横瓶	その他・不明	鉢Ａ	鉢Ｃ	その他・不明	大甕	中甕	その他不明	
口縁部計測法（口縁値）	3,207	701	873	313	185	174	15	38	13	48	48	28	20	61	152	128	159	31	0	88	69	51	12
口縁部計測法（補正口縁値）	2,321	873		313		174	15	99			157				152	128	159	31	0	88	69	51	12
比率（%）	100%	37.6%		13.5%		7.5%	0.6%	4.3%			6.8%				6.5%	5.5%	6.9%	1.3%	−	3.8%	3.0%	2.2%	0.5%
破片数計測法（点）	4,603	404	466	151	306	144	18	45	32	63	24	17	22	20	210	93	9	75	0	129	65	2,256	54
破片数計測法（補正点）	4,048	466		306		144	18	140			83				210	93	9	75	0	129	65	2,256	54
比率（%）	100%	11.5%		7.6%		3.6%	0.4%	3.5%			2.1%				5.2%	2.3%	0.2%	1.9%	−	3.2%	1.6%	55.7%	1.3%

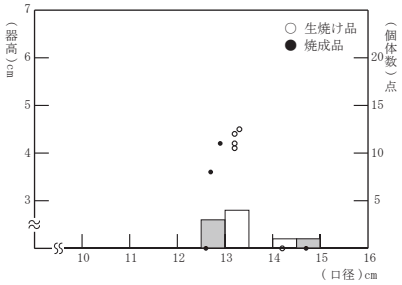
※灰原を含む。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第５表　４号窯実測坏Ｈ法量分布表

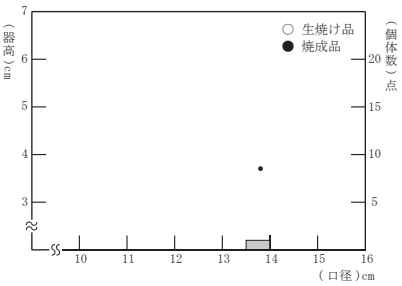
窯体内 坏Ｈ蓋



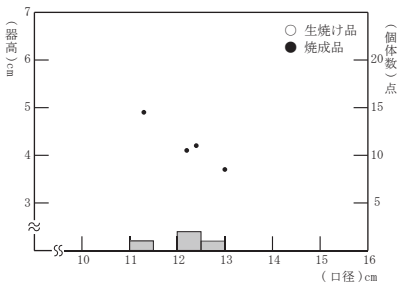
窯体内 坏Ｈ身



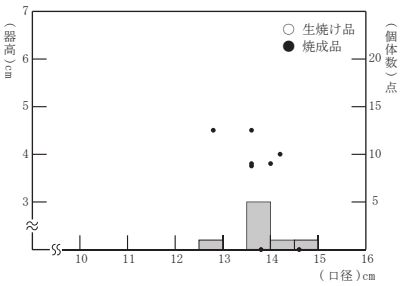
前庭部 坏Ｈ蓋



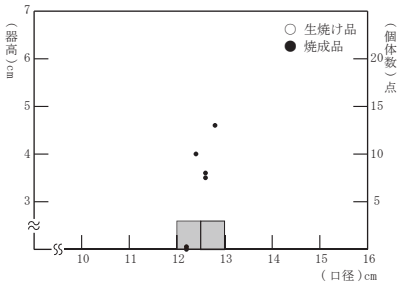
前庭部 坏Ｈ身



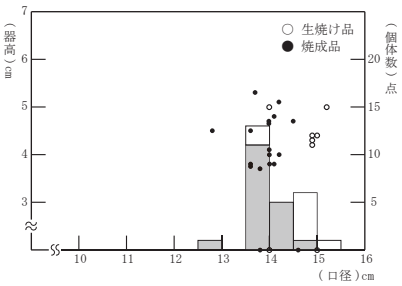
灰原 坏Ｈ蓋



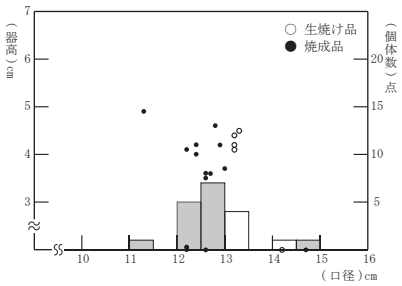
灰原 坏Ｈ身

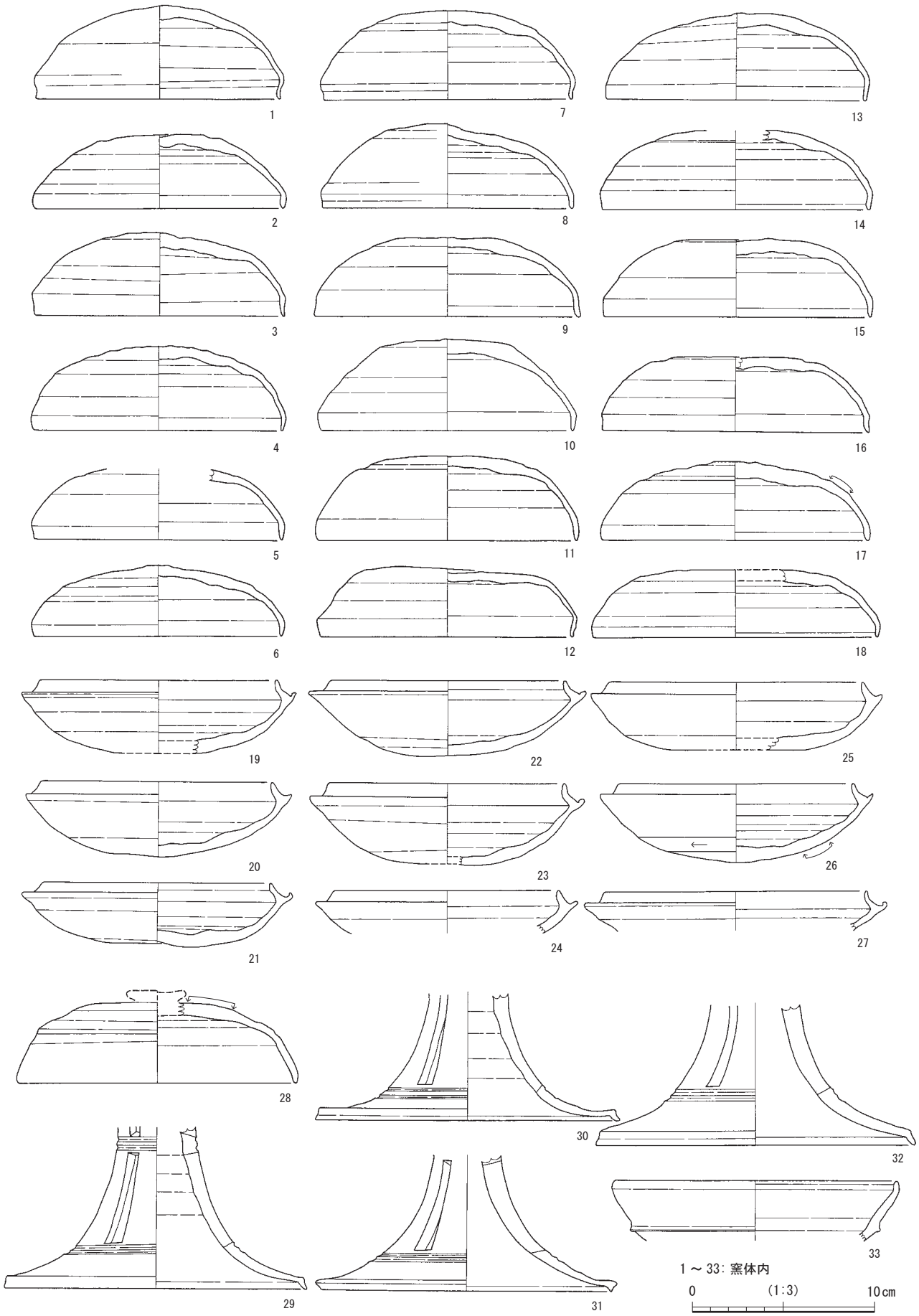


全体 坏Ｈ蓋

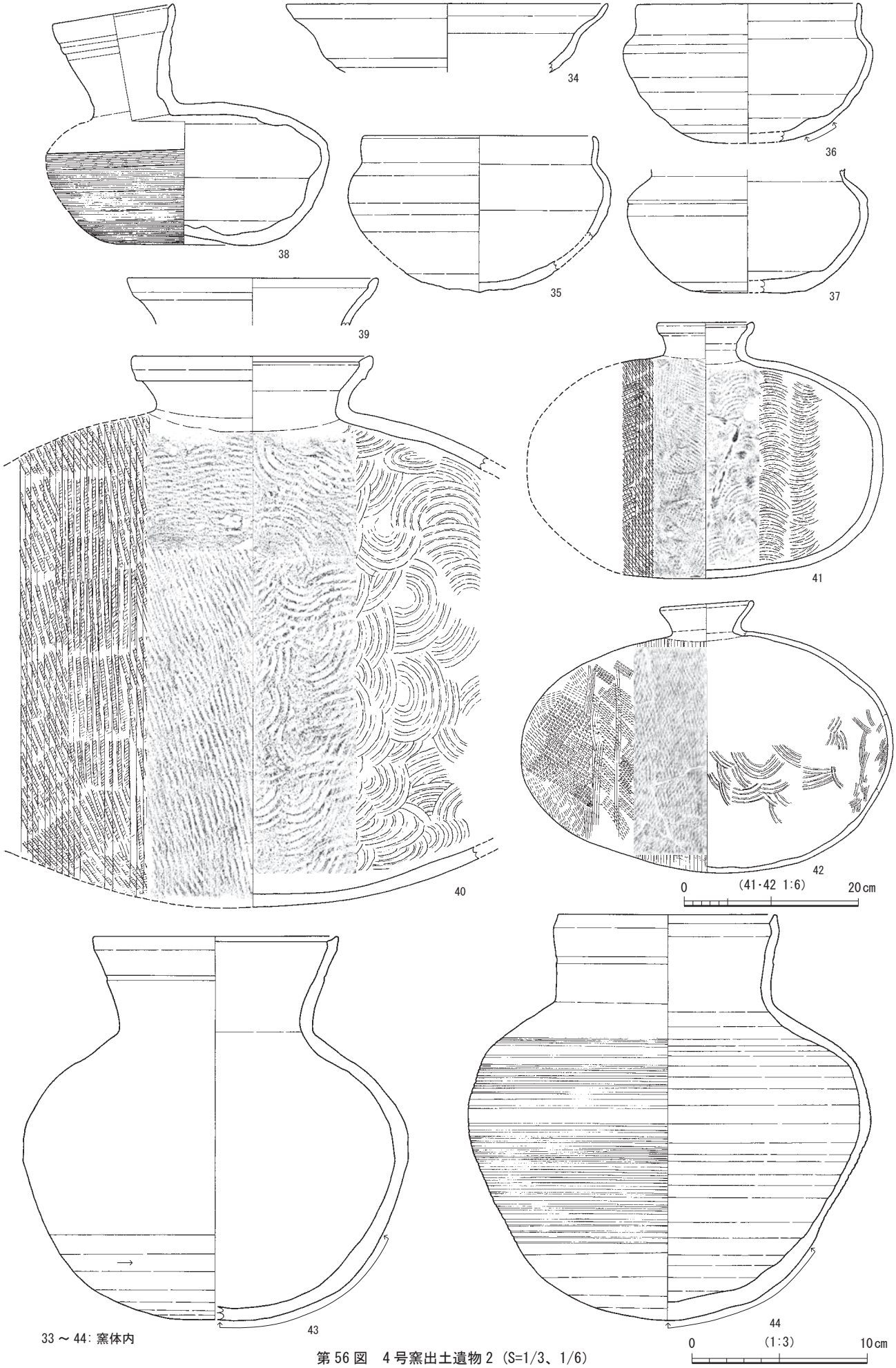


全体 坏Ｈ身



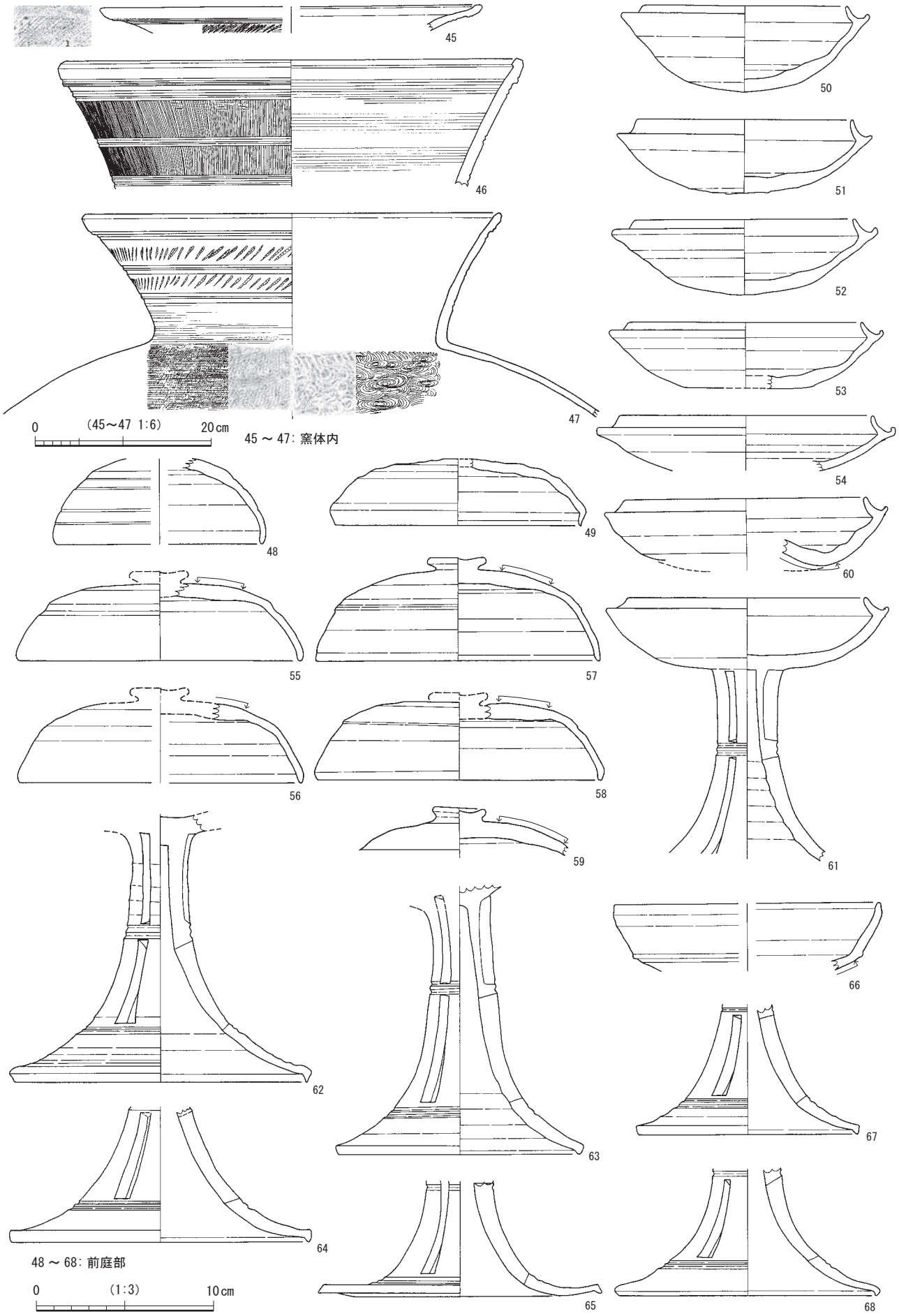


第 55 図　4 号窯出土遺物 1 (S=1/3)

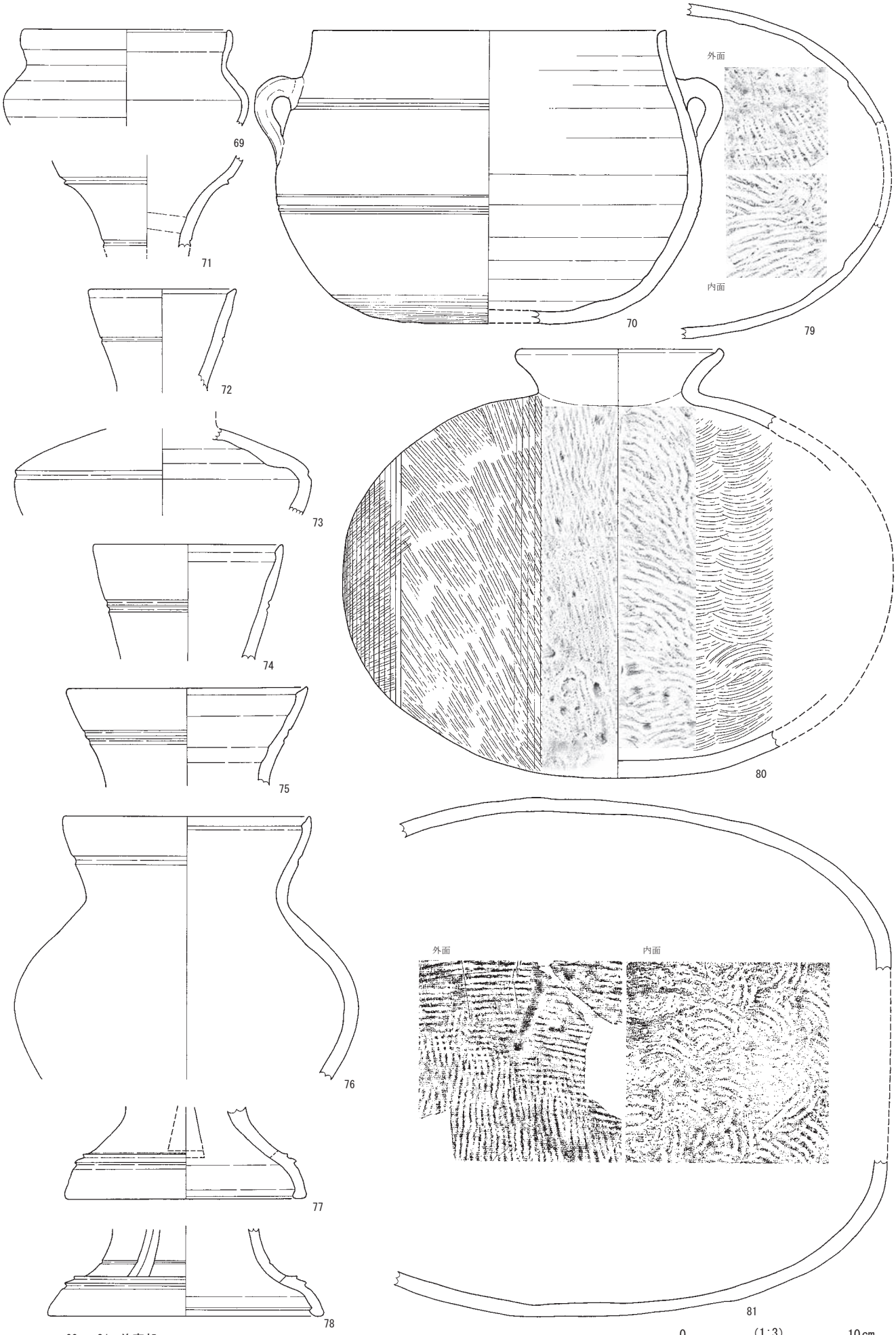


33～44: 窯体内

第56図　4号窯出土遺物2（S=1/3、1/6）

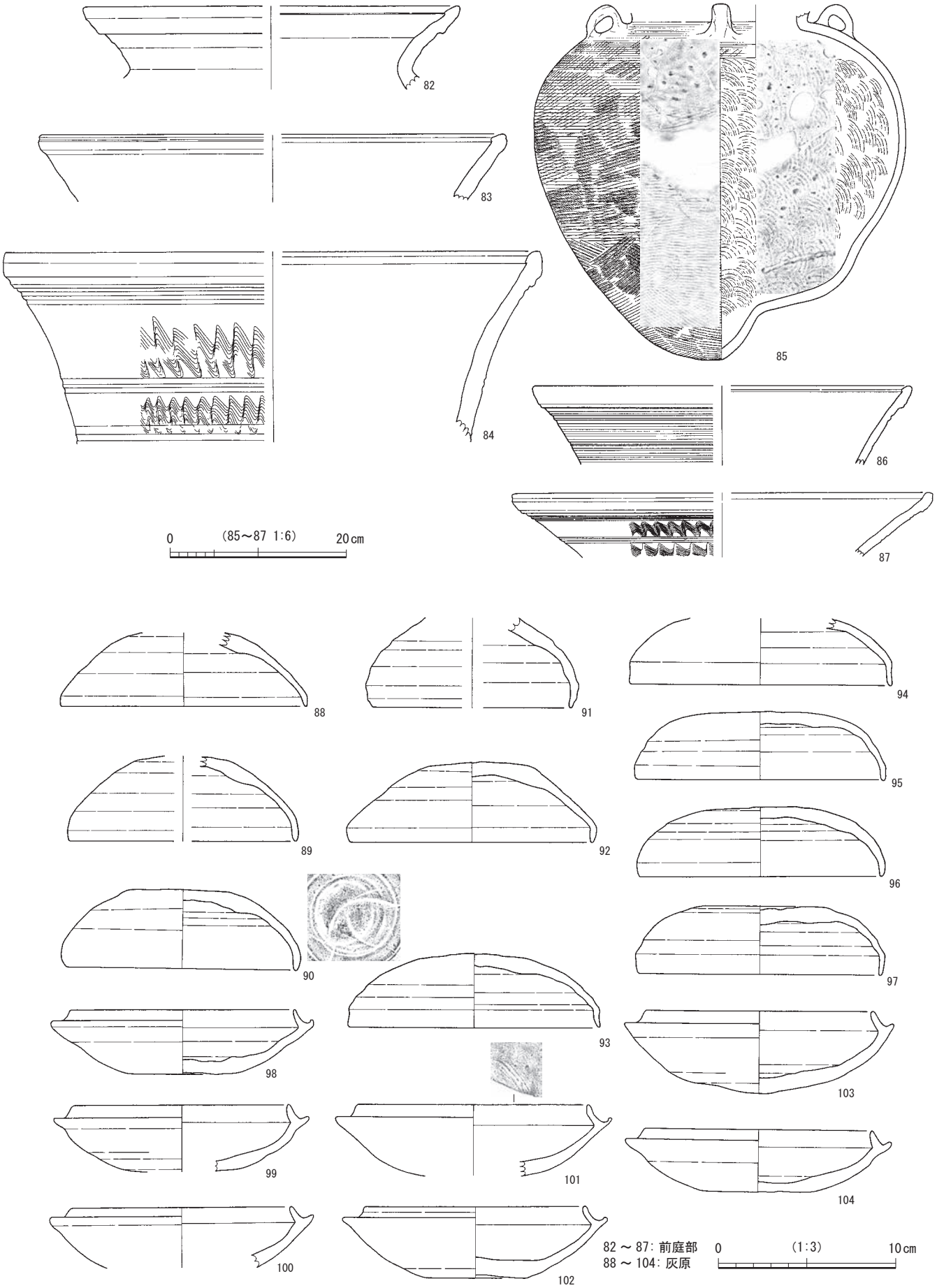


第57図　4号窯出土遺物3（S=1/3）

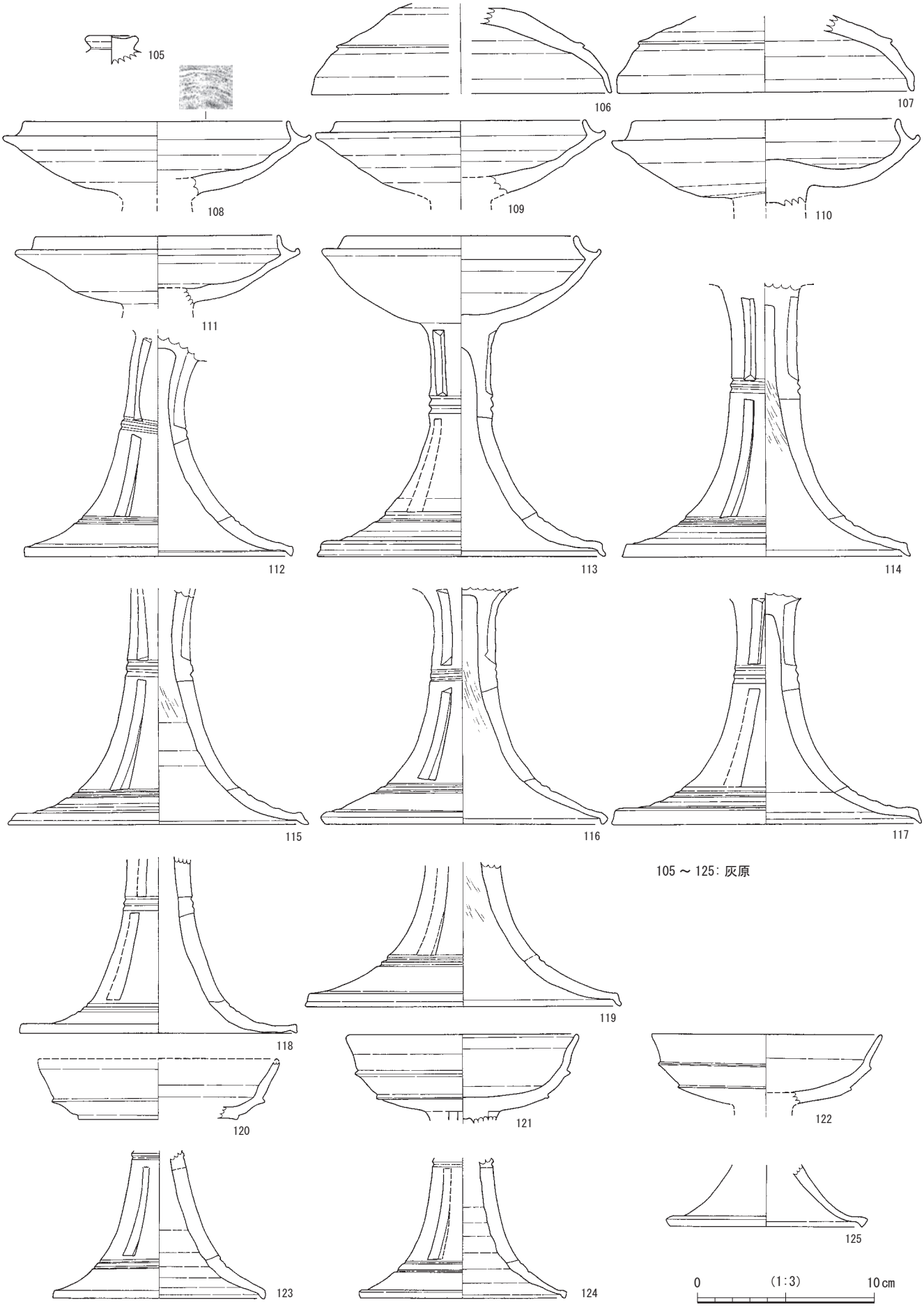


69～81：前庭部

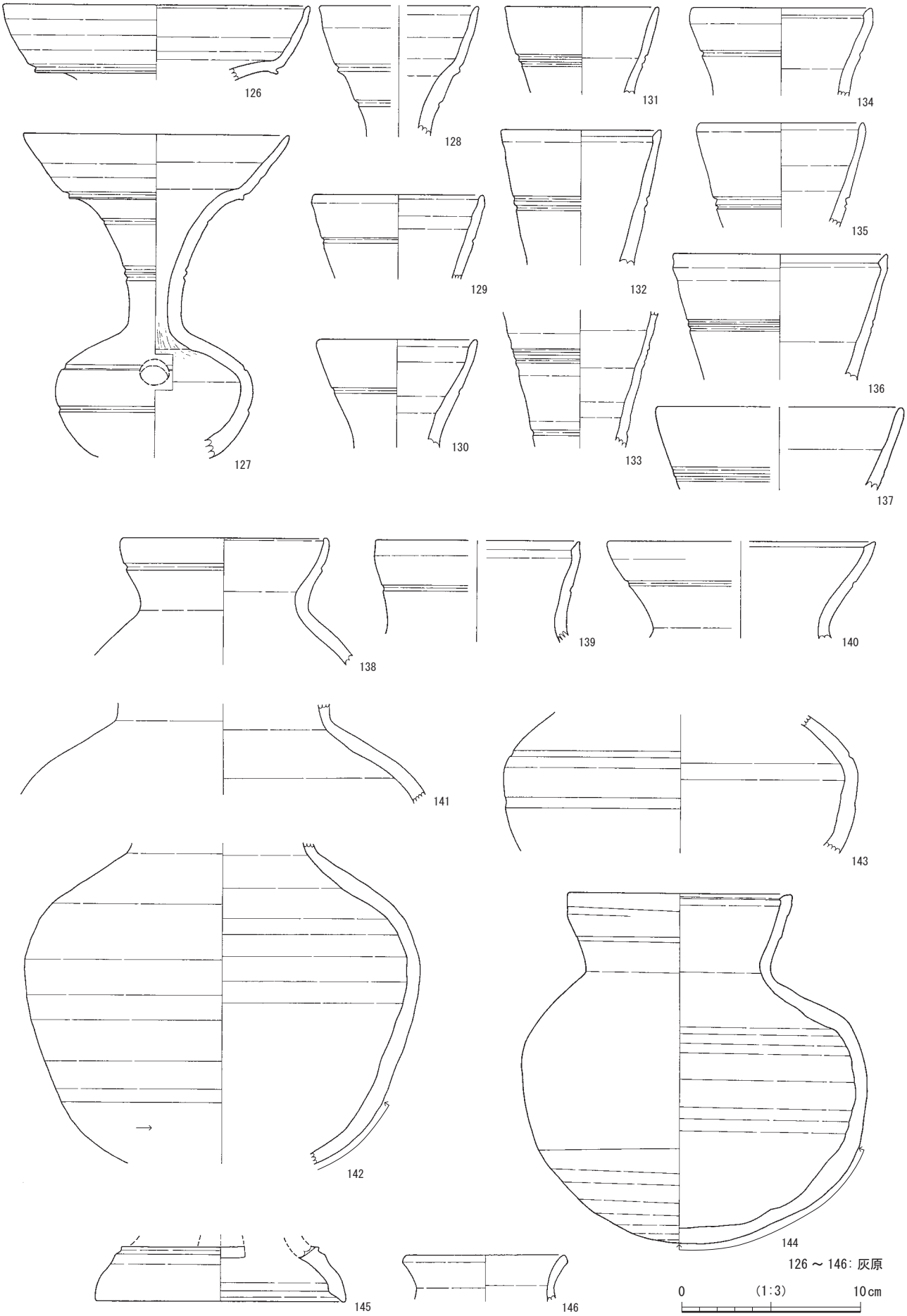
第58図　4号窯出土遺物4（S=1/3）



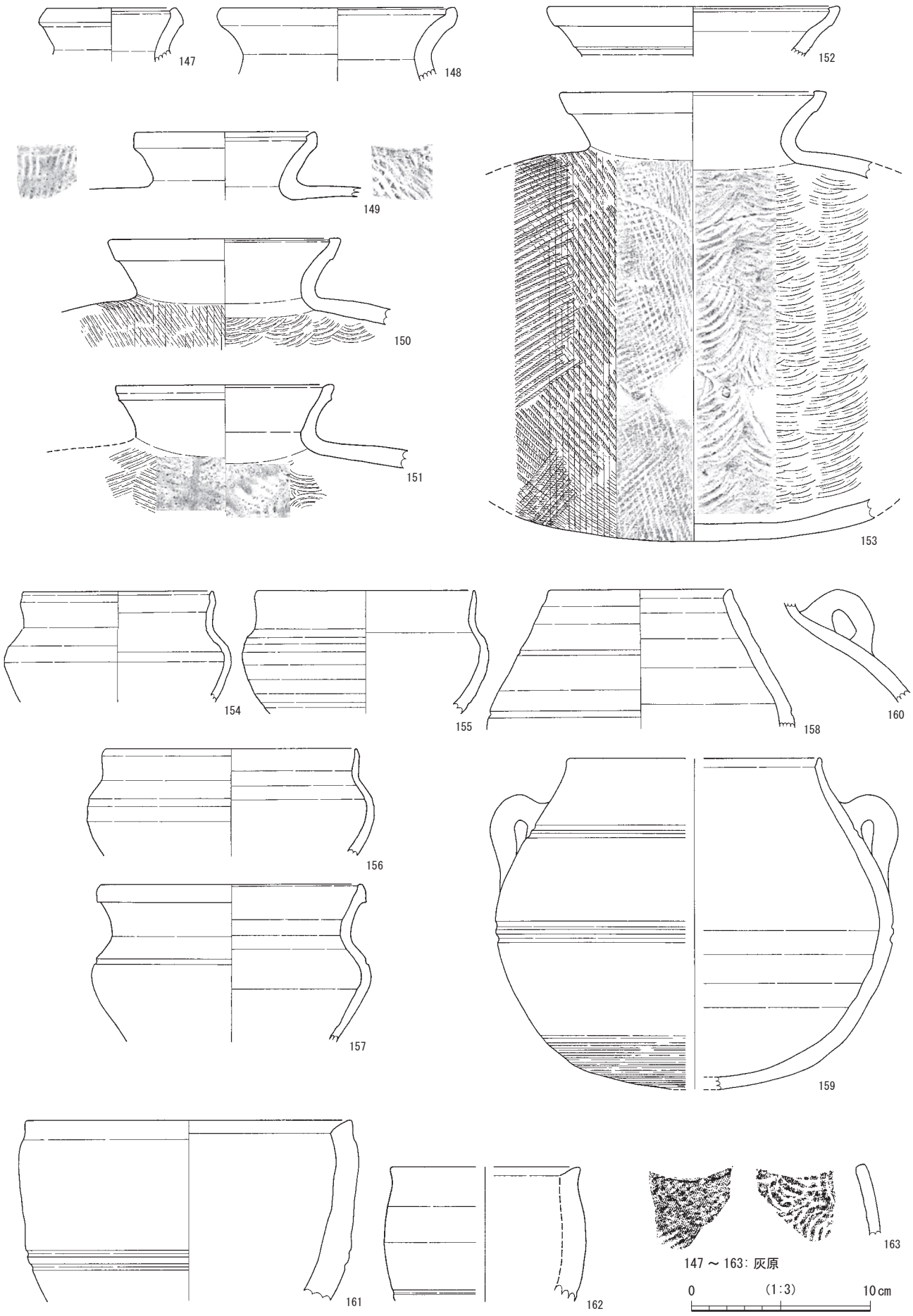
第59図　4号窯出土遺物5（S=1/3、1/6）



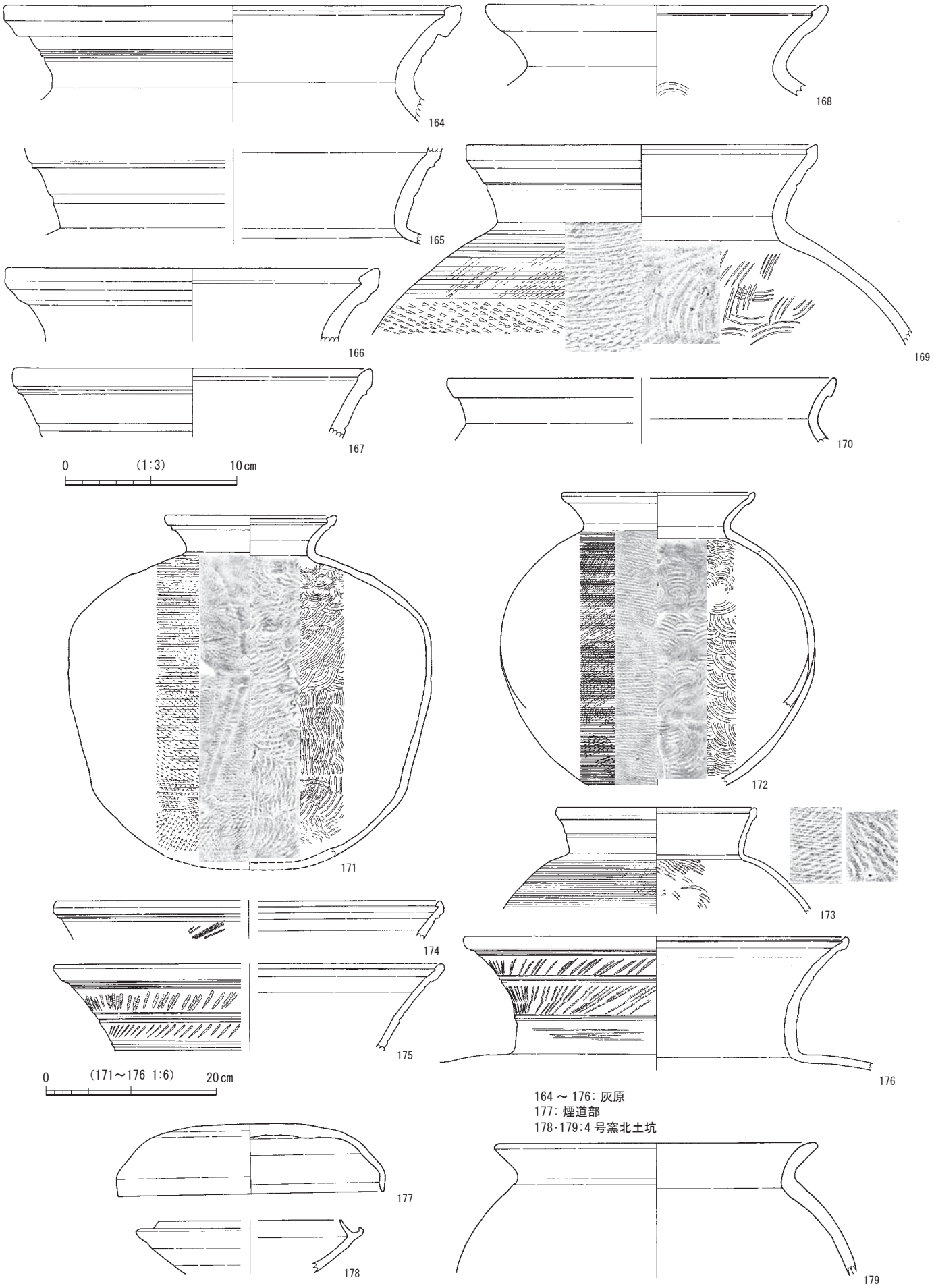
第60図　4号窯出土遺物6（S=1/3）



第 61 図　4 号窯出土遺物 7 (S=1/3)



第 62 図　4 号窯出土遺物 8（S=1/3）



第63図　4号窯出土遺物9（S=1/3、1/6）

壷類　無蓋で球胴・丸底形を呈するA類(43・44・76・144等)と、仏器的器種である無花果形のG類(70、158～160)、小型壷146が出土、A類が定量焼成される。A類は、外面下半に回転ケズリ調整を、口縁部外面中程に1条の沈線をそれぞれ施し、内湾する口縁端部を内傾・肥厚させる点で共通する。また、44は胴部を粗いカキメ調整で加飾する。法量は、口径10～11.4cmの個体群(134・138)と、口径12.4～14.8cm、器高20～23cmの個体群に分かれるようだ。焼成具合は、窯体内出土品が生焼けに近い個体が多く、灰原出土品がｂ群に属する個体が多い傾向を示す。

2ヶ所に環状の把手を付す壷G類は、胴部下半～底部外面をカキメ調整、胴部中程を2列の沈線で加飾し、口縁端部は内傾した平坦面をもつ。胎土・焼成具合はｂ群に属し、正位・無蓋で焼成、焼き歪みが大きい。図上復元した70が口径約20cm、器高約17cm、159が口径約14cm、器高約18cmを測る。小型壷146は口径8.8cmを測り、破断面に自然釉が熔着する。

瓶類　瓻、長頸瓶、提瓶、平瓶、横瓶が確認でき、口縁部計測法による比率は5:3:2:6:15程度を示す。瓻(71、126～128)は口縁部下端に鋭い稜をつくり、頸部と胴部を沈線で加飾する。法量は、126が口径17.0cm、127が口径14.8cm、器高約18cmと、数法量が存在するようだ。いずれも正位で焼成され、胎土・焼成具合はｂ群に属する個体が多い。正位焼成の長頸瓶(73・77・78・145等)は胎土・焼成具合からｂ群に属する。脚端径13.6～15.8cmを測り、脚端部は内面が肥厚する。また、3方に台形の透かしを穿ち、2条の鋭く仕上げた稜により屈曲部を加飾する。窯体内から出土した生焼けの平瓶38は、口径6.9cm、器高13.7cmを測り、底部内面に粘土の絞り痕が、天井部内面に閉塞円盤痕がそれぞれ残る。また、胴部下半～底部にカキメ調整を施し、長くのびた口縁部は端部で肥厚・内傾する。

量比が多い横瓶(39～42・79～81・148～153、第107図1266)は、口径10.0～14.7cmを測り、口縁端部は断面方形に近い形状を基本とする。自然釉の熔着状況から主に横位で焼成したことが分かる。また、焚口出土の41の胴部片の1点が、焼き台(置き台)に転用され1号窯焼成部床面から出土した(第22図№20)。

鉢類　丸底で口縁部が直立するA類(35～37・69・154～157)、タタキ技法を用いるB類(163)、厚底のC類(161・162)が確認できる。A類は口径11～14.5cm、器高8～9cmを測る小型品である。うち、灰原出土の157は口縁部が肥厚し、肩部に1条の沈線を施すことから、37とともに古相を示すと考えられる。157は胎土・焼成具合がb群に属し、厚い自然釉から正位無蓋の焼成が復元できる。157以外の口縁部は、先細りながら内湾する。なお、浅い鉢形に近い器形の34は、口縁部が大きく外傾し、現時点ではA類に含める。B類の163は、甕と共通する技法でつくられる。内面を同心円叩き・外面を平行叩きで成形した後、外面にカキメ調整を加え、口縁端部をヘラ状工具で平坦に切りそろえる。厚底の鉢C類は、体部外面を沈線で加飾し、口縁端部は内傾する。胎土・焼成具合はｂ群に属し、161が口径18.0cmを測る。

甕　口径は20cm前後(82・166～169・171・172)、26cm前後(83～85・164・170)、41cm(86)、44～50cm台(87・174～176)に分布する。中型甕は、外面を沈線で加飾し、肥厚する口縁端部を内傾させることを基本とし、外面に波状文を施す84、肩部4ヶ所に環状の把手を付す85、器肉が薄い170、胴部外面に丁寧なカキメ調整を施す169・173等が確認できる。口径40cm以上の大型甕は、口縁部が肥厚し、外面の加飾が多様である。46は縦位の粗いハケ調整後に沈線を、47・174～176は2条1単位の沈線間に乱れた斜行刺突文を、86はカキメ調整後に沈線を、87は2条1単位の沈線間に波状文を、それぞれ施す。

その他　蓋48は口径約11cmを測り、外面を4条の沈線で加飾する。また、灰原を中心に焼き台(置き台)に転用した坏H片、瓶片、甕片や、10～20cm程度の自然石が多く出土した。

3．1号窯　(第64～67・113図、第6・7・33・34・52表)

器種構成等　1号窯は、床面に1回の補修痕が残る。遺物の大部分は、第15図のとおり窯体内床面か

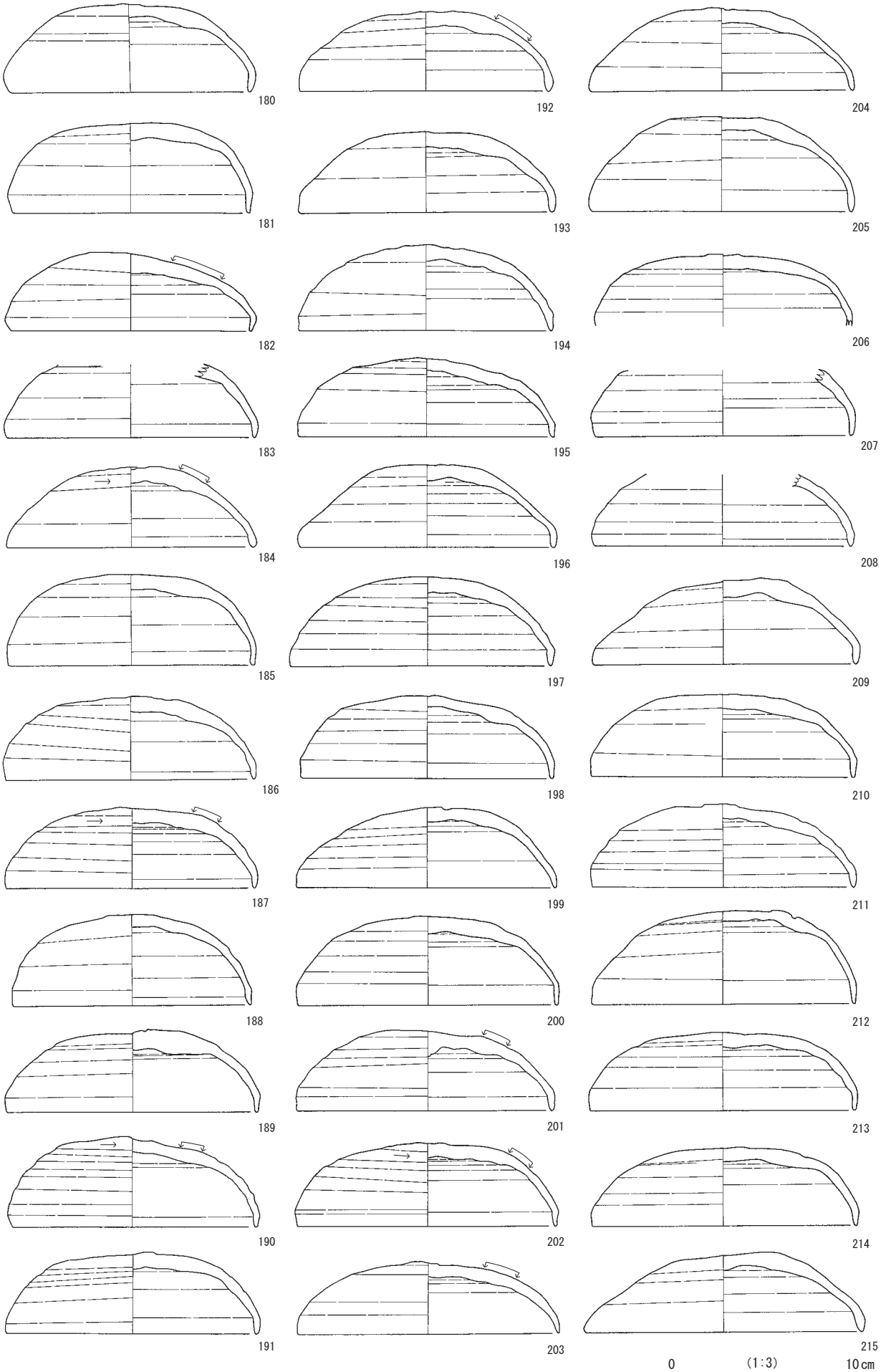
ら出土しており、少量の前庭部出土遺物を含めると整理箱で9箱(破片数1,273点)を数える(第6表)。量比は、口縁部計測法でみれば、焼き歪んだ完形品が多い坏Hが約87%と圧倒的に多く、高坏A、同B、横瓶等の瓶類、甕が各3%前後、壷類はさらに少ない比率を示す。また、破片数計測法でみれば、甕が約47%、坏Hが約40%、瓶類12%の比率となる。破片数計測法による比率は、焼き台(置き台)に転用された甕胴部片と、第66図283・284で代表させた外面に粗いカキメ調整を施す提瓶胴部剥離片がともに多出したことによる。これらから、出土遺物は、最終操業段階で焼き歪み・焼き割れ等の理由で窯内に放置された坏H、高坏、壷・瓶類(定量の提瓶を含む)の小片と、甕胴部片転用焼き台(置き台)で構成されることがわかる。なお、焼き台(置き台)に用いた20cm以下の自然石が出土している。

坏H　第64図180～第66図267を図化しており、基本的に1法量である(第7表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向である。回転ヘラ切りの範囲を狭くするための成形方法は、4号窯と同様である。体下部の指をあてた凹線状のくぼみ痕が蓋189・200、身226・264等で、斜め方向のヘラ状工具の差し込み痕が回転ケズリ痕を図化した個体(蓋182・187、身236等)で、それぞれ明瞭に残る。また、底部(蓋は天井部)外面の仕上げは、回転ヘラ切り時に中心に残る粘土痕をなで消す等、4号窯より丁寧であるが、基本的に回転ヘラ切り痕を雑になで消す程度で未調整に近い。クシ状工具痕を残す個体も定量存在する。底部内面中央の軽い1方向のナデ調整も4号窯と共通する。なお、4号窯でみられた底部内面中央に同心円叩き痕を残す個体は確認できない。焼成状況は、ほとんどの個体で焼き歪み・焼き割れが目立ち、生焼けの個体が定量存在する。一方、焼き台(置き台)に転用した個体は183・189・206等、限定的である。また、蓋201・221・223、身224・237・245・250は堅緻な焼成で外面に緑灰色の自然釉が厚く熔着する個体群であり、蓋184・185・197、身233・240・241・244・246・261は口縁部や立ち上がり周縁が焼成不良に起因して黒色を呈する生焼けの個体群である。自然釉の熔着状況等から復元できる重ね焼きの様相は、4号窯と同様である。

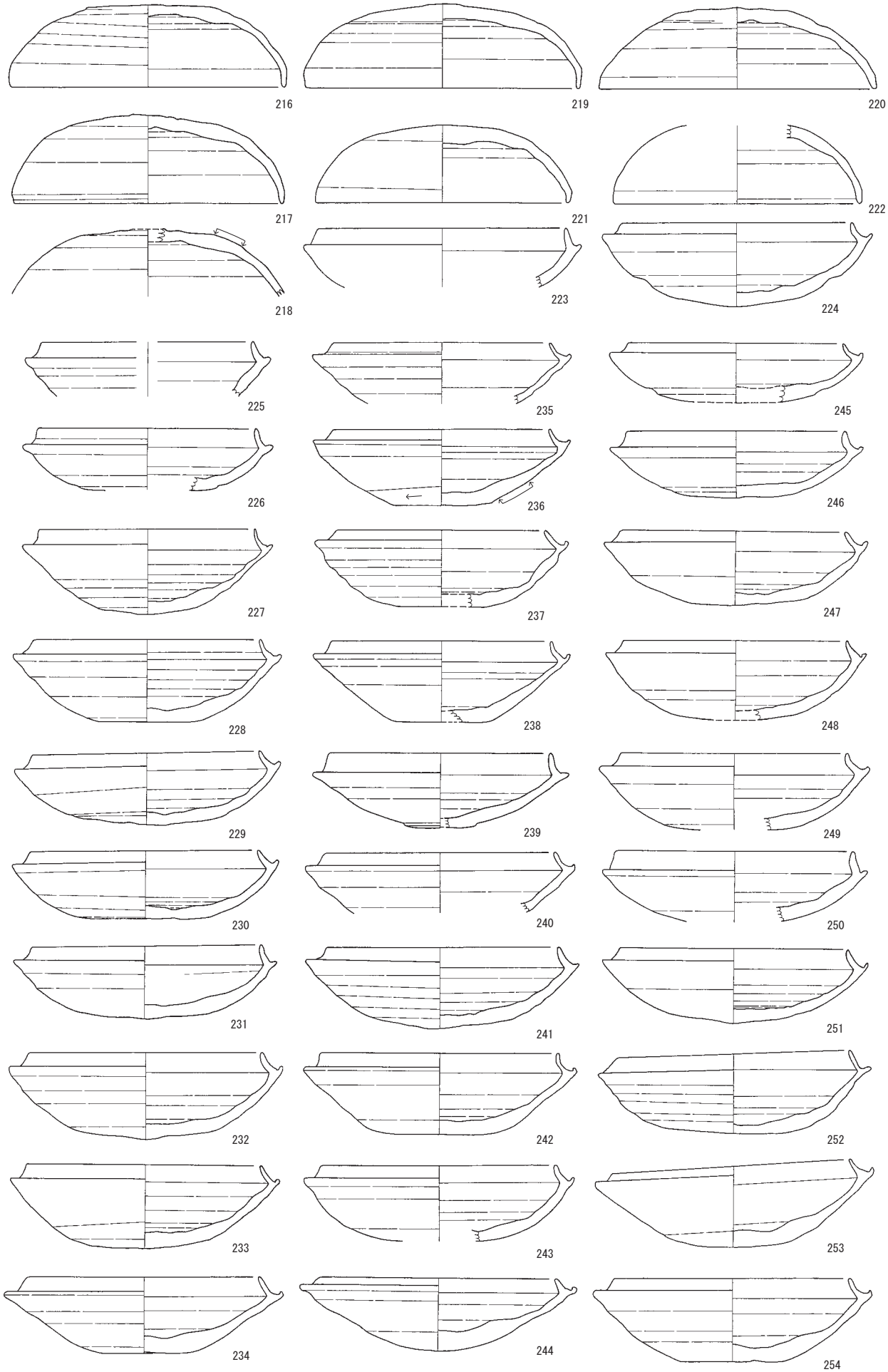
蓋(180～222)は、全体的に器高が高く、比較的狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁部に至り、ほとんど外反しない口縁端部を丸く仕上げる器形を呈する。口縁端部のナデ調整の順序により口縁基部の形状に若干の差異が認められ、口縁基部で明瞭に屈曲して口縁端部が直下におりる形態(181・198等)を主体に、口縁基部の屈曲が弱い形態(184・203等)があり、口縁端部が外反する個体はほとんどない。口縁基部の屈曲が弱い形態は、生焼け品に多い傾向を示す。焼成良好品の法量が口径12.9～14.5cm、器高4.3～5.2cm、生焼け品が口径13.1～15.2cm、器高3.9～5.1cmにそれぞれ分布し(第7表)、焼成時の粘土縮小率の差を反映して、4号窯と同様に口径で約1cmの分布域のずれが生じている。

身(223～267)は、蓋と同様に、比較的狭い底部から丸みをもって立ち上がり、内傾する口縁部が反り立つ個体が主体を占める。体部が直線的に外傾しながら立ち上がる234・253等の器形は、生焼け品の中に客体的に存在する。また、受け部の形態に4号窯と類似した若干の差異が認められる。受け部直下の強い回転ナデ調整により受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態(237・242・254等)と、口縁基部と受け部との境の強い回転ナデ調整により受け部が横または斜め上方向に短くのびる形態(239・241等)があり、前者が大部分を占める。焼成良好品の法量は口径11.6～13.6cm、器高3.7～4.7cmに、生焼け品は口径12.0～14.8cm、器高3.2～4.8cmにそれぞれ分布し、4号窯と同様に粘土縮小率に起因する法量差は顕在化しない。

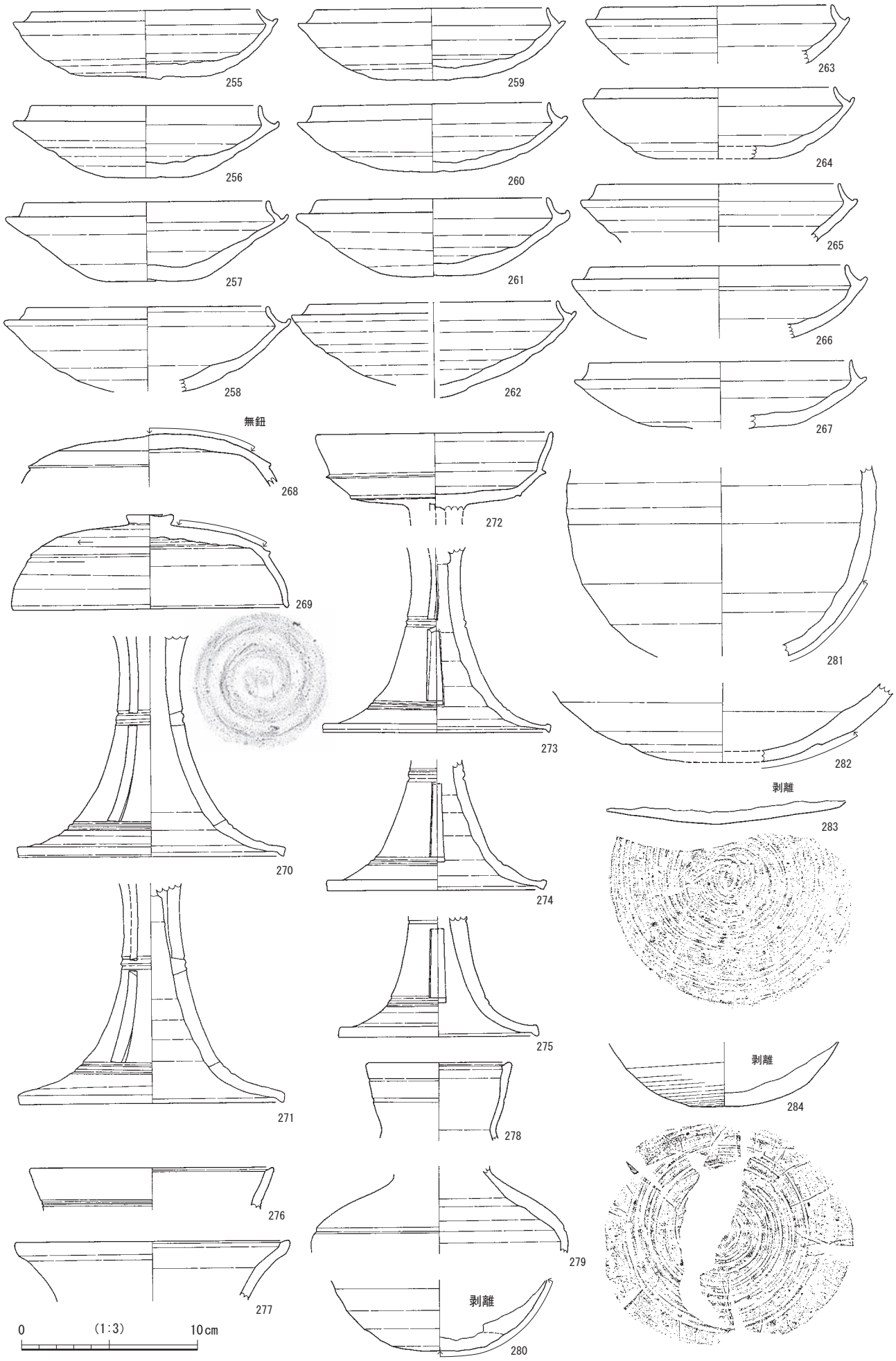
高坏　第66図268～275を図化した。高坏A(有蓋長脚、3方2段透かし)と、高坏B(無蓋長脚、2方2段透かし)が同数程度存在し、いずれも焼成堅緻で自然釉の熔着が目立つ。高坏A蓋は、還元の弱い無鈕蓋(268)と焼成堅緻な鈕付き蓋(269)が出土、いずれも肩部の稜を鋭く仕上げる。269は天井部内面中



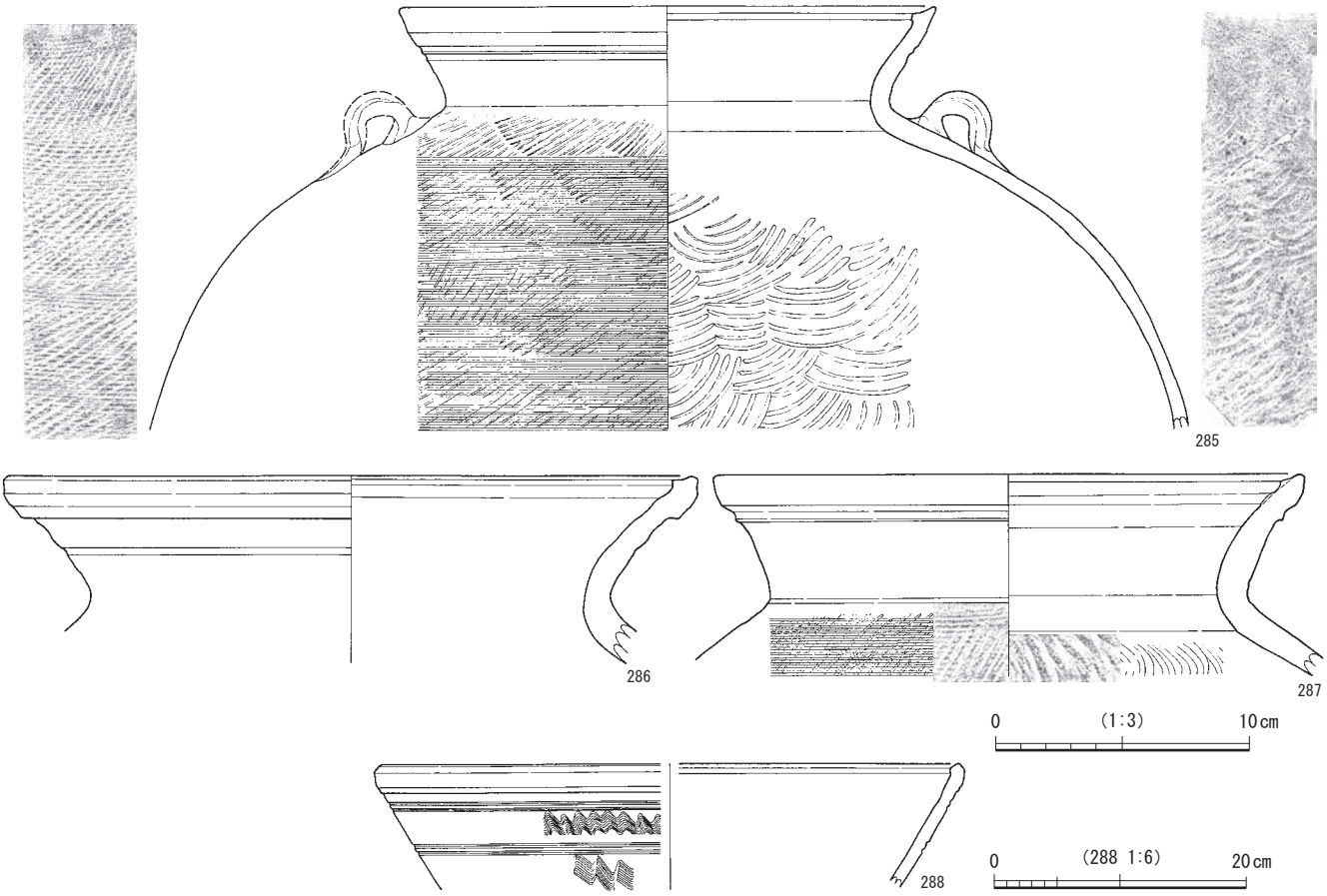
第64図　1号窯出土遺物1（S=1/3）



第 65 図　1 号窯出土遺物 2（S=1/3）



第 66 図　1 号窯出土遺物 3（S=1/3）



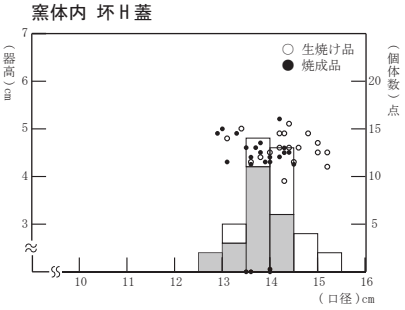
第 67 図　1 号窯出土遺物 4（S=1/3、1/6）

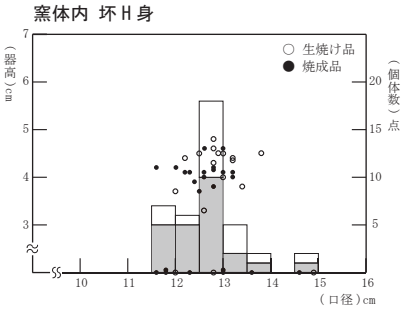
第 6 表　1 号窯出土遺物計測表

	計	坏H		高坏A		高坏B	高坏C・不明	壷類		瓶類						鉢類			甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身			壷A	その他・不明	甕		提瓶	平瓶	横瓶	その他・不明	鉢A	鉢C	その他・不明	大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	2,080	1,088	827	40	0	45	0	3	0	0	0	0	0	11	30	0	0	0	5	28	3	0	0
口縁部計測法（補正口縁値）	1,253	1,088		40		45	0	3					0	11	30	0	0	0	5	28	3	0	0
比率（%）	100%	86.8%		3.2%		3.6%	−	0.2%					−	0.9%	2.4%	−	−	−	0.4%	2.2%	0.2%	−	−
破片数計測法（点）	1,273	405	220	11	15	17	0	1	1	0	4	89	0	23	7	0	0	0	2	7	2	469	0
破片数計測法（補正点）	1,042	405		15		17	0	2					93	23	7	0	0	0	2	7	2	469	0
比率（%）	100%	38.9%		1.4%		1.6%	−	0.2%					8.9%	2.2%	0.7%	−	−	−	0.2%	0.7%	0.2%	45.0%	−

※灰原出土遺物なし。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 7 表　1 号窯実測坏 H 法量分布表





央に同心円叩き痕がかすかに残り、口径15.6cm、器高5.4cmを測る。脚部(270・271)は脚端径約15cmを測り、2条1単位の沈線と透かしで加飾、下段の沈線と脚端部の間はロクロひだが目立つ。透かしは切り幅が狭く、特に上段の透かしは内側で幅数mmと、かろうじて内側に貫通する。高坏Bは2方透かしのみが確認でき、4号窯が3方透かしであることと様相が異なる。口径13.3cm、脚端径11.2～12.8cm、高さ15cm前後を測り、沈線・稜による加飾具合や、透かし幅の狭さは、高坏Aと共通する。焼成時の据え方は、高坏Aが蓋・身をセットとした倒位焼成、高坏Bが正位焼成と、4号窯と同様に厳格に分けられる。

壷・瓶類　小片での出土が大部分を占める。壷は、短頸の276、なで肩を呈する279、底部外面に回転ケズリ調整を施すA類底部片280～282が出土した。瓶類は、口縁端部を断面方形状に肥厚させる横瓶277や、口縁部が直立気味に長くのびる278の他、最終操業段階に属する提瓶胴部剥離片283・284が出土した。提瓶は、前述のとおり胴部剥離片が多出しており、かなりの数の焼成が想定できる。

甕　口縁部片は285～288の4個体の出土にとどまり、うち286・287は焼き台(置き台)転用品である。285は口径21.1cmを測り、肩部2ヶ所に環状の把手をつける。286は口径27.2cmを測り、肥厚した口縁部内面に突帯をもつ。生焼けの287は、口縁端部を286と類似した形状に仕上げ、外面下端に突帯を巡らす。287は、坏Hの184等の個体群と焼成具合が近似し、最終操業段階に属する個体となる。

4．6号窯　(第68～70・114図、第8・9・34・35表)

出土状況　6号窯は床面に2回以上の補修痕が確認できる。その出土遺物は、窯体内出土の1箱を含めて整理箱で13箱(破片数738点)を数え(第8表)、第68図289～320が窯体内焼成室最終操業段階の床面および焚口から、第69図321～第70図360が前庭部から、また同図361～386が灰原から、それぞれ出土した。他窯と位置的に近く、灰原出土品には他窯焼成品が混入する可能性を多分に残す。

器種構成　器種構成は、坏H、高坏、壷・瓶類、鉢類、甕に加え、鋺、大型鉢、有溝把手をもつ甑1点、重ね焼きされた円面硯2点を確認した。小片が多いため、高坏BとD、また壷・瓶類と鋺類身との区分を明瞭にできない個体が定量存在した。量比は、口縁部計測法でみれば、焼き歪み破損した坏Hが約47%と最も多く、鋺類蓋が約20%、瓶類が約12%、壷類と高坏B・Dが各約4%の比率を示す。鋺Gの定着と、壷類に対する瓶類の優越がみてとれる。また、破片数計測法でみれば、甕が約53%、坏Hが約21%、瓶類約9%、高坏B・Dと鋺類が各約4%、高坏Aが約3%の比率を示す。

坏H　第68図289～302、第69図321～333、第70図361～372を図化した。基本的に1法量であり(第9表)、身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行う。回転ヘラ切りの範囲を狭くするための身底部(蓋は天井部)の成形技法は、1・4号窯と同様であるが、底部～体部下縁にやや丁寧な回転ナデ調整を加えるため、斜め方向のヘラ状工具の明瞭な差し込み痕は身296・369で確認できる程度と少ない。また、底部外面中心に残る回転ヘラ切り時の粘土痕跡は、ほぼなで消しており、その後にクシ状工具を用いたナデ調整を多用する。外面にクシ状工具痕が残る個体は、蓋289・291・323～325、身296・301・332・368がある。底部内面中央の軽いナデ調整は1・4号窯と共通する。焼成状況は、ほとんどの個体で焼き歪み・焼き割れが目立ち、焼き台(置き台)に転用した個体が定量存在する。また、堅緻な焼成で外面に緑灰色の自然釉が厚く熔着する個体が多く、自然釉の熔着状況等から復元できる重ね焼きの様相は蓋・身を1セットとして倒位で焼成した場合が比較的多い印象を受ける。一方、生焼け品は身302、蓋326・372等がある程度で、限定的な存在である。

蓋(289～294、321～325、361～363)は、全体的に狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁部に至り、口縁端部を丸く仕上げる器形を基本とする。1・4号窯で主体となった口縁基部で明瞭な屈曲する器形は325・361等に限られる。法量は口径12.3～13.8cm、14.7cm、器高3.1～4.6cmを測り、1・4号窯

と比して明らかに口径の縮小化が進む。なお、焼き歪みや焼き台（置き台）転用により290・322は扁平な器形を呈する。

身（295～302、326～333、364～372）は、蓋と同様に狭い底部から丸みをもって体部が立ち上がる。内傾する口縁部は、そのまま短くのびる個体が増加し、口縁端部が反り立つ個体は比率を減じる。体部が直線的に外傾しながら立ち上がる器形は、368が確認できる程度である。また、受け部の形態は、1・4号窯でみられた、受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態（327・365・366・371等）、受け部が横方向に短くのびる形態（329・370・372等）、体下部から連続する傾きを保持したまま斜め上方向に短くのびる形態（298・330・367等）が確認でき、前2者は灰原出土品に多い傾向を示す。身の法量は、口径10.6～13.2cm、器高3.5～4.2cm、4.8cmに分布し、蓋と連動して口径が縮小化する。

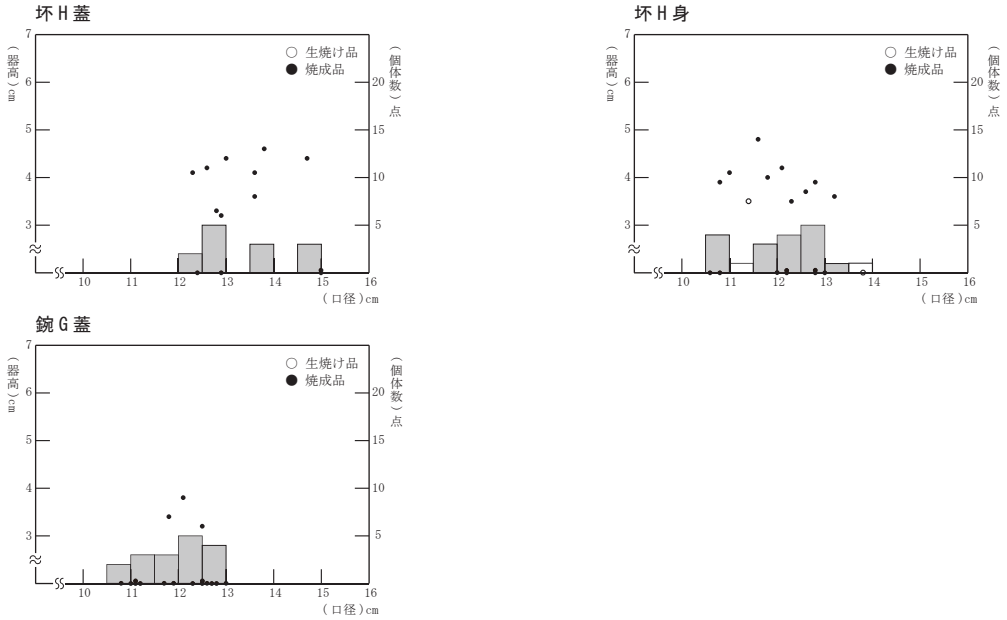
鋺　金属器的器種であり、蓋（窯体内303～310、前庭部334～339、灰原374～378）は定量確認できるが、焼き歪んだ小片が多い身（窯体内311～313、前庭部340～342・348～351、灰原382）の様相には不明な部分を残す。蓋は、天井部からなだらかに口縁部に至り、断面三角形状の返しが口縁端部より下の高さまでしっかりと突出、やや崩れた乳頭形または擬宝珠形の小振りな鈕を付す器形を基本とする[3]。また、自然釉の熔着でみえない個体も多いが、天井部外面に回転ケズリ調整を施す個体が主体で、一部カキメ調整を施す個体（305・307・310）もある。細部では、形が崩れた鈕を付すもの（336）、返しが口縁端部より下に突出しないもの（305・375）、扁平な器形を呈するもの（376）が確認できる。法量は、口径

第８表　６号窯出土遺物計測表

	計	坏H		鋺G等		高坏A		高坏 B/D	壷類	瓶類				鉢類	甑	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身	蓋	身			瓶		提瓶	その他・不明			大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	1,104	435	87	187	86	0	0	33	38	36	0	3	75	17	16	4	2	10	0	75
口縁部計測法（補正口縁値）	931	435		187		0		33	38	114				17	16	4	2	10	0	75
比率（%）	100%	46.7%		20.1%		0%		3.5%	4.1%	12.2%				1.8%	1.7%	0.4%	0.2%	1.1%	－	8.1%
破片数計測法（点）	738	143	42	25	22	1	22	26	5	8	30	3	18	4	9	1	1	3	358	17
破片数計測法（補正点）	671	141		25		22		26	5	59				4	9	1	1	3	358	17
比率（%）	100%	21.0%		3.7%		3.3%		3.9%	0.7%	8.8%				0.6%	1.3%	0.1%	0.1%	0.4%	53.4%	2.5%

※灰原を含む。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。硯はその他に含む。

第９表　６号窯実測坏H・鋺G法量分布表



10.8～13.0cm、返し径7.5～10.0cm、器高2.3～3.8cmと、比較的幅広い分布を示す。全形のわかる305が口径12.1cm、器高3.8cmを、307が口径12.5cm、器高3.2cmを、376が口径12.5cm、器高2.3cmをそれぞれ測る。身とセットで正位焼成され、外面に緑灰色の自然釉が厚く熔着する個体が多い。

身の様相は判然としないが、いずれも精良な胎土で堅緻に焼き上がり、外面に自然釉や降灰が熔着した個体が多い。大きくは、深身で筒形器形(第103図1153類似)と、坏G精製品のような坏形器形(鋺G、11号窯: 第71図410)を想定しており、前者の器形は脚が付す個体も存在する。深身の筒形器形として312・313・340・341、その脚として348・382を、坏形器形(鋺G)として349～351をそれぞれ考える。筒形器形では、340が内湾する体部外面をカキメ調整と1条の沈線で加飾し、復元口径約16cmを測る。また、312・341の体部は大きく内湾し、底部付近は焼き歪みが特に顕著である。312で復元口径約15cm、341で同12cmを測る。313の体部は直線的にのび、外面に沈線を施す。筒形器形の脚と考えた348・382は、瑳口縁部と類似しており、屈曲部を稜で加飾、端部を平坦に仕上げる。坏形器形(鋺G)は、薄手で口縁端部は小さく内傾する特徴をもち、復元口径13～14cmを測る。現時点では、蓋と身の法量差が大きいことから可能性を指摘するにとどめ、蓋でみられた多様性の整理を含めて類例の増加を待ちたい。

高坏　前庭部出土の第69図345～347、灰原出土の第70図373・379を図化した。高坏A(有蓋長脚、脚部3方2段透かし)と、高坏B(無蓋長脚、脚部2方2段透かし)に加え、高坏Bが縮小化した器形をもつ高坏Dが定量確認でき、破片数計測法では高坏Aと高坏B・Dが同程度の比率を示す。他窯焼成品を含む可能性を残す灰原出土の高坏A蓋379は、無鈕で天井部外面にカキメ調整を施し、肩部の稜を鋭く仕上げる。口径14.4cm、器高3.9cmを測り、正位で焼成したと考えられる。扁平な高坏A身373は口径13.7cmを、脚345は脚端径15.6cmをそれぞれ測る。高坏Bの346は口径12.8cmを測り、坏部外面を2段の鋭い稜で、脚部をカキメ調整で加飾する。正位で焼成しており、坏部内面全面に降灰が認められる。高坏D脚347は脚端径11.0cmを測り、外面の加飾方法は高坏Bに準じる。

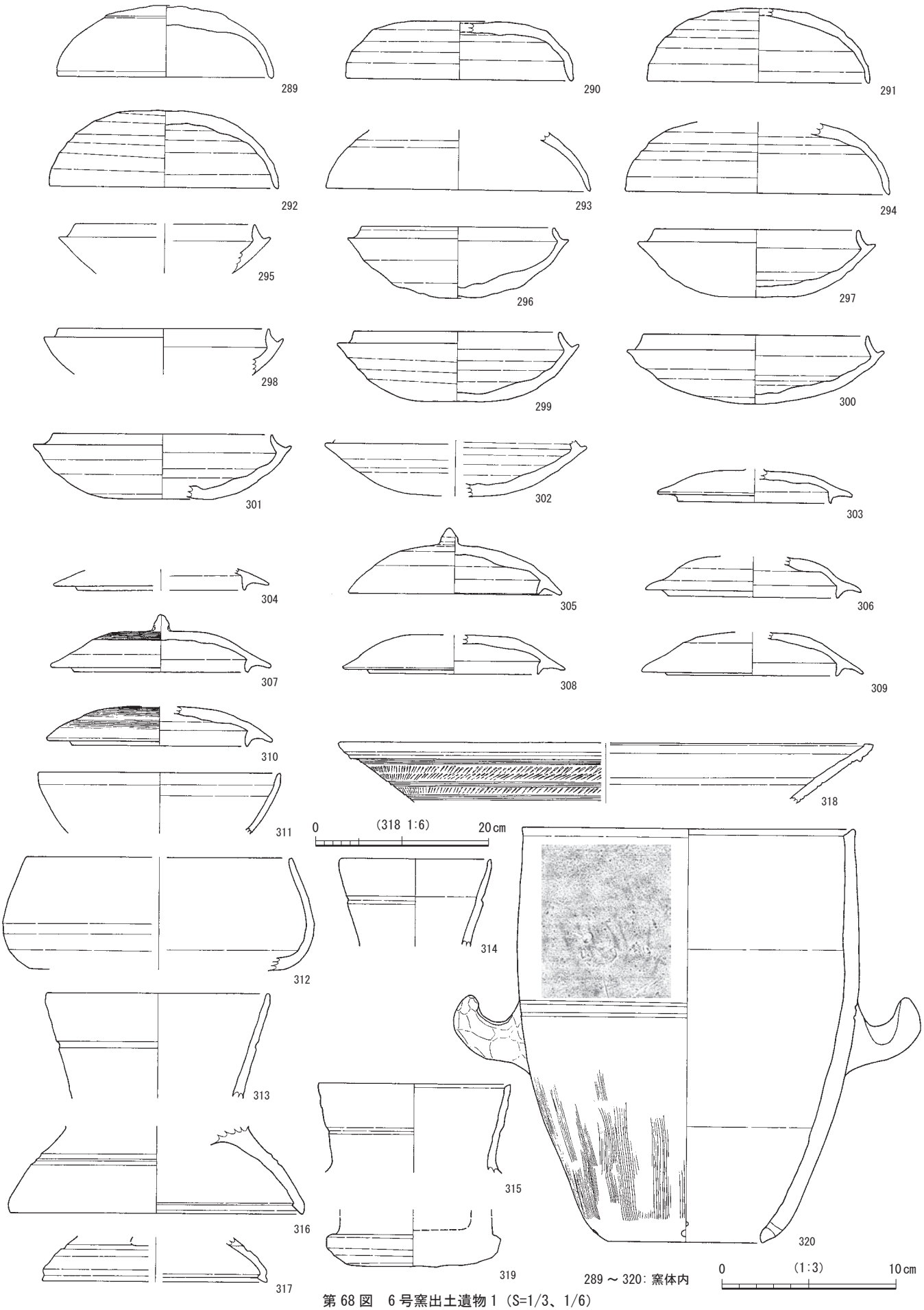
壷・瓶類　壷は小片の出土にとどまる。壷A類の315は口径13.5cmを、短頸の小型壷356は口径5.3cmを測る。直線的にのびる瓶とした313は、前述のとおり鋺の可能性をもつ。瓶類は、瑳、長頸瓶、提瓶が確認できる他、314・352の口縁部片が出土した。瑳380・381は口径12cm前後を測り、直線的に外傾する口縁部は端部で先細る。348・382は前述のとおり、鋺脚部の可能性をもつ。長頸瓶は、無台・丸底形の353と、透かしと沈線で加飾する有台脚部片316・354・355が出土した。提瓶383・384は胴部にカキメ調整を施す。

鉢類　厚底の鉢C類(385・386)の他、大型の357や厚手の口縁部片342等が出土した。385・386は焼成時に体部が剥離し、386の底部外面には静止ケズリ痕が残る。大型・深身の357は、底部を含めて外面にカキメ調整を施し、内面には自然釉が熔着する。342は生焼けである。

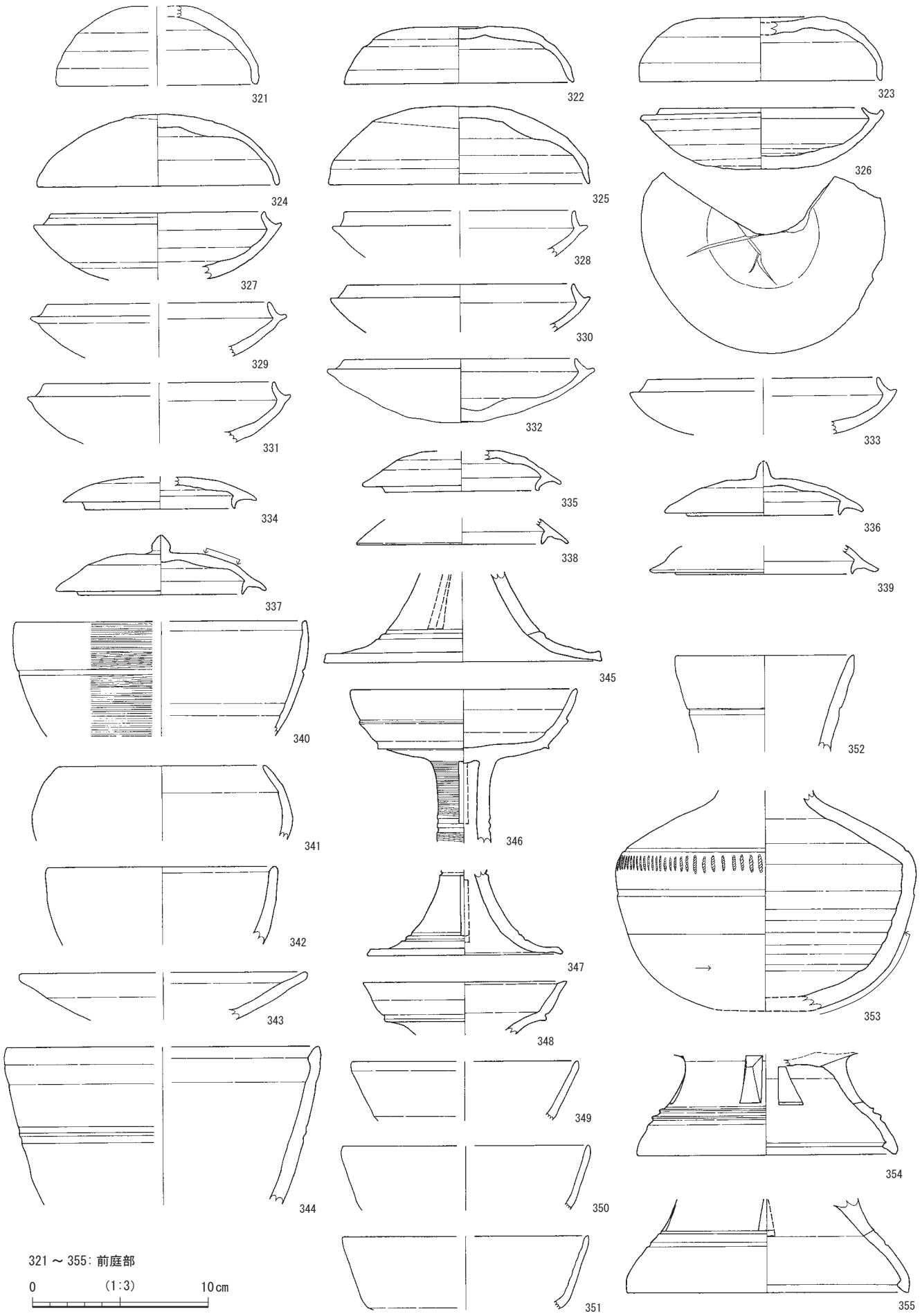
甑　窯体内床面から320が出土した。320は口径19.0cm、器高23.0cm、底径9.0cmを測り、内面を横方向のナデ調整、外面下半をハケ調整、外面上半をカキメ調整で仕上げる。また、2ヶ所の把手はヘラ状工具で中央に溝を刻む他、胴部下端4ヶ所に円孔を穿つ。なお、未実測だが4G撹乱層から、生焼けで同様の溝をもつ把手片が出土している(図版第37)。

甕　口縁部片のうち318、358～360を図化した。窯体内床面出土の大型甕318は復元口径約60cmを測り、外面を突帯、沈線、斜行刺突文で加飾する。焼き台(置き台)に転用されるため、図化した径・傾きに不安を残す。前庭部から出土した中型甕358は、口縁部が上方に肥厚する。また359・360は、肥厚した口縁端部下端に鋭い突帯を巡らし、同一個体の可能性をもつ。なお、焼き台(置き台)に転用した甕胴部片は、比較的少ない。

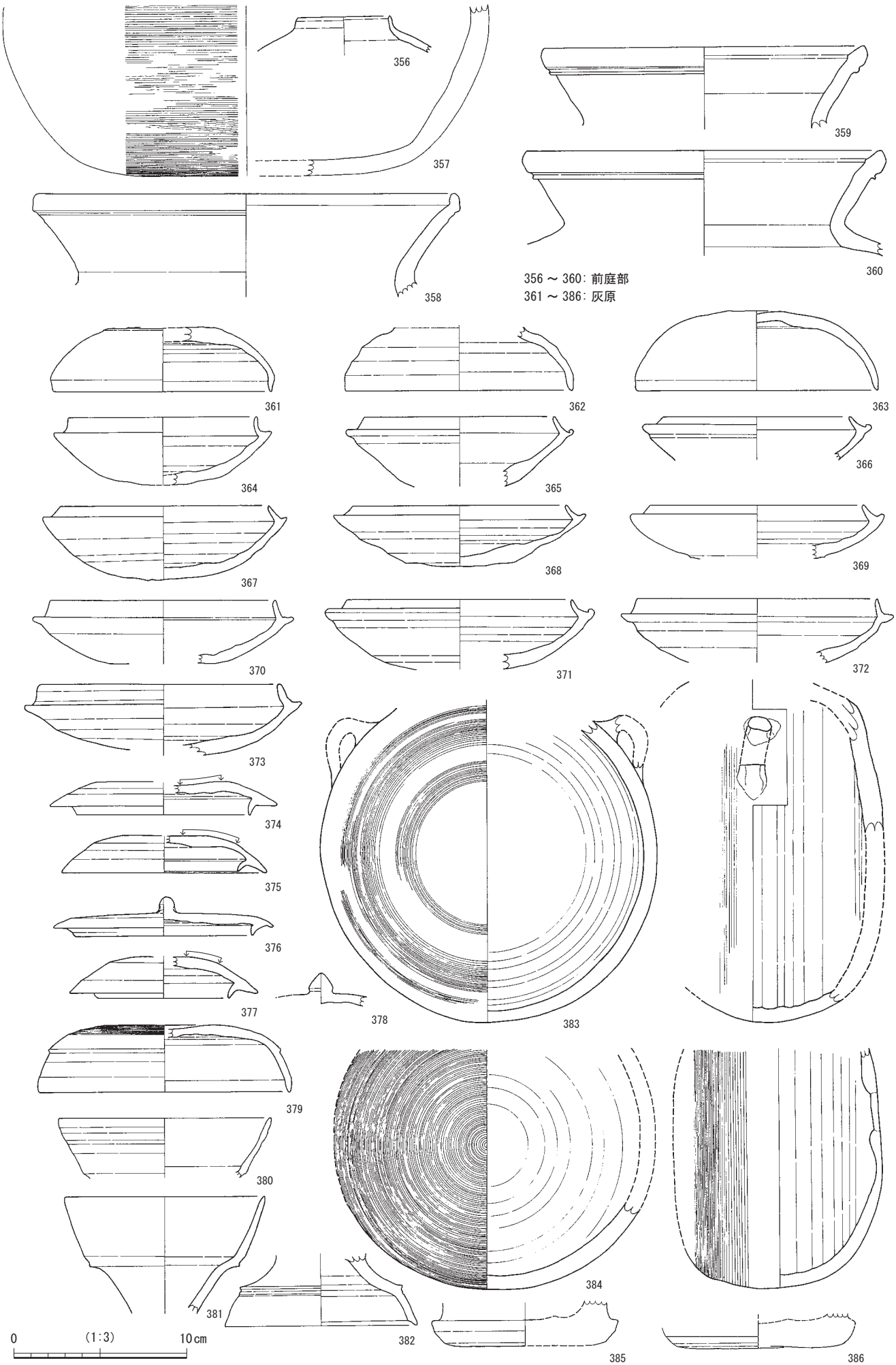
円面硯　焼成室最終床面から、第112図1276の重ね焼きした円面硯片が出土しており、後述する。



第68図　6号窯出土遺物1（S=1/3、1/6）



第 69 図　6 号窯出土遺物 2 (S=1/3)



第 70 図　6 号窯出土遺物 3（S=1/3）

5．11号窯　（第71～75・114・115図、第10～12・36～38・53表）

出土状況等　11号窯は、窯跡が密集する丘陵斜面下位に位置し、床面に3回以上の補修痕が残る。窯体内、前庭部から出土した遺物は多く、整理箱で24箱（2,207点）を数える。ただし、窯体内出土遺物のうち窯体または煙道部の流込土から出土した遺物は、本窯廃絶後に丘陵斜面上方から流れ込んだ他窯（7-2号窯か）の甕胴部片を中心とした小破片であり、焼成室床面内・最終床面・天井崩落土から出土した本窯操業段階の遺物は比較的少ない（第10表）。以下では出土箇所ごとに説明を行い、第11表に参考として陶棺を除いた破片数の計測結果を示した。

焼成室床面内　最終操業段階の床面内から出土し、いずれも小破片である。388・391・393は坏H蓋である。388は口径12.6cmを測り、口縁基部で明瞭に屈曲する。391は口径13.4cmを測り、肩部に回転ナデ調整を施す。生焼けの393は口縁基部で明瞭に屈曲する。坏H身399は、内面の返しと受け部の境で明瞭に屈曲する。完形の精製品である埦G蓋402は、口径11.5cm、器高3.2cmを測り、祭祀的理由で床面に埋設された可能性をもつ。小振りな鈕を含めて、外面全体に灰色の降灰が厚く熔着する。高坏A脚422は脚端径14.5cmを測る。高坏D脚426は2方透かしと考えられる。瓻439は口径10.4cmを測る。有台の壷底部片446は生焼けである。台部片447は生焼けに近く、成形にロクロを用いない。448は鉢A類の可能性が高い。

第74図460・461に代表される大型の用途不明品は、焼成室床面内・最終床面を中心に破片が出土しており、同窯最終操業段階以前の焼成と考えられる。接合したいずれの個体も、破片間の色調差が大きく、焼成の失敗のため破片化しており、中には焼き台（置き台）に転用した破片も存在する。成形方法は、須恵器技法を基本とする。まず、頂部（透かし窓の位置より上の部分）以外の体部を、倒位（完成品の上方向から下方向）で円筒形に成形する。この成形は、甕・鉢と同様に粘土紐を積み上げ、内面に同心円叩き、外面に平行叩きを用いて叩き締めながら、完成品の底の高さとなるまでつくったと考えられる。その後、断面略方形を呈する完成品の器形となるまで、板状工具によるナデや指ナデを用いて大きく器壁を変形し、肥厚する両端部をヘラ状工具や指ナデで粗く整える。最後に、体部を反転して据え置き、外側から幅約12cmの粘土板を透かし窓ができるよう弧状に貼り付け、頂部とする。また、体部2ヶ所に基部径約4cmの把手痕を残すが、形状は不明である。法量は、460が底辺35～37cm、推定高さ約60cm、461が推定透かし窓高約4cmを測る。なお、未実測だが、類似の製品と考えられる破片群が約60点出土、中には面取りをおこなった底端部内面を粗く指ナデ整形する破片や、底端部を丸く仕上げる破片（外面ハケ調整）がある（図版第41）。細部の調整方法の異なる類似製品を一定数焼成したものと考えられる。

焼成室床面　最終操業段階と考えられる遺物群で、6点を図化した。417は、高坏Bの系譜をもつ高坏Dで、内湾気味の坏部下半に鋭い稜を巡らせる。高坏Bの431は倒位で焼成され、上段の透かしは内面まで貫通している。壷A類444は丁寧な回転ケズリ調整とカキメ調整を施し、外面は黒化する。甕457は環状の把手痕が残る。大型の用途不明品461は前述のとおりであり、他に生焼けの甕片等が出土した。

焼成室天井崩落土　図化した23点中11点が生焼けであり、最終操業段階の遺物を多く含むものと考えられる。生焼け品は、坏H蓋390・392・394・395、高坏Aの425、高坏Bの418・424・429、長頸瓶脚437、壷類440、壷Ａ類445である。坏H蓋は、肩部にナデ調整を加えることで口縁基部の屈曲はほとんど目立たず、丸みをもった器形を呈する。口径は13.4～14.5cmに分布し、395で口径14.5cm、器高4.5cmを測る。坏H身397・400は、口縁部の立ち上がりが短く、受け部は斜め上方にのびる。鋺G身と考えられる410は口径11.8cm、器高4.0cmを測り、底部内面全体にナデ調整を、外面に回転ケズリ調整をそれぞ

れ加える。414・416は正位無蓋焼成の高坏Dで、口径12cm弱を測る。416の稜は、高坏Bの418とともに1条の可能性が高い。生焼けの418は口径14.5cmを測る。高坏脚423～425・427～429のうち、424は3方2段透かし、427・429は2方2段透かしである。脚端径は13.3～15.8cmに分布し、427・428は倒位に焼成される。生焼けの長頸瓶437は、長くのびる脚を3ヶ所の三角形の透かしと1条の沈線で加飾する。壷類口縁部と考えられる440は口径約16cmを測り、生焼けである。生焼けの提瓶441の残存する1ヶ所の環状把手の位置は、胴部閉塞円盤上にある。鉢A類449は口径17.6cmを測り、肩部が明瞭に屈曲する。

窯体流込土　出土遺物は多く、前述のとおり他窯焼成品と考えられる。坏H、坏G、盤類、高坏、壷・瓶類、甕胴部の小片があり、焼き台(置き台)転用を含む甕胴部片が大部分を占める。ロクロひだが目立つ坏H蓋389は、天井部外面に板状工具を用いて1方向の粗いナデ調整を密に施すため平坦な器形を呈する。坏H身401は口径12.8cm、器高3.3cmを測る。坏G蓋403～405は口径10cm前後を測る。坏G身407・409の体部は若干外傾する。焼き歪んだ盤411は口径約21cm、器高3.4cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。底部内面は同心円叩きの後に粗いナデ調整を、底部外面は回転ケズリ調整をそれぞれ加える。薄手の盤412は、正位焼成で大きく焼き歪み、端部が肥厚する脚を外展して付す。口径約27cm、器高約10cmに復元でき、内湾する体部外面をカキメ調整と3条の沈線で丁寧に加飾する。他に未図化だが大きく焼き歪んだ2個体分の破片が出土した。高坏A蓋413は天井部外面にカキメ調整を施す。生焼けの高坏B坏部419・420は口径15cm強を測り、稜を段状の起伏で表現する。421は高坏Aである。長頸瓶433は口径8.2cmを測り、生焼けの胴部片436は中程をカキメ調整の後に刺突文で加飾する。壷A類434は口径11.4cmを測り、頸部が締まった器形を呈する。球胴形の壷443は口縁部が断面三角形状に肥厚し、底部外面に平行叩きを用いて丸底に仕上げる。生焼けに近い底部は焼き割れが顕著である。倒位焼成の鉢C類450は、底部を内側から穿孔し、体部中程に環状の把手痕が残る。甕453は口径14.4cmを、454・455は口径25cm前後を測り、大型の甕459は口縁下部外面を突帯と沈線、粗い波状文で加飾する。なお、流込土からは、後述する平瓦様製品1271、陶棺1274、円面硯1276の破片の一部や、土馬1279が出土した。

窯体その他　焼成室から大型・厚手の鉢である第74図462・463が出土し、いずれも生焼けで同胎土を用いる。462が口径54.4cm、器高27cm以上、463が口径約57cm、器高22cm以上を測り、胴部を叩き締めながら成形した後、口縁部を板状工具または指ナデで粗く仕上げる。最終操業段階に属すると考えられる。

煙道流込土　窯体流込土出土遺物と同様の性格をもつ遺物群である。坏G蓋404、底部がやや台状を呈する坏G身408、生焼けの瓶類435、台坏鋺と考えられる438、大甕458に加え、平瓦様製品1269の破片の一部が出土した。438の体部は焼き割れ、1条の沈線で加飾した台部を外反して貼り付ける。大甕458は口径49cmを測り、加飾方法は459と類似する。

前庭部　坏G蓋406は口径10.7cm、器高2.7cmを測り、擬宝珠形の鈕は中心をずれる。高坏Dの415は口径12.4cmを測り、焼き台(置き台)に転用する。430は2方2段透かしを穿つ高坏Bで、上段にカキメ調整を施す。甕451は、内傾気味の口縁部に窯土が熔着する。坏H蓋である第75図464・465はナデ調整により丸みをもった器形に仕上げる。坏H身467～474は偏平な器形を呈する。467～469・472・474は生焼けであり、468・470の底部外面にはクシ状工具痕が残る。鋺G蓋475は天井部外面にカキメ調整を施し、476は焼き台(置き台)に転用される。鋺G身478は口径約11cmを測り、正位無蓋で焼成する。無鈕の高坏A蓋466は、天井部内面中央の同心円叩きをナデ調整で消している。高坏A身479は焼き歪みが著しい。高坏Bの480・481は同胎土である。高坏Aの482は倒位で、484は正位で焼成する。高坏C脚485・486は脚端径11cm弱を測る。瑯487の口縁部は大きく外反する。厚底の鉢C類448は倒位で焼成され、焼き歪みが著しい。底部外面に工具の接触痕が残る。生焼けの小型瓶492は、底部外面に手持ちケズリ調整を加える。493は、調査で唯一出土した土錘であり、両端部は鋭利な切り口痕を残す。中型甕494・495は肥

厚する口縁部下端に突帯を巡らすのに対して、496･497は口縁端部を平坦に仕上げ、外面を1条の沈線で加飾する。生焼けの大型甕498は口径47.2cmを測り、外面をカキメ調整の後に沈線と波状文で加飾する。

第 10 表　11 号窯実測遺物出土箇所一覧表

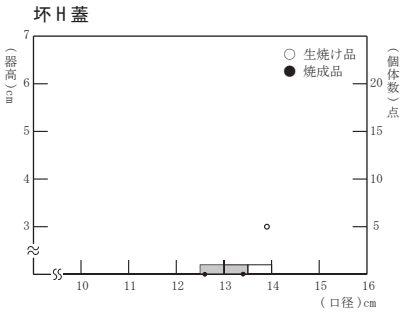
出土箇所	遺物番号
焼成室 床面内	388、391、393、399、402、422、426、439、446～448、452、460(用途不明品)
焼成室 最終床面	417、431、444、456、457、461
焼成室 天井崩落土	387、390、392、394、395、397、400、410、414、416、418、423～425、427～429、437、440、441、445、449、1312
窯体 流込土	389、396、398、401、403、405、407、409、411～413、419～421、433、434、436、442、443、450、453～455、459、 1271(平瓦様製品片)、1274 (陶棺片)、1276(円面硯)、1279(土馬)
窯体 その他	432、462,463
煙道 流込土	404、408、435、438、458、1269(平瓦様製品片)
前庭部	406、415、430、451、464～498、1309～11、1313～15、1338

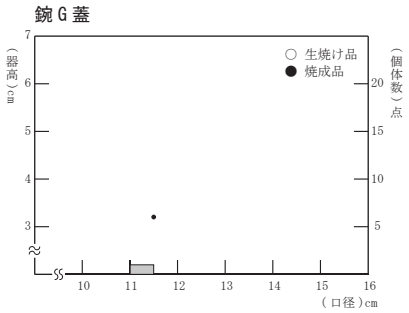
第 11 表　11 号窯出土遺物計測表

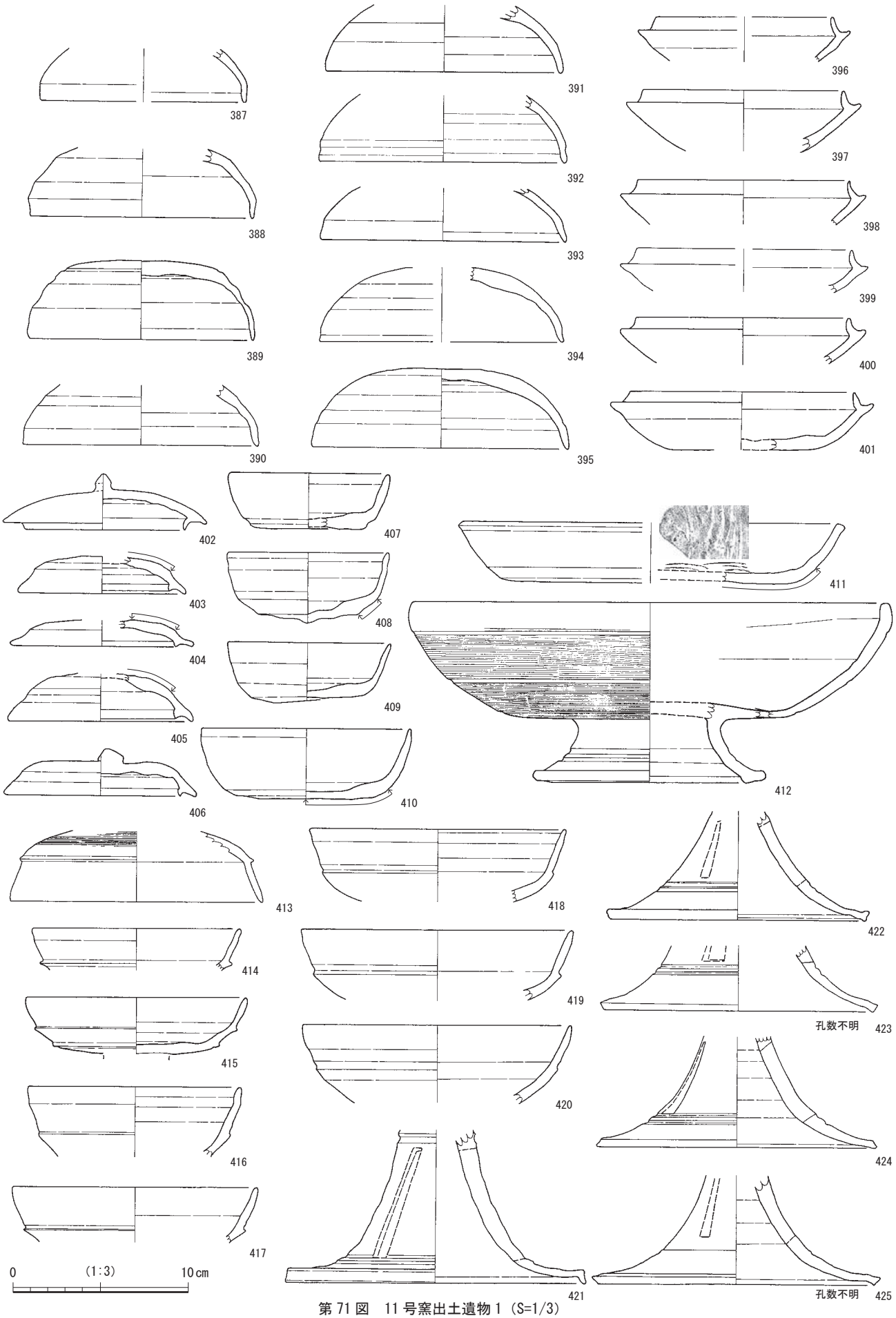
	計	坏H		鋺G		坏G		高坏A		高坏B～D	盤類	壺類	瓶類	鉢類	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身	蓋	身	蓋	身						大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	1,283	322	155	50	5	74	48	10	48	133	23	38	52	67	117	30	19	2	90
口縁部計測法	1,065	322		50		74		48		133	23	38	52	67	117	30	19	2	90
比率（%）	100%	30.2%		4.7%		6.9%		4.5%		12.5%	2.2%	3.6%	4.9%	6.3%	11.0%	2.8%	1.8%	0.2%	8.5%
破片数計測法（点）	2,207	140	102	6	1	7	13	7	44	118	20	27	134	22	194	20	4	1,219	129
破片数計測法（補正点）	2,090	140		6		13		44		118	20	27	134	22	194	20	4	1,219	129
比率（%）	100%	6.7%		0.3%		0.6%		2.1%		5.6%	1.0%	1.3%	6.4%	1.1%	9.3%	1.0%	0.2%	58.3%	6.2%

※灰原出土遺物なし。流込土を含む数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

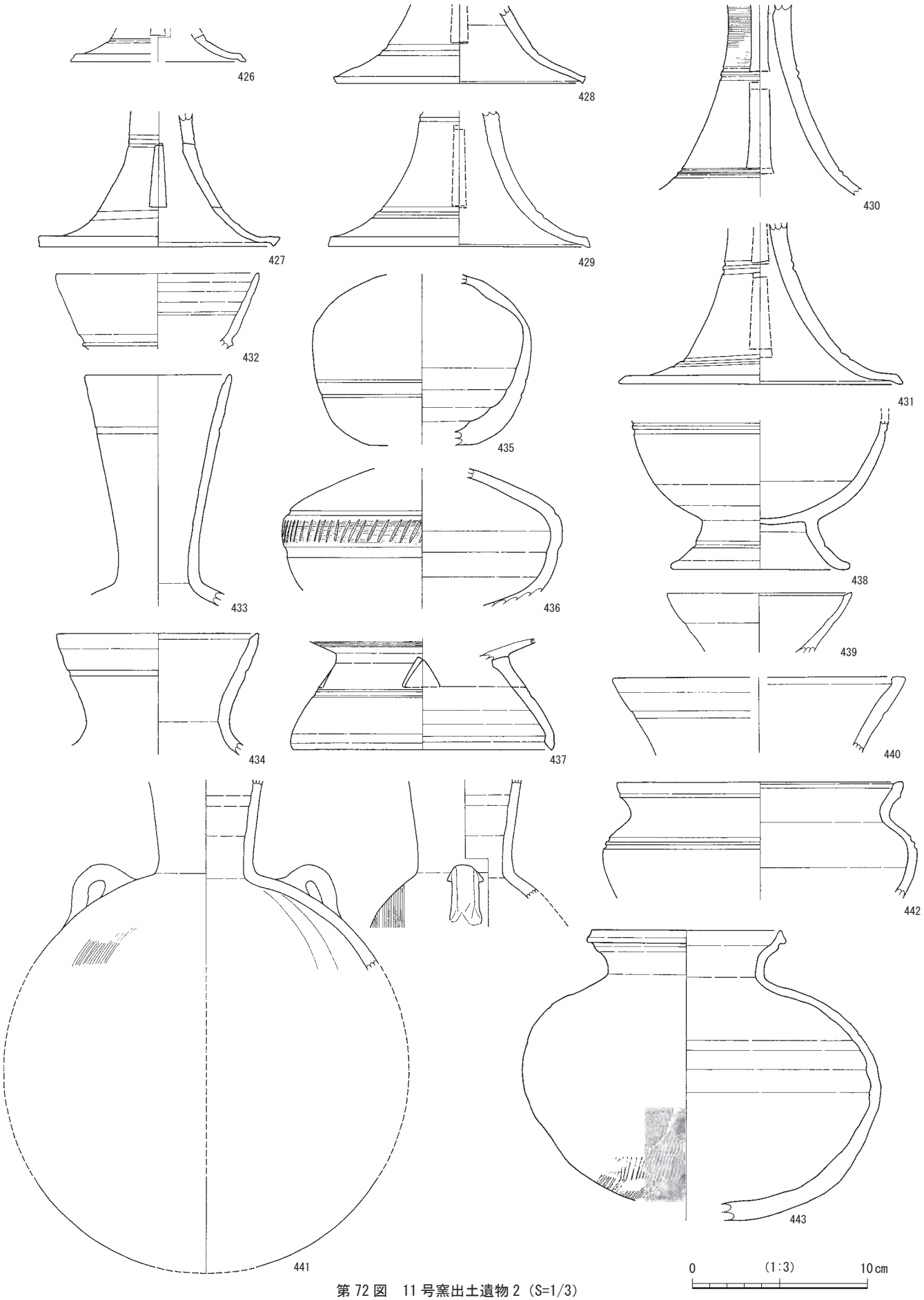
第 12 表　11 号窯実測坏 H・鋺 G 法量分布表



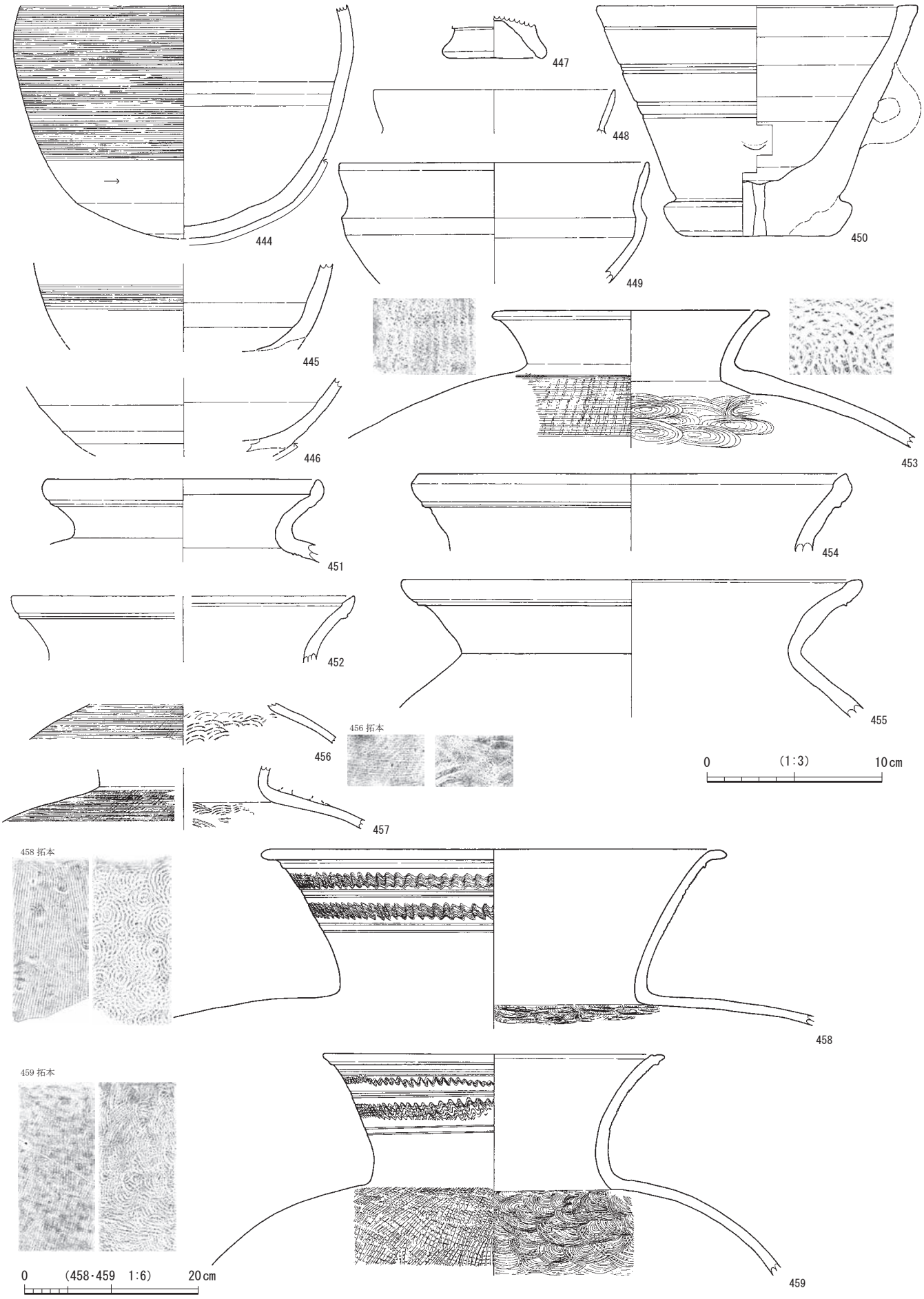




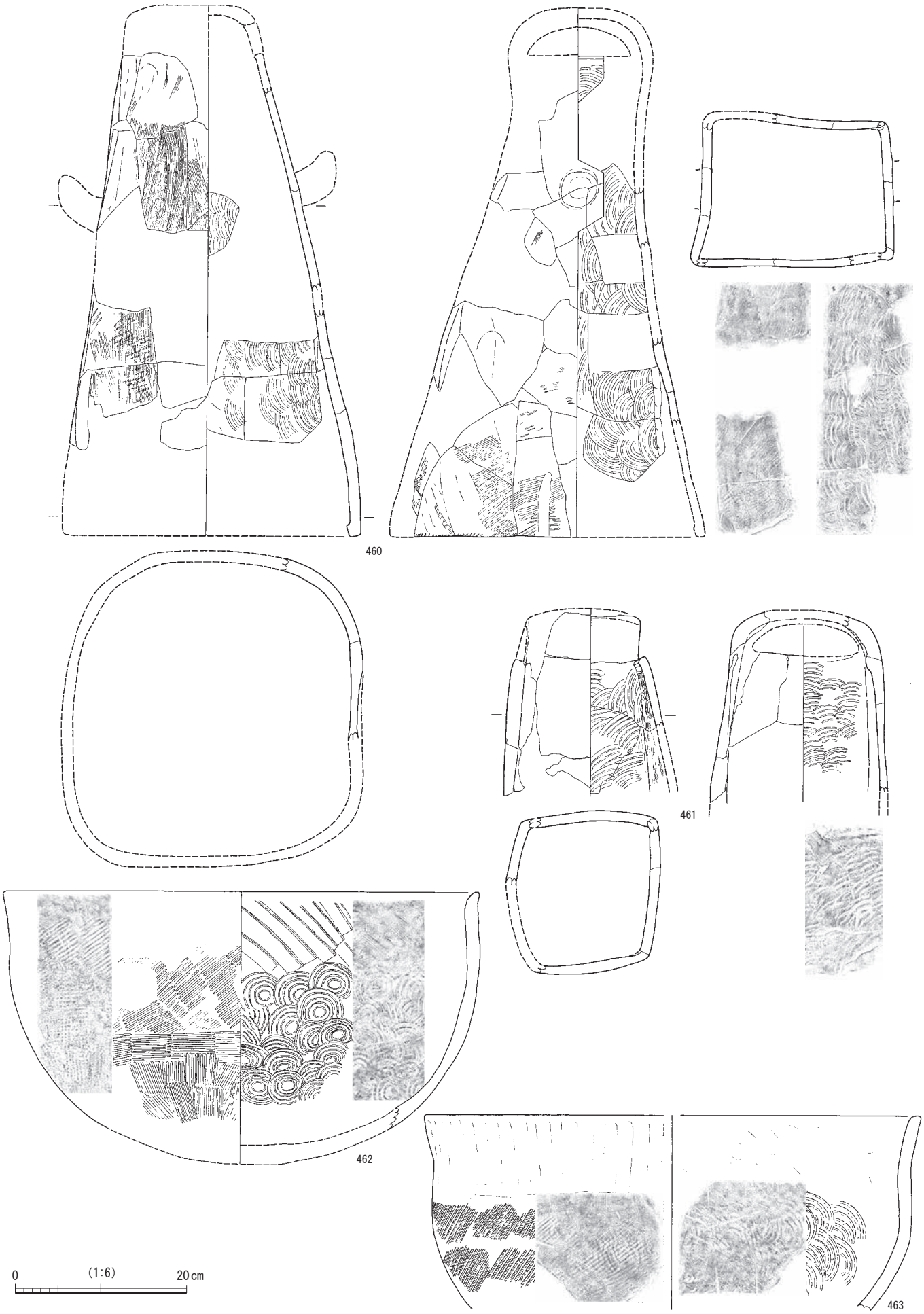
第71図　11号窯出土遺物1（S=1/3）



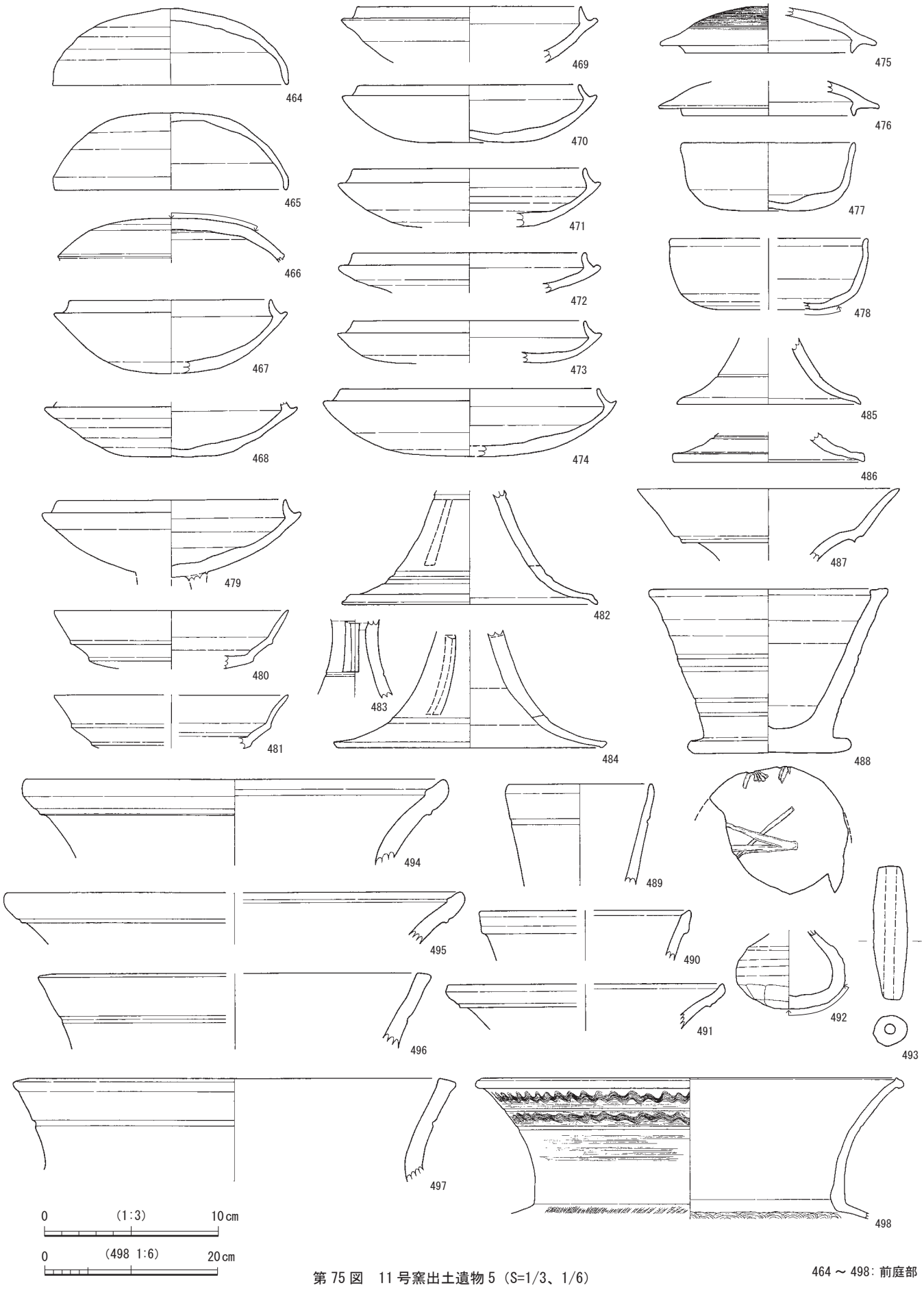
第 72 図　11 号窯出土遺物 2（S=1/3）



第 73 図　11 号窯出土遺物 3（S=1/3、1/6）



第 74 図　11 号窯出土遺物 4（S=1/6）



第 75 図　11 号窯出土遺物 5（S=1/3、1/6）

464 ～ 498: 前庭部

6．7－1号窯　（第76・77・108・114図、第13・14・38・39・52・53表）

出土状況等　7-1号窯は、窯跡が密集する丘陵斜面東側上位に位置し、床面に1回の補修痕が残る。遺物は、窯体内舟底状ピットと前庭部から多くが出土しており、灰原を除いて整理箱で7箱（破片数646点）を数える（第13表）。窯体内では、最終操業段階の床面内から499・501・511・513・524・527・528・533・538・543・547・1317が、床面上から1267・1316が、また焼成室流込土から500・506・514・529・530・541・542・546が、煙道流込土から558・559・1286・1287・1289がそれぞれ出土し、後2者は他窯焼成品の可能性が高い。

器種構成　流込土を含めて、坏H、鉢G、坏G、高坏A・C・D、鉢C類、壷・瓶類、甕の他、大型坏とした523、波状文で加飾する鉢とした526～528、鉢類身と考えた532、土馬片等が少数確認できる。量比は、口縁部計測法で、焼き歪みや焼き台（置き台）転用品を含む坏Hが約41％、坏Gが約19％、横瓶等の瓶類が約18％、高坏が約8％となり、少数の鉢G、坏Gを加えると食膳具が全体の約71％の比率を示す。また、破片数計測法では、焼き台（置き台）転用を主体とした甕が約49％、坏Hが約18％、瓶類が約15％となり、総点数が比較的少ないことから、完形に近い横瓶538の影響を受けた比率と示す。

坏H　第76図499～522・536・537、第77図548～550を図化した。基本的に1法量であり（第14表）、身底部（蓋は天井部）の切り離しを回転ヘラ切りで行う。回転ヘラ切りの範囲を狭くするための身底部（蓋は天井部）の成形技法は、6号窯と同様で、底部～体部下縁外面にやや丁寧な回転ナデ調整を加えるため、斜め方向のヘラ状工具の明瞭な差し込み痕はほとんど確認できない。また、底部外面中心に残る回転ヘラ切り時の粘土痕跡はクシ状工具を用いたナデ調整を多用して、ほぼ消される。底部外面を粗い回転ナデ調整にとどめ、クシ状工具痕が確認できない個体は、蓋506（流入土）・508・510・537、身522がある程度となる。底部内面中央の軽い1方向のナデ調整は6号窯と共通し、ほぼすべての個体で確認できる。焼成状況は、ほとんどの個体で焼き歪み・焼き割れが目立ち、生焼け品は蓋499・503・504、身519・521等、定量存在する。

また、猿投系と考えられる器形が2点確認できる。いずれも生焼けで、胎土は他焼成品と類似しており、搬入品とは考えにくい。偏平な蓋503は口径13.4cm、器高3.2cmを測り、内面は磨滅する。平坦な天井部外面に丁寧な回転ナデ調整を施し、肩部に稜をつくる。深身の身512は口径9.4cm、器高3.9cmを測る。蓋と同様に丁寧な回転ケズリ調整を施し、受け部直下に稜状の起伏や長くのびる口縁部に特徴をもつ。また、前庭部出土の身548も深身の器形を呈しており、影響を受けた器形と考えられる。

蓋は、最終操業段階の床面内から499・501・511が、床面・天井崩落土から502～505・507～510が、流込土から500・506が出土した。全体的に偏平で、狭い天井部からなだらかに丸みをもって口縁部に至り、口縁端部を丸く仕上げる器形を呈する。焼き歪んだ507・508は、より扁平となる。1・4号窯で主体となった口縁基部で明瞭な屈曲する形態は504・505・509等に限られる。猿投系を除く法量は、口径12.5～14.5cm、器高2.8～4.7cmを測り、ばらつきをみせながらも1・4号窯と比して明らかに口径の縮小化が進む。身は、513が最終操業段階の床面内から、512・515～522が床面・天井崩落土から、514が流込土から出土、513・514は焼き台（置き台）に転用した小片である。狭い底部から丸みをもって立ち上がる扁平な器形が多く、体部が直線的に外傾する器形は521が確認できる。。口縁部は内傾しながら短く仕上げる個体が増加し、口縁端部が反り立つ個体は比率を減じる。また、受け部の細部形態は、1・4・6号窯でみられた受け端部が上方に小さく折れ曲がる形態はなく、受け部が短く横方向にのびる形態（513・522等）より、体下部から連続する傾きを保持したまま斜め上方向にのびる形態（517・519・549等）が主体となる。身の法量は、口径10.9～13.6cm、器高3.1～4.5cmに分布し、蓋と連動して縮小

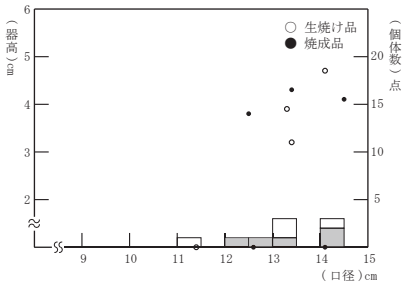
第 13 表　7-1 号窯出土遺物計測表

	計	坏H		鋺G		坏G		高坏A		高坏C	高坏D	壺 類	瓶類	鉢 類	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身	蓋	身	蓋	身						大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	781	201	223	12	19	22	103	5	17	15	10	8	98	16	0	3	0	3	26
口縁部計測法（補正口縁値）	541	223		19		103		17		15	10	8	98	16	0	3	0	3	26
比率（%）	100%	41.2%		3.5%		19.0%		3.1%		2.8%	1.8%	1.5%	18.1%	3.0%	0%	0.6%	0%	0.6%	4.8%
破片数計測法（点）	646	106	68	1	3	5	18	3	6	8	17	10	88	6	0	1	0	286	20
破片数計測法（補正点）	584	106		3		18		6		8	32	10	88	6	0	1	0	286	20
比率（%）	100%	18.2%		0.5%		3.1%		1.0%		1.4%	5.5%	1.7%	15.1%	1.0%	0%	0.2%	0%	49.0%	3.4%

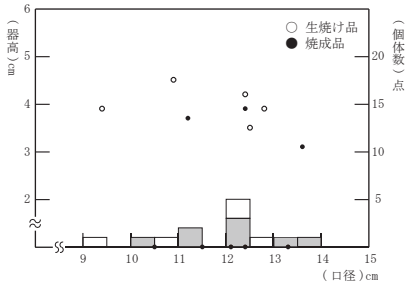
※灰原を除き、流込土を含む数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 14 表　7-1 号窯実測坏 H 等法量分布表

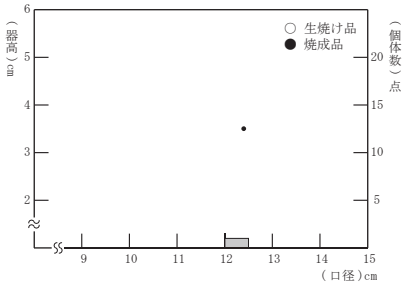
坏 H 蓋



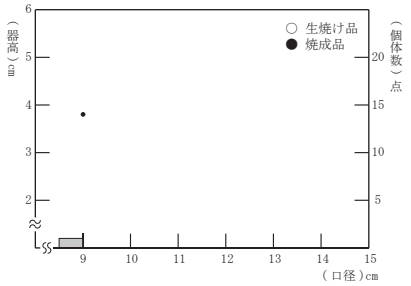
坏 H 身



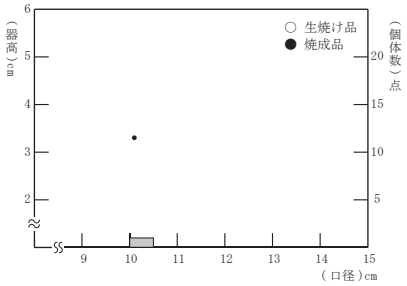
鋺 G 蓋



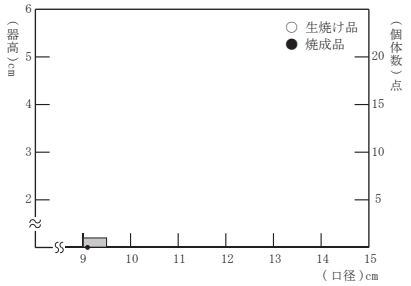
鋺 G 身

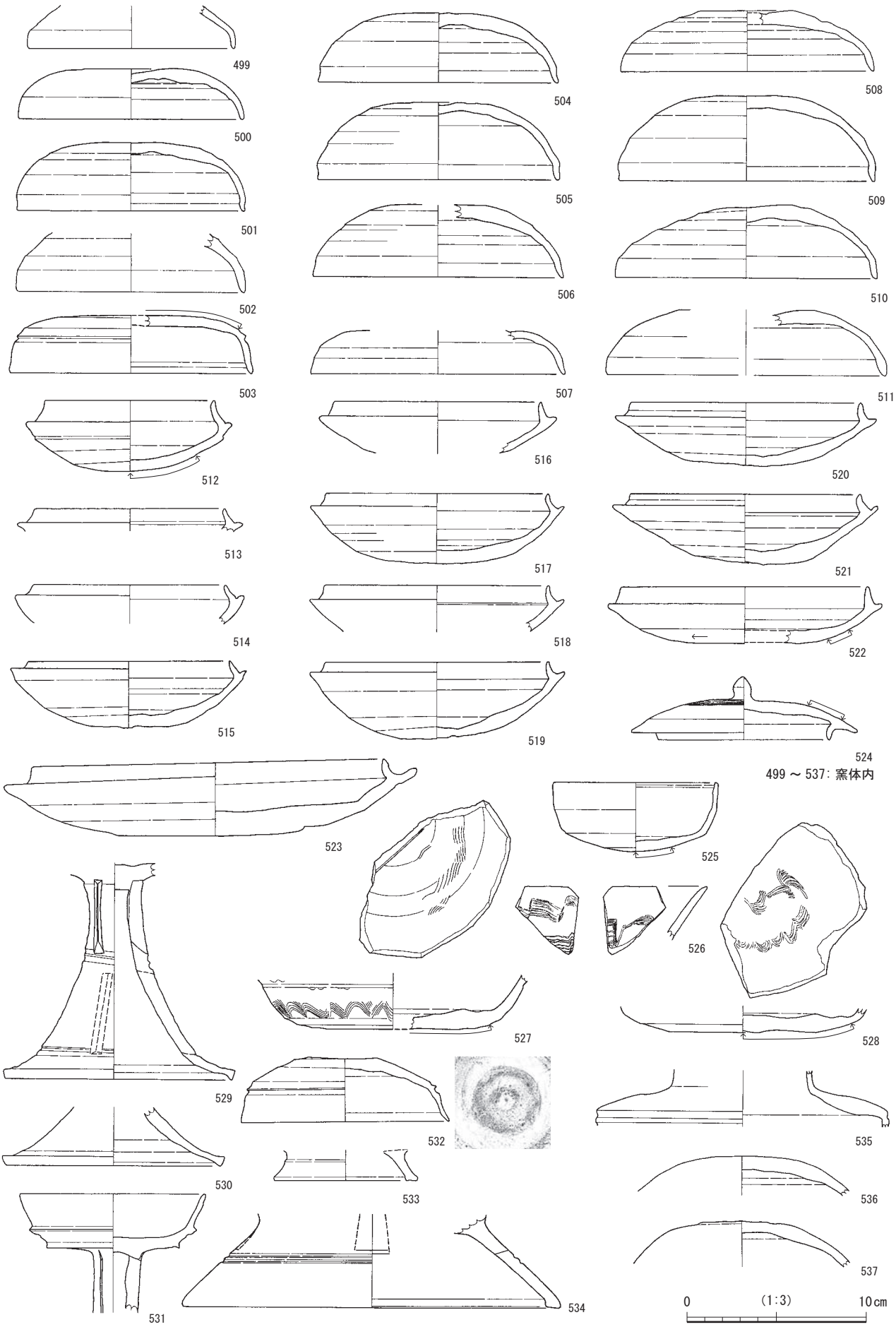


坏 G 蓋

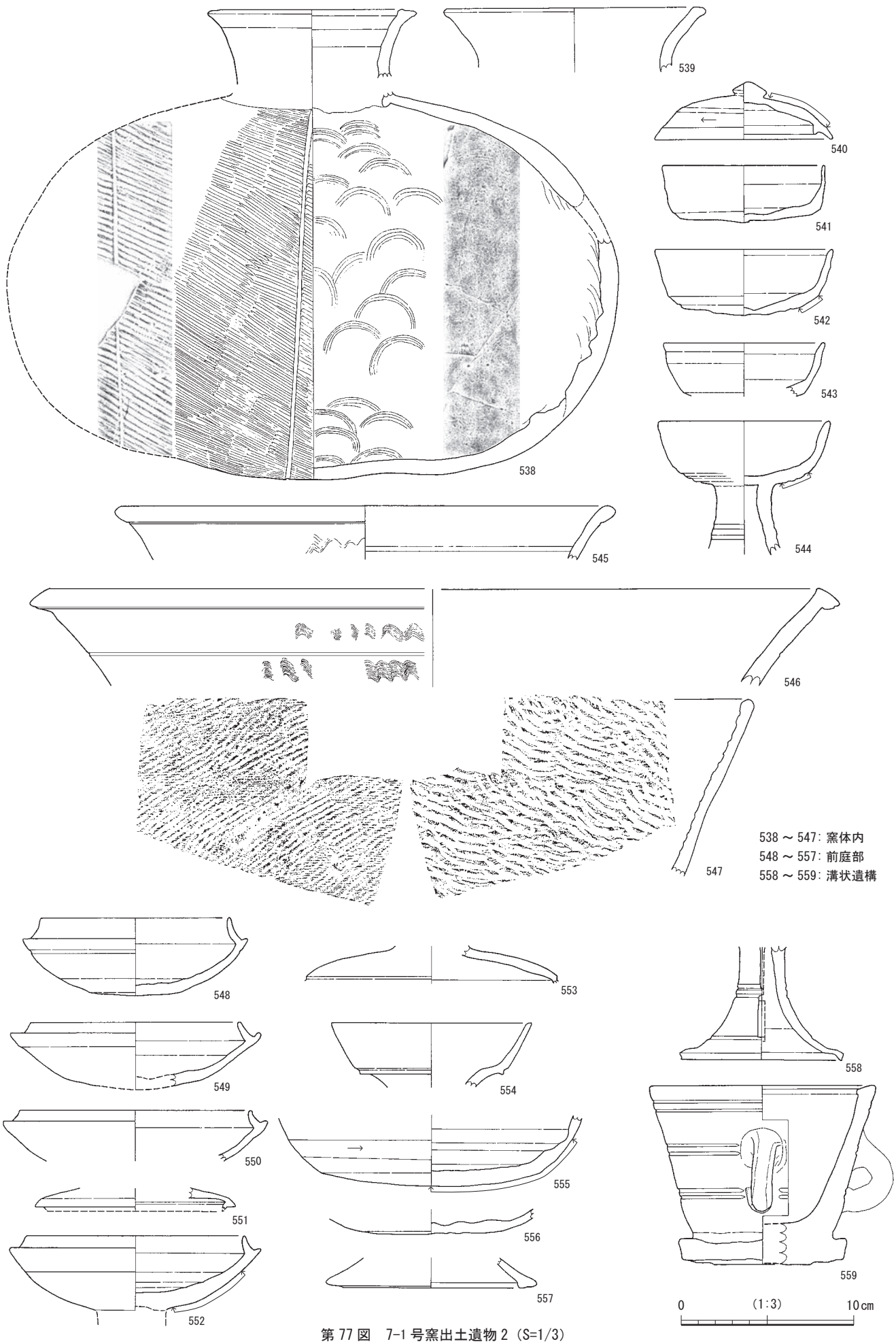


坏 G 身





第 76 図　7-1 号窯出土遺物 1（S=1/3）



第 77 図　7-1 号窯出土遺物 2 (S=1/3)

化する。

鋺G　最終段階の床面内から蓋524が、天井崩落土から身525が出土した。焼き歪んだ524は口径12.4cm、器高3.5cmを測り、天井部外面に丁寧なカキメ調整を施す。薄手の525は口径9.0cm、器高3.8cmを測り、突出気味の底部に丁寧な回転ケズリ調整を施す。

坏G　最終段階の床面内から身543が、床面から蓋540が、流込土から身541・542が出土した。生焼けに近い蓋540は口径10.1cm、器高3.3cmを測り、天井部外面に粗目の回転ケズリ調整を施す。541の体部は直立するのに対し、542の体部は外傾気味である。また542には、回転ヘラ切り時の斜め方向のヘラ状工具の差し込み痕が明瞭に残る。541が口径9.3cm、器高3.3cm、542が口径10.1cm、器高3.8cmを測る。

高坏　高坏Aは法量の縮小化が進み、身552が口径12.6cmを、3方2段透かしと倒位焼成を保持する脚529が脚端径12.5cmをそれぞれ測る。高坏Bの系譜をもつ531・558も同様であり、高坏Dとした法量である口径約10cmに近づく。ただし、坏部外面の2段の鋭い稜と脚部の透かしによる加飾はしっかりと保持される。坏形の身をもつ高坏Cは544、第108図1267が出土し、544で口径9.8cmを測る。正位無蓋で焼成され、脚部を2条の沈線で加飾する。

壷・瓶類　壷類は、同一個体の可能性をもつ肩の張る器形535・553や、短頸の小型壷（未図化）が確認できる程度である。瓶類は、瓻554、大型の長頸瓶脚534、提瓶胴部片555、横瓶538・539が出土し、538以外は生焼けである。瓻557は口径11.5cmを測り、比較的鋭い稜で加飾する。534は脚端径20.9cmを測り、小片のため透かし孔の数は不明である。破断面に自然釉が熔着する。横瓶538は口径10.4cm、器高約27cmを測り、成形後、胴部外面中央付近に1条の太い沈線を施す。

鉢類　叩きを用いるB類547と、厚底のC類559が出土した。547の体部は直線的にのび、口縁端部をヘラ状工具で粗く切りそろえる。559は口径12.9cm、器高10.3cmを測り、外面を2条1単位の沈線で加飾する。環状を呈する把手の数は不明であり、倒位で焼成したため外面に自然釉が熔着する。

甕　口縁部まで残る個体は限られ、焼き台（置き台）に転用した545と546（608と同一個体）を図化した。中型の545は小片で、口縁端部は丸みをもって仕上げる。大型の546は胴部との接合に係る平行タタキ痕が残り、外面の加飾はやや乱れる。

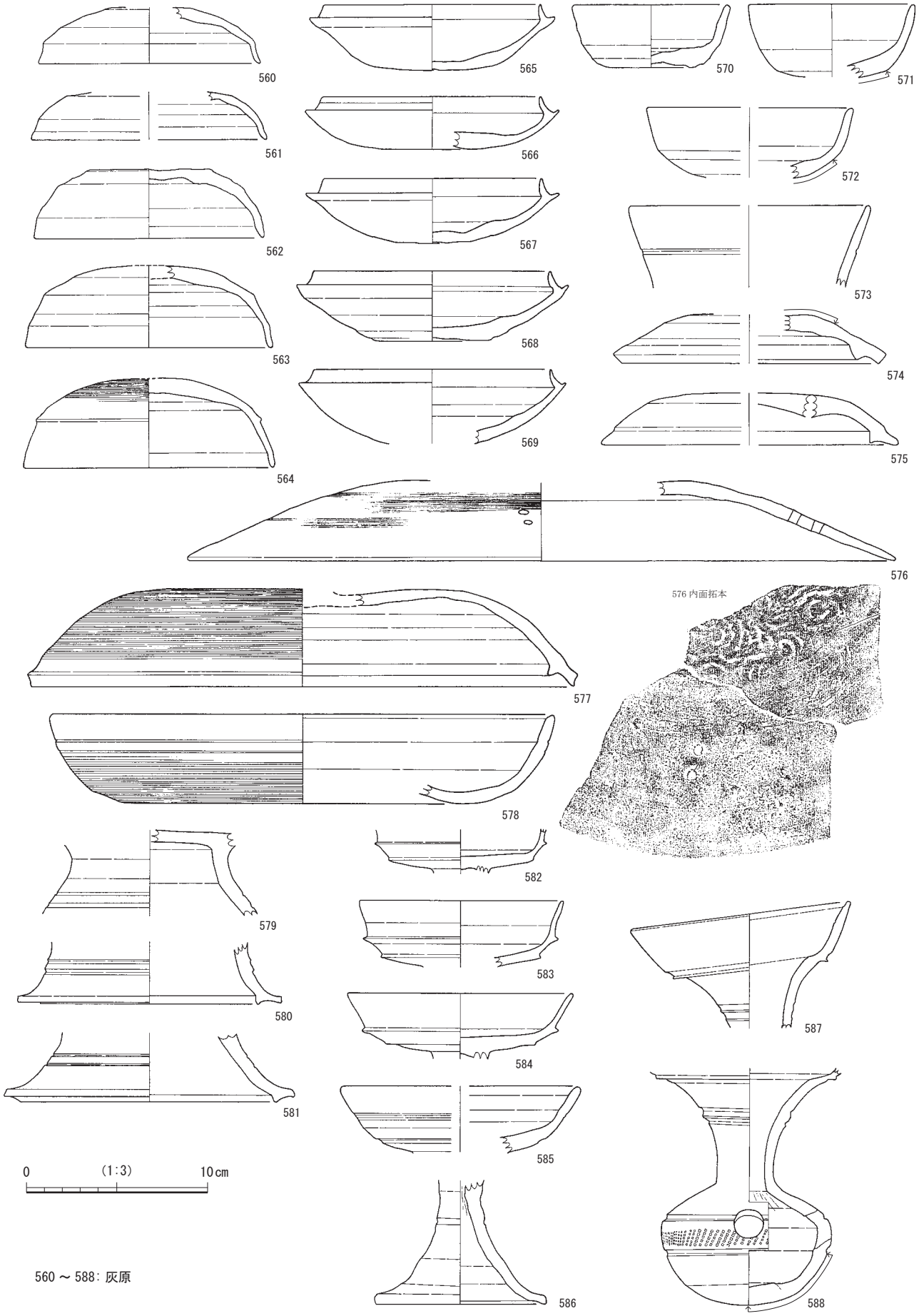
土馬　後述する第112図1286・87・89が焼成室流込土から出土しており、他窯焼成品の可能性を残す。

その他　大型坏523、鋺とした526～528、坏形の532、器種不明の小片551・557が出土した。生焼けに近い有蓋の大型坏523は坏Hを模した器形を呈し、口径19.5cm、器高4.2cmを測る。底部内面全体にナデ調整を、底部外面に周縁部に回転ナデ調整とクシ状工具を用いたナデ調整をそれぞれ施す。鋺526～528は生焼けに近い。底部内面と体部両面を粗目の波状文で文様を描く他、底部外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。532は高坏B坏部を模した精製品であり、口径11.5cm、器高3.6cmを測る。各部の仕上げは鋭く、底部外面に密なクシ状工具痕が残る。

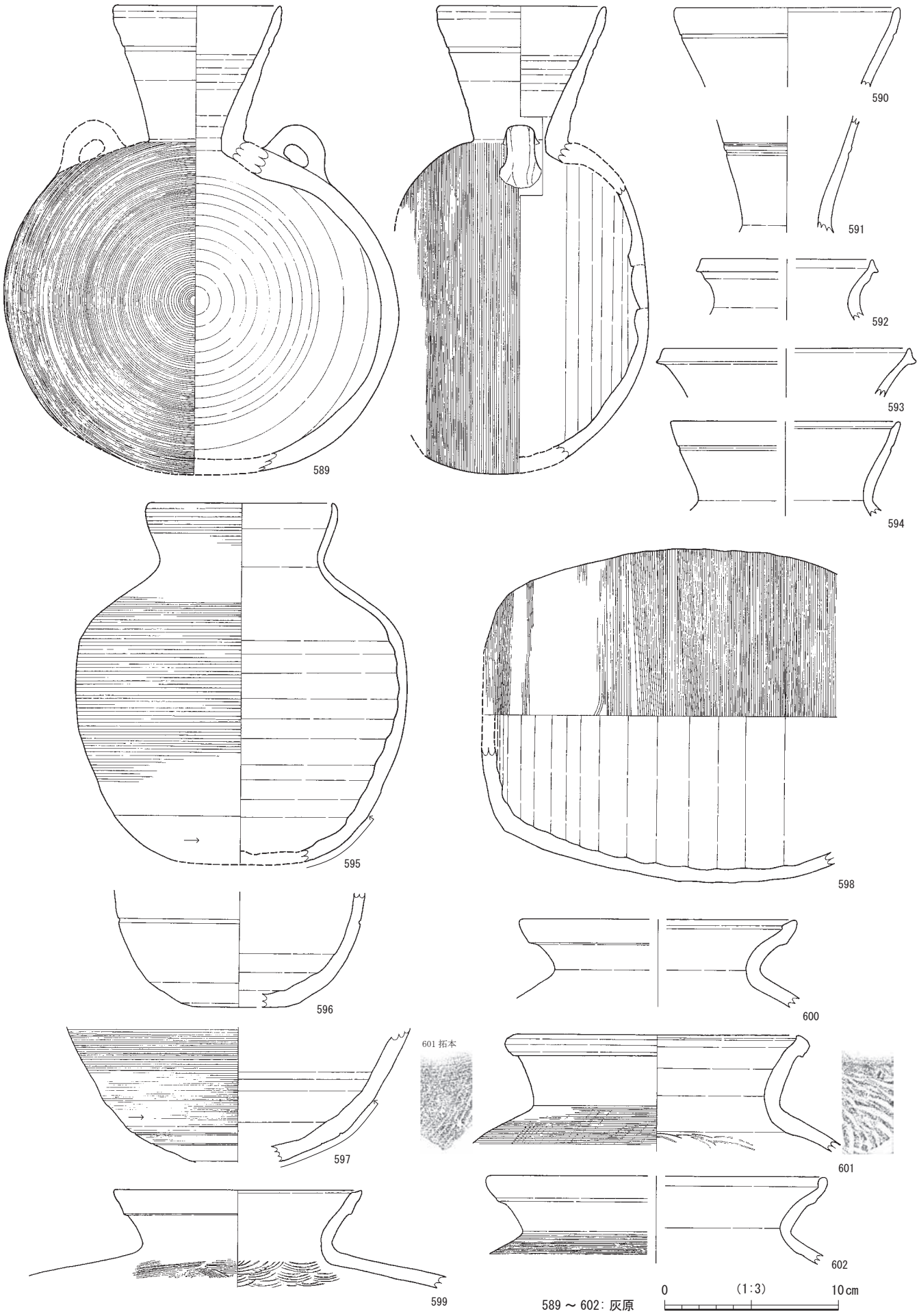
7．7－1・2号窯灰原　（第61・78～80図、第39・40表）

出土状況等　第61・78～80図は、重複する7-1号窯、7-2号窯の灰原から出土した遺物であり、出土量は、甕胴部片を中心に整理箱で22箱を数える。うち、570～572、574～581は7-2号窯焼成品の可能性が高い他、他窯焼成品が混ざる可能性をもつ。

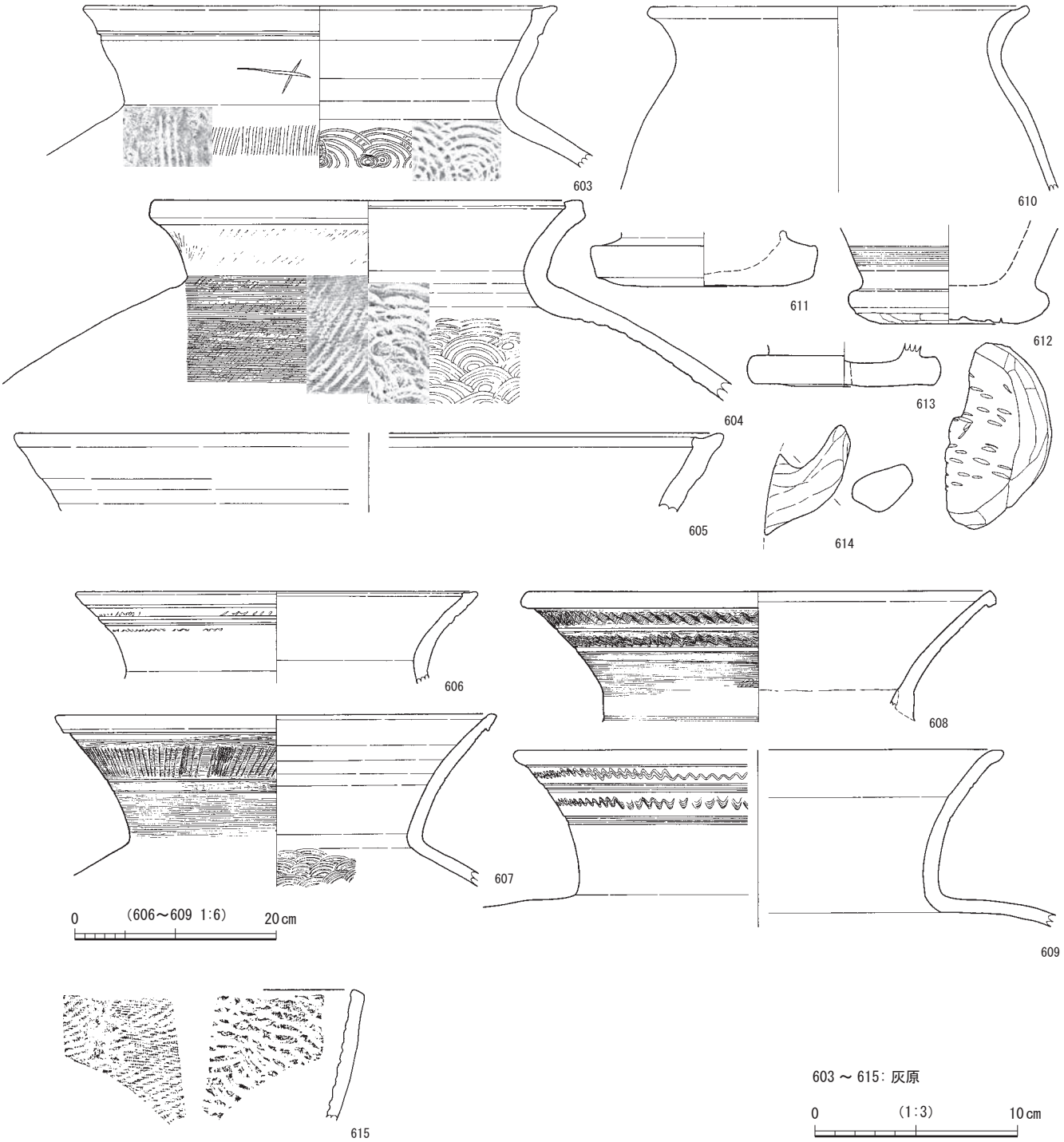
坏H　蓋560～562、身565～569を図化した。背の低い560は口縁基部で明瞭に屈曲後、比較的長い口縁部が外反しながらのびる。外面に自然釉が厚く熔着するため、調整は不明である。562の底部外面は回転ヘラ切り後、未調整に近い。565～569は偏平な器形を呈し、口径12～13cm、器高3.5～3.9cmを測る。565・568の体部が直線的に立ち上がるのに対して、566・567の体部は丸みをもって立ち上がる。



第 78 図　7-1・2 号窯灰原出土遺物 1（S=1/3）



第 79 図　7-1・2 号窯灰原出土遺物 2 (S=1/3)



第80図　7-1・2号窯灰原出土遺物3（S=1/3、1/6）

また、568の底部は台状を呈し、外面にクシ状工具痕が残る。

坏G　身570は、口径8.4cm、器高3.5cmを測り、体部は外傾しながら立ち上がる。

高坏　蓋563・564、身571・572、582～586を図化した。無鈕の蓋563・564は高坏Aに属し、焼成は堅緻である。563が丁寧な回転ナデ調整による屈曲で肩部の稜を表現するのに対して、カキメ調整を施す564は突出した稜をつくる。生焼けの571・572は高坏Cと考えられ、身は深く、底部外面に回転ケズリ調整を施す。無蓋の高坏Dの582～584は口径11～12cmを測り、正位で焼成される。2段の稜を非常に鋭く仕上げる点、底部外面を平坦にする点で共通する。582には脚部3方透かしが、焼き歪んだ584には脚部2方透かしの痕跡がそれぞれ残る。高坏Eと考えられる585は口径約13cmを測り、体部は大きく外傾する。高坏Cの脚586の内面には、成形時に生じた絞り痕が明瞭に残る。

盤類　第78図574～581を図化した。内面に幅の広い返しをもつ蓋574・575は大きく焼き歪み、倒位焼成のため内面に自然釉が厚く熔着する。復元口径14～16cmを測り、574が口縁端部を平坦に面取りするのに対して、575は口縁端部を先細らせる。いずれも天井部外面にナデ調整を施し、無鈕の可能性が高い。576～581は大型の盤類で、焼成具合は577～581が共通する。やや焼き歪む蓋576は口径39cmを測り、2孔1対の円孔を垂直やや斜め方向に穿つ。天井部は、内面が同心円叩きの後に粗いナデ調整を、外面がカキメ調整をそれぞれ施す。やや焼き歪んだ蓋577の口縁端部は、574と形状が類似する。577は口径30.0cmを測り、578と同様に内面全体をナデ調整で、外面をカキメ調整で仕上げる。有台と考えられる578は、大きく焼き歪んでおり、図上復元したものである。復元口径27.6cmを測り、丸みをもって立ち上がる体部外面にカキメ調整を施す。大型鉢類の脚部片579～581は外面を2条の沈線で加飾する。580・581は脚端部に小さな平坦面をもち、接地面が断面三角形状を呈する。脚端径は15cm前後を測り、正位で焼成される。なお、未実測だが、578と同器形を呈する大型盤が1点出土、外面を沈線と波状文で加飾する(図版第44)

壷類　573・590は口径約13cmを測り、外面を1条の沈線で加飾する。594～597は壷A類である。全形のわかる595で口径10.6cm、器高約21cmを測り、外面は内傾する口縁部付近までカキメ調整を施す。

瓶類　瓻587・588、提瓶589、横瓶599等が出土した。瓻587は倒位で焼成され、各部のつくりは鋭い。588の口縁部は大きく焼き歪み、肩部に刺突文と沈線文を施す。提瓶589は正位で焼成され、焼き膨れが著しい。横瓶599の口縁端部は内傾した平坦面をもち、外面が幅広く肥厚する。598・600は横瓶の可能性が高い。第61図129は口径9.4cmを測り、第79図592・593の口縁部は断面三角形状に外側に肥厚する。

鉢類　611～613は体部が剥離した厚底の鉢C類、615は叩き成形の鉢B類である。611・613が底部をナデ調整のみで仕上げるのに対して、612は周縁部を含めてヘラ状工具で削った後に不規則な刺突を加える。

甕　口径20cm未満の601・602、口径21～23cmの603・604、口径約40cm以上の605～609が出土した。601は口縁部が丸く肥厚するのに対して、602は口縁部が内屈気味に上方にのびる。いずれの胴部外面も叩き成形の後にカキメ調整を加える。603は焼成前にヘラ記号を刻み、破損後に焼き台(置き台)に転用する。605は606と同一個体の可能性が高い。606は口径39.0cmを測り、外面に乱れた波状文と沈線を施す。607は口径42.6cmを測り、カキメ調整の後に2条1単位の沈線を施し、その間に斜行刺突文を加える。608は口径45.6cmを測り、カキメ調整の後に沈線と波状文で加飾する。609は口径約47cmを測る。

土師器甕　610は球胴形を呈する非ロクロ成形の甕で、口縁部は外反する。口径18.4cmを測る。

円面硯等　円面硯1276・77、陶棺1273・74の各破片が出土した。第15項で説明をおこなう。

8．7－2号窯　(第81～84・107図、第15～17・40～42・51表)

出土状況等　7-2号窯は、7-1号窯の直上に築かれた窯で、床面の補修は認められない。灰原を除き、窯

体内床面、前庭部から出土した遺物は、整理箱で11箱（破片数2,769点）を数える。これらの遺物は、焼成状況から第15表のa～ｄ群に分類できる。焼き台（置き台）転用を含むa群は最終操業段階より前の焼成品、ｂ～ｄ群は最終操業段階の焼成品であり、特に厚手のｄ群は窯体内床面のみで出土し、ｂ・c群とは胎土（および製作単位）の違いを反映する色調をもつ。ｄ群には、脚付鉢700や大型・有台長頸瓶714、厚手の高坏C、格子状タタキで成形した壷・甕といった特徴的な個体が含まれる。なお、窯体内床面から焼き台（置き台）に転用した甕胴部片や、生焼けで破損したｄ群を主体とする甕胴部片が多数出土した。

器種構成　坏Gを主体に、坏H、高坏C・D、盤類、壷・瓶類、甕に加え、脚付鉢（700・701）、丸底の埦（698）、円面硯（1277）、平瓦様製品（1269・70）、陶棺（1273）といった製品を焼成したと考えられる。量比は、口縁部計測法でみれば、坏Gが約76％と圧倒的に多く、瓶類が約9％、甕が約4％、高坏・壷類が各約3％、坏Hが2％弱の比率を示す。また、破片数計測法でみれば、多くの焼き台（置き台）を含む甕が約64％、瓶類が約12％、坏Gが約6％、高坏が約3％の比率を示し、瓶類の中では横瓶が目立つ存在である。

坏H　前庭部最終床面等から少量が出土したにとどまり、第84図728・729を図化した。扁平な蓋728はb群に属し、口径13.2㎝、器高3.7㎝を測る。天井部から丸味をもって口縁基部に至り、端部は若干外反する。天井部外面は、回転ナデ調整の後にクシ状工具によるナデを施す。扁平な身729はｂ群に属し、口径13.3㎝、器高2.9㎝を測る。底部外面は回転ナデ調整の後にクシ状工具によるナデを施す。

坏G　窯体内出土の第81図616～第82図697、前庭部出土の第84図731～737を図化、基本的に1法量と考えられる（第17表）。身底部（倒位で成形する蓋は天井部）の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てで時計針の回転方向となる。身底部（蓋は天井部）は、体部下半～周縁部外面に斜め方向でヘラ状工具を差し込み、回転ヘラ切りで余分な粘土を粗く削りとった後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行う。斜め方向にヘラ状工具を差し込んだ痕跡は、身666・692で特に明瞭に残る。

蓋（616～661、731～734）は、天井部からなだらかに口縁部に至り、粘土ヌタ等を利用して断面三角形状の小さな返しをつくる。また、鈕はやや崩れた擬宝珠形を呈し、蓋中心を大きくずれた個体も存在する。天井部の調整は、天井部と肩部の2回に分けて、口縁基部付近までの比較的広い範囲に粗い回転ケズリ調整を施すことを基本とするが、丁寧な回転ケズリ調整を施す個体（630・632等）、手持ちケズリ調整とする個体（618・629・635・647等）、回転ナデ調整を加える個体（ｄ群の一部、648・654・657・658）のように細部での差異がかなり認められる。また、同一胎土と考えられるｄ群に属する631・636・648・654～658をみても、細部形態は統一感が乏しく、657は口縁端部に平坦な面取りを行う。焼成良好品の法量は口径9.1～11.5㎝、12.2～12.9㎝、器高2.5～4.2㎝に、生焼け品は口径9.9～12.0㎝、器高3.0～4.3㎝にそれぞれ分布し、ｄ群のうち天井部に回転ナデ調整を加える個体（648・654・657・658）の口径が一回り大きい。

身（662～697、735～737）は、扁平で体部が直立する器形（663・669・674・675・682等）、扁平で体部が外傾する器形（666・670・683・689等）、深身で底部を丸底風につくる器形（667・673・681・686等）等の器形があり、蓋と同様に細部での差異がかなり認められる。また、底部内面中央付近に1方向の軽いナデ調整を、底部外面に回転ヘラ切り後粗いナデ調整をそれぞれ施すことを基本とするが、深身で底部丸底風の器形には回転ケズリ調整を加える個体（673・681・686・690）が目立つ他、ヘラ切り未調整に近い個体（668等）も存在する。成形時の粘土切れ等に起因する補修痕も670・682・683で確認できる。焼成良好品の法量は口径8.5～10.5㎝・11㎝、器高2.9～3.5㎝・4㎝強に、生焼け品は口径9.2～10.8㎝・11.5㎝、器高3.3～4.2㎝にそれぞれ分布する。なお、口縁端部に平坦面をもつ蓋657と、底部外面に回転ケズリ調整を施す身の深い673・681・682・690のセットは、坏Gの中でも法量が若干大きく、鉢を指向した別

器種となる可能性をもつ。

高坏・脚付鋺　d群に属する700～706・708～711、c群に属する高坏Dの707・712、高坏Cの713を図化した。脚付鋺とした700は口径16.4cm、坏部高7.2cmを測る大型品で、内湾する体部外面に回転ケズリ調整を、内面全体にナデ調整をそれぞれ加える。701が脚になると考えられ、外面を2条の沈線で加飾する。702～706・708・709・711は、脚付鋺を模した高坏Cと考えられ、坏部704は身が深い。脚706・708・709は、端部を平坦に面取りし、脚端径は約8cmを測る。高坏Dに属する707は口径9.8cmを測り、体部は外傾する。脚712は刻みに近い幅の狭い透かしを3方に穿つ。710も高坏Dの可能性をもつ。

第15表　7-2号窯実測遺物焼成状況等分類一覧表

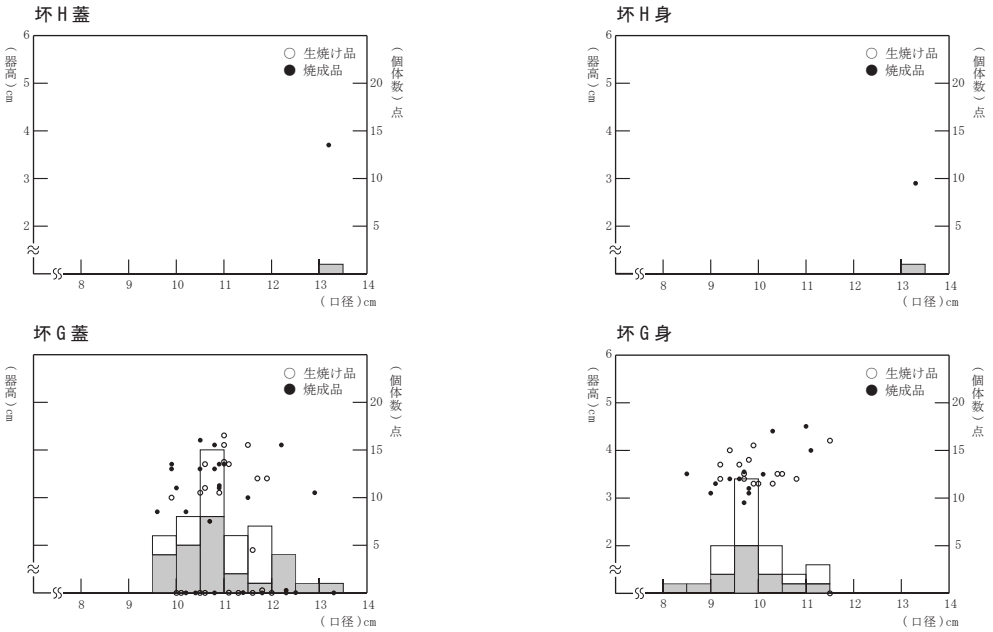
区　分	焼成状況の特徴	窯体床面出土	前庭部出土
a 群	焼成堅緻で、自然釉の熔着が著しい。焼き台(置き台)転用を含む。	616、623、631、659、663～675、677、685、688、693、1269・70（平瓦様製品）、1277(円面硯)	730、736、737、739、740
b 群	焼成は良好で、主に灰～暗灰色を呈する。自然釉の熔着は少ない。	617、618、622、634、639、641、662、666、672、676、679、695、713、715	728、729、731、732、735、738、741、742
c 群	生焼けまたは生焼けに近い焼成。主に淡黄灰～淡灰色を呈する。	619～621、624～629、632、633、635、637、638、640、642～647、649～653、660、661、664、665、667～671、673、678、680、682～684、687、689～691、694、696～699、707、712、716～720	733、734
d 群	生焼けまたは生焼けに近い焼成。酸化焼成にとどまり、主に茶橙～黄橙色を呈する。	630、636、648、654～658、681、686、692、700～706、708～711、714、721～727	－

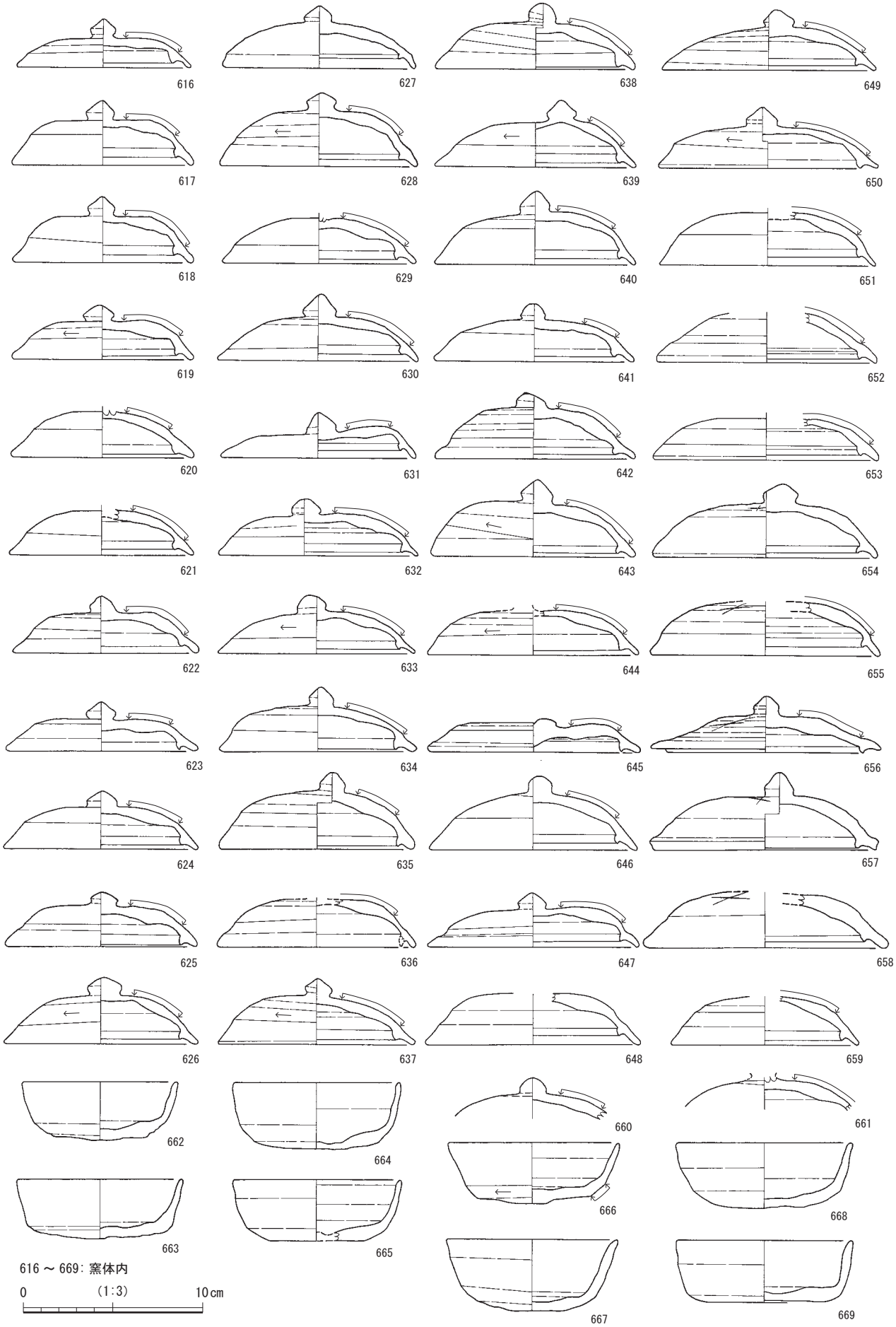
第16表　7-2号窯出土遺物計測表

	計	坏H		坏G		高坏C脚付鋺	高坏D	盤類	壷類	瓶類			鉢類	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身					瓶長頸瓶・平瓶	横瓶	その他・不明		大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	1,734	20	19	870	562	26	5	4	38	50	25	31	19	0	34	9	6	16
口縁部計測法（補正口縁値）	1,153	20		870		26	5	4	38	50	25	31	19	0	34	9	6	16
比率（%）	100%	1.7%		75.5%		2.3%	0.4%	0.3%	3.3%	9.2%			1.6%	0%	2.9%	0.8%	0.5%	1.4%
破片数計測法（点）	2,769	6	43	134	147	72	3	3	52	48	100	179	2	0	186	95	1,670	29
破片数計測法（補正点）	2,629	43		147		72	3	3	52	48	100	179	2	0	186	95	1,670	29
比率（%）	100%	1.6%		5.6%		2.7%	0.1%	0.1%	2.0%	1.8%	3.8%	6.8%	0.1%	0%	7.1%	3.6%	63.5%	1.1%

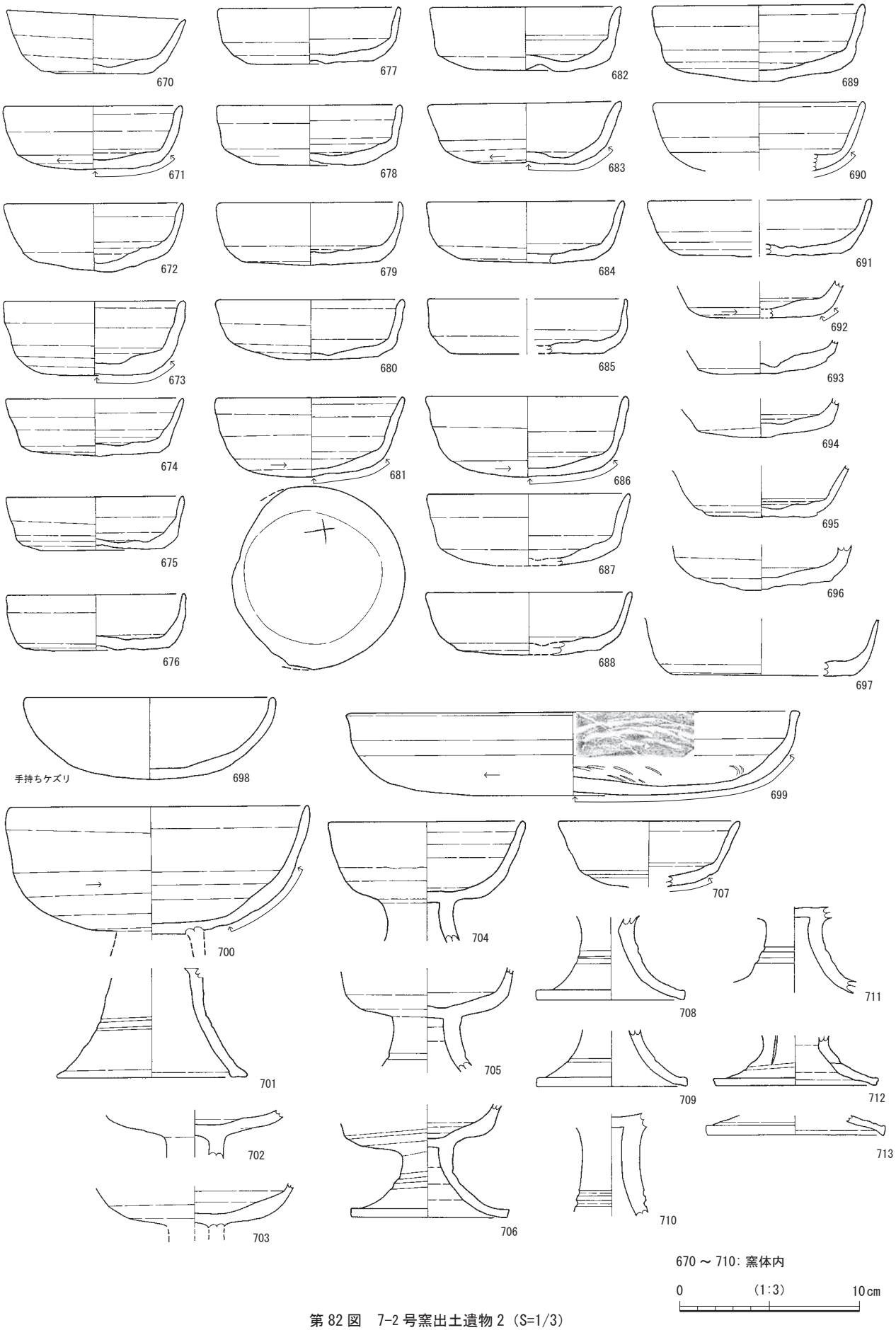
※陶棺、灰原を除く数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第17表　7-2号窯実測坏H等法量分布表

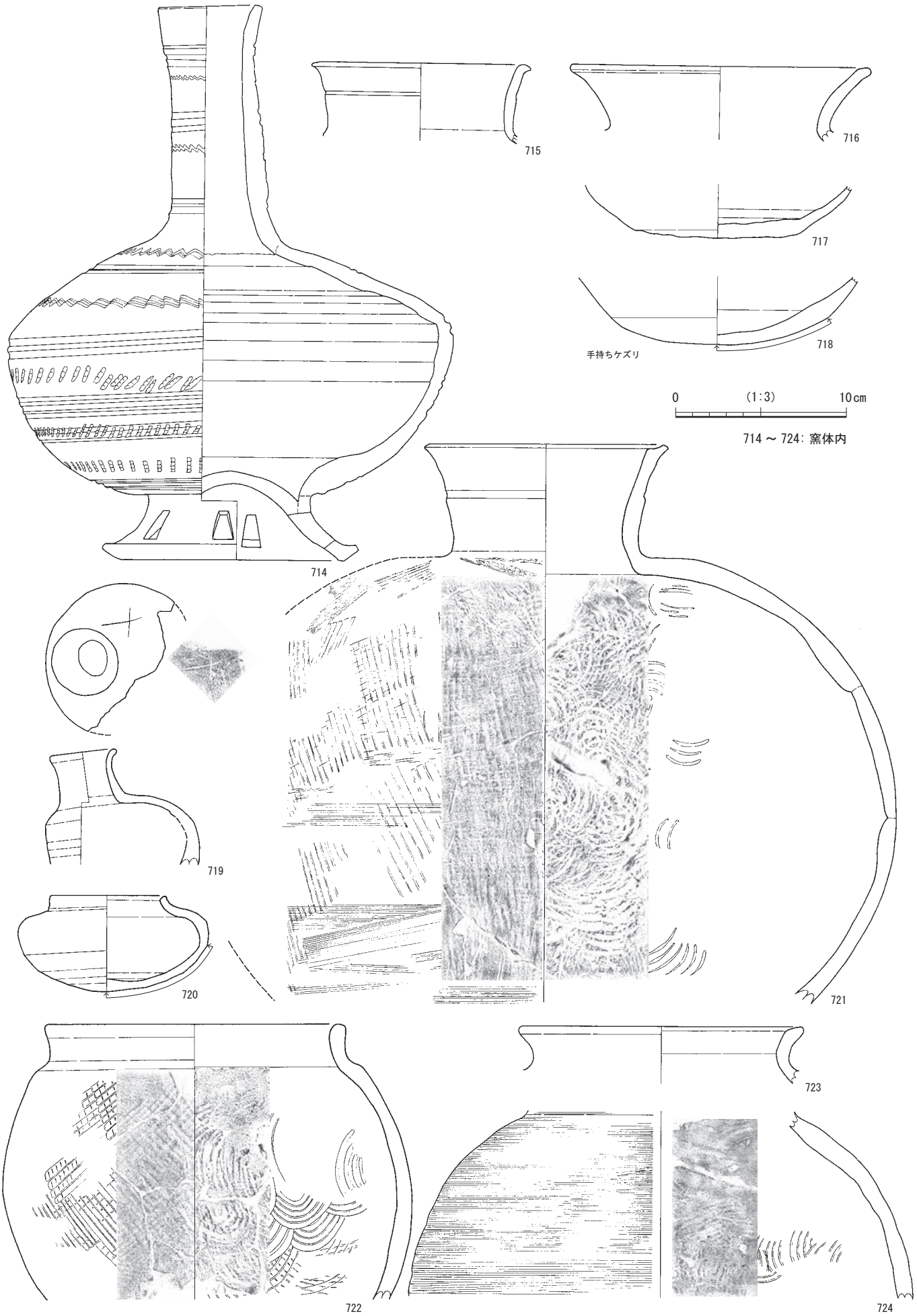




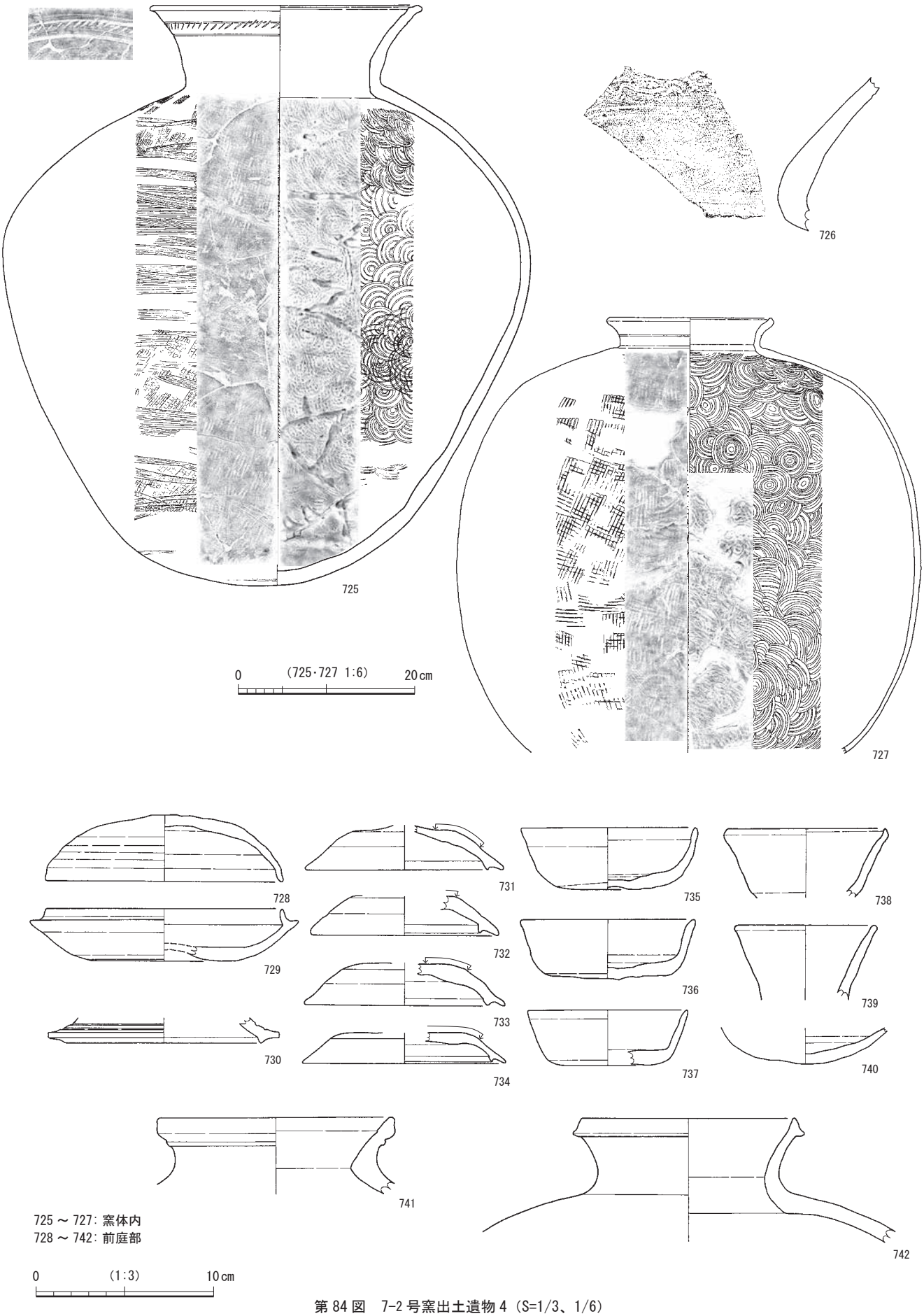
第 81 図　7-2 号窯出土遺物 1（S=1/3）



第82図　7-2号窯出土遺物2（S=1/3）



第 83 図　7-2 号窯出土遺物 3 (S=1/3)



第84図　7-2号窯出土遺物4（S=1/3、1/6）

盤類　c群に属する699が出土した。口径24.9cm、器高4.6cmを測り、肥厚気味の口縁端部を平坦に仕上げる。底部内面は同心円叩きを用いて粘土を締めた後に全面にナデ調整を、外面は丁寧な回転ケズリ調整を施す。また、730は、灰原から出土した第78図579～581と同形態を呈する盤脚部の可能性が高い。730は外面を2条の沈線で加飾し、脚端部に平坦面をつくる。

壷類　丸底のA類と考えられる底部片717・718・740・1259、口縁部が外傾する716、短頸の722～724、小型壷720が確認できる。717は、底部外面には回転ケズリ調整を施さない。第107図1259はナデ肩を呈し、外面にカキメ調整を施す。器肉が厚い短頸壷722～724はd群に属し、口径約17cmを測る。722の胴部は格子状叩きと同心円叩きを用いて成形し、724の胴部外面にはカキメ調整が残る。c群に属する小型壷720は口径6.6cm、器高5.6cmを測り、底部外面に粗い手持ちケズリを加えて丸底に仕上げる。

瓶類　瓌と考えられる738、大型・有台の長頸瓶714、平瓶719、横瓶721・741・742等が出土した。738は口縁端部を上方に小さく折り曲げる。d群に属する長頸瓶714は、口径5.6cm、器高32.5cmを測る精製品であり、口縁端部を平坦に仕上げる。外面全体をやや乱れた波状文、斜行刺突文、2条1単位の沈線で加飾し、外展する台部に台形透かしを穿つ。c群に属する小型の平瓶719は、閉塞円盤が残り、外面肩部にヘラ記号「×」を焼成前に刻む。横瓶721は胴部外面に格子状叩きの後、ミガキ状の丁寧なカキメ調整を施す。長くのびる口縁部は、端部を斜め上方にひきのばす。741・742の口縁端部は、外面下端が肥厚する。

甕　d群に属する725～727を図化した。725で口径29.5cm、器高65.5cmを、胴部が張った727で口径18.2cm、器高48cm以上をそれぞれ測り、727は胴部に比して口縁部が小さい印象を受ける。また、727は口径18.2cmを測り、外面に格子状叩きと平行叩きが、内面に同心円叩きが残る。

その他　丸底の浅い埦698の他、円面硯1277、平瓦様製品1269・70、陶棺1273の各破片が出土した。窯体内床面出土の698は口径13.7cm、器高4.6cmを測り、底部内面にナデ調整を、外面に粗いケズリ調整をそれぞれ加える。ロクロ成形の可能性が高いものの、器形を含めて当該期の非ロクロ土師器埦と共通する要素が多い。円面硯、平瓦様製品、陶棺については、項を改めて説明する。

9．8号窯　（第85～87・107・114図、第18・42・43・51・53表）

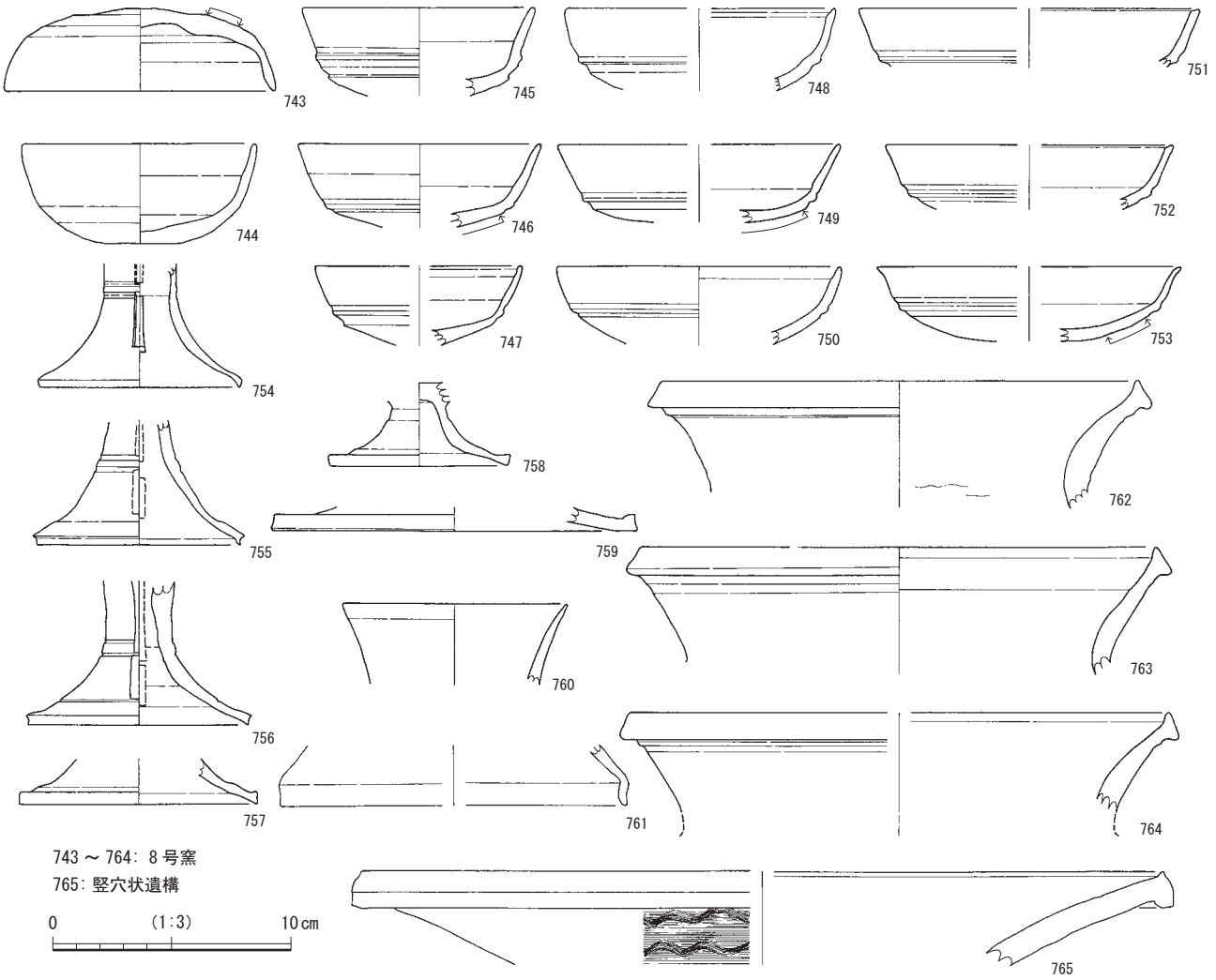
出土状況等　8号窯は床面の補修が認められない。出土遺物は限られ、前庭部、窯体内を中心に灰原を含めて整理箱で2箱（破片数159点）を数える。窯体内から744・745・747・754・755・758・759・1329が、前庭部から746・749～753・757・760・763・764・1250・1327・1328が、窯体流込土から743・756が、灰原から762が、それぞれ出土しており、焼成具合からみれば744と第114図1329及び未実測の甕胴部片の一部が生焼けである。胎土等から743・1250は他窯焼成品の可能性が高い。また、8号窯焚口埋土（流込土）から刻書をもつ平瓶766の破片の一部が、周辺の表土等から748・761がそれぞれ出土した。

器種構成　流込土を含めて、坏H蓋、坏G身、鋺、高坏C・D類、高坏Dの坏部を模した埦（753）、瓶類、甕が出土した。量比は、口縁部計測法で高坏が約57％、破片数計測法で甕胴部片が約62％、高坏が約26％の比率となる。参考資料として、第18表に流込土を含めた計測値を示す。

坏H　煙道付近の流込土から蓋743が1点のみ出土した（破片数は10点）。焼成具合・色調が、本窯出土の他焼成品と異なるため、他窯焼成品と考えられる。743は口径11.0cm、器高3.4cmを測り、肩部は丸みをもって仕上げる。火だすき痕が残る天井部外面は、ナデ調整の後にクシ状工具を用いて粗いナデ調整を加える。なお、蓋761は不定形土坑出土の小片で、焼き歪みが目立つ。

坏G　焚口から生焼けの744が1点のみ出土した。深身で丸底風の器形を呈し、体部は外傾しながら長くのびる。口径9.6cm、器高4.2cmを測る。

鋺　前庭部から脚部片である第107図1250が1点出土した。焼きのあまい1250は裾付近に突帯を巡ら

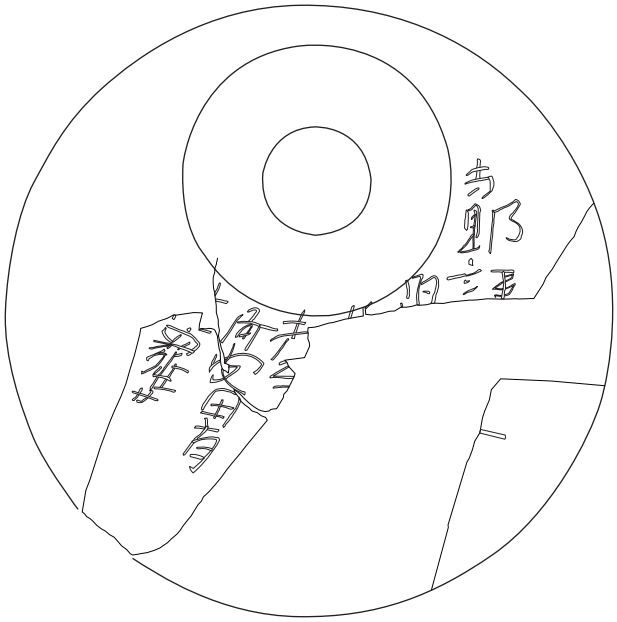


第85図　8号窯等出土遺物（S=1/3）

第18表　8号窯出土遺物計測表

	計	坏H		坏G		鉢Gか	埦か	高坏C	高坏D	高坏不明	壷類	瓶類	甕			
		蓋	身	蓋	身								大甕	中甕	小甕	その他・不明
口縁部計測法（口縁値）	137	12	0	0	22	0	3	0	78	1	0	9	0	12	0	0
口縁部計測法（補正口縁値）	137	12		22		0	3	0	78	1	0	9	0	12	0	0
比率（%）	100%	8.8%		16.1%		0%	2.2%	0%	56.9%	0.7%	0%	6.6%	0%	8.8%	0%	0%
破片数計測法（点）	159	1	0	0	10	1	1	2	37	2	3	1	0	3	0	98
破片数計測法（補正点）	159	1		10		1	1	2	37	2	3	1	0	3	0	98
比率（%）	100%	0.6%		6.3%		0.6%	0.6%	1.3%	23.3%	1.3%	1.9%	0.6%	0%	1.9%	0%	61.6%

※刻書平瓶を除き、灰原・流込土を含む数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。



【釈文】

与野評□□

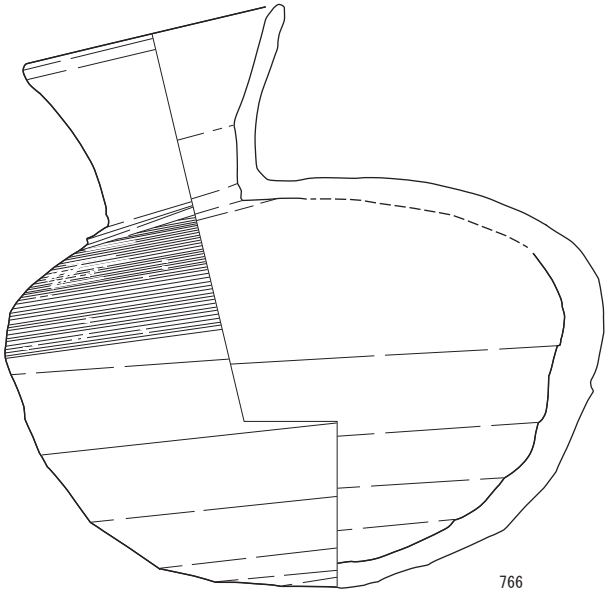
□〔須カ〕×

□×

□□×

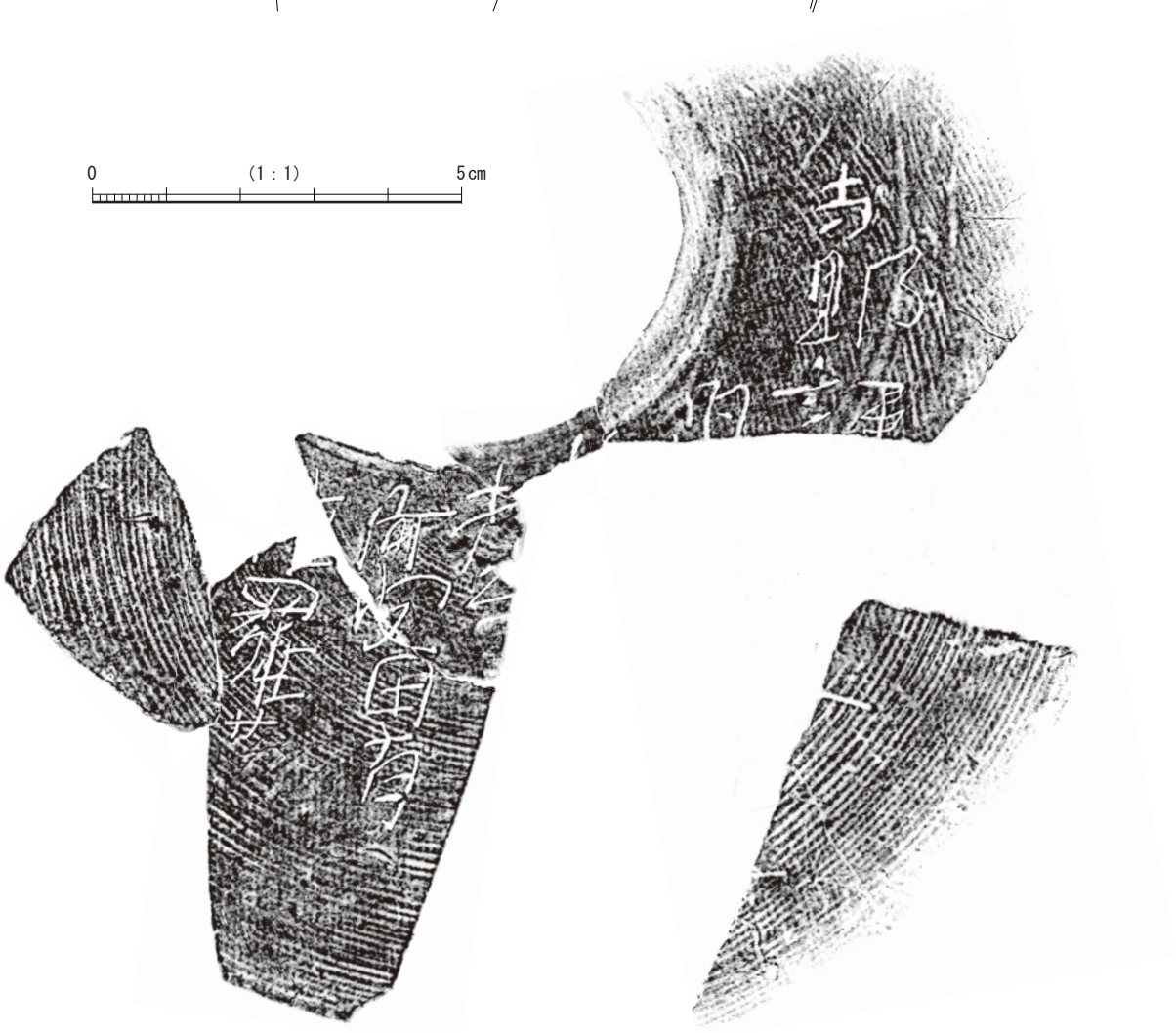
阿皮田□〔有カ〕

□羅甘



0 (1：2) 10cm

第86図　刻書平瓶1（S=1/2）



第 87 図　刻書平瓶 2（S=1/1）

し、脚端径10.1cmを測る。胎土中に細砂が多く混ざり、他窯焼成の可能性が高い。

高坏　焼成具合から同じ焼成を経たと考えられる41点の小片が出土、うち第85図745～752・754～759を図化した。坏部745～747には754～746の脚が付き、正位焼成の高坏Dと考えられる。薄手の坏部は口径約10cmを測り、745が体下部に細い稜に加え底部との境に稜状の段をもつのに対して、746・747は体部と底部の境に太めの稜をつくる。脚部754～756は脚端径9cm前後を測り、2方透かしを丁寧にいれる。脚が不明な坏部749～752は、口径約12cmを測り、体下部に稜を表現する。749・750が口縁端部を先細らせるのに対して、751・752は内傾した平坦面をつくる。757・758は高坏Cで、759は脚端径15.2cmの小片である。

埦　埦753は、高坏754～746坏部と同器形を呈する。口径約12.6cmを測り、口縁端部は小さく外反する。底部外面に粗いクシ状工具痕が残る。

瓶類　前庭部から760が出土した。760の口縁部は外反気味で、内外面に自然釉が熔着する。

甕　灰原出土の762、同一個体の可能性をもつ前庭部出土の763・764を図化した。いずれも焼成良好な小片で、口径20～22cmを測る。口縁端部を斜め下方向に引きのばし、その直下に突帯状の起伏をつくる。

刻書平瓶　第86・87図766は、刻書をもつ平瓶である。8号窯焚口埋土(流込土)を中心に、7-1号窯の溝状遺構流込土、11号窯煙道部埋土(流込土)から出土した約10片の破片を接合しており、焼成した窯は判然としない。口径7.1cm、器高16.0cm、胴部最大径15.8cmを測り、胴部外面上半にカキメ調整を、下半に回転ケズリ調整をそれぞれ施す。焼き歪みのない焼成良好品で、胴部内面天井部の閉塞円盤を切って、口縁部をつける。文字は、焼成前に肩部の曲面にあわせながら鋭利なヘラ状工具を用いて刻まれる。6行から成り、第1行目の最初の3文字は「与野評」、5行目の文字は「阿皮田□、6行目は「□羅廿」と釈読できる。

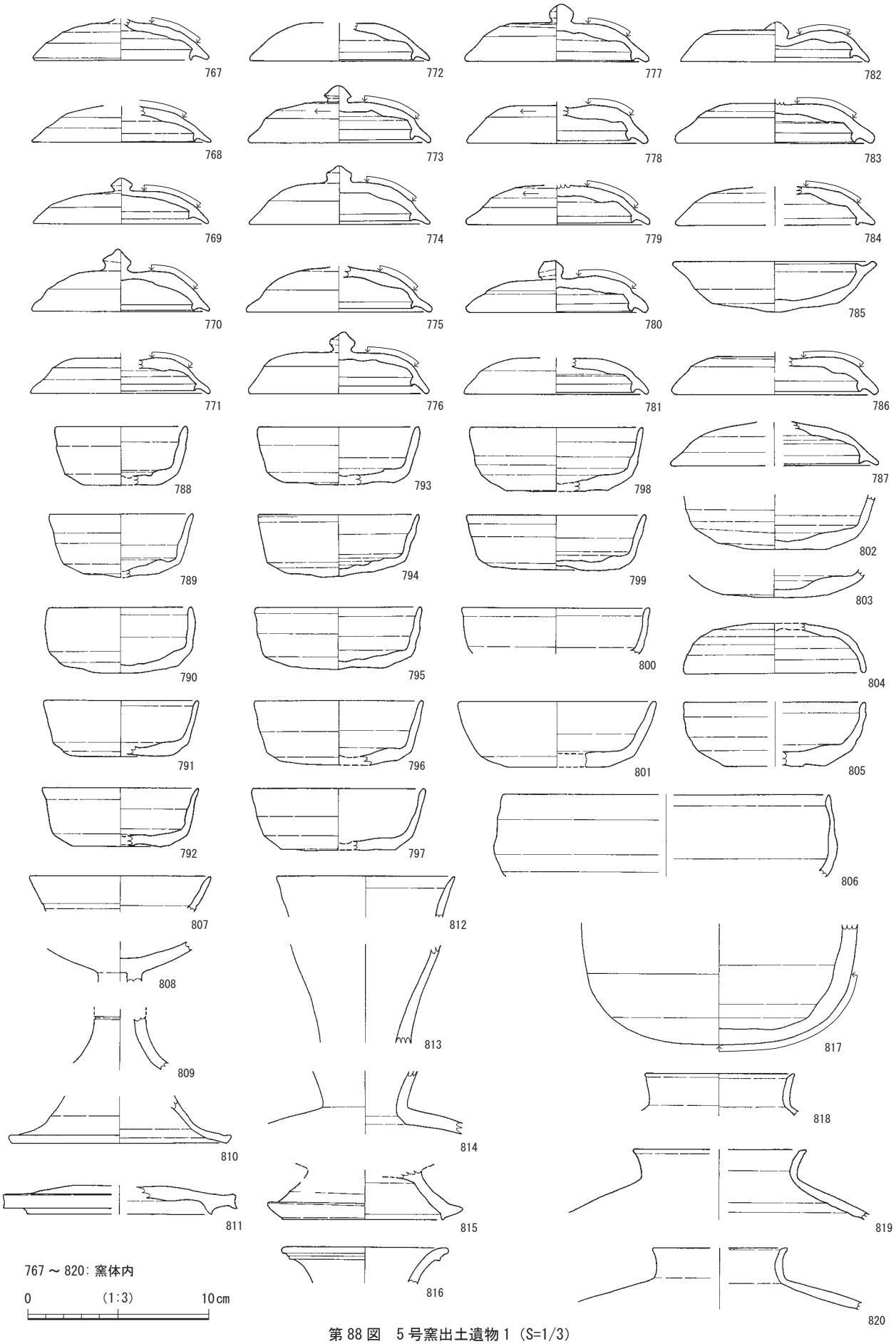
10. 5号窯　(第88・89・115図、第19・20・43・44・53表)

出土状況等　5号窯は、10号窯を一部壊して築かれた窯で、床面には2回以上の補修痕が残る。窯体内床面・舟底状ピットを中心に出土した遺物は、整理箱で6箱(破片数462点)を数える。焼成具合は、ほとんどが焼成良好な小片であり、淡灰オリーブ～灰緑色の自然釉が熔着した個体はない。10号窯焼成品と同様に、外面に火だすき痕や黒化が認められる程度の焼成具合であり、第7項までに記した窯焼成品と比して相対的な熱量が少ないか、窯構造を含めた窯焚きの技術や燃料に用いた主要樹種が異なることが想定できる。生焼け品には高坏807・808、瓶類813・814、甕822・823、鉢825が、また焼き台(置き台)に転用した個体には坏G身798・799、鉢類806がある他、坏G蓋771・778・782も焼き台(置き台)に転用した可能性を残す。なお、焼き台(置き台)に用いた径約20cm、短径約10cmを最大とする自然石が出土している。

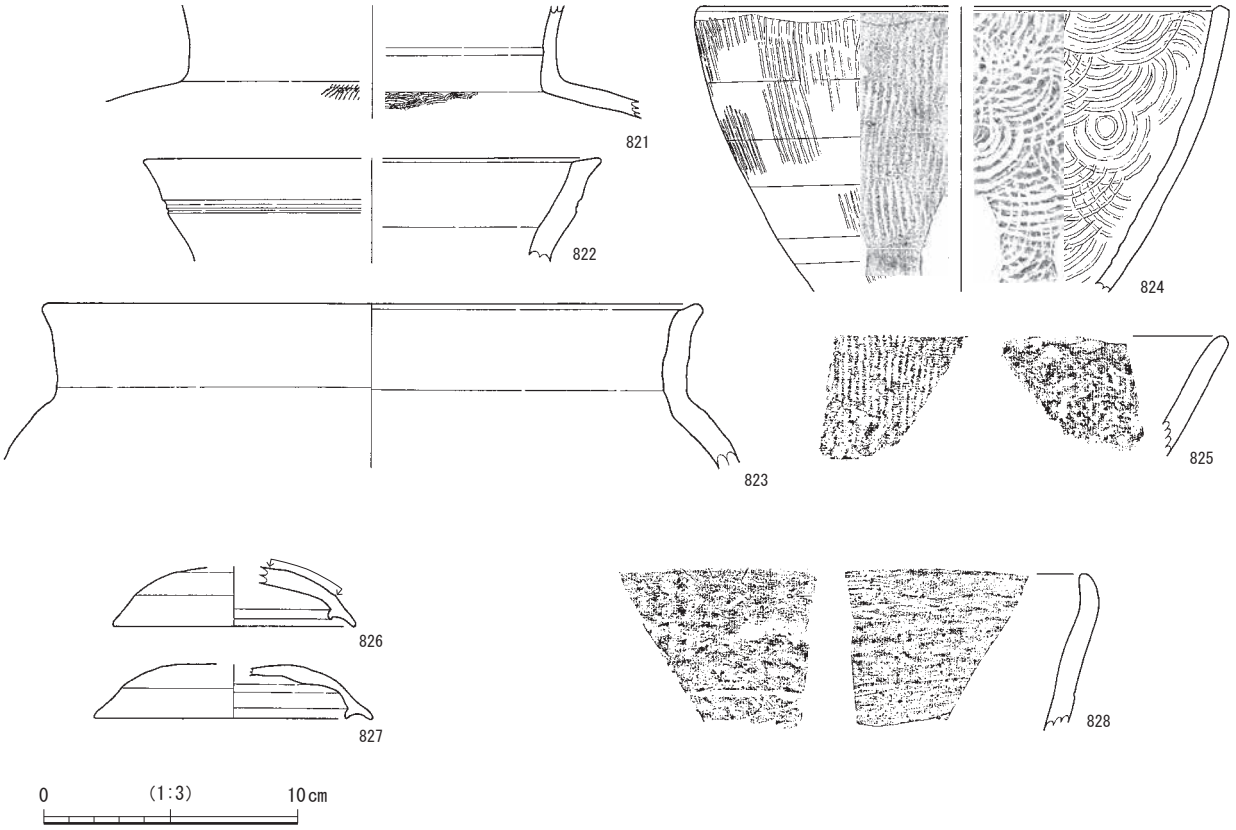
器種構成　坏G、高坏C、壷・瓶類、鉢類、甕に加え、坏H(785・804)や盤類蓋(811)、鋺G身片、土馬片が出土した。量比は、口縁部計測法でみれば、坏Gが圧倒的に多く約87%を占め、瓶類が約4%、鉢類が約2%と続く(第19表)。坏Hと考えられる個体の比率は約2%にとどまる。また、破片数計測法でみれば、坏Gが約45%、甕が約41%、瓶類約9%、鉢類約23%となり、破損や焼き台(置き台)転用の甕胴部片が比率を増す。なお、5・10号窯灰原出土遺物(第91～94図)には、高坏C・E、無蓋の盤類、鉢類、小型壷、平瓶、長頸瓶等の比較的多様な器種が確認でき、一部は本窯焼成品となる。

坏H　窯体内出土の蓋804、身785を図化した。いずれも坏Gを倒位にした器形をもち、法量も坏Gと変わらない。蓋804は口径10.0cmを測り、天井部～肩部外面に回転ヘラ切り後にナデ調整を加えて、丸みをもった器形に仕上げる。身785は口径11cm、器高2.8cmを測り、口縁端部の形状は坏G蓋と近似する。ただし、坏G蓋とは、体部と底部の境の屈曲度合いや、天井部外面が粗いナデ調整にとどまる点で異なる。

坏G　767～784・786～803・805・826・827を図化し、基本的に1法量と考えられる(第20表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全



第 88 図　5 号窯出土遺物 1 (S=1/3)



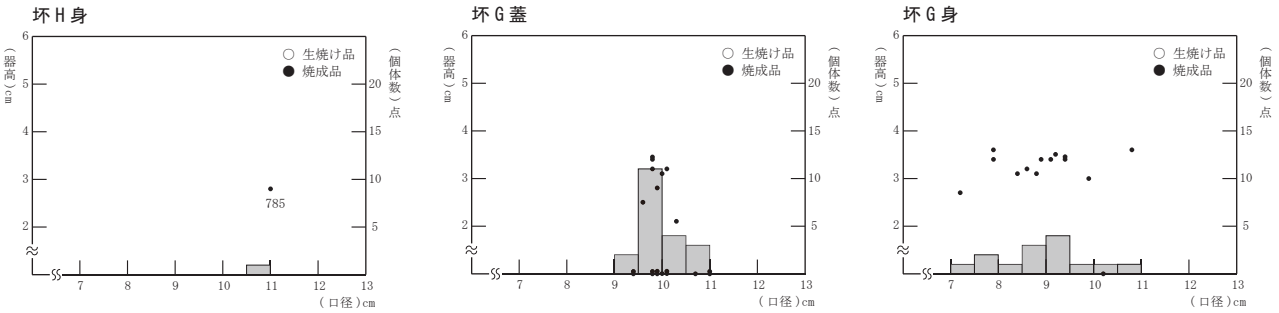
第 89 図　5 号窯出土遺物 2（S=1/3）

第 19 表　5 号窯出土遺物計測表

	計	坏Hか		坏G		鉢Gか	高坏	盤蓋か	鉢類	壷 類	瓶類	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身							大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	1,018	13	8	387	541	1	7	2	14	6	26	0	6	3	0	4
口縁部計測法（補正口縁値）	623	13		541		1	7	2	14	6	26	0	6	3	0	4
比率（%）	99%	2.1%		86.8%		0.2%	1.1%	0.3%	2.2%	1.0%	4.2%	0%	1.0%	0.5%	0%	0.6%
破片数計測法（点）	462	1	1	58	181	1	5	2	7	3	36	0	1	3	160	3
破片数計測法（補正点）	400	1		181		1	2	2	7	3	36	0	1	3	160	3
比率（%）	99%	0.3%		45.3%		0.3%	0.5%	0.5%	1.8%	0.8%	9.0%	0%	0.3%	0.8%	40.0%	0.8%

※灰原を除く数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 20 表　5 号窯実測坏 H 等法量分布表



てで時計針の回転方向となる。蓋は、天井部～肩部外面に比較的丁寧な回転ケズリ調整を施して丸みをもった器形に仕上げ、背の高い鈕を付す。内面の返しは断面三角形状を呈し、小振りだがしっかりとした印象を受ける。法量は、口径9.4～10cm強・11cm弱、器高2.5～3.5cmに分布する。全形のわかる769が口径9.6cm、器高2.5cmを、777が口径10.1cm、器高3.2cmを測る。身は、801以外は、体部が直立した箱形の器形を呈する。細部の形態は、体部下半～底部周縁部外面に斜め方向のヘラ状工具を差し込んだ後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行うため、体下部外面が明瞭に屈曲する。また、内面は体部を直立させるため、体部と底部の境に強い回転ナデ調整を加えることから、境は凹状に薄くなる。中でも793は回転ナデ調整が強すぎ、底部内面中途に段状に起伏する。底部外面は粗いナデ調整を加える程度で、回転ヘラ切り痕をほぼ残す。身の法量は口径7.2～9.9cm・10.8cm、器高2.7～3.6cmに分布し、全形のわかる788が口径7.2cm、器高2.7cmを、799が口径9.9cm、器高3.0cmを、体部が外傾する801で口径10.8cm、器高3.6cmを測る。なお、805は大きく焼き歪み、未実測だが身3個体分を重ね焼きした口縁部片が出土した(図版第50)。

高坏　807～810を図化、いずれも小片である。坏部807は外面に沈線が残り、脚部810とともに高坏Dとなる。808は丸みをもつ形態から、第92図908～912と同じ高坏Eと考えた。809は高坏C脚部である。

盤類　811は、内面返しと平坦な口縁端部を特徴とする盤類の蓋と考えた。口径約10cmを測り、天井部外面にナデ調整を施す。7-1・2号灰原(第78図574・575)、5・10号窯灰原(第91図890～895)に類似品がある。

鉢類　深身器形の806、成形に叩き技法を用いるB類824・825の他、B類類似の828が出土した。薄手の806は鉄鉢形に近く、焼き台(置き台)に転用したため焼き歪みが目立つ。824は口径約20cmを測り、焼き歪む。生焼けの小片825は、口縁端部を丁寧にヘラ状工具で切りそろえる。828は内外面ともナデ調整を施し、口縁端部は先細りながら内傾する。

壷類　短頸の小型壷818～820が出土、口径約8cmを測る。他にA類と考えられる口縁部小片が出土した。

瓶類　813～817が出土、814・817は提瓶と考えられる。815はしっかりと外展し、内端で接地する。

甕　821～823が出土した。短頸の823は口径25.6cmを測り、短い口縁部は端部が内傾する。

土馬　焼成部床面から尾部1291が出土した。

11. 10号窯　(第90・115図、第21・22・44・53表)

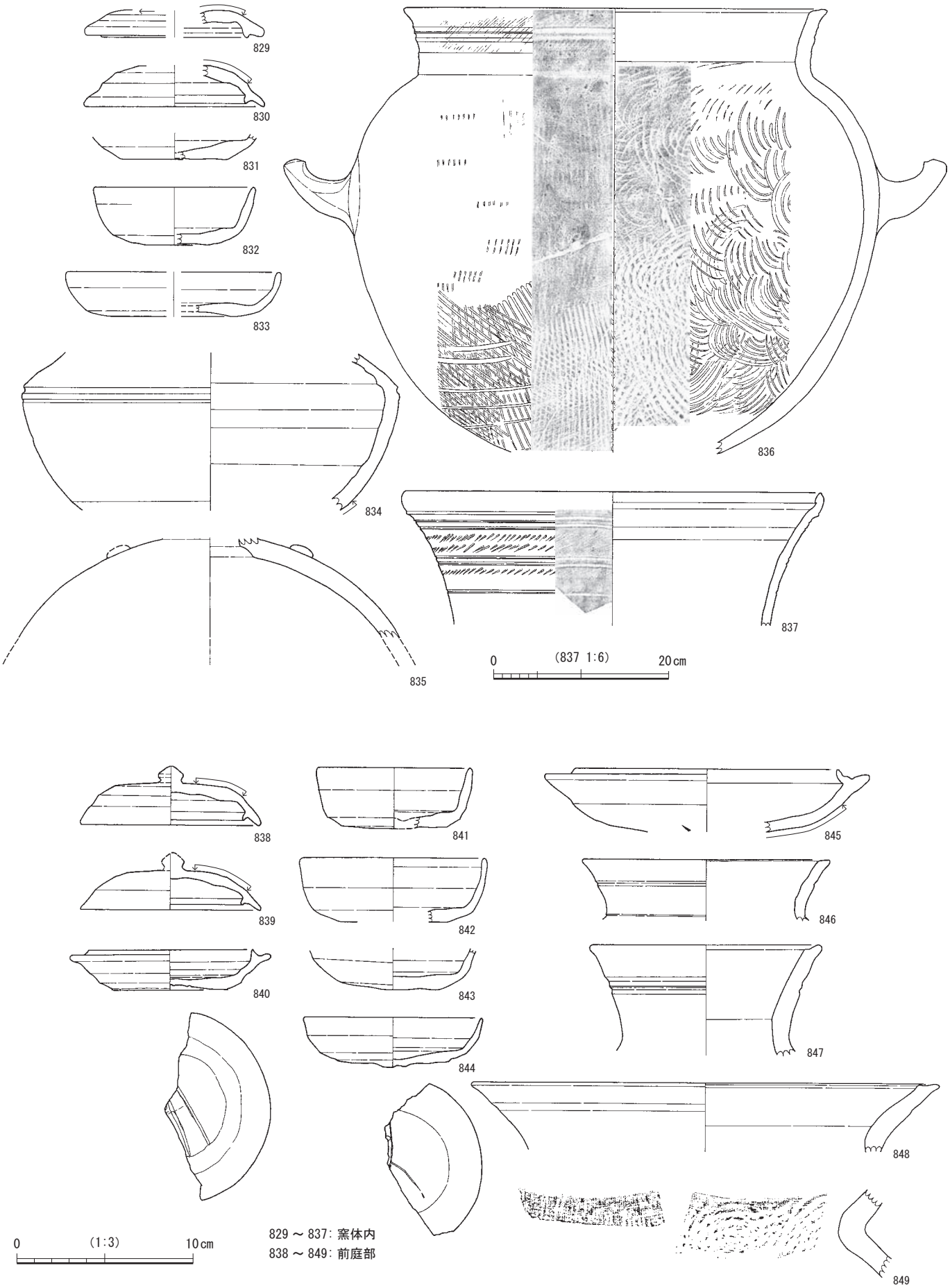
出土状況等　5号窯に先立ち築かれた10号窯は、床面に排水溝が掘られた窯で、床面の補修は認められない。窯体内床面および前庭部から出土した遺物は少なく、整理箱で7箱(破片数396点)を数え、多くは焼き台(置き台)に転用または排水溝に被せた甕胴部片である。焼成具合は、内面に淡灰オリーブ色の自然釉が熔着する坏G身842と生焼けの瓶類847以外は、5号窯と同様に外面に火だすき痕や黒化が認められる程度の焼成具合を示す。

器種構成　器種は限られ、坏G、高坏A、提瓶等の瓶類、甕に加え、坏H身840が出土したにとどまる。なお、5・10号窯灰原出土遺物(第91～94図)には、高坏C・E、無蓋盤、鉢類、小型壷、平瓶、長頸瓶等の比較的多様な器種が出土した。破片数は少ないが、第21表に口縁部計測法、破片数計測法による比率を示す。

坏H　坏H身840は、坏G蓋を倒位にした器形をもつ。前庭部出土の840は、口径9.3cm、器高2.3cmを測り、法量も坏G蓋とほとんど変わらない。ただし、坏G蓋とは異なり、内面の返しが発達し、底部外面は回転ヘラ切り後、やや粗いナデ調整を施すにとどまる。

坏G　蓋838・839、身841～844を図化、1法量と考えられる(第22表)。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向となる。

蓋は口径10.2cm前後に分布、全形のわかる839で口径10.2cm、器高3.3cmを測る。天井部外面は施工



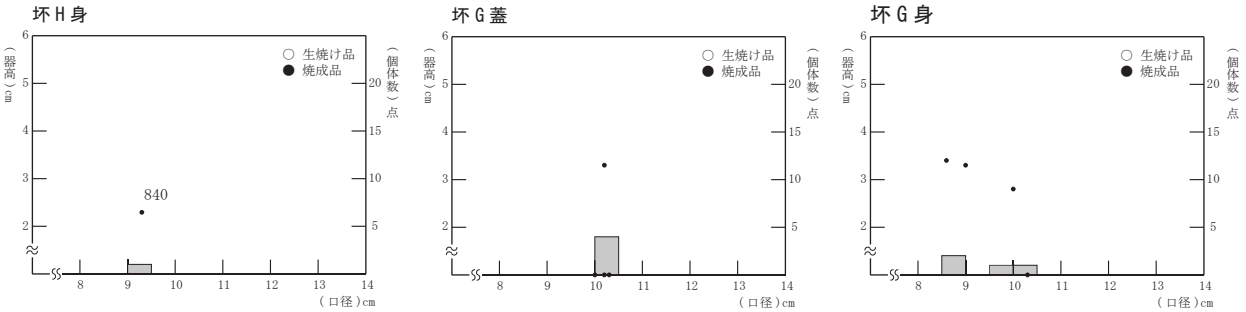
第 90 図　10 号窯出土遺物（S=1/3、1/6）

第 21 表　10 号窯出土遺物計測表

	計	坏Hか		坏G		高坏	壷 類	瓶類	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身				大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	223	0	16	57	92	10	0	26	4	18	0	0	0
口縁部計測法（補正口縁値）	166	16		92		10	0	26	4	18	0	0	0
比率（%）	100%	9.6%		55.4%		6%	0%	15.7%	2.4%	10.8%	0%	0%	0%
破片数計測法（点）	396	1	1	7	26	1	1	30	6	7	0	311	5
破片数計測法（補正点）	388	1		26		1	1	30	6	7	0	311	5
比率（%）	99%	0.3%		6.7%		0%	0%	7.7%	1.5%	1.8%	0%	80.2%	1.3%

※灰原を除く数値。口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

第 22 表　10 号窯実測坏 G 等法量分布表



単位がわかる、やや角張った回転ケズリ調整を施す。身底部は、体部下半～底部周縁部外面に斜め方向でヘラ状工具を差し込んだ後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを行い、底部外面に回転ヘラ切り痕をほぼ残す程度の粗いナデ調整を施す。身の法量は、口径8.6～9.0cm・約10cm、器高3.4cmを中心に分布する。なお、833は正位で焼き台(置き台)に転用しており、大きく焼き歪む。

高坏　前庭部から大型の坏部845が出土した。灰原出土例(第92図903・904)から、幅の狭い3方透かしを穿つ長脚が付く。845は口径15.0cmを測り、内傾する口縁部は基部外側が屈曲しながら肥厚する。この口縁基部の特徴は、灰原出土品と共通する。

瓶類　窯体内から834・835が、前庭部から846・847が出土した。834は、明瞭に屈曲する肩部を2条の沈線で加飾する。提瓶835はボタン状の鈕を付し、焼き台(置き台)に転用される。846は口径14.0cm、生焼けの847が口径12.9cmを測り、口縁端部を内傾した平坦面に仕上げる。

甕　窯体内から836・837が、前庭部から848・849が出土した。球胴形を呈する836は口径23.4cm、器高25cm以上を測り、胴部中程に鉤状の把手をつける。大型甕837は口径47.2cmを測り、外面をやや乱れた3列の斜行刺突文と沈線で加飾する。848は小片のため、図化した傾きに不安を残す。

12．5・10号窯灰原　(第91～94図、第23、44～46表)

5・10号窯の重複した灰原から出土した遺物は、甕胴部片を中心に整理箱で25箱を数える。

坏H　身865を図化した。865は口径10.2cm、器高2.8cmを測り、坏G蓋と法量帯は変わらない。肉厚な底部と体部の境は明瞭に屈曲、坏G蓋とは異なり、底部外面に粗いナデ調整を施す。坏G蓋とした小片856・864も、口縁部が受け部より突出気味で、天井部外面にナデ調整を施すことから、坏H身の可能性が高

い。なお、灰原出土の天井部外面の調整がわかる未実測の坏G蓋を観察したところ、92点中13点(約14%)が前述の特徴から坏H身の可能性をもつ。また、坏H蓋の可能性をもつ坏G身片2点や、他窯焼成品と考えられる口径12～13cm台を測り、口縁部が長くのびる身小片12点が出土している。

坏G　蓋は、850～864を図化した。850～855、857～863は、天井部～肩部外面に5・10号窯と共通する比較的丁寧な回転ケズリ調整を施し、丸みをもった器形を呈する。法量は、口径9.5～10.1cm、器高2.5～3.5cmに分布する(第23表)。また、同じ焼成具合の850・851の天井部外面には、焼成前に刻まれた「×」のヘラ記号が残る。身は866～888を図化した。866～876、878～882・884・887・888は、5・10号窯出土遺物と同様に体下部外面で明瞭に屈曲し、体部が直立した箱形に近い器形を呈する。また、腰部を丸く仕上げて体部が外傾する丸底風の器形(883・886等)もある。883・886は底部が台状を呈し、平方向の回転ヘラ切りのみで底部の切り離しを行った可能性が高い。底部外面の回転ヘラ切り後のナデ調整は、5・10号窯出土遺物と同様に粗いナデ調整で済ませる個体が多く、876・879・888は未調整に近い。法量は、口径8.8～10.5cm、器高2.9～4.0cmに分布し、5号窯で出土した口径11cm前後の個体は確認できない。また、867・869・881・884に焼成前に刻まれたヘラ記号が残る。

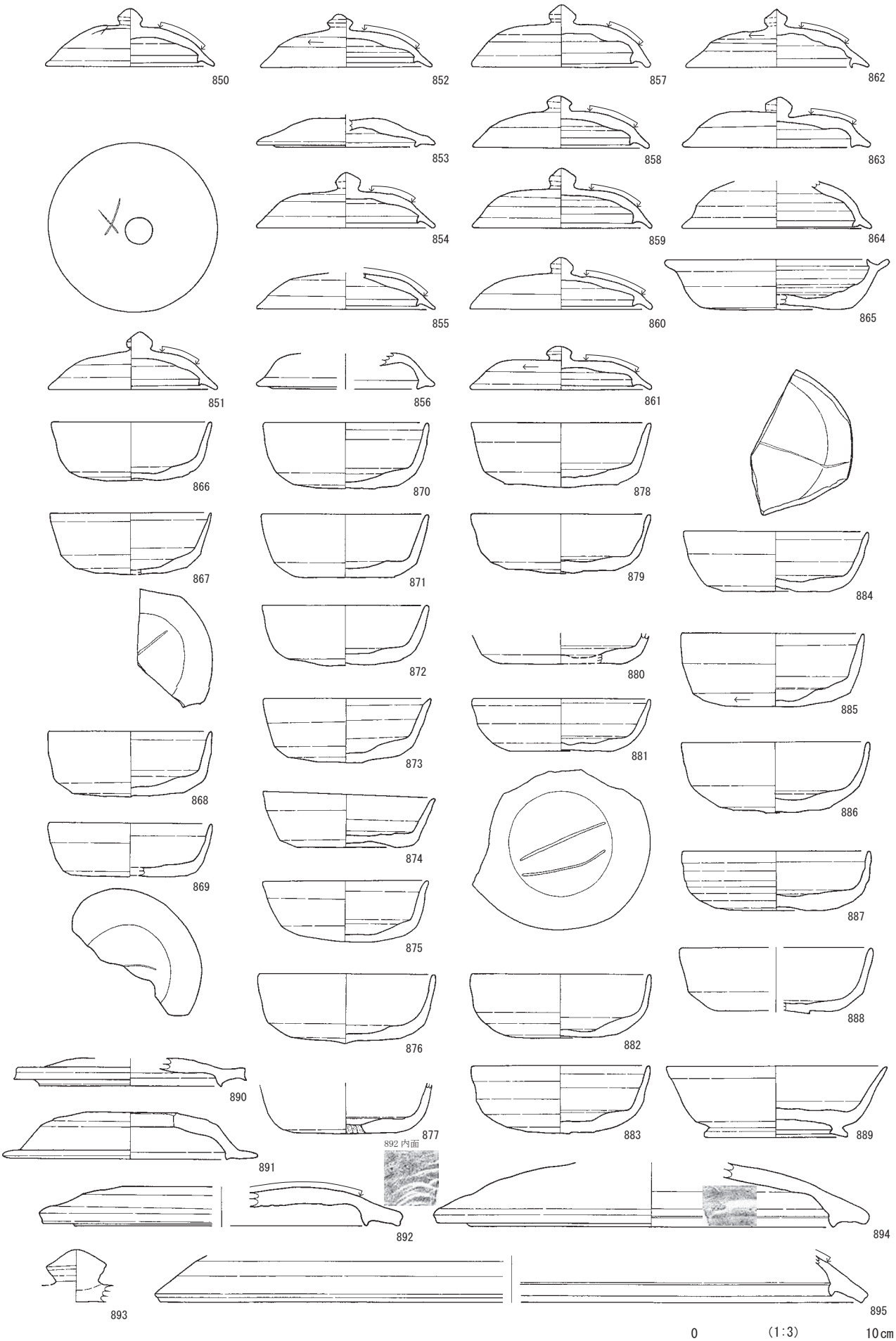
高坏　高坏Aの系譜をもつと考えられる903～905、高坏Eとした無蓋で埦形の坏部をもつ906～912、高坏Cとした小型の913～919が出土した。有蓋の903・904の坏部は、内傾する口縁部と発達した受け部に特徴をもち、903が口径12.2cm、904が口径15.4cmを測る。脚部は上半に幅1～2mmの線状の透かしを内面まで穿ち、脚下半は905のように2条1単位の沈線を2列施す。また、904・905には、坏部と脚部の接合面を強化するための同心円叩き痕が残る他、905は正位で焼成する。なお、蓋は不明である。高坏Eは口径13～14cmを測る精製品で、坏部は体部下端～底部外面に丁寧な回転ケズリ調整、底部内面全体にナデ調整を加える。脚部は2号窯出土品(第97図1104)から、長脚で透かしのない906・907が付すと考えられる。また、907と911の焼成具合から正位・無蓋での焼成が復元できる。高坏Cの坏部は箱形を呈し、体下端部外面を1条の沈線で加飾する。口径は10cm弱、器高は脚の長い916で8.3cm、脚の短い918で6.0cmを測る。脚端部は、平坦なに仕上げる913・916と、先細る918・919があり、脚長と相関関係をもつ可能性がある。

盤類　盤類蓋と考えた890～895、大型の身896～898が出土した。蓋890～895は身が判然とせず、891は倒位で焼成する。口径は13～14cm、20～24cm、約39cmの3法量が確認でき、大型品には893の算盤珠形の鈕が付されると考えられる。口縁端部は平坦な面をつくることを基本とし、先細る891も確認できる。また、891は天井部を内面から大きく穿孔しており、中型の892・894内面には成形に用いた同心円叩き痕が残る。無蓋の盤896・897は、肥厚気味の口縁部を平坦に仕上げる。口径は、896が約17cm、897が約23cmと、2法量が存在する。無蓋の盤898は口径27.0cmを測り、口縁端部が大きく外反する。底部内面全体にナデ調整を、外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。盤896～898は、底部は不明で有脚の可能性をもつ。

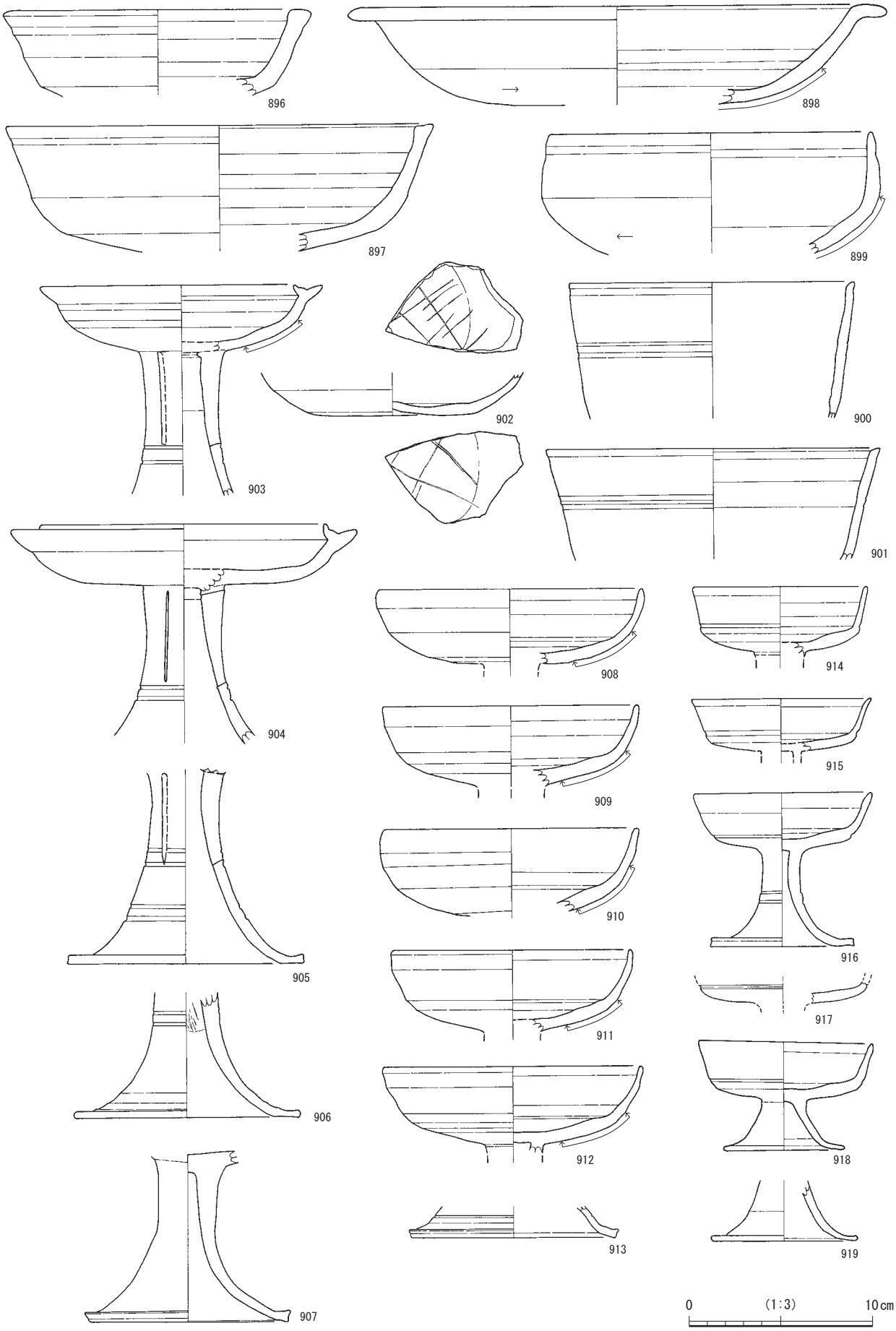
鉢類　鉄鉢に近い器形の899、筒形器形の900・901、叩き技法を用いるB類952・953、厚底のC類950が出土した。外面が降灰する899は口径17.4cmを測り、有脚の可能性をもつ。筒形器形の900・901は外面を沈線で加飾する。口径は、900が15.4cm、901が18.0cmを測り、外面のみに降灰が熔着する。鉢C類950は、底部外面周縁に丁寧なケズリ調整を施し、倒位で焼成する。

壷類　小型で丸底の933・934が出土した。933は正位有蓋焼成で、倒位焼成の934は口径7.6cmを測る。

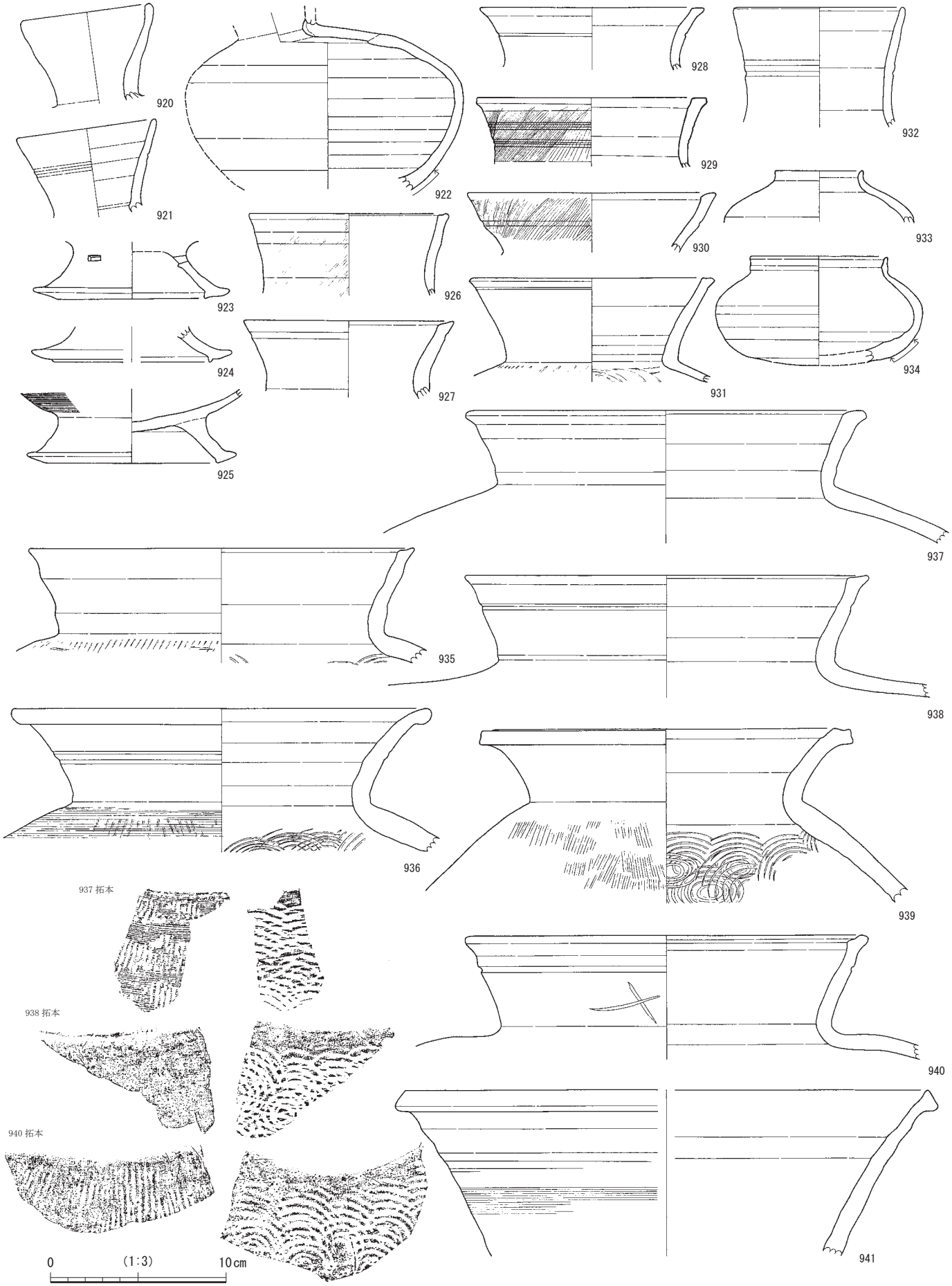
瓶類　920～932は瓶類で、うち920～922が平瓶、927・931が横瓶となる。920・921は口径7cm台を測り、口縁部はやや内湾する。922は器肉が薄く、閉塞円盤を残す。壷類の脚部片と考えられる923～925は、大きく外展し、内端で接地する。焼き割れが顕著な923は、外側から断面長方形の孔を不規則に3ヶ所穿つ。926～931は口縁端部を外側に肥厚させ、平坦に仕上げるのに対して、口縁部が直立する932は



第 91 図　5・10 号窯灰原出土遺物 1（S=1/3）



第92図　5・10号窯灰原出土遺物2（S=1/3）

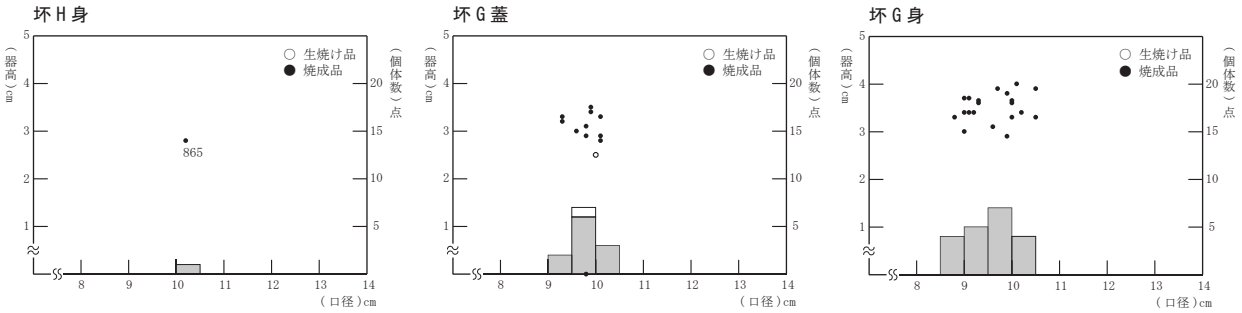


第 93 図　5・10 号窯灰原出土遺物 3（S=1/3）

942
943
944
945
946
947
948
0 (942～948 1:6) 20cm
949
950
951
952
953
0 (1:3) 10cm

第 94 図　5・10 号窯灰原出土遺物 4（S=1/3、1/6）

第 23 表　5・10 号窯灰原実測坏 G 等法量分布表



端部が先細る。他に瓆胴部片が出土した。

甕　935～940・942は口径19～22cmを測り、口縁端部は外側に肥厚する。940には焼成前に刻まれたヘラ記号「×」が残る。941・949は口径約30cmを測り、短頸の949は横に張り出した球胴形を呈する。大型甕943～948は、長くのびる口縁部を2条1単位2列の沈線と2列の乱れた波状文で加飾する。口径は、943・944が35cm前後、945～947が37～39cm、948が48.6cmをそれぞれ測る。

円面硯等　薄手の埦器形の902、円面硯951、平瓦様製品1273の破片の一部が出土した。902は、内外面にナデ調整を施した後に、一度刻んだ線刻を消し、粗い格子状に文様風の線を刻む。951・1273は後述する。

焼き台　877は、坏G身の器形をもつ。底部を焼成前に内側から穿孔し、焼き台(置き台)に用いる。

その他　奈良時代前葉に位置付けられる有台坏899が出土した。口径12.2cm、器高4.0cmを測る。

13．2号窯　(第95～100・115図、第24～26・46～49・53表)

出土状況等　2号窯は、1号窯北側に単独に築かれた窯で、床面の補修は認められない。第18図で出土状況を示したとおり、窯体内床面、焚口、前庭部から出土した遺物は、整理箱で16箱(破片数2,811点)を数える。実測遺物は、主に焼成具合状況から第24表のa～e群に分類できる。窯体・焚口からの出土遺物は、a群が最終操業段階以前の焼成品または最終操業段階の焼き台(置き台)に、c～e群が最終操業段階の焼成品となる。また、大部分の瓶類・甕を含む酸化焔焼成のc・e群は、窯体内・焚口のみから出土しており、横瓶・甕類内面へのナデ調整の多用という特徴から、b・d群とは胎土や製作単位が異なる可能性が高い。また、焼成具合でいえば、自然釉が熔着する個体は坏H身1065、坏G蓋955・980、高坏1110、平瓶1119等に限られ、5・10号窯と同様に外面に火だすき痕や黒化、降灰が認められる程度の焼成痕が残る。

器種構成　坏G、新器種の埦G、高坏、平瓶・提瓶・横瓶等の瓶類、甕に加え、少量の坏H、鋺、盤類、鉄鉢等の鉢類、壷類や、平瓦様製品(1269・70・72)・土馬(1280～85)の破片の一部、焼き台(1096・97)が出土した。量比は、口縁部計測法でみれば、坏Gが約62%の比率を占め、新器種の埦Gが約27%、甕が約5%、高坏が約2%と続く。食膳具の占める比率が全体の91%と極めて高率である中、坏Hと考えられる個体の比率は約0.3%にとどまる。また、破片数計測法でみれば、甕が約56%、坏Gが約21%、瓶類が約11%、埦Gが約7%の比率を示し、口縁部片の出土が少ない瓶類や、破損した焼成品や焼き台(置き台)転用が多い甕胴部片が比率を高める。

坏H　窯体中央付近の床面から1065(第18図取り上げ№43)、1066(同№34)が出土した。身1065は口径約11.5cm、器高3.5cmを測り、口縁部は直立気味に長くのびる。底部外面は、回転ヘラ切り後に比較的丁寧なナデ調整を施し、薄く自然釉が熔着する。身1066は口径約13cmを測り、口縁部は内傾しながら比較的長くのびる。いずれも焼成良好で、焼き台(置き台)の転用痕跡はない。

坏G　蓋954～982、身983～1033・1035～1064を図化した。基本的に1法量で、身1062のみ口径12.0cmを測る(第26表)。また、蓋982・身983は、焼成時のセット関係(蓋は倒位)が唯一確認できた出土品である。身底部(倒位で成形する蓋は天井部)の切り離しを回転ヘラ切りで行い、ロクロの回転方向は観察できた個体全てが時計針の回転方向となる。蓋は、天井部～肩部外面に比較的丁寧な回転ケズリ調整を施して丸みをもった器形を基本とし、a～c群の中には各回転ケズリの単位がわかる角張ったケズリ調整を施す個体も存在する(954・962・976・966・971・982)。鈕は背が高く、口縁端部に近い内面返しは断面三角形状を呈する。法量は口径9.5～10.4cm、器高2.3～3.4cmに分布する。a群に属する957は、焼成前に細いヘラ状工具で「个」様の文様を連続して刻む。

身は、体部が直立する個体は1027等が確認できる程度で、体部が外傾しながら立ち上がる器形が大部分を占める。細部の器形では、985・1004・1028等の器形を主体として、底部が突出気味の身の深い器形(992・1036・1039等)や、扁平な器形(1031・1046・1051・1058等)も存在する。また、a～ｄ群の中に、底部内面に圏線様の1～3条の細い沈線(成形時の目安としての爪先痕か、図版第54・55)が残る一群(983・985・986等23個体)が存在するが、この個体群と出土位置・焼成状況・器形との間に強い相関関係をみいだせない。基本的な成形は、外面が体部下半～底部周縁部に斜め方向にヘラ状工具を差し込んで回転ヘラ切りの後、底部に水平方向の幅広の回転ヘラ切りを行うため、体下部外面が明瞭に屈曲する。底部外面は回転ヘラ切り後、周縁部に粗いナデ調整を加える程度で、ヘラ切りで残った中心部の粘土をそのままにする個体が多い。特に1019は、粗雑な回転ヘラ切り痕をそのまま残す。内面は、体部と底部の境にやや強い回転ナデ調整を加える他、中央に軽く1方向のナデ調整を施す。法量は口径8.0～10.6㎝、器高2.7～3.8㎝に分布し、口径は9㎝前半台、器高は3.5㎝前後に中心をもつ。

1062はｂ群に属し、口径12.0㎝、器高3.9㎝を測り、明らかに法量帯が異なる。底部内面に圏線様の沈線痕が、底部外面にクシ状工具痕がそれぞれ残る他、外面全体が黒化することから有蓋となる。また、e群に属する1034は、底部内面中央に細い粘土紐を螺旋状に巻いた痕跡を残し(図版第55)、肉厚な台状を呈する底部切り離しに回転ヘラ切りを用いない。

埦G　a～e群の全てで確認できる新器種で、1067～95を図化した。器形は、比較的小さい底部から体部が丸みをもって外傾しながら立ち上がり、中程で屈曲、直立または内湾気味の口縁部に至り、口縁端部が小さく外反する。底部の切り離し、ロクロの回転方向、基本的な成形・調整方法は、坏G身と同様であるが、体部下半にヘラ切りの目安とする凹状にくぼんだ強い回転ナデ痕が顕著に残り、斜め方向で行う回転ヘラ切りの切り幅は比較的狭い個体が多い。器形とともに成形段階から底部切り離しの施工範囲を狭くする工夫と考えられる。また、1074・1087の口縁部外面に、埦G同士の重ね焼き痕が残ることから、無蓋器種となる。法量は口径9.4～11.0㎝、器高3.3～4.4㎝に分布(第26表)、比較的斉一性が高い印象を受ける。

高坏　高坏C(1098～1103)、高坏E(1104～08)、高坏D(1109・10)が出土した。高坏Cは脚端径7～9㎝を測り、1099を倒位、1100を正位で焼成する。坏部が埦形を呈する高坏Eは、口径から2法量が確認できる。1104が口径14.4㎝、器高11.6㎝を、1105～07が口径12㎝前後を測る。高坏Dの1109・10は前庭部から出土した。1109は高坏Eに準じた坏部をもち、坏部外面の稜を2段の沈線で簡略に表現する他、脚部に3方透かしを穿ったヘラ痕跡が認められる。1110は坏部の2段の稜を鋭くつくり、脚部を内面まで貫通する2方透かしと沈線で加飾する。1109を倒位で、1110を正位無蓋で焼成する。

鋺　筒形の身1113～15の他、図化した傾きに不安を残す1112も同類と考えられる。1113・14は口径約12.5㎝を測り、体部上半を沈線で加飾する。薄手の脚1115は外面に稜をつくる。1113以外はｃ群である。

盤類　5・10号窯灰原出土品(第91図890)に類似した口縁部片2点が出土した(未実測)。

鉢類　鉄鉢1111と、叩き技法を用いる鉢B類1127が出土した。薄手の1111は口径14.3㎝を測り、口縁端部を丸く仕上げる。1127は内面をナデ調整で仕上げる。

壷類　口径6.8㎝を測る小型壷1116の他、短頸壷口縁部小片が出土したにとどまる。

瓶類　平瓶1119～22、提瓶1124、横瓶1125・26が出土、1119以外はｃ・e群に属する。ｂ群に属する平瓶1119は、胴部外面上半にカキメ調整、底部外面に粗い回転ケズリ調整を施し、正位で堅緻に焼成される。1120～22はしっかりと屈曲する肩部を1条の沈線で加飾するのに対して、1123はゆるやかな肩部に仕上げる。また、1120にボタン状把手剥離痕が残り、1123には偏平なボタン状把手を付す。球胴形を呈する提瓶1124は、胴部の1側面を径約9㎝の大振りな円盤状粘土で閉塞する。肉厚の横瓶1125・

第 24 表　2 号窯実測遺物焼成状況分類一覧表

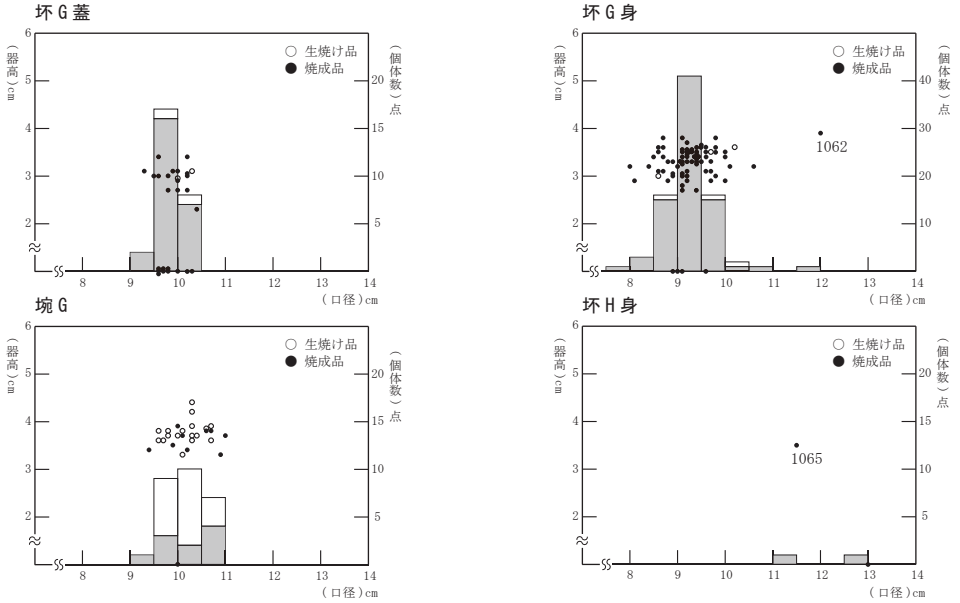
区 分	焼成状況の特徴	窯体・焚口出土	前庭部出土
a 群	焼成堅緻で、自然釉の熔着が著しい（焼き台転用）。	954、958、969、970、984、1064、1346、1347、1349、1352、1087、(957、1025)	1127、(960) 前庭部溝：1096
b 群	焼成は良好で、主に淡灰・灰・暗灰色を呈する。自然釉が熔着する個体もある。	959、961、962、963、965～967、971、987～989、991、992、994～996、998、1000・01、1007、1009、1012、1014～16、1020～24、1027、1029、1032・33、1065・66、1068・69、1073、1089、1103～06、1113、1119、1128、1130・31、1350、1353	955、956、973～978、980～983、1002、1036～63、1098～1102、1107、1109・10、1116、1118、1348、1351
c 群	焼成は良好で、還元が弱く、主に淡黄橙・茶灰・茶褐色を呈する。自然釉の熔着個体はない。	964、968、985、986、990、993、997、999、1003～06、1008、1010・11、1013、1018・19、1026、1028、1030・31、1074、1076、1091、1093・94、1097、1111、1129、1134・35	—
d 群	生焼けまたは生焼けに近い焼成。主に淡黄灰・灰白・淡灰色を呈する。	972、1017、1067、1072、1078・79、1083・84、1086、1092	979、1035、1070、1080、1095
e 群	生焼けまたは生焼けに近い焼成。酸化焼成にとどまり、主に淡黄橙・茶橙・明橙色を呈する。	1034、1071、1075、1077、1081・82、1085、1088、1090、1108、1112、1114・15、1117、1120～26、1132・33、1136・1137	—

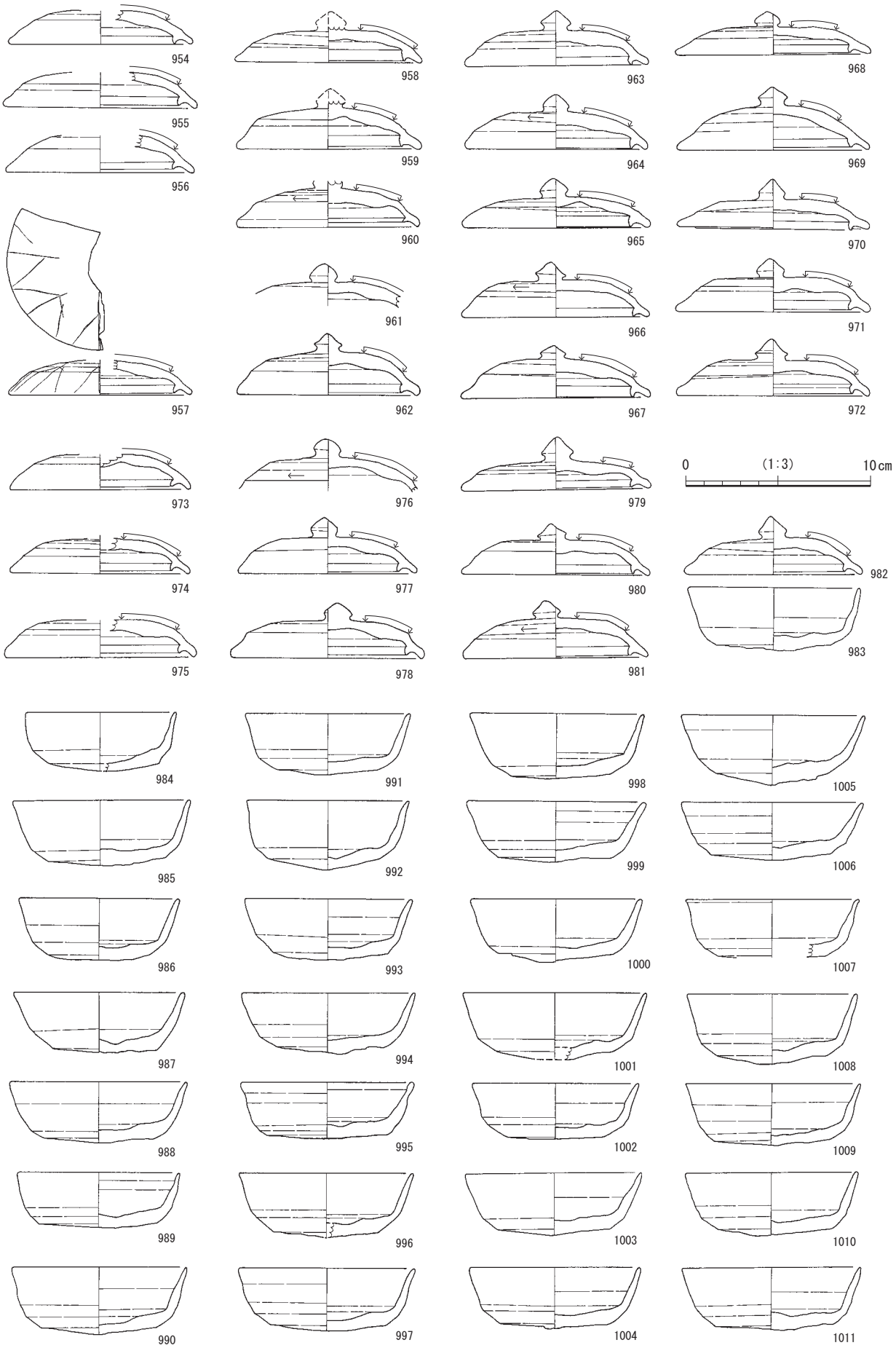
第 25 表　2 号窯出土遺物計測表

	計	坏H		坏G		鉢G身	埦G	高坏	盤蓋	鉢類	壺 類	瓶類	甕				その他・不明
		蓋	身	蓋	身								大甕	中甕	小甕	その他・不明	
口縁部計測法（口縁値）	3,850	0	10	722	1,942	28	832	76	1	41	14	15	0	72	70	1	26
口縁部計測法（補正口縁値）	3,128	10		1,942		28	832	76	1	41	14	15	0	72	70	1	26
比率（%）	100%	0.3%		62.1%		0.9%	26.6%	2%	0.0%	1.3%	0.4%	0.5%	0%	2.3%	2%	0.0%	0.8%
破片数計測法（点）	2,811	0	4	103	557	19	178	28	2	25	2	295	50	178	121	1,171	78
破片数計測法（補正点）	2,708	4		557		19	178	28	2	25	2	295	50	178	121	1,171	78
比率（%）	100%	0.1%		20.6%		0.7%	6.6%	1.0%	0.1%	0.9%	0.1%	10.9%	2%	6.6%	4.5%	43.2%	2.9%

※口縁部計測法の口縁値は○/36の数値。また、補正口縁値、補正点は有蓋器種で数値が大きい方を選択した後の数値をいう。

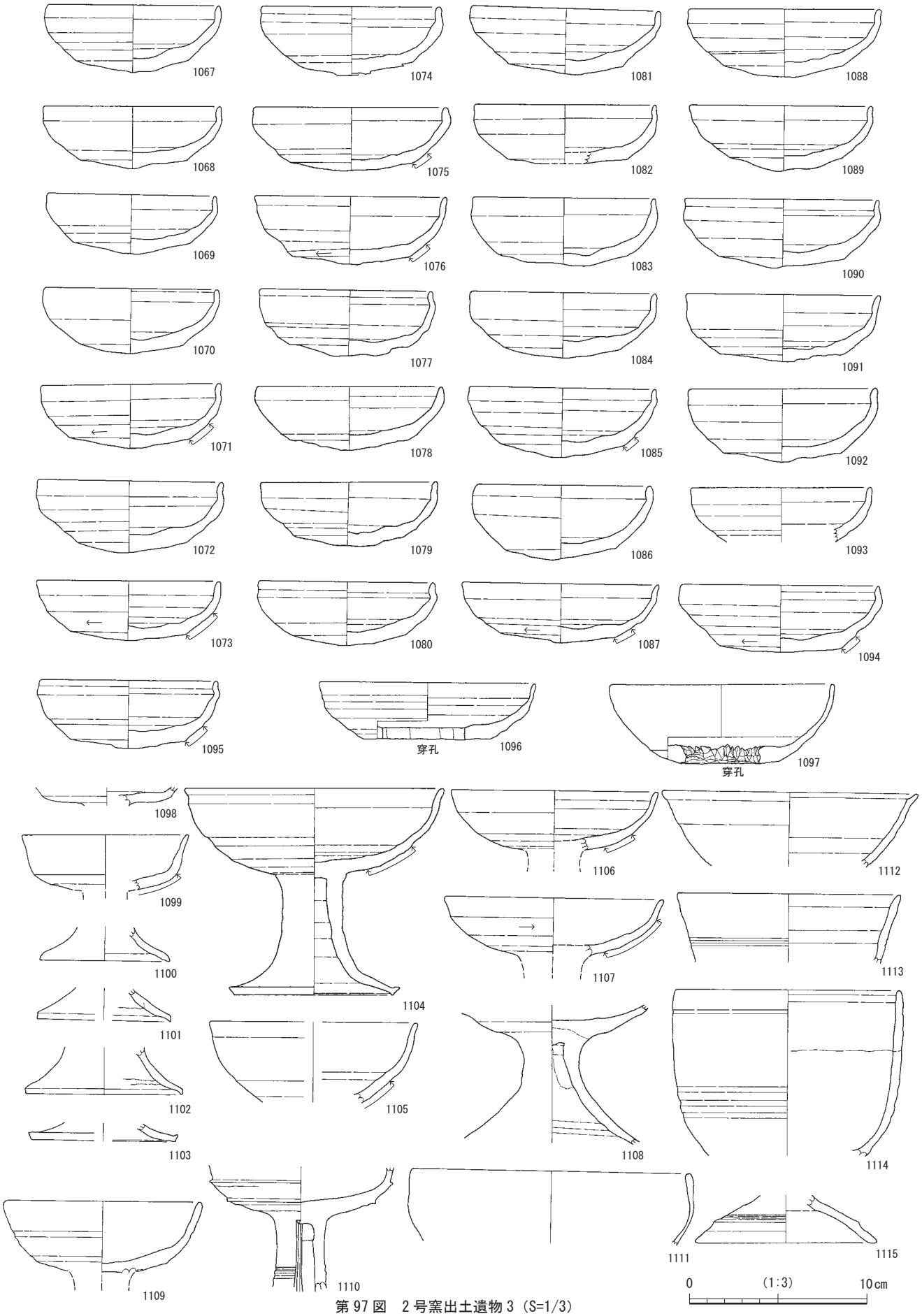
第 26 表　2 号窯実測坏 G 等法量分布表



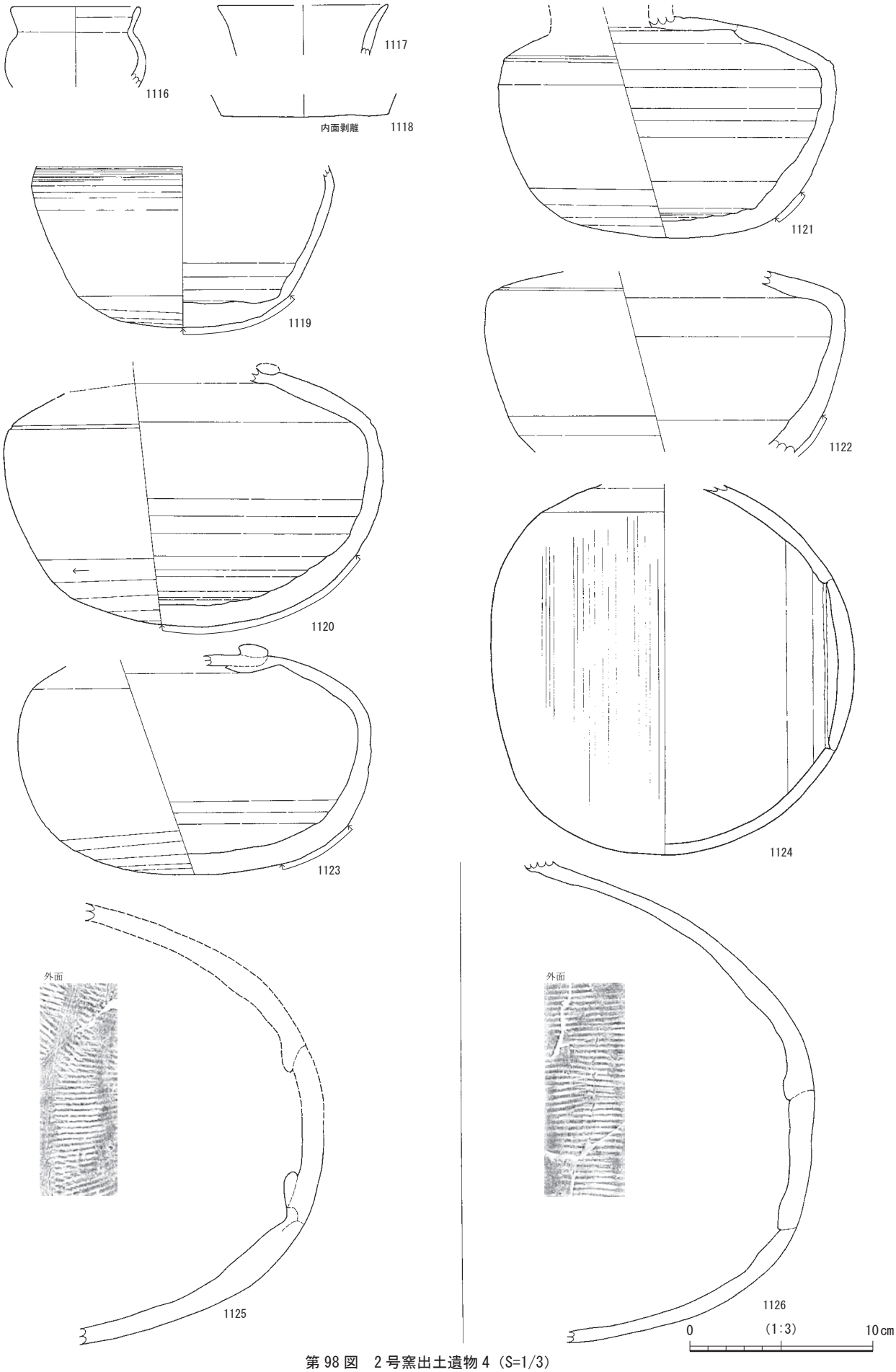


第 95 図　2 号窯出土遺物 1 (S=1/3)

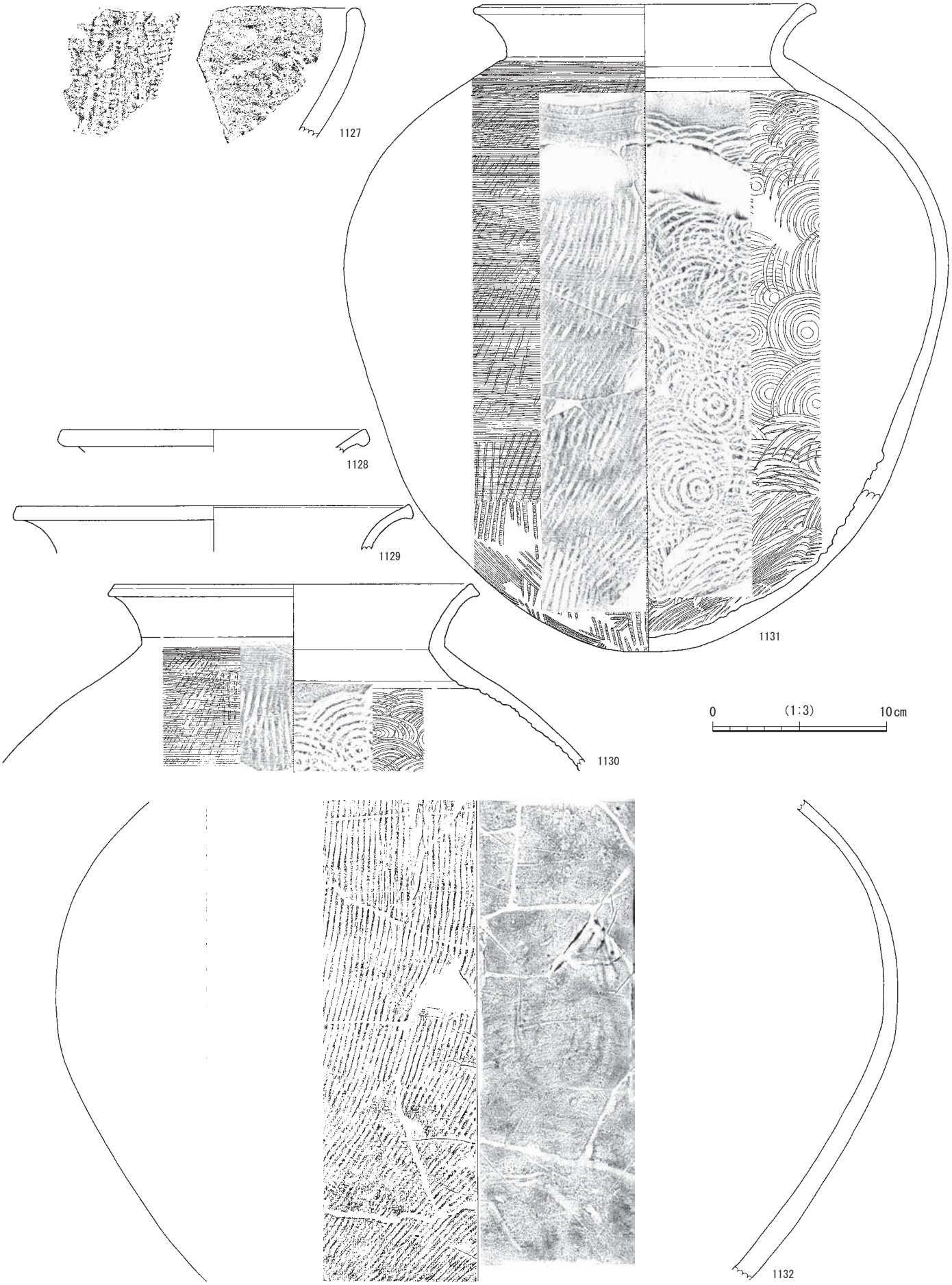
第 96 図　2 号窯出土遺物 2（S=1/3）



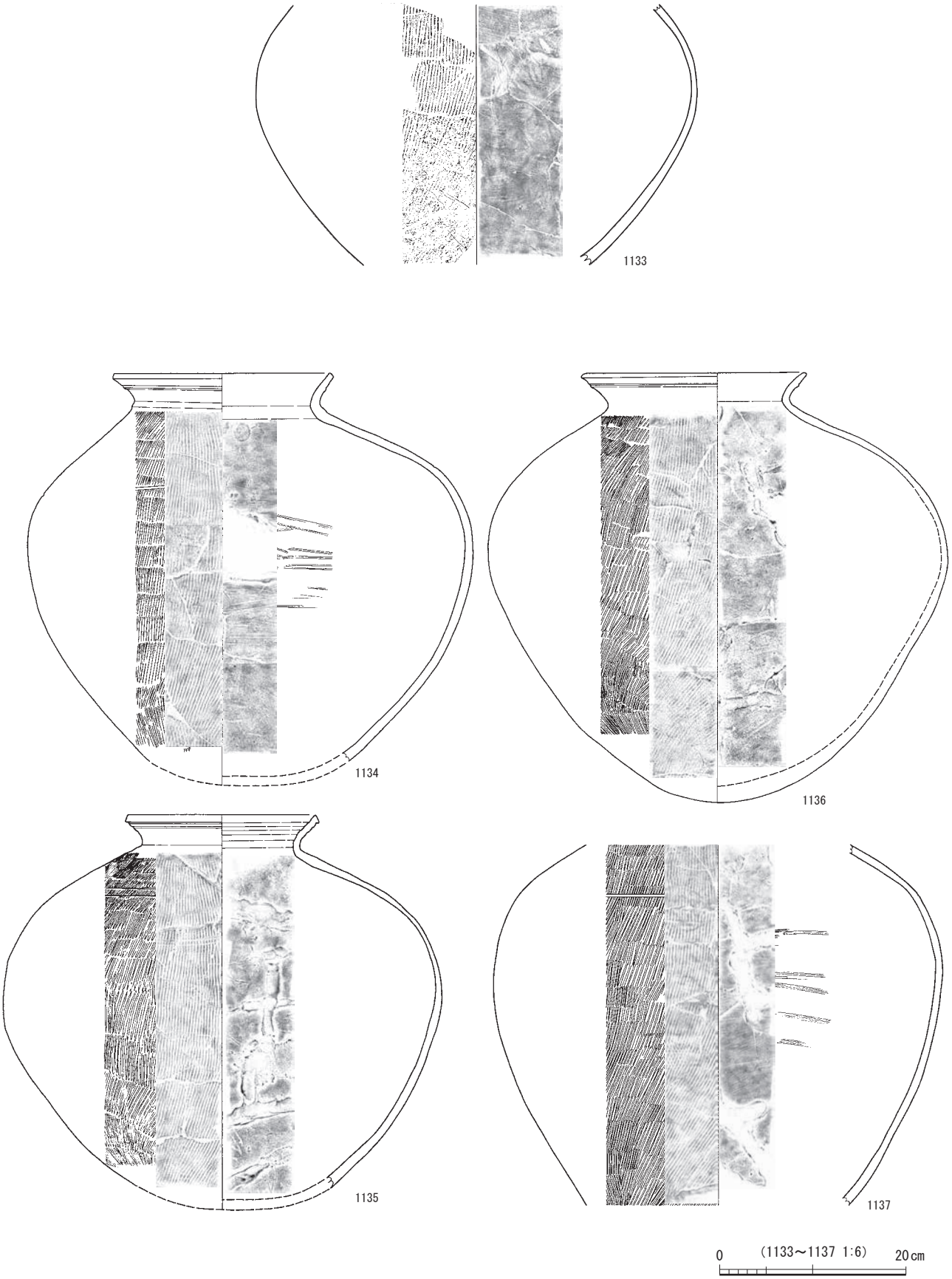
第 97 図　2 号窯出土遺物 3（S=1/3）



第 98 図　2 号窯出土遺物 4（S=1/3）



第 99 図　2 号窯出土遺物 5（S=1/3）



第100図　2号窯出土遺物6（S=1/6）

1126は、胴部内面を甕1132～37と同様にナデ調整で仕上げる。

甕　1128～37を図化、1128・1130・1131がｂ群、1129・1132～37がｃ・e群に属する。口径は17～23cm台に分布し、全形のわかる1131が口径18.7cm、器高37.0cm、1136が口径23.5cm、器高45.2cmを測る。1130・31が口縁端部を外側に肥厚させるのに対して、1134～36は口縁部外面に低い突帯を巡らす。また、c・e群に属する1132～37は、胴部内面全体に粗いナデ調整を施す点で共通する。

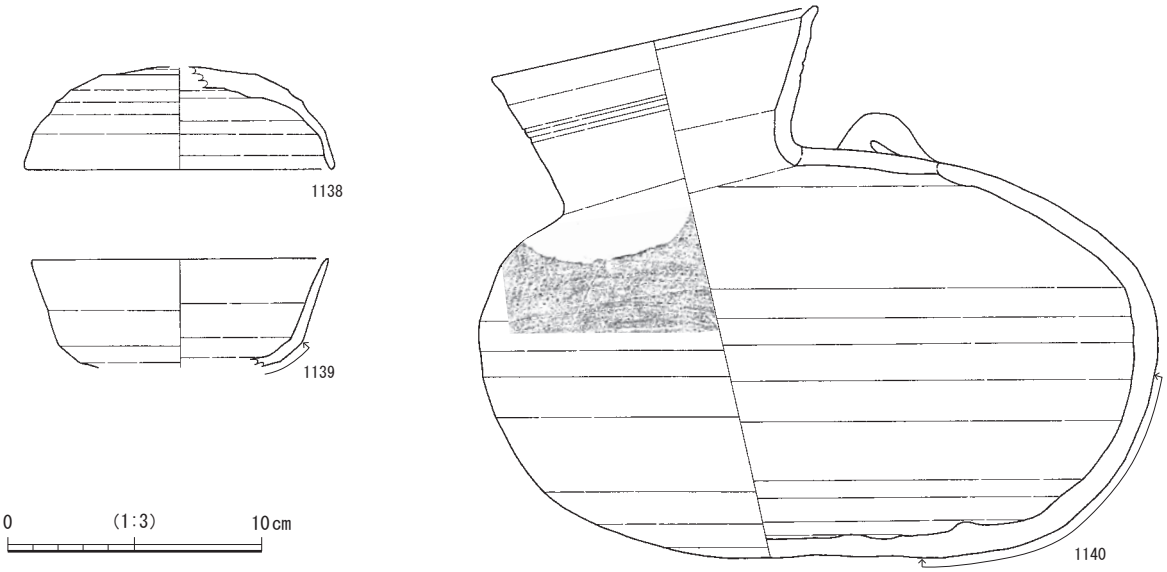
焼き台　専用焼き台（置き台）として、焼成前に底部穿孔を行った1096・97が出土した。前庭部溝出土の1096は口径12.0cm、器高3.0cmを測り、埦Gの底部をヘラ状工具で丸く穿孔する。焼成具合から正位で使用したと考えられる。1097は口径12.4cm、器高4.4cmを測り、基本器形は埦Gである。底部の穿孔は上方から工具先端で突き刺しながら粗く行い、底部外面が剥離する。顕著な焼成痕はない。

土馬等　窯体内・焚口から焼き台（置き台）に転用した平瓦様製品1269・70・72の破片の一部や、土馬1280～85及び小破片38点が出土した。第15項で説明する。

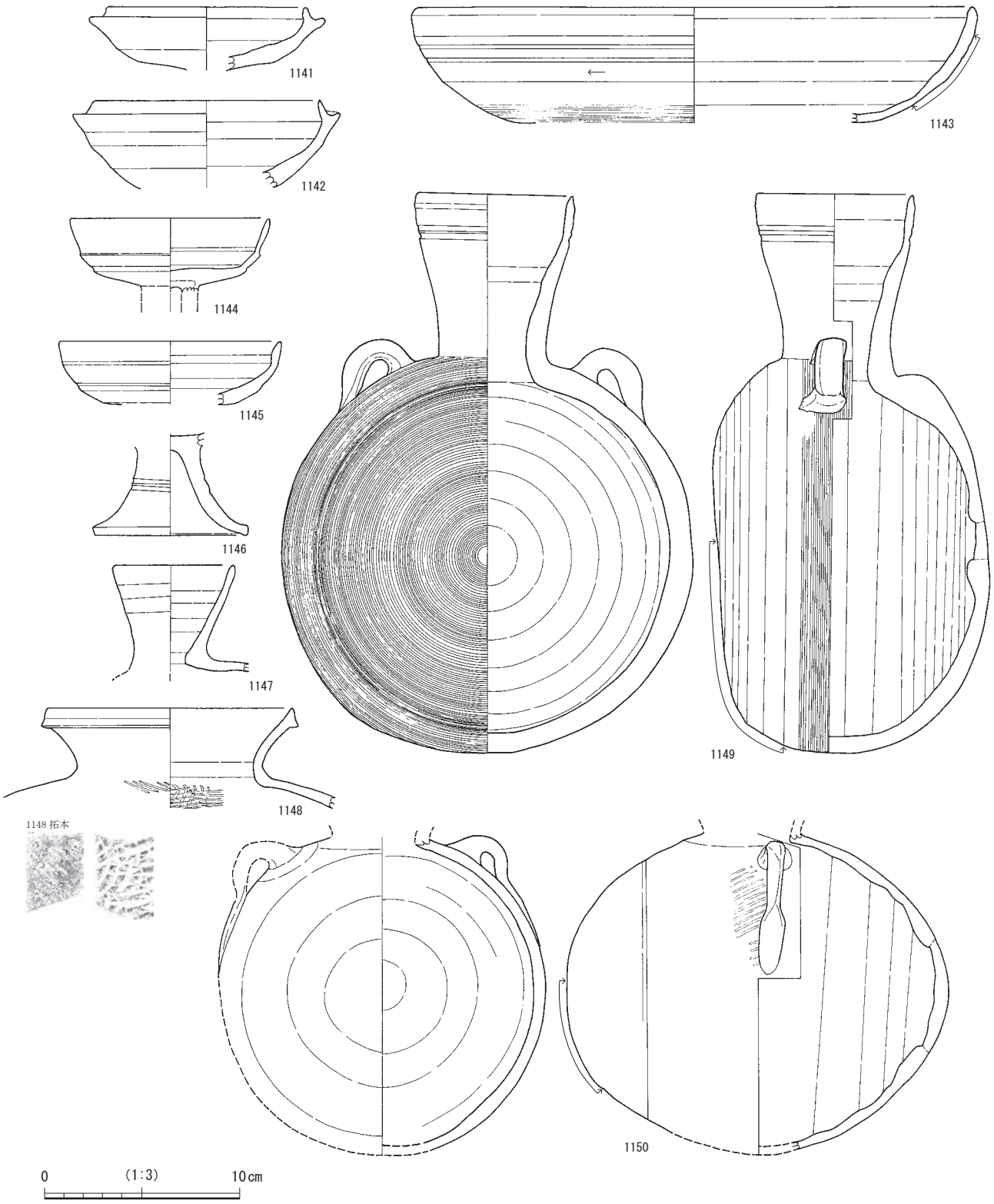
14. その他の遺構　（第85・101・102・114図、第49・50表）

9号窯流入土　9号窯は、築造途次で放棄された窯である。窯体掘削部分に流れ込んだ土砂より坏H、鋺G、平瓶、甕等の須恵器片約40点が出土、うち第101図1138～40、第114図1321～26を図化した。焼き歪みをもつ坏H蓋1138は口径12.0cm、器高4.0cmを測り、肩部に斜め方向の回転ヘラ切り痕をそのまま残す。鋺G身1139は口径11.6cmを測り、体部は直線的に立ち上がる。大型の平瓶1140は復元口径13.0cm、復元器高21.7cmを測り、底部は1枚の粘土板を指ナデで成形する。底部周縁～胴部中程外面は、平行叩きの後に丁寧な回転ケズリ調整を施す。また、胴部上端を円盤状粘土で閉塞し、小振りな環状把手をつける。

竪穴状遺構　7-1・2号窯と11号窯の間に位置し、出土遺物から7-2号窯に関連した施設と考えられる。覆土から坏類、高坏、瓶類、甕等、約100点の須恵器片が出土しており、うち第85図765、第102図1141～50を図化した。第85図765甕小片で、外面はカキメ調整の後に波状文を施す。坏H身1141は口径10.0cmと口径の縮小化が進む。1142は器肉が厚く、深身の器形を呈する。有台・薄手の大型盤1143は口径28.4cmを測り、体部は内湾する。外面に粗いケズリ調整を施した後、底部にハケ調整、体部に沈



第101図　9号窯流込土出土遺物（S=1/3）



第 102 図　竪穴状遺構出土遺物（S=1/3）

線を加える。高坏Dの1144は口径10.1cmを測り、段状を呈する2段の稜で加飾する。1145は埦G、生焼けの1146は高坏Cである。平瓶1147は閉塞円盤が残り、焼き台(置き台)に転用したため破断面に自然釉が熔着する。焼成堅緻な横瓶1148の口縁部は、下端が断面三角形状に肥厚する。環状の把手を付す提瓶1149は口径8.0cm、器高28.6cmを測り、焼き歪みや器面の剥離が認められる。生焼けの提瓶1150の胴部は俵形を呈し、接着面を長くとる優美な環状把手を付す。胴部は両面閉塞と考えられ、片側の閉塞円盤内面のみに粗いナデ調整を加える。他に7-1号窯出土の坏H蓋510、7-1･2号窯灰原出土の横瓶599、7-2号窯出土の横瓶742、8号窯出土の甕765、平瓦様製品1271、円面硯1277と接合する破片が出土している。

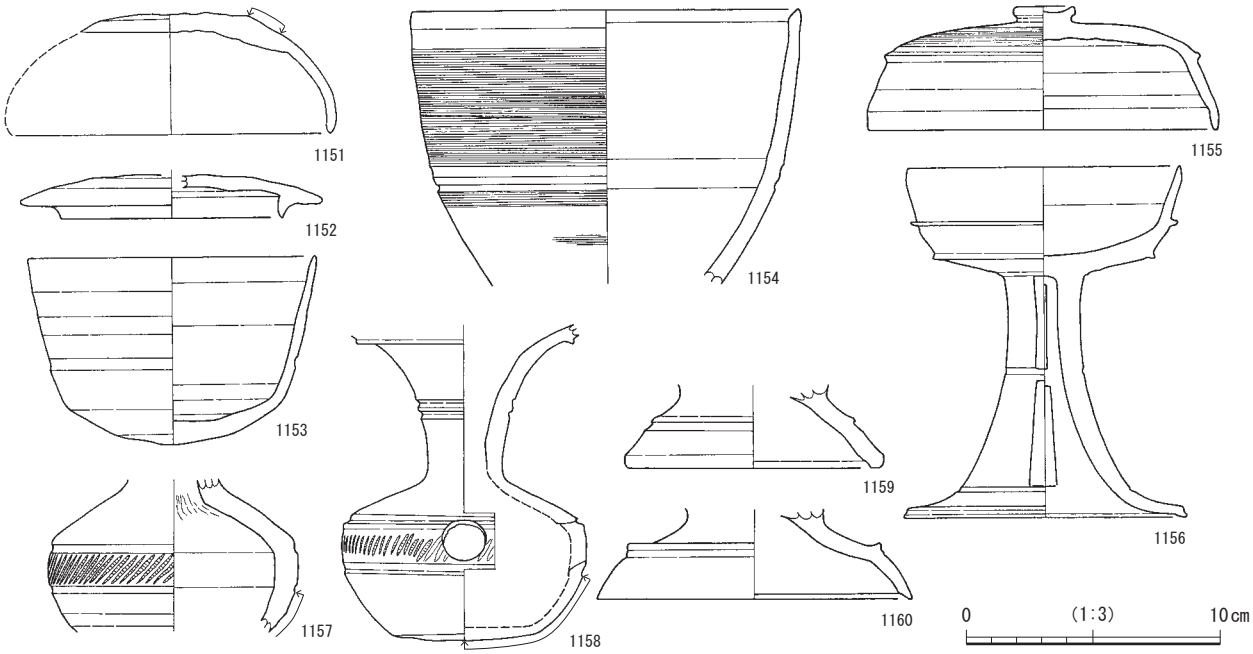
15. 包含層、陶棺、円面硯、土馬等

第2･3次調査包含層等（第103～108図、第50～52表）

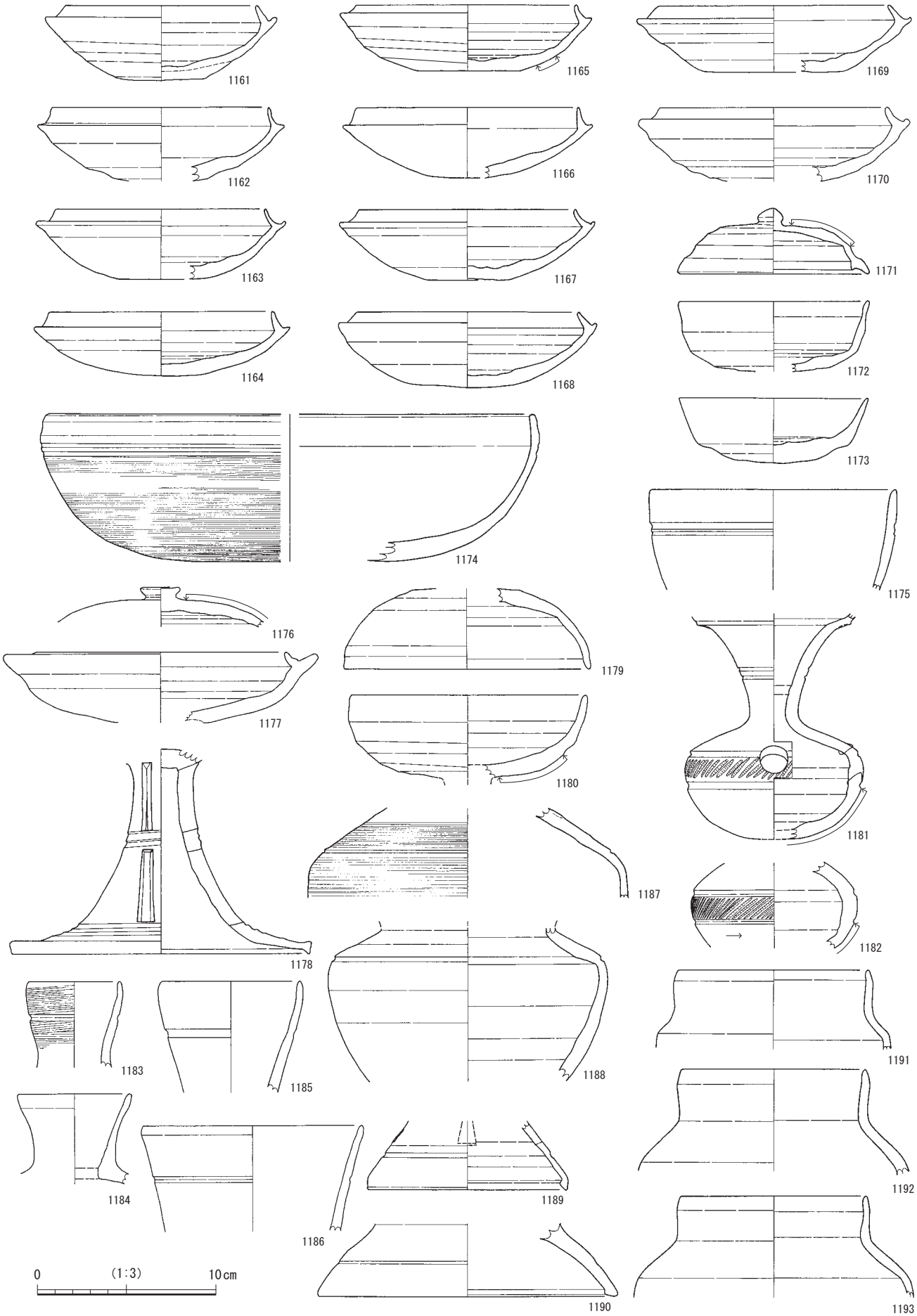
第2･3次調査で試掘トレンチ、包含層等から整理箱で約29箱の遺物が出土した。

第103図1151～60は、1～3号トレンチから出土した。坏H蓋1151は、平坦な天井部外面にクシ状工具痕が残る。鋺G蓋1152は口径11.9cmを測り、外面全体に熔着した自然釉のため調整は不明である。鋺類身1153は丸底で、底部外面に丁寧なナデ調整を施す。口径11.2cm、器高7.4cmを測る。図上復元した1154は口径15.1cmを測り、焼成は良好である。偏平な鈕を付けた高坏A蓋1155は、口縁端部が直立する。高坏Bの1156は口径10.7cm、器高13.7cmを測り、坏部外面の2段の稜を鋭く仕上げる。瑠1157は、胴部中程を丁寧な沈線と斜行刺突文で加飾する。瑠1158の外面には、透明感のある淡灰オリーブ色の厚い自然釉と焼土が熔着する。1159･60は筒型の鋺の脚部の可能性をもつ。

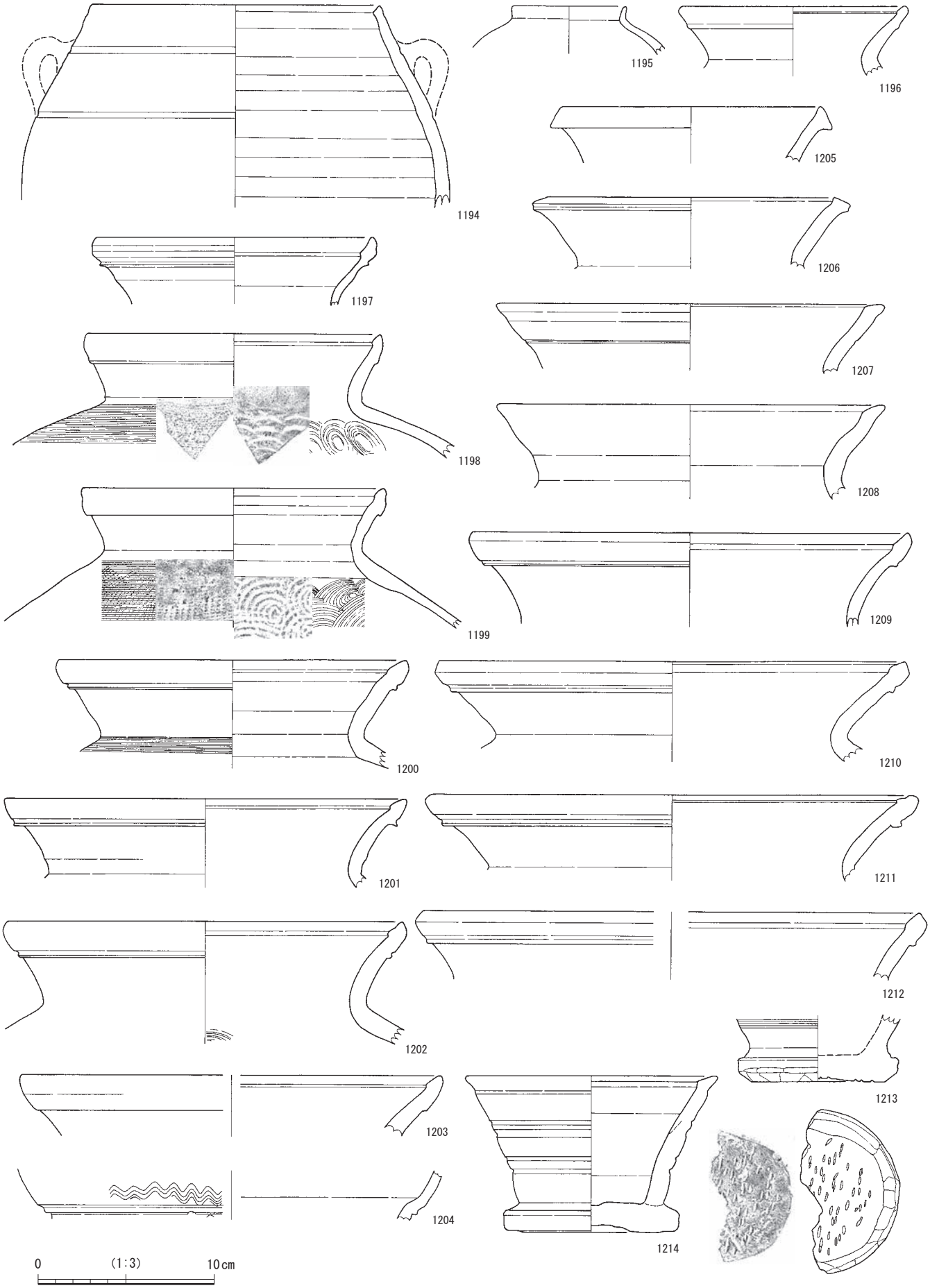
第104図1161～第105図1214は、主に表土から出土した。1161～1170は坏H身である。1161は、平底風の底部が径約5cmと狭く、底部内面がロクロ回転方向に層状剥離する。1162･67は倒位焼成で、116569は正位で焼き台(置き台)に転用する。生焼けの坏G蓋1171は、天井部外面に施した回転ケズリ調整の施工単位が明瞭にわかる。坏G身1172･73は口径10.5cmを測り、1173の底部は台状を呈する。焼



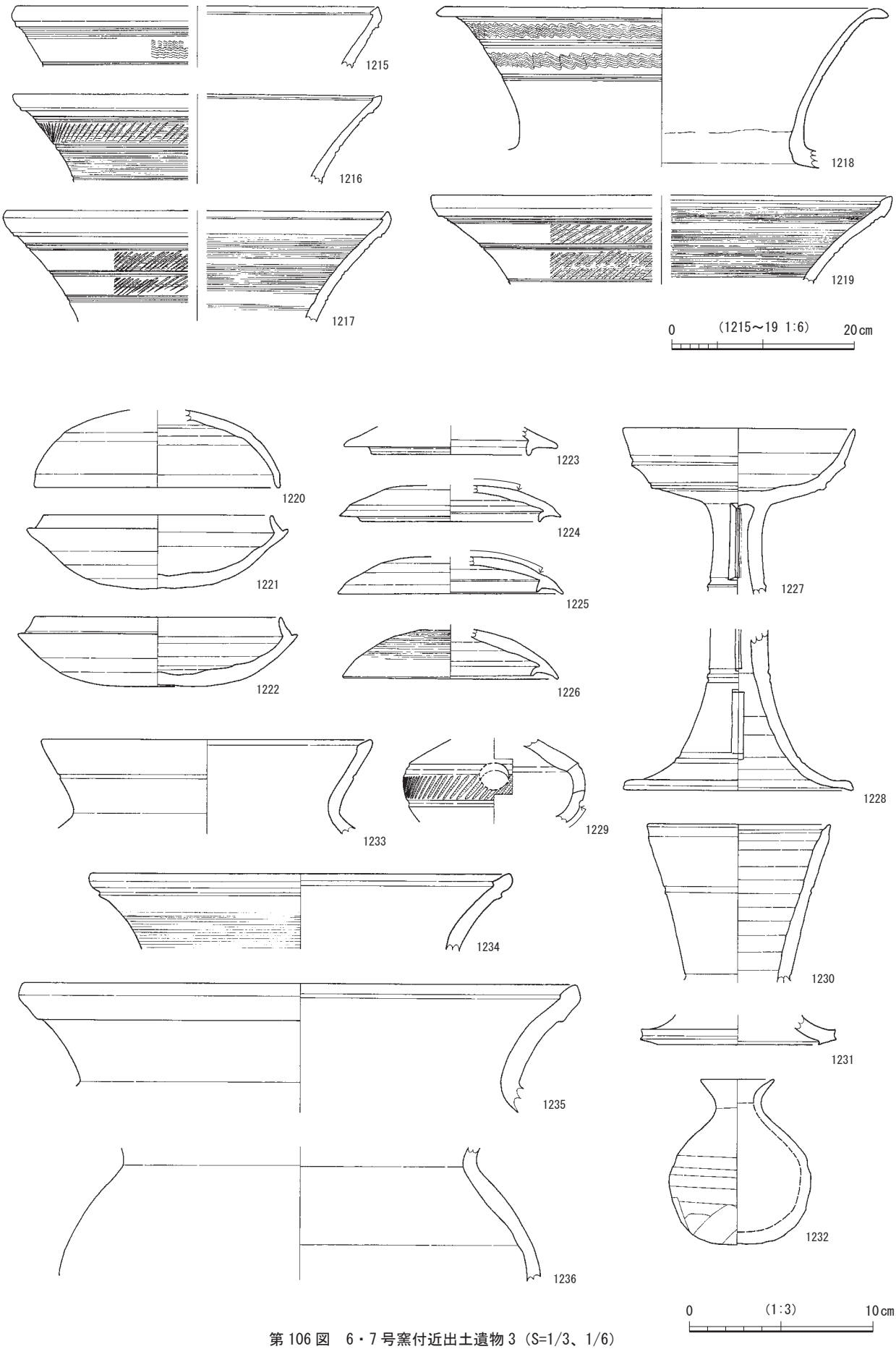
第103図　1～3号トレンチ出土遺物（S=1/3）



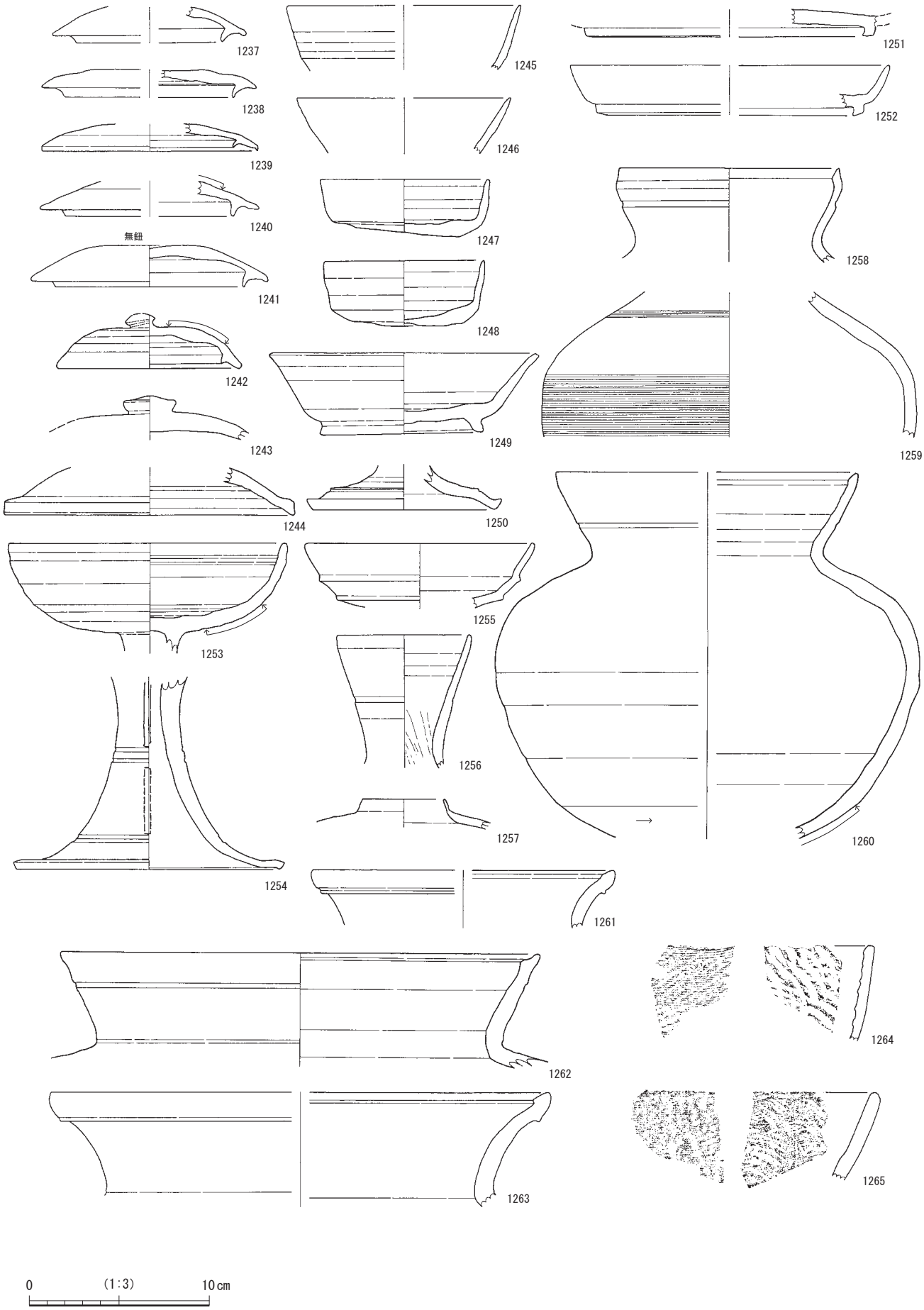
第 104 図　6・7 号窯付近出土遺物 1（S=1/3）



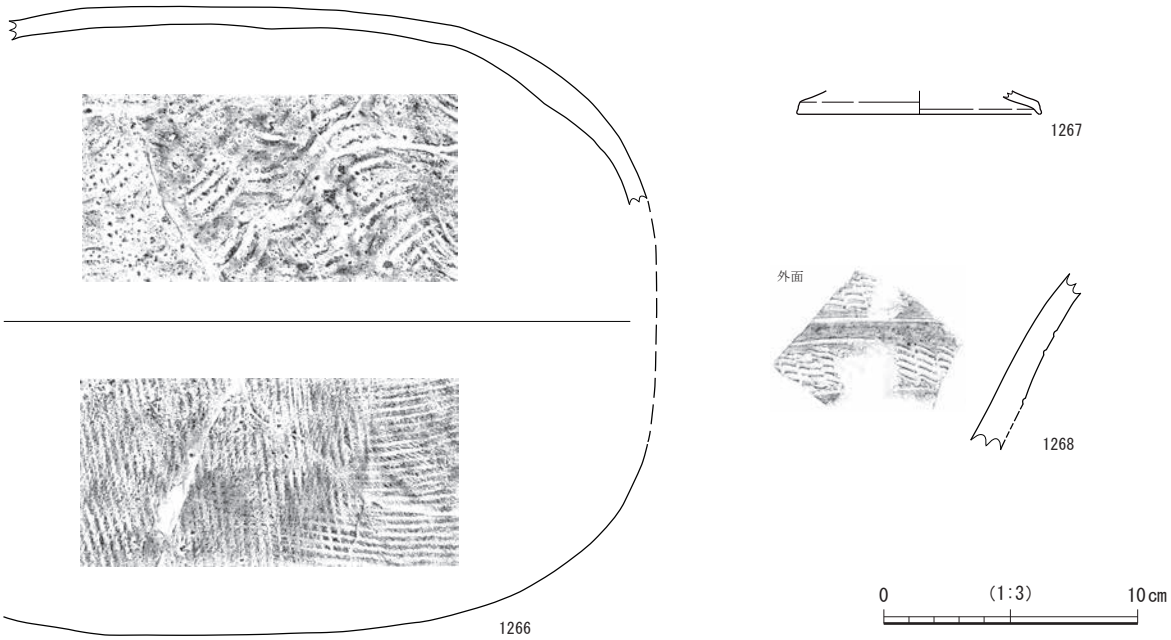
第 105 図　6・7 号窯付近出土遺物 2（S=1/3）



第106図　6・7号窯付近出土遺物3（S=1/3、1/6）



第 107 図　表土・撹乱土出土遺物 1（S=1/3）



第108図　表土・撹乱土出土遺物2（S=1/3）

き歪んだ大型盤1174は口径約27cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がる。底部内面全体にナデ調整を、外面にカキメ調整と沈線を、それぞれ施す。筒形の鋺の身と考えられる1175は口径13.6cmを測り、内外面とも降灰が著しい。1176～78は高坏Aである。蓋1176の天井部内面には同心円叩き痕がわずかに残る。灰色を呈する身1177の口縁部の特徴は、10号窯出土品（第90図845）と共通する。また、脚部との接合部に同心円叩き痕が残る。1179は坏H蓋、1180は高坏E坏部である。瑕1181・82の斜行刺突文は、やや粗い印象を受ける。1183・84は平瓶である。1183は口径5.0cmを測り、外面をカキメ調整と沈線で加飾する。1184は焼き台（置き台）に転用したため、外面に他個体片が熔着する。口縁端部が内湾気味の1185は、自然釉の熔着が目立つ。1186は、内面も降灰するため、瓶と考えた。瓶1187・88は肩部が張る。1189・90は長頸瓶の脚であり、1189は317と同一個体の可能性が高い。1190は未図化だが台形透かしを穿った痕跡が残る。小型壷1191～93は口径約10cmを測り、直立する口縁部は端部でやや内傾する。鉢G類の1194は、肩部に環状把手の剥離痕が残る。小型壷1195は口径6.4cmを測り、有蓋の可能性をもつ。1196は瓶類、1197は壷類と考えられ、1197は口縁端部が内外に肥厚し、下端に突帯をつくる。1198～1212は甕口縁部片である。口縁部形態は、肥厚するもの（1198・99）、肥厚した口縁下部に突帯をつくるもの（1200・01・10等）や、口縁端部が断面三角形を呈するもの（1205）、口縁端部を横方向にのばすもの（1207・08）が確認できる。1214・15は厚底の鉢C類である。1214は口径14.2cm、器高8.8cmを測り、外面のみに自然釉が熔着する。内面が剥離する1213は、7-1・2号窯灰原出土品（第80図612）と同様に、底部外面に刺突と周縁部のケズリが認められる。大型甕1215～1219は口径39cm以上を測り、1218は口縁端部が横方向に長くのびる。また、1215・18が沈線と波状文で、1216・17・19がカキメ調整と沈線、斜行刺突文で、それぞれ加飾する。

第106図1220～32は撹乱層から出土した。1220は坏H蓋、1221・22は坏H身で、1222は焼き割れが目立つ。鋺G蓋1223～26は口径12cm前後を測り、1226は天井部外面にカキメ調整を施す。1227・28は脚部に2方2段の透かしをもつ高坏Bである。焼きのあまい1227は口径12.5cmを測り、稜頂部は鋭さを欠く。1228は倒位で焼成される。瑕1229は、正位で焼成したため肩部の降灰が著しい。提瓶と考えられる1230は口径9.8cmを測り、口縁端部は先細る。ほぼ完形の小型壷1232は口径3.9cm、器高9.0cmを測る。外反する口縁部は先細り、底部外面に手持ちケズリ調整を施す。1234・35は甕、1236は壷である。

第107図1249・55～58・60～65、第108図1268は表土等から出土した。1237～41は鋺G蓋である。1239は口縁端部を小さく下方に折り曲げ、自然釉が厚く熔着する1241は無鈕である。坏G蓋1242の外面には、径約9cmの重ね焼き痕が残る。1243・44は8世紀後半代の有台坏蓋で、1243は天井部内面が使用に伴い平滑となる。1245・46は奈良時代の有台坏で、1246は小片のため傾きに不安を残す。1247・48は、箱形を呈する坏G身である。1249は奈良時代前葉の有台坏で、口径14.5cm、器高4.5cmを測る。1251・52は奈良時代後半の有台盤で、台部を内屈気味につける。高坏Eの1253は口径15.3cmを測り、外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。1254・55は高坏Bである。1254は、2方2段の透かしを穿ち、脚端部の面取りは鋭い。1255は、自然釉の垂れ具合から横位置に近い置き方で焼成した可能性が高い。長頸瓶1256の内面には、成形時の絞り痕が明瞭に残る。無蓋の小型壷1257は口径4.6cmを測る。1258・60は壷Aで、口縁端部に内傾した平坦面をつくる。甕1262は口径26.5cmを、1263は口径約27cmを測る。1264・65は鉢C類小片で、1265は生焼けのため磨滅する。なお、未実測だが、石鏃、緑色凝灰岩片（図版第59）、鉄鉢口縁部片1点が出土している。

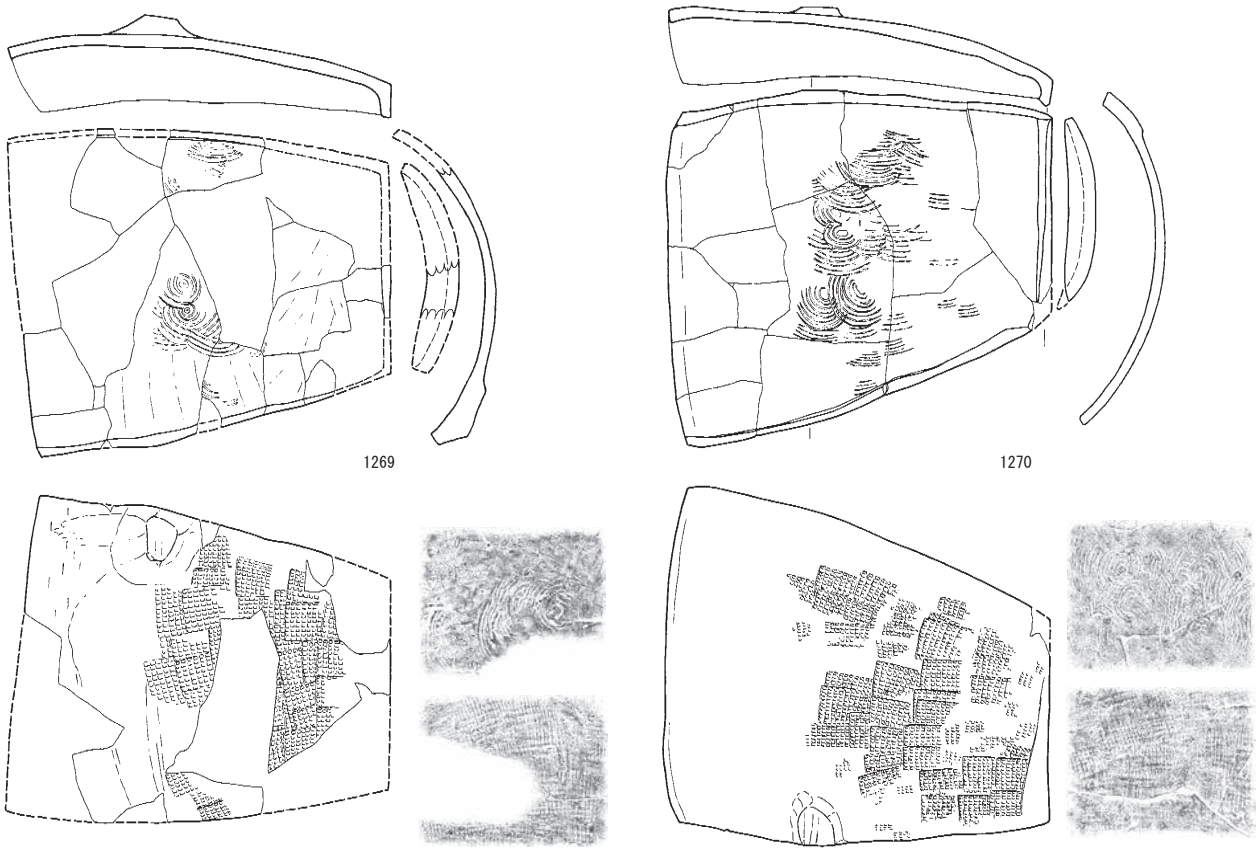
平瓦様製品　第109図1269～1272は、用途が不明な平瓦様の焼成不良品である。法量は、長辺29～30cm、短辺21～25cmを測り、比較的ゆるやかな規制のもと製作されたようだ。胎土・調整が共通することから、1個体の把手付大型鉢を鋭利なヘラ状工具で4分割したものと考えられる。元となった鉢は、体部下半を内面同心円・外面格子状の叩きで、上半を横方向の板状工具を用いた粗いナデにより成形する。分割面は、大部分が切断痕をそのまま残し、一部にヘラ状工具による粗い面取りを加える。また、分割時に、把手は接合面から切り落とされ、底部は完成品の曲面にあわせて不要部分を切断する。

接合した各破片は点在しており、1269が2号窯窯体内・前庭部（焼き台（置き台）転用含む）・同灰原、7-2号窯床面・前庭部、11号窯煙道部流込土等から、1270が2号窯窯体内・前庭部（全て焼き台（置き台）転用）、7-2号窯床面から、生焼けの1271が11号窯流込土、竪穴状遺構から、1272が2号窯床面・前庭部（焼き台（置き台）転用含む）等から、それぞれ出土した。これらから、4点とも7-2号窯で焼成・破損し、1271が11号窯等に流れ込み、残る破片の半数程度が2号窯に持ち込まれて焼き台（置き台）に転用した可能性が高い。また、同製品の状況から、11号窯→7-2号窯→2号窯の操業順序が復元可能である。

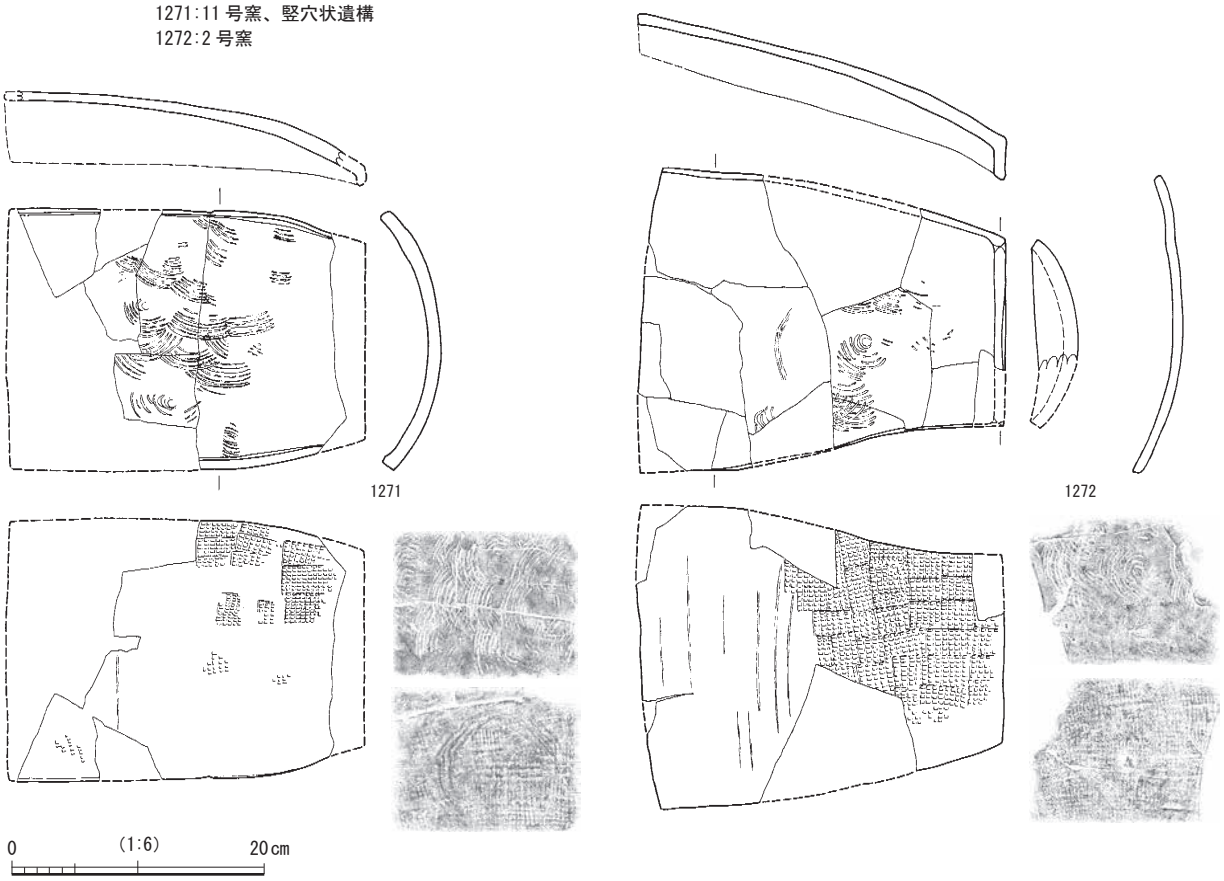
陶棺　須恵質の陶棺身1273については、第110・111図1273～1275を図化した他、小片約15点が出土した（図版第60）。図化した破片は、大きく2破片群に分かれ、両破片群に接点がないため、図上でおおよその位置関係を復元してある。

色調は、暗灰～灰色を基調とし、生焼けに近い脚部を含む底部付近は淡黄灰色を呈する。外面の降灰・黒化の状況から、別作りの蓋を被せて焼成したと考えられる。形態は、叩き技法を用いることもあり、曲面で構成されており、平面形態が隅丸・胴張りの亀甲形を、断面形態が底部と側部の境が丸く、上縁（口縁部）が内傾気味の略半円形をそれぞれ呈する。また、外面には突帯等の装飾文様が認められない。残存法量は、長さ80cm以上、幅41cm（復元幅約82cm）、高さ約43cm、器壁の厚さ1.5cm前後と比較的小型であり、以下で述べる理由から、一体作りの陶棺と考えられる。

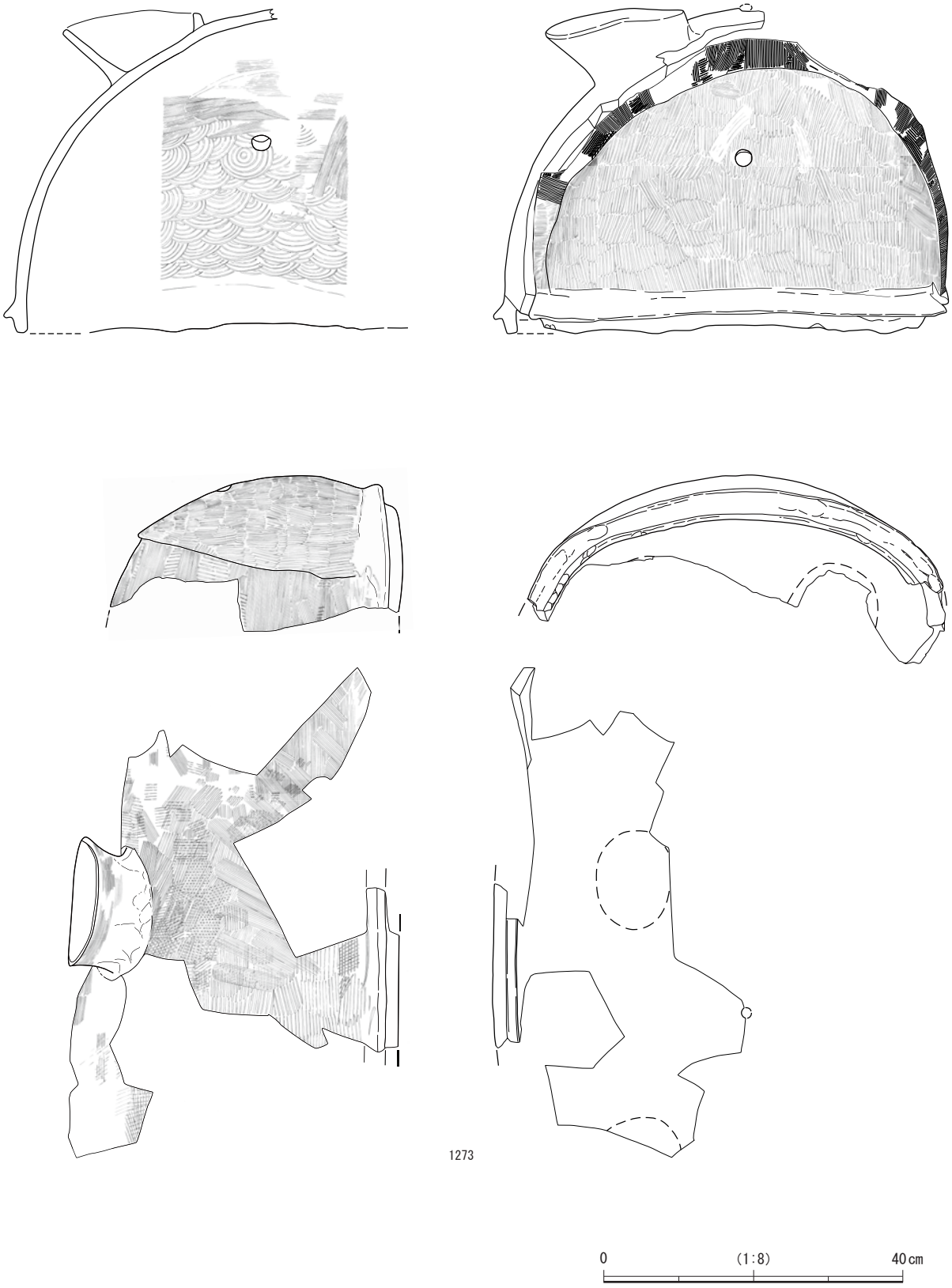
身の成形は、須恵器技法を用いて別個に作った、長側面・底部の部品（以下、部品1）と、短側面の部品（小口面側。同、部品2）を接合しており、接合箇所は2つの部品の曲面が不整合であるため、外面は段状を呈する。部品1の成形は、短側面と接合する側（第110図上側）を下として、粘土帯（表面観察で幅約10cm）を叩き技法を用いて円筒状に積み上げて成形し、外面に粗い板状工具を用いた粗いナデを加える工程が復元できる。また、部品2は、倒位で成形した大型甕様の個体から必要部分を切り取ったもので、成形に際して叩き締めを丁寧に施す。部品1の内面に残る粗く密なハケ調整の範囲が、部品2や脚部との接合箇所付近に集中する状況から、他部品の接合の際にハケ調整を多用したと考えら



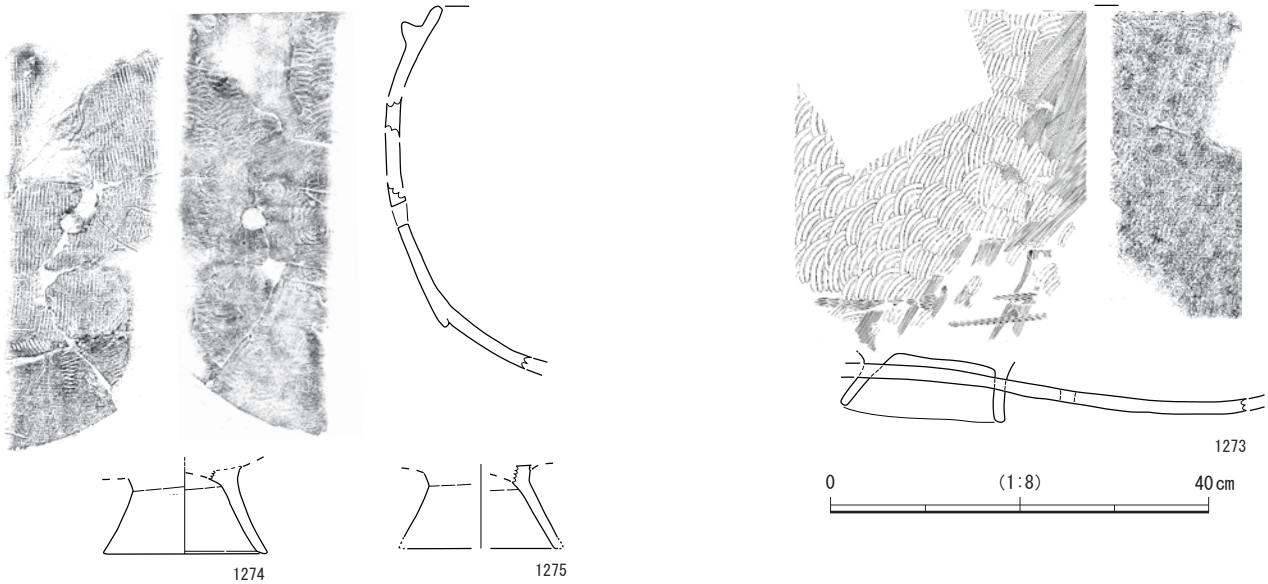
1269:2 号窯、7-2 号窯、11 号窯、6･7 号窯
1270:2 号窯、7-2 号窯
1271:11 号窯、竪穴状遺構
1272:2 号窯



第 109 図　平瓦様製品（S=1/6）



第 110 図　陶棺 1 (S=1/8)



第111図　陶棺2（S=1/8）

れ、部品1中央寄り（第110図下側）の密なハケ調整も、他部品との接合痕を示す可能性が高い。この場合、長側面・底部の部品は、1つの円筒形を積み上げた後、縦方向に2分割して接合し、その後、甕として製作した両短側面（小口面）の部品を接合したと考えられる。都合4つの部品を接合して身本体を作った後、蓋受け部を上面が水平となるように粘土紐を貼り付け、平坦な上縁（口縁）部とともに粗いナデ調整（一部ヘラ状工具によるナデ調整）を施す。また、部品1底部中央付近と、部品2中心線上に各1ヶ所の円孔を穿ち、後者は外側から穿たれた径約2.5cmの円孔となる。陶棺身の破片は、7-1・2号窯灰原の他、7-1号窯焼成室床面、7-2号窯窯体内、5・10号窯灰原、6・7号窯表土、11号窯窯体流込土、撹乱層から出土しており、うち7-2号窯窯体内出土の1破片、7-1・2号窯灰原出土の1破片、5・10号窯灰原出土の4破片、11号窯窯体流込土出土の1破片が焼き台（置き台）に転用される。

また、身本体の成形後、若干の粘土で補強しながら、身本体の曲面にあわせながら脚部を貼り付ける。部品1の底部外面には脚1基がほぼ残存、2ヶ所に脚部貼り付け痕が、部品2の底部外面2ヶ所には脚部貼り付け痕が、それぞれ残る。復元できる各脚の間隔は、長軸方向で約30cm、短軸方向で約22cmを測り、脚の配置は4行2列の可能性が高い。部品1に残存する脚部片は、1274・75とともに生焼けである。脚部は、脚端部に向けて直線的に広がり、高さ8～9cm、裾端部径約17cmを測る。1273・75には、接地面外縁をヘラ状工具で丁寧に整形した痕跡が残る。おそらく、各脚部を倒位でロクロ成形し、外面にカキメ調整を施したと考えられる。脚部片の出土地点は、1274が7-1・2号窯灰原、6・7号窯表土、11号窯窯体内から、1275が5・10号窯灰原から出土している。身部破片の出土状況を加味すれば、11号窯または7-1号窯で焼成した蓋然性が高い。

円面硯　第94図951、第112図1276～78の5点が出土した。5・10号窯灰原出土の圏足円面硯951は、焼成堅緻で脚径12.5cmを測る。脚端部を直線的に面取りし、外面を2条の浅い沈線状の凹みと波状文で加飾後、下辺幅約5.5cmの台形透かしを4方に穿つ。倒位で焼成しており、内面に降灰が認められる。

1276は、6号窯焼成室床面、7-2号窯窪み、7-1・2号窯灰原、11号窯流込土から破片が出土し、焼き台（置き台）への転用は認められない。同胎土で法量の異なる2個体の円面硯を正位に重ね焼きしており、外面には厚く自然釉が熔着する他、焼き割れが顕著である。下方の硯（1276-1）は、硯面径15.6cm、脚端径17.8cm、高さ4.9cmに復元でき、上方の硯（1276-2）とほぼ同法量の硯面を逆位で端正な脚に貼り付ける。本来の硯面（出土品の下面）は、陸・内堤・海・縁の各部をしっかりと表現する。硯面（本来の硯面

裏面)は、径約5.5cmの円盤状の粘土板に幅約2cmの粘土紐を三重に巻き付けた痕跡をそのまま残し、円面硯の製作技法を考える上で好資料となる。縁部は、最も外側の粘土紐を断面方形に丁寧に整形し、一回り大きく1条の沈線で加飾した脚部を外展して付ける。焼き歪みの大きい上方の硯(1276-2)は、硯面径11.7cm、脚端径14.0cm、高さ3.6cmに復元でき、1276-1の硯面を保護するために重ね焼きしたものと考えられる。ナデ調整が施された硯面裏側には、硯面側からの刺突3ヶ所が認められ、脚端部は外側に大きく折れ曲がる。焼成・胎土は1277と近似する。1277は、7-2号窯窯体内・前庭部、7-1・2号窯灰原、竪穴状遺構から破片が出土、7-2号窯で焼成した製品と考えられる。正位で焼成しており、焼き歪むとともに外面には自然釉が厚く熔着する。硯面径14.4cm、脚端径15.3cm、高さ5.7cmに復元でき、縁部は断面三角形状を呈する。また、直立気味の脚外面2ヶ所を2条1単位の沈線で加飾、肥厚した端部には焼土片・焼き台片が熔着する。

圏足円面硯1278は、6・7号窯周辺から出土した。脚端径25.0cmを測り、外面を1条の突帯で加飾した後に、下辺が低い台状を、上方が円形を呈する透かしを穿つ。

土馬　焼成良好な陶馬片は細片を含めて53点が出土、うち第112図の13点を図化した。いずれも飾馬と考えられ、調整・胎土・焼成等から4つのグループに分けられる。

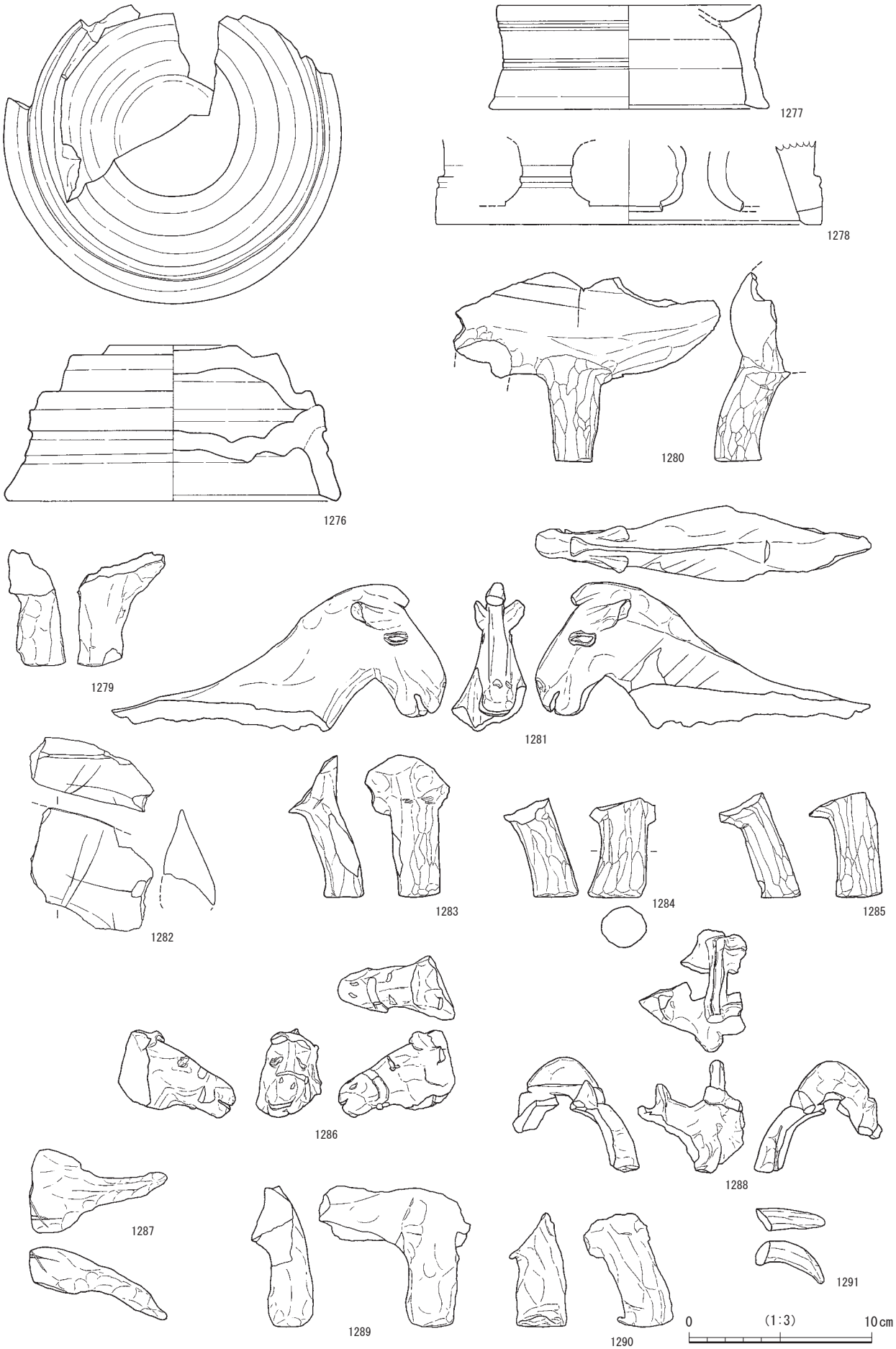
1279・88・89・90は、粘土紐で馬具を表現するグループである。灰白～淡灰色を呈し、胎土に細砂と少量の大型礫が混ざる点で共通する。1288は粘土紐で鞍部をつくり、中実の左後脚1289は鞍部または尻繋を表現した粘土紐が欠落する。また1279・89・90の脚は粗いナデ調整で仕上げ、接地面は丸味をもつ。1279が11号窯流込土、1288が6・7号窯周辺、1289が7-1号窯焼成部流込土、1290が7-1・2号窯灰原、未実測の小破片1点が7-2号窯から、それぞれ出土した。2つ目のグループには、7-1号窯焼成部流込土から出土した1286が属する。胎土中に粗砂と多くの礫が混ざり、左面に自然釉が薄く熔着する。粘土紐で耳・立髪・鏡板を、また刺突により目・鼻・口を表現する。

細い線刻で馬具を表現する1280～85(・91)のグループは、1280～85及び小破片38点が2号窯前庭部・窯体内から、1291が5号窯床面から、それぞれ出土した。実測遺物は、中空と考えられる胴部を指ナデ調整後に線刻する点、脚や尾部をヘラ状工具で丁寧に面取りする点、脚接地面を丁寧に平坦に仕上げる点、粘質で粗砂と少量の礫が混ざる胎土を用いる点で共通する。1280は細い線刻で鞍部を、1281は粘土で耳・立髪、ヘラ状工具により目・鼻・口、左側のみ細い線刻(4条残存)で手綱または体毛を、1282は粘土で立髪、細い線刻で手綱または鞍部を、それぞれ表現する。1287のグループは胎土中に粗砂・礫が多く混ざり、垂れ下がる尾部を指ナデで粗く仕上げる。左上半に細い線刻2条が残り、片面のみ馬具を表現した可能性をもつ。1286・89と同様に7-1号窯焼成部流込土から出土した。

胴部落とし残欠　図版第62に示した21点が出土、うち叩き痕を残す個体は10点を数える。瓶類や甕の胴部と口縁部を接合する際に、胴部の不用な粘土を鋭利なヘラ状工具で切り落とした残欠で、切り取りの見込み線が残るものもある。いずれも不整形な弧状を呈し、長さ4～10cmを測り、規則性に乏しい。切り落とし後、そのまま瓶類・甕本体とともに焼成されたと考えられ、他個体との熔着痕を残す個体はない。出土地点は、1・2・5・11号窯窯体内から各1点、10号窯窯体内から3点、4号窯灰原から1点、6・7号窯灰原から8点、8号窯前庭部から1点、包含層等から3点となり、散見する印象が強い。

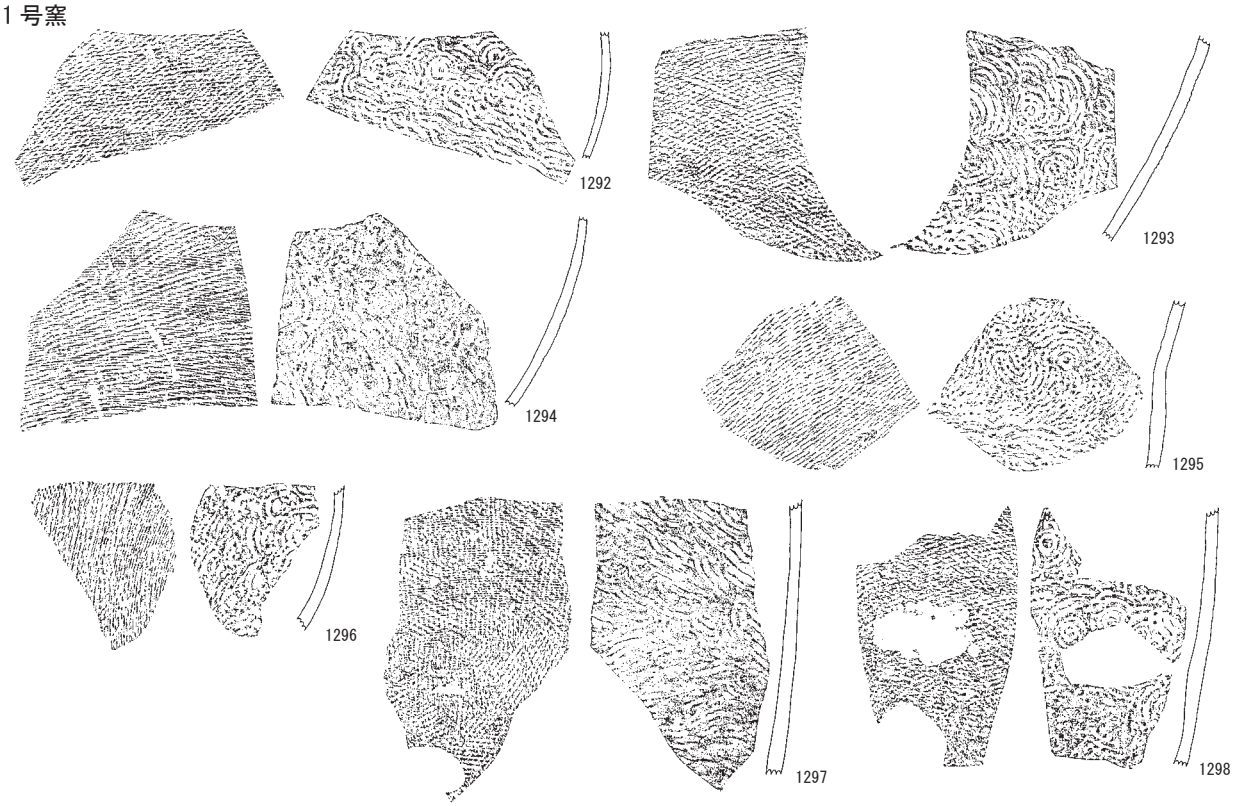
16. 小結　(第116～123図、第27・28表)

遺構・遺物の状況等　第1～3次調査で確認した須恵器窯は、操業を行った窯10基、築造中途以前に放棄された窯2基(3号窯、9号窯)の計12基を数える。操業した窯については、1度の操業で放棄された窯から11号窯のように何度も床面の補修を行いつつ操業を続けた窯が存在する他、灰原から最終操業段階以前

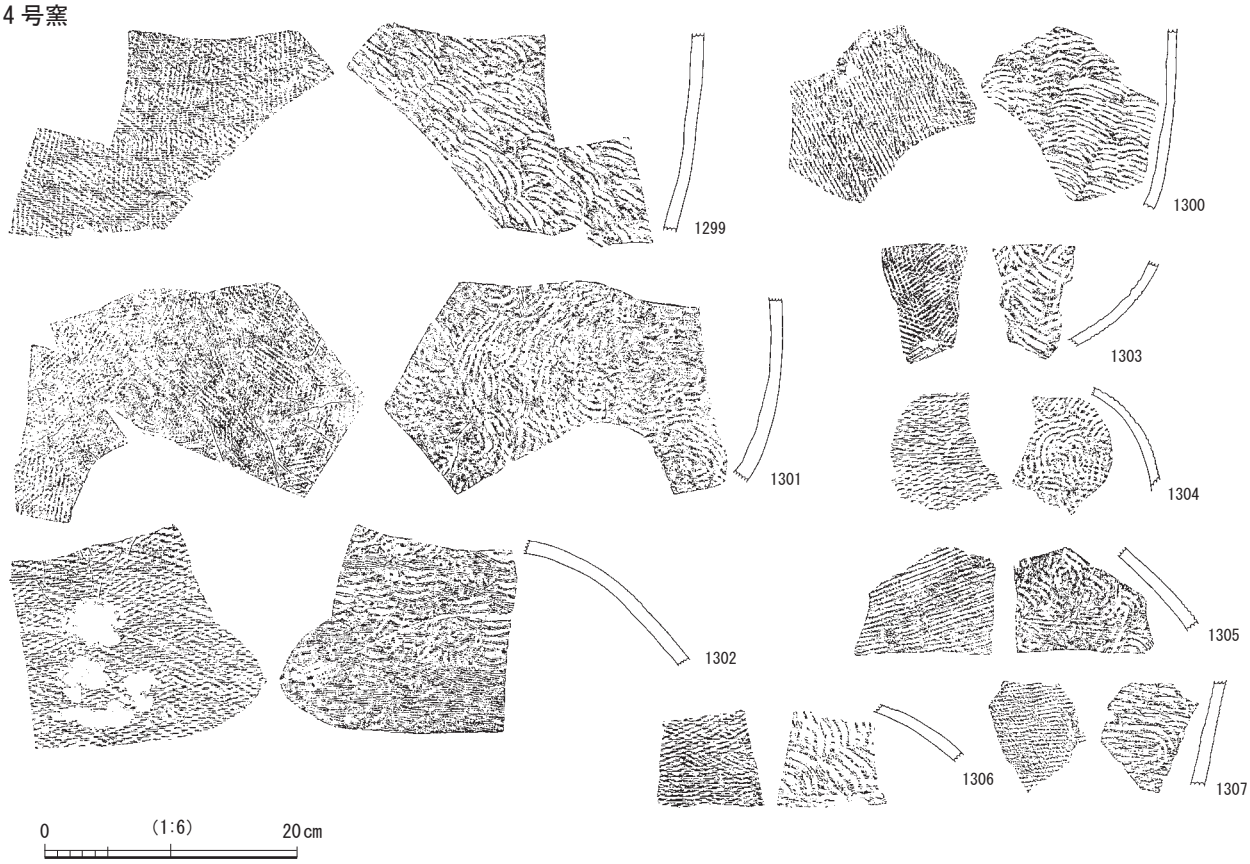


第 112 図　円面硯・土馬（S=1/3）

1号窯



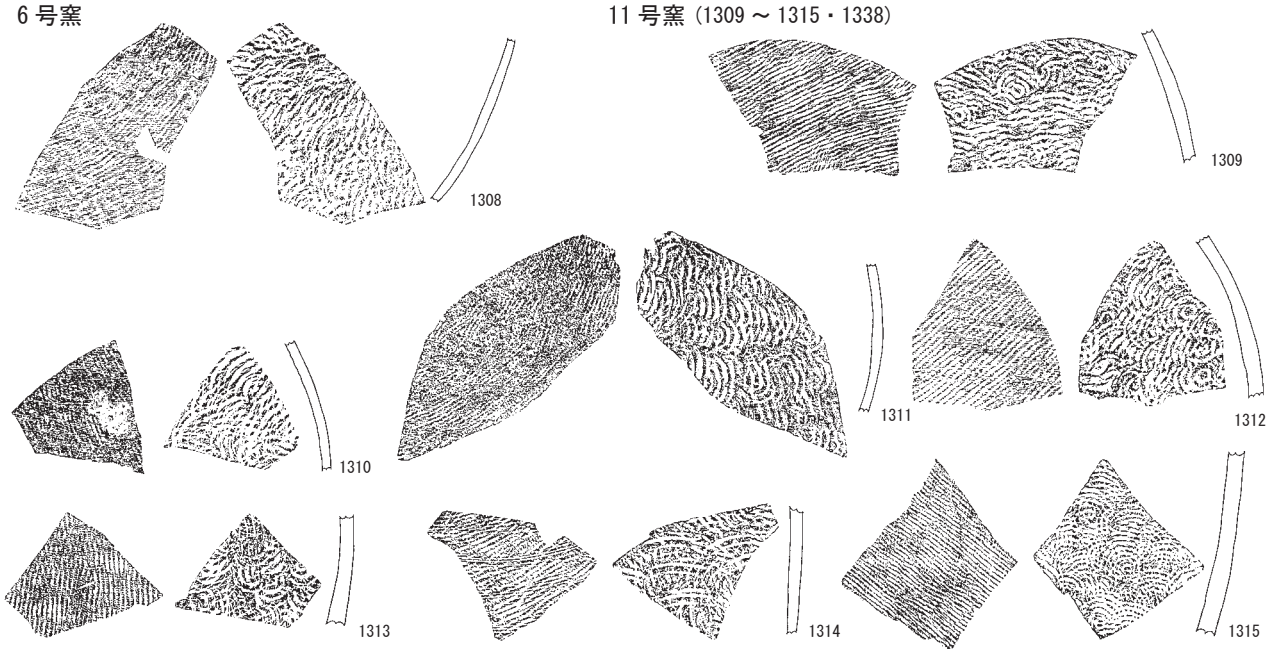
4号窯



第113図　甕類1（S=1/6）

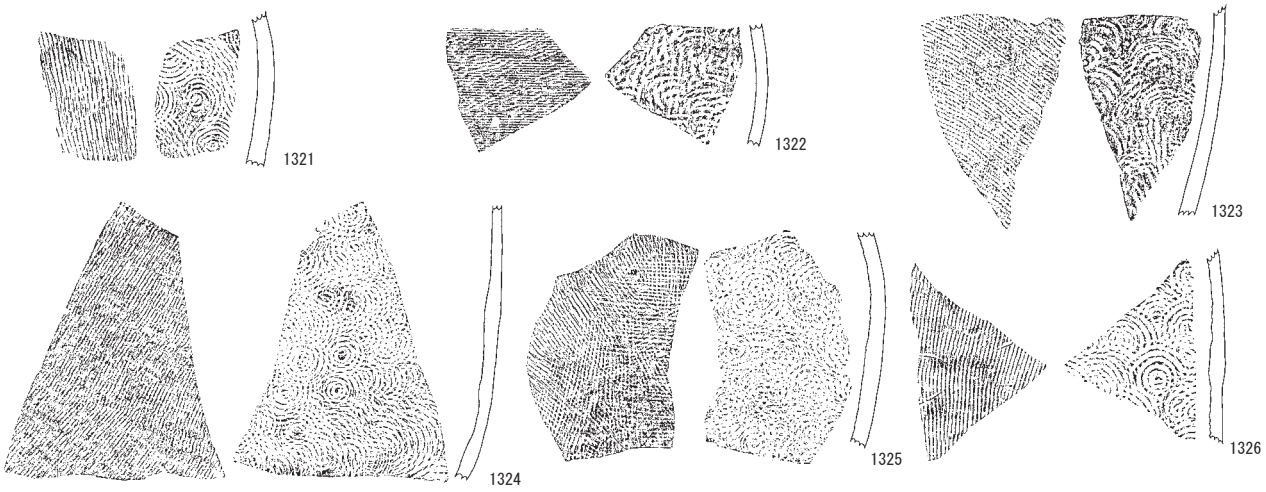
6 号窯

11 号窯（1309 ～ 1315・1338）

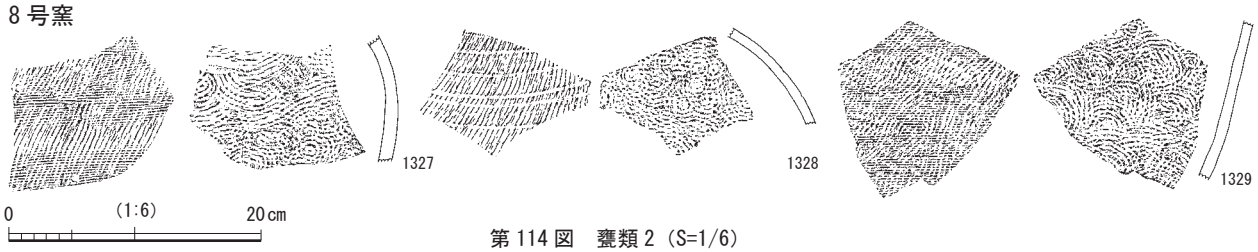


7-1 号窯

9 号窯（流込土）

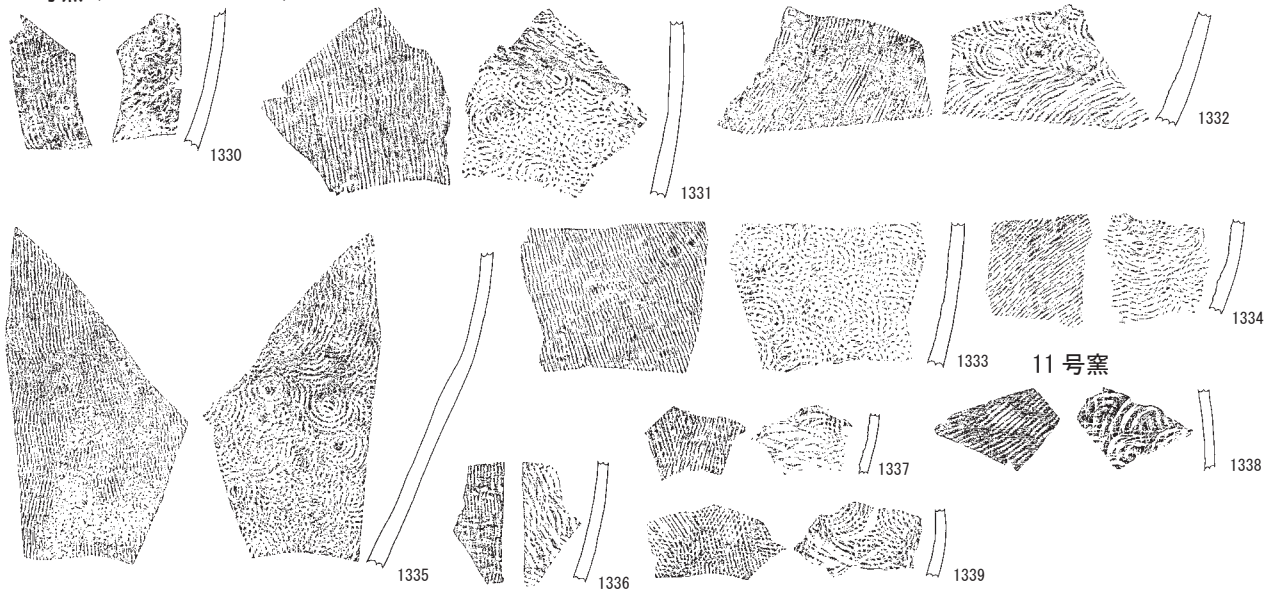


8 号窯

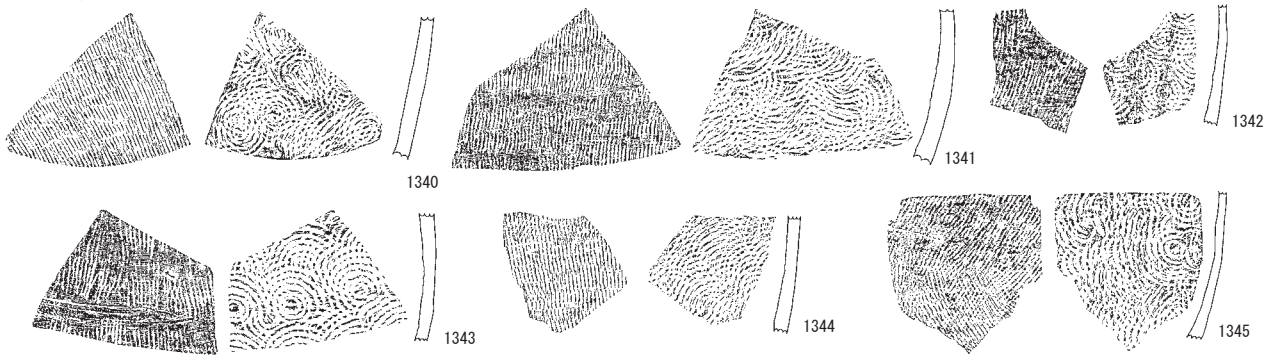


第 114 図　甕類 2（S=1/6）

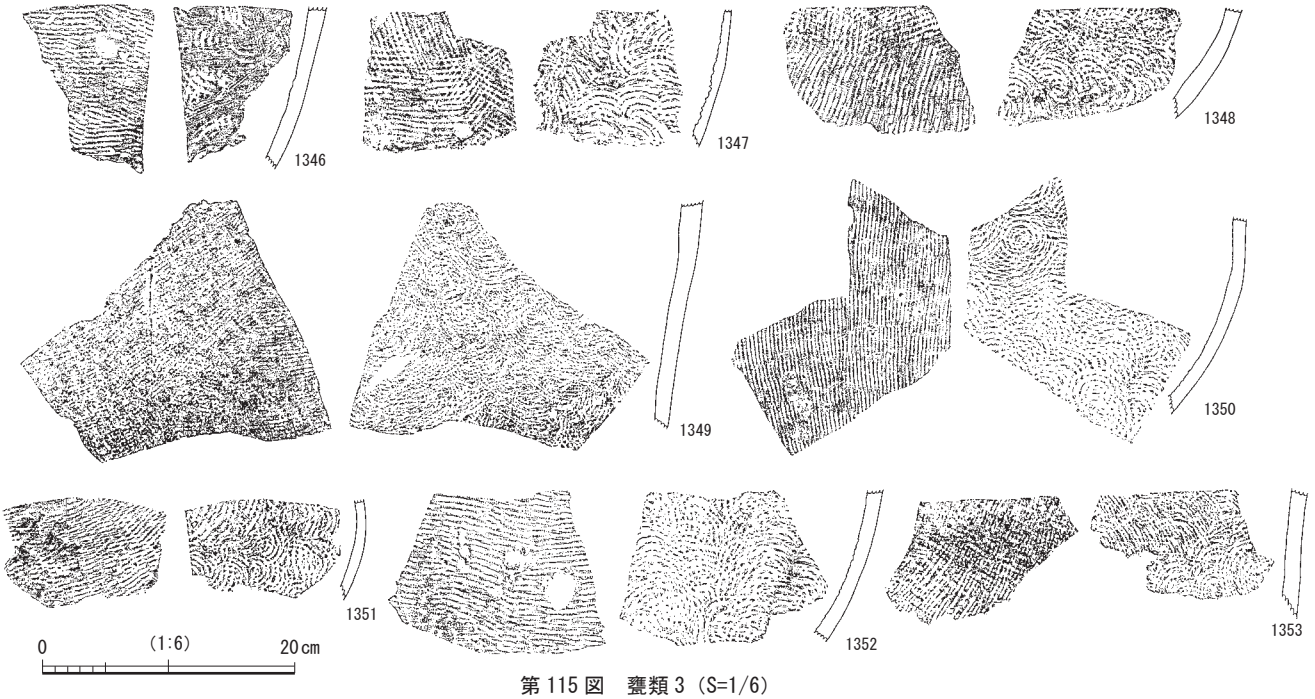
5 号窯（1330 ～ 1337・1339）



10 号窯



2 号窯



第 115 図　甕類 3（S=1/6）

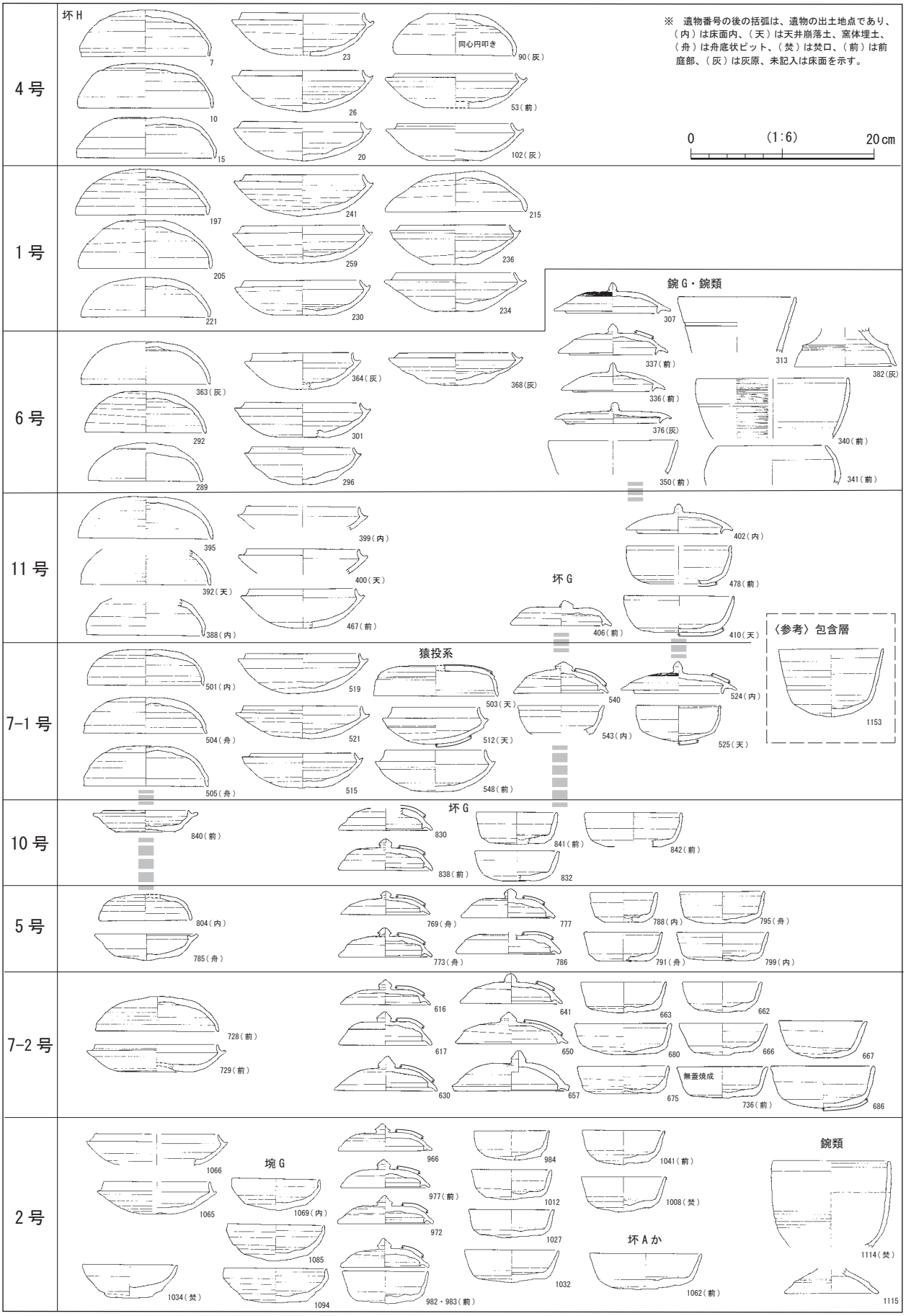
の多量の焼成失敗品が出土した窯もある。本来なら、各窯の操業段階を十分踏まえた変遷を示すべきであるが、窯を単位とした坏・埦類、高坏に主眼を置いて、変遷の様相を整理したい。

まず、第1節で述べた窯体・付属施設の切り合い関係から、6号窯から11号窯に、7-1号窯から7-2号窯に、7-1号窯から8号窯に、10号窯から5号窯に、それぞれ前後関係をもって操業が行われたことがわかる。また、出土遺物の接合関係から、4号窯から1号窯(第56図42横瓶)、11号窯から7-2号窯・2号窯(第109図平瓦様製品)という操業順序が復元できる。さらに、窯体の規模・プラン(第122図)から、①全長13m以上を測り、焼成部中央付近に最大幅をもつ大型・胴張りの窯で、窯尻に作業用と考えられる小規模な溝が付くタイプ(1・4号窯)、②全長約11.7mを測る寸胴形のタイプ(6号窯)、③全長10m前後を測る胴張り気味の窯で、窯尻に大がかりな溝が付くタイプ(7-1号窯・8号窯・11号窯)、④全長8m前後を測り、奥壁が直立して煙突状を呈する小型のタイプ(2号窯、5号窯、7-2号窯、10号窯)に大別でき、未焼成の3号窯は①のタイプに、9号窯は④のタイプに属する。これらに、出土遺物の様相を加えて、4号窯→1号窯→6号窯→11号窯→7-1号窯→8号窯→10号窯→5号窯→7-2号窯→2号窯という変遷過程案を考えた(第116～121図)。以下では、a期(1号窯、4号窯)、b期(6号窯)、c期(11号窯、7-1号窯)、d期(10号窯、5号窯)、e期(7-2号窯、2号窯)の5小期に分けて説明を行なう[4]。

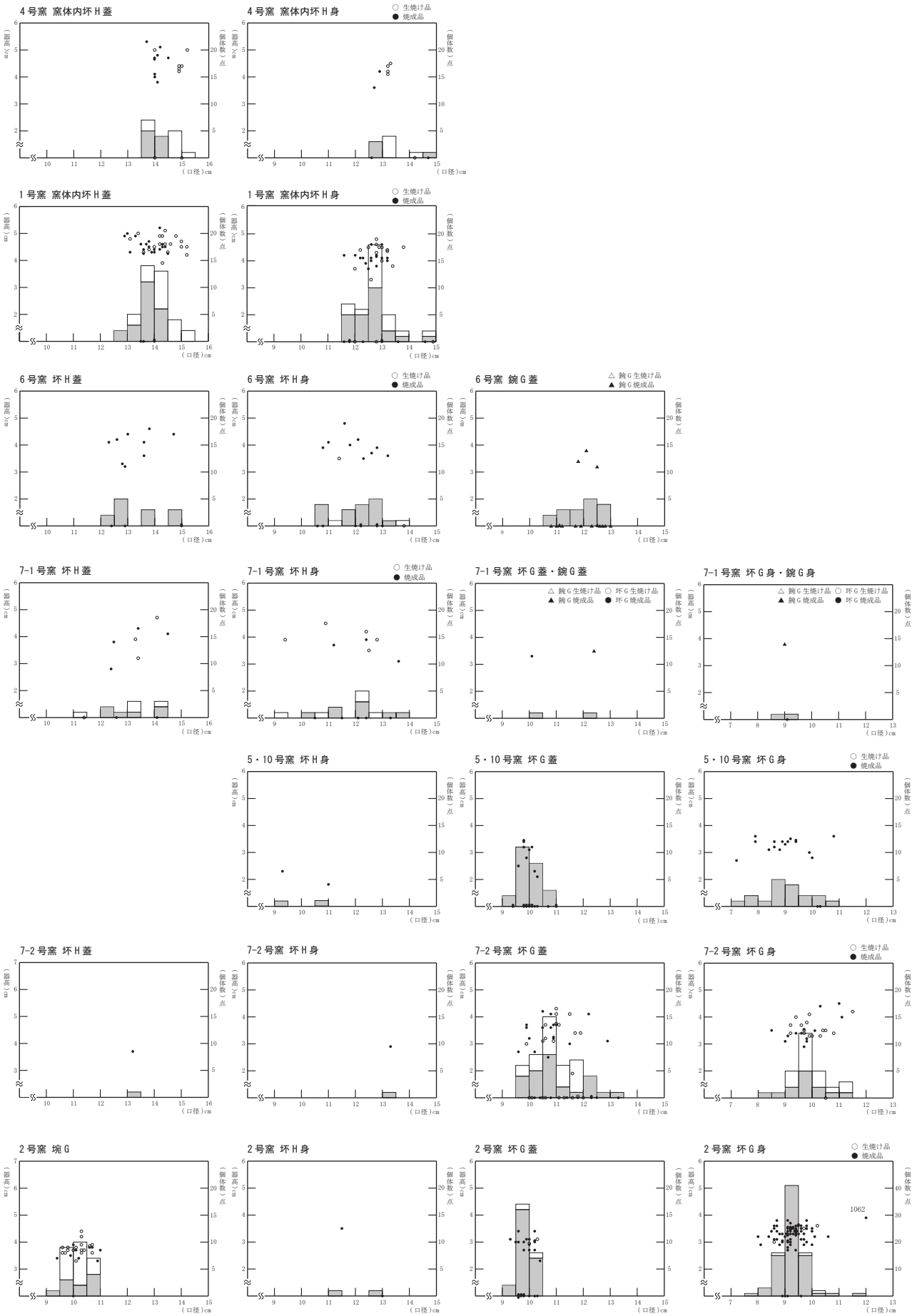
坏・埦類　坏H、金属器写しの鋺G(及び鋺類)、鋺Gに祖形をもつ坏G、無蓋の埦Gを対象とする。坏H、坏G、埦Gの成形・調整は、底部(蓋は天井部)の切り離し面を小さくするため、体下部にヘラ状工具を差し込んで斜め方向の回転ヘラ切りを行って、余分な粘土を削りとり、その後、底部に水平方向の回転ヘラ切りを施す、2工程の回転ヘラ切りが認められ、原則、坏G蓋以外は仕上げの回転ケズリ調整を行わない。

a期は、1法量の坏Hで構成される。底部(蓋は天井部)は、前述の2工程の回転ヘラ切りにより比較的狭く、丸みをもつ器形を主体に、体部(蓋は肩部)が直線的にのびる器形(第116図53・90等)が客体的に存在する。底部(蓋は天井部)外面の調整は、4号窯が周縁部に粗いナデ調整を施す程度であるのに対して、1号窯は中心部を含めた範囲に粗いナデ調整を施す。また、両窯とも底部外面にクシ状工具痕が残る個体が定量認められる。蓋は、4号窯は口縁基部で明瞭に屈曲する形態が主体で、中には口縁端部が小さく外反する個体もあるのに対して、1号窯では口縁端部が外反する個体は生焼け品を中心に明らかに減少傾向を示す。また、1号窯出土遺物(90)の天井部内面には、高坏A類と共通する同心円叩き痕が残る。身は、内傾する口縁部が反り立ち、受け基部下方に回転ナデ調整を加えるため、受け端部が小さく上方に折り曲がる形態が主体である。焼成良好品の法量[5]は、蓋は4号窯が口径13.6～14.6cm・器高3.7～5.3cm、1号窯が口径12.9～14.5cm・器高4.3～5.2cmに、また身は4号窯が口径12.2～13.0cm・器高3.6～4.2cm、1号窯が口径11.6～13.6cm・器高3.6～4.2cmに分布(第27表)、1号窯の口径が1cm程度小さい法量帯までを含む。

b期は、1法量の坏Hと、金属器写しの鋺G・鋺類で構成され、埦Gは未確認である。鋺G・鋺類は、口縁部計測法で約20%の比率(坏Hは同約47%)を示し、器種として確実に定着する。坏Hの成形・調整は、a期と基本的に同様であるが、2工程の回転ヘラ切り後、体下部～底部周縁部(蓋は肩部)にやや丁寧なナデ調整を加え、さらに底部(蓋は天井部)にクシ状工具を用いた仕上げナデを多用する。蓋は、a期で主体をなした口縁基部が明瞭に屈曲する個体は限られ、前述のナデ調整を加えることで、より丸みをもった器形を呈する。身は、蓋と連動した器形となり、口縁部が短く内傾し、受け部が体下部から連続する傾きを保持する形態が増える傾向を示す。法量は、蓋が口径12.3～13.8cm・14.7cm、器高3.1～4.6cmに、身が口径10.6～13.2cm、器高3.5～4.2cm・4.8cmに分布する。身で口径10cm後半台を測る個体が現れるように、a期よりも中心的な口径分布域が明らかに縮小する(第27表)。鋺Gは、第4項で



第116図 坏・椀類変遷図（S=1/6）



第27表　主要窯法量分布表

述べたとおり、身の深い金属器写しの鋺類を含めた蓋と身のセット関係に不明な部分を残す。定型的な器形を呈する蓋は、天井部外面に丁寧な回転ケズリ調整またはカキメ調整を施し、やや崩れた乳頭形または擬宝珠形の小振りな鈕を付す。法量は、口径10.8～13.0cm、返し径7.5～10.0cm、器高2.3～3.8cmを測る。

c期は、出土遺物が少ないものの、坏Hを主体に少量の鋺Gと坏Gで構成される段階である。また、7-1号窯で東海地方猿投系の器形・調整の特徴をもつ坏Hが数個体確認でき、主流の器形とならないものの直接的な技術移入をうかがうことができる。猿投系以外の坏Hの成形・調整は、b期と同様であり、7-1号窯でみる法量も、やや扁平とはなるがｂ期と同法量帯に分布する。鋺Gの様相もｂ期と同様と考えられる。身は、底部外面に丁寧な回転ケズリ調整を加え、数法量が確認できる。新たに出現する坏Gは、11号窯は前庭部出土品(406)等に限られ、7-1号窯でも坏Hに比して、かなり低い量比であった可能性が高い。

ｄ期の坏・埦類は、斉一性の高い坏Gを主体とした構成に大きく転換し、法量を含めて坏Gを模した少量の坏Hが残存、鋺Gは未確認となる。坏Gの量比は、参考値とはなるが5号窯(灰原除く)の口縁部計測法で約87％と極めて高い比率を示す。坏Gの蓋は、天井部～肩部外面の広い範囲に比較的丁寧な回転ケズリ調整を施すことで、丸みをもった器形に仕上げ、背の高い鈕を付す。身は、外面が2工程の回転ヘラ切りに伴い体下部で明瞭に屈曲する。また、内面の体部と底部との境に強い回転ナデ調整を加えることで、体部が直立した箱形器形をつくりだす。底部外面は粗いナデ調整を加える程度で、中心部等に回転ヘラ切り痕をほぼ残す。5号窯の法量で、蓋が口径9.4～10cm強・11cm弱、器高2.5～3.5cmに、身が口径7.2～9.9cm・10.8cm、器高2.7～3.6cmにそれぞれ分布し、基本的に1法量と考えられる。客体に転じた坏Hは、坏Gの蓋身を逆転したような器形を呈し、蓋天井部～肩部の屈曲や、身底部外面がナデ調整にとどまること等から、坏G身と区別可能である。法量帯は、坏Gと重複し、ｃ期に比して大きく縮小する。有蓋焼成を原則としつつも、5号窯床面出土の坏G身で、身同士の重ね焼きが確認できる(図版第50)。

e期は、ｄ期に引き続いて坏Gを主体とし、2号窯で新たに無蓋の埦Gが加わる。ｄ期に残存した小型の坏Hは未確認となる。なお、7-2号窯前庭部出土の坏H(728・729等)、2号窯窯体床面出土の坏H(1065・66)といった、口径11cmを超える坏Hが器種組成に加わる可能性は、出土量の面からも低いと考えられる。坏Gの成形・調整は基本的にｄ期と同様であるが、7-2号窯で蓋の天井部外面に手持ちケズリやナデ調整を行う個体(618・629・639等)や、器形・胎土から別系譜と考えられる個体(657・686等)が少量確認できる。斉一性の高いｄ期とは異なり、製作単位の「個性」や「クセ」が顕在化した印象を受ける。身は、ｄ期に比して内面の体部と底部との境に施す回転ナデ調整が弱くなり、2号窯では箱形・扁平な器形より体部が外傾した器形が主体となる。焼成良好品の蓋の法量は、7-2号窯が口径9.1～11.5cm・12cm台、器高2.9～4.2cmに、2号窯が口径9.5～10.4cm、器高2.3～3.4cmに、身の法量は7-2号窯が口径8.5～10.5cm・11cm台、器高3.3～4.2cmに、2号窯が口径8.0～10.6cm、器高2.7～3.7cmに、それぞれ分布する。窯毎に現れ方に差をもつが、口径分布の中心域はｄ期より大きくなる。また、7-2号窯出土の736(正位・無蓋焼成)や、2号窯出土の1062(有蓋、口径12.0cm) は、後につながる別器種(坏A)の可能性をもつ。2号窯で加わる無蓋の埦Gは、口縁部計測法で約27％の量比を示す(坏Gは約62％)。器形は、丸みをもって外傾する体部が中程で屈曲、直立または内湾気味の口縁部に至り、口縁端部が小さく外反する。成形・調整は坏Gと同様であり、口径9.4～11.0cm、器高3.3～4.4cmを測る。なお、有台器種となる金属器写しの坏Bは確認できない。

高坏　器形からA～E類に分け、A類が有蓋長脚・3方2段透かし、B類が無蓋長脚・2段透かし、C類が無

蓋低脚・無透かし、D類がB類の縮小化した器形、E類が無蓋埦形長脚・無透かしとなる(第117図)。伝統的な器形であるA類がｄ期まで、D類がe期(B類はc期)まで存続し、ｄ期に定着するC・E類と併存する。この伝統的な器形をもつA・D(・B)類の残存状況は、古墳への供献等の非日常的需要を如実に反映したものと考えられる。

a期は、A類・B類で構成され、4号窯の口縁部計測法で約2対1の量比を示す。また、A類が蓋を被せたセットを倒位で焼成するのに対して、B類は正位での焼成と、両類はｃ期まで厳格に焼き方を区分ける。A類は、蓋天井部または身坏部内面に同心円叩き痕を残す個体が多い。蓋は、扁平な鈕が付く器形を基本に、1号窯で無鈕の個体(268)が出土した。肩部の稜表現は4号窯より1号窯が丁寧で、法量は口径15～16cm・器高5cm台を測る。身は、内傾する口縁部をもつ坏部を丸く仕上げ、口径13～15cm台、器高18cm前後、脚端径14～18cm台を測る。脚部の装飾は、沈線と幅の狭い3方2段透かしを施し、4号窯では上段の透かしが内面に貫通していないもので占められる。B類は、外傾する坏部外面に2段の鋭い稜を表現し、脚部の装飾は4号窯が3方透かし、1号窯が2方透かしと、ｂ期以降につながる区分けが始まる。法量は、4号窯が口径13cm弱～15cm台、脚端径11～12cm台に、1号窯が口径13cm強、脚端径11～12cm台を測る。なお、灰原出土の高坏C類(125)は、胎土等から他窯焼成品と考える。

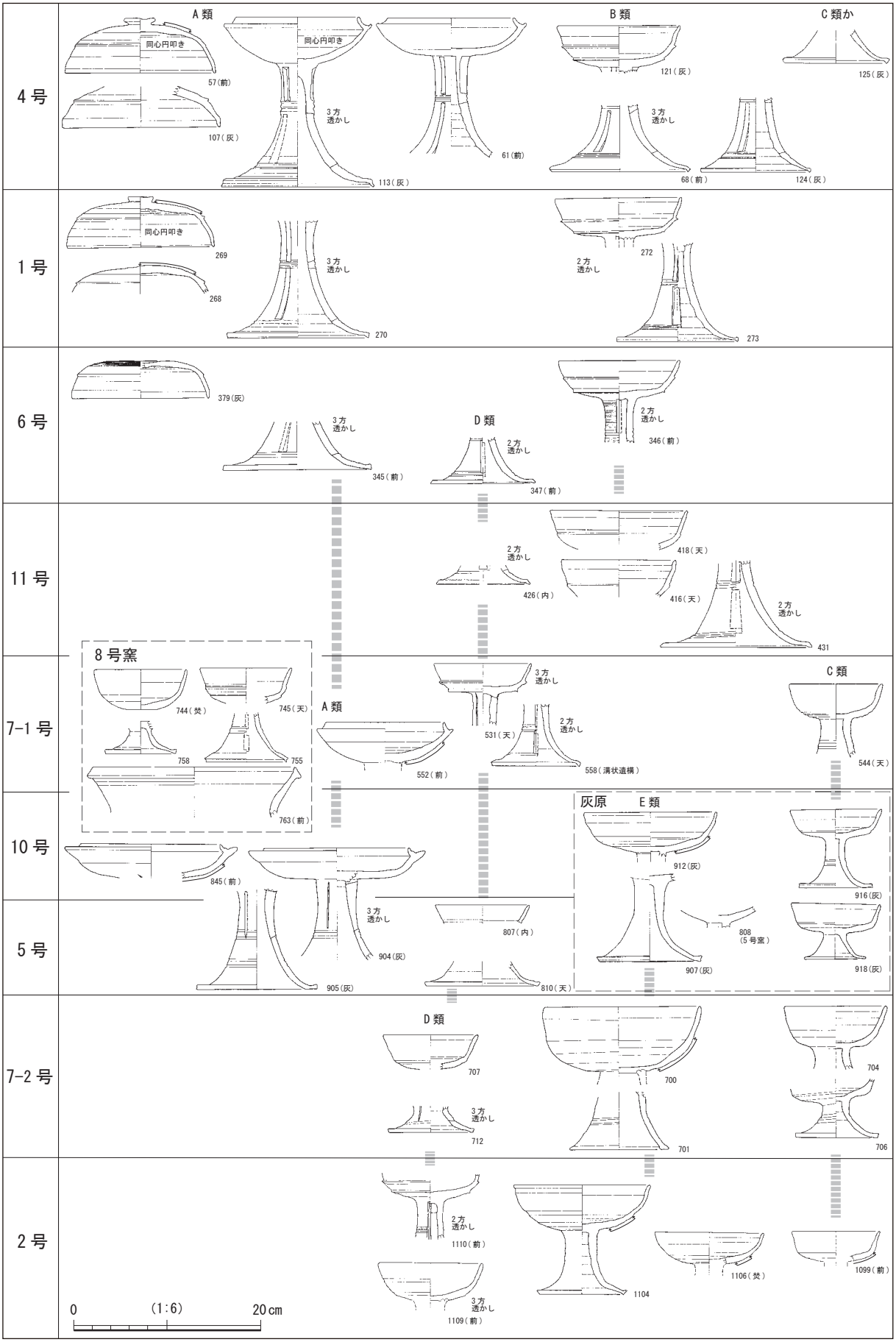
ｂ期は、A類、B類に加え、B類が縮小化した器形をもつD類が出現する。脚部の装飾は1号窯の様相を継承し、A類が3方2段透かし、B類・D類が2方2段透かしである。A類の蓋(379)は灰原出土であり、無鈕でカキメ調整を施す。脚部(345)は脚端径15.6cmを測る。B類(346)は口径12.8cmを測り、脚部にカキメ調整を施す。D類(347)は脚端径11.0cmを測り、沈線と透かしでしっかりと加飾する。

c期は、11号窯がｂ期と同様のB類・D類(及びA類)の組成が想定できるのに対して、7-1号窯ではA類・C類・D類の組成に変わる。11号窯のB類坏部は口径12・14cm台を測る。坏部の稜表現は簡素化し、条数も1条にとどまる。B類(431)が脚端径16.2cm、D類(426)が同13.3cmを測り、ともに倒位で焼成する。7-1号窯のA類(552)は口径12.6cmを測り、坏部外面に回転ケズリ調整を施す。D類は、ｂ期にみられた坏部の稜表現や脚部の装飾を堅持するものの、531が3方透かし、558が2方透かしと、透かし数の厳格性は低下する。531が口径10.3cm、558が脚端径9.2cmを測る。C類は埦形に近く、脚部を沈線で飾る。

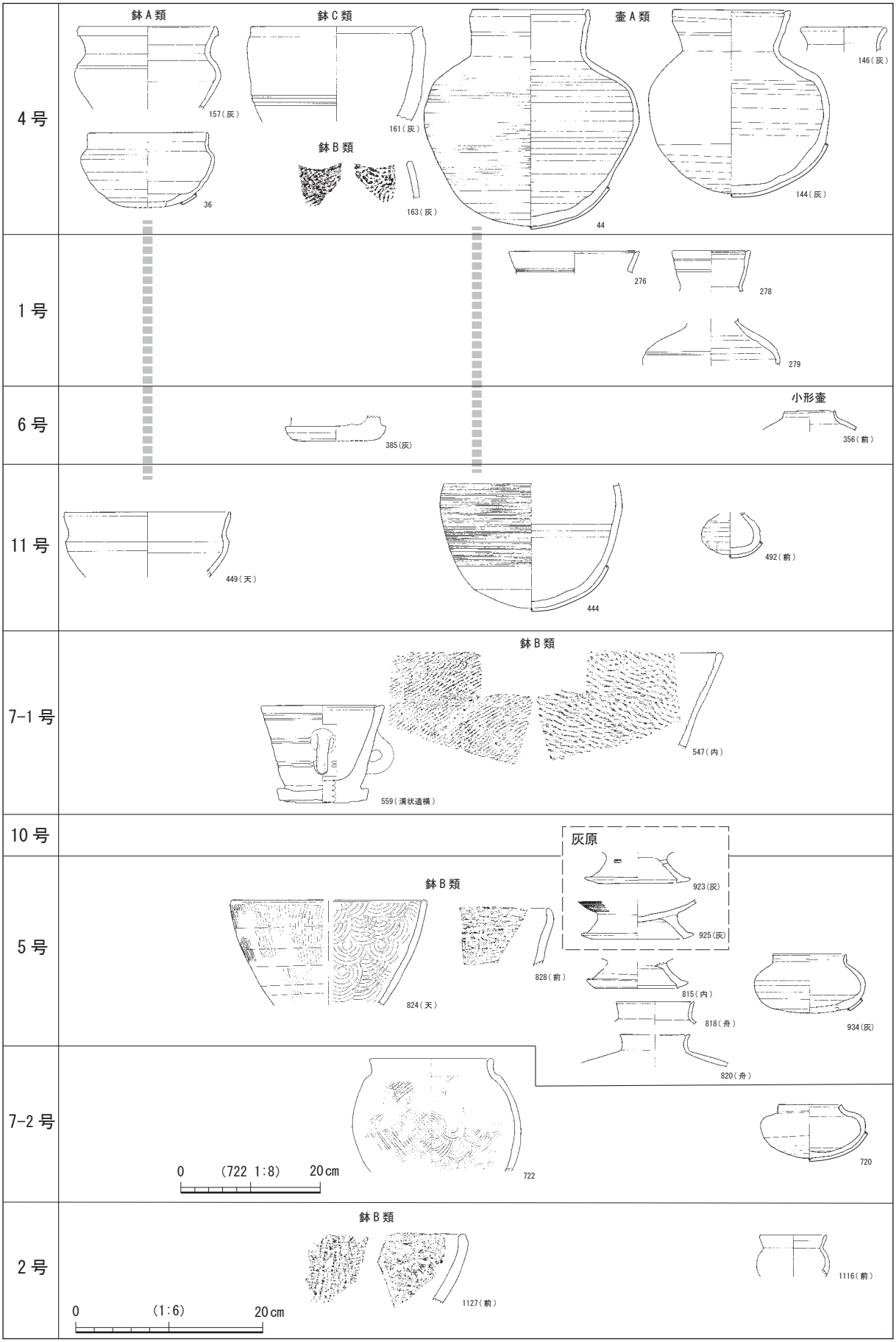
ｄ期は、A類・D類に加え、C類が定着、新たにE類が加わる。有蓋のA類は、坏部の口径が15cm台に拡大し、脚の3方透かしを上段のみに線刻様に施す等、別類ともいえる器形に変わる。また、A類坏部のみの器種も確認できる(第121図523)。D類は、5号窯から小片が出土したにとどまる。C類は器種として定着、箱形を呈する坏部下端と脚部を沈線で加飾する。新たに出現したE類は、内湾しながら外傾する体部下半に回転ケズリ調整を施し、長い脚を付ける。口径は13～14cm台、脚高約8cm、脚端径約11cmを測る。

e期は、C～E類が確認でき、A類は欠落する。D類は、坏部がE類に近い器形を呈し、坏部の2条の稜を沈線で表現すること(第117図1109)や、脚部の透かしを線刻様の1段とすること(1110)等、装飾の簡略化が進む。また、脚部の透かし数は、1110が2方、712・1109が3方と、c期の様相を継続する。C・E類は確実に定着、E類は大型埦とした700を含めると、口径約12・14・16cm台の3法量が確認できる。

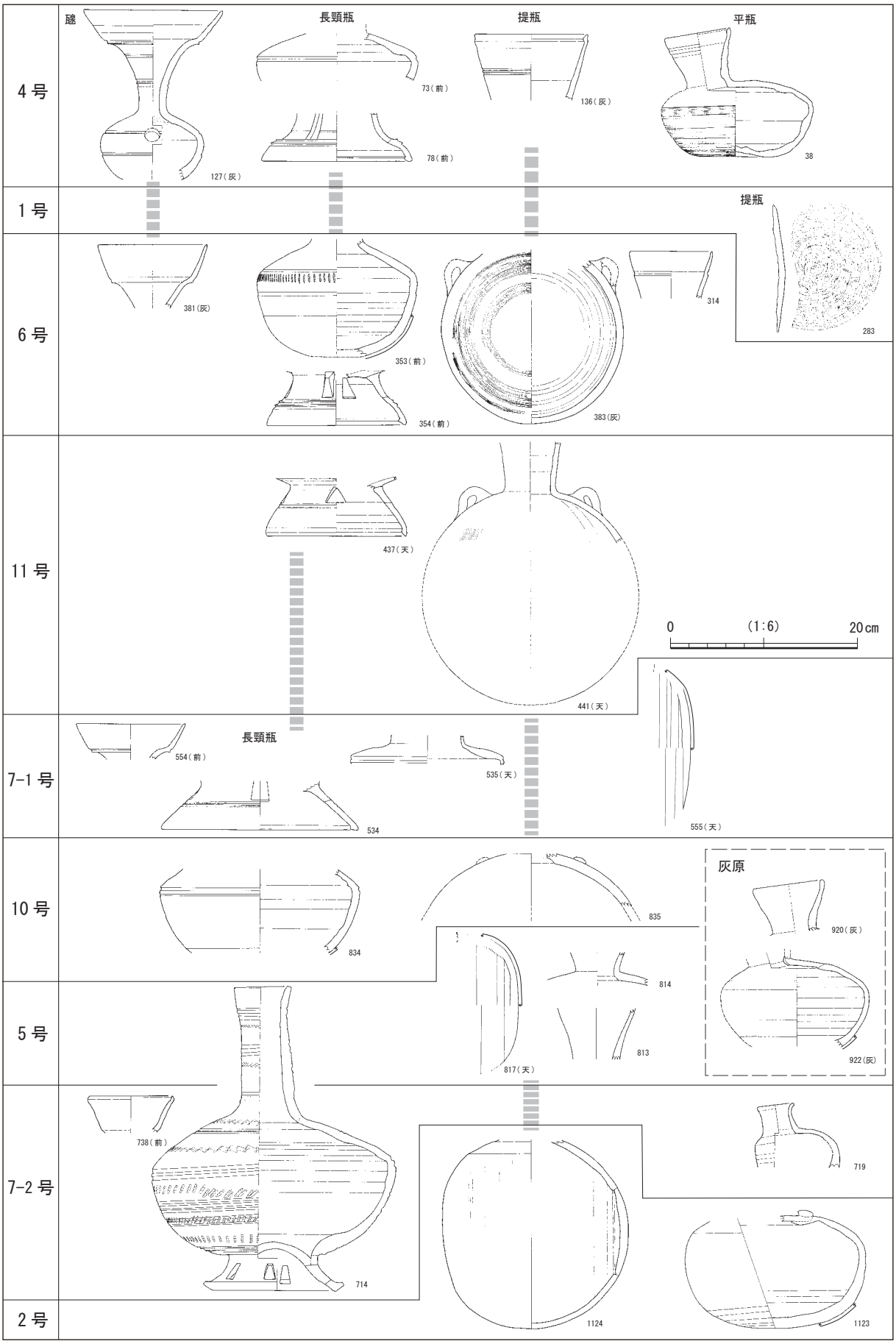
焼成方法等　自然石や窯壁片、坏H、瓶・甕胴部片転用の焼き台(置き台)利用がみられる中、ｄ期の5・10号窯灰原から第121図877、e期の2号窯から同図1096・97といった、坏・埦類の底部を穿孔した専用焼き台が出土するが、量産した状況にはない。また、焼成品の焼きあがりは、a～ｃ期が淡灰オリーブ～緑灰色の自然釉が顕著に溶着し、灰白～淡灰色または灰～暗灰色に発色した個体が多い。e期以降は、器面に火だすき痕や黒化が残る程度のくすぶった淡灰～灰色に発色する焼成品に転ずる。窯体の小型化(第122図)で端的に表れる、焼成方法の大きな転換が想定できる。製作単位については、7-2



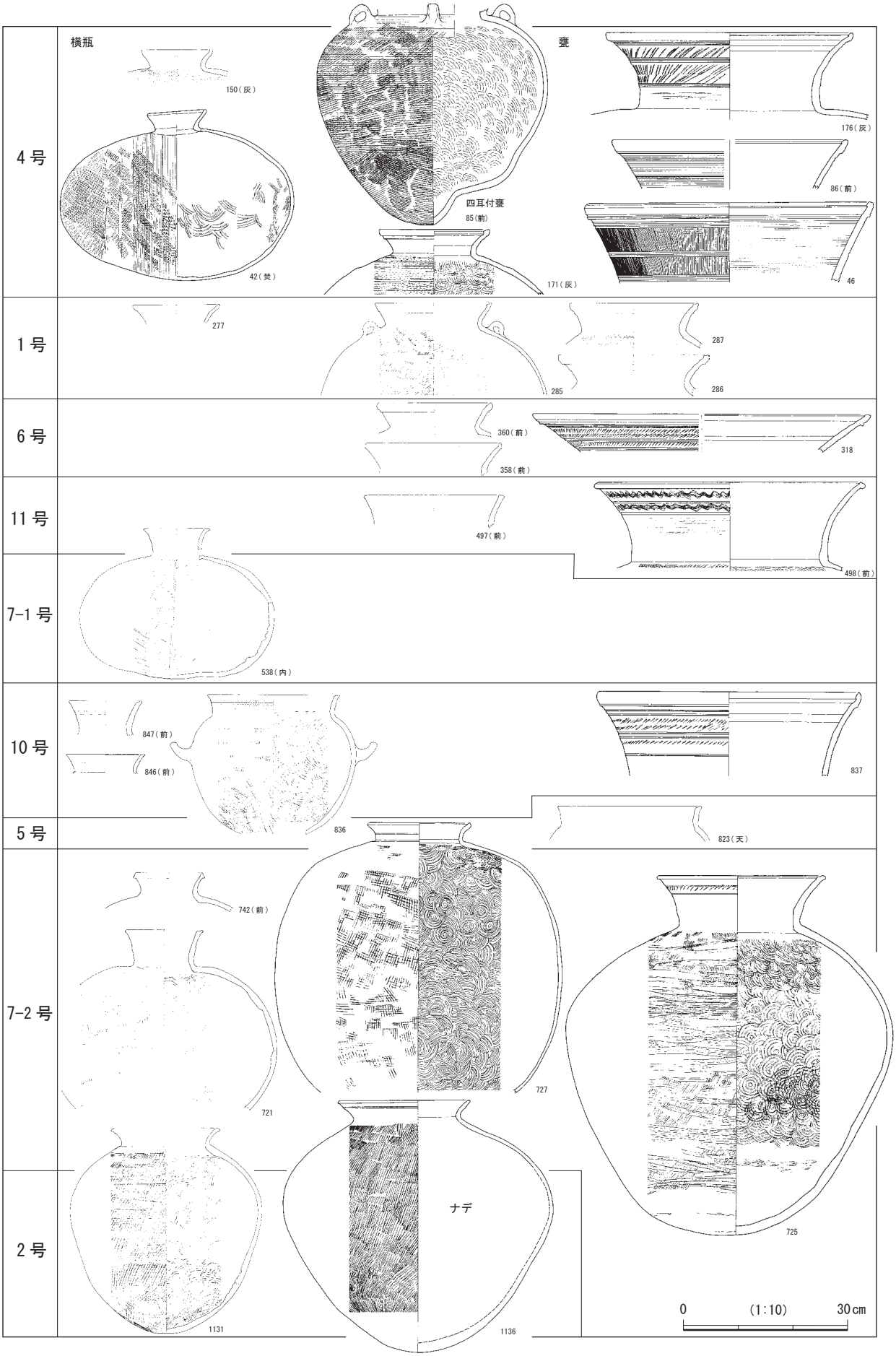
第117図　高坏変遷図(S=1/6)



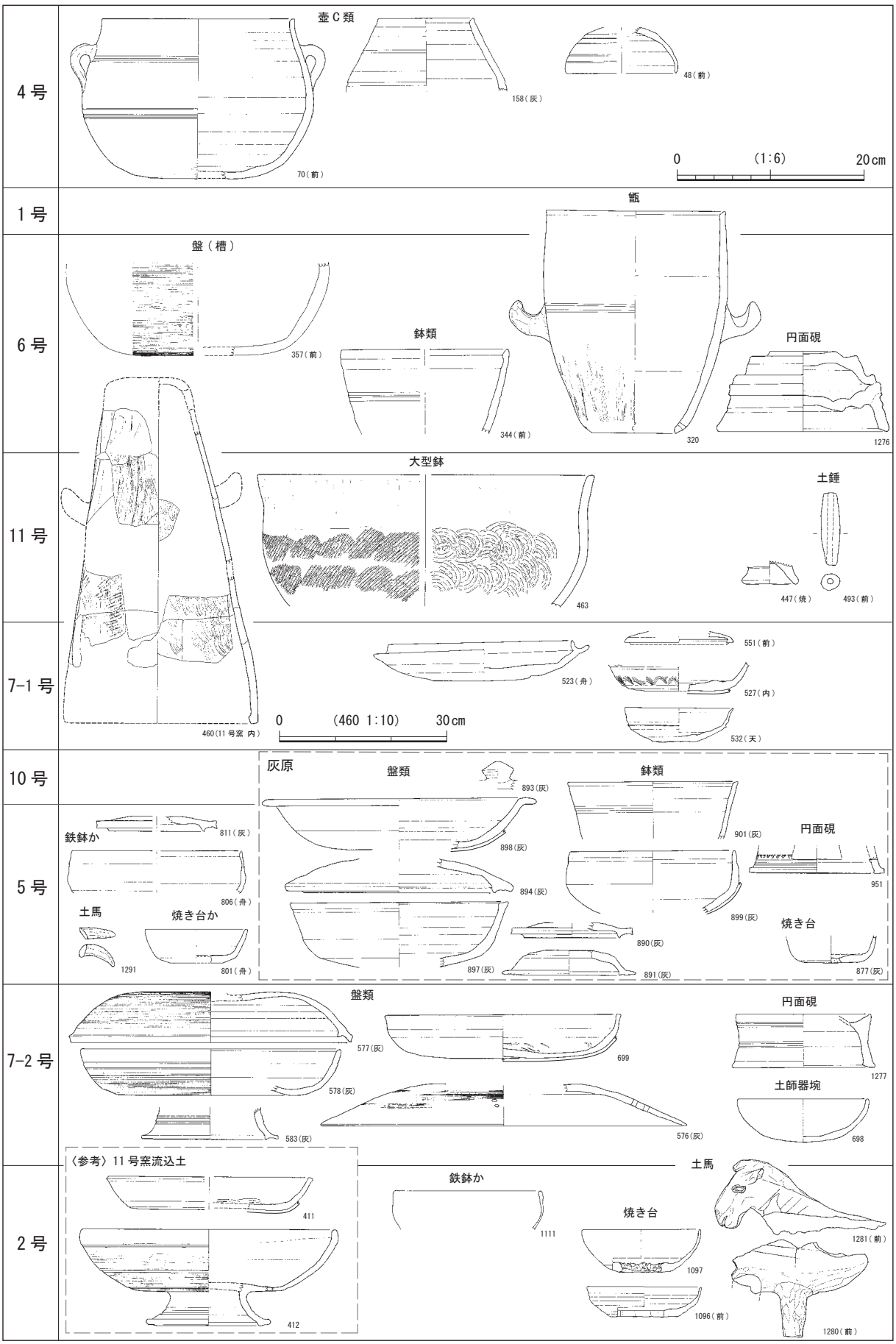
第118図　鉢・壺類変遷図(S=1/6・1/8)



第 119 図　瓶類変遷図 (S=1/6)



第120図　横瓶・甕変遷図(S=1/10)



第121図　盤類他変遷図(S=1/6・1/10)

号窯、2号窯の窯体内焼成品に、貯蔵具を中心に橙色に発色する焼成品群があり、器形等からも複数の製作単位が確認できる(後述)。

小結　田嶋明人氏をはじめとする北野博司・木立雅朗・望月精司各氏が、窯跡群、窯構造や土師器を含めた食器組成を基に示された北陸地方の須恵器生産の研究成果[6]との対比の中で、a～d期の位置付けを考えたい。田嶋氏による土器編年(以下、田嶋氏編年)によれば、古代Ⅰ期の須恵器は器種組成に金属器写しや、平瓶等の新器種の出現を指標とし、坏G出現の前後でⅠ$_1$期・Ⅰ$_2$期に、さらにⅠ$_1$期を精製品である鋺G・鋺類出現の前後で古相、新相に細別する。古代Ⅱ期の始まりは、坏A・B、埦Gの出現を指標の柱とし、坏A・坏Bの定着以前をⅡ$_1$期、数法量よりなる坏A・坏Bの定着以後をⅡ$_2$期、坏Aの無蓋化・坏Bの内面返しの消失を指標にⅡ$_3$期を設定する[7]。

a期(4・1号窯)は、坏Hを中心とした斉一性の高い器形をもつ高坏A類・B類、鉢A類・C類、壷A類、瓶類(瑳、長頸瓶、提瓶、横瓶)、甕に、新たに少量の平瓶や四耳付甕、金属器写しの壷Gが加わる組成で、鋺G・鋺類は未確認である。坏Hは、底部(蓋は天井部)を2工程の回転ヘラ切りで切り幅を狭くし、底部外面(蓋は天井部)調整が粗いナデ(一部クシ状工具によるナデ)にとどまる点に特徴をもち、回転ヘラ切り後に回転ケズリ調整を行う個体や、蓋口縁端部に平坦面をもつ個体は確認できない。また、貯蔵具では鉢A類や壷A類、提瓶を定量焼成する一方、壷Gは窯体内から出土しておらず、一過的な少量焼成との印象が強い。口径40cm以上の大型の甕は、長くのびる口縁部外面を刺突文、ハケ、カキメ、沈線等の多様な技法で加飾する。4・1号窯の坏H類の様相は、坏Hに回転ケズリ調整を施す小松市二ッ梨10-A号窯より後出し、加賀市分校3号窯第2次焼成品(第121図、第28表)と類似、田嶋氏編年Ⅰ$_1$期古相に位置付けられる。

b期(6号窯)は、坏H、高坏A類・B類、鉢C類、瓶類(瑳、長頸瓶、提瓶、横瓶)、甕に、新たに金属器写しの鋺G及び身の深い鋺類、高坏B類が縮小化した高坏D類が加わる組成となり、第121図の大型盤、有溝把手をもつ甑、鉢類、円面硯が少量確認できる。坏Hを主体に、定型的な器形をもつ鋺Gが確実に組成に加わる一方、伝統的な器種である高坏A類、鉢A類、壷A類は量比を減じるようだ。坏Hは、2工程の回転ヘラ切り後にやや丁寧な回転ナデ(及びクシ状工具による仕上げナデ)を多用することで、a期より丸い器形を呈する。法量は、身の口径で10cm後半代を測る個体が確認できる等、a期よりも中心的な口径分布域が明らかに縮小する。また、高坏B類・D類は、c期につながる2方透かしの装飾を維持する。b期の様相は、田嶋氏編年Ⅰ$_1$期新相に位置付けられ、小松市戸津六字ヶ丘2号窯(第121図、第28表)と類似する。戸津六字ヶ丘2号窯との比較でいえば、6号窯の坏Hの口縁部の法量帯が、より縮小化した状況を示す他、鋺Gの鈕形態が異なり、興味深い。なお、第122図のとおり、窯体の規模・プランは大きな転換をみせる。

c期(11・7-1号窯)は、坏Gの出現や窯体規模・プランを重視した小期設定であり、器種組成は過渡的な様相を示す。両窯で坏H、坏G、鋺G、高坏(A・)D類、長頸瓶、提瓶、横瓶、甕が出土する他、古相に位置付けた11号窯で高坏B類、鉢A類、壷A類、叩き成形した大型の鉢・用途不明品(第121図)が、また、新相に位置付けた7-1号窯で猿投系の器形をもつ坏H、高坏C類(A類は変形か)、波状文を施した埦(527)が、それぞれ確認できる。本小期内に、畿内との関係をみいだせる陶棺(第110・111図)も、いずれかの窯で焼成する。主体をなす坏Hは、やや扁平となるものの、法量帯はb期と重複し、明確な口径の縮小化をみいだせない。鋺Gの様相もb期と同様であり、数法量が存在する。新たに出現する坏Gは、11号窯は窯体内から出土しておらず、7-1号窯でも坏Hに比して、かなり低い量比であった可能性が高い。なお、7-1号窯に後続すると考えられる8号窯で、小・中型甕に、口縁端部を断面三角形状に仕上げる形態が出現する。

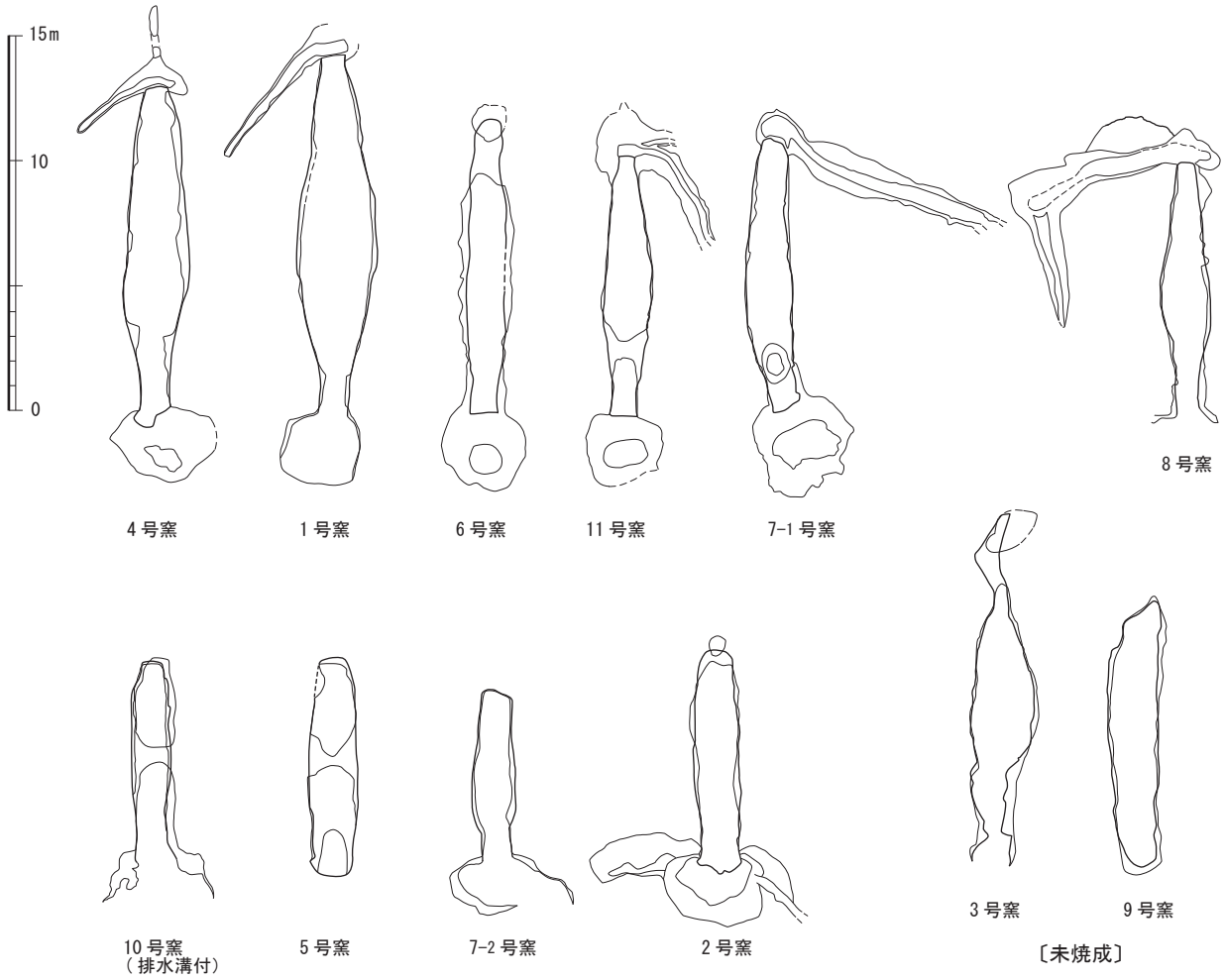
本小期の特徴を整理すれば、①ｂ期の坏H、鋺Gの様相が継続すること、②少量の坏G生産の開始、③7-1号窯で伝統的器種（高坏B類、鉢A類、壷A類）の払拭、④大型品生産や猿投系坏Hにみられる一過的・多元的な他地域からの技術移入となる。ここでは、窯体規模・プラン及び坏Gの出土を重視し、田嶋氏編年Ⅰ$_2$期の最古相に位置付けるが、新しい焼成技術（窯構造）と器種の移入が波状的で時間差をもつとの理解も可能であり、その場合は、11号窯はｂ期（田嶋氏編年Ⅰ$_1$期）に属することとなる。資料の増加を待ちたい。

ｄ期（10・5号窯）は、灰原資料を加味すれば器種組成上の大きな画期となり、窯体構造も一変する。器種組成は、坏Hから坏Gに主体が完全に移行、急激に矮小化した坏H、高坏A類・C～E類、瓶類（長頸瓶、提瓶、平瓶、横瓶）、甕の他、第118・121図で示した金属器写しの鉄鉢や大型の各種盤類・鉢・壷類を多種少量生産する。一方、鋺Gが完全に欠落し、矮小化した坏Hは坏Gの1割以下にまで量比を減じる。坏Hの器形は、坏G蓋身を反転したものに転換、法量帯も坏Gと重複する。坏Gは、斉一性をもつ箱形の器形が主体をなし、基本的に1法量と考えられる。5号窯で、蓋が口径9.4～11cm弱、器高2.5～3.5cmに、身が口径7.2～10.8cm、器高2.7～3.6cmに分布する。高坏は、A類の器形が変容、C類が定着するとともに、新たに埦形の坏部を特徴とするE類が加わる。大型の甕は、主に長くのびる口縁部外面を主に波状文・沈線で加飾し、斜行刺突文と沈線を組み合わせた加飾は減少するようだ。また、専用焼き台が少量確認できる。ｄ期の坏Gを中心とした器種組成は、田嶋氏編年Ⅰ$_2$期に位置付けられる。

e期（7-2・2号窯）は、組成から坏Hが欠落、ｄ期から続き坏Gを主体とし、2号窯で新たに無蓋の埦Gが客体的に加わる。他の器種では、高坏C～E類、瓶類（瓻、提瓶、平瓶、横瓶）、甕が確認できる他、7-2号窯で叩き成形の短頸壷（722）、大型長頸瓶（714）、ｄ期と異なる器形の大型盤類（第121図）、平瓦様製品（第109図）が、また、2号窯で鉄鉢、専用焼き台、土馬（第121図）が、それぞれ出土した。坏Gは、箱形の器形が減り、体部が外傾して身の深い器形が増加する。焼成良好品の法量は、口径9～10cm台、器高2cm台後半～4cm前後に分布、窯毎に現れ方に差を示すが、口径分布の中心域はｄ期より大きくなる。坏Gとした個体の中には、無蓋・正位で焼成の身（736）や、口径12cm台の身（1062）が確認でき、坏Aが出現している可能性をもつ。無蓋の埦Gは、口縁部計測法で約27％の量比を示し、成形・調整は坏Gと同様である。e期は、金属器写しの坏Bを欠落し、田嶋氏編年Ⅱ$_1$期（古相か）に位置付けられる。また、e期に後続する窯（同Ⅱ$_2$期）には、小松市戸津六字ヶ丘4号窯、辰口町湯屋B-1号窯があり、法量分化した坏A、坏Bが定着する。

また、e期の特徴として、窯体内床面に残された遺物に、酸化焼成にとどまり橙色に発色する焼成品群の存在があげられる。7-2号窯では坏G蓋（654～658等）、底部外面に回転ケズリ調整を加える坏G身（681・686等）、高坏C・E群（700～705、708～711）、短頸壷、大型長頸瓶、球胴の横瓶（721）が、また、2号窯では鋺類（1114・15）、平瓶（1119～22）、提瓶（1124）、横瓶（1125・26）、甕（1132～37）が確認できる。いずれも特定器種に限られ、灰色の色調をもつ焼成品群とは器形の細部や調整方法が異なる。特に2号窯の甕は、灰色の色調を呈し胴部叩き成形痕を残す一群（1130・31）に対して、橙色に発色する一群（1132～37）は胴部内面の同心円痕をナデ消しており、猿投系の強い影響がうかがわれる。ｃ期の坏Hにみられた猿投系の影響が一過的であるのに対して、継続性の強い関与を示唆するものである。さらにいえば、7-2号窯には坏G蓋の天井部外面に手持ちケズリやナデ調整を行う個体（618・629・639等）があり、斉一性をもつｄ期に比して製作単位の「個性」が顕在化した印象を強く受け、ｄ期の生産体制が再編された可能性をもつ。

最後に、那谷金比羅山窯跡群が操業を行った時期は、古墳時代後期からの器種の残存と、金属器指向の新器種の受容が、器種交替と地域差を伴いながら並行的に進む時期であり、本窯跡群の様相は畿内



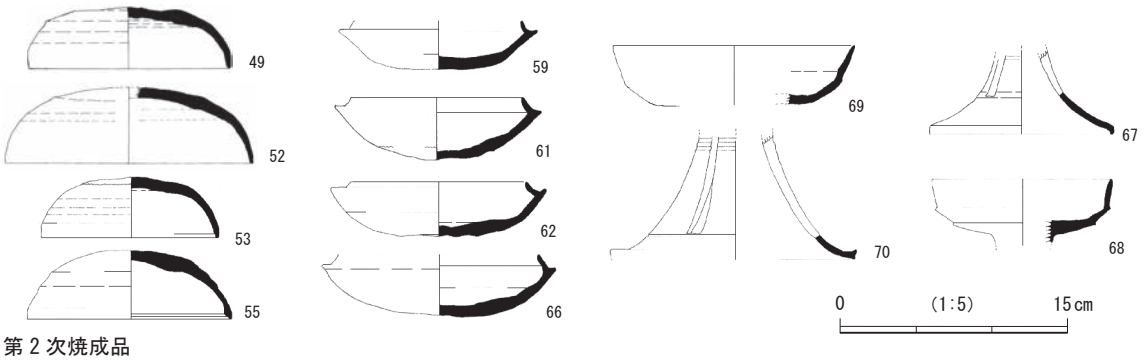
第 122 図　窯体規模･プラン模式図 (S=1/300)

の動きとスムーズに連動した窯跡群と評価されることが多い。その様子は、a期（壷G）、b期（鋺類）、d期（陶棺等の大型製品、盤･鉢･壷類）、e期（盤類）といった金属器写しの器種や大型製品を、波状的･一過的に移入することに端的に現れ、またc期･d期には東海地方猿投系窯からの技術移入もみられる。

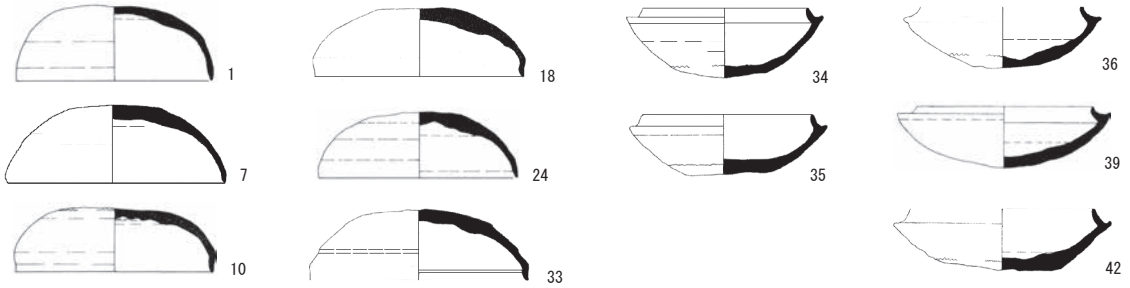
一方、坏･埦類は、c期まで坏Hが組成の主体を占め、口径の縮小化に関しても比較的鈍い動きを示す。また、古墳時代後期以降の壷A類が早い段階で衰退するのに対して、高坏A類･B類（･D類）や脚付長頸瓶、提瓶といった特定器種は比較的長く生産され、在地の需要に根差した動きをみせるる。器種構成（及び窯構造）が大きく転換する画期は、d期（田嶋氏編年I_1期）にみいだせ、坏･埦類はd･e期が連続性の強い展開をみせる。これらの動きを同時期に近隣で操業した他窯跡との相互関係の中でどう位置付けるかが、本窯跡群の評価にとって大きな課題といえる。また、10基の窯の操業に比して、少ない遺物出土量（整理箱で約90箱）も気になるところであり、c期からd期への移行にも係り、中核的な須恵器生産窯単位として、常に連続的な生産を行っていたか、それを担保する基盤を維持しえたどうかも検討の一つと考える。さらに、灰原資料を含めた各窯の操業段階を踏まえた詳細な整理や甕叩き原体の検討、c期の設定の是非等、十分整理･検討できなかった課題も多く残っている。今後とも、検討･修正を加え続ける必要性を強調して、小結としたい。

分校３号窯

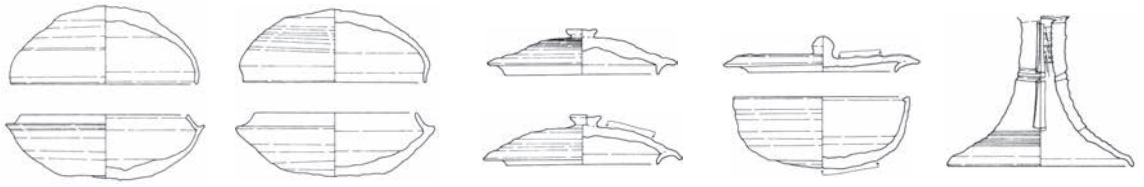
第１次焼成品



第２次焼成品



戸津六字ヶ丘２号窯



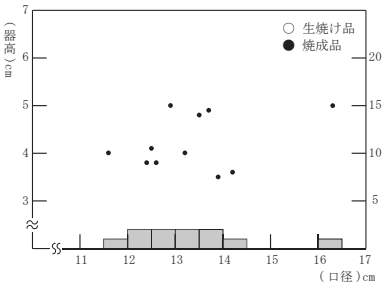
引用･参考文献１・９より転載。一部加筆。

第 123 図　分校３号窯跡等出土遺物実測図（S=1/5）

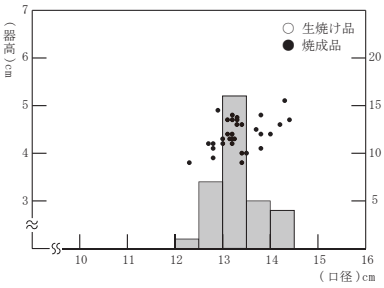
第 28 表　分校３号窯跡等出土坏Ｈ法量分布表

分校３号窯

１次焼成坏Ｈ蓋

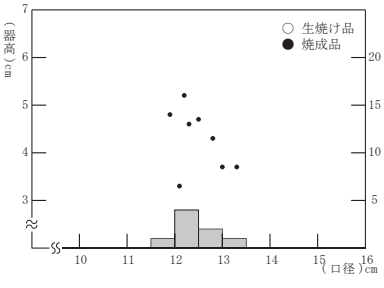


２次焼成坏Ｈ蓋

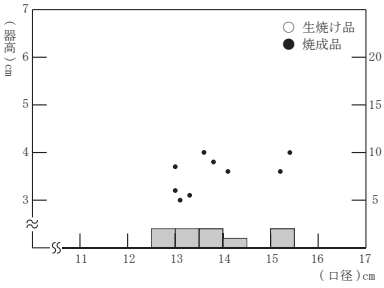


戸津六字ヶ丘２号窯

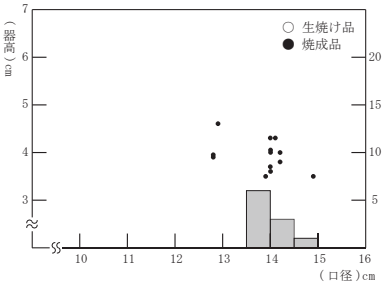
坏Ｈ蓋



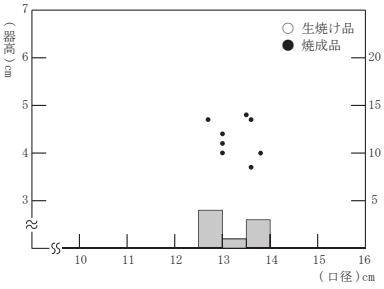
１次焼成坏Ｈ身



２次焼成坏Ｈ身



坏Ｈ



註

(1)　両計測とも、窯体内への流込土等2次堆積土を除外して行うべきだが、峻別が困難な破片が多く、調査・整理担当者の区分けに従い、各窯全体の遺物を対象に計測を実施した。口縁部計測法は、全周を36等分して残存率を集計したものであり、36/36で1個体分となる。また、破片数計測法では、接合前の破片数を集計した。さらに、有蓋器種については、両計測法とも蓋・身のうち数の多いほうを選択して、その比率を示す他、甕は口径20㎝未満を小型、20㎝～40㎝未満を中型、40㎝以上を大型甕とした。

(2)　クシ状工具痕は、器面成形・調整としての板状工具を用いるナデ痕跡と、成形品をムシロ等の上に据え置いた際の痕跡(いわゆる敷物圧痕)の両者があり、ここでは主に前者を指して観察・説明を行なった。

(3)　鋺類の蓋とした個体には、長頸瓶の蓋を含む可能性をもち、扁平な376が候補となりうる。蓋と身の関係が十分整理できないものの、以下では鋺A及び鋺類蓋を「鋺G蓋」と総称する。

(4)　11号窯出土品は、6号窯に近い様相が多いものの、ここでは窯体の規模・プランを重視してｃ期に位置付ける。

(5)　4号窯、1号窯の坏H蓋の口径は、焼成品と生焼け品の間で約1㎝の法量差を示す。

(6)　引用・参考文献7による。

(7)　田嶋氏編年の古代Ⅰ$_1$期は、西弘海氏編年の飛鳥Ⅰ(田辺昭三氏編年TK209型式後半～TK217型式前葉頃)、Ⅰ$_2$期が同飛鳥Ⅱ(同TK217型式中葉頃)、Ⅱ$_1$期が同飛鳥Ⅲ(同後葉頃)、Ⅱ$_2$期同が飛鳥Ⅳ(TK46型式)に、それぞれ並行する。また、西弘海氏編年は引用・参考文献5、田辺昭三氏編年は同3による。

引用・参考文献

1　野尻與之佐他　1978 『郷土』石川県立大聖寺高等学校郷土研究部

2　奈良国立文化財研究所　1981 『平城宮発掘調査報告書Ｘ』

3　田辺昭三　1981 『須恵器大成』角川書店

4　石井則孝　1985 『陶硯』考古学ライブラリー42　ニュー・サイエンス社

5　西　弘海　1987 『土器様式の成立とその背景』真陽社

6　宮下幸夫他　1987 『戸津六字ヶ丘古窯跡発掘調査概要報告書』小松市教育委員会

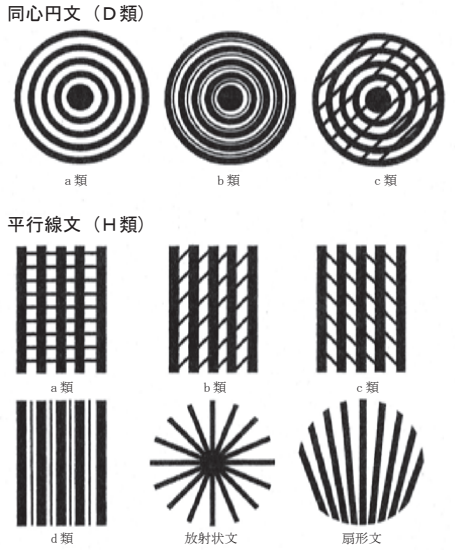
7　北陸古代土器研究会・石川考古学研究会　1988 『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』

窯跡出土遺物観察表凡例

・遺物の出土位置は、大きく窯体内、前庭部、灰原に分かれる。例えば、窯体内と灰原で出土した破片が接合する場合に、その個体の最終的な帰属地点の判断は、調査担当者の判断に依って区分し、出土遺構名の欄に記載した。また、整理番号は、実測作業段階で土器・実測図に記入した番号である。
・法量のうち、焼き歪みが大きく法量を復元したものは〔　〕、残存法量を(　)で表示した。
・遺存度は、口縁部計測法により、口縁部を36分割し、○/36で示し、36/36が完形となる。また、参考値として脚・台部のみが遺存した場合は、例えば「脚6/36」「台12/36」と記載した。
・焼成の項は、略号で表示した。出土遺物品は、焼成具合の観点から温度上昇が不十分で極度に焼きの弱い「生焼け品」と十分な焼成が行われ堅緻に焼き締まった「焼成品」に、また還元具合の観点から器面の還元が弱い「酸化焼成品」と十分に還元がなされた「還元焼成品」に、さらに破損等により焼き台(置き台)への転用に分かれる。そのため、以下のとおりに分類し、略号を記載した。

生・還: 還元が十分で白～灰白色、淡灰色、淡灰オリーブ色を呈する生焼け品
生・酸: 還元が不十分で、橙色～褐色を呈する生焼け品。
焼・還: 十分な還元焼成で堅緻に焼き締まり、灰色や灰白色を基調とする焼成品。自然釉や降灰が熔着する場合が多い。
焼・酸: 不十分な還元焼成で堅緻に焼き締まり、褐色を基調とする焼成品。
転　: 焼き台(置き台)に転用したもの。

・焼成時の置き方については、器面の黒化や降灰・自然釉の熔着具合等の重ね焼き痕から判断し、使用段階時の置き方に対して「正位焼成」、逆さまとなる「倒位焼成」、横に倒した「横位焼成」に分け、備考欄に記載した。
・壷・瓶類、甕類の成形・整形に用いる叩き技法は、内面「当て具」、外面「叩き具」で構成され、下表の分類により備考欄に記載した。



平行線文と同心縁文の分類模式図
（原図: 望月精司氏作成）

第 30 表　窯跡出土遺物観察表 1

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
55	1	4号窯窯体	焼成部№12・16・18、焚口№11	蓋(坏H)	13.7	－	5.3	11/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	若干焼き歪みあり	86276
55	2	4号窯窯体	前庭部下層№5、焚口№10	蓋(坏H)	14.0	－	4.2	3/36	細砂多、礫少	灰	灰	転	接合した破片の一部に焼土付着	86493
55	3	4号窯窯体	焼成部№12～14・16・18、焚口	蓋(坏H)	14.0	－	4.7	6/36	粗砂多	灰	灰	焼・還	若干焼き歪みあり	86274
55	4	4号窯窯体	焚口№11・13、灰原排土	蓋(坏H)	14.0	－	4.7	10/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪みあり	86423
55	5	4号窯窯体	焼成部№17、焚口	蓋(坏H)	14.0	－	(4.0)	12/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86417
55	6	4号窯窯体	焚口№8、焼成部№18	蓋(坏H)	14.0	－	4.0	14/36	細砂多	灰	灰	焼・還		86278
55	7	4号窯窯体	焼成部№22	蓋(坏H)	14.0	－	5.0	27/36	細砂、礫	灰白	灰白	生・還	生焼け。焼き歪みあり	86297
55	8	4号窯窯体	焼成部№12・16、焚口、灰原	蓋(坏H)	14.1	－	4.8	11/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	若干焼き歪みあり	86293
55	9	4号窯窯体	焼成部	蓋(坏H)	14.9	－	4.4	6/36	細砂多、礫少	褐灰	橙	生・酸	還元弱く酸化焼成	86428
55	10	4号窯窯体	焼成部№22	蓋(坏H)	14.2	－	5.1	2/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	内面焼土付着	86291
55	11	4号窯窯体	焼成部№18	蓋(坏H)	14.5	－	4.7	8/36	細砂、礫微	灰白	灰	焼・還	口縁部若干焼き歪み。外面降灰	86281
55	12	4号窯窯体	焚口№11・13、前庭部上層	蓋(坏H)	〔14.1〕	－	3.8	22/36	細砂多、礫微	灰白	灰白	焼・還	焼き歪み著しい。天井部外面クシ状工具痕	86295
55	13	4号窯窯体	焚口№11、焼成部№15	蓋(坏H)	約15.2	－	5.0	6/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86280
55	14	4号窯窯体	焼成部№18	蓋(坏H)	15.0	－	(4.5)	11/36	細砂多、粗砂	灰白、橙	灰白、橙	生・還	破片の一部は酸化	86290
55	15	4号窯窯体	焼成部№14・16・18、焼成部最下層、焚口	蓋(坏H)	14.9	－	4.3	27/36	粗砂多、礫	灰白	灰白	生・還		86296
55	16	4号窯窯体	焼成部№22	蓋(坏H)	14.9	－	4.2	14/36	細砂多、粗砂	褐、黄橙黒、灰白	褐、黄橙黒、灰白	生・酸	焼き歪みあり。約1/4色調異なる	86427
55	17	4号窯窯体	焼成部№22	蓋(坏H)	15.0	－	4.4	7/36	細砂多、礫少	灰白	灰～灰褐	生・還	焼き歪み、焼き割れあり	86418
55	18	4号窯窯体	焼成部№19	蓋(坏H)	〔約16〕	－	3.8	10/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	焼き歪み、口径に不安残す	86299
55	19	4号窯窯体	焼成部№19	坏H	13.2	－	4.1	17/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還		86501
55	20	4号窯窯体	焼成部№13・17、焚口№10	坏H	12.9	－	4.2	36/36	粗砂、礫少	灰白、灰	灰白、灰	焼・還	焼き歪み、焼き割れあり	86506
55	21	4号窯窯体	焚口№10、焼成部№15・18	坏H	12.7	－	3.6	35/36	粗砂、礫少	灰白、淡灰	灰白、淡灰	焼・還	焼き歪み、焼き割れあり	86505
55	22	4号窯窯体	焼成部№22	坏H	13.2	－	4.2	23/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86508
55	23	4号窯窯体	焼成部№19・20-2、焚口	坏H	13.3	－	4.5	30/36	粗砂、礫少	灰白、暗灰	灰白、暗灰	生・酸	生焼け	86507
55	24	4号窯窯体	焚口№7	坏H	12.6	－	(2.4)	7/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面黒化	86542
55	25	4号窯窯体	焼成部№23	坏H	14.2	－	(3.8)	21/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	焼き歪みあり	86502
55	26	4号窯窯体	焼成部№14・18、焚口	坏H	13.2	－	4.4	24/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	若干焼き歪みあり	86503
55	27	4号窯窯体	焼成部№23、灰原	坏H	14.7	－	(2.2)	9/36	粗砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・還	倒位焼成。外面降灰あり	86540
55	28	4号窯窯体	窯体№4、前庭部上層、灰原(D-101区、D-100L～D-99L、D-100L～D-101)、上層(B-100区)、焼成部覆土№1	蓋(高坏A)	15.6	－	(4.2)	12/36	細砂多、礫微	灰白	灰	焼・還	天井部外面回転ケズリ、内面同心円タタキ	86283
55	29	4号窯窯体	前庭部№1、前庭部・濁茶褐色土層、焚口№9	高坏A	－	16.9	(9.1)	脚25/36	粗砂多、礫微	灰オリーブ	灰白	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、内面自然釉顕著、焼き歪みあり	86343
55	30	4号窯窯体	焚口、灰原(C-99№26、D-99～D-98L)	高坏A	－	17.0	(7.2)	脚8/36	粗砂多、礫微	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、降灰・自然釉顕著	86340
55	31	4号窯窯体	前庭部及び濁茶褐色土層、焚口№8、灰原(B100L～B101L、SB内)	高坏A	－	16.4	(7.6)	脚5/36	粗砂多、礫微	黄灰	灰	焼・還	倒位焼成、内面降灰顕著	86334
55	32	4号窯窯体	焼成部№1	高坏A	－	17.8	(7.9)	脚11/36	粗砂多、礫微	灰白	灰オリーブ	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、内面降灰・自然釉、焼き膨れ顕著	86353
55	33	4号窯窯体	焼成部№2	高坏B	15.8	－	(3.4)	5/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰白	焼・還	正位焼成、内面降灰・自然釉熔着	86482
56	34	4号窯窯体	焼成部№15・17	鉢	18.4	－	(3.9)	14/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	焼成ややあまい。焼き割れ顕著	86227
56	35	4号窯窯体	焚口、焼成部№23	鉢	13.0	－	約9	35/36	細砂、礫多	灰	灰	焼・還	焼き割れ・焼き歪み。有蓋(または倒位)焼成か	86233
56	36	4号窯窯体	焼成部№18・20-1、前庭部上層(濁茶褐色土)、焚口№8	鉢	12.6	－	8.0	31/36	細砂、礫多	淡灰	灰	焼・還		86231
56	37	4号窯窯体	焚口№11	鉢	－	4.4	(7.0)	－	細砂多、粗砂	灰	灰	焼・還	肩部稜状。外面剥離目立つ	86255
56	38	4号窯窯体	焼成部覆土№1	平瓶	6.9	7.5	13.7	36/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	生・還	内面底部に絞り込み痕、上部に閉塞円盤。外面下半～底部にカキメ調整。口縁部沈線2条で加飾	86236
56	39	4号窯窯体	床面	横瓶か	14.4	－	(2.7)	9/36	細砂、礫多	淡灰	淡灰	焼・還		86256
56	40	4号窯窯体	焼成部№21	横瓶	13.5	－	31.0	22/36	粗砂多、礫多	灰	灰、灰オリーブ	焼・還	若干焼き歪みあり	86270
56	41	4号窯窯体	焚口№2・10、灰原(C-99№30)、1号窯№20	横瓶	10.6	－	29.0	3/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還、転	内面Da類か、外面Hc類。横位焼成(一側面に焼き台(置き台)甕片4ヶ熔着、焼き膨れ顕著。胴部片の1つは1号窯焼き台(置き台)に転用	86801・86272
56	42	4号窯窯体	前庭部下層№1・5、前庭部、焚口№4	横瓶	10.4	－	30.8	6/36	粗砂多、礫少	灰、灰白	灰、灰白	生・還	横位焼成、火後ろは生焼け	86751
56	43	4号窯窯体	前庭部上層、灰原表面(D100L～D101L-SB内、A-98、D100L～D99L-SB内)、焼成部覆土№1	壷A	13.8	－	21.8	5/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	正位焼成	85249
56	44	4号窯窯体	焚口№8、床面№9、前庭部下層№1・5、前庭部及び濁茶褐色土層、前庭部上層、灰原(D100L～D99L-SB内、C-99№22)	壷A	12.4	－	23.1	19/36	粗砂多、礫少	灰、淡灰	灰、淡灰	生・還	体部外面カキ目、内面横ナデ	85260
57	45	4号窯窯体	床面	甕	42.6	－	(2.9)	4/36	粗砂多、礫少	暗灰	暗灰	転	沈線、斜行列点文で加飾。傾きに不安残す	86421
57	46	4号窯窯体	焼成部№18・19・20-2	甕	50.6	－	(14.3)	9/36	粗砂多、礫多	灰	浅灰黄	焼・還	沈線、ハケで加飾。内面に降灰、焼き膨れ	86442
57	47	4号窯窯体	焼成部№20-1	甕	47.0	－	(22.8)	30/36	粗砂多、礫少	灰	灰、暗灰	焼・還	内面Dc類、外面Hc類。外面を突帯、沈線、連続刺突文で加飾	85287
57	48	4号窯前庭部	前庭部濁茶褐色土層、下層№3	蓋(坏類)	約11.6	－	(4.8)	5/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面沈線4条で加飾	86478
57	49	4号窯前庭部	前庭部上層	蓋(坏H)	13.8	－	3.7	5/36	細砂、粗砂多	灰白	灰	焼・還	若干焼き歪みあり	86277
57	50	4号窯前庭部	前庭部下層№1、濁茶褐色土層	坏H	〔11.3〕	－	〔4.9〕	1/36	粗砂、礫少	灰白	灰	焼・還	焼き歪みあり	86543
57	51	4号窯前庭部	前庭部、濁茶褐色土層、灰原(B99№2)	坏H	12.2	－	4.1	7/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	焼・還	製作時に受け・立ち上がり歪みあり	86265
57	52	4号窯前庭部	№4、濁茶褐色土層	坏H	12.4	－	4.2	13/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還		86509
57	53	4号窯前庭部	前庭部上層	坏H	13.0	－	3.7	16/36	礫少、粗砂多	灰	灰	焼・還		86510
57	54	4号窯前庭部	前庭部上層、濁茶褐色土層	坏H	約14	－	(3.1)	3/36	細砂多、礫微	灰白	灰白	焼・還	外面降灰、小剥離多い	86541

第 31 表　窯跡出土遺物観察表 2

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
57	55	4号窯前庭部	前庭部上層、黒色土層上層、前庭部及び濁茶褐色土層、灰原(B-99№1,2)、焚口覆土№1	蓋(高坏A)	16.0	－	(4.3)	6/36	細砂多、礫微	灰白	淡灰、灰	生・還	天井部外面回転ケズリ、内面同心円タタキ。正位焼成。径約 15cm の他個体重ね焼き	86285
57	56	4号窯前庭部	前庭部及び濁茶褐色土層上層、灰原上層(B-100区)	蓋(高坏A)	約15.8	－	(4.5)	5/36	細砂多、礫微	灰白	灰白、灰	生・還	天井部外面回転ケズリ。正位焼成。径約13cmの他個体重ね焼き	86287
57	57	4号窯前庭部	前庭部及び黒色土層上層、灰原(B-100№47)	蓋(高坏A)	15.9	鈕径3.4	5.8	17/36	細砂多、礫微	灰白	灰白、灰	焼・還	天井部外面回転ケズリ、内面同心円タタキ。正位焼成。径約13cmの他個体重ね焼き	86286
57	58	4号窯前庭部	取上げ№1・2、前庭部、灰原(D100L～D99LSB内、B99№3、A-98、B-99区、C100L～D100LSB)	蓋(高坏A)	16.0	－	(4.3)	－	粗砂多、礫微	灰白	灰白、灰	焼・還	天井部外面回転ケズリ、内面同心円タタキ。正位焼成。径約13cmの他個体を重ね焼き	86284
57	59	4号窯前庭部	前庭部下層№1	蓋(高坏A)	－	鈕径3.0	(2.9)	－	粗砂多、礫多	淡灰黄	灰	焼・還	倒位焼成、内面自然釉・焼き膨れあり	86257
57	60	4号窯前庭部	前庭部下層№3、前庭部上層	高坏A	13.5		(4.0)	20/36	粗砂多、礫少	灰白	灰褐	焼・還	倒位焼成。外面に自然釉熔着、焼き歪みあり	86352
57	61	4号窯前庭部	前庭部下層№3、灰原上層(C-99区)、灰原№11	高坏A	13.4	－	(14.7)	12/36	粗砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、外面降灰・自然釉顕著	86354
57	62	4号窯前庭部	前庭部濁茶褐色土層、B-0区灰原、灰原№11、焚口№8	高坏A	16.4	－	(15.0)	脚36/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、内面自然釉顕著。裾部焼き歪み顕著	86327
57	63	4号窯前庭部	前庭部濁茶褐色土層、灰原(C-99№21)	高坏A	－	約15	(15.1)	脚14/36	粗砂多、礫少	灰緑	灰	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、内面自然釉顕著。裾部焼き歪み顕著	86424
57	64	4号窯前庭部	前庭部下層№2、灰原(B-100№43・44)	高坏A	－	16.6	(17.6)	脚13/36	粗砂多、礫少	灰緑	灰	焼・還	3方透かし。倒位焼成、内面自然釉・窯壁粒熔着顕著	86294
57	65	4号窯前庭部	前庭部下層№5、前庭部№2、灰原(A-98)	高坏A	－	16.0	(6.5)	脚2/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	倒位焼成。内側に径約15cmの重ね焼き痕。裾部焼き歪みあり	86348
57	66	4号窯前庭部	前庭部上層	高坏B	約14.8	－	(3.8)	5/36	粗砂多	灰	黒灰	転	倒位焼成。内面他個体熔着痕	86288
57	67	4号窯前庭部	前庭部下層№3、灰原(C-99№30)	高坏B	12.4	－	(7.3)	脚11/36	粗砂多、礫微	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	3方2段透かし。正位焼成、外面降灰・自然釉熔着	86335
57	68	4号窯前庭部	前庭部上層	高坏A	14.6	－	(7.1)	脚14/36	粗砂多、礫微	淡灰オリーブ	灰白	焼・還	3方透かし。倒位焼成、内面自然釉顕著	86333
58	69	4号窯前庭部	前庭部№3-2、灰原(D100L～D99LSB内)	鉢	11.8	－	(5.6)	5/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還		86244
58	70	4号窯前庭部	前庭部下層№2、灰原(B98№1、C99№27、C99L～C98L、D99L～D98L№11、B-0区、D101№4)	壷G	〔20.4〕	－	〔17.1〕	6/36	粗砂多、礫	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・還	沈線・カキメで加飾。正位焼成、焼き歪み・割れ・自然釉熔着顕著	85274
58	71	4号窯前庭部	前庭部№3-2	甕		－	(5.3)	－	粗砂多、礫少	灰オリーブ	淡灰	焼・還	内面自然釉・窯壁粒熔着顕著	86496
58	72	4号窯前庭部	前庭部・濁茶褐色土層	瓶類	8.4	－	(6.0)	7/36	粗砂、礫少	淡灰オリーブ	灰白	焼・還	正位焼成。内面の降灰・自然釉顕著	86361
58	73	4号窯前庭部	前庭部上層、灰原(C-99№23・28)、上層(D-99区)	長頸瓶か	－	－	(5.0)	－	細砂多、礫少	灰白	鮮灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉熔着。焼き膨れあり	86512
58	74	4号窯前庭部	前庭部・濁茶褐色土層、灰原上層(B-99区)	瓶類	10.8	－	(6.7)	13/36	細砂多、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	正位焼成、内外面自然釉顕著	86363
58	75	4号窯前庭部	前庭部下層№3	壷A	13.8	－	(5.6)	3/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	破断面に自然釉熔着	86355
58	76	4号窯前庭部	前庭部上層、灰原(B-99№4、A・C-99区)	壷A	14.2	－	(15.2)	11/36	細砂、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・還	内外面自然釉顕著、他個体片熔着。焼き歪みあり	86362
58	77	4号窯前庭部	前庭部下層№4、灰原(D100L～D99LSB内)	長頸瓶	－	13.6	(5.3)	脚4/36	細砂多、礫少	灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・還	3方透かし。外面に自然釉熔着、正位焼成。焼き歪みあり	86331
58	78	4号窯前庭部	前庭部上層	長頸瓶	－	15.8	(5.1)	脚11/36	粗砂多	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	3方透かし。外面に自然釉熔着、正位焼成。焼き歪みあり	86351
58	79	4号窯前庭部	前庭部黒色土層上層、下層№6、灰原(C-79№27)	横瓶	－	－	(19.6)	4/36	細砂多、礫少	淡灰	灰オリーブ	焼・還	外面自然釉顕著。149と同一個体	86796・86399
58	80	4号窯前庭部	前庭部及び濁茶褐色土層、灰原・撹乱(A-99区)	横瓶	11.6	－	約25	8/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	内面Dc類、外面Hc類。横位焼成、焼き膨れ・自然釉顕著	86815・86268
58	81	4号窯前庭部	前庭部濁茶褐色土層、灰原(C-99№30)、灰原上層、灰原(C-99№33)	横瓶	－	－	(30.0)	－	細砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・還	横位焼成。破断面含め自然釉熔着。内面Da類か、外面Hb類	86672
59	82	4号窯前庭部	前庭部黒色土上層	甕	約21	－	(4.6)	7/36	細砂、礫多	浅灰黄	灰	焼・還	内面降灰あり	86419
59	83	4号窯前庭部	前庭部濁茶褐色土上層	甕	約26	－	(3.7)	5/36	粗砂多、礫多	青灰	灰	焼・還		86420
59	84	4号窯前庭部	前庭部黒色土層、灰原(A-98)	甕	約27	－	(10.7)	3/36	細砂多、礫少	淡灰黄	褐灰	焼・還	沈線・乱れた波状文で加飾	86422
59	85	4号窯前庭部	前庭部濁茶褐色土層、灰原(D99№31)	甕	－	－	(39.7)	－	粗砂多、礫	オリーブ灰	淡灰	焼・還	耳4ヶ所。 内面Da類、外面Hb類。正位焼成(やや斜位。外底に焼き台(置き台)片、(窯土溶着)、内外面自然釉・降灰、焼き膨れ顕著	86813
59	86	4号窯前庭部	№3・6、前庭部上層、下層№4	甕	41.8	－	(8.8)	9/36	粗砂多、礫多	オリーブ灰	暗灰、灰	転	沈線文・カキメで加飾。焼き台転用	86433
59	87	4号窯前庭部	前庭部上層	甕	46.2	－	(7.1)	4/36	粗砂多、礫	灰	灰	転	浅い波状文・沈線で加飾。破断面に降灰、焼き台に転用。傾きに不安残す	86447
59	88	4号窯灰原	灰原(B-100№42,B-98区)	蓋(坏H)	13.8	－	(4.1)	9/36	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	86242
59	89	4号窯灰原	灰原№3	蓋(坏H)	約12.6	－	(4.8)	7/36	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	若干焼き歪みあり	86243
59	90	4号窯灰原	灰原上層(B-99区)	蓋(坏H)	12.8	－	4.5	3/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	天井部内面同心円タタキ	86394
59	91	4号窯灰原	灰原(B-100№48)	蓋(坏H)	約11	－	(5.0)	10/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	外面自然釉熔着。やや焼き歪みあり	86258
59	92	4号窯灰原	灰原(B99～B100LSB、D99～D99L、A-100)	蓋(坏H)	13.6	－	4.5	6/36	細砂、礫少	灰黄	暗灰	焼・還	内面同心円タタキ。正位焼成、外面自然釉熔着	86395
59	93	4号窯灰原	灰原(№2、D-99～D-98L、B-100L～B101LSB内)	蓋(坏H)	14.2	－	4.1	4/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	外面自然釉熔着。やや焼き歪みあり	86259
59	94	4号窯灰原	灰原(C-101～D-101SB内)	蓋(坏H)	14.6	－	(3.7)	9/36	粗砂	灰白	灰白	焼・還	若干焼き歪みあり	86241
59	95	4号窯灰原	灰原(D-100L～D-101LSB内)	蓋(坏H)	14.0	－	3.8	15/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面黒化	86369
59	96	4号窯灰原	灰原上層(B-100区)	蓋(坏H)	13.6	－	3.8	2/36	粗砂多、礫	黄灰	灰	焼・還	砂礫多い	86240
59	97	4号窯灰原	灰原下層(B-99区)	蓋(坏H)	13.6	－	3.8	6/36	細砂多、礫少	淡灰	黒灰	焼・還	若干焼き歪みあり	86393
59	98	4号窯灰原	灰原(B-99区№6・9)	坏H	12.6	5.8	3.6	10/36	細砂、礫少	灰白	灰白	焼・還		86264
59	99	4号窯灰原	灰原(B-0区)	坏H	12.2	－	(3.7)	16/36	細砂多、粗砂	灰白	灰	焼・還	外面黒化	86263
59	100	4号窯灰原	灰原(C-99№17)	坏H	12.2	－	(3.4)	13/36	細砂多、粗砂	灰白	灰白	焼・還		86262
59	101	4号窯灰原	灰原(C-99№18・20、№1)	高坏A	13.0	－	(4.0)	18/36	細砂、礫多	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	内面同心円タタキ。倒位焼成、外面自然釉熔着	86432
59	102	4号窯灰原	灰原(B-0区、D-99区)	坏H	12.4	5.6	4.0	11/36	細砂、礫多	灰白	緑灰	焼・還	底部焼き膨れ、外面に自然釉顕著	86261
59	103	4号窯灰原	灰原上層(B-100№42)、灰原№1	坏H	12.8	－	4.6	20/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	焼・還		86368
59	104	4号窯灰原	灰原(D-100L～D-99LSB内)	坏H	12.6	6.2	3.5	8/36	粗砂多、礫少	灰黄	灰	焼・還	焼き膨れ、焼き歪みあり。底部外面剥離	86267
60	105	4号窯灰原	灰原下層(B-99区)	蓋(高坏A)	－	鈕径3.0	(1.6)	－	粗砂多、礫少	灰白	灰白	焼・還		86239
60	106	4号窯灰原	取上げ№1・2、灰原(B-100L～B-101LSB内、№227)、上層(C-99区,D-99№31)	蓋(高坏A)	16.8	－	(5.1)	16/36	粗砂多、礫少	灰白	灰、灰白	焼・還	焼き膨れ顕著。天井部外面に径約11cmの重ね焼き痕	86396
60	107	4号窯灰原	灰原(C-99№80)	蓋(高坏A)	16.6	－	(4.3)	12/36	粗砂	灰白	灰、灰白	焼・還	焼き膨れ顕著。天井部外面に径約11cmの重ね焼き痕	86391

第 32 表　窯跡出土遺物観察表 3

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
60	108	4号窯灰原	灰原(B-99№40)	高坏A	15.0	－	(4.2)	10/36	粗砂多、礫微	灰白	灰黄	焼・還	内面同心円タタキ。倒位焼成、外面降灰	86260
60	109	4号窯灰原	灰原上層(B-99区)、取上げ№1	高坏A	14.0	－	(4.1)	9/36	粗砂多、礫少	灰白	灰黄	焼・還	内面同心円タタキ。倒位焼成、外面降灰	86266
60	110	4号窯灰原	灰原(C-99L～C-98L、C-99№27、C-99区)	高坏A	14.8	－	(4.7)	34/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰オリーブ	焼・還	内面同心円タタキ。倒位焼成。焼き膨れ、外面自然釉熔着顕著	86392
60	111	4号窯灰原	前庭部及び濁茶褐色土層、灰原(D-100L～D-101LSB内)、灰原上層(C-98区)	高坏A	13.8	－	(4.1)	15/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰緑	焼・還	内面同心円タタキ。倒位焼成、外面降灰	86504
60	112	4号窯灰原	灰原(D-99～D-98L、D-99№32)	高坏A	－	15.0	(12.4)	33/36	粗砂多、礫少	灰	緑灰	焼・還	倒位焼成、焼き歪み顕著	86298
60	113	4号窯灰原	B-0区、灰原(C-99№29)、灰原上層(B-99区№1、B-99№12)	高坏A	13.0	14.2	18.0	6/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	3方2段透かし、内面同心円タタキ。倒位焼成。焼き歪みあり	86430
60	114	4号窯灰原	灰原(C-99№26)	高坏A	－	16.2	(15.3)	脚12/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成。焼き歪みあり	86279
60	115	4号窯灰原	灰原(C-99№20・26・27、D-99～D-98L)	高坏A	－	16.9	(13.2)	脚8/36	粗砂多、礫少	灰緑	灰	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成。焼き歪みあり	86271
60	116	4号窯灰原	灰原(B-98～A-98LSB内、D-100L～D-99LSB内、B-99№34、A-100区撹乱)	高坏A	－	15.7	(13.4)	脚6/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	灰	焼・還	3方3段透かし。倒位焼成。内面降灰・自然釉熔着	86273
60	117	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	高坏A	－	17.3	(13.0)	脚5/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成。焼き歪みあり	86383
60	118	4号窯灰原	灰原上層(C-99区、D-99№5,33)	高坏A	－	15.5	(9.9)	4/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	3方3段透かし。倒位焼成。焼き歪みあり。脚内面に径約9cmの重ね焼き痕	86386
60	119	4号窯灰原	灰原(C-99№20・29)	高坏A	－	17.7	(8.1)	脚15/36	粗砂多、礫少	灰	緑灰	焼・還	倒位焼成、内面自然釉・窯壁粒熔着	86292
60	120	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱、B-100№48)	高坏B	約13	－	(3.4)	－	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	倒位焼成、外面自然釉熔着。焼き歪み顕著	86387
60	121	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱、A-100区撹乱)	高坏B	12.9	－	(5.0)	6/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	正位焼成。内面自然釉熔着顕著	86388
60	122	4号窯灰原	灰原№11、灰原上層(B-98)	高坏B	12.9	－	(3.9)	16/36	粗砂多、礫少	灰オリーブ	灰	焼・還	正位焼成。内面自然釉熔着顕著、焼き膨れ	86254
60	123	4号窯灰原	灰原(D-99№32)	高坏A	－	11.8	(8.3)	脚34/36	粗砂多、礫	灰	緑灰	焼・還	正位焼成。外面自然釉・窯壁粒熔着顕著	86300
60	124	4号窯灰原	灰原(B-99№5)	高坏B	－	11.5	(7.9)	脚5/36	粗砂多、礫	灰	灰オリーブ	焼・還	正位焼成	86275
60	125	4号窯灰原	灰原上層(D-99区、D-100№33、D-99～E-99SB、D-100L～D-99LSB、№11)	高坏C	－	10.8	(3.5)	脚13/36	粗砂多	淡灰	灰	焼・還	若干焼き歪みあり。正位焼成	86253
61	126	4号窯灰原	灰原(B-99№38)	甕		－	(4.2)	6/36	細砂、礫少	灰	灰黄	焼・還	焼き歪みあり。正位焼成、内面降灰あり	86481
61	127	4号窯灰原	灰原(C-99№21・27、C-99～C-98L、D-99～D98L、B-98上層)	甕		－	(18.0)	5/36	細砂多、粗砂	灰	灰緑	焼・還	焼き歪みあり。正位焼成、降灰・自然釉顕著	85535
61	128	4号窯灰原	灰原(C-99№30)	甕		－	(7.8)	4/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	焼き歪み顕著。正位焼成、内面自然釉熔着	86483
61	129	7-1・2号窯灰原	3-F褐色土	瓶類	9.4	－	(4.7)	8/36	細砂、礫少	灰白	灰	焼・還	倒位焼成、外面黒化	86539
61	130	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱)	瓶類	8.8	－	(6.0)	16/36	細砂、礫少	灰黄	淡灰	焼・還	内面に自然釉・降灰あり	86356
61	131	4号窯灰原	灰原(C-100L～D-100LSB)	瓶類	8.5	－	(4.9)	8/36	粗砂多	淡灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	外面自然釉顕著	86360
61	132	4号窯灰原	灰原	提瓶か	8.8	－	(7.5)	3/36	粗砂多	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	外面の自然釉顕著	86366
61	133	4号窯灰原	灰原(C-99№27)	長頸瓶か	－	－	(7.7)	－	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	内・外面自然釉熔着。正位無蓋焼成	86562
61	134	4号窯灰原	灰原(C-99№19)	壷A	10.0	－	(4.9)	3/36	細砂多、粗砂	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	内・外面自然釉熔着。正位無蓋焼成	86484
61	135	4号窯灰原	灰原(B-0区)	瓶類	9.1	－	(5.8)	6/36	粗砂多	淡灰	灰オリーブ	焼・還	外面のみ自然釉熔着。有蓋か	86485
61	136	4号窯灰原	灰原(A-99区)撹乱、灰原(D-99～D-98L)	提瓶か	11.8	－	(7.0)	16/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	灰	焼・還	沈線2条。横位焼成。内外面降灰・自然釉熔着	86359
61	137	4号窯灰原	灰原表層(B-0区)	瓶類	約13.6	－	(4.6)	3/36	粗砂多	灰	灰オリーブ	焼・還	外面自然釉熔着顕著	86400
61	138	4号窯灰原	灰原(C-99№30)	壷A	11.4	－	(7.0)	9/36	粗砂少、礫微	淡灰	灰	焼・還	正位焼成、降灰あり。若干焼き歪み	86365
61	139	4号窯灰原	灰原表層(B-0区)	壷A	約11	－	(5.6)	4/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還		86397
61	140	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)、灰原(C-99№18)	壷A	〔14.8〕	－	(5.4)	5/36	細砂多、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	正位焼成、内外面自然釉熔着。沈線１条	86364
61	141	4号窯灰原	灰原(№11)	壷A	－	－	(12.7)	5/36	細砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・還	正位焼成。外面自然釉熔着顕著	86489
61	142	4号窯灰原	北側土坑覆土、土坑内№4,灰原(D-99～E-99SB)	壷A	－	－	(17.8)	－	細砂、礫多	灰白	灰白	生・還	生焼け	86479
61	143	4号窯灰原	灰原表土	壷A	－	－	(7.7)	－	細砂	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	沈線1条。焼き膨れあり	86561
61	144	4号窯灰原	灰原表土、灰原(D-99№31、D-98～D-97L)	壷A	12.4	－	19.4	16/36	粗砂多、礫	灰	灰	焼・還	焼成やや弱い。口縁部外面沈線1条	85248
61	145	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	長頸瓶	－	13.9	(3.2)	脚3/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	方形透かし(数不明)。外面降灰	86357
61	146	4号窯灰原	灰原(B-99～C-99L)	小型壷	8.8	－	(2.6)	3/36	粗砂、礫	灰緑	灰緑	転	破断面に自然釉熔着、焼き歪み顕著	86591
62	147	4号窯灰原	灰原表土	横瓶	7.2	－	(3.0)	4/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・還	内外面自然釉顕著	86488
62	148	4号窯灰原	灰原2層(B-48区)	横瓶	13.0	－	(4.0)	－	細砂	灰白	灰白	焼・還		86593
62	149	4号窯灰原	灰原№11	横瓶	10.0	－	(3.8)	4/36	細砂多、礫少	淡灰	灰オリーブ	焼・還	79と同一個体。内外面自然釉顕著	86399・86796
62	150	4号窯灰原	灰原表層(B-0区)	横瓶	14.7	－	25.0	－	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。横位焼成、口縁部焼き割れ。153と接合	86367
62	151	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	横瓶	12.0	－	(7.0)	18/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	緑灰	焼・還	横位焼成。内外面自然釉顕著、焼き割れ	86441
62	152	4号窯灰原	灰原№11	横瓶	16.2	－	(2.8)	5/36	細砂多、礫微	青灰	灰	焼・還		86487
62	153	4号窯灰原	灰原表土	横瓶	14.7	－	25.0	26/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。横位焼成、口縁部焼き割れ。150と接合	86814
62	154	4号窯灰原	灰原(A-99区撹乱)、B-0区表土	鉢	10.6	－	(6.1)	7/36	細砂多、礫少	灰黄	灰	焼・還	無蓋焼成、内面降灰あり	86245
62	155	4号窯灰原	灰原上層(C-99区)	鉢	12.1	－	(6.8)	5/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	焼・還	口縁部焼き歪みあり	86237
62	156	4号窯灰原	灰原(C-99№20・30)	鉢	14.0	－	(5.0)	25/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	口縁部焼き歪みあり	86229
62	157	4号窯灰原	灰原(D-100№33、D-99～D-98L、C-99№20)	鉢	14.5	－	(8.8)	17/36	粗砂多	灰	灰	焼・還	無蓋。正位焼成、内外面自然釉熔着	85307
62	158	4号窯灰原	灰原(B-99～C-99L)	壷G	10.1	－	(7.7)	3/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	正位焼成、内外面降灰・自然釉熔着	86592
62	159	4号窯灰原	D101№4、灰原表土(B-0区)、灰原上層(B-99区)、灰原(C-99L～C-98L、C-99№29)	壷G	〔14.0〕	－	〔18.4〕	5/36	粗砂、礫少	オリーブ灰	オリーブ灰	転	沈線・カキメで加飾。内外面焼き歪み・自然釉熔着(破断面含む)	86707
62	160	4号窯灰原	灰原撹乱(A-100区)	壷G	－	－	(5.3)	－	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還		86511
62	161	4号窯灰原	灰原(C-99№27)	鉢C(厚底)	18.0	－	(10.0)	14/36	粗砂多	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	倒位焼成、外面自然釉顕著。焼き膨れ目立つ	86358
62	162	4号窯灰原	灰原表土	鉢C(厚底)	－	－	(7.5)	6/36	粗砂多	緑オリーブ	灰	焼・還	厚手。横位焼成	86282
62	163	4号窯灰原	灰原(30B4)	横瓶か	－	－	(4.0)	－	粗砂多	淡灰黄	灰	生・還	生焼け。円形に穿孔か。内面Dc類、外面Hb類・カキメ調整	86756
63	164	4号窯灰原	灰原(C-100L～D-100LSB)	甕	26.4	－	(6.8)	4/36	粗砂多	淡灰	灰	転	破断面黒化(焼き台転用か)	86595

第 33 表　窯跡出土遺物観察表 4

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
63	165	4号窯灰原	灰原(A-98)	甕	－	－	(5.5)	－	細砂	灰	灰	焼・還	内外面降灰・自然釉あり	86596
63	166	4号窯灰原	灰原(D-100～D-99LSB内)	甕	21.5	－	(4.3)	6/36	粗砂多、礫少	灰緑	灰緑	焼・還	内外面降灰・自然釉顕著あり	86594
63	167	4号窯灰原	灰原表土	甕	20.7	－	(4.0)	4/36	細砂多、礫微	灰オリーブ	灰	焼・還	内面降灰・自然釉	86486
63	168	4号窯灰原	灰原№1	甕	19.6	－	(5.3)	4/36	粗砂多、礫多	灰黄	灰黄	転か	還元弱い。破断面に窯壁土粒熔着	86429
63	169	4号窯灰原	灰原(D-99～E-99SB)	甕	20.3	－	(11.7)	12/36	細砂、礫多	灰	淡灰	焼・還	内面Da類、外面格子→カキメ。口縁部に焼き割れあり。内面降灰あり	86598
63	170	4号窯灰原	灰原表土	甕	約27	－	(3.7)	2/36	細砂、礫多	灰オリーブ	灰	焼・還	正位焼成。内面自然釉熔着顕著	86398
63	171	4号窯灰原	灰原上層、C-99№18・27、A-99区撹乱層、B-99№5、B-0	甕	19.8	－	(39.2)	4/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	緑灰	焼・還	内面Da類、外面Hb類。正位焼成、自然釉顕著、焼き歪み・焼き膨れあり	86816
63	172	4号窯灰原	焼成部№21、灰原(B-99№40・34・35、C-99)	甕	22.4	－	(34.0)	18/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰白	焼・還	内面Da類か、外面Hc類。正位焼成、自然釉・降灰顕著、焼き歪みあり	86755・86269
63	173	4号窯灰原	灰原(B-98～A-98SB内)、上層(D-98区)	甕	22.8	－	(12.3)	12/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	正位焼成。外面平行タタキ後カキメ	86599
63	174	4号窯灰原	灰原上層(B-100区)	甕	約44	－	(4.5)	6/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	やや乱れた連続刺突文。175と同一個体	86597
63	175	4号窯灰原	灰原表土(C-0区)	甕	約44	－	(10.1)	3/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	やや乱れた連続刺突文。174と同一個体	86384
63	176	4号窯灰原	灰原№11	甕	44.0	－	(15.5)	4/36	細砂多、礫少	淡灰	暗灰	転	焼き台転用。174と同一個体	86385
63	177	4号窯煙道部	煙道部№25	蓋(坏H)	15.4	－	4.1	1/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86289
63	178	4号窯北土坑	北側土坑覆土	坏H	約13	－	(3.1)	5/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	外面降灰あり	85456
63	179	4号窯北土坑	Z-2北土坑№3	土師器甕	18.6	－	(7.8)	5/36	粗砂多	浅橙	茶橙	並	非ロクロ成形、球胴形	85520
64	180	1号窯窯体	焼成部床面№25	蓋(坏H)	〔13.1〕	－	4.8	10/36	粗砂多、礫少	オリーブ灰	オリーブ灰	生・還	生焼け、焼き歪み・焼き割れ顕著	86336
64	181	1号窯窯体	焼成部床面№42	蓋(坏H)	〔12.9〕	－	〔4.9〕	36/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	焼成中に2つに焼き割れ	86338
64	182	1号窯窯体	前庭部・焼成部床面	蓋(坏H)	〔13.1〕	－	4.3	7/36	粗砂、礫	灰白	淡青灰	焼・還	焼き歪みあり、外面自然釉熔着	86372
64	183	1号窯窯体	焼成部床面№51	蓋(坏H)	13.6	－	(4.0)	8/36	粗砂、礫	灰	暗灰	転	倒位で焼き台転用、内面自然釉熔着	86389
64	184	1号窯窯体	2層、床面	蓋(坏H)	14.6	－	4.6	22/36	粗砂、礫多	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け、焼き割れ。口縁部黒色	86248
64	185	1号窯窯体	焼成部床面№29	蓋(坏H)	13.4	－	5.0	14/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け、焼き割れ。一部黒色	86332
64	186	1号窯窯体	焼成部床面№49・51、焼成部焚口付近床面	蓋(坏H)	13.5	－	4.6	32/36	微砂粒多	灰	暗灰	焼・還	倒位焼成。自然釉顕著のため口縁端部欠損。瓶口縁部熔着、焼き膨れ	86221
64	187	1号窯窯体	焼成部床面№48	蓋(坏H)	13.6	－	4.4	31/36	粗砂、礫	淡灰オリーブ	灰	焼・還	生焼けに近い。外面降灰あり	86247
64	188	1号窯窯体	焼成部焚口付近床面	蓋(坏H)	〔13.0〕	－	5.0	35/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪み顕著	86345
64	189	1号窯窯体	焼成部床面№48	蓋(坏H)	13.7	－	4.6	19/36	粗砂多、礫少	明オリーブ灰	オリーブ灰	転	倒位で焼き台転用、内外面自然釉熔着	86337
64	190	1号窯窯体	焼成部床面№59	蓋(坏H)	13.3	－	4.9	36/36	粗砂、礫	淡灰	灰	焼・還	天井部焼き割れあり	85549
64	191	1号窯窯体	焼成部床面№20	蓋(坏H)	〔13.6〕	－	〔4.3〕	36/36	粗砂多、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	天井部焼き割れ顕著	86252
64	192	1号窯窯体	焼成部床面№31	蓋(坏H)	13.6	－	4.3	8/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰	生・還	生焼け、天井部焼き割れ顕著	86249
64	193	1号窯窯体	焼成部床面№32	蓋(坏H)	13.8	－	4.4	28/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86377
64	194	1号窯窯体	焼成部床面№40	蓋(坏H)	13.8	－	4.7	36/36	粗砂多、礫少	灰	暗灰	焼・還	外面降灰(正位焼成)	86205
64	195	1号窯窯体	焼成部床面№59	蓋(坏H)	14.0	－	4.3	34/36	粗砂、礫	淡灰	灰	焼・還	焼き歪みあり。外面降灰(正位焼成)	85550
64	196	1号窯窯体	2層、床面	蓋(坏H)	14.0	－	4.5	10/36	粗砂多、礫少	灰	灰	生・還	口縁部重ね焼き痕(外面降灰)	86339
64	197	1号窯窯体	焼成部床面№48	蓋(坏H)	14.3	－	4.9	33/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け、口縁部黒色	85298
64	198	1号窯窯体	焼成部床面№48・49	蓋(坏H)	13.8	－	4.5	36/36	粗砂、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	口縁部熔着で欠損。外面自然釉顕著、倒位で焼き台転用	86370
64	199	1号窯窯体	焼成部焚口付近床面	蓋(坏H)	14.2	－	4.4	18/36	粗砂、礫	灰白	灰	焼・還	外面自然釉熔着顕著	86346
64	200	1号窯窯体	焼成部床面№48	蓋(坏H)	14.2	－	4.9	5/36	粗砂、礫少	淡灰オリーブ	灰、灰白	生・還	生焼け	86373
64	201	1号窯窯体	焼成部床面№48・49、燃焼部焚口付近床面	蓋(坏H)	〔14.0〕	－	4.4	32/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	倒位焼成。焼き膨れ、外面自然釉熔着顕著	86251
64	202	1号窯窯体	焼成部床面№59	蓋(坏H)	14.2	－	4.6	31/36	粗砂、礫	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86228
64	203	1号窯窯体	焼成部床面№49・59	蓋(坏H)	14.3	－	3.9	4/36	粗砂多、礫	灰白	灰白	生・還	生焼け、焼き歪みあり	86426
64	204	1号窯窯体	焼成部床面	蓋(坏H)	14.3	－	4.5	18/36	粗砂、礫多	オリーブ灰	オリーブ灰	焼・還	焼き割れあり	86342
64	205	1号窯窯体	焼成部床面№20・35	蓋(坏H)	14.2	－	5.2	23/36	粗砂やや多	灰白	灰白	焼・還		86378
64	206	1号窯窯体	焼成部床面	蓋(坏H)	約14	－	(4.0)	17/36	粗砂、礫	灰褐	灰	転	口縁部熔着で欠損。倒位で焼き台転用(破断面に自然釉)	86347
64	207	1号窯窯体	焼成部床面№50	蓋(坏H)	14.0	－	(3.7)	11/36	粗砂、礫	灰白	淡灰	焼・還		86390
64	208	1号窯窯体	焼成部床面№48	蓋(坏H)	14.0	－	(3.9)	11/36	粗砂、礫多	灰黄褐	灰	焼・還	外面自然釉顕著	86250
64	209	1号窯窯体	焼成部床面№43	蓋(坏H)	14.4	－	4.6	8/36	粗砂、礫少	浅灰黄	浅灰黄	生・還	生焼け、焼き歪みあり。天井部外面雑ナデ範囲広い	86330
64	210	1号窯窯体	焼成部床面№23	蓋(坏H)	14.4	－	4.5	4/36	粗砂、礫	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	焼き割れあり	86379
64	211	1号窯窯体	焼成部床面№51	蓋(坏H)	14.3	－	4.6	26/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	青灰、灰白	焼・還	焼き歪みあり。外面自然釉熔着	86425
64	212	1号窯窯体	焼成部床面№1	蓋(坏H)	14.4	－	5.1	21/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	灰白	生・還	生焼け	86350
64	213	1号窯窯体	焼成部床面	蓋(坏H)	14.5	－	4.3	16/36	粗砂、礫少	淡灰黄	浅黄灰	生・還	生焼け	86326
64	214	1号窯窯体	焼成部床面	蓋(坏H)	14.5	－	4.3	15/36	粗砂少、礫	灰	灰	焼・還		86371
64	215	1号窯窯体	焼成部床面№27	蓋(坏H)	15.2	－	4.2	15/36	粗砂、礫	灰白	灰	生・還	生焼け、焼き割れ。一部黒色	86374
65	216	1号窯窯体	焼成部床面№45	蓋(坏H)	15.0	－	4.5	17/36	粗砂、礫少	浅黄灰	浅黄灰	生・還	生焼け	86328
65	217	1号窯窯体	前庭部、焼成部床面	蓋(坏H)	14.8	－	4.9	12/36	粗砂、礫多	淡灰黄	灰	生・還	生焼け、焼き割れあり	86375
65	218	1号窯窯体	焼成部床面№49	蓋(坏H)	－	－	(3.7)	0/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86341
65	219	1号窯窯体	焼成部床面	蓋(坏H)	15.0	－	4.7	9/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86349
65	220	1号窯窯体	焼成部床面	蓋(坏H)	〔15.2〕	－	4.5	20/36	粗砂、礫少	灰白	オリーブ灰	生・還	生焼け、焼き割れ。径に不安残す	86344
65	221	1号窯窯体	焼成部床面№50・51	蓋(坏H)	13.9	－	4.3	27/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成。蓋223と熔着、自然釉・窯壁土顕著	86312
65	222	1号窯窯体	焼成部床面	蓋(坏H)	13.5	－	(4.3)	12/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著	86315
65	223	1号窯窯体	焼成部床面№48	坏H	13.6	－	(3.3)	8/36	粗砂、礫少	灰	灰緑	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著。221と熔着	86313
65	224	1号窯窯体	燃焼部焚口付近床面	坏H	12.6	－	4.6	15/36	細砂多、礫微	灰白	淡灰	焼・還	倒位焼成。蓋熔着、外面自然釉、焼き膨れ顕著	86316
65	225	1号窯窯体	焼成部床面№51	坏H	11.6	－	(3.0)	8/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	正位焼成。外面自然釉熔着	86468
65	226	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	12.0	－	(3.4)	7/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還		86467
65	227	1号窯窯体	焼成部床面№16・17	坏H	〔11.9〕	－	〔4.7〕	35/36	微砂粒多、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成。焼き割れ顕著、自然釉熔着	86216

第 34 表　窯跡出土遺物観察表 5

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
65	228	1号窯窯体	焼成部床面№50	坏H	12.5	－	4.5	4/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け、焼き割れ顕著	86306
65	229	1号窯窯体	焼成部床面№49	坏H	12.4	－	3.9	34/36	粗砂多、礫	灰白	灰	焼・還	焼き割れ顕著。外面黒化	86208
65	230	1号窯窯体	焼成部床面№51・54	坏H	12.5	－	3.7	30/36	礫少、細砂多	灰白	灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉熔着	86301
65	231	1号窯窯体	焼成部床面№45	坏H	12.6	－	4.0	36/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面降灰あり	86207
65	232	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	12.8	－	4.8	17/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	生・還	249と接合。焼き割れ顕著	86305
65	233	1号窯窯体	焼成部床面№59	坏H	12.8	－	4.6	35/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け、口縁部黒色	86204
65	234	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	12.8	4.4	4.2	9/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	口縁部焼き歪み顕著	86319
65	235	1号窯窯体	燃焼部焚口付近床面	坏H	11.8	－	(3.4)	9/36	粗砂多、礫少	灰	淡灰	焼・還	器肉薄い	86466
65	236	1号窯窯体	前庭部、焼成部床面	坏H	12.0	－	4.2	34/36	粗砂多、礫多	褐灰	灰	焼・還	生焼けに近い部分あり。正位焼成、焼き割れ	86206
65	237	1号窯窯体	燃焼部床面、燃焼部焚口付近床面	坏H	11.6	4.8	4.2	11/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼・還	正位・無蓋焼成。内外面自然釉顕著	86310
65	238	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	12.2	4.9	4.4	4/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86308
65	239	1号窯窯体	焼成部床面№32	坏H	12.2	－	4.1	3/36	粗砂多、礫少	灰白、灰	灰	転	破断面に焼土付着	86325
65	240	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	12.6	－	3.3	13/36	粗砂多、礫少	灰白、黒	灰白、黒	生・還	生焼け、焼成中に焼き割れ、破片黒色あり	86314
65	241	1号窯窯体	焼成部床面№48	坏H	12.9	－	4.5	36/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	197と類似の焼成具合。口縁部黒色	85299・85298
65	242	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	13.0	－	4.5	14/36	粗砂多、礫少	灰	灰	生・還	生焼け	86307
65	243	1号窯窯体	焼成部床面№14	坏H	12.8	－	4.2	35/36	粗砂多	淡灰	淡灰	焼・還	倒位焼成。外面自然釉顕著	86317
65	244	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	13.0	－	4.0	12/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰	生・還	生焼け、口縁部黒色	86382
65	245	1号窯窯体	焼成部床面№53、燃焼部焚口付近床面	坏H	11.8	－	(3.3)	21/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	転	内外面自然釉顕著。他個体熔着	86212
65	246	1号窯窯体	焼成部床面№48・49	坏H	12.0	－	3.7	2/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け、口縁部黒色	86309
65	247	1号窯窯体	焼成部床面№48	坏H	12.3	－	4.1	29/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	倒位焼成か。外面自然釉熔着、焼き歪み	86304
65	248	1号窯窯体	焼成部床面№47	坏H	12.3	－	(4.4)	16/36	粗砂多、礫多	淡灰	灰	焼・還か	生焼けに近い	86214
65	249	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	12.8	－	(4.2)	11/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	232と接合。焼き割れ顕著	86566
65	250	1号窯窯体	焼成部床面№47	坏H	13.0	－	(3.9)	12/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	正位焼成、蓋口縁部熔着、外面自然釉顕著	86311
65	251	1号窯窯体	焼成部床面№48・49	坏H	12.6	－	4.1	28/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	正位焼成。外面自然釉	86201
65	252	1号窯窯体	焼成部床面№20・49	坏H	12.8	－	4.3	30/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け、焼き割れあり。クシ状工具痕	86302
65	253	1号窯窯体	焼成部床面№46	坏H	13.2	－	4.4	19/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86218
65	254	1号窯窯体	焼成部床面№17	坏H	13.0	5.5	4.6	20/36	礫少、細砂多	灰	灰	焼・還	焼き割れ、焼成ややあまい印象	86318
66	255	1号窯窯体	焼成部床面№19	坏H	12.8	－	3.8	24/36	礫少、細砂多	灰	灰	焼・還	正位焼成。焼き割れ顕著	86202
66	256	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	13.0	4.9	4.1	6/36	粗砂多、礫	灰白	灰白	焼・還	焼き割れあり	86380
66	257	1号窯窯体	焼成部床面№33	坏H	13.8	4.9	4.5	16/36	礫少、細砂多	淡灰黄	淡灰黄	生・還	正位焼成。生焼け、焼き割れあり	86381
66	258	1号窯窯体	焼成部床面№25	坏H	〔13.6〕	－	(4.8)	24/36	礫少、細砂多	灰白	灰	焼・還	正位焼成。焼き歪み、焼き割れ顕著	86303
66	259	1号窯窯体	焼成部床面№45	坏H	13.2	－	4.1	36/36	礫少、細砂多	灰	灰	焼・還	正位焼成。焼き歪みあり	86210
66	260	1号窯窯体	焼成部床面№48	坏H	13.4	－	3.8	36/36	礫少、細砂多	淡灰黄	灰	生・還	生焼け。焼き割れ顕著	86217
66	261	1号窯窯体	2層床面	坏H	13.2	－	4.4	29/36	礫少、細砂多	淡灰黄	灰白・黒	生・還	正位焼成。生焼け、口縁部周辺黒色	86322
66	262	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	〔14.2〕	－	〔5.4〕	7/36	礫少、細砂多	淡灰	灰	焼・還	焼き歪み顕著	86323
66	263	1号窯窯体	№51燃焼部焚口付近床面	坏H	13.0	－	(3.3)	11/36	粗砂多	淡灰	淡灰	焼・還	正位焼成か。蓋口縁部熔着、外面自然釉	86321
66	264	1号窯窯体	焼成部床面、2層床面	坏H	13.2	－	4.0	23/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉。外底にクシ状工具痕	86320
66	265	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	13.6	－	(3.3)	7/36	粗砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面自然釉熔着顕著	86567
66	266	1号窯窯体	焼成部床面	坏H	14.6	－	(4.1)	9/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外底仕上げ丁寧。外面一部自然釉熔着	86324
66	267	1号窯窯体	焼成部床面№49	坏H	14.9	－	(3.8)	10/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86219
66	268	1号窯窯体	焼成部床面№8・21・49	蓋(高坏Aか)	－	－	(5.3)	－	粗砂、礫	淡黄橙	赤褐	生・還	生焼け	86376
66	269	1号窯窯体	焼成部床面№12	蓋(高坏A)	15.6	鈕2.5	5.4	34/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	天井部外面に径9.3cmの重ね焼き痕、内面に同心円タタキ痕。外面黒化	85543
66	270	1号窯窯体	焼成部床面№46	高坏A	－	15.0	(12.5)	脚31/36	粗砂多	灰緑	灰	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、内面自然釉顕著	86246
66	271	1号窯窯体	焼成部床面№49	高坏A	－	14.9	(12.4)	－	粗砂多、礫少	灰緑	灰	焼・還	3方2段透かし。倒位焼成、内面自然釉顕著	86234
66	272	1号窯窯体	燃焼部焚口付近床面№52	高坏B	13.3	－	(4.4)	20/36	粗砂多、礫少	淡褐灰	灰	焼・還	正位無蓋焼成。2方透かし	86230
66	273	1号窯窯体	燃焼部焚口付近床面	高坏B	－	12.8	(10.4)	脚36/36	粗砂多、礫少	オリーブ黒	灰	焼・還	正位無蓋焼成、外面降灰。2方透かし	86238
66	274	1号窯窯体	焼成部床面、燃焼部焚口付近床面№52№32	高坏B	－	12.2	(7.3)	脚35/36	粗砂、礫少	オリーブ黒	灰	焼・還	正位無蓋焼成、外面降灰。2方透かし	86235
66	275	1号窯窯体	焼成部床面	高坏B	－	11.2	(6.8)	脚11/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成	86232
66	276	1号窯窯体	焼成部床面	壷類	13.6	－	(2.4)	7/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼・還	沈線2条。正位無蓋焼成。内面自然釉熔着	86490
66	277	1号窯窯体	焼成部床面№51	横瓶か	15.4	－	(3.4)	8/36	微砂粒多	灰	淡灰	焼・還	正位無蓋焼成。内外面自然釉顕著	86220
66	278	1号窯窯体	焼成部床面	提瓶か	8.0	－	(4.4)	25/36	粗砂多	灰	灰	焼・還	正位無蓋焼成。内外面自然釉顕著	86223
66	279	1号窯窯体	前庭部、焼成部床面	壷類	－	－	(5.0)	－	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	灰	生・還	肩部沈線1条	86225
66	280	1号窯窯体	焼成部床面	壷類	－	－	(4.0)	－	粗砂多	灰白	灰白	焼・還	内面剥離。焼き割れあり	86783
66	281	1号窯窯体	焼成部床面、D-20表土	壷類	－	－	(10.7)	－	粗砂多、礫少	黄橙	灰	焼・還	外面回転ケズリ	86492
66	282	1号窯窯体	2層床面	壷類	－	－	(4.5)	－	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面回転ケズリ、降灰あり	86491
66	283	1号窯窯体	2層床面	提瓶	－	－	－	－	粗砂多、礫少	淡灰	灰	生・還	外方向から粗いカキメ調整	86782
66	284	1号窯窯体	焼成部床面	提瓶	－	－	(3.6)	－	粗砂多、礫少	淡灰	灰	生・還	外方向から粗いカキメ調整	86784
67	285	1号窯窯体	焼成部床面№58、灰原D-20表面	甕	21.2	－	(16.8)	9/36	粗砂多	暗灰	淡灰	焼・還	内面Da類か、外面Hb類。正位無蓋焼成、自然釉熔着	85355
67	286	1号窯窯体	焼成部床面№25	甕	27.2	－	(7.4)	6/36	粗砂多、大型礫少	灰	灰	転	焼き台(置き台)転用	85349
67	287	1号窯窯体	焼成部床面№27・28	甕	23.2	－	(8.0)	14/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	内面Dc類、外面Hb類。黒斑あり	85354
67	288	1号窯窯体	焼成部床面№6	甕	約46	－	(10.0)	3/36	礫多	暗赤褐	黒褐	転	焼き台(置き台)転用。甕片熔着	86590
68	289	6号窯窯体	焼成室最終床	蓋(坏H)	12.3	－	4.1	36/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	天井部内面ナデ調整顕著、外面クシ状工具痕あり。正位焼成、外面黒化	86203
68	290	6号窯窯体	焼成室最終床、最終床天井崩落土	蓋(坏H)	12.8	－	3.3	12/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還/転か	破断面含め降灰あり	85242
68	291	6号窯窯体	焼成室最終床、最終床天井崩落土	蓋(坏H)	12.6	－	4.2	11/36	粗砂、礫少	淡灰/黄	灰	転	倒位で焼き台(置き台)に転用。内面降灰・焼土熔着。焼き歪み顕著	85243

第 35 表　窯跡出土遺物観察表 6

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
68	292	6号窯窯体	焼成室最終床、焚口埋土、前庭部黒灰色土	蓋(坏H)	13.0	－	4.4	28/36	細砂多、礫	灰	暗灰	転	外面降灰・焼土熔着。焼き割れ顕著	85304
68	293	6号窯窯体	最終床天井崩落土	蓋(坏H)	15.0	－	(3.4)	8/36	細砂多、礫	灰	灰黄	焼・還/転か	外面降灰・焼土熔着、内面火だすき痕。復元径に不安残す	86402
68	294	6号窯窯体	最終床天井崩落土	蓋(坏H)	15.0	－	(4.0)	7/36	粗砂多、大型礫少	灰	暗灰	焼・還	外面降灰・黒化	85241
68	295	6号窯窯体	焼成室最終床	坏H	約10	－	(2.8)	6/36	粗砂多	淡灰	灰	転	破片化後、倒位で焼き台(置き台)に転用、全面に窯土熔着	86404
68	296	6号窯窯体	焼成室最終床	坏H	11.0	－	4.1	8/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	外底にクシ状工具痕あり。外面降灰あり	86222
68	297	6号窯窯体	焼成室最終床	坏H	11.6	－	4.8	20/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	蓋口縁部片熔着、外面降灰あり	85233
68	298	6号窯窯体	焼成室最終床	坏H	12.0	－	(2.7)	6/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	転		86403
68	299	6号窯窯体	焼成室最終床、前庭部黒灰色土	坏H	11.8	－	4.0	28/36	粗砂多、礫少	灰	灰	転	焼き台(置き台)に転用。焼き割れあり	85305
68	300	6号窯窯体	焼成室床内	坏H	12.8	－	3.9	19/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	外面自然釉・降灰あり	85232
68	301	6号窯窯体	焼成室最終床	坏H	12.6	－	3.7	9/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成。外底に熔着物あり	85234
68	302	6号窯窯体	焚口埋土	坏H	約12	－	(3.3)	－	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け、磨滅顕著	86654
68	303	6号窯窯体	焼成室最終床、前庭部凹み黒灰色土	蓋(鉢G)	11.1	返し 8.7	(1.9)	10/36	粗砂多	灰	灰緑	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著で調整不明	85494
68	304	6号窯窯体	焼成室最終床	蓋(鉢G)	約12	返し(約10)	(1.2)	－	粗砂	灰	灰	焼・還		86401
68	305	6号窯窯体	焼成室最終床、前庭部凹み黒灰色土	蓋(鉢G)	12.1	返し 9.4	3.8	22/36	粗砂少	灰	緑灰	焼・還	鈕径1.0cm。正位焼成。外面自然釉顕著で、釉下にカキメ調整あり	85239
68	306	6号窯窯体	焚口埋土	蓋(鉢G)	12.3	返し 9.8	(2.3)	5/36	粗砂少	灰	緑灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著で調整不明	85236
68	307	6号窯窯体	焼成室最終床	蓋(鉢G)	12.5	返し 9.9	3.2	28/36	粗砂多	灰	緑灰	焼・還	鈕径0.9cm。正位焼成、外面自然釉顕著。カキメ調整は図よりロ縁部寄りまで施す	85238
68	308	6号窯窯体	焼成室最終床	蓋(鉢G)	12.5	返し 9.7	(2.2)	10/36	粗砂少	灰	黄灰	焼・還	正位焼成。外面全体に窯壁土粒熔着顕著、調整不明	85493
68	309	6号窯窯体	焚口埋土	蓋(鉢G)	12.7	返し 9.7	(2.4)	7/36	粗砂少	灰	灰緑	焼・還	正位焼成、外面自然釉・窯壁土顕著で調整不明	85235
68	310	6号窯窯体	焼成室最終床、前庭部凹み黒灰色土、6・7号窯表面	蓋(鉢G)	12.8	返し10.0	(2.7)	16/36	粗砂少	灰	灰オリーブ	焼・還	丁寧なカキメ調整。正位焼成、外面自然釉・降灰顕著	85213
68	311	6号窯窯体	焚口埋土	鉢か	13.8	－	(3.5)	4/36	粗砂多	淡灰	淡灰	焼・還	外面自然釉。傾きに不安残す	85526
68	312	6号窯窯体	焚口埋土 前庭部黒灰色土	鉢か	約15	－	(6.5)	5/36	粗砂少	淡灰	灰	焼・還	外面自然釉熔着。下半は焼き歪みのため図に不安あり。341と同一個体	85485
68	313	6号窯窯体	焼成室最終床	鉢か	12.6	－	(6.1)	12/36	細砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	正位焼成、内面降灰・外面黒化。提瓶の可能性あり	85217
68	314	6号窯窯体	焼成室最終床、前庭部黒灰色土	瓶	8.5	－	(5.1)	16/36	細砂、礫少	淡灰 オリーブ	灰	焼・還	正位焼成。破断面含め自然釉熔着	85209
68	315	6号窯窯体	焼成室最終床	壷か	10.9	－	(5.1)	11/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	提瓶の可能性あり	85218
68	316	6号窯窯体	焚口埋土、前庭部黒灰色土	長頸瓶か	－	11.8	(5.0)	脚 12/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰 オリーブ	焼・還	未図化だが3方透かし(略三角形)あり。正位焼成、外面自然釉熔着	85483
68	317	6号窯窯体	焼成室最終床	瓶類	－	約13	(2.5)	脚 7/36	細砂多、粗砂	灰	灰	焼・還	透かし孔(数不明)。内面降灰あり	85489
68	318	6号窯窯体	焼成室最終床	甕	約60	－	(6.8)	4/36	粗砂多、礫多	暗灰	暗灰	転	2条1単位の沈線、3列の斜行刺突文で加飾。焼き台(置き台)に転用、全面降灰あり	85532
68	319	6号窯窯体	焼成室最終床	鉢C(厚底)	－	8.5	(2.8)	－	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還/転か	外底ケズリに近い粗いナデ調整。破断面含め自然釉熔着	85210
68	320	6号窯窯体	焼成室最終床	甑	19.0	9.0	23.6	16/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	円孔4ヶ所。内面ロクロナデ、外面下半ハケ、上半カキメ。把手に有溝あり	85247
69	321	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(坏H)	約11	－	(4.5)	7/36	粗砂、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	正位焼成。外面自然釉顕著	86405
69	322	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(坏H)	12.9	－	3.2	6/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	正位焼成。外面自然釉熔着	85201
69	323	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(坏H)	13.6	－	3.6	7/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	天井部外面はナデ調整後クシ状工具痕あり。外面降灰、黒化	85200
69	324	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(坏H)	13.6	－	4.1	5/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還/転か	天井部外面はナデ調整後クシ状工具痕あり。外面降灰、焼き歪みあり	85224
69	325	6号窯前庭部	前庭部、6・7号窯表土	蓋(坏H)	14.7	－	4.4	5/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	天井部外面はナデ調整後クシ状工具痕あり	85212
69	326	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土、灰原(6－F黒灰色土)	坏H	11.4	－	3.5	14/36	粗砂、礫少	淡灰黄	灰	生・還	外底に焼成前ヘラ記号「×」。生焼け、焼き歪みあり	85216
69	327	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	12.2	－	(3.8)	9/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	85215
69	328	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	約13	－	(2.6)	6/36	粗砂少	灰白	灰緑	焼・還	外面自然釉熔着、倒位焼成か	86200
69	329	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	約12.6	－	(3.0)	5/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	焼・還	外面自然釉熔着、倒位焼成か	86182
69	330	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土、灰原(6-F黒灰色土)	坏H	12.8	－	(2.7)	13/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還		85214
69	331	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	約13	－	(3.4)	4/36	粗砂、礫少	暗灰	暗灰	焼・還		86186
69	332	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	13.2	－	3.6	2/36	粗砂、礫少	灰白	淡灰 オリーブ	焼・還	外底ナデ調整後、クシ状工具痕。倒位焼成か、外面自然釉・降灰あり。焼き歪みあり	86199
69	333	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	約13	－	(3.2)	3/36	粗砂多、礫少	灰	灰緑	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著。焼き歪みあり	86187
69	334	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(鉢G)	11.0	返し 8.4	(1.8)	5/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰 オリーブ	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著、調整不明	85225
69	335	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(鉢G)	11.2	返し 8.7	(2.3)	13/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰 オリーブ	焼・還	正位焼成。外面降灰顕著、調整不明	85226
69	336	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(鉢G)	11.1	返し 8.6	(3.0)	17/36	粗砂、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	鈕径0.8cm。正位焼成。外面全体に窯壁土粒熔着顕著、調整不明	85240
69	337	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(鉢G)	11.8	返し 9.0	3.4	11/36	粗砂多、大型礫少	淡灰	淡灰/橙	焼・還	鈕径1.0cm。正位焼成。外面自然釉熔着	85509
69	338	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(鉢G)	11.9	返し 9.0	(1.4)	12/36	粗砂多、礫少	灰	灰緑	焼・還	正位焼成。外面全体に窯壁土粒熔着顕著、調整不明	85517
69	339	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(鉢G)	12.6	返し10.0	(1.6)	14/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	正位焼成。外面全体に窯壁土粒熔着顕著、調整不明	85515
69	340	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢か	約16	－	(5.5)	2/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	外面をカキメ調整後、沈線で加飾。鉄鉢の可能性あり	85531
69	341	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢か	11.8	－	(4.2)	14/36	粗砂	淡灰	淡灰	焼・還	外面自然釉熔着。焼き歪みのため図に不安あり。312と同一個体	85484
69	342	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢か	12.8	－	(4.4)	7/36	粗砂、礫少	淡灰黄	灰	生・還	厚手。生焼け、外面黒化	85512
69	343	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	不明	約14	－	(2.7)	5/36	粗砂多、礫少	淡黄灰	淡灰	焼・還	小片、焼き歪みあり。傾きに不安あり	85507
69	344	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土、1号トレンチ配石遺構覆土	鉢か	約17	－	(8.9)	7/36	粗砂多、礫少	灰	灰オリーブ	転	外面自然釉のため緑灰色、窯着物付着	85536
69	345	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏A	－	15.6	(5.1)	7/36	細砂、礫少	灰オリーブ	淡灰	焼・還	3方透かしか。倒位焼成、内面自然釉顕著	85211
69	346	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土、灰原(6-F黒灰色土)	高坏B	12.8	－	(8.6)	11/36	細砂、礫少	灰	灰オリーブ	焼・還	2方透かし。正位焼成・坏部内面降灰あり	85227
69	347	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏D	11.0	－	(4.8)	脚 16/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	2方透かし。正位焼成・外面降灰あり	85228
69	348	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕か	11.4	－	(3.0)	11/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	倒位焼成か。外面一部に自然釉熔着。鉢脚の可能性あり	85514
69	349	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢Gか	約13	－	(3.4)	5/36	粗砂少	灰オリーブ	淡灰	焼・還	薄手。正位焼成、内面降灰・自然釉顕著	86183
69	350	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢Gか	約14	－	(3.6)	12/36	粗砂少	灰白	灰白	焼・還	薄手。正位焼成、自然釉・降灰あり。焼き歪み顕著	86184
69	351	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢Gか	約14	－	(4.2)	15/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	薄手。正位焼成、降灰あり	86185
69	352	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	瓶類	10.0	－	(5.4)	14/36	粗砂、大型礫少	淡灰 オリーブ	淡灰 オリーブ	焼・還	正位焼成、内面自然釉・降灰顕著	86177

第 36 表　窯跡出土遺物観察表 7

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
69	353	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土、灰原(6-F、5-F黒灰色土)、5、6-G撹乱、1号トレンチ配石遺構覆土	長頸瓶	－	－	(12.5)	－	細砂、礫多	灰白	灰白	生・還	生焼け。破片の一つを焼き台に転用	85295
69	354	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土、1号トレンチ配石遺構覆土	長頸瓶	－	14.6	(5.7)	脚31/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	長方形透かし孔4ヶ所(不規則)。正位焼成、外面降灰あり	85310
69	355	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	長頸瓶	－	15.8	(5,3)	脚3/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	長方形透かし孔か(数不明)。正位焼成、外面自然釉顕著	85246
70	356	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	小型壺	5.3	－	(2.2)	9/36	細砂少	淡灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	正位無蓋焼成	85522
70	357	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土、配石遺構周辺	鉢	－	－	(9.8)	－	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	転	提瓶の可能性あり。破断面含め自然釉顕著	86406
70	358	6号窯前庭部	前庭部凹み	甕	24.0	－	(6.0)	2/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還		86407
70	359	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	約19	－	(4.8)	7/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成、降灰あり。360と同一個体か	85229
70	360	6号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	約20	－	(6.1)	3/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成、降灰あり。359と同一個体か	85230
70	361	6号窯灰原	灰原5・6-F黒灰色土	蓋(坏H)	12.4	－	(3.7)	17/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	倒位焼成、焼き歪みあり	85344
70	362	6号窯灰原	灰原6-F黒灰色土	蓋(坏H)	12.9	－	(3.7)	8/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面降灰あり	86494
70	363	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	蓋(坏H)	13.8	－	4.6	10/36	粗砂多、礫少	灰	灰オリーブ	転	倒位で焼き台転用。口縁部焼土熔着	85347
70	364	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	坏H	10.8	－	3.9	5/36	粗砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・還	倒位焼成、外面自然釉顕著	86514
70	365	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	坏H	10.8	－	(4.0)	7/36	細砂多、礫少	灰白	灰オリーブ	焼・還	外面自然釉顕著	86516
70	366	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	坏H	10.6	－	(2.5)	13/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著	85527
70	367	6号窯灰原	灰原6-F黒灰色土、6・7号窯	坏H	12.1	－	4.2	24/36	細砂多、礫	灰	灰	焼・還	正位無蓋焼成、内外面自然釉顕著	85345
70	368	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	坏H	12.3	－	3.5	4/36	粗砂、礫少	灰白	灰	焼・還	外底にクシ状工具痕。焼き歪みあり	86518
70	369	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	坏H	12.2	－	(3.1)	6/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著	86517
70	370	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	坏H	12.8	－	(3.6)	7/36	粗砂、礫少	灰白	淡灰黄	焼・還	6mm大の礫混ざる	86513
70	371	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	坏H	13.0	－	(4.0)	7/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰黄	焼・還	外面降灰顕著	85530
70	372	6号窯灰原	灰原5-G黒灰色土	坏H	13.8	－	(3.7)	8/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	生焼け	86515
70	373	6号窯灰原	灰原6-F黒灰色土	高坏A	13.7	－	(4.2)	36/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	有蓋。外底は回転ナデ調整、透かしを入れる工具痕残る。やや焼き歪みあり、外面黒化	85348
70	374	6号窯灰原	灰原6-F黒灰色土	蓋(鉢G)	13.0	返し 10.0	(2.0)	5/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還		85523
70	375	6号窯灰原	灰原5-F、6-F黒灰色土	蓋(鉢G)	11.7	返し 8.4	(2.1)	20/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	外面自然釉顕著。焼き歪みあり	85505
70	376	6号窯灰原	灰原6-F黒灰色土	蓋(鉢G)	12.5	返し 10.2	2.3	6/36	砂粒	灰	灰	焼・還	鈕径0.9cm。外面自然釉顕著	85346
70	377	6号窯灰原	灰原6-F黒灰色土	蓋(鉢G)	10.8	返し 7.5	(2.4)	10/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	内面焼土・降灰顕著、倒位焼成か	85518
70	378	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	蓋(鉢G)	－	鈕径1.4	(1.9)	鈕完	細砂、礫少	灰	淡灰オリーブ	焼・還	外面降灰あり	85488
70	379	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土、5-G黒灰色土	蓋(高坏か)	14.4	－	3.9	9/36	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	無鈕、天井部外面カキメ調整。正位焼成	85353
70	380	6号窯灰原	灰原6-F黒灰色土、6・7号窯	甕	－	－	(3.4)	10/36	礫少	淡灰	灰オリーブ	転	薄手。内面の降灰・焼土熔着顕著、焼き台(置き台)に転用	86178
70	381	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土、6・7号窯	甕	－	－	(5.8)	10/36	粗砂、礫多	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	内外面自然釉顕著、焼き歪みあり	85231
70	382	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	甕か	－	11.0	(4.1)	脚9/36	粗砂多、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還	倒位焼成。内外面自然釉熔着。鉢の可能性高い	86179
70	383	6号窯灰原	灰原5-F・6-F・5-G黒灰色土、6・7号窯	提瓶	－	－	18.5	－	粗砂、礫少	灰白	灰/淡黄灰	焼・還	正位焼成、自然釉熔着	85289
70	384	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	提瓶	－	－	(5.0)	－	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰	生・還	1側面生焼け。外面全体に丁寧なカキメ調整。閉塞円盤径約3cm	85291
70	385	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	鉢C(厚底)	－	9.4	(2.5)	－	粗砂、礫少	－	灰	焼・還	外面降灰あり。焼成中に剥離	86181
70	386	6号窯灰原	灰原5-F黒灰色土	鉢C(厚底)	－	(10.0)	(1.2)	－	礫少	淡黄灰	淡黄灰	焼・還	外底にケズリ調整。焼成中に剥離	86180
71	387	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	蓋(坏H)	約12	－	(3.0)	5/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面自然釉顕著	85150
71	388	11号窯窯体	焼成室床面断ち割り中	蓋(坏H)	12.6	－	(3.9)	6/36	細砂多、粗砂	灰	灰	焼・還	焼き歪みあり	85145
71	389	11号窯窯体	窯体流込土	蓋(坏H)	12.7	－	4.5	7/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	天井部外面クシ状工具痕。焼き歪み・割れあり	85136
71	390	11号窯窯体	最終床面天井崩落土	蓋(坏H)	13.4	－	(3.4)	10/36	細砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	86531
71	391	11号窯窯体	焼成室床面断ち割り中	蓋(坏H)	13.4	－	(3.8)	6/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	外面降灰あり	85144
71	392	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	蓋(坏H)	13.9	－	(3.8)	12/36	細砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	85151
71	393	11号窯窯体	焼成室床面断ち割り中	蓋(坏H)	13.9	－	3.0	13/36	粗砂多、礫少	淡灰黄、灰	淡灰黄、灰	生・還	生焼け	85146
71	394	11号窯窯体	最終床面天井崩落土	蓋(坏H)	約14	－	(4.2)	6/36	細砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86415
71	395	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	蓋(坏H)	14.5	－	4.5	6/36	細砂多、粗砂	淡黄灰	灰白	生・還	生焼け	85155
71	396	11号窯窯体	窯体流込土	坏H	約10か	－	(2.5)	7/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	外面自然釉顕著	86448
71	397	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	坏H	11.4	－	(3.5)	5/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰黄	焼・還		85147
71	398	11号窯窯体	窯体流込土	坏H	12.0	－	(2.5)	7/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86449
71	399	11号窯窯体	焼成室床内	坏H	約12	－	(2.4)	8/36	粗砂多、礫	暗灰褐	暗灰褐	焼・還	外面降灰あり	86409
71	400	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	坏H	12.2	－	(2.1)	9/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	85148
71	401	11号窯窯体	窯体流込土	坏H	12.8	7.5	3.3	5/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外底に自然釉熔着	85458
71	402	11号窯窯体	床面内	蓋(鉢G)	11.5	返し 9.1	3.2	36/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	鈕径0.9cm。正位焼成。外面降灰顕著で調整不明	86211
71	403	11号窯窯体	窯体流込土	蓋(坏G)	9.4	返し 7.6	(2.1)	10/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面降灰顕著、焼き歪みあり	85135
71	404	11号窯窯体	煙道流込土	蓋(坏G)	10.4	返し 8.5	(1.5)	17/36	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	天井部不整削り・外縁粗い回転ケズリ。正位焼成、返しつぶれる	85071
71	405	11号窯窯体	窯体流込土	蓋(坏G)	10.3	返し 8.6	(2.7)	8/36	細砂、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	焼き歪み・膨れあり	85134
71	406	11号窯窯体	4-F茶色土	蓋(坏G)	10.7	返し 9.1	2.7	18/36	細砂、礫少	淡灰	灰黄	焼・還	鈕径1.5cm。天井部回転ナデか。正位焼成、外面降灰あり	85132
71	407	11号窯窯体	窯体流込土	坏G	9.0	6.6	3.2	14/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面黒化	85137
71	408	11号窯窯体	煙道部埋土	坏G	9.2	5.6	4.0	4/36	粗砂	灰白	灰白	焼・還	体部下縁にヘラ起こしの回転ケズリ。外底に焼成前ヘラ記号「/」	86580
71	409	11号窯窯体	窯体流込土	坏G	9.3	6.5	3.4	11/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	焼き歪みあり	85004
71	410	11号窯窯体	最終床天井崩落土	鉢G	11.8	7.9	4.0	9/36	粗砂多、礫少	灰橙	灰	焼・還/酸	焼き歪み、無蓋で重ね焼きか	85244
71	411	11号窯窯体	窯体流込土	盤	約21	－	3.4	8/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	小片。焼き歪み顕著	86605

第 37 表　窯跡出土遺物観察表 8

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
71	412	11号窯窯体	窯体流込土、煙道部流込土、前庭部黒灰色土、7号窯灰原(3-E茶色土、4-E褐色土)、6･7号窯表土	盤	〔27.0〕	10.8	〔10.2〕	15/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼･還	図上復元、焼き歪み顕著	85259
71	413	11号窯窯体	窯体流込土	蓋(高坏A)	14.3	－	(4.0)	5/36	細砂多、礫微	灰白	灰白	生･還	天井部外面カキメ調整。生焼け	86445
71	414	11号窯窯体	最終床面天井崩落土	高坏D	11.7	－	(2.4)	6/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼･還	稜は鋭い	86589
71	415	11号窯窯体	前庭部黒灰色土	高坏D	12.4	－	(3.2)	3/36	粗砂、礫少	灰	灰緑	転	破損後、倒位で焼き台転用。外面自然釉熔着	85090
71	416	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	高坏D	12.0	－	(4.0)	6/36	粗砂多、礫多	灰白	灰	焼･還	正位無蓋焼成、内面降灰	85149
71	417	11号窯窯体	焼成室床面上	高坏B	13.9	－	(3.2)	4/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼･還	稜は鋭い	86582
71	419	11号窯窯体	窯体流込土	高坏B	15.4	－	(4.0)	14/36	粗砂、礫少	浅黄橙	浅黄橙	生･酸	稜は鋭い。生焼け	85005
71	420	11号窯窯体	窯体流込土、焼成室天井崩落土	高坏B	15.2	－	(4.4)	4/36	粗砂多、礫少	白灰	白灰	生･還	稜は鋭い。生焼け	85152
71	421	11号窯窯体	窯体流込土、6･7号窯	高坏A	－	17.0	(8.7)	脚4/36	粗砂、礫少	灰緑	灰	焼･還	3方透かし。倒位焼成、内面降灰顕著	85102
71	422	11号窯窯体	焼成室床面内、4-G撹乱層	高坏A	－	14.5	(6.1)	脚6/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼･還	3方透かし	85098
71	423	11号窯窯体	最終床面天井前	高坏Aか	－	15.4	(3.7)	脚5/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼･還	透かし数不明	86416
71	424	11号窯窯体	最終床面天井脇、窯体流込土、焼成室天井崩落土	高坏B	－	15.8	(6.3)	脚27/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生･還	2方透かし。生焼け	86581
71	425	11号窯窯体	窯体流込土、最終床面天井崩落土	高坏Aか	－	15.7	(6.2)	脚16/36	粗砂、礫少	淡黄橙	淡黄橙	生･酸	透かし数不明。生焼け	85099
72	426	11号窯窯体	焼成室床面内	高坏D	－	約12	(1.6)	脚4/36	粗砂、礫少	褐灰	褐灰	焼･還	2方透かしか	86583
72	427	11号窯窯体	最終床面天井崩落土	高坏B	－	13.3	(7.7)	脚28/36	粗砂、礫少	淡灰黄	灰	焼･還	2方透かしか、浅い沈線2条。倒位焼成	85101
72	428	11号窯窯体	焼成室天井崩落土、4-G撹乱層	高坏Bか	－	14.0	(4.5)	脚14/36	粗砂、礫少	淡灰黄	灰	焼･還	浅い沈線2条。焼き歪み目立つ、倒位焼成	85153
72	429	11号窯窯体	焼成室埋土中、窯体最終床面天井崩落土	高坏B	－	14.8	(7.7)	脚4/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生･還	2方透かし	86586
72	430	11号窯窯体	4-F茶色土、前庭部黒灰色土	高坏Bか	－	－	(10.9)	－	細砂、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼･還	2段2方透かし。内外面自然釉熔着	86600
72	431	11号窯窯体	焼成室最終床面、7号窯灰原(3-F～3-G畦、3-G暗褐色土)	高坏B	－	16.2	(9.2)	脚3/36	細砂、礫少	灰オリーブ	灰	焼･還	2段2方透かし。倒位焼成、内面降灰あり	85154
72	432	11号窯窯体	焼成室	甕	－	－	(4.3)	6/36	粗砂多	暗灰	灰褐	焼･還	倒位焼成、外面降灰あり	86412
72	433	11号窯窯体	窯体流込土、4-F茶色土	長頸瓶	8.2	－	(13.1)	1/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼･還	正位焼成、自然釉顕著	85245
72	434	11号窯窯体	窯体流込土	壷	11.4	－	(6.9)	6/36	細砂多、粗砂	淡灰黄	淡灰	焼･還	正位焼成、焼き歪み･割れあり	85103
72	435	11号窯窯体	煙道流込土	瓶	－	－	(9.7)	－	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼･還	正位焼成、外面自然釉熔着。焼き歪みあり	85462
72	436	11号窯窯体	窯体流込土	長頸瓶	－	－	(7.9)	－	粗砂、礫少	灰白	灰白	生･還	肩部を沈線、カキメ、斜行刺突文で加飾。437と同一個体の可能性あり	85002
72	437	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	長頸瓶か	－	14.8	(6.2)	－	粗砂、礫少	灰白	灰白	生･還	透かし孔は三角形。3ヶ所か	85445
72	438	11号窯窯体	煙道部流込土	台付鉢か	－	9.9	(8.4)	脚25/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼･還	底部焼き割れあり	85095
72	439	11号窯窯体	焼成室床面内	甕	10.4	－	(3.4)	7/36	細砂多	灰	淡黄灰	焼･還	倒位焼成、外面降灰あり	86411
72	440	11号窯窯体	最終床面天井崩落土	壷類か	約16	－	(4.3)	4/36	粗砂多、礫少	白灰	白灰	生･還	生焼け	86588
72	441	11号窯窯体	6･7号窯表土、7号窯灰原(3-F褐色土)、11号窯焼成室天井崩落土、4-G撹乱層	提瓶	－	－	(28.0)	－	粗砂、礫少	灰白	灰	焼･還	把手のつくりは丁寧	86480
72	442	11号窯窯体	窯体流込土、6･7号窯表土	鉢	16.2	－	(6.6)	7/36	粗砂多	灰	灰	焼･還	正位焼成、自然釉熔着	85001
72	443	11号窯窯体	窯体流込土	壷	10.7	－	(16.4)	17/36	粗砂多、礫多	灰	灰	生/焼･還	底部･頸部外面平行タタキ。正位焼成、焼き歪み･割れ顕著。底部生焼け	85250
73	444	11号窯窯体	黒灰色土、3-D褐色土、11号窯焼成室最終床面、3-G暗褐色土	壷	－	－	(13.3)	－	細砂、礫多	淡灰	灰	焼･還	正位焼成	86414
73	445	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	壷	－	－	(4.9)	－	細砂、礫少	灰白・暗灰	灰白・暗灰	生･還	生焼け	86585
73	446	11号窯窯体	焼成室床面断ち割り中、前庭部黒灰色土	壷	－	－	(4.0)	－	細砂、礫少	灰白	灰白	生･還	生焼け	86584
73	447	11号窯窯体	焼成室床面内	不明脚	－	5.2	(2.4)	36/36	細砂、礫少	灰	灰褐	焼･還	いびつな成形	85133
73	448	11号窯窯体	焼成室床面内	壷	13.8	－	(2.5)	11/36	細砂多、粗砂	灰	灰	焼･還		86410
73	449	11号窯窯体	焼成室天井崩落土	鉢	17.6	－	(6.9)	5/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼･還	肩部は鋭くつくる	85096
73	450	11号窯窯体	窯体流込土、前庭部、7号窯灰原、6･7号窯表土、3-D土器溜まり褐色土	鉢C(厚底)	18.3	8.3	13.1	10/36	粗砂多、礫多	灰白	灰オリーブ	焼･還	把手数不明。底部穿孔。倒位焼成、焼き割れ顕著	85278
73	451	11号窯窯体	4-F茶色土	甕	15.5	－	(4.7)	9/36	粗砂多	灰	灰	焼･還/転	内面D類、外面H類。沈線乱れる。倒位で焼き台(置き台)転用･焼土熔着	85131
73	452	11号窯窯体	焼成部床面内	甕	約19	－	(3.8)	5/36	細砂多、礫少	淡灰黄	灰	焼･還	層状に剥離あり	86408
73	453	11号窯窯体	窯体流込土	甕	14.4	－	(7.8)	5/36	粗砂多、礫	灰緑	灰緑	転	破片を横位で焼き台転用。全面自然釉顕著	85455
73	454	11号窯窯体	窯体流込土、6･7号窯表土、11号窯4-F茶色土	甕	24.6	－	(4.4)	9/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼･還	全面降灰	85104
73	455	11号窯窯体	窯体流込土	甕	26.0	－	(7.8)	3/36	粗砂、礫少	灰	淡灰オリーブ	焼･還	内面Da類、外面H類。内外面に自然釉熔着	85003
73	456	11号窯窯体	焼成室最終床床面	甕	－	－	(4.6)	－	粗砂、礫少	灰	灰	転	内面Da類、外面H類。破断面に降灰あり	86614
73	457	11号窯窯体	焼成室最終床床面	甕	－	－	(7.1)	－	粗砂、礫少	灰白、暗灰	灰白、暗灰	焼･還		86613
73	458	11号窯窯体	煙道部流込土、煙道部埋土	甕	47.0	－	(19.9)	19/36	細砂多、礫	淡灰	淡灰	焼･還	内面Db類、外面Hb類、波状文6条+6条。焼き歪み･焼き膨れあり。1218と同一個体	85288･85315
73	459	11号窯窯体	窯体流込土、煙道部流込土	甕	38.4	－	(24.9)	34/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼･還	内面Db･c類、外面Ha類、波状文3条+7条。胴部焼き歪み	85286
74	460	11号窯窯体	前庭部、焼成室床面中、床面上、焼成室最終床、4-G撹乱、3-G暗褐色土層	用途不明品	〔長辺約37〕	〔短辺約35〕	〔高さ約61〕	－	粗砂、礫多	淡灰黄～暗灰	淡灰～暗灰	焼･還/転	把手2ヶ所。内面Da類か、外面H類タタキの後ハケ、ナデ。破片化後、二次被熱、体部の一部は焼き台(置き台)に転用、焼土熔着	85316
74	461	11号窯窯体	焼成室最終床面、天井崩落土、3-G暗褐色土、4-G撹乱	用途不明品	長辺(18.9)	短辺(18.1)	高さ(22.1)	－	粗砂、礫多	淡灰黄～暗灰	淡灰～暗灰	焼･還/転	倒位成形、内面Da類か、外面ナデ。破片化後、二次被熱、体部の一部は焼き台（置き台）に転用、焼土熔着	85317
74	462	11号窯窯体	焼成室	大型鉢	約54	－	(27.5)	36/36	粗砂多、礫多	灰白	灰白	生･還	生焼け。口縁部は時計回転方向のナデ･一部ハケ。体部内面D類a類か、外面Hb類	85251
74	463	11号窯窯体	焼成室、6･7号窯表面、7-1号窯舟底状ピット覆土、7-1号窯灰原黒灰色土	大型鉢	約57	－	(22.5)	19/36	粗砂多、礫多	灰白	灰白	生･還	生焼け。口縁部は時計回転方向のナデ･ハケ。体部内面D類a類か、外面Hb類。口縁部破片の一部は焼き台(置き台)に転用･焼土付着	86812
75	464	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(坏H)	13.5	－	4.4	6/36	粗砂多、礫	淡灰	灰	焼･還	天井部外面クシ状工具痕	85158
75	465	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土、窯体天井崩落土	蓋(坏H)	13.3	－	4.4	11/36	粗砂多、礫	淡灰	灰	焼･還	天井部外面クシ状工具痕	85157

第 38 表　窯跡出土遺物観察表 9

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
75	466	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土、4-F茶色土	蓋(高坏A)	－	－	(2.6)	－	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	無鈕。天井部外面の回転ケズリは丁寧、内面に同心円タタキ痕	86545
75	467	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土、4-F茶色土	坏H	11.6	－	4.2	10/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け。外底にクシ状工具痕	85063
75	468	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	12.8	5.6	(3.3)	15/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰	生・還	内面ナデ調整顕著。生焼け。口縁部は磨滅顕著	85156
75	469	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	12.8	－	(3.2)	11/36	粗砂多、礫	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	85457
75	470	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	12.7	－	3.3	4/36	粗砂多、礫	灰	暗灰	焼・還	外面黒化。焼き割れか	85088
75	471	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	13.4	－	(3.4)	5/36	細砂、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	外面・破断面自然釉顕著、焼き割れか	85089
75	472	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	13.4	－	(2.3)	6/36	細砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け。傾きに不安残す	85065
75	473	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	13.4	－	(2.4)	7/36	細砂多、礫少	灰	淡灰	焼・還	正位焼成。焼き歪みでへたる	85064
75	474	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	14.7	－	3.9	11/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰黄	生・還	細かい焼き割れ顕著、正位焼成	85086
75	475	11号窯前庭部	前庭部	蓋(鉢G)	12.2	返し 9.6	(2.7)	8/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面カキメ調整	85466
75	476	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(鉢G)	12.5	返し 9.8	(2.0)	6/36	粗砂多、礫	－	灰	転	焼き台転用。外面に厚く窯土・自然釉	85460
75	477	11号窯前庭部	前庭部4-F茶色土	坏G	9.8	－	3.9	2/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位無蓋焼成。外底は粗いナデ調整、クシ状工具痕	86444
75	478	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢G	約11	約8	4.1	5/36	粗砂多、礫	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	正位無蓋焼成	86544
75	479	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏A	13.1	－	(4.6)	8/36	粗砂、礫少	灰	灰	転	破損後、倒位で焼き台転用。径約5.5cmの重ね焼き痕	85091
75	480	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏B	13.4	－	(3.3)	4/36	粗砂多、礫	灰	灰黄	焼・還	正位無蓋焼成、焼き割れ	86529
75	481	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏B	13.5	－	(3.1)	4/36	粗砂多、礫	灰	灰	焼・還	焼き割れ	86530
75	482	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏Aか	－	14.6	(6.5)	脚5/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰	焼・還	3方透かしか。倒位焼成、破断面に自然釉熔着	85097
75	483	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏Bか	－	－	(4.5)	－	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	2方透かし	86604
75	484	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏Bか	－	15.2	(6.7)	脚4/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	3方透かし。正位焼成	86601
75	485	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏C	－	10.6	(3.8)	脚7/36	細砂、礫少	灰白	灰白	焼・還	生焼けに近い	86602
75	486	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	高坏C		10.9	(1.7)	脚6/36	細砂、礫少	灰オリーブ	淡灰	焼・還	倒位焼成、内面自然釉顕著	86603
75	487	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	－	－	(4.1)	7/36	細砂多、礫少	オリーブ灰	淡灰	焼・還	正位焼成、自然釉顕著	85464
75	488	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土、7-2号窯前庭部凹み、7-2号窯3-D・E畦褐色土	鉢	〔13.5〕	9.4	〔9.3〕	36/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	外底工具等の接触痕。焼き歪み・割れ顕著、図上復元	85476
75	489	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	瓶	8.2	－	(5.8)	6/36	粗砂多	淡灰	淡灰	焼・還	正位焼成、内面自然釉顕著	85142
75	490	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	瓶	約12	－	(2.8)	9/36	粗砂少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	正位焼成、自然釉顕著	86546
75	491	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	壷	約16	－	(2.6)	2/36	細砂	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。傾きに不安残す	86547
75	492	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	小型壷	－	－	(4.5)	－	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	外底手持ちケズリ。生焼け	85159
75	493	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	土錘	長7.7	径1.8	孔径0.6	36/36	粗砂多	－	淡灰	焼・還	一部欠損、残存重量25.3g	85160
75	494	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	23.8	－	(4.9)	5/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	85143
75	495	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	約26	－	(2.9)	3/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86548
75	496	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	約21	－	(4.3)	3/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面一部に自然釉熔着	86549
75	497	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	23.5	－	(5.9)	16/36	粗砂多、礫	灰	灰	生・還	破片の一部生焼け	85092
75	498	11号窯前庭部	前庭部黒灰色土、6・7号窯表土、7号窯灰原(3-D・E褐色土、2-D・E畦)、7-2号窯最終床前庭部、7号窯灰原(2・3-E畦褐色土、3-D、D区土器溜まり褐色土)	甕	47.2	－	(16.1)	9/36	粗砂多、礫	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。外面をカキメ調整後に波状文・沈線で加飾	86450
76	499	7-1号窯窯体	焼成室床面内断ち割り中	蓋(坏H)	11.4	－	(2.3)	5/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86677
76	500	7-1号窯窯体	焼成室流込土	蓋(坏H)	12.4	－	2.8	9/36	細砂、礫少	暗灰	暗灰	転	天井部外面密なクシ状工具痕。倒位で焼き台(置き台)に転用	85186
76	501	7-1号窯窯体	燃焼室床面内断ち割り中	蓋(坏H)	12.5	－	3.8	10/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	クシ状工具痕。内面自然釉熔着。倒位で焼き台(置き台)に転用か	85182
76	502	7-1号窯窯体	燃焼室埋土	蓋(坏H)	12.6	－	(3.2)	9/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	焼き歪みあり	85524
76	503	7-1号窯窯体	焼成室天井崩落土	蓋(坏H)	13.4	－	3.2	12/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。天井部外面に丁寧な回転ケズリ。猿投系か	85194
76	504	7-1号窯窯体	舟底状ピット覆土	蓋(坏H)	13.3	－	3.9	4/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け。磨滅顕著	85191
76	505	7-1号窯窯体	舟底状ピット覆土	蓋(坏H)	13.4	－	4.3	20/36	粗砂多、礫多	淡灰	灰	焼・還	外底にクシ状工具痕。正位焼成、外面降灰	85190
76	506	7-1号窯窯体	焼成室流込土	蓋(坏H)	13.8	－	4.0	9/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け。天井部外面にクシ状工具痕	85184
76	507	7-1号窯窯体	前庭部黒灰色土	蓋(坏H)	14.1	－	(2.4)	5/36	細砂、礫少	灰白	灰	焼・還	外面黒化。焼き歪みあり	86608
76	508	7-1号窯窯体	舟底状ピット覆土	蓋(坏H)	〔14.0〕	－	3.4	2/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪み・割れ顕著。外面に火だすき痕	86673
76	509	7-1号窯窯体	床上面黄褐色土	蓋(坏H)	14.1	－	4.7	13/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。天井部外面にクシ状工具痕	85185
76	510	7-1号窯窯体	最終床面灰原黒灰色土、竪穴状遺構埋土	蓋(坏H)	14.5	－	4.1	10/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還/転	焼き歪みあり。破片化後、倒位で焼き台(置き台)に転用	85198
76	511	7-1号窯窯体	燃焼室床面内断ち割り中	蓋(坏H)	約15	－	(3.6)	13/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪み顕著	85183
76	512	7-1号窯窯体	焼成室埋土	坏H	9.4	－	3.9	16/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。外底に丁寧な回転ケズリ。東海系か	85180
76	513	7-1号窯窯体	燃焼室床面内断ち割り中	坏H	10.5	－	(1.3)	4/36	粗砂多、礫少	暗灰	灰	転	破断面含め自然釉熔着、焼き台(置き台)転用	86678
76	514	7-1号窯窯体	焼成室流込土	坏H	10.7	－	(2.1)	5/36	粗砂、礫少	黒灰	黒灰	転	破断面含め自然釉熔着、焼き台(置き台)転用	86691
76	515	7-1号窯窯体	焼成室埋土、床面、流込土	坏H	11.2	－	3.7	25/36	粗砂多、礫少	暗灰	黒灰	焼・還	焼き台(置き台)転用の可能性あり	85170
76	516	7-1号窯窯体	焼成室床面	坏H	11.5	－	(2.8)	4/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	転	破断面含め自然釉熔着、焼き台(置き台)転用	86692
76	517	7-1号窯窯体	舟底状ピット覆土、7-2号窯最終床面前庭部	坏H	12.4	－	3.9	17/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	外底にクシ状工具痕顕著。正位焼成、外面黒化	85189
76	518	7-1号窯窯体	焼成室埋土	坏H	12.4	－	(2.5)	5/36	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	86634
76	519	7-1号窯窯体	床面上黄褐色土層	坏H	12.4	－	4.2	18/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。外底にクシ状工具痕	85174
76	520	7-1号窯窯体	床面上黄褐色土層	坏H	12.5	－	3.5	22/36	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	生・還	生焼け。外底にクシ状工具痕	85172
76	521	7-1号窯窯体	床面上黄褐色土層	坏H	12.8	－	3.9	13/36	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	生・還	生焼け。外底にクシ状工具痕	85173
76	522	7-1号窯窯体	焼成室埋土	坏H	13.6	－	3.1	2/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	外面降灰あり	86693

第 39 表　窯跡出土遺物観察表 10

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
76	523	7-1号窯窯体	舟底状ピット覆土	大型坏	19.5	－	4.2	22/36	粗砂多、礫多	淡灰黄	淡灰黄	生・還	底部内外面ナデ調整を加える。外底に径約12cmの重ね焼き痕。蓋の可能性を残す	85280
76	524	7-1号窯窯体	焼成室床面内	蓋(鉢G)	12.4	返し 9.5	3.5	12/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	鈕径1.0cm。天井部外面カキメ調整。焼き歪み顕著	85196
76	525	7-1号窯窯体	焼成室天井崩落土	鉢G	9.0	－	3.8	19/36	粗砂、礫少	黄褐	淡灰	焼・還	正位無蓋焼成	85193
76	526	7-1号窯窯体	床面上黄褐色土層	鉢か	－	－	(3.0)	2/36	粗砂多	灰白	灰白	生・還	内外面にクシ状工具で波状文	85499
76	527	7-1号窯窯体	燃焼室床面内断ち割り中	鉢か	－	10.7	(3.1)	－	粗砂多	灰白	灰白	生・還	内外面にクシ状工具で波状文。外底を回転ケズリ調整	86679
76	528	7-1号窯窯体	最終床面青灰色還元床面内	鉢か	－	8.2	(1.5)	－	粗砂多	灰白	灰、灰白	生・還	内面にクシ状工具で波状文。外底を回転ケズリ調整	85199
76	529	7-1号窯窯体	焼成室流込土	高坏A	－	12.5	(12.0)	脚 3/36	粗砂、礫少	淡灰茶	灰	焼・還	2段3方透かし。倒位焼成、内面降灰顕著	85181
76	530	7-1号窯窯体	焼成室流込土	高坏C	－	11.9	(3.2)	脚 6/36	粗砂、礫少	淡黄橙	淡黄橙	生・酸	生焼け	86694
76	531	7-1号窯窯体	焼成室埋土、7号窯灰原3-F褐色土	高坏D	10.3	－	(6.6)	1/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	2段の稜を鋭くつくる。正位無蓋焼成。3方透かしの幅は狭い	85202
76	532	7-1号窯窯体	焼成室天井崩落土	坏Bか	11.5	－	3.6	18/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	天井部外面クシ状工具痕。焼き歪みあり、外面降灰	85195
76	533	7-1号窯窯体	焼成室床面内断ち割り中	瓶類台部か	－	8.0	(1.7)	台 11/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	面取り鋭い。外面黒化	86676
76	534	7-1号窯窯体	床面	瓶	－	20.9	(5.2)	脚 5/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け。透かし数不明	85192
76	535	7-1号窯窯体	焼成室埋土、7号窯灰原4-E黒灰色土	瓶	－	－	(3.1)	－	細砂多、礫少	灰	灰	転	肩部に沈線。破断面含め焼土熔着	85504
76	536	7-1号窯窯体	舟底状ピット覆土	蓋(坏H)	－	－	(2.2)	－	粗砂多、礫多	淡灰	灰	焼・還	外底にクシ状工具痕	86675
76	537	7-1号窯窯体	床面上黄褐色土層	蓋(坏H)	－	－	(2.6)	－	粗砂多、礫少	灰白	灰黄白	生・還	生焼け。天井部外面クシ状工具痕、内面ナデ調整	86631
77	538	7-1号窯窯体	燃焼室・焼成室埋土、焼成室床面内断ち割り中、焼成室流込土	横瓶	10.4	－	〔27.0〕	30/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内面Da類か、外面HD類、胴部中央に沈線	85253
77	539	7-1号窯窯体	床面上黄褐色土層	横瓶	14.9	－	(3.7)	3/36	細砂、礫少	淡灰黄	灰白	生・還	生焼け	86690
77	540	7-1号窯窯体	床面上黄褐色土層	蓋(坏G)	10.1	返し 8.1	3.3	15/36	粗砂、礫多	淡灰黄	淡灰黄	生・還	鈕径2.0cm。生焼け。やや焼き歪みあり	85171
77	541	7-1号窯窯体	焼成室流込土、7号窯灰原3-D土器溜まり褐色土	坏G	9.3	8.4	3.3	36/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還/転	破片の一部は倒位で焼き台(置き台)に転用	85188
77	542	7-1号窯窯体	焼成室流込土	坏G	10.1	－	3.8	17/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪みあり	85187
77	543	7-1号窯窯体	最終床面青灰色還元床内	坏G	9.1	－	(3.1)	23/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪みあり。外面黒化	86630
77	544	7-1号窯窯体	燃焼室埋土、2-D・E灰原畦	高坏C	9.8	－	(7.7)	8/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位無蓋焼成。内面自然釉顕著	85203
77	545	7-1号窯窯体	焼成室埋土	甕	28.2	－	(3.1)	3/36	粗砂、礫少	灰	灰	転	乱れた波状文で加飾。焼き台(置き台)転用、焼土熔着	86635
77	546	7-1号窯窯体	焼成室流込土	甕	約47	－	(4.8)	6/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還/転	608と同一個体	85528
77	547	7-1号窯窯体	燃焼室床面内断ち割り中	鉢か	－	－	(10.1)	－	粗砂多、礫少	暗灰	暗灰	焼・還	端部は粗く切断。1271等類似の特殊品か	86733
77	548	7-1号窯前庭部	前庭部黒色土	坏H	10.9	－	4.5	5/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	外底のナデ調整は丁寧。生焼け。猿投系か	85175
77	549	7-1号窯前庭部	前庭部黒灰色土	坏H	12.1	－	(3.7)	10/36	粗砂多、礫少	灰	灰緑	焼・還	倒位焼成、外面自然釉顕著	85176
77	550	7-1号窯前庭部	前庭部埋土	坏H	13.3	－	(2.9)	5/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	薄手	85177
77	551	7-1号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋	11.4	－	(1.2)	2/36	粗砂、礫少	淡灰	暗灰	焼・還	小片。外面黒化	86610
77	552	7-1号窯前庭部	前庭部黒灰色土、7-2号窯前庭部最終床面	高坏A	12.6	－	(4.3)	16/36	粗砂多、礫多	淡灰	灰	焼・還	焼き割れあり	85026
77	553	7-1号窯前庭部	前庭部黒色土	瓶	－	－	(2.2)	－	細砂、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	外面自然釉顕著	86611
77	554	7-1号窯前庭部	前庭部黒灰色土	甕	－	－	(3.3)	7/36	細砂、礫少	灰白	黒灰	焼・還	倒位焼成、外面自然釉顕著	85487
77	555	7-1号窯前庭部	燃焼室埋土、前庭部黒色、7-2号窯前庭部凹み	提瓶か	－	12.7	(4.1)	－	粗砂多、礫多	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86607
77	556	7-1号窯前庭部	前庭部埋土、7号窯灰原3-E、4-E畦褐色土	坏H	－	－	(1.4)	－	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	生・還	生焼け。外底にクシ状工具痕	86606
77	557	7-1号窯前庭部	前庭部黒灰色土	壷類脚か	－	12.2	(1.7)	脚 5/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	小片、生焼け。蓋、壷類口縁部の可能性あり	86609
77	558	7-1号窯溝状遺構	溝状遺構	高坏D	－	9.2	6.5	脚 15/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	2方2段透かし。正位焼成、外面降灰あり	85197
77	559	7-1号窯溝状遺構	溝状遺構埋土、6・7号窯表土、C-80G表土	鉢(厚底)	12.9	9.1	10.3	10/36	細砂、礫多	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	把手数不明。外面をカキメ調整と2条1単位の沈線で加飾	85204
78	560	7-1-2号窯灰原	灰原4-D黒色土	蓋(坏H)	12.2	－	(3.1)	3/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	正位焼成。外面自然釉顕著、調整不明	86612
78	561	7-1-2号窯灰原	灰原3-D黒灰色土	蓋(坏H)	約13	－	(2.6)	5/36	粗砂多、礫多	灰	淡灰黄	転	焼き台(置き台)に転用、降灰顕著	86674
78	562	7-1-2号窯灰原	灰原4-E黒灰色土	蓋(坏H)	12.5	－	3.8	19/36	粗砂、礫多	淡灰	灰	焼・還	無鈕。天井部外面は未調整に近い。外面黒化・火だすき痕あり	85100
78	563	7-1-2号窯灰原	灰原4-D黒色土	蓋(高坏A)	13.4	－	4.5	11/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	無鈕。天井部外面は丁寧な回転ナデ調整。外面黒化	86452
78	564	7-1-2号窯灰原	灰原4-D黒色土	蓋(高坏A)	13.7	－	4.9	5/36	粗砂、礫多	黄灰	灰	焼・還/転	無鈕。天井部外面はカキメ調整。正位で焼き台(置き台)に転用か。破断面含め自然釉顕著	86453
78	565	7-1-2号窯灰原	灰原3-E、3-F畦、褐色土	坏H	11.9	－	3.7	15/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面一部自然釉熔着	86463
78	566	7-1-2号窯灰原	灰原3-D区、土器溜まり、褐色土	坏H	12.0	－	2.9	13/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	焼き歪みあり。外面黒化	86464
78	567	7-1-2号窯灰原	灰原3-F褐色土、3-F、3-G畦	坏H	12.0	－	3.6	15/36	粗砂多、礫少	灰白	灰緑	焼・還	倒位焼成、外面自然釉顕著	86465
78	568	7-1-2号窯灰原	灰原4-D黒色土	坏H	12.9	6.4	3.9	14/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰オリーブ	焼・還	外底未調整に近い、クシ状工具痕若干。倒位焼成、外面自然釉顕著	86461
78	569	7-1-2号窯灰原	灰原3-F、4-F畦、褐色土	坏H	13.0	－	(4.1)	15/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	焼・還	焼き歪みあり	86462
78	570	7-1-2号窯灰原	灰原3-D、7-2号窯前庭部凹部	坏G	8.4	6.4	3.5	11/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	有蓋。焼き歪みあり	85128
78	571	7-1-2号窯灰原	灰原4-D黒色土	高坏Cか	9.0	－	(4.0)	5/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。572と同一個体か	86456
78	572	7-1-2号窯灰原	灰原3-D	高坏Cか	約10	－	(4.8)	7/36	粗砂多	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け。571と同一個体か	86455
78	573	7-1-2号窯灰原	灰原3-F、4-F畦、褐色土	壷類か	約13	－	(4.5)	6/36	細砂、礫少	淡灰オリーブ	灰緑	焼・還	正位無蓋焼成。外面自然釉顕著	86475
78	574	7-1-2号窯灰原	灰原4-E、褐色土、4-D	蓋(盤か)	約16	返し約13	(2.7)	31/36	細砂多、礫少	灰緑	淡灰オリーブ	焼・還	焼き歪み顕著、図上復元。破断面含め自然釉顕著	85554
78	575	7-1-2号窯灰原	灰原3-D	蓋(盤か)	約16	返し約13	(2.9)	17/36	細砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	焼き歪み顕著、図上復元。破断面含め自然釉顕著	85545
78	576	7-1-2号窯灰原	3-D土器溜まり	蓋(盤か)	39.0	－	(4.2)	5/36	粗砂多、礫少	灰白	灰、灰白	焼・還	カキメ調整、円孔1対(径約6mm)。内面中央に同心円タタキ。正位焼成、一部還元弱い	85339
78	577	7-1-2号窯灰原	3-D土器溜まり褐色土、灰原(2-E、3-E畦褐色土、6-P、2-E、D畦、3-D)	蓋(盤)	30.0	返し27.2	(5.3)	30/36	粗砂多、礫少	灰	淡灰オリーブ	焼・還	外面カキメ調整、内面ナデ調整。正位焼成、焼き歪み・割れ顕著	85296
78	578	7-1-2号窯灰原	灰原(3-D黒灰色土、4-D黒色土、3-E、3-D畦褐色土)、6・7号窯表土	盤	27.6	－	4.9	21/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・還	焼き歪み・割れ顕著。破断面含め自然釉熔着。1143より台付の可能性高い	85308
78	579	7-1-2号窯灰原	灰原4-E暗褐色土	盤か	－	－	(4.7)	－	粗砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	正位有蓋焼成、外面自然釉顕著	85469

第 40 表　窯跡出土遺物観察表 11

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
78	580	7-1-2号窯灰原	灰原3-D黒灰色土、7号窯最終床面黒灰色土	盤か	－	14.4	(3.4)	11/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	正位焼成、焼き歪みあり。外面自然釉顕著	85468
78	581	7-1-2号窯灰原	灰原3-D	盤か	－	15.9	(3.8)	6/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	正位焼成、焼き歪みあり。外面自然釉顕著	86627
78	582	7-1-2号窯灰原	灰原4-D	高坏D	－	－	(2.5)	－	粗砂、礫少	オリーブ灰	灰	焼・還	3方透かし。正位焼成、内面自然釉顕著	86458
78	583	7-1-2号窯灰原	灰原3-D黒灰色土	高坏D	11.1	－	(3.7)	3/36	粗砂少	灰緑	灰白	焼・還	正位焼成、内面自然釉顕著	86457
78	584	7-1-2号窯灰原	灰原4-E黒灰色土、4-D黒色土	高坏D	12.3	－	(3.6)	5/36	粗砂少	灰	淡灰	転	2方透かし。破片後に倒位で焼き台(置き台)転用。全面自然釉顕著、焼き歪みあり	86459
78	585	7-1-2号窯灰原	灰原3-D	高坏E	約13	－	(3.6)	7/36	粗砂、大径礫	淡灰	淡灰	焼・還	内底にナデ調整。沈線1条。生焼けに近い	86454
78	586	7-1-2号窯灰原	灰原2-E、3-E畦褐色土	高坏C	－	9.3	(6.8)	30/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	沈線1条	85320
78	587	7-1-2号窯灰原	C-80G表面、灰原3-D、3-E褐色土	甕	－	－	(6.9)	2/36	細砂、礫少	灰白	灰	焼・還	倒位焼成、外面自然釉熔着。焼き歪みあり	85340
78	588	7-1-2号窯灰原	灰原(3-D黒灰色土、3-D土器溜まり、褐色土、3-D、3-E褐色土)	甕	－	－	(13.0)	－	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。斜行刺突文	85283
79	589	7-1-2号窯灰原	3-D土器溜まり、褐色土、7号窯灰原3-D、3-E畦褐色土、6・7号表土	提瓶	9.4	－	(26.8)	－	砂粒	淡灰	灰	焼・還	正位焼成、焼き膨れあり。胴部閉塞円盤数不明	85284
79	590	7-1-2号窯灰原	灰原3-F褐色土	壷	12.7	－	(4.6)	4/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	内面自然釉熔着	86525
79	591	7-1-2号窯灰原	灰原2-E	瓶類	－	－	(6.7)	－	粗砂、礫少	灰白	灰	焼・還	提瓶か	86477
79	592	7-1-2号窯灰原	灰原3-E茶褐色土	瓶類か	約10	－	(3.5)	7/36	粗砂多	灰	灰	焼・還	口縁部に細かい焼き割れ連続。破断面含め自然釉熔着	86473
79	593	7-1-2号窯灰原	灰原3-D	瓶類か	約14	－	(2.8)	7/36	粗砂少	淡灰	淡灰	焼・還	口縁部焼き割れ。正位焼成、自然釉熔着	86472
79	594	7-1-2号窯灰原	3-D土器溜まり褐色土	壷A	約13	－	(5.4)	3/36	粗砂、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	正位無蓋焼成。外面自然釉熔着	86476
79	595	7-1-2号窯灰原	7号窯灰原3-F、4-F、6号窯灰原5-F黒灰色土、6・7号窯表土、5-G撹乱層	壷A	10.6	－	(20.7)	11/36	細砂、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	外面カキメ調整・回転ケズリ。正位焼成	85326
79	596	7-1-2号窯灰原	3-E褐色土、灰原、6・7号窯表土	壷A	－	6.7	(6.6)	－	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉顕著	86579
79	597	7-1-2号窯灰原	灰原3-F褐色土	壷A	－	－	(7.7)	－	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還/転	外面カキメ調整後に回転ケズリ調整。破片化後、焼き台(置き台)に転用	86578
79	598	7-1-2号窯灰原	灰原36層暗褐色土	横瓶か	－	－	(19.2)	－	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面カキメ調整	85292
79	599	7-1-2号窯灰原	灰原(2-E、3-E、D、E黒色土)、竪穴状遺構内排水溝覆土	横瓶	14.2	－	(5.6)	36/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	外面カキメ調整。内面Dc類、外面Hb類	85322
79	600	7-1-2号窯灰原	灰原4-E黒灰色土	横瓶か	約15	－	(5.0)	7/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	内面a類、外面H類。正位焼成、自然釉熔着	86471
79	601	7-1-2号窯灰原	灰原3-E、褐色土3-F	甕	16.2	－	(6.7)	30/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面Da類、外面H類。正位焼成	85321
79	602	7-1-2号窯灰原	灰原3-F褐色土	甕	約19	－	(5.0)	1/36	粗砂多、礫少	暗灰	灰	焼・還	内面Dc類か、外面H類後カキメ調整。正位焼成・降灰あり	86474
80	603	7-1-2号窯灰原	灰原3-F	甕	23.2	－	(8.0)	3/36	粗砂多、礫少	淡灰	暗灰	焼・還	焼成前ヘラ記号「×」。内面Dc類、外面H類。正位焼成	86576
80	604	7-1-2号窯灰原	灰原2-E	甕	21.0	－	(9.8)	22/36	砂粒	灰白	灰白	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。頸部外面はH類タタキ後回転ナデ調整。生焼けに近い	85325
80	605	7-1-2号窯灰原	灰原、土器溜まり褐色土	甕	約35	－	(3.9)	3/36	粗砂多、礫多	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・還	内外面自然釉熔着。606と同一個体か	86555
80	606	7-1-2号窯灰原	7号窯、3-D区土器溜まり褐色土灰原、6・7号窯表土	甕	39.0	－	(9.0)	7/36	粗砂多、礫多	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	乱れた波状文を一部ナデ消して沈線で再加飾。正位焼成。605と同一個体か	86577
80	607	7-1-2号窯灰原	灰原3-E、3-F畦	甕	42.6	－	(16.8)	19/36	細砂、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。外面の沈線乱れる	85356
80	608	7-1-2号窯灰原	灰原3-E暗褐色土	甕	45.6	－	(12.6)	17/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	外面Hb類タタキの後、カキメ調整、沈線・波状文で加飾	85318・85528
80	609	7-1-2号窯灰原	3-E、3-F畦、7号窯灰原3-F褐色土、7号窯表土	甕	約47	－	(17.3)	19/36	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。正位焼成、内外面自然釉熔着。焼き歪み顕著、黒色噴出し目立つ	86671
80	610	7-1-2号窯灰原	灰原3-F褐色土	土師器甕	18.4	－	(9.2)	10/36	粗砂多	浅橙	浅橙	良好	非ロクロ土師器。図上復元	85473
80	611	7-1-2号窯灰原	3-D土器溜まり褐色土、灰原	鉢C(厚底)	－	10.5	(2.7)	底14/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	生・還	外底周縁にケズリ調整。生焼け、上部剥離	86469
80	612	7-1-2号窯灰原	灰原4-D黒褐色土	鉢C(厚底)	－	9.2	(4.7)	底9/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成、内面剥離	85343
80	613	7-1-2号窯灰原	灰原4-E暗褐色土	鉢C(厚底)	－	8.7	(2.2)	底5/36	細砂少	淡灰	灰緑	焼・還	倒位焼成、外面自然釉顕著	86470
80	614	7-1-2号窯灰原	3-D土器溜まり褐色土	鉢・甑類把手	長(5.8)	幅3.8	厚2.0	－	細砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	86460
80	615	7-1-2号窯灰原	灰原3-F、4-F褐色土	鉢B	－	－	(6.4)	小片	細砂、礫少	青灰	青灰	焼・還	口縁端部を2方向から仕上げ。内面Dc類、外面Hb類	86732
81	616	7-2号窯窯体	窯体床面№1	蓋(坏G)	9.6	返し 7.8	2.7	22/36	粗砂多、礫少	暗灰	淡灰オリーブ	焼・還	鈕径1.4cm。正位焼成、外面自然釉熔着。焼き歪み顕著	85076
81	617	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	9.9	返し 8.2	3.6	9/36	粗砂多、礫少	灰	暗灰	焼・還	鈕径1.6cm。正位焼成。外面黒化、焼き歪みあり	85045
81	618	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	9.9	返し 8.0	3.7	9/36	粗砂、礫少	褐灰	褐灰	焼・還	鈕径1.5cm。天井部外面は手持ちケズリ調整。全面に煤付着	85046
81	619	7-2号窯窯体	窯体床面№5	蓋(坏G)	9.9	返し 8.2	3.0	7/36	粗砂多、礫少	灰	灰	生・還	鈕径1.8cm。鈕は生焼け	85075
81	620	7-2号窯窯体	窯体床面№46	蓋(坏G)	10.0	返し 8.2	(2.5)	17/36	粗砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け。磨滅顕著	85038
81	621	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	10.1	返し 8.1	(2.5)	13/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	生焼け	85048
81	622	7-2号窯窯体	窯体床面№21	蓋(坏G)	10.0	返し 8.4	3.2	29/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	鈕径1.2cm。返しは厚手。鈕の形崩れる(回転ケズリ時)。正位焼成	85140
81	623	7-2号窯窯体	窯体床面№24	蓋(坏G)	10.2	返し 8.7	2.7	18/36	粗砂多、礫多	淡灰オリーブ	淡灰オリーブ	焼・還	鈕径1.6cm。径約9cmの重ね焼き痕あり。焼き歪み顕著	85491
81	624	7-2号窯窯体	窯体床面№23	蓋(坏G)	10.6	返し 9.0	3.2	6/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	鈕径1.7cm。生焼け。磨滅顕著	85031
81	625	7-2号窯窯体	窯体床面№18	蓋(坏G)	10.5	返し 9.0	3.1	34/36	粗砂、礫少	淡黄灰	灰白	生・還	鈕径1.6cm。生焼け。天井部外面の回転ケズリ調整粗い	85116
81	626	7-2号窯窯体	窯体床面№40	蓋(坏G)	10.6	返し 8.8	3.7	33/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	鈕径2.0cm。生焼け。焼き割れあり	85033
81	627	7-2号窯窯体	窯体床面№16	蓋(坏G)	10.5	返し 8.8	(3.5)	6/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	灰白	生・還	鈕径1.5cm。生焼け。外面磨滅顕著、調整不明	85118
81	628	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	10.8	返し 9.0	4.1	28/36	粗砂多、礫多	灰白	淡灰	焼・還	鈕径1.7cm	85041
81	629	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	10.6	返し 8.7	(2.5)	9/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け。天井部外面は粗い手持ちケズリ	85049
81	630	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	11.1	返し 9.4	3.7	8/36	粗砂、礫少	淡黄橙	淡灰黄	生・酸	鈕径1.9cm。生焼け。内面磨滅顕著	85042
81	631	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	10.7	返し 9.2	2.5	13/36	粗砂、礫少	灰	灰緑	焼・還	鈕径1.6cm。正位焼成。焼き歪み、自然釉顕著	85044
81	632	7-2号窯窯体	窯体床面№2	蓋(坏G)	10.9	返し 9.3	3.1	36/36	粗砂、礫少	淡灰黄	暗灰	生・還	鈕径1.6cm。天井部に丁寧な回転ケズリ調整。生焼け、外面に重ね焼き痕	86213
81	633	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	10.8	返し 9.2	3.2	23/36	粗砂多、礫多	淡灰	灰	焼・還	鈕径1.6cm。正位焼成、外面に重ね焼き痕あり。焼き歪み	85043
81	634	7-2号窯窯体	窯体床面№22	蓋(坏G)	10.5	返し 8.7	3.6	18/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	鈕径1.4cm。成形時に歪み	85030
81	635	7-2号窯窯体	窯体床面№12・53	蓋(坏G)	10.5	返し 8.4	4.2	22/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	鈕径1.5cm。天井部外面は回転ケズリ調整、鈕貼り付け後、一方向のケズリ調整を加える	85073

第 41 表　窯跡出土遺物観察表 12

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
81	636	7-2号窯窯体	窯体床面№51	蓋(坏G)	10.8	返し　－	(2.7)	6/36	粗砂多、礫多	茶橙	茶橙	焼・酸	内面返しは剥離	85301
81	637	7-2号窯窯体	窯体床面№45	蓋(坏G)	10.8	返し 8.8	3.6	25/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	鈕径1.5cm。外面一部黒化	85022
81	638	7-2号窯窯体	窯体床面№3	蓋(坏G)	10.9	返し 9.1	3.7	31/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	鈕径1.5cm。天井部外面は回転ケズリ調整、鈕貼り付け後、一方向のケズリ調整を加える	85074
81	639	7-2号窯窯体	窯体床面№41	蓋(坏G)	11.0	返し 9.4	3.7	23/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	鈕径1.6cm。鈕は中心よりずれる。倒位焼成か、焼き歪み顕著	85034
81	640	7-2号窯窯体	窯体床面№38	蓋(坏G)	11.0	返し 9.4	4.1	6/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	鈕径1.6cm。鈕は崩れる。生焼け、内面磨滅顕著	85032
81	641	7-2号窯窯体	窯体床面、7号窯灰原3-D	蓋(坏G)	10.9	返し 9.0	3.2	22/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	鈕径1.4cm。天井部外面肩部に粗いケズリ調整。焼き歪みあり	85047
81	642	7-2号窯窯体	窯体床面№19	蓋(坏G)	11.0	返し 8.6	3.7	25/36	粗砂、礫少	灰黄白	灰白	生・還	鈕径1.7cm。生焼け。焼き歪み・割れあり	85117
81	643	7-2号窯窯体	窯体床面	蓋(坏G)	11.0	返し 9.4	4.3	19/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	鈕径1.8cm。鈕付近は生焼け。焼き割れあり	85039
81	644	7-2号窯窯体	窯体床面№7	蓋(坏G)	11.6	返し 9.8	(2.5)	28/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	黒灰	生・還	生焼け。正位焼成、外面に重ね焼き痕あり	85072
81	645	7-2号窯窯体	窯体床面№20	蓋(坏G)	11.6	返し 9.8	1.9	13/36	粗砂、礫少	灰黄白	灰黄白	生・還	鈕径1.8cm。生焼け。焼き歪みあり	85119
81	646	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	11.5	返し 9.4	4.1	14/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	鈕径1.3cm。鈕は中心をずれる。生焼け。磨滅顕著	85040
81	647	7-2号窯窯体	窯体床面№28	蓋(坏G)	11.5	返し 9.8	3.0	18/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	鈕径1.6cm。肩部は手持ちケズリに近い。生焼け、焼き歪みあり	85015
81	648	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	11.8	返し 9.6	(2.8)	5/36	粗砂、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	天井部外面に回転ナデ調整加える	86644
81	649	7-2号窯窯体	窯体床面№11	蓋(坏G)	11.7	返し 9.6	3.4	8/36	粗砂、礫少	灰	淡灰黄	生・還	鈕径1.7cm。生焼け	85077
81	650	7-2号窯窯体	窯体床面	蓋(坏G)	11.9	返し10.1	3.4	16/36	細砂、礫多	淡灰黄	淡灰黄	生・還	鈕径1.7cm。生焼け。天井部内面ナデ調整顕著	85023
81	651	7-2号窯窯体	窯体床面№44	蓋(坏G)	11.8	返し10.0	(2.9)	9/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	85037
81	652	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	12.0	返し10.2	(2.7)	24/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	86637
81	653	7-2号窯窯体	窯体床面	蓋(坏G)	12.3	返し10.3	(2.3)	8/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	正位焼成。外面に火だすき痕あり	86636
81	654	7-2号窯窯体	窯体床面№51	蓋(坏G)	12.2	返し10.0	4.1	29/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	鈕径1.9cm。天井部外面に回転ナデ調整加える	85120
81	655	7-2号窯窯体	窯体床面№55	蓋(坏G)	12.5	返し10.7	(2.9)	3/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	天井部外面に回転ケズリ調整、一部回転ナデ調整の後、細く焼成前ヘラ記号「×」	85222
81	656	7-2号窯窯体	窯体床面№37	蓋(坏G)	12.9	返し10.8	3.1	1/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	鈕径1.4cm。天井部外面に回転ケズリ調整の後、細く焼成前ヘラ記号「×」	85221
81	657	7-2号窯窯体	窯体床面№51	蓋(坏G)	12.3	返し10.2	4.3	34/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	鈕径1.6cm。天井部外面に回転ケズリ調整、回転ナデ調整の後、焼成前ヘラ記号「×」。口縁端部面取りあり	85121
81	658	7-2号窯窯体	窯体床面№51	蓋(坏G)	13.3	返し11.0	(3.1)	16/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	天井部外面に回転ナデ調整の後、細く焼成前ヘラ記号「×」	85122
81	659	7-2号窯窯体	焼成室最終床床面内	蓋(坏G)	10.2	返し 8.6	(2.7)	14/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還		86629
81	660	7-2号窯窯体	窯体床面№43	蓋(坏G)	－	－	(2.3)	－	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	鈕径1.5cm。生焼け	85036
81	661	7-2号窯窯体	窯体床面№42	蓋(坏G)	－	－	(1.9)	－	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	85035
81	662	7-2号窯窯体	窯体床面№30	坏G	8.5	5.3	3.5	14/36	粗砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面黒化	85108
81	663	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	9.1	8.0	3.3	9/36	粗砂多、礫少	灰	灰	転	倒位で焼き台(置き台)に転用。外底に降灰あり	85109
81	664	7-2号窯窯体	窯体床面№39	坏G	9.2	7.0	3.7	14/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。磨滅顕著	85029
81	665	7-2号窯窯体	窯体床面№55、窯体床面	坏G	9.2	5.2	3.4	6/36	細砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け。磨滅顕著	85080
81	666	7-2号窯窯体	窯体床面№27	坏G	9.4	6.3	3.4	22/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	内底ナデ調整顕著、外底未調整に近い。正位有蓋焼成、外面降灰あり	85019
81	667	7-2号窯窯体	窯体床面№13	坏G	9.4	－	4.0	23/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰	生・還	生焼け。外面黒化、焼き割れあり	85138
81	668	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	9.6	6.5	3.7	19/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	生焼け。外面黒化、焼き割れあり	85115
81	669	7-2号窯窯体	窯体床面	坏G	9.7	8.4	3.4	15/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。一部黒斑。底部外面ヘラ起こし痕残る	85081
82	670	7-2号窯窯体	窯体床面№36	坏G	9.9	6.3	3.3	15/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	成形時に口縁端部失敗。生焼け	85028
82	671	7-2号窯窯体	窯体床面№31	坏G	9.7	7.2	3.5	3/36	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。一部黒斑	85017
82	672	7-2号窯窯体	窯体床面№4	坏G	9.8	7.0	3.8	－	粗砂、礫少	灰白	灰白	焼・還		86224
82	673	7-2号窯窯体	窯体床面	坏G(鉢Gか)	9.9	6.6	4.1	14/36	細砂、礫少	灰黄白	淡灰白	生・還	生焼け。焼き割れあり	85082
82	674	7-2号窯窯体	窯体床面№32	坏G	9.8	7.2	3.2	15/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	正位有蓋焼成、外面降灰あり。底部焼き割れあり	85018
82	675	7-2号窯窯体	窯体床面№33、7号窯灰原(4-E黒灰色土)	坏G	9.7	7.9	2.9	31/36	細砂多、礫少	灰白	灰	焼・還/転	正位有蓋焼成、外面降灰あり。破損後、破片の一部を倒位で焼き台(置き台)に転用	85021
82	676	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	9.8	8.2	3.1	17/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	正位焼成。焼き歪み顕著、外面降灰あり	85112
82	677	7-2号窯窯体	窯体床面№8	坏G	9.9	7.1	3.1	16/36	粗砂、礫少	灰	灰緑	転	倒位で焼き台(置き台)に転用。破断面含め外面自然釉熔着	85079
82	678	7-2号窯窯体	窯体床面№29	坏G	10.0	－	3.3	20/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。焼き歪みあり	85020
82	679	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	10.1	7.7	3.5	8/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	焼き歪み顕著。外面降灰あり	85111
82	680	7-2号窯窯体	窯体床面№6	坏G	10.3	－	3.3	22/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け。底部両面ナデ調整顕著。底部焼き割れあり	85078
82	681	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G(鉢Gか)	10.3	6.8	4.4	20/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	焼成前ヘラ記号「×」。外底周縁に回転ケズリ調整	85303
82	682	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	10.4	－	3.5	19/36	粗砂、礫少	灰黄白	淡灰	生・還	生焼け。底部のナデ調整起伏あり(ヘラ切り時の補修か)	85114
82	683	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	10.5	7.7	3.5	30/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け。外底回転ケズリ調整、内底のナデ調整起伏あり(ヘラ切り時の補修か)	85113
82	684	7-2号窯窯体	窯体床面№15	坏G	10.8	7.5	3.4	31/36	粗砂、礫少	淡黄灰	灰白	生・還	生焼け。焼成後に底部穿孔か	85139
82	685	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	約11	約8.5	3.1	19/36	粗砂、礫少	灰	灰	転か	焼き歪み顕著。内外面降灰あり	85110
82	686	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G(鉢Gか)	11.0	－	4.5	6/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	外底に回転ケズリ調整加える。内底ナデ調整	85302
82	687	7-2号窯窯体	窯体床面№34	坏G(鉢Gか)	11.1	－	4.0	6/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	85016
82	688	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	11.2	8.0	3.5	13/36	粗砂、礫少	灰緑	暗灰	転	破断面含め自然釉熔着。正位で焼き台(置き台)に転用か	85107
82	689	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	11.5	9.6	4.2	21/36	粗砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け。焼き割れあり	85106
82	690	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G(鉢Gか)	11.5	－	(3.8)	3/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	生焼け。外底に回転ケズリ調整	86639
82	691	7-2号窯窯体	窯体床面	坏G	約11	－	3.1	10/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	生焼け。焼き歪みあり	85083
82	692	7-2号窯窯体	窯体床面№47	坏G	－	7.0	(2.1)	－	粗砂多、礫多	茶橙	茶橙	焼・酸		86643
82	693	7-2号窯窯体	窯体床面	坏G	－	7.2	(1.8)	－	粗砂多、礫多	灰	灰	転	破片化後に正位で焼き台(置き台)転用。破断面に自然釉熔着	85533
82	694	7-2号窯窯体	窯体床面№10	坏G	－	7.4	(2.2)	－	粗砂、礫多	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	86638
82	695	7-2号窯窯体	窯体床面№17	坏G	－	6.0	(2.7)	－	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	外底焼土熔着	86683
82	696	7-2号窯窯体	窯体床面№55	坏G	－	7.6	(2.5)	－	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け、外底黒斑。磨滅顕著	86684
82	697	7-2号窯窯体	窯体床面	坏G	－	10.2	(3.1)	－	粗砂、礫少	灰黄白	淡灰	生・還	生焼け。磨滅顕著	86680

第 42 表　窯跡出土遺物観察表 13

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
82	698	7-2号窯窯体	窯体床面№14	埦	13.7	－	4.6	16/36	粗砂、礫少	灰黄白	淡灰	生・還	生焼け、黒斑あり。底部外面手持ちケズリ	85141
82	699	7-2号窯窯体	窯体床面№55、11号窯4-F茶色土、灰原4-E	盤	24.9	10.2	4.6	4/36	粗砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	内底は同心円タタキの後ナデ調整、外底は回転ケズリ調整	85027
82	700	7-2号窯窯体	窯体床面№55	脚付鉢	16.4	－	(7.1)	7/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内底にナデ調整、外面下半に粗い回転ケズリ調整加える。701と同一個体か	85306
82	701	7-2号窯窯体	窯体床面№55	脚付鉢	－	10.4	(6.1)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	沈線2条。700と同一個体か	85293
82	702	7-2号窯窯体	窯体床面№47	高坏C	－	－	(2.7)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内外面ともにナデ調整	86646
82	703	7-2号窯窯体	窯体床面№49	高坏C	－	－	(2.7)	－	細砂多、礫少	淡橙	淡橙	焼・酸	内底全面にナデ調整	86640
82	704	7-2号窯窯体	窯体床面№55	高坏C	10.7	－	(6.6)	21/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内底全面にナデ調整	85294
82	705	7-2号窯窯体	窯体床面№51	高坏C	－	－	(5.8)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内底にナデ調整	85223
82	706	7-2号窯窯体	窯体床面№55	高坏C	－	8.5	(6.3)	10/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内底全面にナデ調整。沈線2条	85300
82	707	7-2号窯窯体	窯体床面	高坏Dか	9.8	－	(3.6)	5/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	無蓋正位焼成、内面降灰あり	85084
82	708	7-2号窯窯体	窯体床面№55	高坏C	－	8.1	(4.6)	36/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	沈線2条	85124
82	709	7-2号窯窯体	窯体床面№55	高坏C	－	8.2	(3.1)	脚5/36	粗砂、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	沈線1条	85490
82	710	7-2号窯窯体	窯体床面№51	高坏Dか	－	－	(5.7)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	高脚か。沈線2条	86642
82	711	7-2号窯窯体	窯体床面№51	高坏C	－	－	(4.7)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	沈線2条	85502
82	712	7-2号窯窯体	窯体床面№53	高坏D	－	8.9	(2.8)	脚22/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	幅の狭い3方透かし。生焼け	85123
82	713	7-2号窯窯体	焼成室埋土	高坏C	－	9.8	(1.1)	脚6/36	粗砂、礫少	灰	淡灰	焼・還		86633
83	714	7-2号窯窯体	窯体床面№50・55	長頸瓶	5.6	13.0	32.5	7/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	脚部台形透かし孔8ヶ所か。乱れた沈線、波状文、連続刺突文で加飾	85252
83	715	7-2号窯窯体	窯体床面	瓶	11.6	－	(4.5)	5/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	横瓶か	85521
83	716	7-2号窯窯体	窯体床面	壷類	17.3	－	(4.3)	4/36	礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	85529
83	717	7-2号窯窯体	窯体床面	壷類	－	9.9	(3.1)	－	粗砂多、礫少	灰黄白	灰白	生・還	生焼け。底部内面一定方向のナデ調整加える、外面未調整	86681
83	718	7-2号窯窯体	窯体床面№56	壷類	－	－	(4.1)	－	粗砂多、礫少	灰黄白	灰黄白	生・還	外底手持ちケズリ。生焼け、磨滅顕著	86615
83	719	7-2号窯窯体	窯体床面№25	平瓶	3.6	－	(6.5)	36/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	閉塞円盤残る。肩部に焼成前ヘラ記号「×」。生焼け、磨滅顕著	85297
83	720	7-2号窯窯体	窯体床面№25・55	小型壷	6.6	－	5.6	21/36	粗砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	外底手持ちケズリ。生焼け、外底に黒斑。磨滅顕著	85264
83	721	7-2号窯窯体	窯体床面№49他	横瓶	13.6	－	(32.5)	22/36	粗砂、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内面Da類か、外面格子タタキの後ケズリ状の丁寧なカキメ調整	85503
83	722	7-2号窯窯体	窯体床面№51	壷	17.0	－	(16.1)	8/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内面Dc類、外面格子状タタキ	85255
83	723	7-2号窯窯体	窯体床面№55	壷	16.3	－	(3.3)	3/36	粗砂多、礫少、赤色粒少	灰黄褐	灰黄褐	生・酸	生焼け。724と同一個体か	86682
83	724	7-2号窯窯体	窯体床面№55	壷	－	－	(10.9)	－	粗砂多、礫少、赤色粒少	灰黄褐	灰黄褐	生・酸	内面Da類か、外面カキメ調整。生焼け。723と同一個体か	86685
84	725	7-2号窯窯体	窯体床面№47	甕	29.5	－	65.5	34/36	粗砂多、礫多	茶橙	茶橙	生・酸	内面Db類、外面Ha類。底部～胴部下半は下から上に成形、頸部～胴部上半は上から下に成形。口縁部外面平行タタキ後ヨコナデ。生焼け	85254
84	726	7-2号窯窯体	窯体床面№55	甕	－	－	(8.7)	－	粗砂多、礫多	茶橙	茶橙	焼・酸	乱れた波状文あり	86645
84	727	7-2号窯窯体	窯体床面№48	甕	18.2	胴部径約52	(48.0)	9/36	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	焼・酸	内面Da類、外面Ha類、格子状タタキ	85453
84	728	7-2号窯前庭部	前庭部最終床	蓋(坏H)	13.2	－	3.7	6/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰黄	焼・還	焼き歪みあり、外面降灰あり	85024
84	729	7-2号窯前庭部	前庭部最終床面、灰原(4-D、4-E畦褐色土)	坏H	13.3	8.0	2.9	15/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外底にクシ状工具痕。焼き歪みあり、外面一部黒化	85025
84	730	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	盤か	－	13.0	(1.4)	脚4/36	細砂多、礫少	淡灰黄	淡灰オリーブ	焼・還	沈線2条。正位焼成、外面自然釉熔着	86641
84	731	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	蓋(坏G)	11.4	－	(2.5)	9/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	天井部外面は手持ちケズリ調整の後、肩部に粗い回転ケズリ調整を加える。焼き歪み顕著	86621
84	732	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	蓋(坏G)	10.4	返し 8.5	(2.2)	10/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還		86617
84	733	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	蓋(坏G)	11.1	返し 9.4	(2.3)	8/36	細砂多、礫少	淡灰黄	淡灰	生・還	生焼け。内面磨滅顕著	86620
84	734	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	蓋(坏G)	11.3	返し 9.8	(1.7)	－	細砂少	灰白	灰白	焼・還	焼き歪みあり	86619
84	735	7-2号窯前庭部	前庭部凹み、灰原3-D土器溜まり褐色土	坏G	9.7	7.0	3.5	3/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	有蓋。焼き歪み顕著	85130
84	736	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	坏G	9.6	7.2	3.4	6/36	粗砂、礫少	緑オリーブ	淡灰	焼・還	無蓋正位焼成、内面自然釉顕著。焼き歪みあり	85129
84	737	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	坏G	9.0	6.8	3.1	15/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	無蓋正位焼成、外面自然釉・焼土熔着。焼き歪みあり	86618
84	738	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	甑	9.0	－	(3.8)	8/36	礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	傾きに不安残す。内面自然釉熔着	85220
84	739	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	瓶類	7.6	－	(4.2)	9/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還		85219
84	740	7-2号窯前庭部	前庭部盛土	瓶類	－	－	2.0	－	粗砂多、礫多	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	内底中央に同心円タタキ後ナデ調整。外面自然釉熔着	86616
84	741	7-2号窯前庭部	前庭部凹み	横瓶	13.1	－	(4.3)	11/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面D類	85178
84	742	7-2号窯前庭部	前庭部最終床面、竪穴状遺構埋土	横瓶	12.0	－	(6.9)	13/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	内面Dc類、外面Hb類後カキメ調整。横位焼成、外面自然釉熔着	85179
85	743	8号窯	煙出付近流込土	蓋(坏H)	11.1	5.6	3.4	10/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	正位有蓋焼成、外底に火だすき痕あり	85166
85	744	8号窯	焚口SB-CラインP-1	坏G	9.6	3.6	4.2	11/36	粗砂多、礫	灰白	灰白	生・還	生焼け。全体磨滅	85165
85	745	8号窯	最終床面天井崩落土	高坏D	9.7	－	(3.7)	11/36	細砂多、礫少	灰	暗灰	焼・還	2条の稜。正位無蓋焼成、内面降灰・外面黒化	85163
85	746	8号窯	前庭部凹み黒灰色土層	高坏D	10.0	－	(3.5)	9/36	細砂多、礫少	暗灰	灰	焼・還	1条の稜。正位無蓋焼成、内面降灰あり	85161
85	747	8号窯	燃焼室床面直上ベルト褐色土	高坏D	約10	－	(3.3)	7/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	1条の稜。正位無蓋焼成、内外面降灰顕著。焼き歪みあり	85167
85	748	8号窯	表土	高坏D	約11	－	(3.4)	7/36	細砂多、礫少	淡灰	灰白	焼・還	1条の稜。正位無蓋焼成、内外面自然釉顕著	86173
85	749	8号窯	前庭部凹み黒灰色土層	高坏D	11.8	－	(3.3)	3/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還		86435
85	750	8号窯	前庭部流込土	高坏D	11.9	－	(3.3)	10/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	1条の稜。正位無蓋焼成、内面降灰あり	85519
85	751	8号窯	前庭部流込土	高坏D	〔14.2〕	－	(2.4)	5/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	焼成あまい。焼き歪みあり	86434
85	752	8号窯	前庭部黒灰色土	高坏D	約12	－	(2.7)	5/36	細砂多、礫少	灰	暗灰	焼・還	1条の稜。正位無蓋焼成、内面自然釉顕著	86436
85	753	8号窯	前庭部凹み黒灰色土層	埦か	約12.6	－	(3.1)	4/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	1条の稜。正位無蓋焼成、内外面自然釉顕著	86437
85	754	8号窯	最終床面天井崩落土層	高坏D	－	8.4	(5.1)	脚6/36	細砂少	灰	淡灰	焼・還	2段2方透かし。正位焼成、外面自然釉若干あり	86438
85	755	8号窯	燃焼室床面直上ベルト褐色土	高坏D	－	8.5	(5.1)	脚23/36	細砂多、礫少	暗灰	淡灰	焼・還	2段2方透かし。正位焼成、外面降灰あり	85168
85	756	8号窯	窯体流込土	高坏D	－	9.2	(6.0)	脚16/36	細砂多、礫少	暗灰	淡灰	焼・還	2段2方透かし。正位焼成、外面降灰あり	85162
85	757	8号窯	前庭部凹み黒灰色土層	高坏D	－	10.0	(1.9)	脚6/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還		86440

第 43 表　窯跡出土遺物観察表 14

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
85	758	8号窯	燃焼室床直上ベルト褐色土、前庭部凹み黒灰色土	高坏C	－	7.4	(3.5)	脚 11/36	細砂多	淡灰	灰	焼・還	有蓋。正位焼成・外面黒化	85169
85	759	8号窯	最終床面天井崩落土	高坏A・B	－	15.2	(1.0)	脚 5/36	細砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	85525
85	760	8号窯	前庭部凹み黒色土、灰原	瓶類	9.4	－	(3.4)	9/36	細砂多、粗砂	灰オリーブ	淡灰	焼・還		86443
85	761	8号窯	不整形土坑	蓋(坏H)か	14.5	－	(2.5)	4/36	細砂多、粗砂	淡灰	淡灰	焼・還	瓶類の可能性残す	86175
85	762	8号窯	灰原表土	甕	20.0	－	(5.3)	7/36	細砂多、礫	灰	灰	焼・還		86174
85	763	8号窯	前庭部凹み黒灰色土層	甕	21.5	－	(5.3)	3/36	粗砂多、礫	灰	灰	焼・還		85164
85	764	8号窯	前庭部凹み黒灰色土層	甕	約22	－	(4.2)	2/36	粗砂多、礫	灰	灰	焼・還		86439
85	765	8号窯	竪穴状遺構埋土	甕	約33	－	(3.9)	3/36	粗砂多、礫少	灰	淡灰黄	生・還	小片のため傾きに不安残す	86176
86・87	766	8号窯他	8号窯焚口埋土、7号窯溝状遺構流土、11号窯煙道埋土	平瓶	7.1	－	16.0	36/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	閉塞円盤。体部上面に刻書	－
88	767	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中、5号窯灰原表面	蓋(坏G)	9.4	返し 7.8	(2.3)	13/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還		85007
88	768	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中、5号窯灰原表面	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	(2.0)	18/36	粗砂、礫少	淡黄灰	灰	焼・還	倒位焼成、内面に降灰・焼土熔着。外面に径約9cmの重ね焼き痕・坏身口縁部片熔着	85008
88	769	5号窯窯体	舟底状ピット、5・10号窯29D、30D畦黒灰色土層	蓋(坏G)	9.6	返し 7.4	2.5	21/36	粗砂、大型礫少	淡黄灰	淡黄灰	焼・還	鈕径1.2cm。内外面降灰顕著	85060
88	770	5号窯窯体	焼成室最終床床面	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	3.4	36/36	粗砂、礫少	暗灰	暗灰	焼・還	鈕径1.0cm。正位焼成、外面に降灰・重ね焼き痕あり。焼き歪み・膨れ顕著	85125
88	771	5号窯窯体	焼成室最終床床面	蓋(坏G)	9.9	返し 8.0	(1.9)	5/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還/転か	内外面に降灰あり。焼き台(置き台)転用か	85542
88	772	5号窯窯体	舟底状ピット	蓋(坏G)	9.9	返し 8.2	(2.1)	7/36	粗砂、礫少	暗灰	暗灰	焼・還	天井部外面は回転ケズリ後に丁寧な回転ナデ調整。倒位焼成、内面降灰顕著。外面に身との重ね焼き痕	86652
88	773	5号窯窯体	舟底状ピット	蓋(坏G)	10.0	返し 8.0	3.1	21/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	鈕径1.3cm。正位焼成、外面降灰あり。焼き歪みあり	85068
88	774	5号窯窯体	舟底状ピット	蓋(坏G)	9.8	返し 7.8	3.2	6/36	粗砂少	灰	暗灰	焼・還	鈕径cm。正位焼成、外面降灰あり	85058
88	775	5号窯窯体	舟底状ピット	蓋(坏G)	10.1	返し 8.0	(2.5)	14/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり	85056
88	776	5号窯窯体	焼成室最終床床面	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	3.4	13/36	粗砂、大型礫少	灰	灰	焼・還	鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰あり。焼き歪み顕著	85062
88	777	5号窯窯体	焼成室床面上、5号窯灰原	蓋(坏G)	10.1	返し 8.4	3.2	23/36	細砂少	淡灰	淡黄灰	焼・還	鈕径1.3cm。正位焼成、外面降灰あり。焼き歪み顕著	85066
88	778	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中、30-DG南西隅黒灰色土	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	(2.1)	22/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還/転	正位焼成、外面黒化。破片の一部は焼き台(置き台)に転用	85061
88	779	5号窯窯体	舟底状ピット、燃焼室床面断ち割り中、焼成室床面上	蓋(坏G)	10.0	返し 8.3	(2.2)	29/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり	85067
88	780	5号窯窯体	最終床燃焼部崩落土、灰原	蓋(坏G)	9.9	返し 8.3	2.8	33/36	細砂、礫少	暗灰	暗灰/淡黄	焼・還	鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰顕著で他個体片熔着。焼き歪み膨れ顕著	85126
88	781	5号窯窯体	舟底状ピット床面下・焼成室	蓋(坏G)	10.1	返し 8.4	(2.0)	9/36	粗砂多	灰	灰緑	焼・還	正位焼成。外面降灰・自然釉顕著で調整不明	86653
88	782	5号窯窯体	舟底状ピット	蓋(坏G)	10.3	返し 8.4	2.1	16/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還/転か	鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰・焼き歪み顕著。石片熔着、焼き台(置き台)に転用か	85059
88	783	5号窯窯体	焼成室床面、燃焼室断ち割り中	蓋(坏G)	10.7	返し 8.8	(2.2)	17/36	細砂多	淡灰	灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり	85207
88	784	5号窯窯体	焼成室床面上	蓋(坏G)	約11	返し 約9	(2.1)	8/36	粗砂少	灰	淡灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり	86696
88	785	5号窯窯体	舟底状ピット	坏Hか	11.0	返し 9.0	2.8	8/36	粗砂、礫少	淡灰白	灰	焼・還	外底は粗いナデ調整。倒位焼成、外面降灰・焼き膨れ顕著	85057
88	786	5号窯窯体	焼成室床面	蓋(坏G)	11.0	返し 9.4	(2.1)	12/36	細砂多	灰オリーブ	暗灰	焼・還	外面降灰あり。焼き歪みあり	85208
88	787	5号窯窯体	焼成室床面断ち割り中	蓋(坏G)	約11	返し 約9	(2.4)	5/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	天井部外面ナデ調整	86695
88	788	5号窯窯体	燃焼室床面下	坏G	7.2	4.5	2.7	7/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	内底が凹線状にくぼむ	85010
88	789	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	7.9	4.2	3.4	9/36	細砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	焼き歪みあり	85009
88	790	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	7.9	6.8	3.6	4/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化。体部焼き歪みか	85053
88	791	5号窯窯体	舟底状ピット、5・10号窯灰原30DE畦黒灰色土層	坏G	8.4	5.5	3.1	9/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	正位焼成。外面降灰あり、外底に窯壁土片熔着	86651
88	792	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	8.6	5.3	3.2	13/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり、外底に焼土熔着。焼き歪みあり	85011
88	793	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	8.8	6.1	3.1	20/36	粗砂、大型礫少	淡灰	灰	焼・還	内底は段状を呈する。外面黒化。体部焼き割れあり	85052
88	794	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中	坏G	8.9	6.4	3.4	12/36	粗砂、礫少	灰	黒灰	焼・還	外面黒化。焼き歪み、小さい焼き膨れ目立つ	85205
88	795	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	9.1	8.0	3.4	23/36	粗砂、礫少	灰	黒灰	焼・還	外面黒化・降灰あり。焼き歪み顕著	86226
88	796	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	9.2	7.1	3.5	17/36	粗砂少、礫少	灰	黒灰	焼・還	外面黒化。体部焼き歪みあり	85051
88	797	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	9.4	6.4	3.4	15/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	外面降灰あり。焼き歪みあり	85050
88	798	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	9.4	5.6	3.4	9/36	粗砂多、大型礫少	暗灰	暗灰	焼・還/転	破断面を含め黒化、焼き歪みあり	85012
88	799	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中、灰原、10号窯灰原29-E	坏G	9.9	7.1	3.0	11/36	粗砂、礫少	淡灰	黒灰	焼・還/転	外面黒化、焼き歪みあり	85206
88	800	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	10.2	－	(2.5)	8/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面降灰顕著	86669
88	801	5号窯窯体	舟底状ピット	坏G	10.8	8.4	3.6	5/36	粗砂、大型礫少	淡灰	淡灰	焼・還	焼成前に底部穿孔か(焼き台か)	86670
88	802	5号窯窯体	焼成室天井崩落土	坏G	－	6.1	(3.0)	－	粗砂多、礫少	淡灰黄	淡橙	焼・還	外底は粗いナデ調整。外面は還元弱い	86624
88	803	5号窯窯体	舟底状ピット、焼成室最終床埋土	坏G	－	5.9	(1.4)	－	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	86668
88	804	5号窯窯体	焼成室床面断ち割り中	坏	10.0	－	(2.7)	13/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化。坏H蓋の可能性あり	85013
88	805	5号窯窯体	最終床埋土	坏G	約10	－	3.5	17/36	砂粒少含	灰	黒灰	焼・還	外面黒化。焼き歪み顕著	85127
88	806	5号窯窯体	舟底状ピット	鉢か	約18	－	(4.5)	3/36	砂粒少含	灰	灰オリーブ	転	焼き歪みあり。破片化後、焼き台(置き台)に転用。窯壁土・自然釉熔着	86649
88	807	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中	高坏Dか	10.0	－	2.0	5/36	粗砂少	灰白	灰白	生・還	体部外面に沈線1条	86648
88	808	5号窯窯体	焼成室床面上	高坏Eか	－	－	(2.2)	－	粗砂少	灰白	淡黄灰	生・還	生焼け・磨滅顕著	86666
88	809	5号窯窯体	舟底状ピット	高坏C	－	－	(3.0)	－	粗砂少	淡灰	淡灰	焼・還	沈線1条	86663
88	810	5号窯窯体	焼成部天井崩落土	高坏Dか	－	11.8	(2.6)	脚 13/36	粗砂、礫少	褐灰	灰	焼・還		86622
88	811	5号窯窯体	焼成室床面上	蓋(盤類か)	約16か	－	(1.6)	(2/36)	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉熔着。577と同一器種。小片のため復元図に不安残す	85534
88	812	5号窯窯体	舟底状ピット	坏Gか	9.8	－	(2.3)	14/36	粗砂、礫少	青灰	青灰	焼・還		86650
88	813	5号窯窯体	窯尻床面焼台	長頸瓶	－	－	(5.4)	－	粗砂、礫少	淡黄灰	灰	生・還	生焼け	86689
88	814	5号窯窯体	窯尻床面焼台	瓶	－	－	(3.5)	－	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け	86686
88	815	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中、5・10号窯、29D、30D畦黒灰色土層	瓶類	－	8.9	(2.7)	脚 34/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり。焼き歪みあり	85006
88	816	5号窯窯体	舟底状ピット	瓶類	8.8	－	(2.0)	6/36	粗砂多	淡灰	淡灰	焼・還		86661
88	817	5号窯窯体	最終床燃焼室崩覆土	瓶類	－	－	(6.7)	－	細砂、大型礫少	灰	淡灰黄	焼・還	外面降灰顕著	86625

第 44 表　窯跡出土遺物観察表 15

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
88	818	5号窯窯体	舟底状ピット	小型壷	8.2	－	(2.3)	6/36	粗砂少	灰	灰	焼・還		86662
88	819	5号窯窯体	舟底状ピット	小型壷	(9.5)	－	(3.9)	－	粗砂少	灰	灰	焼・還		85541
88	820	5号窯窯体	舟底状ピット	小型壷	約7	－	(3.4)	－	粗砂少	灰白	灰白	焼・還		86664
89	821	5号窯窯体	窯尻床面焼台	甕	－	－	(8.8)	－	細砂、粗砂、礫	灰	灰	焼・還		86688
89	822	5号窯窯体	燃焼室床面断ち割り中	甕	約18	－	(4.1)	3/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86665
89	823	5号窯窯体	最終床燃焼部崩落土	甕	25.6	－	(6.4)	6/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	内外面H類タタキ後、回転ナデ調整。生焼け	85105
89	824	5号窯窯体	焼成部最終床崩落土、最終床燃焼部崩落土、灰原30-E、29-E	鉢	約20	－	(11.2)	14/36	粗砂、礫少	青灰	青灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。口縁端部をヘラ状工具で丁寧に面取り。焼き歪み顕著	86757
89	825	5号窯窯体	舟底状ピット	鉢	－	－	(4.7)	－	細砂多、粗砂	淡灰黄	淡灰	生・還	内面D類、外面Ha類。口縁端部をヘラ状工具で丁寧に面取り。生焼け、内面磨滅	86728
89	826	5号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(坏G)	9.4	返し 7.6	(2.3)	10/36	粗砂、礫少	暗灰	淡黄灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり	85055
89	827	5号窯前庭部	前庭部黒灰色土	蓋(坏G)	11.0	返し 8.8	(2.1)	5/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成、外面降灰顕著。焼き歪み・割れあり	86647
89	828	5号窯前庭部	前庭部黒灰色土	鉢	－	－	(6.1)	－	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内外面ナデ調整、外面沈線1条。焼き歪みあり、内面自然釉熔着	86730
90	829	10号窯窯体	床面上	蓋(坏G)	約10	返し 約8	(1.5)	11/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	焼き歪み顕著	86660
90	830	10号窯窯体	埋土最終床	蓋(坏G)	10.3	返し 8.1	(2.3)	15/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	正位焼成。外面降灰、重ね焼き痕あり	85069
90	831	10号窯窯体	床面上、5号窯灰原表土	坏G	－	6.0	(1.5)	－	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還		86657
90	832	10号窯窯体	埋土最終床、灰原、10号窯前庭部周辺29－D暗褐色砂層、5号窯灰原	坏G	9.0	4.6	3.3	17/36	粗砂、礫少	灰白	灰	焼・還	有蓋焼成。外面黒化、外底火だすき痕あり	85085
90	833	10号窯窯体	最終床P-1	坏	－	－	－	17/36	粗砂、礫少	暗灰	黒灰	転	正位で焼き台に転用。焼土・自然釉顕著	86703
90	834	10号窯窯体	床面上、5・10号窯灰原30E褐色、5・10号窯29、30E畦褐色土	長頸瓶	－	－	(8.9)	－	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	肩部に沈線2条。生焼けに近い	85506
90	835	10号窯窯体	焼成室埋土最終床	提瓶	－	－	(5.6)	－	粗砂多、礫少	灰白	灰	転	ボタン状鈕。破片化後に焼き台(置き台)に転用。傾きに不安残す	86687
90	836	10号窯窯体	10号窯排水溝№51～55	甕	23.4	－	(25.2)	15/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面HD類(頸部含む)。上半はナデを加える。焼き台(置き台)に転用	85461
90	837	10号窯窯体	最終床焼台、5号窯灰原表面、灰原29-D、29-E	甕	47.2	－	(14.9)	4/36	粗砂、大型礫多	灰	黒灰	焼・還/転	やや乱れた斜行刺突文3列、沈線文で加飾。正位焼成、降灰。焼き台(置き台)に転用	86806
90	838	10号窯前庭部	前庭部西29CG、5号窯灰原表土、5・10号窯灰原№3	蓋(坏G)	10.2	返し 8.3	3.3	25/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	鈕径1.4cm。外面黒化	85070
90	839	10号窯前庭部	前庭部周辺29-D、暗褐色粘砂層灰原	蓋(坏G)	10.2	返し 8.2	(2.9)	6/36	粗砂少	灰	灰黄	焼・還	正位焼成。外面降灰顕著、窯壁土塊熔着	85054
90	840	10号窯前庭部	前庭部30-DG暗褐色粘砂層	坏H	9.3	－	2.3	16/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	外底に焼成前ヘラ記号「//」。外底は未調整に近い。外面黒化	85372
90	841	10号窯前庭部	前庭部西29-CG	坏G	8.6	6.0	3.4	6/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還		85014
90	842	10号窯前庭部	前庭部流込土	坏G	10.3	9.0	(3.6)	6/36	粗砂、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼・還/転か	焼き歪みあり。内面に自然釉・焼土塊熔着、焼き台(置き台)に転用か	86656
90	843	10号窯前庭部	前庭部表土	坏G	－	5.8	(2.3)	－	粗砂、大型礫少	淡灰	灰白	生・還	外底生焼け	86655
90	844	10号窯前庭部	前庭部周辺30ピット暗褐色粘砂	坏G	10.0	6.3	2.8	12/36	粗砂、大型礫少	淡灰	灰	焼・還	外底に焼成前ヘラ記号「×」か。外面黒化	85396
90	845	10号窯前庭部	前庭部30-DG、暗褐色粘砂、5号窯灰原	高坏Aか	15.0	－	(3.6)	10/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	有蓋、外面黒化。外底にヘラ記号様工具痕「/」、透かしを穿つ際の痕跡か	85421
90	846	10号窯前庭部	前庭部、5号窯灰原	瓶類	14.0	－	(3.4)	7/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還/転か	破断面に降灰・自然釉熔着。焼き台(置き台)に転用か	85093
90	847	10号窯前庭部	前庭部	瓶類	12.9	－	(6.2)	14/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	生焼け	85094
90	848	10号窯前庭部	前庭部流込土	甕	26.4	－	(3.9)	3/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	小片のため傾きに不安残す	86659
90	849	10号窯前庭部	前庭部流込土	甕	－	－	(4.9)	－	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類	86658
91	850	5・10号窯灰原	灰原30-EG西半分黒灰色土層	蓋(坏G)	9.3	返し 7.6	3.2	21/36	粗砂、礫少	淡灰	淡黄灰	焼・還	外面に焼成前ヘラ記号「×」。鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰顕著	85378
91	851	5・10号窯灰原	灰原30-EG西半分黒灰色土層、5・10号窯灰原30-DE畦黒灰色土層	蓋(坏G)	9.3	返し 7.6	3.3	36/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	外面に焼成前ヘラ記号「×」。鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰あり	85379
91	852	5・10号窯灰原	灰原	蓋(坏G)	9.6	返し 7.6	3.0	16/36	粗砂多、礫少	暗灰	暗灰	焼・還	鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰あり	85380
91	853	5・10号窯灰原	29-D、29-E、灰原畦黒灰色土層	蓋(坏G)	9.9	返し 7.8	1.6	－	粗砂、礫少	灰オリーブ	灰オリーブ	焼・還		86700
91	854	5・10号窯灰原	灰原前庭部周辺29-D暗褐色砂層	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	3.1	15/36	粗砂、礫少	淡灰	淡黄灰	焼・還	鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰あり	86698
91	855	5・10号窯灰原	灰原	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	(2.0)	9/36	細砂、粗砂少	淡灰	淡黄灰	焼・還	薄手。正位焼成、外面降灰・自然釉あり	86699
91	856	5・10号窯灰原	灰原28-D褐色土	蓋(坏G)	約10	返し 約8	(2.0)	7/36	細砂多、粗砂少	黒灰	黒灰	焼・還/転か	内面降灰あり、焼き台(置き台)に転用か。坏H蓋の可能性あり(天井部外面ナデ調整)	86701
91	857	5・10号窯灰原	灰原、10号窯灰原28-D褐色土	蓋(坏G)	9.9	返し 7.9	3.5	36/36	細砂、粗砂少	暗灰	暗灰	焼・還	鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰あり	85383
91	858	5・10号窯灰原	灰原B-120	蓋(坏G)	9.8	返し 7.8	2.9	6/36	粗砂、礫少	灰	暗灰緑	焼・還	鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰あり	85374
91	859	5・10号窯灰原	灰原29-E、30-E畦、黒灰色土層	蓋(坏G)	9.9	返し 8.0	3.4	10/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰あり	85388
91	860	5・10号窯灰原	灰原29-D西褐色粘砂	蓋(坏G)	10.1	返し 8.0	2.9	12/36	粗砂、礫少	淡茶橙	茶褐	焼・還	鈕径1.3cm。正位焼成。外面降灰あり。生焼けに近い	85375
91	861	5・10号窯灰原	灰原29-D、30-D黒灰色土層、畦	蓋(坏G)	10.0	返し 8.1	2.5	8/36	粗砂多、礫少	灰	灰	生・還	鈕径1.4cm	85376
91	862	5・10号窯灰原	灰原30-E	蓋(坏G)	10.1	返し 8.5	3.3	36/36	粗砂多	淡黄灰	淡灰黄	焼・酸	鈕径1.3cm。正位焼成。外面降灰あり、焼き歪み・割れあり	86215
91	863	5・10号窯灰原	灰原	蓋(坏G)	10.1	返し 8.4	2.8	22/36	細砂多、粗砂少	淡茶灰	灰褐	焼・酸	鈕径1.5cm。正位焼成。外面降灰あり、焼き歪みあり	85382
91	864	5・10号窯灰原	灰原38-D褐色土	蓋(坏G)	10.4	返し 8.4	(2.7)	15/36	粗砂、大型礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪みあり	86697
91	865	5・10号窯灰原	灰原29-DG黒灰色土層、5・10号窯灰原畦29-D、29-E黒灰色土層	坏H	10.2	－	2.8	20/36	粗砂、礫少	灰白	灰	焼・還	外底未調整に近い。倒位焼成、外面降灰あり	85371
91	866	5・10号窯灰原	29-E、30-E畦黒灰色土層	坏G	8.8	5.7	3.3	18/36	粗砂多、礫少	灰	暗灰	焼・還	外面黒化・火だすき痕あり	85428
91	867	5・10号窯灰原	灰原30-DE畦黒灰色土層	坏G	9.0	6.2	3.4	8/36	粗砂多	灰オリーブ	灰	焼・還	焼成前に外底ナデ調整後、ヘラ記号。器壁薄い。外面黒化	85392
91	868	5・10号窯灰原	B-120、10号窯灰原29-C	坏G	9.0	6.2	3.7	23/36	粗砂多	灰	暗灰	焼・還	外面黒化	85386
91	869	5・10号窯灰原	灰原29-E、30-E畦黒灰色土層	坏G	9.0	6.4	3.0	15/36	細砂少	淡灰	淡灰/灰	焼・還	焼成前に外底軽いナデ調整後、ヘラ記号。外面黒化、焼き歪みあり	85401
91	870	5・10号窯灰原	灰原	坏G	9.1	5.8	3.7	11/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	外面黒化	85389
91	871	5・10号窯灰原	灰原	坏G	9.3	5.5	3.6	11/36	細砂多	灰	暗灰	焼・還	外面黒化	85432
91	872	5・10号窯灰原	29-E、30-E畦褐色土	坏G	9.2	6.4	3.4	15/36	粗砂、大型礫少	灰褐	灰褐	焼・還	外面黒化。底部焼き割れあり	85437
91	873	5・10号窯灰原	灰原29、30-D畦黒灰色土層、30-DE畦黒灰色土層B-120表面、5号窯表土	坏G	9.3	6.2	3.6	20/36	粗砂少	淡灰	淡灰オリーブ	焼・還	正位焼成。外面黒化・自然釉熔着。口縁端部は蓋との熔着で欠損部分あり	85387

第 45 表　窯跡出土遺物観察表 16

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
91	874	5･10号窯灰原	灰原30-F褐色土	坏G	9.6	7.4	3.1	26/36	粗砂多	灰	黒灰/灰	焼･還	正位焼成、外面黒化。焼き歪み顕著	85390
91	875	5･10号窯灰原	5号窯灰原、5･10号窯灰原29-E、30-E畦黒灰色土層	坏G	9.1	7.6	3.4	23/36	粗砂多	淡灰	灰	焼･還	外面黒化。小さな焼き膨れ目立つ	86705
91	876	5･10号窯灰原	29-D西褐色粘砂	坏G	9.7	6.1	3.9	12/36	細砂少	灰	灰	焼･還	外底は未調整。外面黒化･降灰あり	85384
91	877	5･10号窯灰原	灰原	坏G(焼き台)	－	5.8	2.8	－	粗砂少	灰	灰	焼･還	焼成前に内側から粗く底部穿孔(焼き台)	85391
91	878	5･10号窯灰原	灰原30-E	坏G	10.0	6.4	3.6	8/36	粗砂少	灰	灰	焼･還		85435
91	879	5･10号窯灰原	30-D、30-E畦、黒灰色土層	坏G	10.0	6.2	3.3	8/36	粗砂、大型礫少	灰	灰	焼･還	外面黒化･火だすき痕	85442
91	880	5･10号窯灰原	灰原B-120	坏G	－	7.5	(1.7)	－	粗砂少	淡灰 オリーブ	灰	焼･還	正位無蓋焼成。内面降灰顕著	85393
91	881	5･10号窯灰原	灰原黒灰色土29-D	坏G	9.9	5.8	2.9	18/36	粗砂、大型礫多	淡灰	暗灰	焼･還	焼成前にヘラ記号「//」。正位焼成、外面黒化。焼き歪み顕著。外底に焼土熔着	86704
91	882	5･10号窯灰原	5･10号窯灰原30-D、E畦黒灰色土層)、10号窯灰原30-E、G西半分黒灰色土層	坏G	10.0	6.3	3.6	20/36	粗砂多	灰/淡灰橙	灰/淡灰橙	焼･還/酸	一部還元弱い	85441
91	883	5･10号窯灰原	灰原	坏G	9.9	6.0	3.8	20/36	粗砂、大型礫少	淡灰	淡灰	焼･還	外底は未調整に近い。886と類似	85436
91	884	5･10号窯灰原	灰原	坏G	10.2	7.7	3.4	4/36	粗砂、大型礫少	灰	灰	焼･還	焼成前にナデ調整後、ヘラ記号「/」。外面黒化	85400
91	885	5･10号窯灰原	灰原29、30-E畦黒灰色土	坏G	10.1	－	4.0	13/36	粗砂、大型礫多	灰	灰	焼･還	外底周縁部回転ヘラ切り時の工具痕顕著に残る。外底は丁寧な回転ナデ調整。焼き歪みあり	85385
91	886	5･10号窯灰原	灰原	坏G	10.5	6.4	3.9	14/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼･還	外面黒化。火だすき痕、焼土熔着。883と類似	85433
91	887	5･10号窯灰原	5･10号窯灰原30-F褐色土	坏G	10.5	6.9	3.3	14/36	細砂、礫少	灰	黒灰	焼･還	外面黒化。焼き歪み･割れあり	85430
91	888	5･10号窯灰原	灰原	坏G	約10	約7	3.7	15/36	粗砂少	灰	淡黄灰	焼･還	正位焼成。外面降灰顕著。口縁端部は蓋との熔着で欠損部分あり	85439
91	889	5･10号窯灰原	灰原	坏B	12.2	8.0	4.0	9/36	粗砂多	灰白	淡灰	焼･還	外面黒化。8c前葉	85381
91	890	5･10号窯灰原	灰原28-D褐色土、5･10号窯灰原畦29-DE黒灰色土層	蓋(盤類か)	13.0	返し 10.2	(1.6)	6/36	粗砂少	灰	暗灰	焼･還	外面黒化。焼き割れあり	85369
91	891	5･10号窯灰原	灰原30-E西半分黒灰色土層	蓋(盤類か)	14.1	返し 10.8	2.6	13/36	粗砂、礫少	淡黄灰	灰/黒灰	焼･還	焼成前にナデ調整後、径約4.8cmの穿孔。倒位焼成、内面降灰顕著、外面一部黒化	85402
91	892	5･10号窯灰原	灰原	蓋(盤類か)	約20	返し 約16	(2.2)	4/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	生･還	内面中央付近同心円タタキの後、粗いナデ調整。外面は粗い回転ケズリ調整	85415
91	893	5･10号窯灰原	灰原29-D畦30-D黒灰色土層	蓋(盤類か)	－	鈕径3.4	(2.9)	－	粗砂、礫少	灰	灰	焼･還		85482
91	894	5･10号窯灰原	灰原	蓋(盤類か)	24.0	返し 20.2	(3.6)	6/36	粗砂、礫少	淡灰 オリーブ	淡灰 オリーブ	生･還	内面同心円タタキの後、粗いナデ調整。外面は粗い回転ナデ調整	85412
91	895	5･10号窯灰原	灰原	蓋(大型盤類)	約39	返し 約36	(2.6)	5/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼･還	外面周縁が黒化。重ね焼きか	85497
92	896	5･10号窯灰原	灰原、29-E北東隅崖上黒灰色土層	盤	16.8	－	4.7	14/36	細砂、礫少	灰白	灰	焼･還	倒位焼成か。焼き膨れ目立つ	85373
92	897	5･10号窯灰原	灰原	盤	23.1	－	(6.8)	6/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼･還	外面下半はナデ調整。外面黒化、倒位焼成か	85395
92	898	5･10号窯灰原	10号窯灰原24-E、5･10号窯灰原畦黒灰色土層30-E、30-D	鉢(浅鉢)	27.0	－	(5.4)	14/36	粗砂、大型礫少	黒灰	灰	焼･還	正位焼成、内面自然釉。破片の一部を焼き台(置き台)に転用	85399
92	899	5･10号窯灰原	灰原畦29、30-E黒灰色土層	鉢	17.4	－	(6.5)	8/36	細砂、礫少	淡灰	暗灰	焼･還	倒位焼成、外面降灰あり	85397
92	900	5･10号窯灰原	灰原B-120	鉢か	15.4	－	(7.4)	6/36	粗砂少	灰	灰オリーブ	焼･還	沈線2条。有蓋または倒位焼成、外面降灰顕著	85423
92	901	5･10号窯灰原	灰原30-EG西半分黒灰色土層	鉢か	18.0	－	(6.0)	5/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼･還	沈線2条。倒位または有蓋焼成、焼き割れか	85495
92	902	5･10号窯灰原	29-E、30-E畦黒灰色土層	埦か	－	9.5	(2.3)	－	粗砂多、大型礫少	灰	灰	焼･還	器種不明。焼成前に細い工具で雑な格子目様のヘラ書き。内面は「////」のヘラ書きをナデ消して格子様を、外面は一度にヘラ書き	85406
92	903	5･10号窯灰原	29-D、30-D畦黒灰色土層	高坏A	12.2	－	(11.4)	6/36	粗砂多、大型礫少	灰	灰	焼･還	有蓋。3方に縦長の細い透かし孔。外面黒化	85434
92	904	5･10号窯灰原	灰原29-D黒灰色土層、30-D南西隅黒灰原、5号窯灰原	高坏Aか	15.4	－	(11.8)	4/36	粗砂多、礫少	灰	暗灰	焼･還	有蓋。3方に縦長の細い透かし孔。脚部との接合の際に同心円タタキ使用か。正位焼成、外面黒化	85422
92	905	5･10号窯灰原	灰原30-DE畦黒灰色土層、29、30-E畦黒灰色土	高坏Aか	－	12.7	(10.5)	脚 14/36	粗砂多、礫少	灰	灰/黒灰	焼･還	有蓋。3方に縦長の細い透かし孔。脚部との接合の際に同心円タタキ使用か。正位焼成、外面黒化	85408
92	906	5･10号窯灰原	5号窯灰原表面、5･10号窯灰原30-F褐色土	高坏E	－	12.2	(6.8)	13/36	粗砂少	淡褐灰	淡灰	焼･還	沈線2条。内面上方に絞り痕。透かしの有無不明	85413
92	907	5･10号窯灰原	灰原29-E	高坏E	－	10.7	(9.3)	脚 36/36	粗砂、礫少	黒灰	灰/黒灰	焼･還	正位無蓋焼成。坏部内面･外面降灰あり	85411
92	908	5･10号窯灰原	灰原29-D黒灰色土	高坏E	14.3	－	(4.0)	13/36	粗砂多、礫少	灰褐	灰褐	焼･酸	坏部内面全体にナデ調整加える。無蓋焼成、内外面降灰あり。909と類似	85420
92	909	5･10号窯灰原	灰原29-D西、褐色粘砂	高坏E	13.8	－	(4.4)	16/36	粗砂多、礫少	灰褐	灰褐	焼･酸	坏部内面全体にナデ調整加える。無蓋焼成、908と類似	85410
92	910	5･10号窯灰原	5･10号窯B-120灰原表面、30-DG南西隅黒灰色土、5･10号窯灰原、10号窯灰原30-EG西半分黒灰色土層、10号窯灰原褐色粘砂29-D西	高坏E	[13.8]	－	(4.5)	23/36	細砂、礫少	黒灰	黒灰	焼･還	坏部内面全体にナデ調整加える。無蓋焼成、焼き歪み顕著	85537
92	911	5･10号窯灰原	灰原30-D南西隅黒灰色土	高坏E	12.9	－	(4.4)	14/36	粗砂多、礫少	黒灰	暗灰	焼･還	坏部内面全体にナデ調整加える。正位無蓋焼成、内外面黒化	85418
92	912	5･10号窯灰原	灰原	高坏E	14.0	－	4.7	8/36	細砂、礫少	茶褐	茶褐	焼･酸	坏部内面全体にナデ調整加える。無蓋焼成か	85424
92	913	5･10号窯灰原	5号窯灰原、10号窯灰原30-F褐色土	高坏E	－	11.0	(1.7)	脚 11/36	礫少	淡橙	淡橙	焼･酸	沈線1条	86623
92	914	5･10号窯灰原	灰原29-F褐色土	高坏C	8.4	－	(3.8)	13/36	礫少	暗灰	黒灰	焼･酸	体部下端を稜状に仕上げる。倒位焼成か。外面降灰･黒化	85414
92	915	5･10号窯灰原	灰原29-D黒灰色土、5号窯灰原	高坏C	9.7	－	(2.8)	8/36	粗砂、礫少	灰	黒灰	焼･酸	体部下端を稜状に仕上げる。倒位焼成か。外面黒化	85417
92	916	5･10号窯灰原	灰原30-DE畦黒灰色土層、29-E北東隅崖上黒灰色土層	高坏C	9.6	7.8	8.3	11/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼･還	体部下端に沈線1条。稜状に仕上げる。倒位焼成。脚内面降灰あり	85370
92	917	5･10号窯灰原	灰原B-120	高坏C	－	－	(1.2)	－	粗砂、礫少	灰	灰	焼･還	外面一部降灰あり	86667
92	918	5･10号窯灰原	灰原B-120	高坏C	9.4	6.4	6.0	13/36	粗砂少	灰	灰/黒灰	焼･還	無蓋か。外面一部黒化	85551
92	919	5･10号窯灰原	灰原	高坏C	－	7.8	(3.3)	12/36	礫少	暗灰	暗灰	焼･還	薄手で精良なつくり。無蓋か	85404
93	920	5･10号窯灰原	灰原29-D西褐色粘砂	平瓶	7.2	－	(5.2)	19/36	粗砂多	暗灰	灰	転	破断面に窯壁土熔着、内面降灰あり	85416
93	921	5･10号窯灰原	灰原	平瓶	7.8	－	(5.1)	17/36	粗砂多	灰	灰	焼･還	沈線1条。内外面降灰あり	85472
93	922	5･10号窯灰原	灰原表面№3、5～11号窯A-100灰原	平瓶	－	－	(9.7)	－	粗砂多、大型礫少	灰	灰	焼･還	閉塞円盤径約4.9cm	85492
93	923	5･10号窯灰原	5･10号窯灰原29-E、30-E畦黒灰色土層	瓶または鉢	－	8.4	(3.3)	脚 36/36	粗砂、大型礫少	灰	灰	焼･還	内側から略方形孔3ヶ所(不規則)。正位焼成、焼き割れ顕著。脚端部に焼土熔着	85425
93	924	5･10号窯灰原	灰原畦29-D、29-E黒灰色土層	瓶または鉢	－	約9	(2.0)	8/36	粗砂、大型礫少	灰	淡灰	焼･還	正位焼成、外面降灰顕著	86702

第 46 表　窯跡出土遺物観察表 17

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
93	925	5･10号窯灰原	灰原表面№3	瓶または鉢	－	9.8	(4.2)	脚6/36	粗砂、大型礫少	暗灰	灰	焼･還	内底ハケ調整、外面一部カキメ調整。正位焼成か	85419
93	926	5･10号窯灰原	5･10号窯30-F褐色土、5号窯灰原表土	甕	11.2	－	(4.6)	10/36	粗砂多	灰	灰	焼･還	外面は右上がりのハケ調整後、回転ナデ調整	85398
93	927	5･10号窯灰原	灰原C-80G	横瓶	11.8	－	(4.4)	25/36	粗砂多	灰	黒灰	焼･還	浅い沈線1条。降灰･黒化目立つ	85426
93	928	5･10号窯灰原	灰原	瓶類	12.6	－	(3.6)	10/36	粗砂多	黒灰	灰	転	沈線1条。破断面含め自然釉熔着、焼き台(置き台)に転用	85431
93	929	5･10号窯灰原	灰原29-E、30-E畦黒灰色土層	甕	13.0	－	(3.9)	6/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼･還	口縁端部は内傾･肥厚。外面はハケ調整後、回転ナデ調整、沈線1条で加飾	85429
93	930	5･10号窯灰原	灰原30-DE畦黒灰色土層	甕	14.0	－	(3.4)	6/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼･還	口縁端部はしっかりと面取り。外面はハケ調整後、回転ナデ調整、沈線2条1単位(上下2ヶ所)で加飾	85427
93	931	5･10号窯灰原	灰原	横瓶	13.5	－	(5.9)	11/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼･還	内外面自然釉熔着	85394
93	932	5･10号窯灰原	灰原	瓶類	9.3	－	(6.8)	4/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼･還	正位無蓋焼成。内面降灰あり	86706
93	933	5･10号窯灰原	灰原B-120	小型壷	5.0	－	(2.9)	8/36	礫少	淡灰	淡灰	焼･還	有蓋。外面肩部以下に降灰あり	85409
93	934	5･10号窯灰原	灰原	小型壷	7.6	－	(6.2)	7/36	細砂少	淡灰	灰	焼･還	丁寧なつくり。外面全てに降灰あり、倒位焼成か	85405
93	935	5･10号窯灰原	灰原29-C	甕	21.8	－	(6.5)	6/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生･還	内面D類、外面H類。生焼け、磨滅顕著	86802
93	936	5･10号窯灰原	灰原B-120、5号窯表土	甕	23.4	－	(8.1)	6/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼･還	内面D類、外面H類。生焼けに近い	86793
93	937	5･10号窯灰原	灰原B-120	甕	22.0	－	(7.5)	2/36	粗砂、礫少	黒灰	灰	焼･還	内面Dc類、外面Ha類。正位焼成、降灰あり	86808
93	938	5･10号窯灰原	灰原	甕	22.8	－	(6.9)	10/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼･還/転	内面Da類、外面H類。沈線1条。正位焼成、降灰あり。破損後、破片の一部を焼き台(置き台)に転用	86805
93	939	5･10号窯灰原	灰原B-120	甕	19.2	－	(9.8)	7/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生･還	内面Dc類、外面Ha類。生焼け	86799
93	940	5･10号窯灰原	5号窯灰原,5･10号窯灰原30-F褐色土、5･10号窯30-D	甕	22.2	－	(7.0)	10/36	粗砂、礫少	灰	黒灰	焼･還/転	内面D類、外面Ha類、焼成前ヘラ記号「×」。正位焼成、降灰あり。破片の一部は焼き台(置き台)に転用	86803
93	941	5･10号窯灰原	灰原B-120	甕	約30	－	(9.4)	5/36	粗砂、礫少	淡黄緑	灰	焼･還	浅い凹線文2条。正位焼成、降灰顕著	86786
94	942	5･10号窯灰原	5号窯灰原、10号窯灰原28-E	甕	22.8	－	(11.5)	11/36	粗砂多、礫多	灰	灰褐	焼･還	内面Dc類、外面Ha類。正位焼成、降灰あり	86807
94	943	5･10号窯灰原	灰原B-120	甕	34.6	－	(12.3)	6/36	細砂多、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生･還	下段の波状文は斜方向。生焼け破片あり	86800
94	944	5･10号窯灰原	灰原、5･10号窯28-D、28-E畦	甕	36.6	－	(9.3)	12/36	粗砂、礫少	灰	黒灰	焼･還	正位焼成、降灰あり	86781
94	945	5･10号窯灰原	灰原、5号窯28-D、10号窯29-D、5･10号窯28-D、B-120表面№3畦	甕	39.2	－	(14.2)	9/36	粗砂多、礫多	黒灰	黒灰	焼･還	正位焼成、降灰あり。焼き歪み顕著	86798
94	946	5･10号窯灰原	灰原29-D、28-E、5号窯灰原	甕	37.0	－	(14.9)	18/36	粗砂多、礫多	灰褐	灰褐	焼･還/転	正位焼成、降灰あり。破片の一部は焼き台(置き台)に転用	86794
94	947	5･10号窯灰原	灰原、29-D西褐色粘砂、表面№3	甕	約39	－	(15.4)	4/36	粗砂多、礫多	灰	淡黄灰	焼･還	内面Da類、外面Ha類。沈線、波状文やや乱れる。正位焼成、降灰あり	86795
94	948	5･10号窯灰原	灰原B-120	甕	48.6	－	(10.8)	5/36	粗砂多、礫多	暗灰	灰	焼･還	正位焼成、降灰あり	86785
94	949	5･10号窯灰原	灰原B -120、5号窯灰原	甕	29.2	－	(13.2)	5/36	粗砂、大型礫少	淡灰	灰	生/焼･還	内面Dc類、外面Ha類。破片の一部は生焼け	86810
94	950	5･10号窯灰原	灰原29-C	鉢C(厚底)	－	6.6	(7.4)	底36/36	粗砂、礫少	淡灰	暗灰	焼･還	外底周縁は手持ちケズリ調整、外底はナデ調整。倒位焼成、外面黒化	85403
94	951	5･10号窯灰原	10号窯灰原30-EG西半分黒灰色土、5･10号窯灰原30-DE畦黒灰色土層	円面硯	－	12.3	(2.0)	脚20/36	粗砂少	黄灰	灰	焼･還	外面を波状文、沈線、透かし孔(下辺幅約5.5cm)4ヶ所で加飾。倒位焼成、内面降灰顕著	85538
94	952	5･10号窯灰原	灰原畦29-D、29-E黒灰色土層	鉢か	－	－	(3.2)	－	細砂	浅黄橙	浅黄橙	生･還		86817
94	953	5･10号窯灰原	灰原30-D	鉢	－	－	(3.0)	－	粗砂多	淡黄灰	淡黄灰	生･還	内面D類タタキ後ナデ調整、外面ナデ調整。口縁端部ヘラ状工具で丁寧に面取り。生焼け	86731
95	954	2号窯	焼成部床面断ち割りトレンチ	蓋(坏G)	9.7	返し 8.0	(1.8)	19/36	粗砂、礫少	オリーブ灰	暗灰	転	破断面含め自然釉熔著。焼き台(置き台)に転用	86131
95	955	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№19･34	蓋(坏G)	10.3	返し 8.4	(1.9)	17/36	粗砂少	灰	灰オリーブ	焼･還	正位焼成。外面降灰顕著、調整不明	86133
95	956	2号窯	前庭部№34	蓋(坏G)	10.0	返し 7.8	(2.0)	14/36	粗砂多	灰	灰	焼･還	外面黒化	86141
95	957	2号窯	焚口付近	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	(1.9)	12/36	粗砂多	暗赤褐	暗赤褐	焼･還/転か	外面に細いヘラ状工具で「个」様の文様が連続。破断面に焼土熔着、焼き台(置き台)に転用か	86140
95	958	2号窯	燃焼部中層№31焚口付近	蓋(坏G)	9.8	返し 8.2	(2.0)	36/36	粗砂少	灰	灰	焼･還/転	正位焼成、外面降灰あり。破片の一部は焼き台(置き台)に転用	86127
95	959	2号窯	焼成部№34、焚口付近	蓋(坏G)	9.6	返し 7.8	(2.6)	36/36	粗砂多、礫少	褐灰	灰	焼･還	正位焼成、外面降灰顕著。焼き歪み･割れあり	86126
95	960	2号窯	前庭部焚口付近	蓋(坏G)	9.6	返し 8.1	(2.5)	6/36	粗砂少	灰	灰	焼･還/転か	破片の一部は焼き台(置き台)に転用か	86139
95	961	2号窯	燃焼部中層№28、前庭部上層黒色土層№6	蓋(坏G)	－	鈕径1.5	(2.3)	－	粗砂、礫少	灰	黒灰	焼･還	鈕径1.5cm。内面に火だすき痕、外面黒化	86136
95	962	2号窯	燃焼部中層№31、前庭部中層濁茶褐色土層№14	蓋(坏G)	9.6	返し 7.9	3.4	32/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼･還	鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰あり。焼き割れ顕著	86115
95	963	2号窯	焼成部№34、前庭部	蓋(坏G)	9.8	返し 8.1	3.0	36/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼･還	鈕径1.6cm。正位焼成、外面降灰あり。中央部焼き割れ顕著	86124
95	964	2号窯	焚口付近	蓋(坏G)	9.6	返し 8.1	3.0	36/36	粗砂少	浅橙	灰	焼･還/酸	鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰あり。内面は還元弱い	86121
95	965	2号窯	燃焼部中層№28･33･34	蓋(坏G)	9.8	返し 8.0	2.7	36/36	粗砂、礫少	淡灰	灰/暗灰	焼･還	鈕径1.5cm。正位焼成、外面一部黒化	86117
95	966	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層	蓋(坏G)	10.0	返し 8.4	3.1	36/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼･還	鈕径1.7cm。正位焼成、外面降灰あり。若干焼き歪みあり	86125
95	967	2号窯	焼成部№34、前庭部	蓋(坏G)	10.0	返し 8.2	2.9	26/36	粗砂多	淡灰	灰	焼･還	鈕径1.4cm。天井部外面は回転ケズリ調整後に回転ナデ調整を加える。正位焼成、外面降灰あり	86116
95	968	2号窯	焚口付近	蓋(坏G)	10.4	返し 8.3	2.3	22/36	粗砂多	暗赤褐	暗赤褐	焼･酸	鈕径1.4cm。外面降灰あり。焼き歪みあり	86142
95	969	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層濁茶褐色土層	蓋(坏G)	10.2	返し 8.3	3.4	14/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼･還/転	鈕径1.6cm。正位焼成、外面降灰あり。破片の一部は焼き台(置き台)に転用	86119
95	970	2号窯	燃焼部中層№30･31、前庭部中層濁茶褐色土層№20	蓋(坏G)	10.2	返し 8.4	2.7	26/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼･還/転	鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰あり。焼き歪み顕著	86118
95	971	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層	蓋(坏G)	10.2	返し 8.2	3.0	36/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼･還	鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰あり。焼き割れ顕著	86123
95	972	2号窯	燃焼部中層№28、前庭部中層濁茶褐色土層№19、上層黒色土層№11	蓋(坏G)	10.3	返し 8.5	3.1	33/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡灰	生･還	鈕径1.7cm。生焼け、外面黒化	86122
95	973	2号窯	前庭部	蓋(坏G)	9.7	返し 7.6	(1.9)	13/36	粗砂、礫少	淡灰	暗灰	焼･還	正位焼成、外面黒化。若干焼き歪みあり	86138
95	974	2号窯	前庭部裾F-60G	蓋(坏G)	9.6	返し 7.7	(1.9)	10/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼･還	外面黒化	86137
95	975	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№23	蓋(坏G)	10.2	返し 8.6	(2.0)	18/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼･還	正位焼成、外面降灰あり	86132
95	976	2号窯	前庭部2-中№19濁茶褐色土	蓋(坏G)	－	鈕径1.5	(2.8)	－	粗砂多、大型礫少	灰	灰	焼･還	鈕径1.5cm	86120
95	977	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№20	蓋(坏G)	9.5	返し 7.6	3.0	31/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰褐	焼･還	鈕径1.4cm。正位焼成、外面降灰あり	86114
95	978	2号窯	前庭部裾E60～F60-G	蓋(坏G)	10.2	返し 8.4	3.0	4/36	粗砂少	灰	灰	焼･還	鈕径1.5cm。焼き歪みあり	86134
95	979	2号窯	前庭部	蓋(坏G)	10.0	返し 8.1	2.9	2/36	粗砂少	淡黄灰	淡灰	生･還	鈕径1.7cm。生焼け、外面黒化	86135

第 47 表　窯跡出土遺物観察表 18

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
95	980	2号窯	前庭部上層黒色土層№7	蓋(坏G)	10.0	返し 8.4	2.7	17/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	鈕径1.6cm。正位焼成、外面自然釉熔着	86130
95	981	2号窯	前庭部上層黒色土層№5・№8	蓋(坏G)	9.9	返し 8.0	3.1	29/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	鈕径1.5cm。正位焼成、外面降灰あり	86113
95	982	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№17	蓋(坏G)	9.3	返し 7.6	3.1	36/36	粗砂、礫少	淡灰	灰オリーブ	焼・還	鈕径1.5cm。倒位で983と重ね焼き。降灰あり	86128
95	983	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№21	坏G	9.1	－	3.4	12/36	粗砂、礫少	灰オリーブ	淡灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕。正位焼成か、内外面降灰顕著。982と重ね焼き	86129
95	984	2号窯	焼成部№34	坏G	8.0	6.0	3.2	27/36	粗砂、大型礫少	赤褐/灰	赤褐/灰	焼・還/転	破片の一部は焼き台(置き台)に転用	86036
95	985	2号窯	焼成室№40、焚口付近№34	坏G	9.5	6.4	3.6	28/36	粗砂、大型礫少	淡茶橙	淡黄灰	焼・酸	外底は粗いナデ調整後クシ状工具痕。内底に圏線様の工具痕。焼き割れ顕著	86098
95	986	2号窯	焼成部№34	坏G	8.5	5.5	3.4	13/36	粗砂、大型礫少	淡黄橙	淡黄橙	焼・酸	外底は粗いナデ調整後クシ状工具痕。内底に三重の圏線様の工具痕。焼き割れ顕著	86060
95	987	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層	坏G	9.2	5.7	3.3	26/36	粗砂、大型礫少	灰	暗灰	焼・還	回転ヘラ切りが粗く、側面に粘土残る。体部焼き割れ顕著	86061
95	988	2号窯	焼成部№34、前庭部上層黒色土層№16	坏G	9.5	6.0	3.3	7/36	粗砂、大型礫少	淡灰	灰	焼・還	外底にクシ状工具痕。外面黒化、焼き割れ顕著	86084
95	989	2号窯	焚口付近	坏G	8.7	6.4	3.1	11/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	外面に自然釉熔着、焼き歪み顕著	86094
95	990	2号窯	焚口付近焼成部№34、焼成部床面	坏G	9.4	6.2	3.6	13/36	1mm大の 砂粒	淡茶灰	淡灰橙	焼・酸	外底は粗いナデ調整後クシ状工具痕。焼き割れ顕著	86049
95	991	2号窯	燃焼部中層	坏G	8.8	5.4	3.3	7/36	粗砂、大型礫少	淡灰	灰	焼・還	外底は回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整。外底に火だすき痕あり	86064
95	992	2号窯	焚口付近、前庭部中層茶褐色土層№14、濁茶褐色土層№22	坏G	8.7	6.0	3.8	20/36	粗砂、大型礫少	灰	暗灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕。外面黒化。底部焼き割れあり	86034
95	993	2号窯	焼成部№34、焚口付近	坏G	8.9	6.2	3.3	36/36	粗砂、大型礫少	淡灰橙	淡灰橙	焼・酸	内底に圏線様の工具痕。外面黒化	86053
95	994	2号窯	焚口、焚口付近№34	坏G	9.3	5.8	3.3	6/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	回転ヘラ切りは粗い、未調整。外底は還元弱い。外側面黒化	86082
95	995	2号窯	燃焼部中層№31、前庭部上層黒色土層№8	坏G	9.2	6.5	3.1	2/36	粗砂少	淡灰	淡灰	焼・還	底部焼き割れ顕著	86011
95	996	2号窯	焼成部№34	坏G	9.3	5.6	3.5	14/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕。外側面黒化、外底に火だすき痕あり	86066
95	997	2号窯	焼成部№34	坏G	9.4	6.1	3.4	35/36	粗砂多	黄褐	黄褐	焼・酸	外底は回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整。焼き割れ顕著	86051
95	998	2号窯	焼成部№34	坏G	9.3	5.4	3.5	16/36	粗砂少	淡灰	灰/黒灰	焼・還	正位焼成。外側面黒化、外底に火だすき痕あり	86063
95	999	2号窯	№34・35、焚口付近、焼成部№39	坏G	9.4	6.2	3.3	9/36	粗砂、礫少	淡黄橙	淡黄橙	焼・酸	内底に圏線様の工具痕。外面黒化	86097
95	1000	2号窯	焼成部№34焚口付近、前庭部中層濁茶褐色土層№22	坏G	9.1	6.1	3.5	26/36	粗砂、大型礫少	灰	灰/暗灰	焼・還	外側面黒化、外底に火だすき痕、焼き割れあり	86106
95	1001	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層	坏G	9.8	6.3	3.6	12/36	粗砂、大型礫少	淡灰	淡灰	焼・還	外底のナデ調整は丁寧。内底に圏線様の工具痕	86111
95	1002	2号窯	上層黒色土層№7・34	坏G	8.9	5.2	3.0	15/36	粗砂多	淡灰オリーブ	黒灰	焼・還	内面自然釉、外面黒化(光沢あり)	86071
95	1003	2号窯	焚口付近№34	坏G	9.4	6.2	3.4	6/36	粗砂多	黄褐	黄褐	焼・酸	内底に圏線様の工具痕。外底に火だすき痕あり	86088
95	1004	2号窯	焚口付近	坏G	9.1	6.0	3.3	36/36	粗砂、大型礫少	茶褐	暗灰	焼・酸	外底のナデ調整は丁寧。外底に火だすき痕、焼き割れあり	86033
95	1005	2号窯	焚口付近、焼成部№34	坏G	9.8	6.2	3.8	17/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還/酸	部分的に茶褐色を呈する	86037
95	1006	2号窯	焼成部床面	坏G	9.7	6.5	3.1	1/36	粗砂、大型礫少	黄褐	黄褐	焼・酸	内底に圏線様の工具痕。焼き割れ、外底に火だすき痕あり	86089
95	1007	2号窯	燃焼部中層№33	坏G	9.2	5.9	3.0	13/36	粗砂少	淡灰	暗灰	焼・還	外面黒化(光沢あり)、火だすき痕あり	86045
95	1008	2号窯	焚口付近、前庭部上層黒色土層№4	坏G	9.1	6.0	3.8	18/36	粗砂多	淡黄褐	淡黄橙	焼・酸	内底に圏線様の工具痕。焼き割れ、外底にクシ状工具痕あり	86065
95	1009	2号窯	焼成部№34、前庭部中層濁茶褐色土層№14	坏G	9.4	6.3	3.4	30/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	外面黒化、底部焼き割れ顕著	86032
95	1010	2号窯	焼成部№34、焚口付近	坏G	9.2	6.3	3.4	35/36	粗砂、大型礫少	淡灰橙	淡灰橙	焼・酸	内底に圏線様の工具痕。焼き割れ顕著	86099
95	1011	2号窯	焼成部№34、燃焼部中層№31、焚き口付近	坏G	9.6	6.4	3.4	31/36	粗砂少、大型礫少	灰/淡橙	灰/淡灰黄	焼・酸/還	底部焼き割れ顕著、約1/2は還元弱い	86052
96	1012	2号窯	燃焼部下層、前庭部中層濁茶褐色土層№19	坏G	8.4	6.0	3.2	26/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	回転ヘラ切りが粗く、側面に粘土残る。外面黒化	86059
96	1013	2号窯	焼成部床面、焚口付近	坏G	9.2	6.1	3.3	18/36	粗砂、大型礫少	黄褐	黄褐	焼・酸	内底に圏線様の工具痕。外底に火だすき痕あり	86054
96	1014	2号窯	焼成部№34	坏G	9.4	6.0	3.4	32/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	外底は回転ヘラ切り後未調整に近い。正位焼成、外側面黒化・外底火だすき痕。焼き割れあり	86100
96	1015	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層濁茶褐色土層№23	坏G	9.4	6.3	3.5	21/36	粗砂、大型礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕1条。外底は還元弱い。底部焼き割れあり	86104
96	1016	2号窯	焼成部№34、E-60～F-60G	坏G	9.7	5.8	2.9	2/36	細砂、粗砂少	灰	暗灰	焼・還	外底は回転ヘラ切り後未調整に近い。外面黒化。1022と同一個体	86091
96	1017	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層濁茶褐色土層№22	坏G	9.7	6.5	3.5	18/36	粗砂、大型礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	内底に圏線様の工具痕1条。外底は生焼け、外側面黒化。底部焼き割れ顕著	86102
96	1018	2号窯	焼成部№34	坏G	9.7	6.4	3.3	10/36	粗砂、大型礫少	黄褐/灰	黄褐/灰	焼・酸	破片の一部は弱い還元	86056
96	1019	2号窯	焼成部№34、焚口付近	坏G	9.2	6.6	3.7	3/36	粗砂多	淡灰橙	黄褐	焼・酸	外底の回転ヘラ切りは中心に達せず、粘土残る。外底に火だすき痕。焼き割れ顕著	86096
96	1020	2号窯	焼成部№34	坏G	9.1	6.7	3.3	8/36	粗砂、大型礫少	灰	暗灰	焼・還	外面黒化、外底に火だすき痕あり	86070
96	1021	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層、前庭部上層黒色土層№12、中層濁茶褐色土層№14	坏G	9.4	6.5	3.3	28/36	粗砂、礫少	灰	黒灰	焼・還	外底は回転ヘラ切り後未調整に近い。正位焼成、外側面黒化・外底火だすき痕あり。焼き割れ顕著	86101
96	1022	2号窯	燃焼部中層№31	坏G	9.4	6.7	2.7	5/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	外面黒化。焼き歪みあり。1016と同一個体	86048
96	1023	2号窯	焼成部№34、前庭部裾部E-60～F-60G	坏G	9.1	6.1	3.0	9/36	粗砂多	暗灰	黒	焼・還	正位焼成か。内面降灰、外面黒化顕著	86079
96	1024	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層、前庭部№34	坏G	9.3	6.7	3.5	22/36	粗砂少	淡灰	灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕1条。外側面黒化・外底に火だすき痕あり	86108
96	1025	2号窯	燃焼部下層黒色土№34、前庭部	坏G	9.2	6.5	3.0	7/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰/黒灰	焼・還/転？	内底に圏線様の工具痕数条。外側面黒化・外底に火だすき痕。破片の一部は焼き台(置き台)に転用か	86086
96	1026	2号窯	焼成部№34	坏G	9.4	6.3	3.4	24/36	粗砂、大型礫少	淡黄橙	淡灰橙	焼・酸	内底に圏線様の工具痕1条。外側面黒化・焼き割れ顕著	86109
96	1027	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層濁茶褐色土層№14、中層濁茶褐色土層№23	坏G	9.1	6.9	3.0	25/36	粗砂、礫少	灰	灰/黒灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕1条。外側面黒化・焼き割れ顕著	86058
96	1028	2号窯	焼成部№43	坏G	10.1	6.8	3.2	22/36	粗砂少	黄褐	暗灰	焼・還/酸	外底は回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整。外面黒化、焼き割れ顕著	86055
96	1029	2号窯	燃焼部中層、前庭部中層濁茶褐色土層№20	坏G	9.6	－	(3.5)	8/36	粗砂多	灰	暗灰	焼・還	外側面黒化(光沢)、外底に火だすき痕あり。底部は焼き歪みあり	86072
96	1030	2号窯	焚口付近、燃焼部床面	坏G	9.6	6.6	3.6	27/36	粗砂少、大型礫少	淡黄橙	淡黄橙	焼・酸	底部焼き割れ顕著。最大礫長径8mm	86050
96	1031	2号窯	焼成部№36	坏G	9.1	6.2	2.8	22/36	粗砂多、礫少	灰/明橙	灰/明橙	焼・酸/還	外底は回転ヘラ切り後回転ナデ調整。1/2は還元弱い。外面黒化(光沢)	86057
96	1032	2号窯	燃焼部中層№30	坏G	10.0	7.3	3.5	12/36	粗砂多	淡灰	灰	焼・還	回転ヘラ切りは粗く、未調整。内底に圏線様の工具痕。外側面黒化・外底火だすき痕あり	86095
96	1033	2号窯	焚口付近№34	坏G	10.6	6.9	3.2	21/36	粗砂多、大型礫少	灰	暗灰	焼・還	外底の回転ヘラ切り幅広く、回転ケズリ状を呈する。外面黒化	86103
96	1034	2号窯	焚口付近、燃焼部,前庭部下層黒色土層、燃焼部№34	坏G	10.2	5.2	3.6	13/36	粗砂多、大型礫少	浅灰橙	浅橙	生・酸	生焼け。回転ヘラ切りは体部下端のみ。厚い外底はクシ状工具痕を密に入れる。内底中央に円弧状の粘土紐痕	86112
96	1035	2号窯	前庭部上層黒色土層№6	坏G	8.6	6.5	3.0	18/36	粗砂、礫少	淡灰	淡黄灰	生・還	生焼け。外底のナデ調整は丁寧	86043

第 48 表　窯跡出土遺物観察表 19

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
96	1036	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№22	坏G	8.6	5.5	3.5	7/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	口縁部外面黒化	86077
96	1037	2号窯	前庭部上層黒色土層№16	坏G	8.1	5.3	2.9	9/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	外底に火だすき痕あり	86078
96	1038	2号窯	前庭部2-中層 濁茶褐色土層№17	坏G	8.7	6.6	3.4	29/36	粗砂、礫少	淡灰	暗灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり。焼き歪みあり	86040
96	1039	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№12、濁茶褐色土層№19	坏G	9.5	6.4	3.6	16/36	粗砂、大型礫少	淡灰	灰	焼・還	焼き割れ目立つ	86039
96	1040	2号窯	前庭部裾部E-60～F-60	坏G	8.6	6.5	3.2	17/36	粗砂多	灰	灰	焼・還	外底に火だすき痕あり	86062
96	1041	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№14	坏G	8.7	6.6	3.6	7/36	粗砂多	灰	灰	焼・還	外底のクシ状工具痕目立つ	86076
96	1042	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№14	坏G	9.2	5.6	3.4	8/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	底部台状。内底に圏線様の工具痕数条。外面黒化、底部焼き割れあり	86081
96	1043	2号窯	前庭部黒色土層№3	坏G	9.6	6.8	3.5	24/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕数条。外面降灰、底部焼き割れあり	86038
96	1044	2号窯	前庭部2-中層、濁茶褐色土層№19	坏G	8.8	6.3	2.9	28/36	粗砂、大型礫少	灰	黒灰/灰	焼・還	正位焼成、外面黒化。焼き歪みあり	86041
96	1045	2号窯	前庭部裾部E-60～F-60G	坏G	9.2	6.8	2.9	10/36	粗砂、大型礫少	淡灰	灰	焼・還	外底に焼成前ヘラ記号「//」。外面黒化	86046
96	1046	2号窯	前庭部E-60～F-60G	坏G	8.9	6.4	(2.8)	10/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	外底に火だすき痕あり	86069
96	1047	2号窯	前庭部2-中層濁茶褐色土層№20	坏G	9.0	6.3	(2.9)	9/36	粗砂多	灰	暗灰	焼・還	外面黒化(光沢)	86074
96	1048	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№23	坏G	9.1	6.5	3.5	11/36	粗砂少	灰	暗灰	焼・還	回転ヘラ切り後未調整。 正位有蓋焼成、外側面黒化(光沢)、外底に火だすき痕あり	86085
96	1049	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№22	坏G	8.6	6.3	3.6	4/36	粗砂少	淡灰	淡灰	焼・還	焼き割れあり	86093
96	1050	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№22	坏G	9.2	6.3	3.5	10/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	外底に火だすき痕あり。底部焼き割れあり	86068
96	1051	2号窯	前庭部上層黒色土層№3、濁褐色土層№89	坏G	9.1	6.3	2.7	18/36	粗砂多、礫少	灰白	灰/暗灰	焼・還	正位焼成、外面自然釉熔着。底部底割れ顕著	86042
96	1052	2号窯	前庭部上層黒色土層№10	坏G	9.0	6.1	3.2	23/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰黄	焼・還	外底は回転ヘラ切り後未調整。一部還元弱い	86107
96	1053	2号窯	前庭部裾部E-60～F-60G	坏G	9.6	6.2	3.1	4/36	粗砂、大型礫少	灰	黒灰	焼・還	外側面黒化顕著、外底に火だすき痕あり	86092
96	1054	2号窯	前庭部F-60G	坏G	9.1	6.7	(3.1)	8/36	粗砂、礫少	淡黄灰	暗灰	焼・還	外底は丁寧な回転ナデ調整。内面降灰、外面黒化。焼き歪みあり	86075
96	1055	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№11・12	坏G	〔9.0〕	6.3	3.4	5/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	体部焼き歪み。正位有蓋焼成、外底に焼土熔着・火だすき痕あり	86087
96	1056	2号窯	前庭部下層黒色土層	坏G	9.8	6.6	3.5	14/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	外底は還元弱く、丁寧なナデ調整	86035
96	1057	2号窯	前庭部上層黒色土層№7、中層濁茶褐色土層№21	坏G	10.0	6.4	3.4	11/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕数条。外面黒化、底部焼き割れあり	86067
96	1058	2号窯	前庭部濁褐色土層№20	坏G	10.0	7.1	2.9	3/36	粗砂多、礫少	淡黄灰	暗灰	焼・還	正位焼成。内面降灰、外面降灰・黒化	86083
96	1059	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№22	坏G	約10	約7.5	3.1	9/36	粗砂少	淡灰	淡灰	焼・還	外底にクシ状工具痕。焼き割れあり	86080
96	1060	2号窯	前庭部	坏G	約10	約8	2.9	7/36	粗砂多、礫少	灰	暗灰	焼・還	外面黒化。焼き歪みのため径に不安残す	86073
96	1061	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№21	坏G	9.8	6.4	3.0	6/36	粗砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	外面黒化、底部焼き割れ顕著	86110
96	1062	2号窯	前庭部E-60～F-60G	坏G	12.0	7.5	3.9	13/36	粗砂多、礫少	灰	黒灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕数条。有蓋正位焼成。外側面黒化、外底に火だすき痕あり。焼き割れ顕著	86105
96	1063	2号窯	中層濁茶褐色土層№14	坏G	約11	約7	(3.1)	3/36	粗砂少	淡灰	淡灰	焼・還	内底に圏線様の工具痕数条。焼き歪みのため径に不安あり	86090
96	1064	2号窯	焼成部№34	坏G	8.9	6.0	3.0	12/36	粗砂多、礫少	暗褐灰	暗灰	転	破断面含め降灰、焼き台(置き台)に転用	86047
96	1065	2号窯	焼成部№43	坏H	約11.5	－	3.5	4/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外底回転ナデ調整、内底に焼成前ヘラ記号「/」。胎土は在地。倒位焼成か、外面黒化・自然釉熔着。焼き歪みあり	86144
96	1066	2号窯	焼成部№34	坏H	約13	－	(3.4)	6/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	86143
97	1067	2号窯	焼成部№32・38	塊G	9.6	－	3.8	26/36	粗砂少	淡灰	淡灰黄	生・還	焼成中に破損か、一部生焼け	86007
97	1068	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層	塊G	9.9	6.1	3.5	25/36	粗砂、礫少	灰	淡灰	焼・還	焼き歪み・割れ顕著	86003
97	1069	2号窯	焼成部床面断ち割りトレンチ内、燃焼部前庭部下層黒色土層焚口付近、前庭部中層濁茶褐色土層№11・21・34	塊G	9.4	6.6	3.4	20/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	底部焼き割れ顕著	86002
97	1070	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№22、上層黒色土層№7	塊G	9.6	－	3.6	13/36	粗砂多、礫少	淡黄灰/淡灰	淡黄灰/淡灰	生・還	外底は粗いナデ調整。生焼け、外面の一部黒化	86005
97	1071	2号窯	燃焼部前庭部下層、焼成部№34、焚口付近	塊G	10.0	6.8	3.7	17/36	粗砂、礫少	明褐/灰	明褐/灰	生・酸	外底は生焼け。焼き歪み・割れ顕著	86016
97	1072	2号窯	焼成部№36・43、前庭部中層濁茶褐色土層№23	塊G	10.3	6.2	4.4	13/36	粗砂多、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	外底は粗いナデ調整後、クシ状工具痕。生焼け、外面の一部黒化	86004
97	1073	2号窯	焼成部№34	塊G	10.2	6.5	3.4	24/36	粗砂、大型礫少	暗赤褐	灰/暗赤褐	焼・還	外底は粗いナデ調整後、クシ状工具痕。生焼け	86009
97	1074	2号窯	焼成部床面	塊G	10.0	－	3.9	33/36	粗砂多、礫少	暗灰	灰褐/黄橙	焼・酸	外底は回転ヘラ切り後未調整に近い。外面上半が灰褐色を呈する重ね焼き痕	86026
97	1075	2号窯	焚口付近、前庭部中層濁茶褐色土層№23	塊G	10.7	7.1	3.6	32/36	粗砂、礫少	淡黄橙	淡黄橙	生・酸	生焼け	86028
97	1076	2号窯	焚口付近、焼成部№34	塊G	10.6	6.8	3.8	25/36	粗砂、礫少	淡茶橙	淡茶橙	焼・酸	底部焼き割れ顕著	86023
97	1077	2号窯	焼成部№34・43、前庭部	塊G	〔9.5〕	6.7	〔3.7〕	22/36	粗砂、礫少	淡黄橙	淡黄橙	生・酸	生焼け。焼き歪み顕著	86012
97	1078	2号窯	焼成部№34、前庭部中層濁茶褐色土層№22	塊G	10.3	6.7	3.6	28/36	粗砂多	灰白	灰白	生・還	外底は粗いナデ調整後、クシ状工具痕。生焼け、体部外面黒化。焼き割れあり	86025
97	1079	2号窯	燃焼室中層№29、前庭部中層濁茶褐色土層	塊G	9.8	－	3.7	27/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	焼成中に破損か、一部生焼け	86029
97	1080	2号窯	前庭部上層黒色土層№12・34	塊G	9.7	6.3	3.6	15/36	粗砂、礫少	淡灰白	淡灰白	生・還	生焼け	86015
97	1081	2号窯	焼成部№34・35、焚口付近	塊G	10.4	6.4	3.7	21/36	粗砂、礫少	灰/淡黄橙	淡黄橙	生・酸	外底は粗いナデ調整後、クシ状工具痕。生焼け、体部外面上半黒化。焼き割れ目立つ	86019
97	1082	2号窯	焼成部№34	塊G	10.1	6.7	3.3	23/36	粗砂、礫少	灰/淡黄橙	灰/淡黄橙	生・酸	生焼け、焼き割れ顕著	86020
97	1083	2号窯	焼成部床面、焼成部№40	塊G	10.1	7.2	3.8	35/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け、外底焼き割れ顕著	86006
97	1084	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層、前庭部	塊G	10.3	6.6	3.7	26/36	粗砂、礫少	淡灰白	淡灰白	生・還	生焼け	86014
97	1085	2号窯	焼成部№34、焼成部床面	塊G	10.3	7.0	3.9	34/36	粗砂、礫少	淡茶橙	淡茶橙	生・酸	外底は生焼け。底部焼き割れ顕著	86008
97	1086	2号窯	燃焼部中層№30、前庭部中層濁茶褐色土層№14	塊G	〔9.6〕	6.3	〔4.2〕	27/36	粗砂、礫少	淡灰	淡黄灰	生・還	外底は粗いナデ調整後、クシ状工具痕。外底は生焼け、体部黒化。焼き割れ顕著	86030
97	1087	2号窯	焼成部№34・35、前庭部	塊G	10.9	6.6	3.3	23/36	粗砂多、礫少	灰/暗褐	灰/暗褐	焼・還/転	外底は丁寧なナデ調整。体部外面黒化(無蓋正位重ね焼き痕)。焼き歪み顕著。破片化後、破片の一部を焼き台(置き台)に転用	86010
97	1088	2号窯	焼成部床面、焼成部№34・36	塊G	10.6	6.7	3.8	27/36	粗砂、礫少	淡黄橙	淡黄橙	生・酸	生焼け、焼き歪み・割れあり	86021
97	1089	2号窯	焼成部前庭部下層、焼成部№34、前庭部中層濁茶褐色土層№23	塊G	10.1	－	3.7	32/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	外底に回転ヘラ切り時の粘土多く残る。口縁部外面に降灰。焼き歪み・割れ顕著	86017
97	1090	2号窯	焼成部№34、焚口付近	塊G	10.7	7.1	3.9	26/36	粗砂少	淡黄橙	淡黄橙	生・酸	生焼け、焼き割れ顕著	86018
97	1091	2号窯	焚口付近	塊G	10.7	6.9	3.8	14/36	粗砂多、礫少	灰褐	灰褐	焼・酸	外底に回転ヘラ切り時の粘土多残存、クシ状工具痕顕著。焼き歪み・割れあり	86027

第 49 表　窯跡出土遺物観察表 20

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
97	1092	2号窯	燃焼部前庭部下層黒色土層、前庭部中層濁茶褐色土層№12	埦G	10.3	6.6	4.2	27/36	粗砂、礫少	淡黄灰	淡黄灰	生・還	生焼け、外底磨滅あり	86024
97	1093	2号窯	焼成部№34	埦G	10.0	－	(3.1)	12/36	粗砂多、礫少	淡黄橙	淡黄橙	焼・酸		86013
97	1094	2号窯	焼成部焚口付近№34	埦G	11.0	6.9	3.7	33/36	粗砂、礫少	浅橙	明褐	焼・酸	外底は丁寧なナデ調整。口縁部内外面黒化。焼き割れ顕著	86001
97	1095	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№21	埦G	9.8	6.5	3.8	4/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	生・還	外底は未調整に近い。口縁部内外面黒化	86022
97	1096	2号窯	溝覆土№27	焼き台(埦G)	12.0	7.1	3.2	1/36	細砂、礫少	暗灰	暗灰	焼・還	焼成前にヘラ状工具で外側から丸く穿孔。正位焼成か、内外面降灰・黒化、焼き歪みあり	86031
97	1097	2号窯	焼成部№43・34、焚口付近	焼き台(埦G)	12.4	6.7	4.4	26/36	細砂、礫少	浅橙	浅橙	焼・酸	焼成前にヘラ状工具で雑に穿孔。焼き歪みあり	86154
97	1098	2号窯	前庭部E60～F-60G	高坏C	－	－	(1.1)	－	細砂多、礫少	淡黄灰	灰	焼・還	正位焼成。内面降灰あり	86160
97	1099	2号窯	前庭部E-60～F-60G	高坏	9.2	－	(3.1)	14/36	粗砂少、大型礫少	灰	暗灰	焼・還	倒位焼成か。外面降灰あり	86044
97	1100	2号窯	前庭部	高坏C	－	7.3	(1.9)	脚17/36	粗砂少	灰	淡灰黄	焼・還	正位焼成。外面降灰あり	86161
97	1101	2号窯	前庭部上層黒色土層№2	高坏C	－	約7.5	(1.8)	脚2/36	粗砂少	淡灰黄	灰	焼・還	倒位焼成か。内面降灰あり	86163
97	1102	2号窯	前庭部	高坏C	－	8.8	(2.6)	脚6/36	粗砂少	淡灰黄	灰	焼・還	倒位焼成か。内面降灰あり	86162
97	1103	2号窯	焼成部床面断ち割りトレンチ	高坏C	－	約9	(1.0)	脚4/36	粗砂多	淡灰	淡灰	焼・還		86164
97	1104	2号窯	焼成部№36、前庭部中層濁茶褐色土層№11・22・30、前庭部上層黒色土層№12	高坏E	14.4	8.9	11.6	9/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	破片の一部は焼き台(置き台)に転用か	85546
97	1105	2号窯	焼成部№34・43	高坏E	約11.5	－	(4.5)	5/36	粗砂少	淡灰	灰	焼・還	胎土精良。焼き歪み顕著	86169
97	1106	2号窯	焚口付近	高坏E	11.6	－	(3.3)	12/6	粗砂少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	86167
97	1107	2号窯	前庭部黒色土層№7、前庭部E-60～F-60G	高坏E	12.3	－	(3.2)	17/36	粗砂、礫多	淡灰	灰	焼・還	胎土精良。倒位焼成か、外面降灰あり	86168
97	1108	2号窯	焼成部№34	高坏E	－	－	(7.8)	－	粗砂、礫少	明橙	明橙	生・酸	生焼け	86151
97	1109	2号窯	前庭部濁茶褐色土層№20	高坏D	10.8	－	(5.0)	14/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	3方透かし、沈線2条。倒位焼成(外面黒化)、口縁部焼き割れ	86158
97	1110	2号窯	前庭部	高坏D	－	－	(7.0)	－	粗砂、礫少	淡灰オリーブ	灰	焼・還	2方透かし。正位焼成、内面降灰顕著	86157
97	1111	2号窯	焼成部№34・36、焼成部床面、焚口付近	鉄鉢か	14.3	－	(4.1)	29/36	粗砂、礫少	淡橙	淡灰褐	焼・酸	器肉薄い。焼き歪みあり。破片の一部は焼き台(置き台)に転用か	86170
97	1112	2号窯	焼成部№34・35・37	鉢か	15.7	－	4.0	12/36	粗砂多	明橙	明橙	生・酸	口縁部外傾。傾きに不安残し、1113と同程度か	86152
97	1113	2号窯	焼成部№34、前庭部中層濁茶褐色土層№14、焚口付近	鉢	12.5	－	(3.8)	5/36	粗砂多、礫多	暗灰褐	暗灰褐	焼・還	沈線2条。内外面降灰あり	86166
97	1114	2号窯	焚口付近	鉢	12.6	－	(9.3)	15/36	粗砂少	明橙	明橙	生・酸	外面にロクロひだ状の浅い沈線。生焼け	86153
97	1115	2号窯	焚口付近、焼成部№35	鉢	－	10.2	(2.7)	脚20/36	粗砂少	明橙	明橙	生・酸	外面に突帯1条。生焼け	86150
98	1116	2号窯	前庭部E-60～F-60	小型壷	6.8	－	(4.3)	11/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	正位焼成、内外面に降灰あり。焼き歪みあり	86156
98	1117	2号窯	焼成部№34	瓶か	約9	－	(2.7)	4/36	粗砂多	淡灰褐	淡灰褐	生・酸	生焼け	86159
98	1118	2号窯	前庭部E-60～F-60G、№20	瓶か	－	9.1	(1.2)	－	粗砂、礫少	-	灰	焼・還	内面剥離。外底ケズリ調整	86155
98	1119	2号窯	覆土上層黒色土層、前庭部E-60～F-60G、燃焼部中層№31	平瓶	－	－	(8.7)	－	粗砂、礫少	灰白	灰	焼・還	外底は粗い回転ケズリ調整。正位焼成、外面自然釉顕著	86165
98	1120	2号窯	焼成部№34・54	平瓶	－	－	(13.9)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。肩部にボタン状把手	85267
98	1121	2号窯	焼成部№34、焚口付近	平瓶	－	－	(11.9)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。沈線1条	86145
98	1122	2号窯	燃焼部中層№31、焼成部№34	平瓶	－	－	(9.7)	－	細砂多、礫少	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。沈線1条	86146
98	1123	2号窯	焼成部№34	平瓶	－	－	(12.4)	－	粗砂多、礫多	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。肩部にボタン状把手	86148
98	1124	2号窯	焼成部№24・34、中層№32	提瓶	－	－	(20.0)	－	細砂多、礫少	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。胴部内面片面は絞り痕、片面は閉塞円盤	85272
98	1125	2号窯	焼成部№34	横瓶	－	－	(23.8)	－	細砂多、礫少、赤色粒少	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。閉塞円盤。内面ナデ調整、外面Ha類タタキ	86147
98	1126	2号窯	焼成部№34	横瓶	－	－	(25.9)	－	粗砂多、礫少	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。閉塞円盤。内面ナデ調整、外面Ha類タタキ、カキメ調整、ケズリ調整	86149
99	1127	2号窯	前庭部中層濁茶褐色土層№12	鉢	－	－	(7.4)	－	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還/転	口縁部をヘラ状工具で仕上げ。内面D類後ナデ調整、外面Ha類。破断面に自然釉熔着、小剥離目立つ。破片化後に焼き台(置き台)に転用	86742
99	1128	2号窯	焚口付近	甕	17.4	－	(1.3)	4/36	粗砂多	灰	灰	焼・還		86570
99	1129	2号窯	焼成部№36、焚口付近	甕	22.5	－	(2.6)	7/36	粗砂多	灰褐	灰褐	焼・酸		86569
99	1130	2号窯	焼成部、前庭部下層、中層濁茶褐色土層№11・14・22	甕	20.5	－	(10.8)	28/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類。口縁部に焼き歪みあり。破片の一部は焼き台(置き台)転用か	85500
99	1131	2号窯	焼成部№34・36・38、前庭部中層焚口付近	甕	18.7	胴部径約30	37.0	36/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha・b類	86752・85478
99	1132	2号窯	焼成部焚口付近№34・36	甕	－	－	(27.5)	－	粗砂、礫	浅黄橙	浅黄橙	生・酸	生焼け。内面ナデ、外面Hd類	86811
100	1133	2号窯	焼成部№31・36・37・39・43	甕	－	胴部径約90	(27.5)	－	粗砂、礫	浅黄橙	浅黄橙	生・酸	生焼け。内面ナデ、外面Hd類	86809
100	1134	2号窯	焼成部№14、焚口付近	甕	22.8	胴部径約48	(40.9)	4/36	粗砂多、礫多、赤色粒多	茶橙	茶橙	焼・酸	生焼けに近い。内面ナデ・ハケ、外面Hb類	86172・86804
100	1135	2号窯	焚口付近、燃焼部中層№1	甕	20.0	胴径約49	(39.3)	30/36	粗砂多、礫多、赤色粒多	茶橙	茶橙	焼・酸	生焼けに近い。内面ナデ、外面Hb類か	85319
100	1136	2号窯	焼成部№84、燃焼部№31中層	甕	23.5	胴径約49	45.2	24/36	粗砂多、礫多、赤色粒多	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。内面ナデ、外面Hd類か	86791・86171
100	1137	2号窯	焼成部中層№32、焼成部№34、焼成部№35、焚口付近	甕	－	胴径約48	(38.1)	－	粗砂多、礫多、赤色粒多	茶橙	茶橙	生・酸	生焼け。内面ナデ・ハケ、外面Hd類	86754
101	1138	9号窯	流込土、6,7号窯表土	蓋(坏H)	12.0	－	4.0	14/36	細砂多、礫	灰白	淡灰	焼・還	外面に火だすき、焼き歪みあり	85438
101	1139	9号窯	流込土	鉢G	11.6	－	(4.3)	7/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面黒化・降灰。やや焼き歪みあり	85440
101	1140	9号窯	流込土	平瓶	〔13.0〕	－	21.7	13/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	底部内面に粗い指押さえ痕、体部外面下半は平行タタキ後に回転ケズリ。閉塞円盤。正位焼成、焼き歪み・焼き割れあり	85444
102	1141	竪穴状遺構	竪穴状遺構埋土	坏H	10.0	－	(3.3)	14/36	粗砂多、礫少	灰白	白灰	焼・還	外面上部ケズリの後仕上げナデ、内面仕上げナデ	85510
102	1142	竪穴状遺構	竪穴状遺構埋土	坏H	11.4	－	(4.4)	2/36	粗砂多、礫少	灰白	灰	焼・還	外面自然釉熔着	85454
102	1143	竪穴状遺構	7号窯灰原3-D土器溜まり褐色土、竪穴状遺構	盤	28.4	－	(5.9)	15/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	7号窯灰原578と類似。内底はナデ調整、外面はケズリ調整後、沈線2条とハケ調整を加える。焼き歪みあり	85342
102	1144	竪穴状遺構	竪穴状遺構埋土	高坏D	10.1	－	(3.8)	2/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	稜2条	85451

第 50 表　窯跡出土遺物観察表 21

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
102	1145	竪穴状遺構	竪穴状遺構埋土	高坏Eか	11.3	－	(3.2)	15/36	粗砂多、礫微	淡灰	灰	焼・還	体部上半は重ね焼きで黒化	85448
102	1146	竪穴状遺構	竪穴状遺構埋土	高坏C	－	7.7	(5.7)	脚24/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	生・還	生焼け	85449
102	1147	竪穴状遺構	竪穴状遺構埋土	平瓶	6.0	－	(5.4)	36/36	細砂多、礫少	灰	灰	焼・還	正位焼成。破断面含め焼き割れ、自然釉熔着	85446
102	1148	竪穴状遺構	竪穴状遺構埋土	横瓶	12.5	－	(5.1)	3/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内面Ba類、外面自然釉顕著	85447
102	1149	竪穴状遺構	竪穴状遺構覆土、7-2窯最終床灰原2-D	提瓶	8.0	－	28.6	9/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	正位焼成。焼き膨れ、焼き割れあり。側面剥離	85281
102	1150	竪穴状遺構	竪穴状遺構	提瓶	－	－	(5.8)	－	砂粒少	灰白	灰白	生・還	生焼け。両面閉塞か。胴部中央外面H類。把手接合部は長くのびる	85275
103	1151	1～3号トレンチ	1号トレンチ配石遺構	蓋(坏H)	[12.4]	－	4.7	11/36	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	焼・還	天井部外面クシ状工具痕。焼き歪み顕著	86198
103	1152	1～3号トレンチ	2号トレンチ覆土	蓋(鉢G)	11.9	返し 8.7	(1.7)	5/36	細砂多	淡灰	灰緑	焼・還	正位焼成。外面自然釉顕著、調整不明	85465
103	1153	1～3号トレンチ	1号トレンチ覆土	鉢G	11.2	－	(7.4)	9/36	細砂少	淡灰	淡灰	焼・還	外面に沈線。底部外面ナデ調整	85459
103	1154	1～3号トレンチ	配石遺構周辺、1号トレンチ配石覆土、6・7号窯表面	甑か	15.1	－	(10.7)	5/36	細砂多、礫少	暗灰	淡灰	転	図上復元、傾きに不安残す。破断面に釉熔着	85463
103	1155	1～3号トレンチ	配石遺構周辺	蓋(高坏A)	13.6	鈕2.5	4.9	10/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	鈕径2.5cm。天井部内面同心円タタキ。重ね焼き痕あり	85443
103	1156	1～3号トレンチ	1号トレンチ配石遺構	高坏B	10.7	11.1	13.7	3/36	細砂、礫少	灰白	灰	焼・還	2段2方透かし。正位焼成、内面降灰あり	85548
103	1157	1～3号トレンチ	配石遺構周辺	甕	－	－	(6.0)	－	細砂、礫少	灰白	オリーブ灰	焼・還	外面自然釉・降灰。頸部内面シボリ目あり	85452
103	1158	1～3号トレンチ	2号トレンチ覆土、配石遺構周辺	甕	－	5.7	(12.4)	－	細砂多、礫微	灰緑	淡灰オリーブ	転	破断面に自然釉・窯壁土熔着。底割れあり	85282
103	1159	1～3号トレンチ	配石遺構周辺	鉢か	－	9.9	(3.3)	脚14/36	細砂多、礫微	淡灰	淡灰	焼・還	焼成中に焼き割れ、内外面自然釉あり	85481
103	1160	1～3号トレンチ	配石遺構周辺、3号トレンチ覆土	瓶・壺類	－	12.4	3.5	脚5/37	粗砂多、礫少	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	全面に自然釉、倒位焼成か	85479
104	1161	包含層他	表土	坏H	10.7	5.1	4.2	28/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内外面回転方向にひび割れ、剥離。外面自然釉熔着	85334
104	1162	包含層他	表土、5-G撹乱層	坏H	12.1	－	(4.1)	21/36	粗砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	外面自然釉熔着、倒位焼成。焼き歪み・焼き割れあり	85358
104	1163	包含層他	表土	坏H	11.7	－	3.9	5/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	焼・還	外面自然釉熔着、倒位焼成か	86532
104	1164	包含層他	表土	坏H	12.4	－	3.6	18/36	細砂、礫多	淡灰	灰	焼・還	外面自然釉熔着、倒位焼成か	85322
104	1165	包含層他	表土、灰原5-G黒灰色土、C-80G表土	坏H	12.3	6.0	3.7	22/36	粗砂多、礫少	灰	暗灰	転	正位で焼き台に転用。外面自然釉顕著	85360
104	1166	包含層他	表土	坏H	12.4	－	3.9	10/36	細砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	倒位焼成。外面降灰あり	86533
104	1167	包含層他	表土、5-G撹乱層	坏H	12.0	4.6	3.9	12/36	細砂多、礫少	淡灰	灰緑	焼・還	倒位焼成、外面自然釉顕著	85364
104	1168	包含層他	5-G撹乱層	坏H	12.4	－	4.2	13/36	細砂多、礫少	灰オリーブ	灰褐	焼・還	底部外面クシ状工具痕。正位焼成、外面自然釉顕著	85359
104	1169	包含層他	表土	坏H	12.8	7.8	3.8	1/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	焼・還	外面自然釉熔着	86534
104	1170	包含層他	表土	坏H	12.6	－	(4.1)	9/36	細砂多、礫少	灰白	淡灰黄	焼・還	正位無蓋焼成、内外面自然釉顕著	86521
104	1171	包含層他	表土	蓋(坏G)	10.4	返し 8.8	3.7	18/36	細砂、礫少	灰白	灰白	生・還	鈕径1.4cm。生焼け	85329
104	1172	包含層他	表土	坏G	10.5	－	3.9	11/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還		85330
104	1173	包含層他	表土	坏G	10.5	－	3.6	7/36	粗砂多、礫少	灰褐	灰	焼・還	有蓋焼成、外面茶褐色自然釉。底部外面回転ヘラ切り後手持ちケズリ	86495
104	1174	包含層他	表土	鉢	〔約27〕	－	〔約8〕	7/36	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	外面を沈線・カキメで加飾。焼き歪み顕著	85539
104	1175	包含層他	表土	鉢か	13.6	－	(5.6)	7/36	粗砂多	灰	灰黄	焼・還	無蓋正位焼成。内外面降灰・自然釉顕著。瓶の可能性残す	85477
104	1176	包含層他	表土	蓋(高坏A)	－	－	(2.2)	－	細砂少	灰白	淡灰	焼・還	鈕径2.2cm。内面同心円タタキ	86519
104	1177	包含層他	表土	蓋(高坏A)	13.9	－	(3.9)	11/36	細砂少	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	86520
104	1178	包含層他	表土	高坏A	－	16.6	(11.4)	12/36	細砂多、礫少	灰	灰緑	焼・還	2段3方スカシ。倒位焼成	85237
104	1179	包含層他	表土	蓋(坏H)	13.7	－	(4.5)	10/36	粗砂少	灰白	淡灰	焼・還	外面黒化、外底中央に焼土熔着	86522
104	1180	包含層他	表土	高坏E	13.1	－	(4.6)	11/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	無蓋正位焼成。内外面降灰	86523
104	1181	包含層他	5-G、4-G撹乱層	甕	－	－	(12.5)	－	細砂多、礫少	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	沈線、刺突文で加飾。外面自然釉熔着	85285
104	1182	包含層他	表土	甕	－	－	(4.8)	－	細砂多、礫少	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	沈線、刺突文で加飾。外面自然釉熔着	86628
104	1183	包含層他	表土	平瓶	5.0	－	(4.8)	7/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	外面を沈線・カキメで加飾	86527
104	1184	包含層他	表土	平瓶	6.1	－	(5.0)	10/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	転	破断面含め自然釉・他個体片熔着	86528
104	1185	包含層他	表土	瓶	7.7	－	(6.2)	13/36	粗砂多、礫少	灰	淡灰オリーブ	焼・還	自然釉顕著	86526
104	1186	包含層他	表土	瓶	12.2	－	(5.9)	6/36	細砂、礫少	灰	淡灰	焼・還	無蓋焼成。鉢の可能性残す	86524
104	1187	包含層他	表土	壺	－	－	(5.0)	－	細砂、礫少	灰白	灰	焼・還	外面降灰あり	86537
104	1188	包含層他	6-G撹乱層、1号トレンチ配石遺構覆土	壺	－	－	(8.5)	－	細砂、礫多	灰	灰	焼・還	破片の一つは焼き台転用か	85352
104	1189	包含層他	表土	長頸瓶か	－	11.1	(3.8)	脚4/36	粗砂少	灰白	淡灰	焼・還	透かし孔4ヶ所か。外面降灰あり	85480
104	1190	包含層他	表土	瓶・壺類か	－	16.5	(4.1)	脚6/36	細砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	焼・還	透かし孔あり	86535
104	1191	包含層他	表土	小型壺	10.6	－	(4.6)	7/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還	肩部に張りあり	85474
104	1192	包含層他	表土	小型壺	10.2	－	(5.9)	15/36	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・還		85328
104	1193	包含層他	表土	小型壺	10.3	－	(5.7)	18/36	細砂、礫少	灰	淡灰	焼・還	正位無蓋焼成、自然釉熔着	85327
105	1194	包含層他	5-G撹乱層	壺G	16.4	－	(11.5)	2/36	粗砂多、礫少	黒灰	淡灰	焼・還	把手欠落。内外面微細なカキメ状調整。倒位焼成か。外面降灰	85367
105	1195	包含層他	表土	小型壺	6.4	－	(2.7)	12/36	礫少	灰	灰黄	焼・還	外面降灰顕著	85475
105	1196	包含層他	表土	瓶・壺類	12.6	－	(3.9)	－	細砂、礫少	灰白	灰白	焼・還	内外面自然釉あり	86498
105	1197	包含層他	表土	壺類か	15.7	－	(3.8)	5/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内面自然釉熔着	86536
105	1198	包含層他	表土	甕	16.7	－	(7.0)	6/36	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり	85324
105	1199	包含層他	表土	甕	17.0	－	(7.8)	22/36	細砂多、礫少	淡灰	灰オリーブ	焼・還	正位焼成、自然釉顕著。口縁部焼き割れ	85333
105	1200	包含層他	表土	甕	19.8	－	(6.1)	10/36	粗砂少	灰	灰	焼・還	降灰あり	85323
105	1201	包含層他	5-H撹乱層	甕	22.6	－	5.0	3/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け	86557
105	1202	包含層他	不明	甕	22.3	－	(6.9)	－	細砂、礫少	灰白	灰白	焼・還		85362

第 51 表　窯跡出土遺物観察表 22

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
105	1203	包含層他	表土	甕	約23	－	(3.4)	4/36	粗砂多、礫	灰	灰	焼・還		86554
105	1204	包含層他	表土	甕	－	－	(2.8)	－	細砂、礫少	灰オリーブ	灰	焼・還	沈線2条、波状文	86572
105	1205	包含層他	表土	甕	14.6	－	(3.1)	2/36	粗砂多	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	内面降灰あり	86553
105	1206	包含層他	表土	甕	16.2	－	(4.0)	7/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内外面自然釉・降灰顕著	86497
105	1207	包含層他	表土	甕	約21	－	(3.9)	3/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	焼き歪みあり	86551
105	1208	包含層他	表土	甕	21.7	－	(5.3)	3/36	細砂多、粗砂	淡灰黄	灰	生・還	生焼け	86552
105	1209	包含層他	6-G撹乱層、1号トレンチ配石遺構覆土	甕	24.6	－	5.3	－	細砂多	灰白	灰白	焼・還		85350
105	1210	包含層他	表土	甕	26.4	－	(5.7)	2/36	細砂、礫少	灰	灰	焼・還		86446
105	1211	包含層他	表土	甕	27.0	－	(3.8)	4/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面に降灰あり	86500
105	1212	包含層他	表土	甕	約27	－	(4.9)	4/36	粗砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内外面自然釉熔着	86499
105	1213	包含層他	表土	鉢C(厚底)	－	9.0	(3.5)	底18/36	粗砂多	－	灰	焼・還	正位焼成。内面剥離あり	85341
105	1214	包含層他	表土	鉢C(厚底)	14.2	9.6	8.8	14/36	粗砂多、礫	灰白	淡灰オリーブ		倒位焼成。底部外面他個体片熔着	85277
106	1215	包含層他	表土	甕	約39	－	(6.7)	3/36	粗砂多、礫	淡灰黄	淡灰	焼・還		86574
106	1216	包含層他	5-G撹乱層	甕	約40	－	(9.6)	7/36	細砂、礫少	灰オリーブ	灰	焼・還	破片の一つは焼き台転用。自然釉熔着	86575
106	1217	包含層他	表土	甕	約41	－	(12.0)	3/36	粗砂多、礫	淡灰	黒灰	焼・還	沈線、刺突文で加飾	86568
106	1218	包含層他	表土	甕	47.0	－	(17.2)	4/36	細砂多、礫	淡灰	淡灰	焼・還	458と同一個体か	85315・85288
106	1219	包含層他	表土	甕	約41	－	(9.5)	5/36	粗砂多、礫	淡灰	淡灰	焼・還	1217と同一個体か。焼き歪みあり	86573
106	1220	包含層他	5-G撹乱層	蓋(坏H)	13.2	－	(4.7)	－	細砂多	灰	灰	焼・還		85357
106	1221	包含層他	5-G、6-G撹乱層	坏H	12.4	－	4.0	26/36	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰オリーブ		外面自然釉熔着	85087
106	1222	包含層他	6-G撹乱層	坏H	13.4	7.6	3.3	15/36	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	焼き割れ顕著	85351
106	1223	包含層他	6-G撹乱層	蓋(鉢G)	11.5	返し 8.5	(1.5)	7/36	粗砂少	灰白	淡灰オリーブ		正位焼成、外面降灰顕著	85516
106	1224	包含層他	5-G撹乱層	蓋(鉢G)	12.0	返し 9.8	(2.0)	16/36	粗砂多、礫多	灰白	淡灰オリーブ		正位焼成、外面降灰顕著	85501
106	1225	包含層他	6-G撹乱層	蓋(鉢G)	12.2	返し 9.6	(2.0)	5/36	粗砂少	灰白	灰	焼・還	外面降灰あり	85511
106	1226	包含層他	6-G撹乱層	蓋(鉢G)	11.6	返し 8.8	(2.7)	12/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	焼きあまい	85508
106	1227	包含層他	5-G撹乱層	高坏B	12.5	－	(8.9)	25/36	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	2段2方透かし。やや焼きあまい	85361
106	1228	包含層他	5-G撹乱層	高坏B	－	12.5	(8.7)	脚6/36	粗砂、礫少	灰	淡灰	焼・還	2段2方透かし	85363
106	1229	包含層他	5-H撹乱層	甕	－	－	(4.5)	－	粗砂、礫少	灰白	灰	転	破断面を含め自然釉熔着	86626
106	1230	包含層他	5-G、5-H撹乱層	提瓶か	9.8	－	(8.6)	15/36	細砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還		85290
106	1231	包含層他	30-7G、暗褐色粘砂	瓶類か	－	10.7	(1.6)	9/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	焼・還	面取り鋭い	86538
106	1232	包含層他	3-G暗褐色土	小型壷	3.9	－	9.0	18/36	粗砂多、礫多	灰白	灰白	生・還	生焼け。底部外面手持ちナデ調整	85263
106	1233	包含層他	5-G撹乱層	壷	17.8	－	(5.1)	2/36	細砂、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	小剥離あり	86559
106	1234	包含層他	5-G撹乱層	甕	22.7	－	(4.2)	4/36	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還		86556
106	1235	包含層他	5-G撹乱層	甕	30.0	－	(6.9)	3/36	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰黄	生・還	生焼け	86558
106	1236	包含層他	5-G撹乱層	壷	－	－	(7.3)	－	粗砂、礫少	淡灰、灰	淡灰	焼・還	正位焼成、外面降灰あり	86560
107	1237	包含層他	表土	蓋(鉢G)	〔10.6〕	返し 8.0	(2.0)	7/36	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面に自然釉	86188
107	1238	包含層他	表土	蓋(鉢G)	(11.6)	返し(8.0)	(1.5)	－	細砂、礫少	灰褐	灰褐	焼・還	自然釉熔着	86193
107	1239	包含層他	6-G撹乱層	蓋(鉢G)	11.9	返し(9.2)	(1.5)	6/36	粗砂少	灰緑	灰緑	転	焼き台転用。自然釉顕著	85513
107	1240	包含層他	表土	蓋(鉢G)	(11.9)	返し 9.2	(2.0)	3/36	粗砂少	淡灰	淡灰	焼・還	外面降灰あり	86189
107	1241	包含層他	表土	蓋(鉢G)	13.0	返し10.4	2.3	8/36	細砂、礫少	灰白	灰緑	焼・還	天井部内面ハケ調整。外面自然釉顕著で調整不明	86192
107	1242	包含層他	30-DG南西隅黒灰色土	蓋(坏G)	10.0	返し 8.0	(3.1)	21/36	粗砂多、礫少	淡青灰	淡灰	焼・還	鈕径1.6cm。焼き割れ顕著、径約9cmの重ね焼き痕	85365
107	1243	包含層他	A-140、灰原	蓋(坏B)	－	鈕2.9	(2.4)	－	細砂多、粗砂	淡灰	淡灰黄	焼・還	鈕径2.9cm。天井部内面は使用に伴い平滑。8c後半	85486
107	1244	包含層他	表土	蓋(坏B)	－	16.1	(2.6)	16/36	粗砂多	淡灰	淡	焼・還	外面自然釉、焼き歪みあり	85467
107	1245	包含層他	C-80G	坏Bか	約13	－	(3.6)	3/36	細砂少	赤橙	灰	焼・還	内面に赤色付着物	86197
107	1246	包含層他	B-60G	坏Bか	約12	－	(3.0)	4/36	細砂、礫少	灰	淡灰	焼・還		86196
107	1247	包含層他	29-E、北東隅崖上黒灰色土	坏G	9.2	－	3.2	12/36	細砂多、礫微	淡灰	灰	焼・還	底部外面未調整。有蓋焼成、外面黒化	85368
107	1248	包含層他	30-DG、暗褐色粘砂	坏G	8.8	6.1	3.6	11/36	細砂多、礫微	淡灰	淡灰	焼・還	底部外面生焼けに近い	85366
107	1249	包含層他	表土	有台坏	14.5	9.1	4.5	9/36	細砂多、粗砂	灰	灰	焼・還	8世紀前葉	85547
107	1250	8号窯	前庭部窪み黒灰色土	鉢か	－	10.1	(2.5)	脚1/36	細砂多、粗砂	淡灰黄	淡灰	生・還	生焼け。外面黒化、正位焼成	85540
107	1251	包含層他	C-80G表土	盤B	－	約16	(1.5)	－	細砂多、粗砂	淡灰	淡灰	焼・還	8世紀後半か	86195
107	1252	包含層他	B-60G表土	盤B	約17	約15	2.7	小片	細砂多、粗砂	淡灰	灰	焼・還	外面黒化	86194
107	1253	包含層他	B-100表土	高坏E	15.3	－	(6.1)	9/36	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	有蓋か。ロクロひだ目立つ	85331
107	1254	包含層他	B-60G表土	高坏B	－	14.5	(10.6)	脚4/36	細砂、礫少	淡灰	褐灰	焼・還	2段3方透かし。正位焼成、堅緻	85450
107	1255	包含層他	4号窯周辺表土	高坏B	12.6	－	(3.6)	12/36	粗砂多、礫微	淡灰オリーブ	淡灰	焼・還	内外面自然釉熔着	86329
107	1256	包含層他	灰原、H01	長頸瓶	7.3	－	(7.3)	7/36	細砂多、粗砂	灰	灰	焼・還		85470
107	1257	包含層他	A-140表土	小型壷	4.6	－	(1.6)	6/36	細砂少	灰褐	灰褐	焼・還	無蓋焼成、内外面黒化	85407
107	1258	包含層他	B-60G表土	小型壷	12.1	－	(5.2)	4/36	粗砂多	灰	灰	焼・還		85496
107	1259	7-2号窯	7-2号窯最終床、3-F褐色土黒灰色土	小型壷	－	－	(8.0)	－	細砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	外面に自然釉熔着	86413
107	1260	包含層他	D-20表土	小型壷	(16.6)	－	(20.1)	10/36	細砂、粗砂多	灰白	灰	焼・還	正位焼成。内外面自然釉熔着	85471
107	1261	包含層他	表土	壷・甕類	約16	－	(3.2)	6/36	細砂、礫少	灰白	灰白	焼・還		86190

第 52 表　窯跡出土遺物観察表 23

※〔　〕は復元法量、（　）は残存法量を示す。

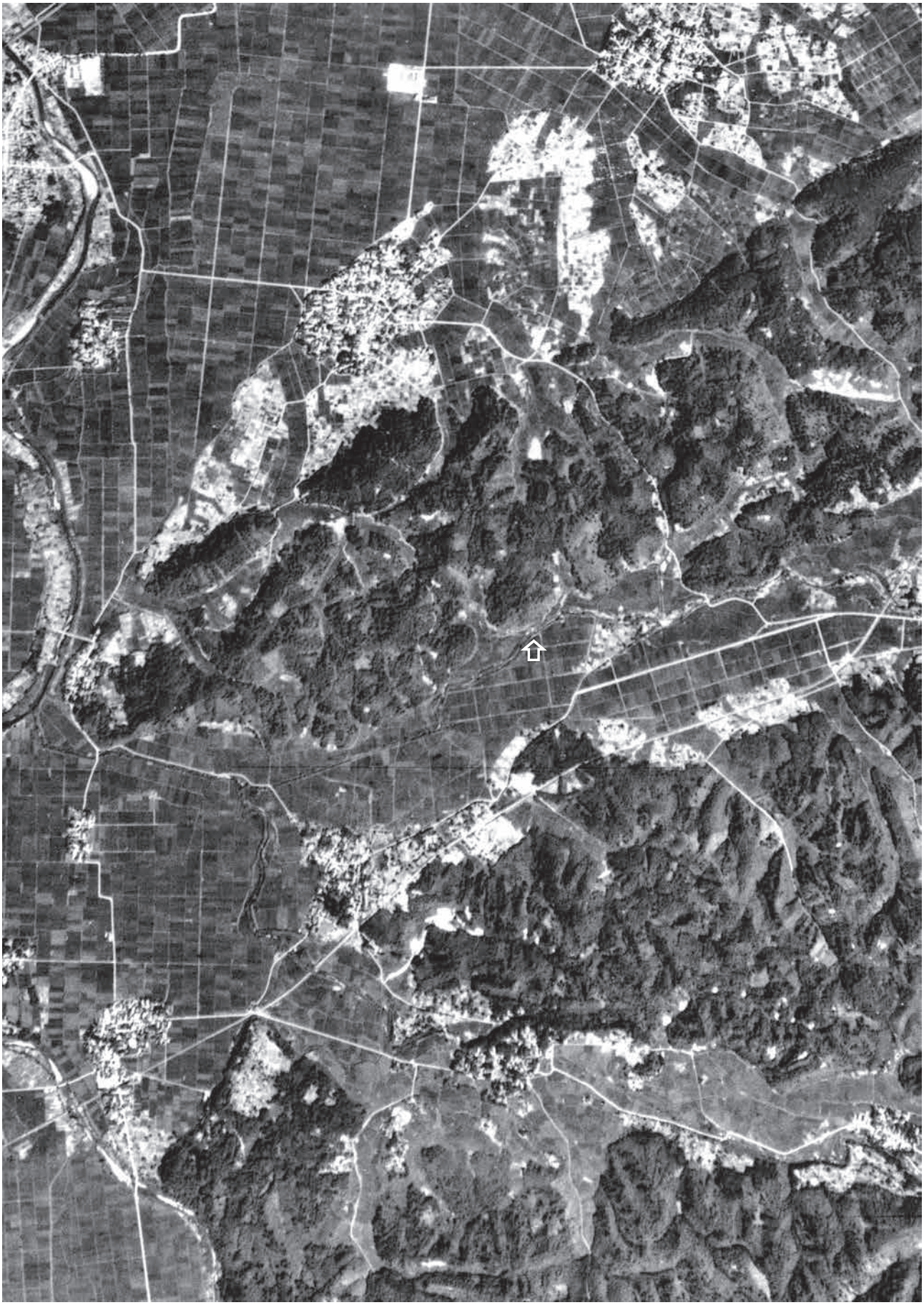
挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎　土	色調(内面)	色調(外面)	焼 成	備　　考	整理番号
107	1262	包含層他	30-DG、南西隅黒灰色土	甕	26.5	－	(6.3)	4/36	細砂、礫少	灰	暗灰	焼・還	正位焼成。内外面降灰顕著	85309
107	1263	包含層他	表土	甕	約27	－	(6.3)	7/36	細砂多、礫	灰	淡灰オリーブ	焼・還	正位焼成。外面降灰顕著	86191
107	1264	包含層他	6・7号窯灰原	鉢	－	－	(5.1)	1/36	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類とカキメ調整	86734
107	1265	包含層他	6・7号窯灰原	鉢	－	－	(4.7)	2/36	細砂多、礫少	灰白	灰白	生・還	生焼け、磨滅。内面Da類、外面H類	86735
108	1266	4号窯	前庭部下層(№6)、№1・2、灰原(C-99№27)	横瓶	－	－	(25.0)	－	粗砂多、礫多	灰	暗灰	転	横位焼成、破断面含め自然釉熔着。内面Da類、外面Hb類	86753
108	1267	7-1号窯	焼成室埋土	高坏C	－	9.7	(1.0)	6/36	粗砂少	暗灰	灰	焼・還	外面降灰あり	86632
108	1268	包含層他	表土	甕	－	－	(7.0)	－	粗砂多	暗灰	灰	焼・還/転	沈線、波状文で加飾。外面剥離目立つ	86571
109	1269	7-2号窯他	2号窯焚口付近・前庭部E-60～F-60、7-2号窯前庭部・床面№56、11号窯煙道部、6・7号窯表土	平瓦様製品	長辺約29	短辺約24	高さ(6.9)	約2/3	粗砂多、大型礫多	灰/黒灰	灰	焼・還/転	鉢をヘラ状工具で分割して成形(把手はヘラ状工具で切断)。内面下半Dc類後ナデ調整・上半ナデ調整、外面下半格子状タタキ・上半ナデ調整。破片化後、一部破片を焼き台(置き台)に転用	85335
109	1270	7-2号窯他	2号窯焼成部、2号窯焼成部床面№34・38・40、2号窯前庭部中層№23、7-2号窯床面№56	平瓦様製品	長辺30.2	短辺24.8	高さ5.6	完形	粗砂多、大型礫多	暗灰褐	灰褐/灰	焼・還/転	鉢をヘラ状工具で分割して成形(把手はヘラ状工具で切断)。内面下半Dc類後ナデ調整・上半ナデ調整、外面下半格子状タタキ・上半ナデ調整。破片化後、一部破片を除き焼き台(置き台)に転用	85336
109	1271	11号窯他	11号窯窯体流込土・煙道部流込土、竪穴状遺構埋土	平瓦様製品	長辺(28.2)	短辺(20.5)	高さ(4.6)	約2/3	粗砂多、大型礫	灰白	淡灰黄	生・還	生焼け。鉢をヘラ状工具で分割して成形。内面下半D類後ナデ調整・上半ナデ調整、外面下半格子状タタキ・上半板状工具によるナデ調整	85337
109	1272	2号窯	2号窯焼成部№34・39・43、2号窯前庭部中層濁茶褐色土№20・21	平瓦様製品	長辺28.7	短辺21.5	高4.1	約3/4	粗砂多、大型礫多	灰褐/灰	灰褐/灰	焼・還/転	鉢をヘラ状工具で分割して成形。内面下半Dc類後ナデ調整・上半ナデ調整、外面下半格子状タタキ・上半板状工具によるナデ調整、沈線あり。破片化後、各破片を焼き台(置き台)に転用	85338
110・111	1273	7号窯他	7号窯灰原褐色土、7号窯3-F灰原褐色土、3-E茶色土、5・10号窯灰原29、30-E畦黒灰色土、3-G暗褐色土、6・7号窯表土	陶棺	長80以上	幅(56.0)	高(約43.5)	－	粗砂多、礫多	灰・淡灰	灰・淡灰	焼/生・還	上端(口縁)部外面に突帯状の蓋受け、脚部生焼け。内面D類タタキ後一部ハケ 外面Ha・b類タタキ後板状工具によるナデ調整。破片の一部は焼き台(置き台)に転用	85377
111	1274	7号窯他	3トレ覆土-F褐色土、6・7号窯表面、11号窯流込土、7号窯3F灰原褐色土	陶棺	－	17.1	(9.2)	脚18/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	外面カキメ調整。生焼け	86451
111	1275	5・10号窯	3-G暗褐色土	陶棺	－	約17	(8.6)	脚2/22	粗砂、礫少	灰白	灰白	生・還	外面カキメ調整。生焼け。1273と接合	86797
112	1276	6号窯他	6号窯焼成室最終床、7-2号窯凹み、11号窯窯体流込土、7号窯灰原3-F褐色土・3-E茶褐色土	円面硯	11.7/15.6	14.0/17.8	3.6/4.9	18/36・23/36	粗砂、礫少	灰白	灰白	焼・還	硯面を上下逆のまま脚に付けた個体に、別硯(硯裏面を刺突か)を重ね焼き。外面全体に自然釉熔着、焼き割れ顕著。下の硯脚端部に他個体との熔着痕あり	85276
112	1277	7-2号窯他	7-2号窯最終床・前庭部、7-2号窯最終床凹み、竪穴状遺構埋土、7号窯3-D土器溜まり褐色土	円面硯	14.4	15.3	5.7	脚23/36	粗砂、礫少	灰白	淡灰オリーブ	焼・還	正位焼成、焼き歪み顕著、外面全体に自然釉顕著	85279
112	1278	6・7号窯付近表土	表土	円面硯	－	21.0	(4.6)	脚4/36	粗砂多	灰	灰	焼・還	透かし孔は7～9ヶ所。自然釉熔着	85498
112	1279	11号窯	窯体流込土	土馬	高(6.3)	長径2.5	短径2.3	－	粗砂、大型礫少	－	灰白	焼・還	左後脚。指ナデで粗く成形。	85269
112	1280	2号窯	前庭部裾E-60～F-60(胴部)、灰原(脚)焼成部№34	土馬	長(15.7)	高(10.9)	－	－	粗砂・礫少	－	灰	焼・還	飾馬。左後脚・胴部。脚側面はヘラ状工具で丁寧に成形、胴部は指ナデ成形。脚断面略円形。細いヘラ状工具の線刻で鞍部を表現。中空の可能性あり	85257
112	1281	2号窯	前庭部上層黒色土層№1	土馬	長(18.0)	高(8.0)	幅(4.1)	－	粗砂・礫少	－	灰	焼・還	飾馬。頭部、中空。頸下部をヘラ状工具、その他は指ナデで丁寧に成形。粘土で耳・立髪、ヘラ状工具の刺突で目・鼻・口、左側のみ細い線刻(4条残存)で手綱(または体毛)を表現	85256
112	1282	2号窯	前庭部裾E-60～F-60	土馬	長(6.6)	高(6.7)	厚(2.8)	－	粗砂・礫少	－	淡灰	焼・還	飾馬。頸部上半を指ナデで成形。粘土で立髪、残存する左側に細い線刻(3条残存)で手綱(または鞍)を表現。上半は黒化	86431
112	1283	2号窯	燃焼室№32	土馬	高(7.7)	長径2.5	短径1.9	－	粗砂・礫少	－	灰	焼・還	左後脚か。側面をヘラ状工具で丁寧に成形。脚部断面略円形。前方寄りに降灰	85261
112	1284	2号窯	前庭部上層黒色土層№7	土馬	高(5.4)	長径2.7	短径2.2	－	粗砂・礫少	－	灰	焼・還	左前脚か。側面をヘラ状工具で丁寧に成形。脚断面略円形。外側寄りは黒化	85258
112	1285	2号窯	前庭部上層黒色土層№5	土馬	高(5.7)	長径2.3	短径1.9	－	粗砂・礫少	－	灰	焼・還	左後脚か。側面をヘラ状工具で丁寧に成形。断面略楕円形。前方寄りに降灰	85262
112	1286	7-1号窯	焼成部流込土	土馬	長(6.4)	高(4.7)	厚(3.6)	－	粗砂・礫多	－	淡灰	焼・還	飾馬。頭部を指ナデでやや粗く成形。粘土で耳・立髪・鏡板、ヘラ状工具の刺突で目・鼻・口を表現。薄く自然釉熔着	85265
112	1287	7-1号窯	焼成部流込土	土馬	長(7.5)	幅(4.6)	－	－	粗砂多・礫多	－	淡灰	焼・還	飾馬。尻尾部。指ナデで成形。尾部断面略円形。左上半のみに細い線刻2条が残り、馬具を表現した可能性あり	85270
112	1288	6・7号窯	灰原表土	土馬	長(8.3)	高(7.7)	－	－	細砂、大型礫少	－	灰白	焼・還	飾馬。鞍部・中空。指ナデでやや粗く成形後、粘土紐で鞍、鐙、尻繋を表現	85273
112	1289	7-1号窯	焼成部流込土	土馬	長(7.7)	幅(8.3)	－	－	細砂、大型礫少	－	淡灰	焼・還	飾馬。左後脚、中実。指ナデでやや粗く成形。鞍部(または尻繋)を表現した粘土紐が脱落	85268
112	1290	7号窯	灰原3-D黒灰色土	土馬	－	幅(4.9)	(6.2)	－	細砂、大型礫少	－	淡灰	焼・還	左後脚。指ナデでやや粗い成形。脚断面略円形	85266
112	1291	5号窯	焼成部床面	土馬	長(3.8)	幅(1.1)	－	－	粗砂・礫少	－	暗灰	焼・還	尻尾部。ヘラ状工具の後に指ナデで成形。断面略円形。全体が黒化、上半に降灰(正位焼成か)	85271
113	1292	1号窯	№30	甕	－	－	(9.9)	－	粗砂、礫少	灰	灰	焼・還	内面Da類、外面Hc類か。焼成堅緻	86719
113	1293	1号窯	焼成部床面	甕	－	－	(16.2)	－	粗砂、礫	灰	青海	焼・還	内面Dc類、外面Hc類か。焼成堅緻	86717
113	1294	1号窯	№41	甕	－	－	(15.0)	－	粗砂、礫	淡灰	灰、淡黄灰	転	内面Da類、外面Hc類。焼き台転用	86720
113	1295	1号窯	焼成部床面	甕	－	－	(13.1)	－	粗砂、礫	暗灰	灰	転	内面Da類、外面Hb類。焼き台転用	86722
113	1296	1号窯	焼成部床面	甕	－	－	(11.4)	－	粗砂、礫	灰	暗灰	転	内面D類、外面Hc類	86718
113	1297	1号窯	焼成部床面、2層	甕	－	－	(18.9)	－	粗砂・礫多	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hc類。焼き台転用	86723
113	1298	1号窯	№31	甕	－	－	(19.3)	－	粗砂、細砂	灰	灰	転	内面Dc類、外面Hb類。焼き台転用	86721

第 53 表　窯跡出土遺物観察表 24

※〔　〕は復元法量、(　)は残存法量を示す。

挿図番号	番号	出土遺構名	出土位置等	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	胎土	色調(内面)	色調(外面)	焼成	備考	整理番号
113	1299	4号窯	前庭部黒色土上層	甕	－	－	(15.5)	－	粗砂多、礫	灰白	灰	焼・還	内面Da類、外面Hb類	86715
113	1300	4号窯	灰原(C-99、№30)	横瓶	－	－	(14.1)	－	粗砂、礫少	オリーブ灰	灰	焼・還	1号窯に破片あり。外面自然釉。内面Da類、外面Hc類	86724
113	1301	4号窯	焼成部№20-2,23	甕	－	－	(7.0)	－	粗砂多、礫	灰	灰	焼・還	底部付近。内面Da類、外面Hb類	86716
113	1302	4号窯	焼成部№17	甕	－	－	(10.0)	－	粗砂多、礫多	淡灰	灰	焼・還	窯壁粒熔着。内面Da類・ハケ、外面Hc類	86714
113	1303	4号窯	灰原(D-99～D-98L)	甕	－	－	(6.7)	－	粗砂多、礫多	淡灰	暗灰	焼・還	内面Dc類か、外面Hb類	86712
113	1304	4号窯	前庭部下層№4	甕	－	－	(8.5)	－	粗砂多、礫多	灰	青灰	焼・還	内面Da類、外面Hc類	86709
113	1305	4号窯	焼成部№22	甕	－	－	(6.6)	－	粗砂多、礫	暗灰	暗灰	転	内面Da類、外面Ha・b類。焼き台転用	86708
113	1306	4号窯	床面	甕	－	－	(4.7)	－	粗砂、礫	青黒	青黒	転	内面Da類、外面Hc類。焼き台転用	86710
113	1307	4号窯	灰原(C-99、№26)	甕	－	－	(8.3)	－	粗砂多、礫多	灰	青灰	焼・還	内面Da類・H類、外面Hb類	86711
114	1308	6号窯	最終床焼成室	甕	－	－	(12.9)	－	細砂多、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86713
114	1309	11号窯	前庭部黒灰色土層	甕	－	－	(10.5)	－	粗砂、礫少	灰白	淡灰	焼・還	内面Db類か、外面Hb類	86773
114	1310	11号窯	前庭部黒灰色土層	甕	－	－	(10.2)	－	粗砂、礫少	淡灰	灰	転	内面Da類、外面Hb類。焼き台転用	86774
114	1311	11号窯	4-F茶色土	甕	－	－	(10.3)	－	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。外面降灰あり	86771
114	1312	11号窯	焼成室天井崩落土	甕	－	－	(12.9)	－	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86770
114	1313	11号窯	4-F茶色土	甕	－	－	(8.8)	－	粗砂多、礫少	淡灰	淡灰	焼・還	内面Db類、外面Ha類	86775
114	1314	11号窯	前庭部黒灰色土	甕	－	－	(6.9)	－	粗砂、礫少	淡灰黄	淡灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86776
114	1315	11号窯	前庭部黒灰色土層	甕	－	－	(14.4)	－	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	内面Da類、外面Hb類	86772
114	1316	7-1号窯	焼成室埋土	甕	－	－	(10.9)	－	粗砂多、礫少	灰白	灰白	焼・還	内面Dc類、外面Hd類	86758
114	1317	7-1号窯	燃焼室断ち割り中	甕	－	－	(7.0)	－	粗砂多、礫少	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。外面降灰あり	86759
114	1318	7-1号窯	前庭部埋土	甕	－	－	(7.1)	－	粗砂多、礫多	淡灰	灰	転	自然釉が破断面に付着(焼き台転用)。 内面Da類、外面Hb類	86760
114	1319	7-1号窯	前庭部黒灰色土	甕	－	－	(5.5)	－	粗砂多、礫多	淡灰	淡灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86761
114	1320	7-1号窯	前庭部黒灰色土	甕	－	－	(6.7)	－	細砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86762
114	1321	9号窯	流込土	甕	－	－	(10.0)	－	粗砂多、礫少	淡灰	暗灰	焼・還	内面Dc類、外面Hd類か	86745
114	1322	9号窯	流込土	甕	－	－	(9.6)	－	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86746
114	1323	9号窯	流込土	甕	－	－	(16.4)	－	粗砂多、礫	淡灰	淡灰 オリーブ	焼・還	内面Dc類、外面Hb・c類	86747
114	1324	9号窯	流込土	甕	－	－	(21.3)	－	粗砂多、礫	淡灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類	86750
114	1325	9号窯	流込土	甕	－	－	(16.8)	－	粗砂多、礫	淡灰	灰	焼・還	降灰顕著	86749
114	1326	9号窯	流込土	甕	－	－	(15.3)	－	粗砂多、礫	淡灰	淡灰 オリーブ	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。焼き膨れ	86748
114	1327	8号窯	前庭部流込土	甕	－	－	(9.9)	－	粗砂多、礫少	暗灰	暗灰	焼・還	内面Da類、外面Hd類か	86727
114	1328	8号窯	前庭部凹み、黒灰色土	甕	－	－	(7.4)	－	粗砂多、礫少	灰	暗灰	焼・還	内面Da類、外面Hd類	86726
114	1329	8号窯	燃焼室、床直上ベルト、褐色土	甕	－	－	(12.6)	－	粗砂、礫多	灰白	灰	焼・還	内面Da類、外面Hc類	86725
115	1330	5号窯	舟底状ピット	甕	－	－	(11.1)	－	粗砂多、礫少	灰白	淡灰	転	内面Da類、外面Ha類。焼き台(置き台)転用	86763
115	1331	5号窯	焼成室埋土	甕	－	－	(13.8)	－	粗砂多、礫少	灰	灰、黒褐	焼・還	内面Da類、外面Ha類。外面降灰顕著	86764
115	1332	5号窯	焼成室天井崩落土	甕	－	－	(9.0)	－	粗砂多、礫少	暗灰	灰	転	内面Dc類(2つの原体)、外面Ha類。焼き台(置き台)転用。1331と同一個体か。	86765
115	1333	5号窯	焼成室天井崩埋土	甕	－	－	(11.3)	－	粗砂多、礫多	オリーブ灰	黒灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類。焼き膨れあり	86768
115	1334	5号窯	前庭部黒灰色土	甕	－	－	(7.5)	－	粗砂多、礫多	灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類	86769
115	1335	5号窯	焼成室床面上	甕	－	－	(25.0)	－	粗砂多、礫多	黒灰	淡灰	転	内面Da類、外面Ha類。焼き台(置き台)転用	86766
115	1336	5号窯	前庭部黒褐色土	甕	－	－	(9.5)	－	細砂、礫少	淡黄灰	黒灰	焼・還	内面Da類か、外面Ha類。内面降灰顕著	86767
115	1337	5号窯	舟底状ピット、床面下燃焼室、(5号窯窯体埋土最終床)	甕	－	－	(4.6)	－	細砂、礫少	淡灰	灰	焼・還	内面Da類、外面Ha類	86788
115	1338	11号窯	前庭部黒灰色土	甕	－	－	(5.7)	－	粗砂多	淡黄灰	淡黄灰	焼・還	内面Da類、外面Hb類。生焼けに近い	86777
115	1339	5号窯	焼成室埋土	甕	－	－	(4.9)	－	粗砂多、礫多	黒灰	灰	焼・還	内面Da類、外面Ha類	86780
115	1340	10号窯	排水溝№14	甕	－	－	(11.0)	－	粗砂多、礫少	灰	黒灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類	86778
115	1341	10号窯	排水溝№49	甕	－	－	(12.1)	－	粗砂多、礫多	淡灰	灰白	焼・還	内面Dc類、外面Ha類	86779
115	1342	10号窯	埋土最終床	甕	－	－	(9.4)	－	粗砂、大型礫少	淡黄	灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類。焼き膨れあり	86790
115	1343	10号窯	埋土最終床	甕	－	－	(8.6)	－	粗砂多、礫少	淡灰	灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類か	86787
115	1344	10号窯	埋土最終床	甕	－	－	(9.2)	－	粗砂多	淡灰	淡灰	焼・還	内面Db類か、外面Ha類。内面降灰あり	86789
115	1345	10号窯	焼成室天井崩落土	甕	－	－	(11.5)	－	粗砂多、大型礫多	灰	暗灰	焼・還	内面Da類、外面Ha類	86792
115	1346	2号窯	№34	甕	－	－	(12.6)	－	粗砂多、礫多	暗褐	暗褐	転	内面Dc類後ハケ調整、外面Hb類。焼き台(置き台)に転用	86736
115	1347	2号窯	№34	甕	－	－	(10.7)	－	粗砂、礫	黒灰	黒灰	転	内面Dc類、外面Ha類。焼き台(置き台)に転用	86737
115	1348	2号窯	前庭部上層黒色土層№11	甕	－	－	(8.6)	－	粗砂少	淡灰黄	暗灰	焼・還	内面Dc類、外面Ha類	86744
115	1349	2号窯	№34・36	甕	－	－	(17.8)	－	粗砂多、大型礫多	灰褐	灰褐	転	内面Dc類か、外面格子状。焼き台(置き台)に転用	86741
115	1350	2号窯	№34	甕	－	－	(15.3)	－	粗砂多、大型礫多	赤褐	暗灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86740
115	1351	2号窯	前庭部上層黒色層№11	横瓶か	－	－	(8.0)	－	粗砂多	淡灰 オリーブ	淡灰	焼・還	内面Dc類、外面Hb類	86738
115	1352	2号窯	焼成部№35	甕	－	－	(11.9)	－	粗砂多、大型礫多	暗褐	青灰	転	内面Da類、外面Ha類。焼き台(置き台)に転用	86739
115	1353	2号窯	焼成部№37	甕	－	－	(10.2)	－	粗砂多、礫少	灰	灰褐	焼・還	内面Dc類、外面格子状	86743

図版第1　空中写真



那谷金比羅山古墳・那谷金比羅山窯跡群（矢印）の位置（昭和23年米軍撮影）

図版第２　金比羅山全景

金比羅山全景１（東上空から）

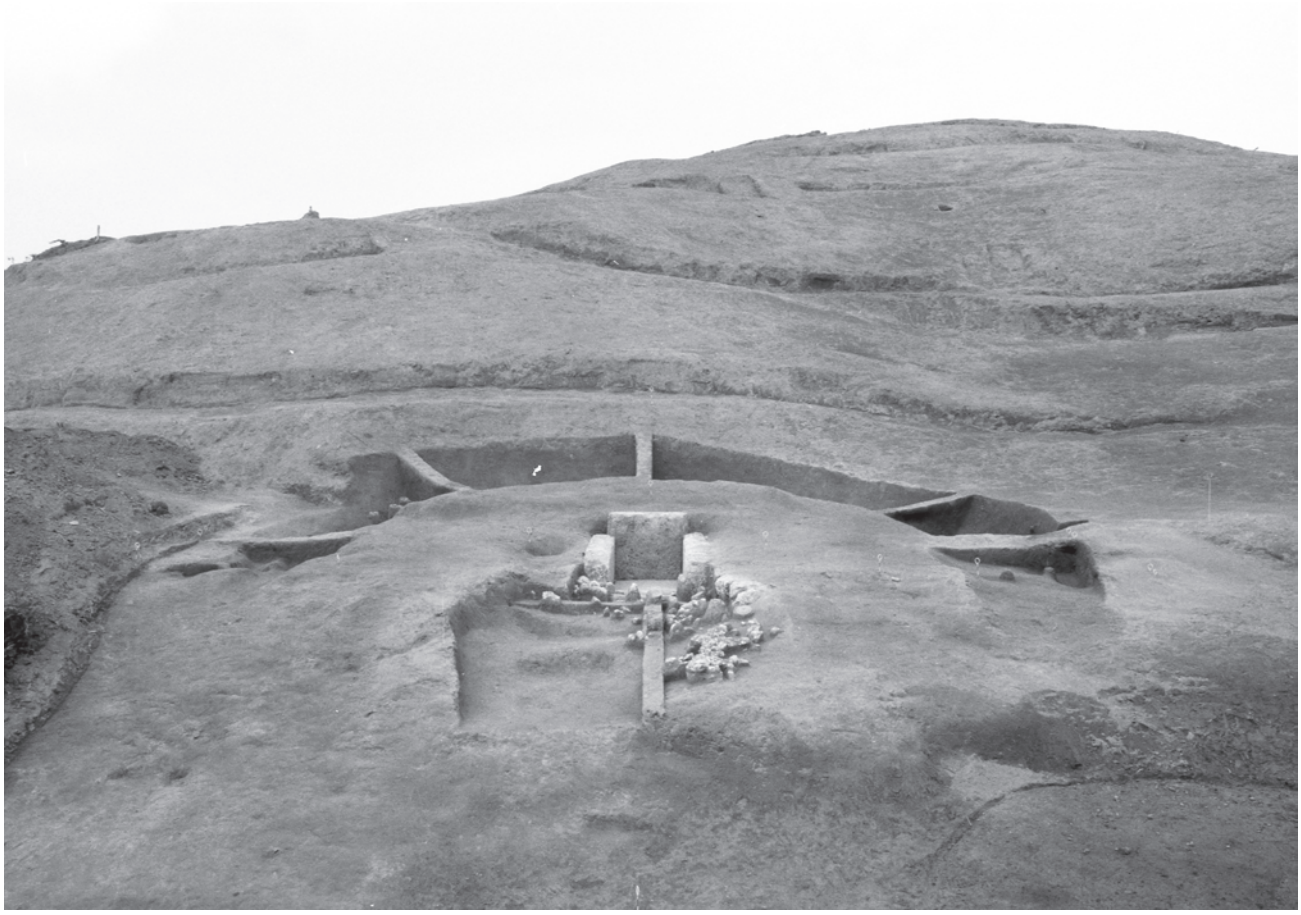
金比羅山全景２（南東から）

図版第３　金比羅山全景

金比羅山全景３（第１次調査）南東上空から

金比羅山全景４（第１次調査）南西から

図版第４　那谷金比羅山古墳



全景（南から）

石槨正面

石槨左側壁

石槨右側壁

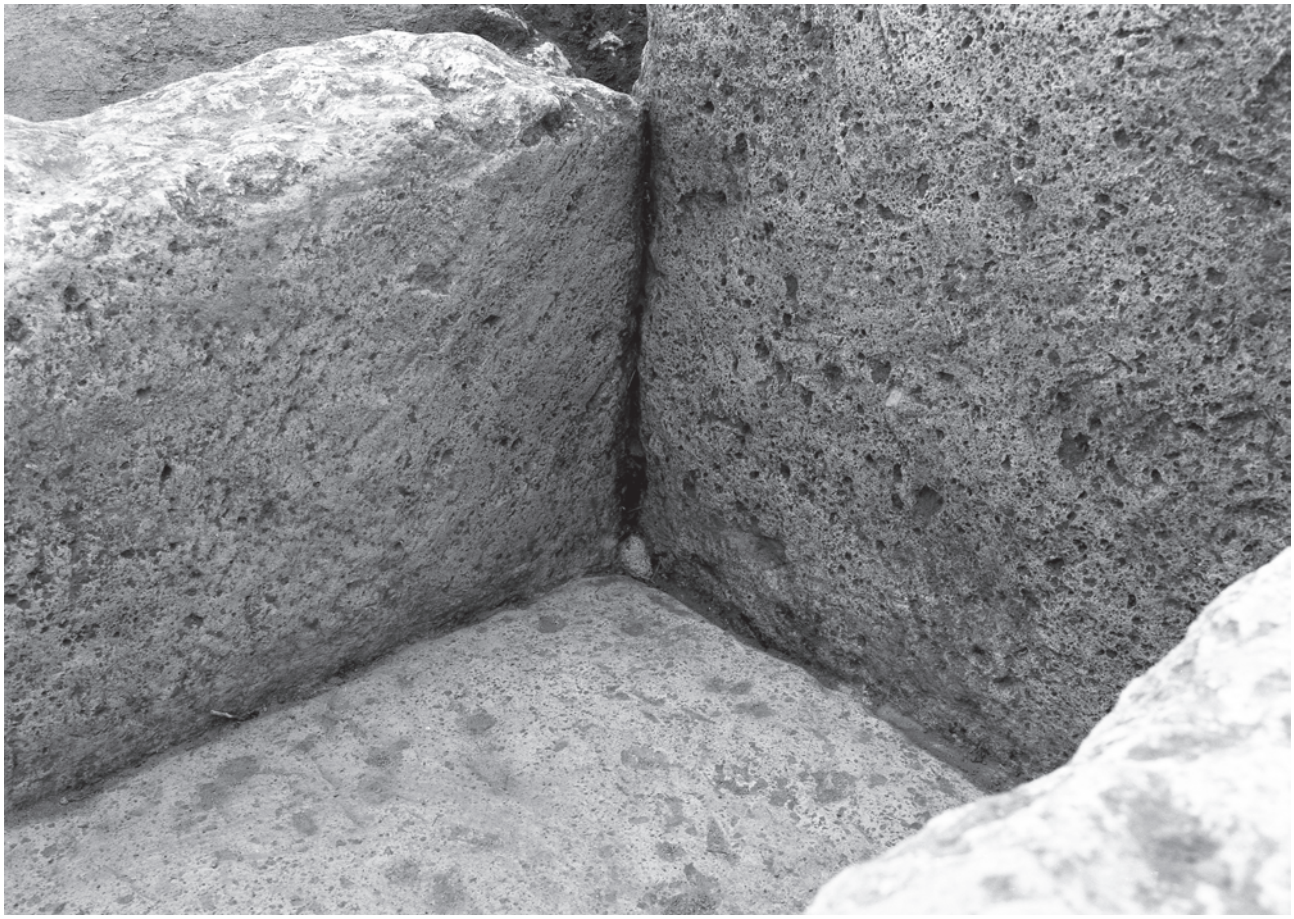
図版第6　那谷金比羅山古墳

石槨全景

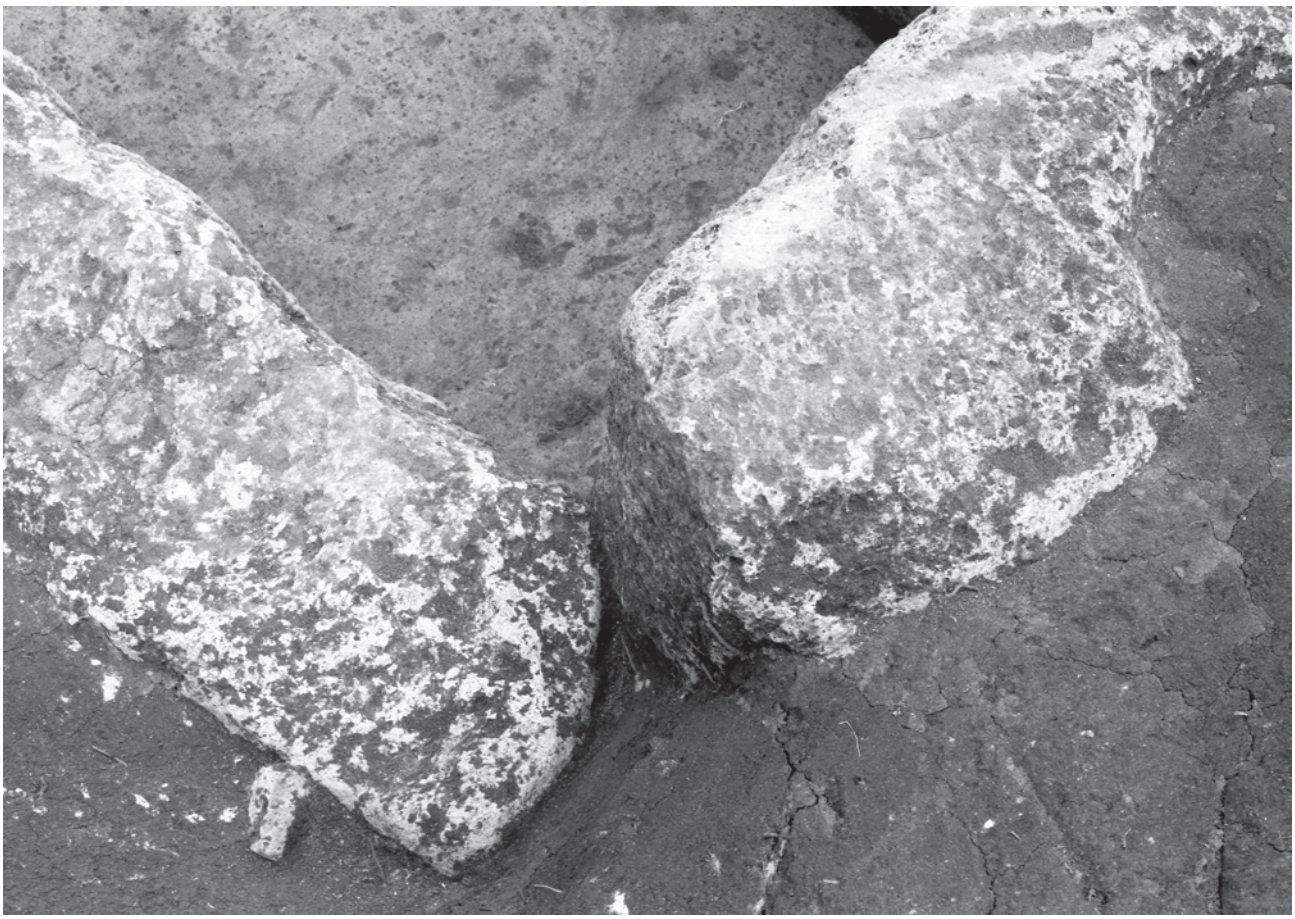
石槨玄門部

前庭部石列 1

前庭部石列 2



石槨組合わせ 1



石槨組合わせ 2

前庭部埋土状況

石槨内埋土状況

玄門部埋土状況

前庭部石材状況

玄門部石材状況

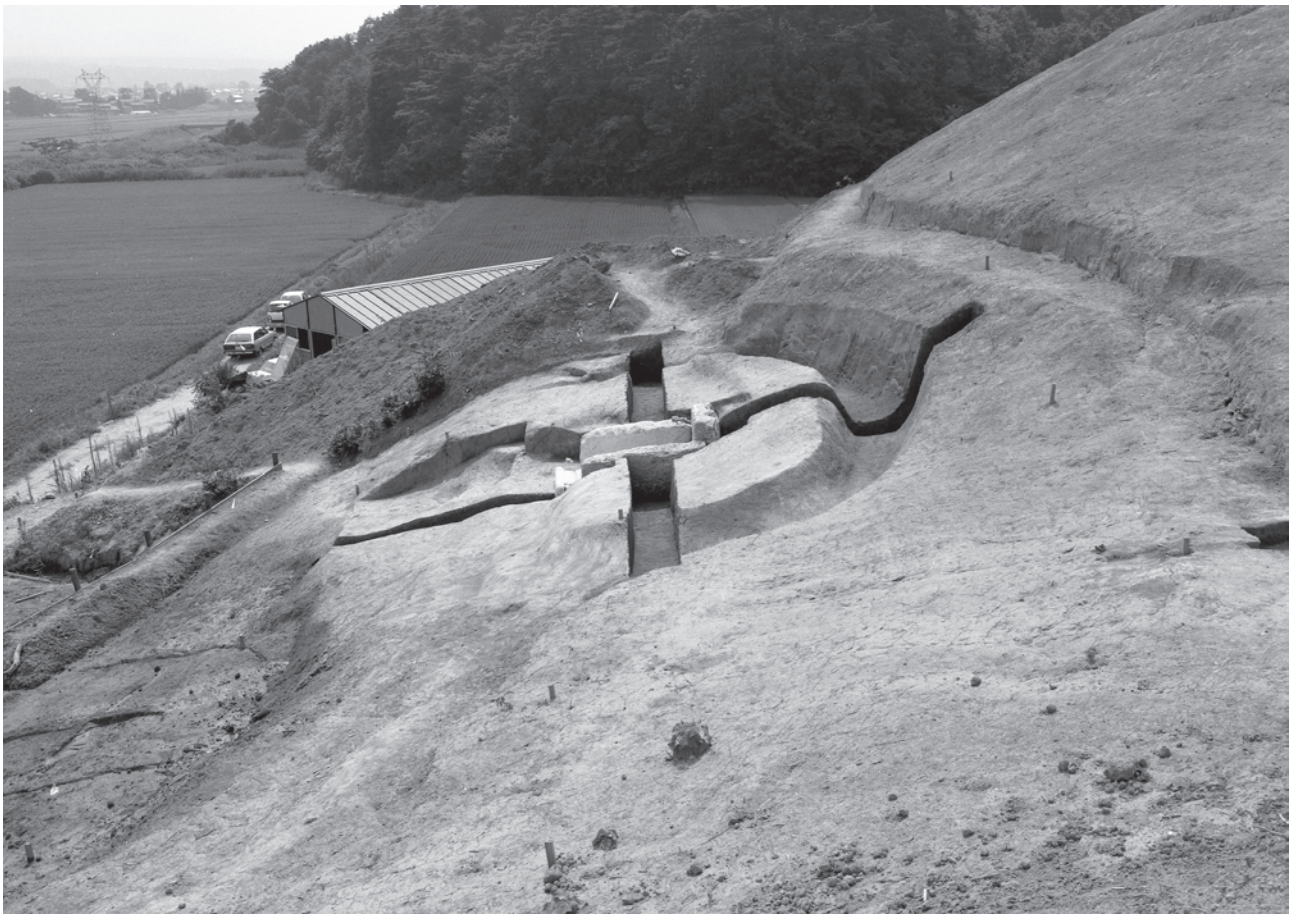
図版第10　那谷金比羅山古墳

周溝埋土状況

掘り形埋土状況

掘り形埋土状況

周溝遺物出土状況



古墳完掘状況

石槨検出状況

調査状況

調査状況

石材搬出状況

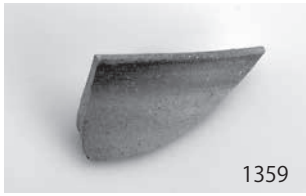
1354

1355

1357

1356

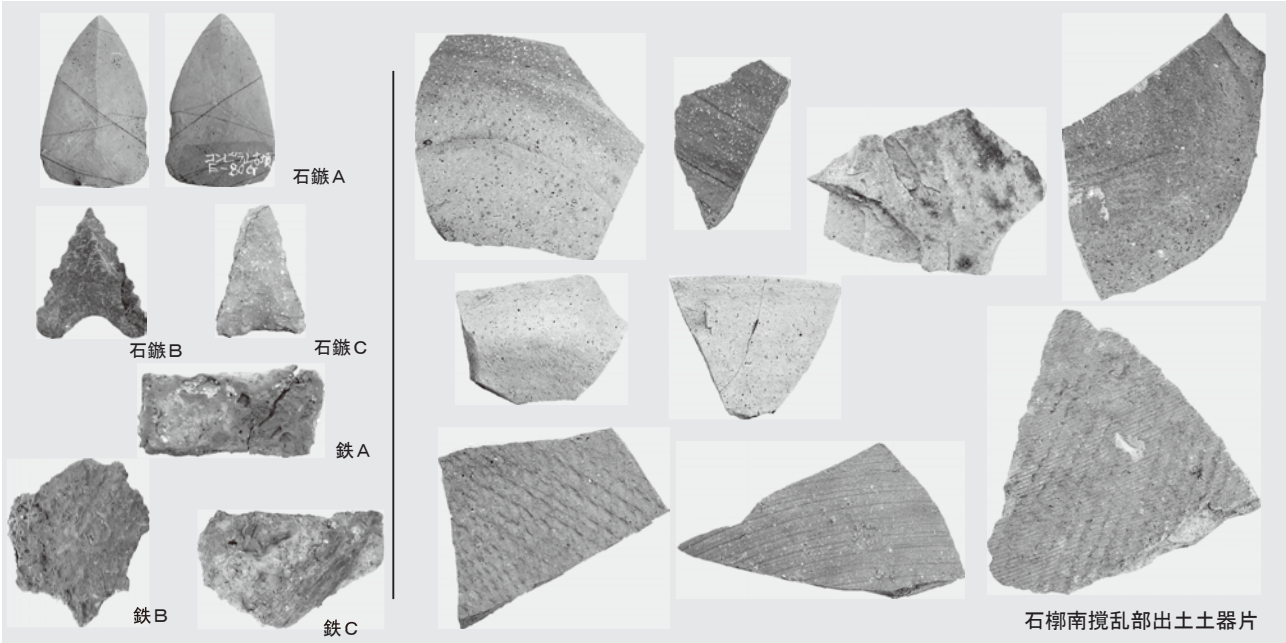
1360


1359

1358

1362

1361



第 3 次調査区全景 1（南西上空から）

第 3 次調査区全景 2

1号窯全景1（南西から）

1号窯全景2（北東から）

1号窯窯体（北東から）

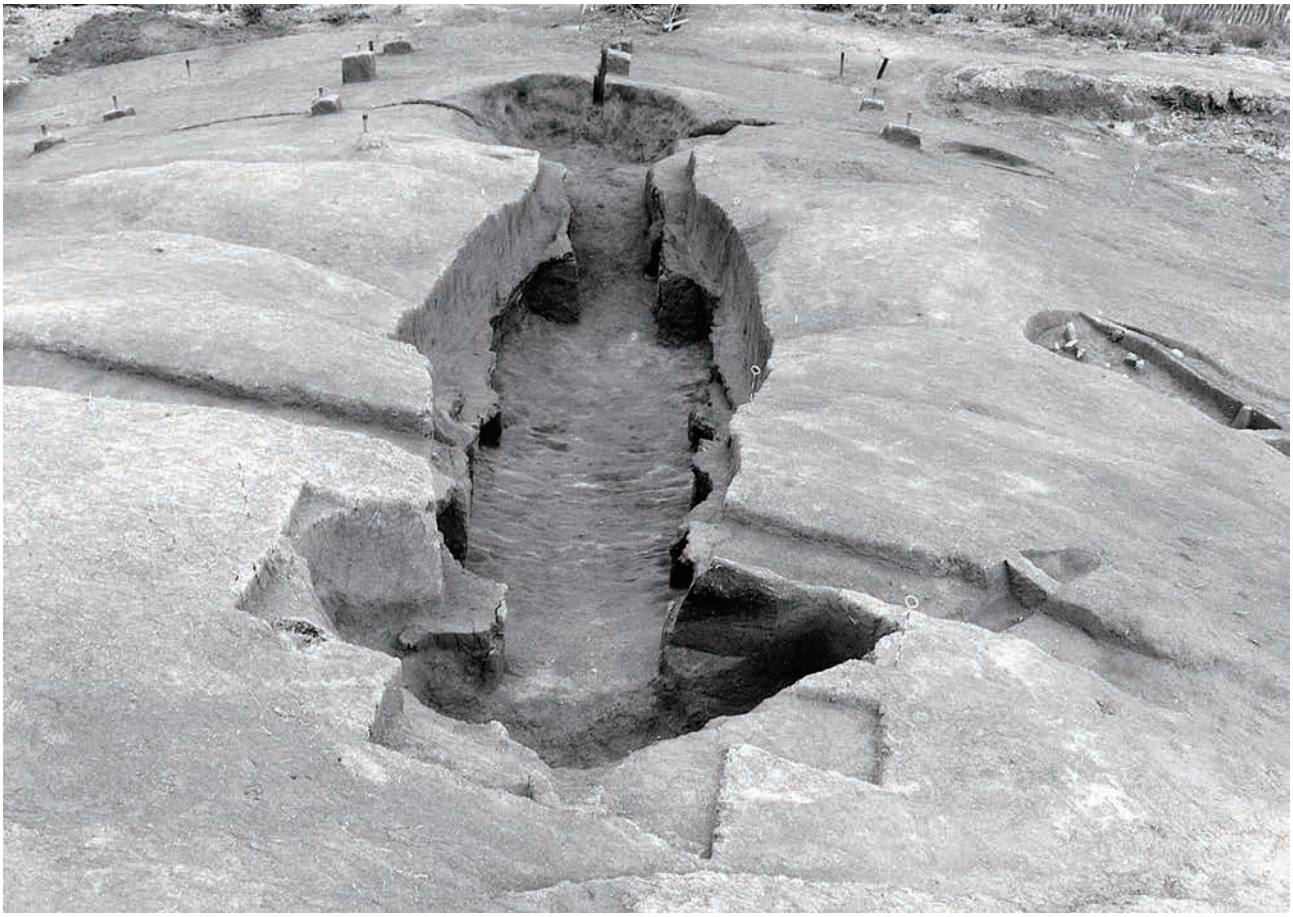
2号窯全景（北東から）

2号窯排煙口

2号窯前庭部（北東から）

3号窯全景（東から）

4号窯全景1（南西から）

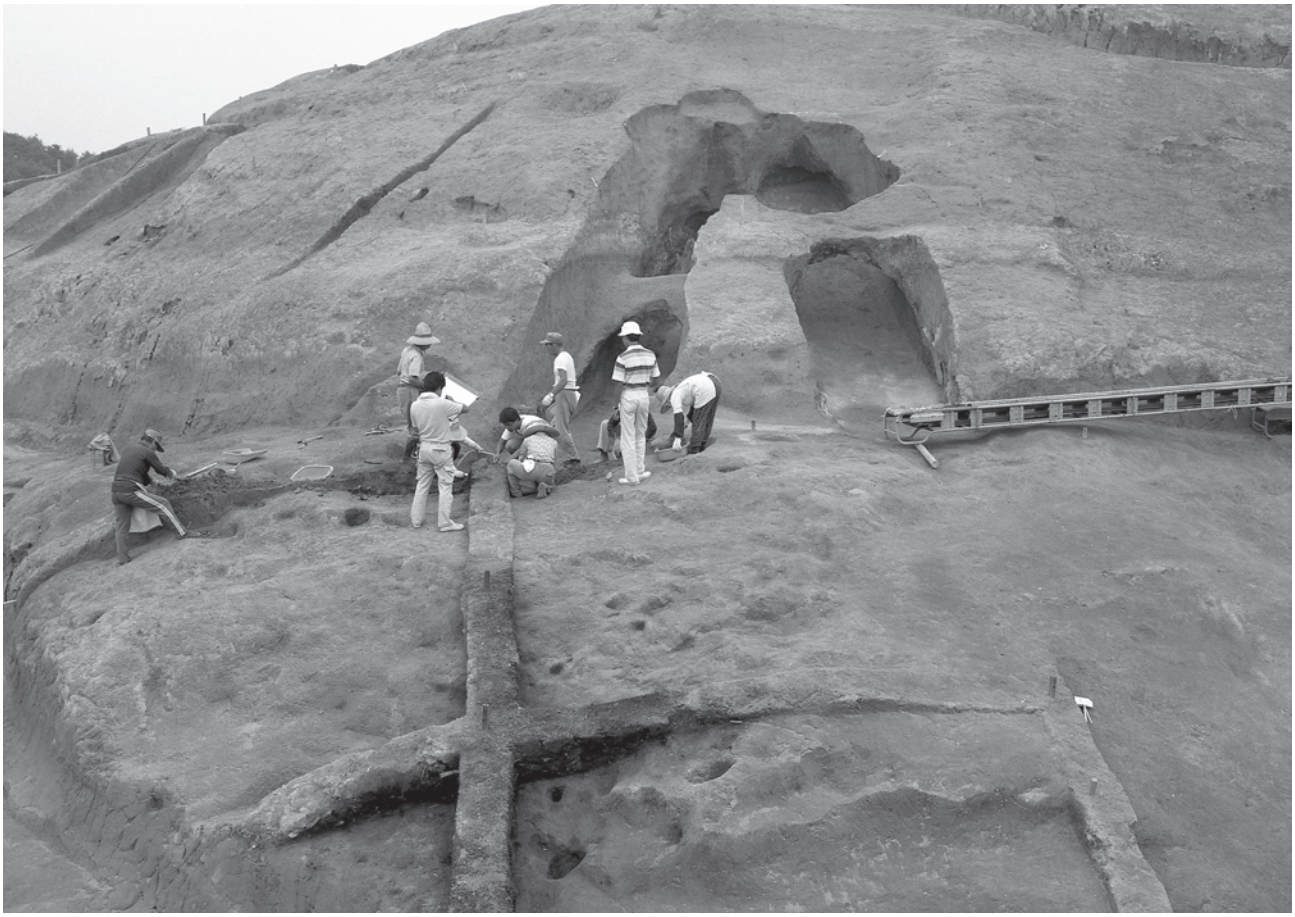


4号窯全景2（北東から）

5号窯全景（東から）

5号窯焼成部（東から）

5号窯窯体北側壁工具痕



5号・10号窯前庭部調査風景（南東から）

5号・10号窯全景（東から）

5号・10号窯排煙口（東から）

6号窯全景（南西から）

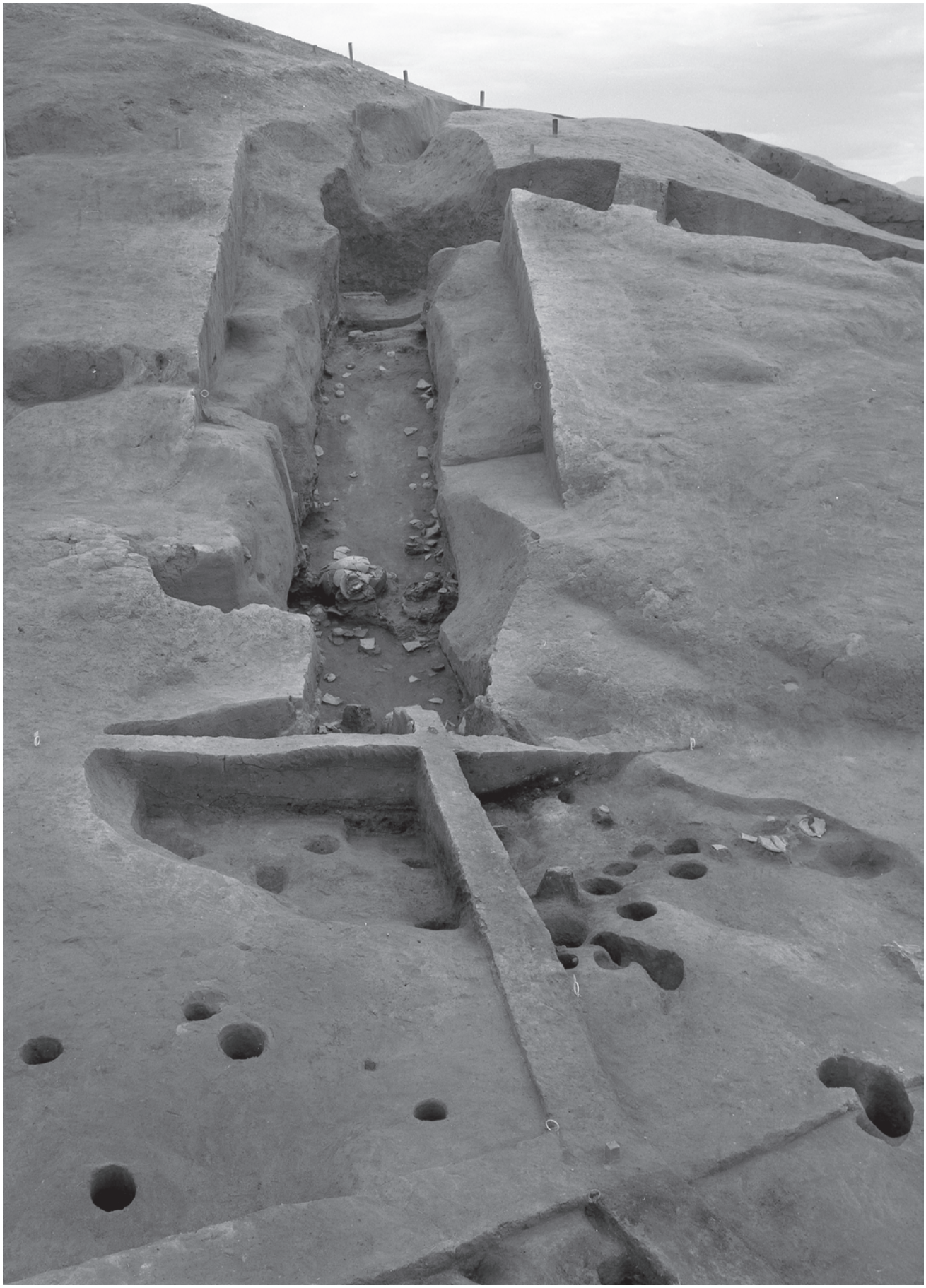
6号窯前庭部断面（南から）

6号窯煙道（東から）

6号・7号・11号窯（南西から）

7-1 号窯全景（南西から）

7-1 号窯第 1 次床舟底状ピット（北東から）



7-2 号窯全景（南西から）

7-2 号窯焼成部須恵器出土状況 1（北東から）

7-2 号窯焼成部須恵器出土状況 2（南西から）

8 号窯と 7-1 号窯排煙遺構（南から）

8 号窯（北から）

9号窯全景（南から）

10 号窯（東から）

10 号窯焼成部（東から）

10 号窯焼成部床面排水施設（東から）

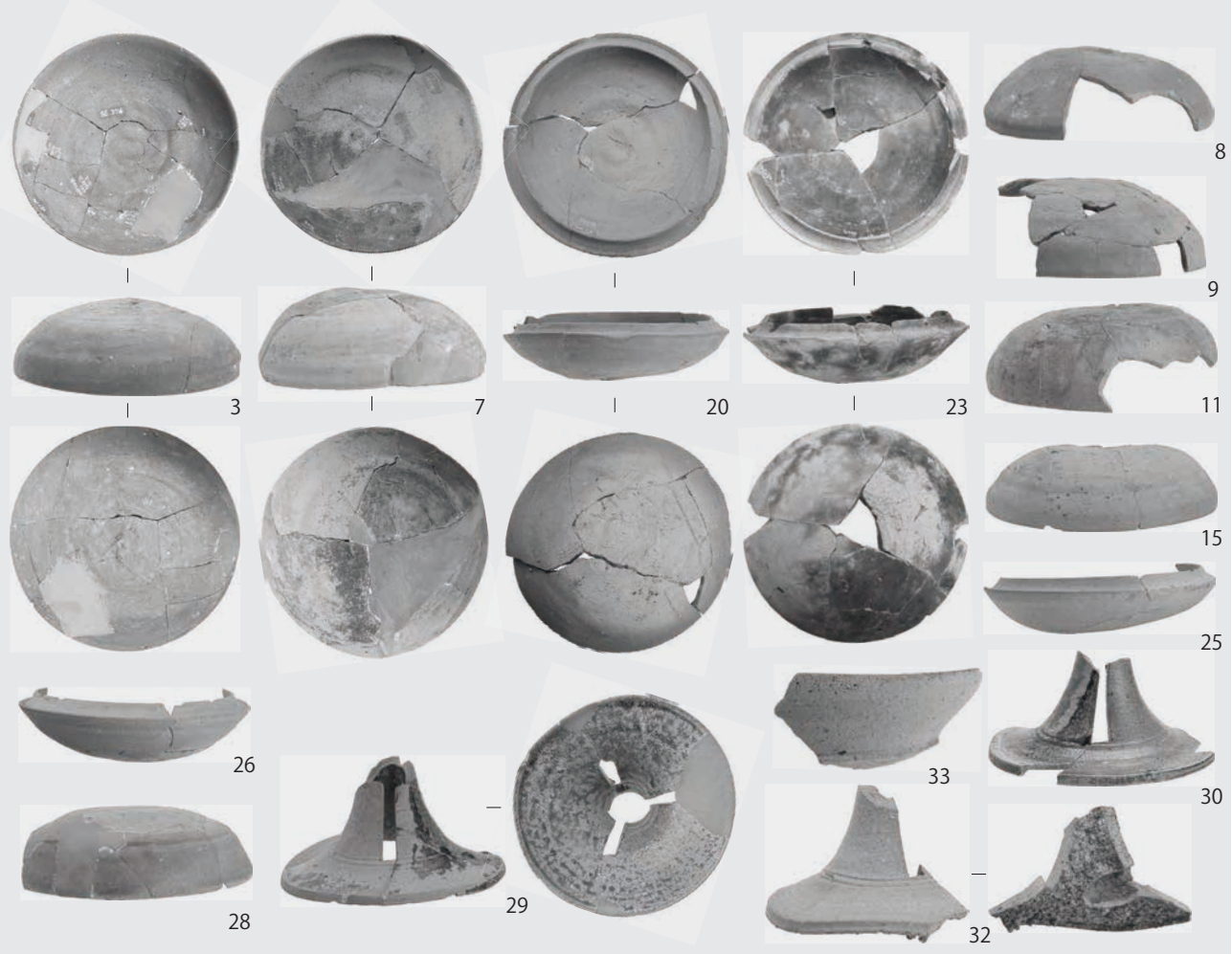
11 号窯全景（南西から）

11 号窯排煙施設（北東から）

竪穴状遺構（北から）

竪穴状遺構（南から）

図版第32　那谷金比羅山窯跡群出土遺物1



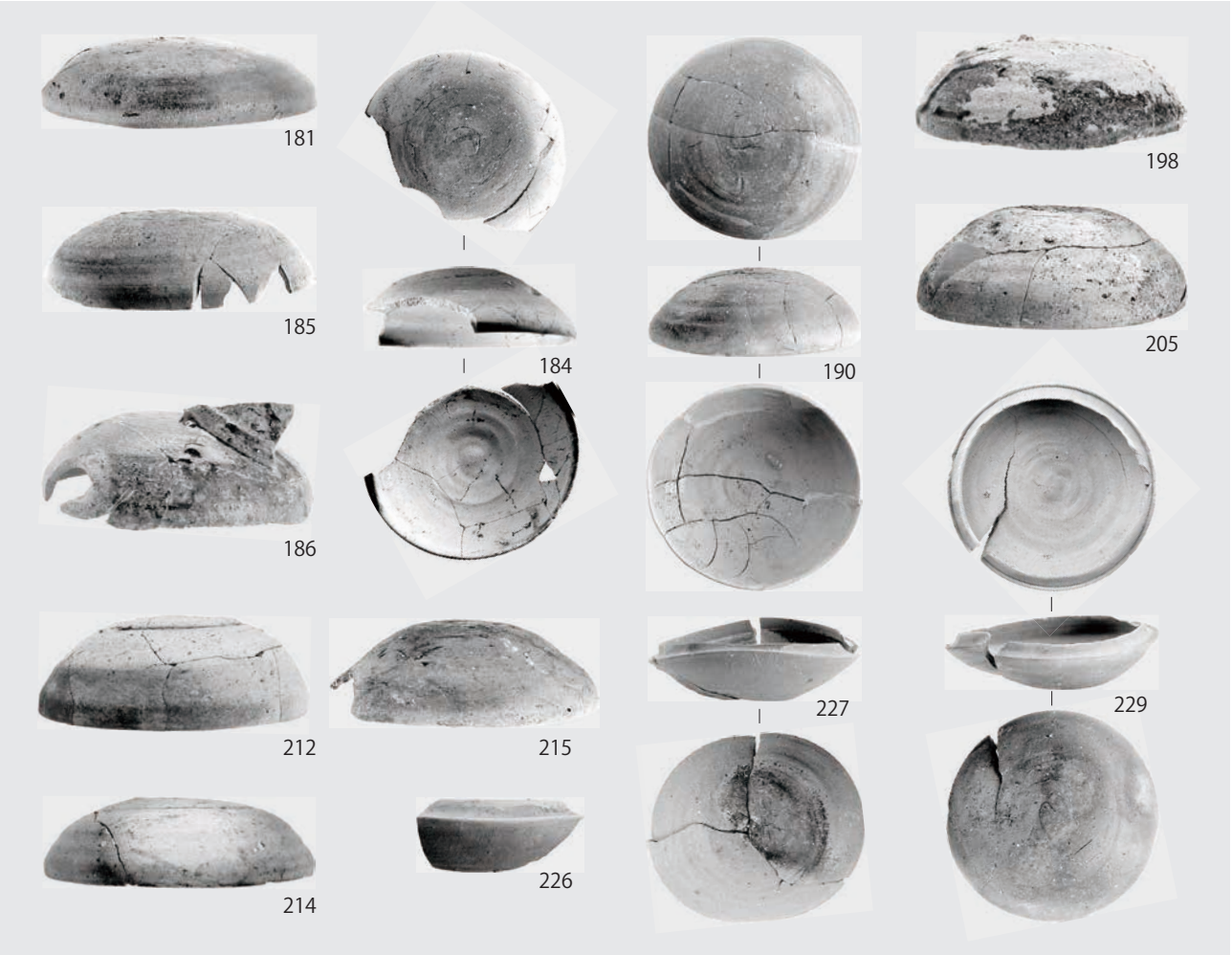
4号窯1

34
35
36
40
38
41
43
44
47
48
58
62
63
68
70
73
57
75
76
84
85
77
78
86
87
90
92
95
98
99

4号窯2

101
103
104
106
109
110
112
107
111
113
121
125
115
122
141
128
136
138
127
144
151
153
157
158
159
161
169
172
173
174
175
179

4号窯3



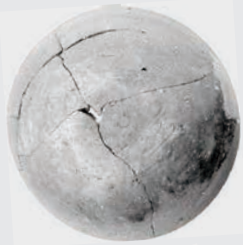
1号窯1

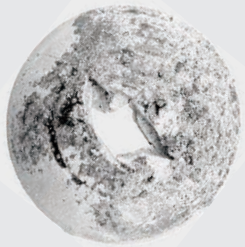
233

236

241

243

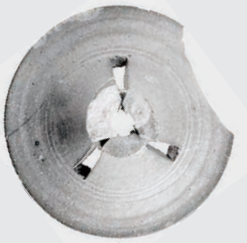




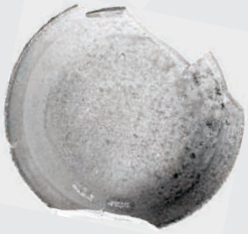
251

252

269

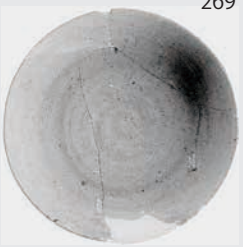


270



272

259



261

264

274

285

268

283

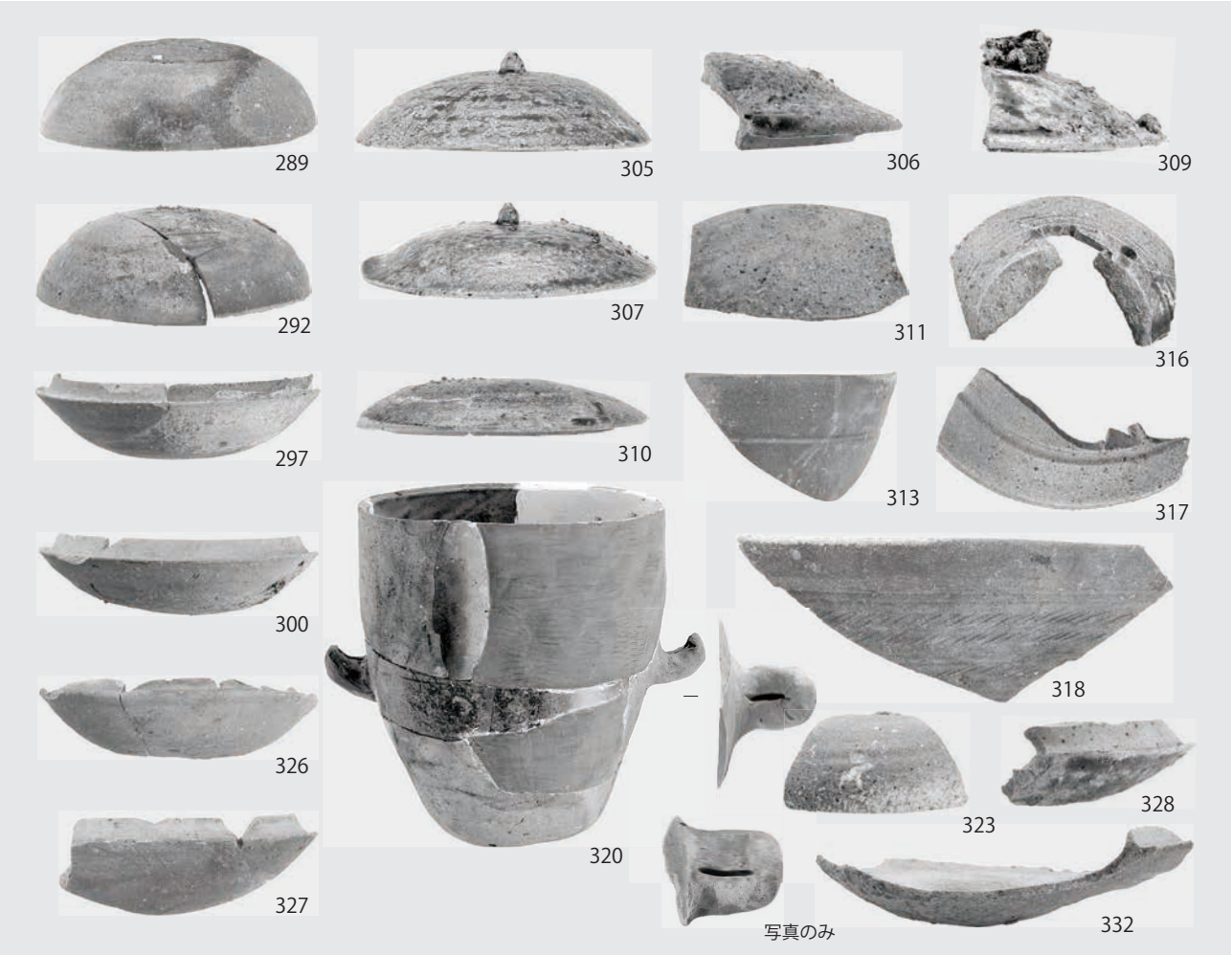
273

278

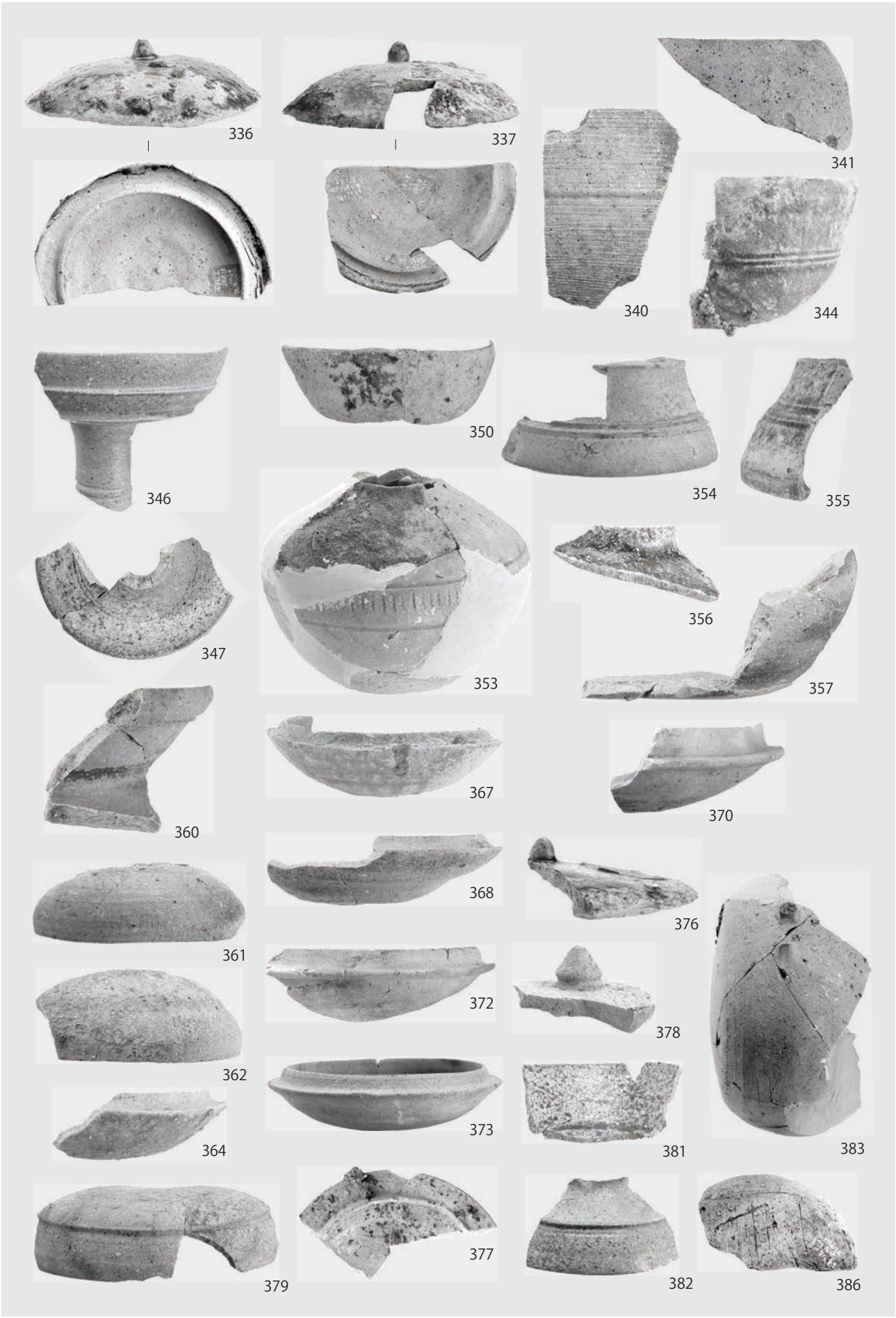
284

287

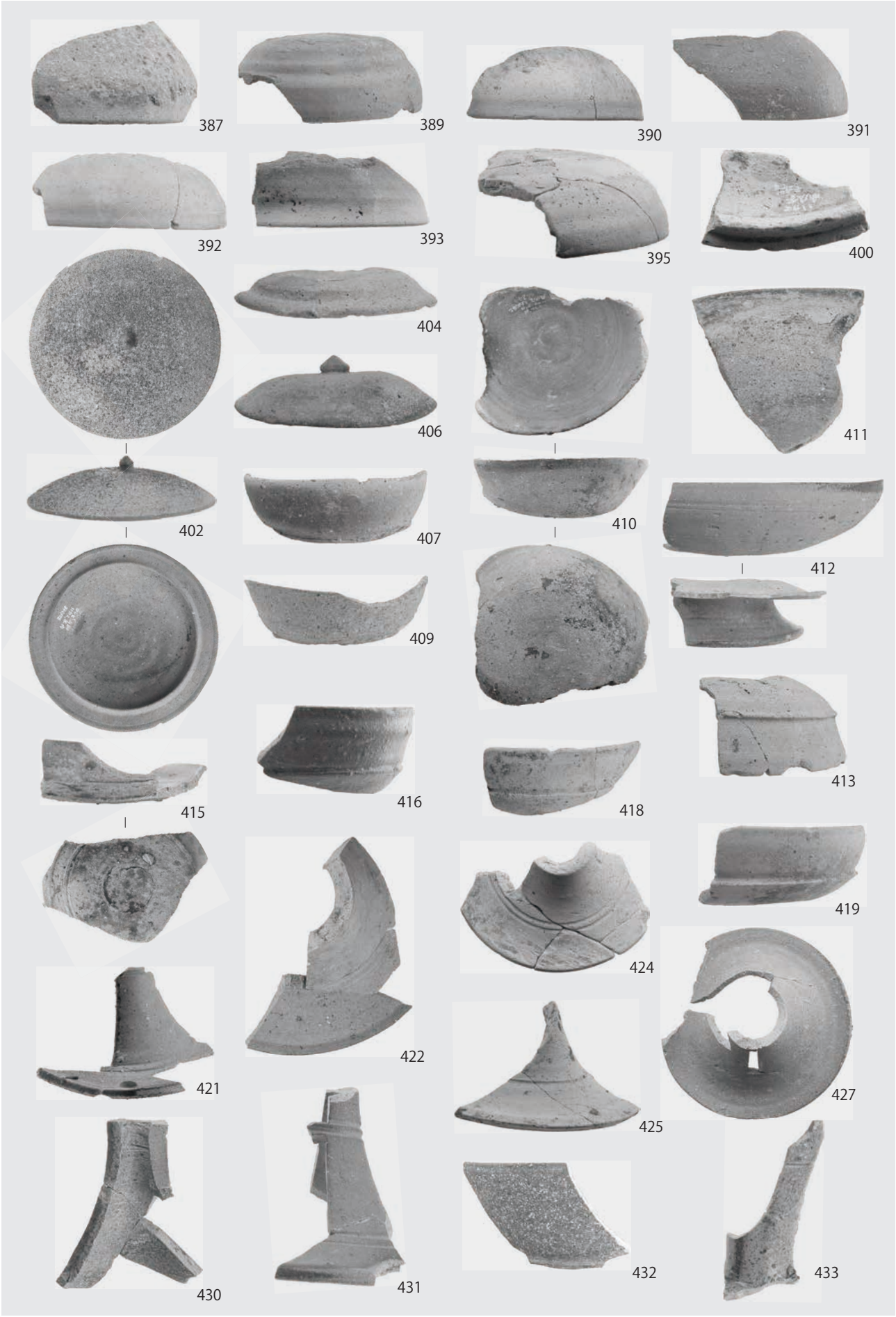
1号窯2


289
305
306
309
292
307
311
316
297
310
313
317
300
318
326
323
328
320
327
写真のみ
332

6号窯1


336
337
341
340
344
346
350
354
355
347
353
356
357
360
367
370
368
376
361
372
378
362
373
381
383
364
377
379
382
386

6号窯2


387
389
390
391
392
393
395
400
404
406
411
402
407
410
412
409
415
416
418
413
419
424
421
422
427
425
430
431
432
433

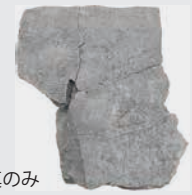
11 号窯 1

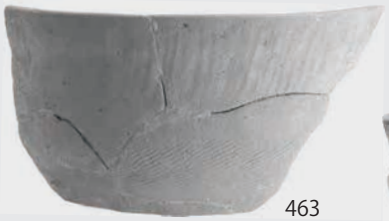
434
435
436
438
441
442
443
444
447
449
450
453
454
455
458
459
460

11号窯2

461

462


写真のみ


463

写真のみ

473

465

466

478

474

475

476

479

482

483

485

480

488

494

486

487

497

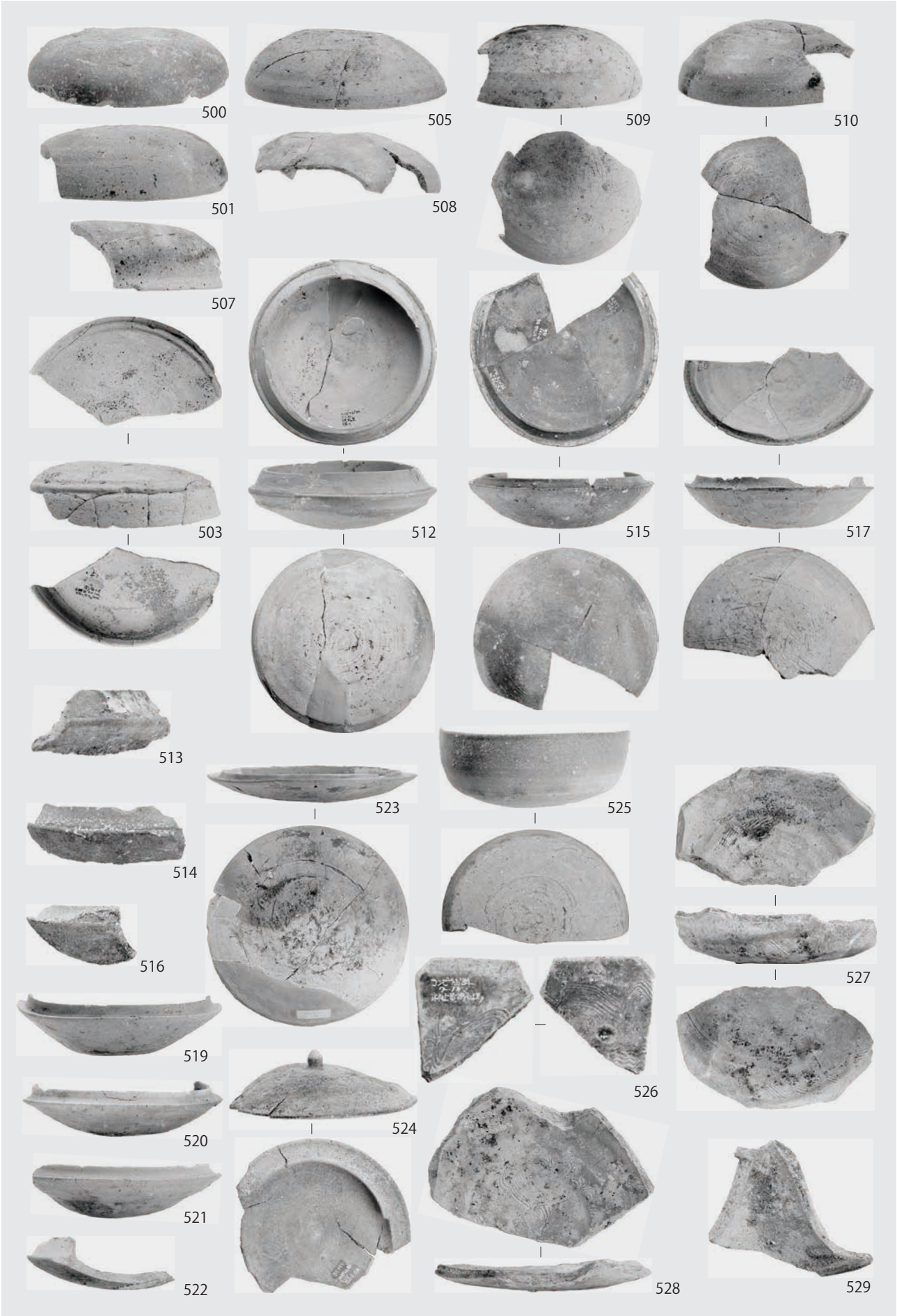
489

492

493

498

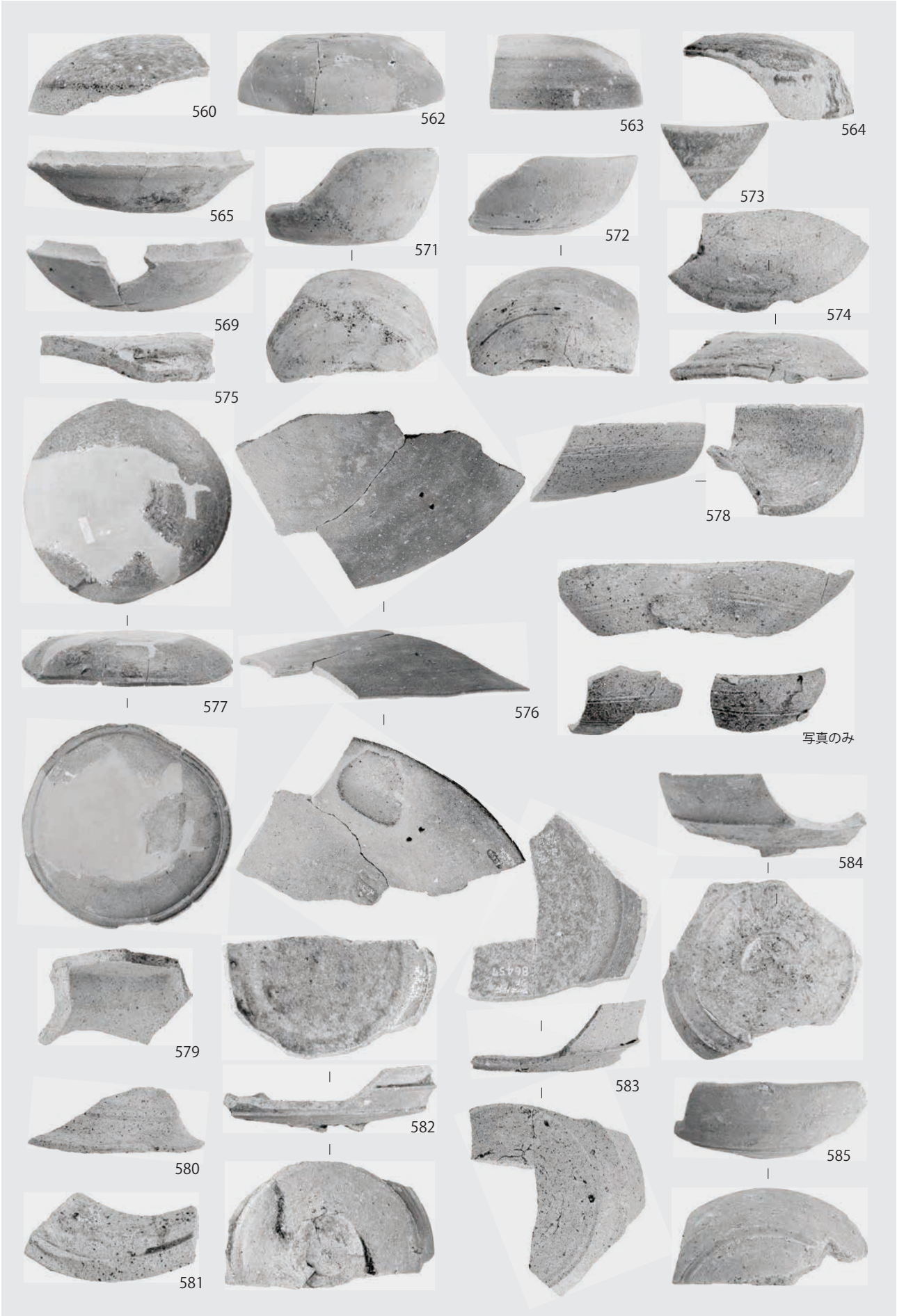
11 号窯 3


500
505
509
510
501
508
507
503
512
515
517
513
523
525
514
516
527
519
526
520
524
521
522
528
529

7-1 号窯 1

530
531
532
533
534
535
537
538
539
540
541
543
544
545
546
547
548
549
551
552
554
555
558
559

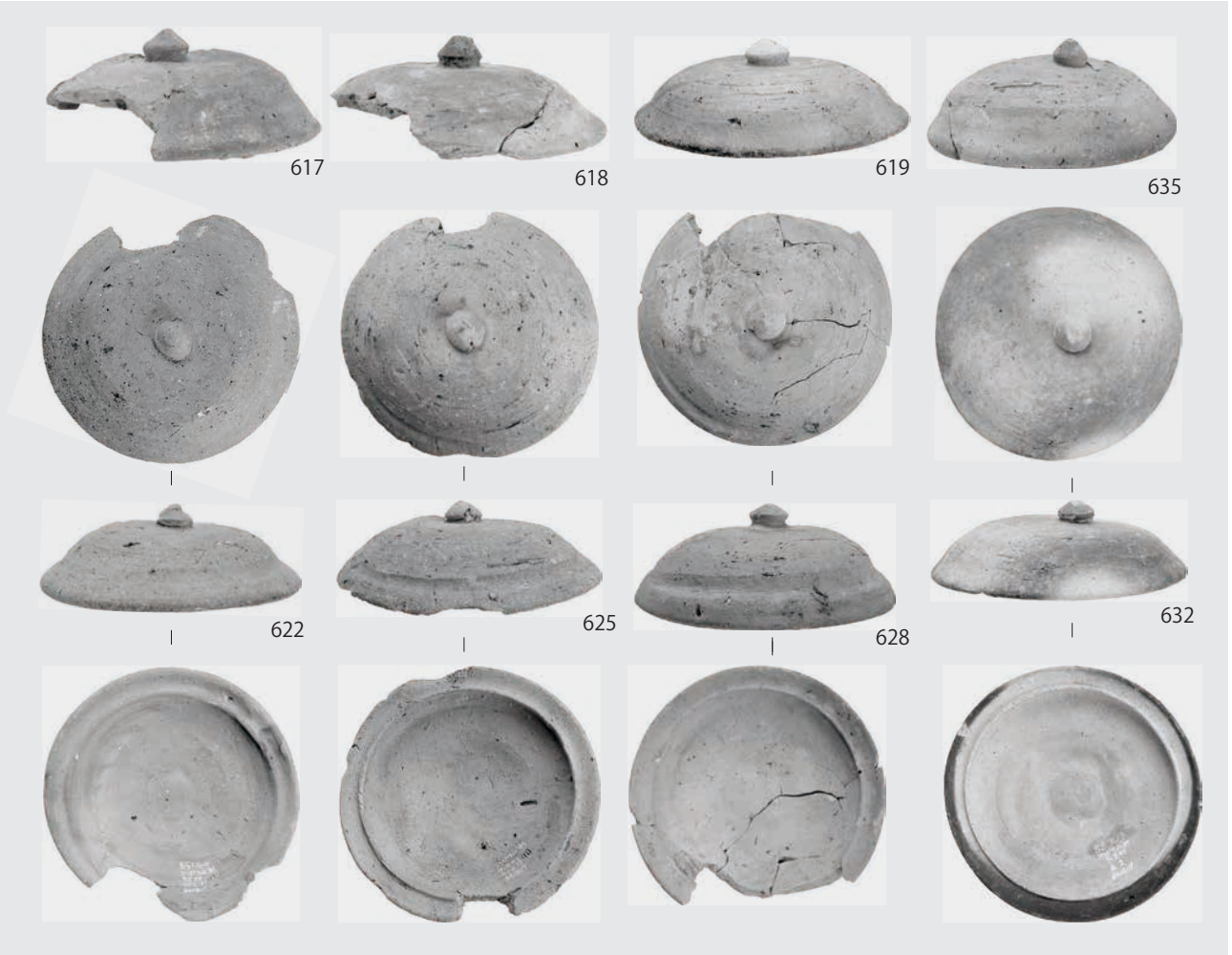
7-1 号窯 2


560
562
563
564
565
571
572
573
569
574
575
578
577
576
写真のみ
584
579
583
582
580
585
581

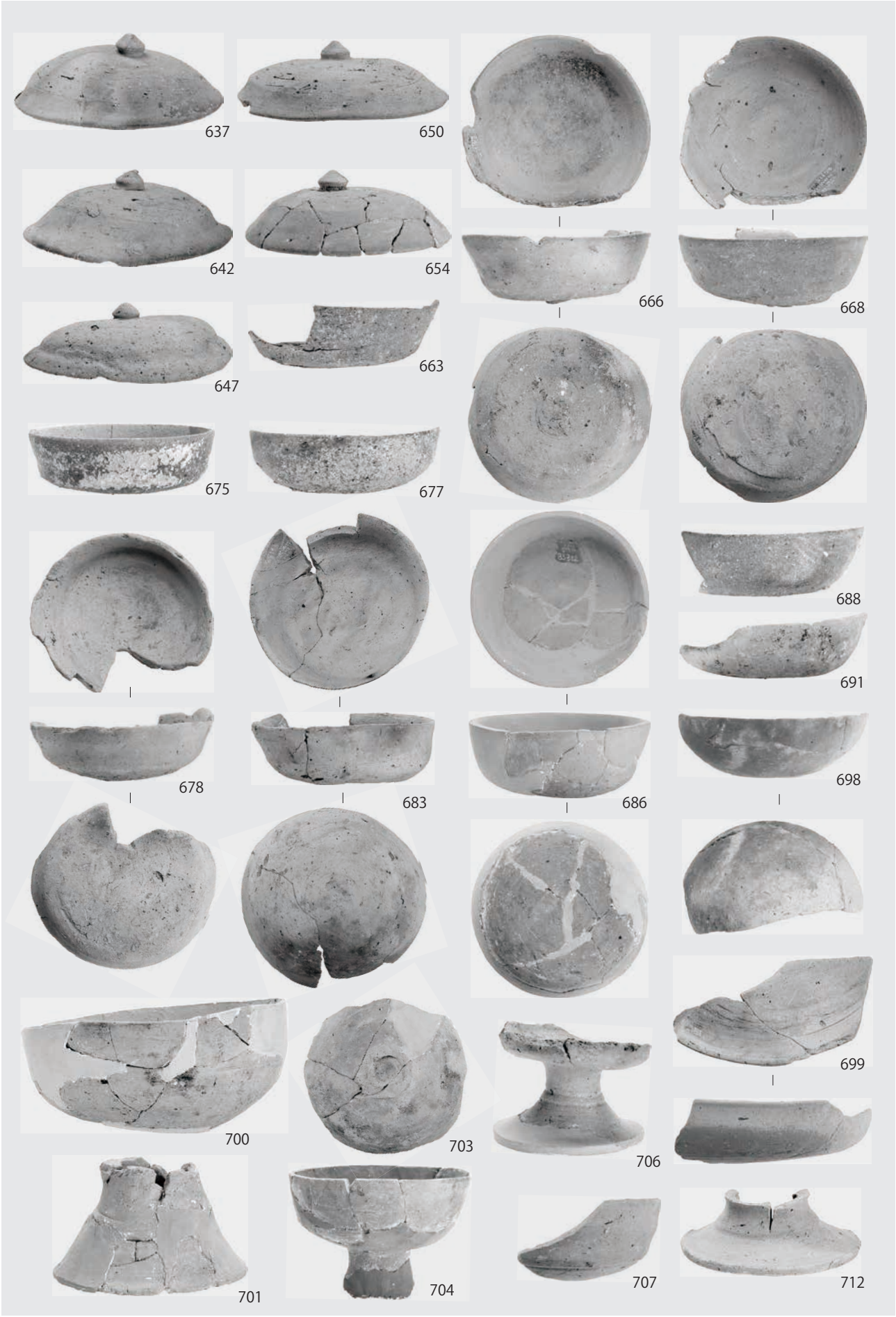
7-1・2号窯灰原1

586
587
588
589
591
592
593
594
595
596
597
598
599
601
603
606
609
604
607
610
611
612
613
614
615

7-1 号窯灰原 2



7-2 号窯 1


637
650
642
654
666
668
647
663
675
677
688
691
678
683
686
698
699
700
703
706
701
704
707
712

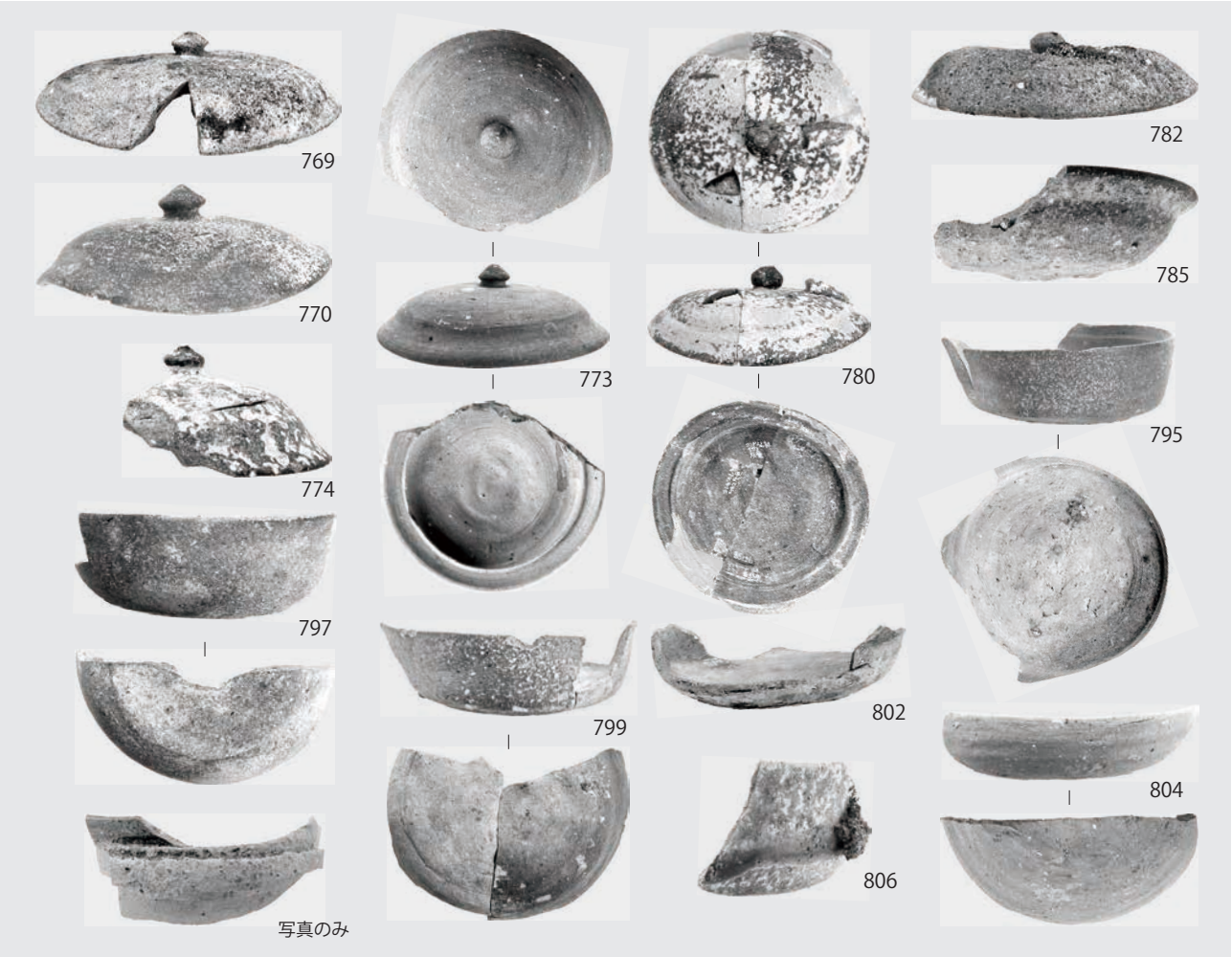
7-2 号窯 2

714
715
719
720
721
722
725
727
728
729
730
735
736
739
741
743
744
745
746
747
750
753
755
756
758
761
762
764
765
1250

7-2 号窯 3・8 号窯

図版第49　那谷金比羅山窯跡群出土遺物18　刻書平瓶

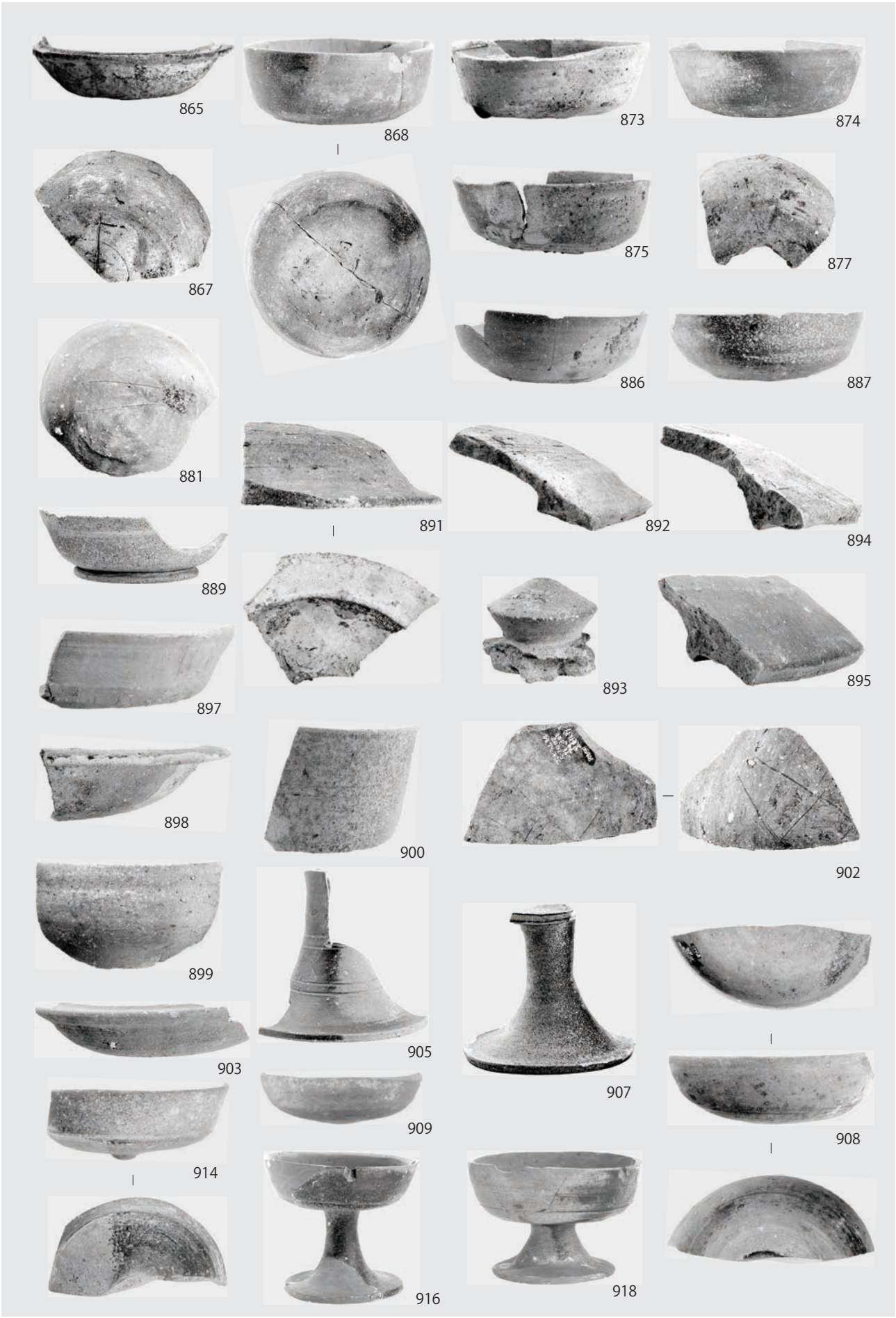
5・10号窯灰原



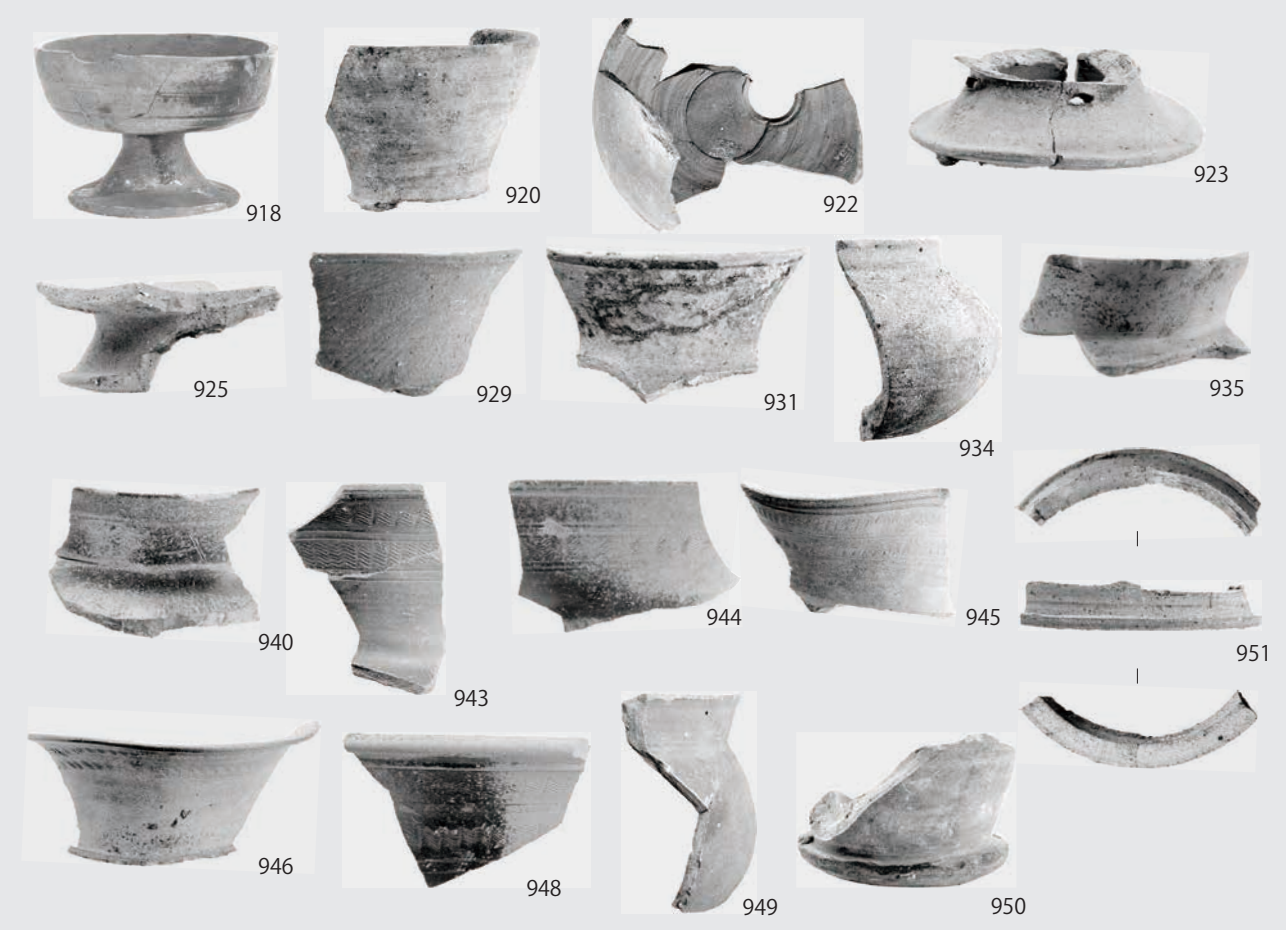
5号窯

811
815
816
823
824
825
830
832
835
833
837
838
840
836
844
845
847
850
851
857
861

10 号窯

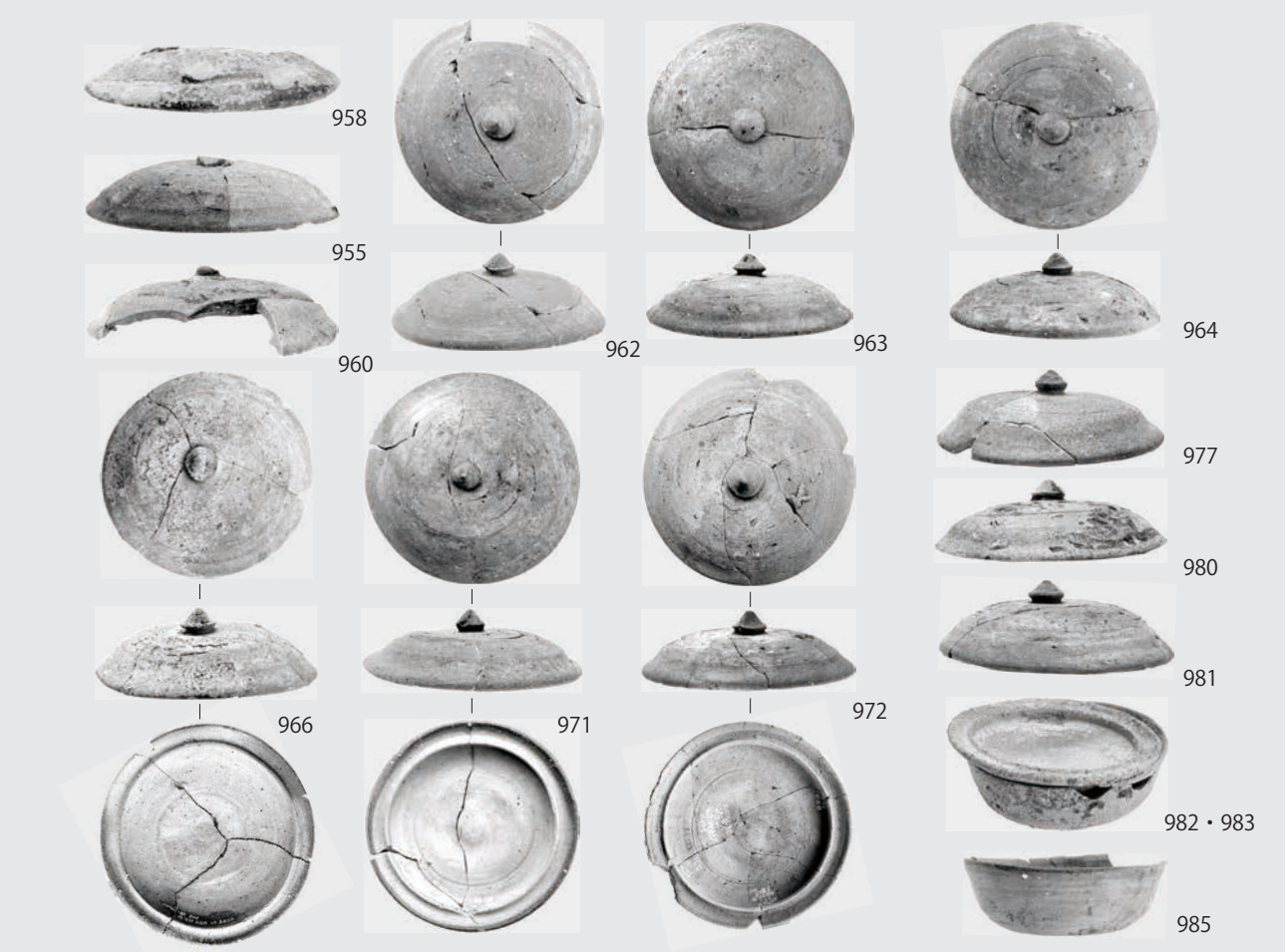

865
868
873
874
867
875
877
881
886
887
891
892
894
889
893
895
897
898
900
902
899
905
907
903
909
908
914
916
918

5・10号窯灰原1

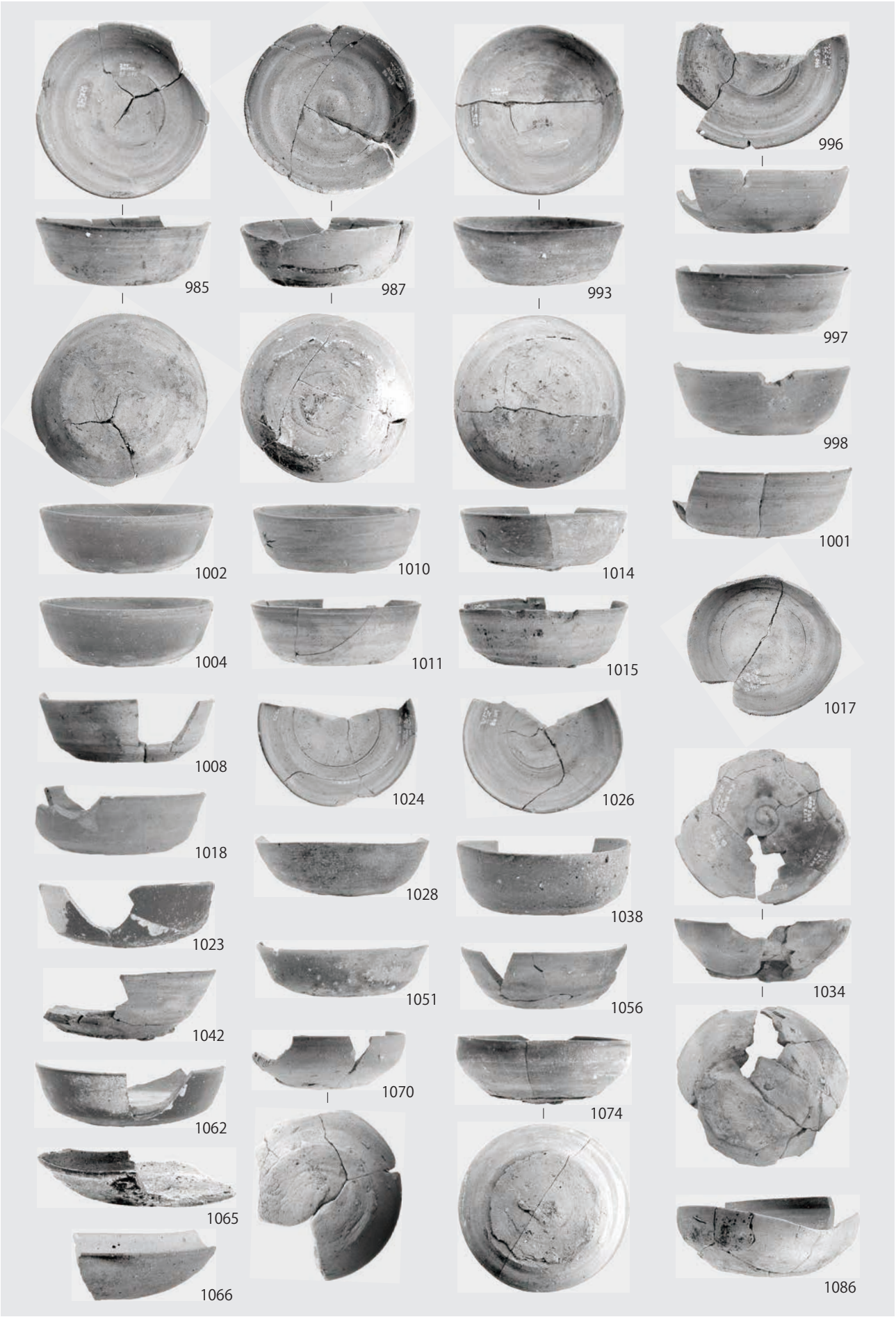


5･10 号窯灰原 2

2 号窯 1



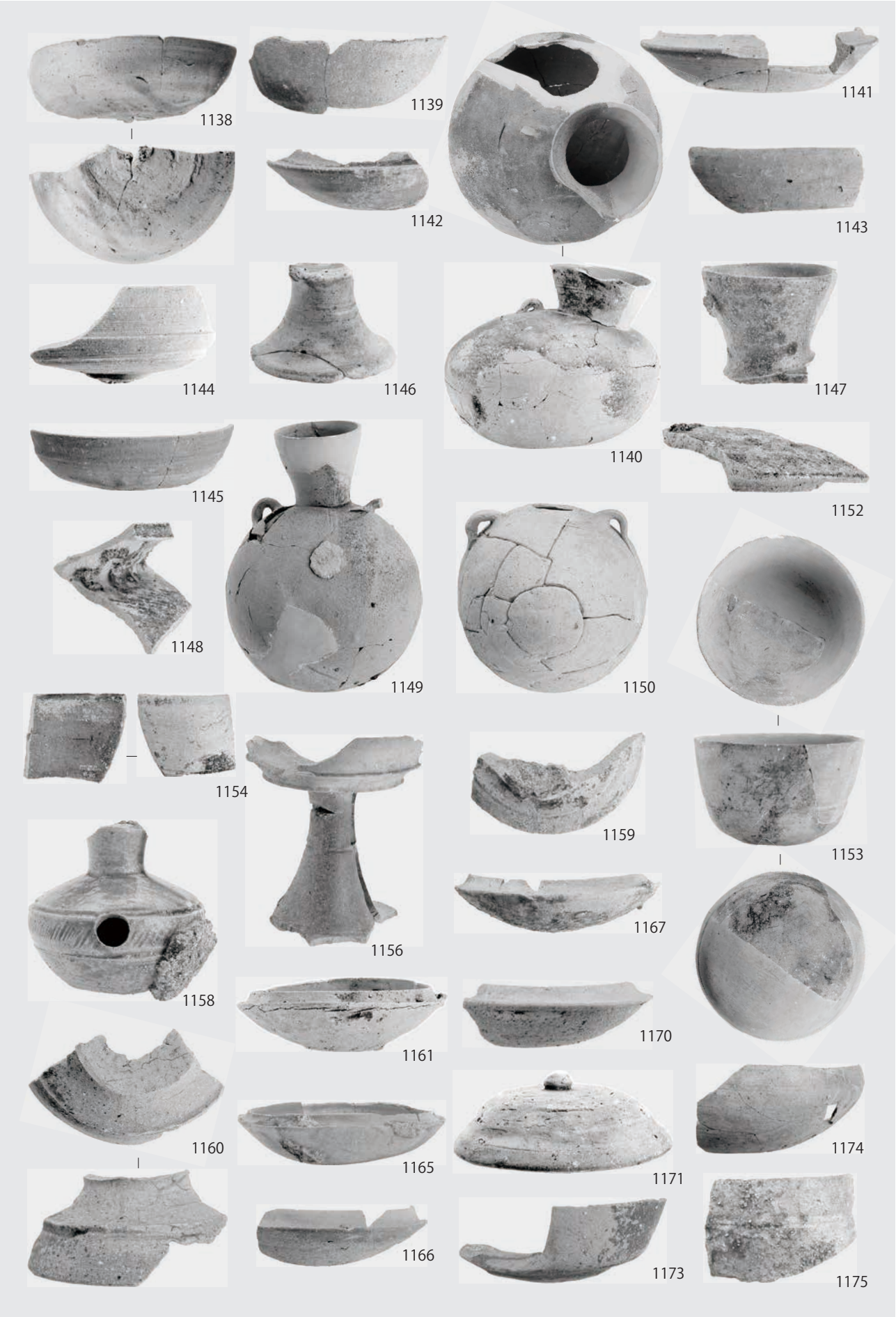
2号窯2


985
987
993
996
997
998
1001
1002
1010
1014
1004
1011
1015
1017
1008
1024
1026
1018
1028
1038
1023
1034
1051
1056
1042
1070
1074
1062
1065
1066
1086

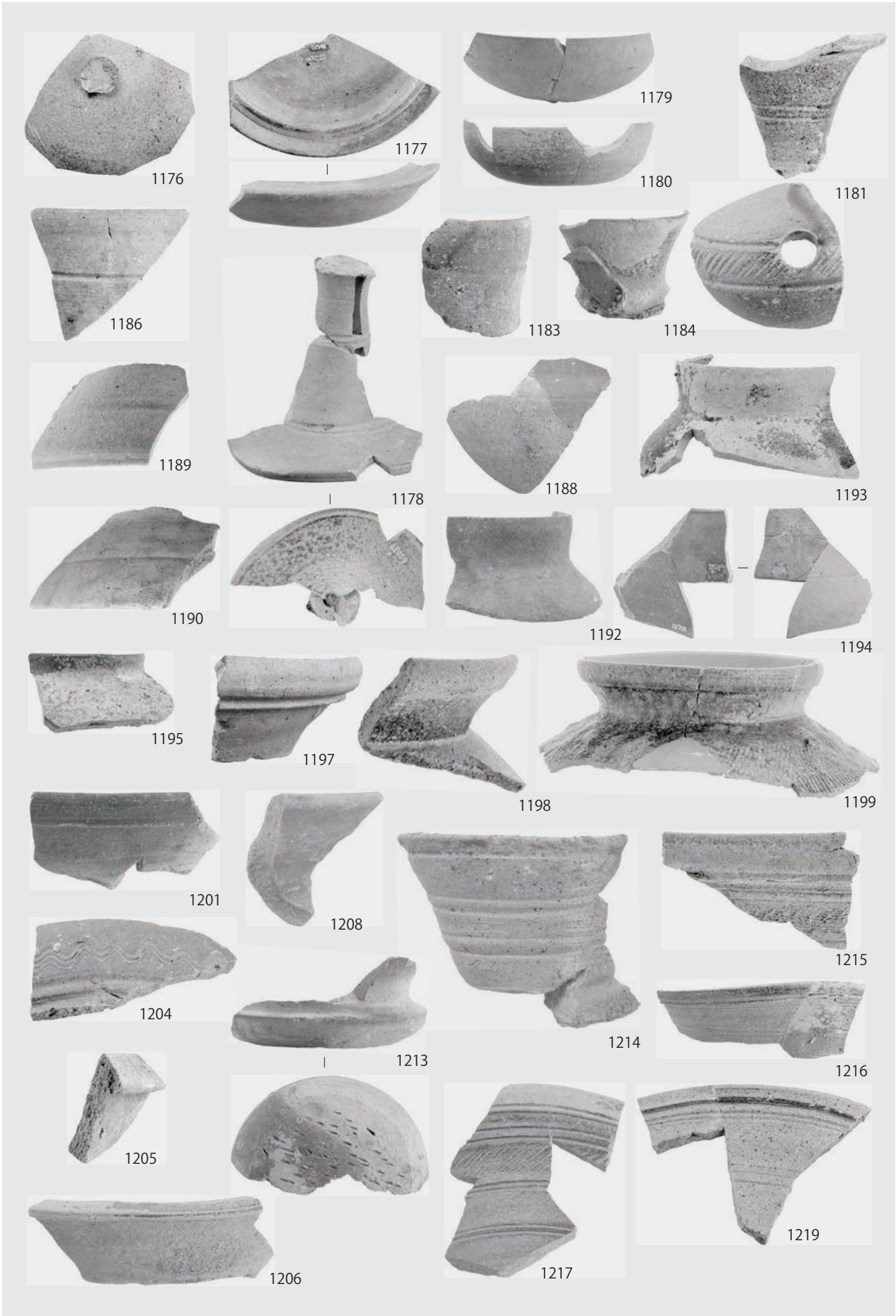
2号窯3

1088
1092
1097
1089
1094
1079
1096
1110
1103
1099
1106
1111
1114
1104
1108
1112
1115
1116
1118
1120
1121
1125
1119
1130
1132
1124
1134
1135
1127

2号窯4



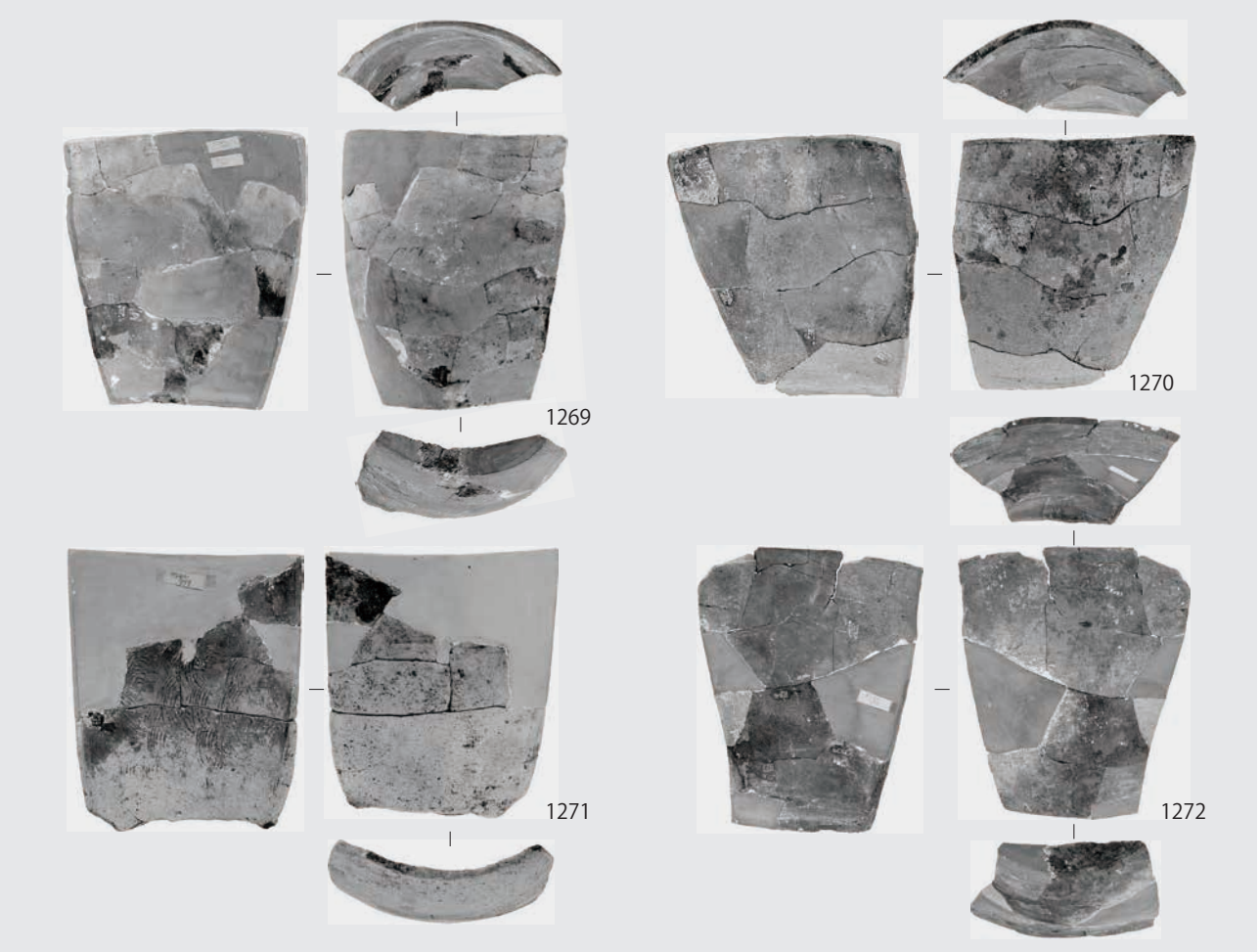
9号窯流込土・竪穴状遺構・包含層等


1176
1177
1179
1180
1181
1186
1183
1184
1189
1178
1188
1193
1190
1192
1194
1195
1197
1198
1199
1201
1208
1215
1204
1213
1214
1216
1205
1206
1217
1219

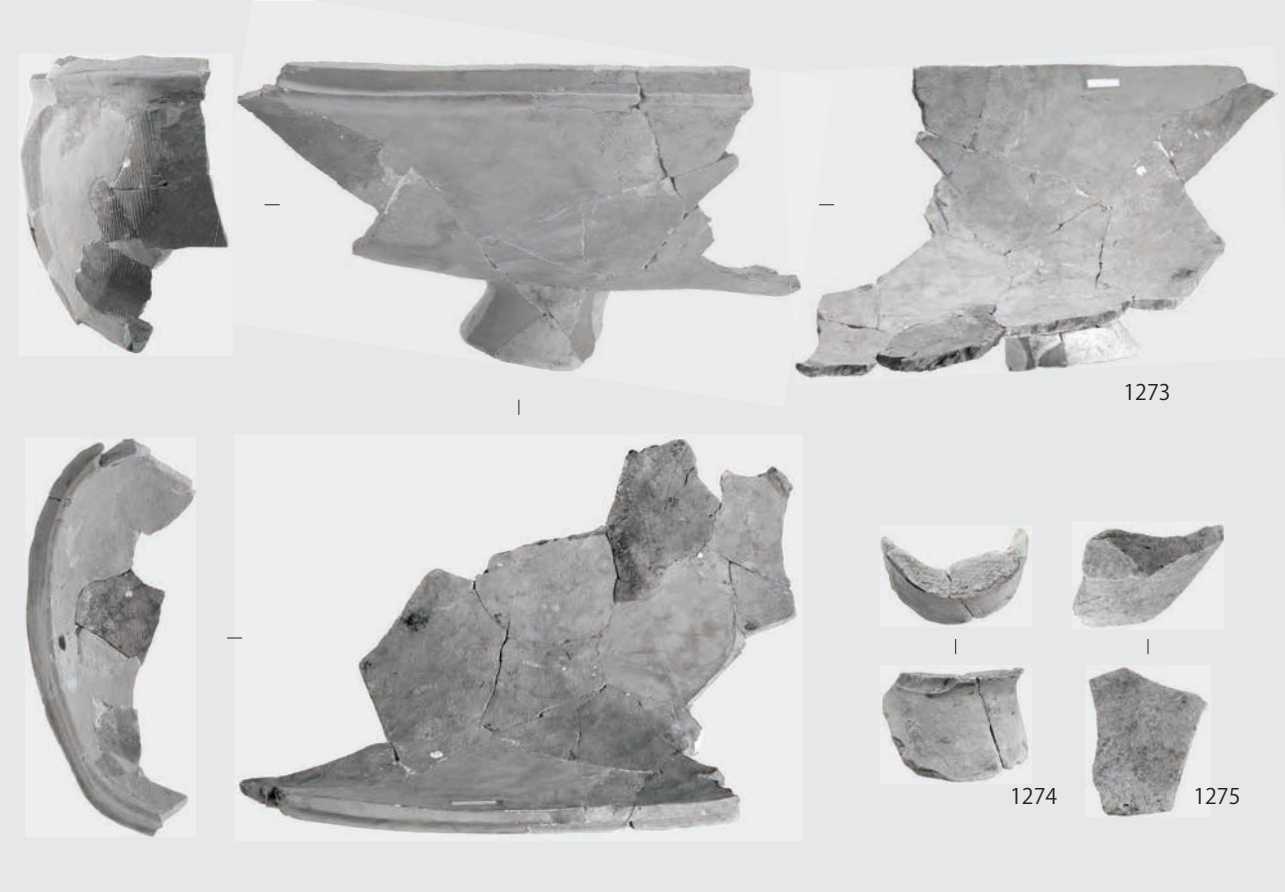
包含層等

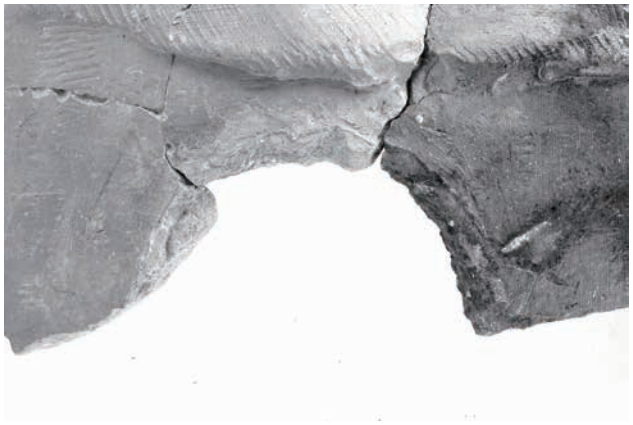
1222
1231
1234
1239
1224
1242
1252
1226
1232
1244
1229
1249
1264
写真のみ
写真のみ
1260

包含層等

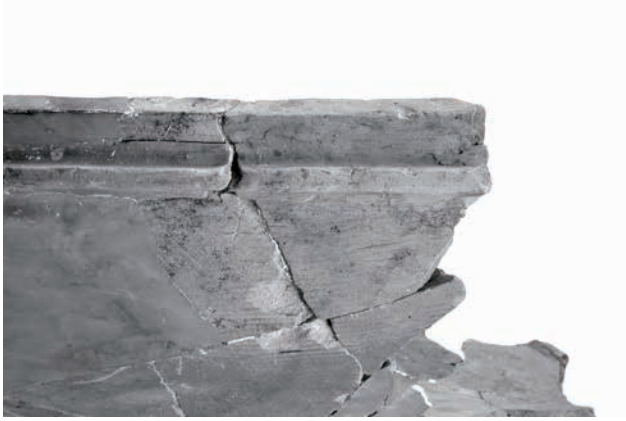

1269
1270
1271
1272

平瓦様製品





短側面脚部接合部

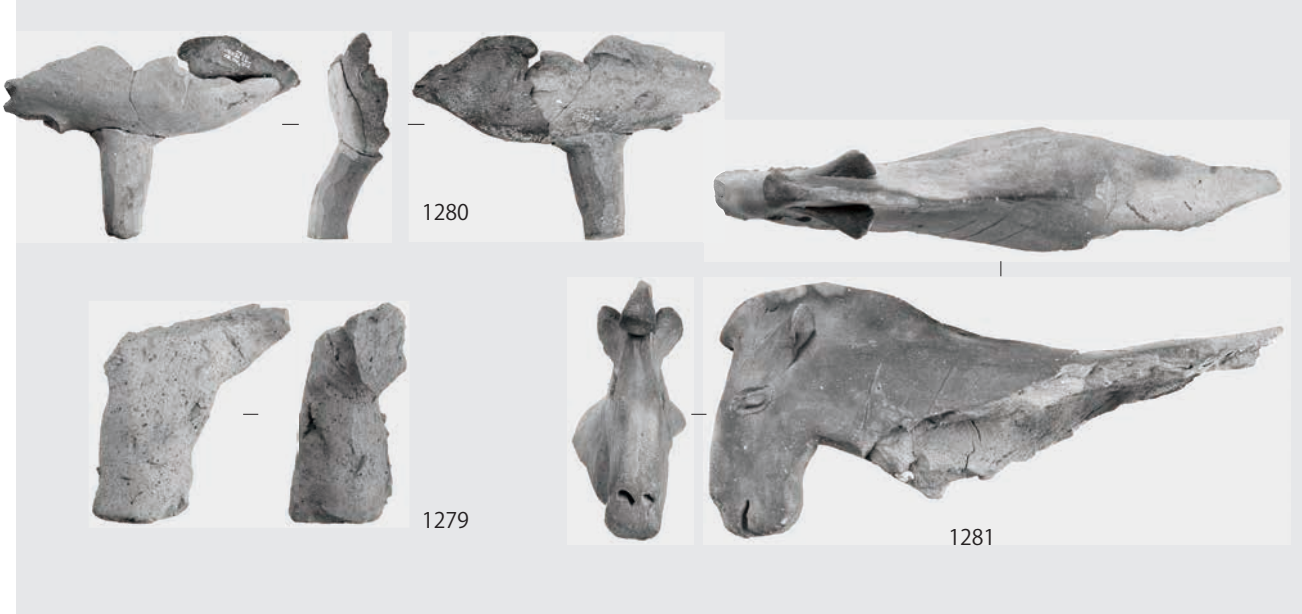


長側面受け部接合部

写真のみ

陶棺

円面硯



土馬 1

土馬 2

土馬片（写真のみ）

胴部切り落とし残欠（写真のみ）

那谷金比羅山古墳
那谷金比羅山窯跡群

発行日　平成元年(1989)3月31日
発行者　石川県立埋蔵文化財センター